【課題研究ゼミ生レポート】

1　課題研究ゼミ（講義・発表・討論）

「日韓関係史」

1年　石塚和香

日本と韓国の深く密接な関係は紀元前までさかのぼる。古代日本へ朝鮮人が渡来し、水稲耕作を伝えた。それに加え、日本からも人を派遣し、隣国の進んだ文化を学んだ。しかしながら、似た性質を持った者同士は、時に対立することが避けられないようだ。日本と韓国の場合でも、幾度と戦争があった。その深層には、お互いの、相手国に対する優越した気持ちがあったのかもしれない。今、韓国は、日本にとって「近くて遠い国」と言われることがある。距離は近いけれども、人は遠い。それが初めの私の印象だった。人の姿かたちも、国の状況も、社会問題まで、よく似ている日本と韓国だが、そこには厚い壁があるように思われ、言葉では説明することのできない違いがあるようだった。

日本と韓国の関係を語る上で、避けることのできない問題がある。韓国併合である。なお、韓国では、この、日本の占領下にあった期間のことを、「日帝強占期」という。そのように、植民地にされていたことに、強い嫌悪感と反感を示す人が多いのは、数々の資料から見ても明らかだ。そもそも、日本では、韓国併合の事実について深く知らない人が韓国に比べて断然多い。やった方は忘れてしまうが、やられた方はいつまでも覚えているというのはよく言ったもので、韓国にはその実態について触れる機会が幼い頃よりあるのに対し、日本には、中学の歴史の授業でやっと知る者も多いと思われる。大阪にあるピースおおさかの展示が、被害の面を押しだす形に変わり、日本の加害の側面が息を潜めたのも、日本で日本の加害のことを教えると、「自虐だ」という風潮があることを端的に表している。「自虐的」で外国に「弱腰」なのか、「事実を伝えていない」のか。教育にまで政治的思想が及んでも、それは許されるのだろうか。

私たち高校生にも、この考えによる教育は少なからず影響を与えていたようで、SGHゼミでの討論では、「韓国併合はやむを得なかった」とする生徒が多数派だった。私もそのときは何も思わず、安易なオポチュニズムでその多数派の一員だった。そして討論は進んでいき、そのあと韓国人留学生に、討論を聞いた感想を求めたとき、「私は悲しいです」と彼は言った。彼はそれまで黙っていたが、その表情と語気は、静かな怒気をはらんでいた。「皆さん、やむを得なかったと言いましたね。それはたしかに、日本の占領下における韓国の文化の発展には今でも恩恵を受けています。私も便利なこの世の中が好きです。でも、植民地化が避けられたのならば、発展が遅れた国になっていても構わなかったのです」。この言葉は私の胸に深く、まっすぐに刺さった。あとになっても何度も反芻して、自分の考えを恥じた。もし母が独立を叫んで殺された娘が、そういう時代だったからやむを得なかった、と言われたらどう思うだろう。私は到底納得できないし、そんなことを言う民族は敵だと認識するだろう。人にとっては、国の発展などより、人の存在の方がもっともっと重いものであり、それが踏みにじったのが植民地化なのである。祖先を大切にする朝鮮の人々に、無理やり日本風の姓をあてがい、日本の神社に参拝させる。学校では日本語を強制され、祖国の言葉を使った者は、札をかけられて反省させられたのである。この民族の無理な同一化は、韓国の人々の自尊心を、民族を誇る気持ちを、どれだけ傷つけただろうか。

開き直って反省を放棄するのは簡単である。自虐的だからなどと言葉を繕えば、面倒な問題に触れなくて済むし、目を背けたままでいられる。しかし、これからどんどんグローバル化が進む中で、隣国との関係はますます大事になる。私たちは、これからの社会の担い手として、目を背けずに、向き合っていきたい。決して偏らずに、自分の意見を持ち、考えられるようにしたい。

「外国人労働者問題を考える」

2年　坂野水咲

A　講義

日本における在留外国人数は年々増加している。1970年代までは総数60～70万人で人口に占める割合は0.7％、うち８～９割は在日コリアンの人々であった。これは先の第二次世界大戦の名残でもある。しかし1980年代からその構成は大きく変わる。中国人、ブラジル人、ベトナム人、フィリピン人が急増し、総数は220万人、人口に占める割合は1.7％にまでなっている。

1980年代後半、日本では好景気となり人手が不足、円高、産油国の不況（それまで産油国へ働きに行っていた人が押し出され日本へやってくる）といった背景から、1990年代にかけて非正規滞在者が増加した。その状況に対して日本政府は、次のような閣議決定をした。『専門的・技術的労働者は積極的に受け入れ、いわゆる単純労働者は受け入れないが、日系人は別枠である』。

こうしてまず、1990年から日系人の受け入れが開始された。労働力を求める自動車・電気機器などの製造業に就労し、現在も日本国内には多くの日系人の方が暮らしている。彼らの《集住》を巡っていくつかの問題も発生している。ゴミ出しや分別のルールを守ってもらえない、ベランダでのBBQといった近所迷惑などが挙げられる。逆に日系人側から見ての問題点も、考えてみると言語の壁、教育の不十分、解雇される危険性の高さなどが挙げられる。

もう一つ重要なのは技能研修生制度である。技術を発展途上国に伝えるという『国際貢献』の名目で行われているこの制度は、違法残業、賃金未払い、強制貯金などの労働基準法違反事例が多く、人身取引の一形態とも呼ばれ問題となっている。

次に、移民の中でも在日コリアンの方々に注目してみる。日本で暮らす朝鮮人人口は、日本による韓国併合が行われた1910年ごろから増加し、強制連行がはじまった1939年から1945年にかけて急増し、1920年には2600人だったものが、1945年には210万人にまでなっていた。そして終戦後、その内の140～150万人が帰国したが、60万人余りが残留した。今日在日コリアンと呼ばれる人の中には彼らやその子孫も多い。彼らはそれまで強制的に日本国籍を持つ日本国民とされていたが、戦後日本国籍を奪われた。そして現在でも残念ながら、「在日」に対する差別は残っている。ヘイトスピーチはその一例である。

B　生徒発表―外国人労働者受け入れのメリットとデメリット―

(1)メリット

人口減少の緩和や、伝統文化の後継者増加、生産コストの削減、働き手の増加による税収の増加などが期待でき、さらに人手不足の３Ｋ労働や介護福祉の現場の担い手になってもらったり、地方に新たな風を送り込んで活気をもたらしてくれたりといった効果が考えられる。

(2)デメリット

受け入れる外国人を長期間滞在の単純労働者と仮定して考えると、大きくみて３つの問題点がある。まず、生活保護費や年金の負担。受け入れには不安定な賃金を賄うための生活保護費の拡大が予想され、納税額も少ないため大量の受け入れによりさらに給付額が膨らむ可能性が大きい。また、管理が行き届かなくなる危険もあり、不正受給も増加する可能性がある。

２つ目は、外国人が働ける環境を整備するための社会的コスト。受け入れにあたっては食事、教育、宗教施設、医療等それぞれの文化に配慮した環境整備や対応が必要となり、そのコストは決して小さなものではない。治安の悪化などを心配する人もいる。

３つ目は、外国人労働者に雇用を奪われた日本人の社会保障費の増加。日本人よりも低賃金で働く外国人労働者が増えれば、日本人の雇用が減り、それにより生活保護費も増加するのではないかという懸念がある。また、その業種の賃金が低いままで固定されることも考えられる。

発表者曰く、準備のために調べていたところ、移民に関するちゃんとしたデータが少なく、政府が真剣なデータ収集を行っていないと感じたそうだ。メリット、デメリットを見てどちらがいいのかを考えるよりもまず、彼らに対する理解を深める姿勢が私たちには必要である。

(3)韓国における外国人労働者政策

韓国では1987年から1990年にかけては不法滞在労働者に全面的に依存していた。そこで企業が低熟練労働力を確保するため、外国人労働者の導入を要求したが、政府や労働組合の反対もあり、1991年から1999年の間は外国人産業技術研修制度が導入された。これは外国人労働者を正規の労働者ではなく産業技術研修生として導入するものであったが、不法滞在・就労を量産する要因となった。

次に、2000年に外国人研修就職制度と外国国籍同胞サービス業就職管理制度が施行され、移民労働者を産業労働者として受け入れることになった。2003年から2006年にかけては外国人雇用許可制度と研修就職制度が並行実施され、研修制度の廃止と雇用許可制度導入の要求の声が高まる中、外国人労働者の雇用などに関する法律が国会を通過した。そして2007年から現在まで、外国人雇用許可制度と外国国籍同胞訪問就職制度が採用されており、外国人労働者制度は雇用許可制を中心に体系化されるようになっている。

C　討論

受け入れをした場合を想定して課題を考えたところ、やはり私たち受け入れる側が相手への理解をもっと深めなくてはならないということを確認した。例えば、治安の悪化を恐れる声があるが、実際のところ外国人労働者による犯罪は減少傾向にあり、ただの偏見だとわかる。犯罪というよりも文化の理解が不十分であるがゆえに起こる行き違いもあるのではないか。そもそも生活できるだけの安定した収入があれば問題はないのだという意見も出た。

また、本当に日本人の雇用を奪うのかという疑問に対しては、日本人に優先的に職が回ってくるような制度を作ったり、外国人労働者の賃金を上げるなどの対策をとったりすればよい、さらに、3K労働に日本人が就くように業務や賃金の改善を行うべきだという意見が出た。

「日韓の戦後補償問題」

2年　田中茉凜

日韓関係の悪化の主な原因に日韓間の戦後補償問題があるのは周知の事実である。そして中でも、最近一際目立っているのが従軍慰安婦問題だ。政府間で、日本側が国庫から元慰安婦のための財団に対して10億円を払い、韓国側が日本大使館前の少女像の問題の解決に努力するということで一致したときは、一旦落ち着いたと思った。しかし、昨年末になって、釜山の日本総領事館前に新たな少女像が設置され、対抗措置として日本政府が駐韓大使と釜山総領事を一時帰国させたことで、また日韓関係は冷え切ってしまった。韓国に行って現地の高校生と交流をしてきた身としては、非常に心を痛めている。だが私もこのゼミを受けていなかったら、周りの多くの日本人のように、この事実に憤りを感じ、嫌韓意識を募らせただろう。実際に戦後補償に深く関わった人の経験と留学生の意見を知って、戦後補償とはどういったことを示すのか、少し認識が変わった気がする。

私が日韓の戦後補償問題について発表するにあたって焦点を当てたのが「慰安婦問題」だ。たまに慰安婦の行為は商売目的であり、強制だったという事実は不明快なので、謝罪の必要性はないと主張する人がいるが、その論には確証が持てず、現に辛い思いをした人がいたということに否定はできないので論外とする。細かいことだが、留学生との論議でも、この認識の差が大きいという話が出たので、重視すべき点である。

さて、調べるときに主に参考としたのが、大沼保昭著の『「慰安婦」問題とは何だったのか』だ。この本は「アジア女性基金」設立の背景を記したもので、この基金は政府だけでなく全国民総体で戦後補償に取り組むために創立され、中に（1）国民からの拠金による償い金、（2）日本総理が署名したお詫びの手紙、（3）同じことを二度と繰り返さないような政策案、（4）政府予算による医療福祉支援の実施、を含んでいた。筆者の大沼さんはこの基金の理事を務め、慰安婦問題の解決のために日韓の間に立って奮闘した方なので、本も非常に中立した立場で書かれていて、冷静にこの問題を見ることができた。

慰安婦というのは実は韓国だけでなく、他の国でも戦中に苦しんだ人が存在し、基金は確認できる全ての女性を対象にしていた。そして筆者はその中でも成功した国としてフィリピンやインドネシア、オランダ、失敗した国として台湾、韓国を位置付けている。韓国については、たった7人にしか補助金を受け取ってもらえなかったという。そしてその失敗の理由を、解決に長年消極的だった政府、反日・反韓感情を煽るメディア・NGOや、彼らの流す根も葉もない話に惑わされ、中途半端な姿勢を取り続けてきた我々国民であると語っている。そもそもこの基金は、韓国世論を納得させるものではなく、戦中に慰安婦として苦しんだ被害者の方々の心の傷を少しでも癒すために作られたはずだったのに、それを反日ナショナリズムが高揚したことで、当の本人たちが受け取れない状況を作ってしまったのだ。実際にお金を受け取った方々は、国内で、金に誘惑されたと酷いバッシングを受けたらしい。結局、アジア女性基金は両国でその存在すらあまり知られることなく、日本でも韓国でもその目的や意志に理解を得られることなく、2007年3月をもってその活動を終えてしまった。

この本を読んで私が痛切に感じたのは、もはや今、慰安婦問題含め、戦後補償問題は我々国民の個人的考えに関係なく、損得を考えて我々を左右するマスコミや政府が利益を得る手段と化してしまっているということだ。自分に都合のいいことは流し、悪いことは止める。もしアジア女性基金の意図を全て国民に説明できていたら、もっとこの基金は解決の前進に役立っていたかもしれない。もしもの話をしても仕方ないが、でも実際に留学生との対話の中でも、教育のすれ違いや報道の偏りを再確認することができた。

戦後補償問題への解決に向けて我々が今最も気をつけるべき点は、メディアの言葉を鵜呑みにせず、根本的な解決への道筋を考えることにあると思う。慰安婦問題の場合は、最初から相手を批判するのでなく、被害者本人たちが本当に思っていることに耳を傾け、彼女たちの意見を尊重することから始めることではないか。メディアはどうしても国民の関心を買いたいがために過激な報道をすることが多い。しかしこの戦後補償問題、とりわけ慰安婦問題をまず取り上げ、重大性を世間に広めたのもまた彼らなのである。したがって我々は政府や彼らを批判するだけでなく、こういった問題に関心を持ち（留学生によると韓国人の方が報道に対する関心は高いらしい）、自分自身にできることを考えるべきだ。例えばこのようなSGH事業や民間交流を通して、相手と直接交流し相互理解を深めることだってとても有効である。若い世代の理解が解決への大きな糸口であると思うので、これから、このゼミや本を通して自分が学んだことを、どんどん発信していきたい。

「韓国における競争の激化と格差の拡大」

1年　久野千優

韓国の子どもたちは、大学受験に備え毎日勉強に励みます。語学教育にも力を入れており、韓国の大学生のTOEFL,TOEICの平均点は日本より高いものになっています。ハングリー精神旺盛で、積極的に資格を取得したり、海外留学をする動きもあるそうです。韓国の学校制度や留学生の人から聞いた韓国の高校生の生活からも、韓国が高い教育水準をもってエリートを育成していることが伺えました。

彼らの勉強する理由、それは「よい大学に入り」「大企業に就職するため」。韓国では日本よりさらに大企業志向が強く、それが教育熱を加速させているそうです。中小企業や派遣社員、自営業、農業従事者の立場は日本よりさらに弱く、社会保障制度も未熟なことが大企業志向をより強くさせているのだと考えます。韓国人留学生の方から、一般的な韓国の高校生の生活を教えていただいたとき、ゼミにはどよめきが起こりました。私たちが思っていた以上に、勉強漬けの生活だったからです。部活動や委員会活動に打ち込みながら勉強も、という旭丘と比較して、どちらがより幸せか一概には言えませんが、韓国の子どもの幸福度が低い原因に受験戦争の加熱は大きいと思いました。

また、韓国人留学生の方から伺ったお話でもう一つ気になったのは、大学が就職のための勉強をする場になりつつある、とうことです。最近日本でも人文学系の学部を廃止する動きがあります。就職予備校になってしまっては学問の本質は学べず、基礎研究の不足につながるのではないかと考えます。

討論では、班ごとにテーマを話し合い、韓国人の留学生の方からも

お話を伺いながら「格差」と「教育」についてみんなで考えました。

１つ目のテーマは、「格差の拡大にはどんな問題点があるのか」です。治安の悪化、貧困層の労働のモチベーションが低下し生産性が下がること、社会保障費が増えること、富裕層と貧困層で思想に偏りがみられるようになる、などがあげられました。特に私が重要な問題だと思ったのは、貧困層が教育面や政策面で不利な立場になってしまい、格差が下の世代まで連鎖してしまうことです。

２つ目のテーマは「どんな格差は容認できないか」です。努力してもどうにもならない格差は是正すべきであるという意見が多かったです。反対に、努力している人と、していない人の格差はおかしくない、格差がなくなったらモチベーションが下がるのではという意見もありました。

３つ目のテーマは「格差はやむをえないのか、何とかする必要があるのか」です。何とかする必要があると答えた班は、セーフティーネットや返済不要型の奨学金の拡充など、貧困層への支援を手厚くする方向がほとんどでした。貧困層が自力で格差から抜け出せるようにする社会をつくることが重要だという意見もありました。

しかし一方で、格差があること自体はおかしいことではないとする班もありました。

競争の激化と格差の拡大は、日韓両国に共通する社会問題と言えます。社会の仕組みを変えることは簡単ではありませんが、わたしたちにできることは、この問題に意識を向け続けることだと考えます。社会的弱者が生きやすい世の中は、その他の人にとっても生きやすく優しいものでしょう。また受験のためだけではない「教育」は、真の意味で国を豊かにする人材を育成するでしょう。制度を充実させれば家庭環境に関係なく、意味のある競争ができるのではないか、と私は思います。

「東アジアにおける少子高齢化」

１年　花山愛歩

このテーマでは、主に日本における少子高齢化のメカニズムと実態、そして日本周辺の国での少子化の実態と対策について講義と討論を行った。

○講義

まず最初に、少子化が進むことでのデメリットとして労働者不足→経済の停滞→高齢社会の破綻というサイクルがある。しかし、そもそも結婚や出産は個人の「自由権」の範囲内であり、行き過ぎた国の介入は人権侵害につながってしまうため、単純に結婚、出産を促す政策をとることは問題である。。

東アジア各国で特徴のある政策を見ると、

・シンガポール

国による積極的関与→優性思想という考えのもと、大卒から生まれた子供には手厚い支援をして優秀な人材を増やそうとする政策。

・台湾

国の関与は消極的である。女性の人権の観点から、国が関与することへの反発が大きい。

では、少子化の原因とは何だろうか。日本において、若者の結婚・出産願望は、少子化が問題視される前と現在で変化は見られない。若者が結婚の一番の障害と考えているのは「結婚資金」(男女共に40%以上)だ。女性の社会進出が進む一方で、近年の景気低迷から専業主婦や、結婚相手として高学歴・高収入な男性を望む「安全志向」の女性も増えているのに、若者失業率は高く、女性が望むレベルの収入を持つごく少数の男性を、たくさんの女性が結婚相手に選ぼうとする、”パイの奪い合い”状態になってしまっている。このような理想と現実の差が、若者たちに結婚を押し止まらせてしまっているとも言える。

雇用の形態の変化は急激に進んでいるのに対して、依然として”結婚したら男性が女性を養う”という考え方が根強く、男性だけの収入では家族を養いきれない現実とのギャップがある。

では、韓国との比較をしてみる。韓国の少子化の背景には、男女での異なる結婚観がある。男性における結婚観は東アジアの他の国と似ていて「社会的ステータス」という面が大きい。それに対し、女性は「結婚後の仕事や趣味の充実」ということに重きを置いている。こうした男女での意識の違いは、「直系家族型」の父方の血筋を最重要視する伝統の意識が男性に残っているのに対し、高等教育を受けた女性たちが、その考えに拒否反応を示したことによっている。

このように、東アジアの少子化問題の背景には、日本も含め伝統的な家族観と女性の社会進出という反対方向の動きが原因となっていると考えられる。

実際に、韓国からの留学生の方たちや巡検で現地の高校生たちに現状や考えを聞いても、女性の方は出産したくても今までのキャリアや地位を捨てなければいけないので結婚しない、という意見がすごく多かった印象がある。男性にしても、子育てにまわすような時間やお金の余裕はないと話していた。そこには、産休制度や働く女性への支援が、日本よりも不足していることが関わっているらしい。

○討論内容

出た意見としては、大きく３つの観点に分けられる。

１、国の支援の充実

まず、若者が子供を産むことに躊躇する原因に、未来への不安や子供が育つ未来に希望が持てないことがあるのではないか、という声があった。そこから考えられる対策として具体的には、

・子育ての負担を減らす政策（授業料の削減や無償化、返済不要の奨学金を更に充実させること等）

・若者の失業率を下げるための政策（公共事業の拡大や公務員を増やす等）　が挙げられた。また、この問題と高齢化を関連づけ、定年を引き下げて若者の雇用を増やし、定年後の方に子供の育児へ協力してもらうという考えも出た。

２、企業の支援の充実

・企業が保育所や託児施設を併設する

・正規雇用者を増やす、といった考えが出た。

３、社会の風潮や意識を変化させる

・結婚や出産に対するプラスイメージをもっと広める

・結婚したくない人にも押し付けるのではなく、結婚、出産を望んでいる人ができるようにする、などが挙げられた。

○考察

これらを踏まえて私は、若者への社会全体からのバックアップがもっと必要だと思う。高齢化が進む中で、さらに若者への支援も拡大するというのは財政面からみても難しいことはわかるけれど、今の日本は高齢者福祉のウェイトが大きすぎるのではないかと思う。膨れ上がった高齢者福祉のしわ寄せを受ける若者と、子供を産みたくても産めない若者、産まれてきても教育格差に苦しむ子供が増えてしまっている。子供は日本の将来にとって最も重要だと言ってもいいくらいで、裏を返せば子供がいなければ国の発展はあり得ない。だからこそ、「社会全体で子供を育てる」という意識が必要ではないかと思う。雇用の形が多様化し、若者の非正規雇用が増えている今、親の所得格差が教育格差、学力格差へと連鎖することは間違いないと思う。しかし、子供が親の所得格差によってどんなに努力しても埋められない差を与えられることは、私は絶対にあってはならないと思う。だから、「子供を育てる」ことの価値をもっと上げ、企業などの子育て支援に対する評価をもっと高め、子育てに社会がもっと寛容にあるべきだと思った。

２　大阪巡検まとめ
＜Ａ　国立民族学博物館＞

「みんぱくを見学して」

２年　加藤杏菜

国立民族学博物館では、朝鮮半島の伝統文化や日韓の文化の相違などを中心に、世界各地域の民族文化を見学した。世界で多様な民族が存在する中で、それぞれが異なる文化をもち、それらが関わり合うことで影響を及ぼしあっているということを学ぶことができた。

ここでは、特に韓国について気づいたこと・感じたことを述べていく。

まず気がついたのは日韓の、異文化の取り入れ方の違い。これは、折衷様式の婚礼衣装と、掛け軸に描かれた韓国風のイエス・キリストから知ることができた。

韓国では、西洋式と伝統式の婚礼衣装のほかに、それらを融合させた折衷様式という婚礼衣装がある。しかし日本にはそのような様式はない。日本では神前式や仏前式、キリスト教式こそあるものの、それらが融合されることはなく共存している。

また、日本に比べキリスト教徒が多い韓国では、聖母マリアとキリストが描かれた絵画が多くある。そのような絵画は日本でもよく見るが、それらの中で聖母マリアとキリストが韓国風の顔立ちをしており韓国の民族衣装を身にまとっているものを初めて見た。

この２つの展示を見て、外からやって来た異文化を取り入れようとした時、韓国では、柔軟に自国の文化を変容させて融合させようとするのに対し、日本では自国の文化は確立させ別のものとして共存させようとするのではないかと考えた。

お隣どうしの２つの国にこのような違いが生じるのは、純粋に面白いと感じた。

次に気がついたのは、韓国社会の根底には儒教が深くかかわっているということ。見学をしている時、展示の中に「より良く生きる」というフレーズをよく目にした。これは儒教で重要とされる要素の一つである。大企業と中小企業との格差が大きい韓国において「より良く生きる」こと、それはほぼイコールで良い大学を出て、大企業に就職することだろう。そのために皆自らの「スペック」の向上に勤しむのだ。そう考えると韓国が超学歴社会と言われるのには、儒教が関係しているように思われる。

また、日本に比べ、韓国ではスキルアップのため海外へ留学・移住する人の数がとても多い。そのような在外コリアンの各国での発言力は、数が多い分、無視できないものになっている。

ここにも日韓で違いがあるように思われる。韓国は急速にグローバル化が進められたこともあって、国の外へと進出しようとする傾向が強く、日本は国の内側に目が向けられている傾向があると感じられた。国の内側に目を向けることが全く悪いことというわけではないが、それでは視点がある程度固定されてしまい、考え方が凝り固まりやすい。

グローバル化が謳われるようになって少し月日が経ったが、島国である日本はもっとさまざまな文化に触れ、国の外へと目を向けていく必要があるだろう。

「韓国の社会・文化〜国立民族博物館を見学して〜」

１年　花山愛歩

１　はじめに

私は今回の巡検で初めて国立民族博物館を見学させていただきましたが、日本と韓国の文化は実に共通点が多く、親しみやすいものでした。

私は博物館の展示をアメリカやヨーロッパなどの地域から順に回っていき、結果的に韓国の展示を最後に見るような形になりました。最初は、欧米やアフリカの文化は本当に私たちとは別世界のようで、ただただ感心にて「同じ人間なのにこうまで多様性が生まれるんだ。」とか「地球は本当に多彩で素敵だなぁ。」という思いでいっぱいだったのですが、各地域をめぐっていくうちに異文化に浸り過ぎてすごく疲れて頭がクラクラしそうになっていました。そんな中で韓国の展示ブースに入り、なんだかとてもほっとして落ち着けたという思いが生まれたのを覚えています。なので、私たちが問題視しているような韓国との"文化の違い"は世界の中で見ると私たちが思ってるより小さなことなんじゃないかと思いました。

２　韓国の文化の歴史と特徴

韓国の伝統文化は日本に通じるところもあり、とても受け止めやすい部分が多かった。例えば、住居の面から見ると、家の造りは木造で間取りがしっかりしており儒教や仏教の家長制度の考えも見てとれた。しかし異なる部分もあり、家の造りでは韓国は寒さが厳しいのでオンドルのような暖房の仕組みや、扉が小さかったり畳ではなく板張りといった、気候に適応した独自の文化もしっかり根付いていた。韓国独自の花札やチマ・チョゴリも独自の文化と言える。やはり古くから受け継がれてきた文化は韓国独自の色を持っているが、古くから文化交流が盛んだった日本とは類似点も多くあった。どちらの国も自国なりに発展させ、世界にふたつとない文化を作り上げてきたのだと感じた。

しかし、近現代の文化の中には日本が残した悲しい爪痕もあった。それは例えば、学生服や日本語の教科書などだ。戦時下の植民地支配の一環としての同化政策で日本の学生服、いわゆる学ランや日本語教育、食事面の強制的な押しつけがその一時期の韓国文化を大きく変えてしまったんだと実感した。

私たちの一つか二つ上の世代（親や祖父母）人が簡単な漢字は読み書きできるという話を伺ったこともあったが、植民地支配はその時代の国民全体の文化まで変えてしまうことを肌で実感した。

現代の日韓の文化交流は以前の正常なものになりつつあるんじゃないかなと思う。戦後規制されていた韓国に、日本の娯楽が入ることも許されて来たし、その中でマンガやアニメはとてもポピュラーなものだと知り、嬉しかった。逆に日本では韓国の音楽やドラマがとても人気があり、植民地時代のような押しつけではなく本当に自分たちが見たい、知りたいものを選べる文化交流になることができた。

３　韓国の現代社会

韓国は激しい競争社会の中でより上に行きたい、少しでも豊かな暮らしをしたいというエネルギーがあると思った。教育の面では、受験勉強や試験のための分厚い本が展示してあり、また、司法試験を受けるにも準備期間がとても長いことに驚いた。

そして韓国から海外への移民の増加の理由も、経済的な事情も含め、「よりよい生活環境」や国際社会を「よりよく生きる」ためという理由が多いことなどを見ると、自分や子供の為に柔軟な選択ができるんだと感心した。そういう価値観も、海外からの移民政策の発展や移民への寛容さにつながるものがあるのかと感じた。

「国立民族学博物館の展示について〜韓国の社会・文化〜」

１年　久野千優

わたしたちが訪れた国立民族学博物館では地域別の展示が行われており、韓国を含む朝鮮半島の文化に関する展示も充実していました。古代から日本と朝鮮半島の人々は交流し、その結果互いの文化・生活に大きな影響を与えていました。だから、現在に残る伝統文化・生活習慣にも、類似点を見つけることができます。

例えば、類似点の一つに「人生儀礼の衣服があること」があげられます。日本の特別な服を着る人生儀礼というと、初宮参り、七五三、成人式などが思い浮かびます。韓国にも似た風習があり、例えば一歳の誕生日を祝うトルチャンチという儀式では、民族衣装である韓服を着ます。また、「お椀と箸をつかって食事をすること」も、類似点の一つとして挙げられます。お椀を持つかどうか、いわゆる「犬食い」はマナー違反か、など異なる点もあるものの、ルーツには共通性を感じられます。これは古代に伝わった習慣が長い年月を経て少しずつ姿を変えながらも受け継がれていったというものです。

類似点としてもう一つ、「教育体制が似ている」というのもあげられます。これは日本が朝鮮半島を植民地支配していたときの同化政策に由来をもっています。朝鮮には戦前、ほとんど小学校が無く、漢籍・儒教教育が主でした。朝鮮総督府はそれらを日本語、朝鮮語、算数、日本史、など科目別の教育に切り替え、初等中等教育を推進していきました。その結果、非常に日本の教育制度と似た体制が出来上がったそうです。国立民族学博物館に、韓国の中学校の制服が展示されていましたが、日本のものと非常に似ていると感じました。こちらは、植民地時代に日本が上から押し付ける形で韓国に定着させた制度です。

また、現代においても日本と韓国は文化の面で互いに大きな影響を及ぼしあっています。日本の漫画は韓国語に翻訳され、韓国の書店に並びます。韓流スターや韓流ドラマを、たくさんの日本人が視聴します。これは、両国が横に並び、積極的に文化交流をしている例です。

最後に、海外との関わりについてです。日本も韓国も、「優秀な人材の海外流出」が課題となっています。原因に、少子化の進行による国の将来への不安、受験戦争過激化などがあります。

このように、日本と韓国は時代を越え、かたちを変え、かかわり合いながら各々の文化を確立していきました。今後も隣人として、多くの交流があることでしょう。両国はいくつかの同じような悩みも抱えています。わたしたちは、日本に近い文化を持つ国として韓国をとら

えなおし、学んでいくことが必要だと考えています。

「国立民族学博物館の見学から読み取る韓国の社会・文化」

１年　山田真子

１　博物館の見学

国立民族学博物館へ行き、オセアニアを出発し、世界一周の旅を体験した。と、思わず口にしたくなるような、世界の多様性あふれる文化の展示を見学した。

私は世界各国の展示との比較を通して、韓国の社会・文化を捉えることができた。

２　展示から学ぶ文化

韓国では誕生日、結婚式などの祝い事では徹底的に華やかに、葬式、忌日などでは可能な限り簡素に、という方針が見られた。このような方針は日本とも共通している。反対に、博物館のヨーロッパやアフリカといった他国のブースでは、華美な棺桶や墓が展示されていた。

次に、衣服に関しては私たちのイメージにあるとおり、チマチョゴリが古くから民族衣装として親しまれている。しかし最近、折衷様式のデザインも増加し、チマチョゴリと洋風のドレスを融合させた形の流行が見られた。日本でも、浴衣ドレスや洋柄の着物の流行がある。折衷様式の流行は日韓共通のようだ。

また食器は、古来より伝わる形状や製法が、現在に至るまであまり変化せず伝えられているようであった。他に、韓国も日本もともに食事に箸を使用するが、韓国の箸は金属製が多いことなど、韓国独特の様々な面が発見できた。

そして住居。韓国は、ソウルが東北地方と同緯度にあるというくらいであるから、冬場は冷え込みが激しい。そのため韓国の住居を見ると、壁が小さく、窓が小さい、というように「冬向け」に建築された住居が一般的だ。対して日本は窓の大きな「夏向け」の家が多数を占めている。気候の違いから文化の違いが生まれている。

これらの発見を通し、私は庶民の生活に密着したモノからは「独自性」を強く感じた。白磁や箪笥等の生活用品から出ていた雰囲気はまさにそうであった。つまり、韓国に古来より伝わる庶民の文化においては日本の植民地支配による影響や諸外国の影響はあまりなかったのではないかと考えたのである。植民地支配など海外に介入されながらも庶民はアイデンティティを大切に守ってきた、というメッセージを受け取ったように感じる。

一方で、国という組織の受けた影響は大きかった。博物館では軍服や公教育などの面で日本式の要素が植民地時代に普及したという展示があった。

また植民地時代以降、近代的関心が広がっていった。例えば外来の料理が普及すると同時に、調理科学や、衛生、栄養など料理に新たな視点が加わったという。人々を取り巻く思想や関心には、海外からの影響が少なからずあったといえる。

思想に関して宗教信仰からも考えられる。韓国は仏教や儒教の根付いた生活習慣が浸透している。が、そんな中、街にはキリスト教会が各所に建てられている。私はハングル文字で書かれた聖書を目にし、一瞬戸惑いを隠せなかったが、現在韓国の人口の約30%がキリスト教徒であると知り、大いに納得した。加えて、伝道師の派遣数はトップであるというから驚きである。思想や関心は、時代の変化ともに新たな視点が加えられていったのだと考える。

３　現代の日韓交流

現代の日韓の文化交流は映画やドラマ、音楽などポップカルチャーに代表される。韓国でも海外へ輸出することを前提、目的とした作品が増加傾向にある。そういったことを契機に、日本では韓流ブームが巻き起こっている。また韓国でも韓国人の海外文化の消費は増加傾向にあり、このことから、日韓相互の文化交流が見て取れる。一方で、そこには思わぬ落とし穴がある。

最近、日本進出を果たした多くのK-POPアイドルを目にする。歌もダンスもできて完璧、といったところであろうか。しかし先日、ある韓国の方がこうおっしゃっていた。「あのアイドルたちは、一般的な韓国人ではない。」と。この言葉から「韓流」モノは必ずしも真実の韓国を示しているわけではないと気づかされる。現在のような文化交流は日韓交流の身近な部分を担うものとして悪くはない。が、都合のよい面ばかりを見つめていれば、認識の食い違いが起こり、新たな問題につながる可能性も考えられる。私は真実を伝えること、知ることに特化した新たな交流も必要不可欠と感じた。

４　移民問題

現代の韓国社会を考える上で無視できないのが、移民問題である。韓国から海外への移民は増加傾向にある。古くから、韓国には移民文化はあった。しかしその背景が変化しつつある。1980年代まで、理由としてあったのは「経済的事情」や「よりよい生活環境を求めて」といったもので、生活していくために移民を余儀なくされた人々が多かった。現在では、「子女の教育」や「国際化社会をよりよく生きる」という理由に代表される、現段階の生活レベルからさらに高みを目指して移民をする人々が増えている。

最大の背景に韓国の象徴である「学歴社会」があり、それが過酷な就職レースを生み出しているのだ。事実、韓国の司法試験合格者の約６割は合格までに５年以上の歳月をかけて勉強している。そうした日々の中で、ある時移民という考えが心によぎるのだろう。凄烈なレースの横道の浩々たる世界に心奪われるのだ。すでに韓国では横道が社会に浸透しており、書店には多くの移民指南書が置かれている。もはや、横道ではないのかもしれない。

５　全体を通して

博物館の展示から実に様々な文化に比較しながら触れることができた。韓国と日本は近距離に位置することもあり、やはり数多くの共通点を発見でき、古くから互いの文化に影響を及ぼしあっていたのだと改めて知った。考えてみればこういった動き自体は、グローバル化に伴い、伝統文化に新たな要素が組み込まれている現代の状況と何ら変わりはないのではないだろうか。これからの文化交流で、今まで以上の文化の多様性が期待できそうである。

「国立民族学博物館」

１年　小川コナ

韓国の文化に、特徴的なものからは異国を感じ、日本と似ているものからは、家族のような親しみも湧きました。

先ず前者にふれてみると、韓国の人々には主に儒教思想が根付いていると、学校の授業などで学んでいたのですが、実際には、キリスト教徒が三割を占めていることが分かり、これは、大陸に位置していることも要因ではないかと考えました。一方、日本は、陸続きではない島国だということや、鎖国などの時代背景もあり、異文化が広まる機会が中々無かったのだと思いました。日本では、儒教の思想に関連ある「先祖を大切にする。」という考え方が根付いていたにも拘わらず、植民地支配をした際に、創氏改名を施行したことは、当時の韓国の方々には、大変屈辱的な強制であったと考えると、日本人として、とても恥ずかしく、申し訳ない気持ちで一杯になります。ゼミでお会いする韓国人留学生の方から、「祖母が、実際に創氏改名を強いられ、辛い思いをした。」と伺っていたので、日本人の若者が、わざわざ進んで学ぼうとしなければ、知りえない歴史を、韓国の若者は全て知っていることを考えると、やったほうは忘れ、遣られた方はわすれないという文句の現実に、心が痛くなりました。そして、歴史は、深く掘り下げ、丁寧に学ぶ必要が欠かせないとも、改めて感じました。

現在の韓国は、教育に力を入れている高学歴社会であることは、以前から本などを通じて知っていましたが、小学生のうちから、数多くの習い事をさせるなど、子女教育に力を入れていることは、当然になっていることや、よく知られているところでは、英語教育が日本より随分進んでいることからも、学歴に対する意識の高さが解ります。国家試験に挑む人も大変多く、二十代では殆どが、三十代でも約三割が受験することから、学び続ける姿勢と、粘り強さを感じました。国際社会への参加意識が、まるで国が一丸となっているかのように高いことからも、決断と行動力の勢いも感じました。

日本と似ているところでは、主食がコメであることや、箸を使用する事、食器の形に共通点が多いなどが挙げられます。これは、渡来人によって、コメが日本に伝わったころより、韓国と日本が友好で密接

な関係を築いていたからではないでしょうか。また、意外なことに韓国併合の長い時間にも、制服やうどん、オムライス、味の素などがせいかつの中に入り込み、現在もそのまま親しまれていることには、心が温まりました。

今日でも、両国では、日本からは、漫画やアニメ、テレビドラマ、J-POPなどが、韓国からは、韓流ドラマやK-POPといった、文化的交流があります。因みに、私はK-POPが大好きになった事をきっかけに、韓国に興味を持ちました。互いの理解を深める為に、この交流はとても大切だとおもっています。

日本が韓国に対して行ってきた戦時中の行為や、領土問題等、どれも単純に解決できる内容ではありませんが、今回の巡検を体験し、日本と韓国の歴史問題については、公の場やプライベートなところでなど、幾度となく話し合いがあったにも拘わらず、未だに確かな歩み寄りがみられない様子から、「有意義でもあるが、無駄でもある」時間だけを費やしてきたのではと、改めて考えるようになりました。では、この先どのように行動していくべきかを考えたとき、一番大切なことは、事実を受け止め、反省することに尽きると思いました。そうすることで、その先の、真の友好関係に繋がり、更には絆にもなると信じています。

「韓国の社会・文化　～国立民族学博物館にて～」

１年　南出理夏子

今回、国立民族学博物館に行って私の中の韓国の文化のイメージは変わった。今まで日本と韓国は近いから似通った文化であるという認識くらいしかなかった。だが、展示を見てそれは間違いだったのだ、と感じた。

確かに日本と韓国の文化は似ているところも沢山ある。例えば、冠婚葬祭の衣装などである。どちらも、おめでたいときには赤などの派手な服。逆に葬式のときは、地味な服というように。しかし、異なるところも沢山あった。生活習慣や宗教観、子どもの健やかな成長を祈って盛大にお祝いすることがその一例だ。

韓国は日本と同じように箸を使って食べる。私たち日本人はご飯を食べるとき、お茶碗を持って食べる。でも、韓国では食器を持って食べることは行儀の悪いこととされている。

また、今回行くまで、私は韓国の宗教は儒教一色だと誤解していた。だが、日本よりもずっと宗教は多様だった。

韓国の総人口の約半数が何らかの宗教を積極的に信仰し、その過半数がキリスト教徒である。また、伝道師の派遣数は世界一でもある。内訳は、主に低所得層に信仰されているプロテスタントは韓国の人口の20パーセント以上、カトリックは約10パーセントの人々に信仰されている。韓国の人口は約5,150万人（2015年12月現在）なので、プロテスタントは約1,030万人、カトリックは約515万人の信者がいることになる。

それに対して日本のキリスト教徒は、わずか人口の１パーセントといわれている。これから、日本は韓国ほど宗教に対して熱心ではないように感じた。

でも、文化の基盤は儒教であると思った展示があった。それは族譜を大切にするという展示だ。族譜とは、家系図のようなものである。命と同じくらい大切なもので、火事になったときでも族譜だけは持ち出すそうだ。家を大切にする韓国らしいなと思った。

韓国の人は向上意識が強いのも見て取れた。子どもの教育のために移民になったりしている。日本にはそんな考えがないので少し驚いた。

日本と韓国の文化は似ているが、別物であると感じた。これからはお互いのことを知るためにもっと積極的に文化交流を図り、よいところを吸収すればもっとお互い発展していくだろう。

＜出典＞外務省　大韓民国基礎データ
http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/korea/data.html

＜B　永田貴聖先生の講義＞

「日韓の移民政策と多文化共生問題」

１年　岩田純怜

１　日韓の移民・移住労働者政策の比較

韓国の外国人滞在者は2016年３月の時点で190万人であり、人口のおよそ４％である。韓国で暮らす外国人の半分以上が朝鮮族を含む中国人で、次いで多いのがコリアンアメリカンと呼ばれる米国人、３位、４位は国際結婚による移民が多いベトナム人、タイ人である。日本人も約55,000人ほど滞在しており、企業などの駐在員が多いそうだ。全体を通して、韓国と雇用許可制（これより後に詳しく記述）で条約を結んでいる国の国民が多いことがわかった。

一方、日本の在留外国人数は212万人であり、国籍別で見ると韓国と同様に中国人の割合が最も高い。しかし韓国のように中国人が半分以上を占めていることはなく、30％くらいである。中国人に次いで30％近くを占めているのは韓国・朝鮮人であり、３位はフィリピン人、４位はブラジル人である。フィリピン人は圧倒的に女性が多く、多くが国際結婚を目的にやってきていて、その他の国々の外国人は労働者として働きに来ている場合がほとんどである。

1970年代までの韓国は、自分たちが外国人労働者として海外へ働きに行くケースが多かった。しかし1980年代後半になると、韓国では、1988年のソウルオリンピックに向けて多くの労働者が必要になり、労働力不足、雇用の増加に従って韓国の企業は不法滞在労働者を含む外国人労働者を多く働かせた。90年代では、93年に金融市場の自由化・国際化が始まり経済が成長していったため、本格的に労働力が不足しだした。よって政府は外国人労働者を、「労働者」としてではなく、「研修生」として導入し、専門的な職業以外の単純労働の職業にも就かせられるようにした。

また、1999年、「在外同胞法」という韓国や朝鮮にルーツを持つ外国人にサービス業への就労を許可したり、彼らの韓国での在住制度を定められた法律が制定されるなど、外国人労働者の働きやすさや職業の幅が増していった。

だが一方で、不法滞在者が増えていき、外国人労働者に対する賃金未払いなどの人権侵害が社会問題になった。そのため韓国は、2004年の「雇用許可制度（EPS)」、2007年の「在韓外国人処遇基本法」の制定でその社会問題を解消しようとした。EPSとは、韓国と協定を結んだ国の労働者に就労ビザを与え、非専門職での外国人労働者の雇用も許可するという制度である。EPSにより、外国人労働者の不法滞在率は80％から16.3%にまで減らすことができた。そして在韓外国人処遇基本法では、外国人への教育支援や、外国人への差別・偏見を解消することを目的とした韓国人に対する教育を進めるなど、外国人の人権を保障した。

韓国にとって2000年代は移住労働者受け入れ時代であり、国内に外国人労働者が増えれば増えるほど外国人労働者や移民のための環境づくりが求められていたのだった。そのためグローバルセンターという外国人が生活したり就職したりするときにサポートをしてくれる施設が開設されたり多文化家族への支援がなされたりなどもその一環として行われた。また、2008年の国籍法改正で、結婚国籍変更要件が緩和され、結婚移民は韓国に住んで２年くらいで国籍が取れる時代にもなった。

しかし、労働者にはそれほど手厚くなく、例えばEPSにも課題が残っており、39歳まででしかビザを入手できない、８年しか滞在できない、定住のビザに変更しにくい、雇用主を2回までしか変えられないなど、外国人労働者にとって良くない条件のままであり今でも課題として残っている。

一方日本は、永田さん曰く「韓国の『90年代の研修生受け入れ時代』の頃のような状況で止まっているイメージ」であり、韓国に比べて、外国人労働者関係の法整備の進行が遅い。韓国は戦後、様々な分野で日本をモデルにし、日本の後を追っていることが多かったが、外国人労働者や移民のための法整備や環境づくりに関しては日本よりも進んでいて、国をあげてしっかりと向き合っているように感じられる。また、外国人労働者を受け入れるために、韓国は様々な法律を作り、そしてそれによって発生した新たな問題を解消するための法律をつくるといったそれの繰り返しで試行錯誤を重ねて前向きな姿勢で向き合っているようにも感じられた。その点、日本は法整備が遅れてい

るだけでなく、外国人労働者の問題や今の受け入れ態勢に関してもう一度考え直そう、新しい態勢を検討してみようといった行動がなかなか起きないのが残念である。

2　在韓フィリピン人を通して考える多文化共生問題

日本に滞在しているフィリピン人の多くは女性であり国際結婚移住者、そうでなければ日系フィリピン人がほとんどであるのに対し、在韓フィリピン人は男女比は半々で50代くらいの高めの年齢の人も多く、移住労働者がほとんどであると聞く。なぜこのような違いがあるのか。私は、日本と韓国でニーズが違うからだと思う。日本では過疎化した地域の農家などで嫁不足が起きており、女性を必要としている。一方、韓国では労働力を必要としており、前に記述した通り、日本よりも外国人労働者への受け入れ態勢が日本よりも整備されているため、労働者にとっても韓国の方が働き先として魅力的であり、必然的に日本より男性・労働者の割合が増えたということではないかと思う。

もともとフィリピン政府も移住労働政策を推奨しており、海外雇用庁、海外フィリピン人委員会という組織が積極的に受け入れ国との交渉を行ったり、移住者に対しては、移住国に関するオリエンテーションを行ったりしているそうだ。私は、フィリピンが行っているのは労働力を国外へ流出する行為であり、国にとってマイナスになるのではないか、と考えていたが、外国で働く約245万人のフィリピン人労働者の送金額は国内GDPの９％に相当する約229億8千万ドルもの金額だと知って驚いたと同時に、国内よりも国外に目を向けたフィリピンの国策は日本とは全く違っていて新鮮さを感じた。

では、フィリピン人移住労働者は、韓国でどんな生活を送っているのだろうか。永田さんの話によると、彼らは平日は仕事や家事をし、週末になるとフィリピン人同士で集まっているそうだ。主に集まる場所としては、フィリピン人の約９割がカトリック教徒のため、カトリック教会前などがある。教会前では露店が開かれ、フィリピン料理や食材、携帯電話、古着などが売られている。露店は観光スポットになっていて、集まるのはフィリピン人だけでなく、韓国人も見物に来ているそうだ。まるで日本のコリアンタウンのようだと感じた。フィリピン人にとっては情報交換、ビジネス、憩いの場であり、韓国人にとってはフィリピンの文化を存分に体感し交流することのできる双方にとって魅力的な場所である。そのような場所は異文化理解を進めるにあたり、なくてはならない場所だと思うので、今後もその場所が規制されることのないことを願いたい。どのような形であれ露店のような両国の人にとって双方親しみやすいと感じるような場所が増え、もっと交流が増えてほしいなとも思った。また、売店だけでなく、韓国で暮らすフィリピン人を支援する団体の相談ブースがあったりなど、永田さんの写真で見せて頂いたような教会前の一帯は、フィリピン人の生活をサポートするために、様々な用途で使われている。韓国に比べて土地に関する規制が厳しい日本ではそのように露店を開くことは絶対にできないだろう。そんな点から見て、韓国人はフィリピン人に対して寛容的であり、フィリピン人も韓国社会の中である程度の地位があるのではないかと考えた。

しかし、韓国ではフィリピン人に対する差別や偏見があるということは事実である。世界中どんな国でも、法律や制度は大多数向けのものになっていることが多く、大多数の中には自分たちは少数よりすぐれていると錯覚する者、あるいは少数を排他的に扱う者が出てきてしまう。韓国も例外ではなく、少数のフィリピン人に対して差別・偏見がおきている。永田さんの話では、フィリピン人によって治安が悪化していると考える韓国人は少なからずいるようだ。この原因は前述のようにフィリピン人は自分たちより劣っていると思い込んでいるからであると私は思う。解決策としてはフィリピン人をひとくくりに見るのではなく、個人として一人一人を尊重すること、そして韓国政府がフィリピン人の社会的地位を保障することが挙げられる。

永田さんの話で最も印象的だったのは、フィリピン人たちによる自主的な社会活動だ。フィリピン人は韓国だけでなく世界中で大使館と連携し、移住国に住むフィリピン国民に対する取り組みを行っている。国際結婚をしたフィリピン人妻支援、その子供への文化継承プログラムなど、フィリピン人が異国の地でも困らず暮らせるように、そして多文化社会の未来を担う子供達が、移住地とフィリピンのどちらの国の文化も尊重し継承していけるように工夫がなされている。近年は前述の在韓フィリピン人たちのように、移住先の法整備を待つのではなく、自分たちの文化そして人権を守るために自発的に自分たちで支援をし、移住先のことを学ぼうとすると同時に、母国の文化を守り継承していこうといった動きが盛んである。

確かに自分たちのことを一番よく知っている自分たちによる支援なので、求めていることを行動に移すことが容易であり効率は良い。しかし、彼らにもどうしても出来ないことはたくさんあるはずだ。彼らが働いて暮らしているのは彼らの国ではないのだから当然である。そんな時に、彼らの力だけでは出来ないことを、国家の力で法整備や国民への意識改革など行っていくことが受け入れ国の責任だと私は思う。

《参考資料》

http://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/korea.html

「日韓の移民政策と多文化共生について」

２年　芹澤優希

私は永田貴聖先生の講義を中心に両国の移民の状況について学んだ。外国人労働者における政策では、日本は研修生制度まで、一方韓国は雇用許可制度までと韓国の方が進んでおり、結婚移民と労働者移民の比率を比較してみても、日本は７：３で韓国は５：５と、産業面での移民の受け入れは韓国の方が日本に比べて進んでいるということが分かった。

また近年、グローバル化に伴い、近隣のアジア諸国からの移民が増加していて、その中でもフィリピンを例に挙げるとするならば、国際結婚を目的とした結婚移民が日本と韓国で増えている。国際結婚が増えることで「多文化家族」が生まれてくるのだが、そこには社会福祉に関する問題や差別などの様々な問題があることを知った。

移民は受け入れ先の社会に多文化共生をもたらしてくれる。移民が社会統合するためには、彼らがそこの言語を習得すること、そしてその受け入れる側の社会が習得を促すような政策を行うとともに、移民に対するつまり異文化に対する偏見をなくすことが欠かせないと思う。私たちは異文化を理解することと並行して、まず自分たちの文化がどういうものなのかを知り、理解を深める必要がある。そうすることで移民と良い社会関係を築くことができ、共生していけるのではないかと思う。

「永田先生の講義を聞いて」

１年　金高青葉

1　日本と韓国に滞在するフィリピン人の特徴

在日フィリピン人は在日外国人の国籍別人数の中で３位（１位中国、２位韓国・朝鮮）。全体で約21.8万人、うち女性は約16.5万人。結婚移民が多い。これに対し、在韓フィリピン人は男性も多い。韓国にも課題はあるが、移住労働者の受け入れ環境が良い。

2　日韓の移民政策

韓国の移民政策の流れを見ると、 1980年代は無資格労働時代だった。1988年にソウルオリンピックもあり、労働力が必要で、政府も見て見ぬ振りの黙認状態だった。

1990年代は研修生時代で、移住労働者が、立場は研修生として一応合法化された。しかし、期間以上の不法滞在や、職場などでの露骨な人権侵害が問題になった。

1999年に「在外同胞法」ができ、国外にいる祖先が朝鮮系の人の在住制度が確立した。

2000年代は移住労働者受入時代で、2004年に「雇用許可制度」ができ、２国間協定によって合法な期間移住労働が可能になり、立場も労働者となった。2007年には「在韓外国人処遇基本法」ができ、移住労働者への人権侵害問題の対応や、移民の社会統合に向けた動きが現れ、2008年の 国籍法改正で結婚移民の国籍変更のハードルが低くなった。

これに対し日本は、未だ研修生制度で移住労働者に対応しており、日本がどのような路線をとるにせよ、移民問題への対応が足りていな

いと言わざるをえない。

３　その他

フィリピンという国は、在外フィリピン人の数が約1024万人で、人口の約１割に及ぶ。フィリピン自体も出稼ぎを支援しており、海外からの国内送金額は、GDPの9%に相当する。特に移住労働者には女性が多く、主に家事労働者などとして働いている。

韓国におけるフィリピン人たちの扱いを見ると、韓国のソウルにはフィリピン人たちが一同に集う場所があり、フィリピン人たちには平日は仕事をし、週末に地下鉄を乗り継いでそこに行く、という生活スタイルが定着している。そこにはフィリピン語のミサなどがあり（フィリピン人の９割がカトリック）、周辺にはフィリピン料理を始めとする露店が並んだり（日曜日のみ）、支援団体の相談ブースなどが建っている。露店などは不法らしいが、もはやソウルの名所の一つとなっており、またソウル自身もインターネット上で観光地であるとしている。

４　感想

これまで外国同士を観察してみるという発想自体あまりなかったので、よい体験だった。客観的立場で移民問題について見れたことは色々考えていく上で良い材料になると思います。これから日本は大きな問題に突き当たることになるでしょうが、目を背けずに対応して行って欲しい。

「日韓の移民政策と多文化共生問題ー国立民族学博物館・永田貴聖先生の講義をうけてー」

１年　石塚和香

１　労働者と結婚移民

（１）韓国の政策

韓国の経済発展には海外からの労働者の影響が大きい。時系列で韓国の海外からの渡航者関連の政策をまとめてみる。

韓国には大きく分けて二つの時代がある。80年代の「無資格労働時代」と、90年代の「研修生時代」だ。もっとも今は、つらい生活を強いられた研修生たちが韓国から逃げ出すなどということが起きたので、細かく政策が変化している。

1999年　「在外同胞法」
2002年　日韓ワールドカップ開催
2004年　「雇用許可制度」
2007年　「在韓外国人処置基法」
2008年　国籍法改正

在外同胞法というのは、在外外国籍同胞の在住制度を確立したものだった。このときから、日韓の関係は少しずつ改善の兆しを見せていた。それと関連して、2002年には日韓ワールドカップが開催された。そして2004年、「雇用許可制度」が制定された。これは今までのものと少し違い、二国間協定によれば合法的に移住労働ができるという、労働者を重点的に視野にいれた制度だった。しかし、この制度はいいところばかりではなく、色々な問題点が指摘されている。例えば、40歳を越える年齢に達しているとビザが発行されないこと、最長８年間しか滞在できないこと、雇用主を２回しか変えられないことなどだ。こうした問題点をあげてみると、この政策は、若い労働者にはやさしいものであるが、熟練の技術者たちは対象にしていない。こうした制度は、外国からの労働者たちの、過酷な労働と、薄給を生み出すことにつながってしまうのかもしれない。2007年には、「在韓外国人処置基法」が制定され、2008年、国籍法が改正された。これにより、海外国籍を持つ人と、韓国国籍を持つ人が結婚したときの、海外国籍の人の国籍を韓国国籍に変更する要件が、緩和された。

（２）日本の政策

日本の政策は、韓国に対してとても大きく遅れを取っている。永田先生によれば、日本の政策の内容は、20年前の韓国のそれにやっと追いつくようなものだという。たとえば、海外国籍を持つ人が日本国籍を持つ人と結婚し、日本国籍に変更しようとすると、韓国のように定住２年で変えられるわけではなく、もっと複雑な手続きや、長い時間を要する。だから国際結婚した際に、パートナーの出身国で生活することを決めた人々、すなわち「結婚移民」は、韓国で急増しているが、これに対して日本では目立った変化はみられていない。

２　各国の問題点

まず、韓国の問題点であるが、これは結婚移民に手厚く、外国人労働者にはあまり寛容ではないという点である。労働者は若い者しか受け入れず、年配の人は８年たったら自国へ帰らなくてはならないらしい。また、雇用主を２回しか変えることができないというのも、実に非現実的である。また、結婚移民に対しても万全というわけではないと考える。国籍の変更のしやすさなど、結婚移民の受け入れ体制は、まわりの他の国とみても、進んでいる。だが、フィリピン人で韓国に住む人は、意外にも労働者が多い。これは、結婚移民でフィリピン人女性がきたときに、その人たちに差別をするからではないのか。結婚移民を受け入れている国なら、移民してきたもとの出身国が韓国人からみて卑下される恐れがあるという場合もあるのだから、国民の意識を変える必要がある。そのために、また新たな制度を定めるか、現行のものを見直すことが、韓国に求められている。

次に日本の問題であるが、これは移民に対しての受け入れ制度がとても遅れたものであることだ。農村の女性不足からくる、結婚移民の受け入れは多少あるが、それくらいだ。今、国内では、技術職につく若い職人が減っている。海外からの労働者受け入れがカギになるのではないだろうか。また、韓国と同様に、例にフィリピン人女性があげられる、国籍・ジェンダー差別にも向き合っていかなければならない。

「永田先生の講義を聞いて」

２年　浜　凪帆

男性の労働移民だけではなく女性の結婚移民も最近はいるが、結婚移民の抱える問題は多く存在した。結婚移民がその国に定住するにあたってうまく適応することや発展途上国から移民として人が出て行ってしまって途上国の発展の妨げになることなどである。うまく適応することを妨げているのは言語や差別、偏見だと感じた。

民族学博物館の展示でヨーロッパの移民は、「元植民地から元宗主国」が多かった。同じ言語であることや植民地時代に宗主国の文化が入ってきたことが理由だと考える。私は、このことから植民地以外の国から日本に来る場合だと言語の壁はやはり大きいに違いないと思った。そしてこの言語の壁を取り去るには、国の力を借りて日本語を教える学校が必要だと思った。国によっては無償で行っていた。また、移民はそう簡単に自分の体に染みついた自分化を捨て去って移ってきた国の文化に染めることは容易ではない。従って、いろんな時代の移民も常に自分化をある程度守ろうとしながら生活をしてきている。そのような文化や見た目の違いから移民が受けてきた差別は、安定を求めて同じ国出身の人で集まり地域コミュニティを形成した。地域コミュニティ内では、集団の強みや仕事分担で自分化を守りつつ、上手く多文化共生できていると感じた。現在はチャイナタウンのようにただ中国人が集まって暮らすだけではなく観光客が中国文化を楽しむことができる良い異文化交流の場となり、華僑にとってはいい仕事ができているのではないかと思った。フィリピン人の露店が日本ではすぐに撤去されてしまうが、治安悪化を防ぎつつ韓国の露店の様にフィリピン人のくつろぎの場となれば日本がより快適な生活空間になるだろうと思った。移民が就職するのは単純労働や3k労働のような職ばかりで、信用されておらず職場でも対等な扱いではない。子供の進学就職のための特別スクールの設置やこれから増えていくであろう移民に対する考えを変え、偏見を取り去っていく必要があると感じた。技能実習生制度やヘイトスピーチの様に日本はまだまだ移民の受け入れ態勢が制度的にも国民の意識的にも不十分で改善するべき点が多く見つけられる。今後、移民を受け入れていくにあたって日本人に向けて指示発信していく日本人が必要だと思った。そのような積極的な人が働きかけることで少しずつ移民への理解が深まり徐々に受け入れ態勢がとれるのではないかと思う。

＜C　文公輝さんの講義＞

「私たちの知らなかった“日本”ー在日韓国人文公輝さんの話を聞いてー」

２年　伊東里彩

１　はじめに

大阪生野にある多文化共生教育センターで在日韓国・朝鮮人の一人である文さんの講義で今まで知らなかった在日韓国・朝鮮人についての知識を得ることができた。ここでは具体的に何を学んできたのかを紹介していきたい。

２　外国籍の人の割合

日本全体→59人に１人。大阪→43人1人。日本に住む外国籍の人々の割合は下のようになっている。この数字は他の国に比べると図から読み取ることができるように、先進国の中では低い。（外国籍とは日本の法律で何らかの在留資格を持つ日本国籍を持たない人のこと）また、左下の円グラフからも韓国、中国などの近隣の国の人の割合が高いことがわかる。

３　在留資格について

在留資格は27種類あるが、その中でも活動に制限のない在留資格である５種類を取り上げる。

（1）永住者→期間は無期限、法務大臣から永住の許可を受けた者(入管特例法の「特別永住者」を除く）に与えられる。

（2）日本人の配偶者等→期間は　５年・３年・１年・６か月、日本人の配偶者・子・特別養子に与えられる。

（3）永住者の配偶者等→　期間は上の（2）に同じ。　永住者・特別永住者の配偶者及び我が国で出生し引き続き在留している子に与えられる。

（4）定住者→期間は５年・３年・１年、法務大臣が個々に指定する期間（１年を超えない範囲）日本人の親族、日系人の子、外国人配偶者の連れ子等に与えられる。

（5）特別永住者→期間は無制限、朝鮮半島・台湾から戦前・戦中に日本に移住し、サンフランシスコ講和条約に基づき、日本国籍を失った人々に対して、平成３年（1991）に与えられた。植民地時代に“日本人”として暮らしていた彼らはほかの外国籍の人とは異なるとし、子々孫々安定して暮らせるような在留資格を発行した。

日本に在留している外国人の人々のうち６割強、つまり過半数以上の人々が上にあげた活動に制限のない在留資格を持ち、日本で安定した生活を送ることができている。

大阪の場合も見ていこう。大阪では８割弱の人々が上の５つの中の在留資格を持っている。その理由として考えられることは、大阪市（特に生野区）では、５人に１人が韓国・朝鮮籍であり植民地時代もともと日本国籍であった人（朝鮮、台湾に1945.9.3以前に日本に在留）やその子孫に与えられる特別永住者が多いということがあげられる。（大阪で在日韓国・朝鮮人の人が多い理由として戦前大阪は東京より人口が多く工場が多く工場が発達していた朝鮮半島の人々は仕事がたくさんあり、交通の便もよく、東京よりも近かった大阪へ来る人が多かったということがあげられる。）

４　問題点

例えば、在日コリアン三世がお金を借りるとき、“帰国するかもしれない”といった理由でパスポートや在留カードの提示を要求するなど、日本人とは異なりより厳重な身分確認をされてしまう。また、中国・韓国・朝鮮の人々の８～９割以上の人は日本の通称名を使っている。これは、就職や就学などで不利になってしまうために外国籍であることを隠すために使用していた。しかし、ここにあげた中国韓国などの人々は日本人とも顔がとてもよく似ているので、名前を聞いても姿かたちを見ても“外国籍”とはわからないことが多く、知らずに本人たちの前で“韓国人は怖い”“朝鮮人は嫌いだ”といった発言をしてしまうことで彼らの身の上を明かしにくいという状況が作られてしまっている。

５　国際結婚の増加

日本では30組に１組(大阪では26組に１組)の割合で国際結婚をする人々が現れ、国籍で“何人”と分けることは近年難しくなってきた（ハーフなどの増加傾向による。50人に１人、大阪36.7人に１人）。また、国際結婚をすることで親に結婚相手の国籍を理由に反対されるなど、自分が関係ないと思っていた差別の問題に思いがけなく当たってしまうことも多くなった。差別問題について詳しく学習していくことで、このような差別に屈しない対応ができるようになるだろう。

６　ヘイトスピーチ

ヘイトスピーチは全国各地で行われ、ほぼ毎日一回の頻度で行われている。ヘイトスピーチにみられる特徴としては、

・誰に対しても侮蔑的で自分より弱者だと下に見る傾向がある。
・参加者は社会的に恵まれない人もいるが、中心となっているのは多くは大卒で年齢が高く収入も安定している人が多い。
・歴史問題に対する怒りの矛先を在日韓国・朝鮮人に向けている人も多い。
・子供でも参加している子がいるが、両親からの影響が大きく、親が自分の思想を子供に強制させ、一種の虐待にもなっている。
・差別用語を連呼する

上のような内容を見ればヘイトスピーチは絶対にやってはならないことだということが誰でもわかると思う。しかし、なかにはヘイトスピーチの規制に対して“言論の自由を妨害している”と主張する実態をわかっていない人たちも存在する。このような理解のあまりない人々を減らしていくことも課題の一つである。

７　ヘイトスピーチに対して

ヘイトスピーチ解消法は、在日韓国人らに向けた言動を念頭に、適法に日本に住む日本以外の出身者や子孫に対する「不当な差別的言動は許されない」と明記。対象の言動を「差別意識を助長する目的で、公然と危害を加える旨を告知したり、著しく侮蔑したりして地域社会から排除することを扇動する」ものと定義した。言論の自由に関しては、憲法が保障する表現の自由を尊重し、禁止規定や罰則は設けていない。しかし、言論の自由は守られるべき大切なものであるが、他人をあからさまに差別するような発言はしてはいけないという当たり前のことを忘れてはならない。またほかにもヘイトスピーチへの規制は行われている。この法律により今まではヘイトスピーチをする人たちを守るように歩いていた警察官が、逆にヘイトスピーチの人々の監視をするようになり、またデモに対する市民の行為（カウンターなど）を止めなくなるなどの変化が現れた。

また、前述にもあるようにヘイトスピーチの抑止力としてカウンターというものがある、彼らは国籍に関係なく、人間として見ず、人間としての尊厳を傷つけるということに対し、怒りを覚え参加する人が多いという。上のような法律ができたことでヘイトスピーチも減少はしていくだろうが、法律で規制されている人が在日韓国・朝鮮人の人のみであることから差別の矛先が、アイヌの人々などに向くかもしれないと懸念している。

また、ほかにも全47都道府県のうち38都道府県、1741市区のうち1481市区が国籍条項を維持しているという問題もある。（特に組織に加入できる条件に国籍を挙げる条項を差し、ここでは特に外国籍の人々が公務員になることが認められていないことを指す。）このような差別的な法制度の見直しをしていかなければヘイトスピーチを代表とする差別的な行為を根絶させることはできないだろう。

８　さいごに

今回の講演を聞いて、私の知らなかったことがたくさんあることが分かった。在日韓国・朝鮮人の存在は知っていたが、ヘイトスピーチの実態や、様々な誤解がたくさん生じているということは全く知らなかったので衝撃を受けた。中でも一番驚いたのは、私たちよりも若い中学生がヘイトスピーチデモに主要メンバーとして活動していたことである。彼女は親の思想の影響を受けたのだろうか。それはわからないが、未来のある子供たちがそのような差別行為をしているということは悲しい上、見ていて痛々しくもある。そのような子どもたちやヘイトスピーチデモを行っている大人たちを少しでも減少させるためにも、法律での規制だけではなく、今回私たちが文さんに話を伺って理解を深めていくことができたように、実際に話を聞く機会などを設け、知識を得る機会をもっと増やす必要があると思う。小さなところから取り組んでいくことで、日本社会をより“開放的”なものにできると思う。

「在日外国人との共生―文公輝さんの講義を聞いて―」

１年　稲田栞里

１　はじめに

文公輝さんの講義の中で見せていただいたヘイトスピーチの映像に、わたしは大きな衝撃を受けた。「チョンコ、チョンコ」と罵声をあげながら街を練り歩く人々、たくさんの大人にまじって在日コリアンに対する差別的なスピーチを行う少女。日本で起きている差別の現状に触れ、その悲惨さを実感した。しかし一方で、その後訪れた生野コリアンタウンのように、日本人と在日コリアンの人々が共生し、良い関係を築くことができている例もある。日本に暮らすたくさんの在日外国人と共生していくために、わたしたちに必要なことは何なのか、差別問題をどのように解決していくべきなのか、文さんの講義で学んだことから考えてみたい。

２　在日外国人の現状

現在日本で暮らす外国籍住民は約212万人にのぼる。これは日本人約63人に１人の割合である。国籍、地域別の内訳を見てみると、もっとも多いのが中国籍（約71万人、30.2％）、次いで韓国・朝鮮（約49万人、22.9％）そしてフィリピン（約23万人、10.3％）、ブラジル（約17万人、8.0％）と続く（2015年末現在）。大阪府だけでみると、約20万人、約43人に1人が外国籍である計算だ。内訳は、多い方から韓国・朝鮮（約12万人、56.0％）、中国（約５万人、25.0％）、ベトナム、フィリピンとなっている（2014年末現在）。さらにコリアンタウンのある生野区では、5人に1人が外国籍だ。このように、在日外国人の数やその国籍には、地域ごとで大きなばらつきが見られることが分かる。

続いて、在日外国人を在留資格別で見てみよう。2015年６月末現在で、割合の大きい項目から、永住者（31.7％）、特別永住者（16.3％）、留学（10.4％）、定住者（7.4％）、日本人や永住者の配偶者（6.5％）、技能実習（8.0％）となっている。大阪府では、特別永住者がもっとも多く、49.9％にのぼる。特別永住者とは、第二次大戦後が正式に終結した1945年９月３日以前から日本で暮らしている人とその子孫を指し、そのほとんどが植民地時代に日本に移り住み日本国籍を所持していた韓国・朝鮮国籍の人々だ。永住者、特別永住者、定住者、日本人と永住者の配偶者を合わせると、全国では６割弱、大阪府では8割弱をしめる。彼らは非常に安定した在留資格を持っている。多くの日本人が在日外国人に対して、「しばらくしたら本国に帰るのだろう」と考えている。しかし、このような考えは多くの場合偏見であり、日本に慣れ親しみ、将来的にも日本で暮らしていこうと考えている在日外国人が大半をしめているのだ。日本で生まれ育った在日外国人も多い。にもかかわらず、在日外国人が住宅を借りたり、ローンを組んだりする場合には、非常に厳重な身元確認が求められる。このようなことが、在日外国人が暮らしにくさ感じる原因の一つとなってしまうのではないだろうか。

在日外国人は、多くの日本人が考えているよりもずっと身近な存在であるだろう。日本にはたくさんの外国籍の人々が暮らしている。しかし、特に在日コリアンの人々のなかには、本名ではなく日本名（通称名）を使い、自らが外国人であることを隠して生活している人が多く存在する。私たちは気づかないうちに、彼らと接しているのかもしれない。在日コリアンの人々は、差別や偏見を恐れてたとえ親しい人であっても韓国・朝鮮人であることを打ち明けるのをためらってしまうという。実際、就職においても外国籍であることは不利であり、文さんのように、在日外国人に対する偏見から結婚に反対されて苦労を余儀なくされる人もいるのだ。在日外国人に関わる問題が私たちにとって身近な問題であることを示す例は他にもある。2014年度の結婚総数のうちの約3.3％が国際結婚であった。つまり、30組に１組の割合で日本人と外国人の夫婦が誕生しているということだ。中国、韓国、フィリピンなどのアジア諸国がその大部分をしめる。また、親のどちらかが外国籍である子どもは40人に１人と、非常に多い。

ここまで在日外国人の現状について見てきたが、彼らが私たちにとって身近な存在であるにも関わらず、共に暮らしていく上で非常に困難な問題をかかえていることが分かるだろう。在日外国人の問題は私たちにとって決して他人事ではなく、日本に暮らすすべての人々の間で考え解決していかなければならないという課題だということを、もっとしっかりと認識する必要があると思う。

３　ヘイトスピーチ

在日外国人と良い関係を築いていく上で大きな妨げとなっている要因の一つにヘイトスピーチがある。2012年から2015年の３年間と半年で、発生したヘイトスピーチの件数は1152件、１年あたりにすると329件だ。毎日１件のペースで起きていることになる。地方別にみると、関東がもっとも多く、近畿、中部と続く。近年増加傾向にあるヘイトスピーチであるが、今年5月に、国会でヘイトスピーチ解消法が成立したことにより、解決に向けて一歩前進した。実際に、これまでデモを取り巻く市民側を警備していた警察官がデモの参加者を警備するようになったり、デモに対する市民の抗議を止めなくなったりといった変化が見られた。この法律は、日本に住む日本以外の出身者や子孫に対する「不当な差別的言動は許されない」といったことが明記されていて、主に在日コリアンに対する差別をあおるようなヘイトスピーチを規制するものだが、一部には表現の自由を侵しているという反対意見が出されている。しかし、ヘイトスピーチは対象とされた人々の人間としての存在を傷つけるものであり、いくら表現の自由が認められているといっても他人の権利を侵害するような表現は制限されるべきではないだろうか。

ヘイトスピーチが発生する背景として、日本の社会全体が、在日外国人を軽視していることが考えられる。実際、都道府県では38/47、市区町村では1481/1741と、多くの自治体がそれぞれ職員の採用において国籍条項を設けている。このように社会全体が外国籍住民を二級市民とみなしていることが、ヘイトスピーチを生む下地になっているのだ。

ヘイトスピーチを行う人々は、一部の極端な右翼や、収入が低くデモに参加することによって日頃の鬱憤を晴らそうとしている人だと考えてしまいがちである。しかし、実際にデモ参加者の大部分をしめるのは、大卒で平均以上の収入があり、比較的高い年齢層の人々だ。親の影響で参加する10代の学生も存在する。ヘイトスピーチの問題は私たちにとって他人事では済まされないのだ。

日本人と在日外国人が共生していくために必要こと、それは、一人ひとりがこの問題について自分のこととして向き合い考えていくこと、そして、「いっしょに生きているんだ」という意識を持つことなのだ。

４　マイノリティに対する差別の原因と克服策

ここまで文さんの講義の内容をまとめてきた。ここからは、在日コリアンを中心にマイノリティの差別に対する私の考えを述べたい。

差別が生まれる原因の一つとしてまずあげられるのは、日韓間の認識のずれから派生する反感だ。日本の植民地支配や太平洋戦争時の出来事などの歴史認識問題がその典型的な例である。歴史教育はどうしても被害者としての側面に比較的焦点が当てられやすいため、当然日本と韓国の歴史教育は大きく異なり、両国間の歴史認識にはずれが生じてしまう。　竹島をめぐる領土問題や、その他の政治上の問題でも同じことが言える。それだけならまだ良いのだが、問題はそのずれを増幅させるメディアの存在だ。一旦両国間で認識のずれから相手国に対する反感が生まれると、メディアはそれに応えるように都合よく情報を選択して両国間の溝を深めてしまう。それによってさらに反感が増すという悪循環に陥ってしまうのである。しかし全ての責任がメディアにあるわけではない。メディアは、私たち受け手が求める情報を提供するのだから、そのような悪循環を作り出しているのは私たち自身なのだ。この解決ために必要なのは、両国の間での考え方の相違を感情的にならずに捉え相手を理解しようと努めること、そして私たち一人ひとりが両国間の関係に対する自分自身の確固とした考えを持つことだ。それぞれが客観的な事実を知ろうと試み、それを冷静な目で見つめて自らの考えを持つことで、メディアの流す偏った情報に踊らされることなく理性的に両国間の問題を捉えられるようになるだろう。そうすることによってお互いがお互いをもっと寛容に受け入れ、差別意識をなくしていくことができるはずだ。

また、二つ目の原因としては、私たちが在日コリアンの人々を全て一括りにして認識してしまう傾向にあることがあげられる。確かに、彼らを自分たちとは違う存在としてまとめて間に線引きをしてしまうことは楽なことである。なぜなら新しいものと出会い関わっていくことは非常にエネルギーが必要とされる行為であるからだ。しかしそこには弊害もある。在日コリアンを一つの観念でまとめることで、彼ら

に関する良くない情報のみが集積されて負のイメージが作り上げられてしまうのだ。一つのまとまりとして在日コリアンを認識すると、個人が注目されず、どうしても悪い点ばかりが目についてしまう。先ほど述べたように、ただでさえメディアが拡散する韓国に対する情報は、反感をあおるようなものが多い。そんな中で、日々耳にする情報のうち良くないものばかりが私たちの意識に残り、それが積み重なって結果的に在日コリアンという集団全体の印象の悪化につながる。具体的な例をあげると、例えば韓国で日本を批判する内容のデモが行われたとする。当然これは日本で格好の韓国バッシングの材料として大きく報道されるだろう。これを見た多くの日本人が、全ての韓国人がこうなのだろうと認識すると思う。もちろんこれは偏見で、実際このような日本批判のデモを大々的に行うような人々は韓国でもごく一部だ。

しかし、印象が良くなるような情報が比較的早くに忘れられてしまいがちであるのに対し、このように生まれた韓国全体に対する悪いイメージはなかなか消えずに日本の人々の中で膨らみ続けるのだ。やはり在日コリアンを個人として認識し、接していくことが私たちには求められている。彼らは在日コリアンである以前にそれぞれ異なった個人であり、ともに日本に暮らす人々だ。当たり前のことのようだが、この意識をしっかりと持つことで、在日コリアンに対する見方が変わっていくのではないだろうか。

また、さらに原因として考えられるのは、在日外国人に対する人権意識の欠如だ。現在日本人の人権に関する意識は比較的高いように感じられる。障がい者や高齢者、女性、部落出身者に対する差別が完全になくなっているとはもちろん言えないが、社会全体がそれらの差別をなくしていこうという共通の意識を持って動いている。しかし、在日外国人に関する差別についてはどうだろうか。一部の雑誌や書籍、ネット上の書き込みなどで、公然と在日コリアンに対する差別をあおるような主張がなされているという現状がある。在日外国人に対する差別意識は依然として残っているといえる。この背景には、在日外国人の日本社会における立場の弱さがあると思う。現在、外国人籍住民には参政権が与えられていない。この問題については様々な議論がされており、外国人にも参政権を与えるべきだと一概に言うことはできないが、彼らに参政権がないことが地位の低下を招いていることは事実であろう。在日外国人を日本人と対等に見ない社会全体の風潮から、差別が生まれ、ヘイトスピーチをはじめとした様々な問題が発生しているのだ。これは、国全体で考えていかなければならない課題である。解決のためには、まず人権教育による国民全体の意識改革が必要だ。外国籍住民にも日本人と同じように人権があり、尊重していかなければならないということを、私たち一人ひとりが再確認する必要がある。

いずれにしても、在日コリアンをはじめとした在日外国人に対する差別をなくしていくための前提として必要なのは、在日外国人やその差別に関する正しい知識、少なくとも正しい知識を得ようとする姿勢である。無関心からは何も生まれない。そこからさらに、私たち一人ひとりが、得た正しい知識をもとにして、在日外国人との共生について考えていかなければならない。この問題は日本に暮らす全ての人々の共通の課題である。差別をなくし、在日外国人との関係を今後どれだけ良好なものにしていけるかは、日本に暮らす私たちがどれだけこの問題を自らに直接関わるものとして受け止め、真剣に考えていくことができるかにかかっているのだ。

大切なのは、日本人と外国人を同じように扱うことではなく、「違いを認める」ことである。ともに日本に暮らしている以上、国籍の違いは個性の延長であると理解すべきだ。日本国籍を持つ人々の中でも一人ひとり違っている。それに国籍や文化、宗教の違いが加わることで、私たちの社会はもっと豊かなものになるはずだ。これが多文化共生の意義であり、本質であると私は考える。

「生野コリアタウン　文公輝さんの話を聞いて」

１年　元吉千遥

１　文公輝さんのお話

私たちは生野コリアタウンにある多民族共生人権教育センターで、在日コリアンの文公輝さんのお話を聞きました。その内容は以下のとおりです。

日本の人口の1.7％、大阪の人口の2.3％が外国籍の人々（大阪の外国籍の人々の６割が在日コリアン）。

日本の外国籍の人々の中の６割近くが永住者、特別永住者、定住者などの日本に長く住んでいて、これからも自国に帰らない人たちである。

いま国際結婚が増えており、40～50人に１人の赤ちゃんのどちらかの親が外国籍である。

日本の外国籍の人たちは外国籍であるがために制限をされることがある。例えば、日本人よりも厳重な身元特定など。他にも、職業選択の制限などがある（文さんは日本に30年以上住んでいるのに、いまだにそのようなことがある）。

日常で差別を受けるのを避けるため、在日コリアンの人の中には通称名を使う人もいる。

２　ヘイトスピーチ・街頭宣伝について

2012～15年にかけて、平均して一日に１回のヘイトスピーチ・街頭宣伝が行われている。

聞くに耐えないような罵倒言葉を在日コリアンの人に浴びせる→時に暴力座他になることも。

だが、大阪市では平成28年７月１日から（全国よりも半年早い）ヘイトスピーチを制限する条例が全面施行され、問題は解消しつつある（デモの時、警察が市民の方ではなく、デモ隊の方に向くなど。）。

デモ隊の中には10代の人もいる。また、デモ隊は地元の人ではなく、ほかの地域の人が在日コリアンの多い生野に出向く。歴史的な問題に不満を持つ人が多い。

最近はカウンターと呼ばれる、ヘイトスピーチに対抗する勢力も現れている。

３　所感

まず、日本で生まれて、日本で育った人でも、日本国籍でないだけで人権が制限されることに驚いた。文さんは日本生まれ、日本育ちで配偶者も日本人なのにも関わらず、日本人より厳重な身元確認をされるようだ。

また、ヘイトスピーチがどのように行われ、どれほどひどいものか、ということが始めて分かった。文さんがおっしゃったように、ヘイトスピーチを行う人々は在日コリアンを同じ人間だと思っておらず、「日本から出ていけ」など心無い発言が多く見られた。そのような発言をする人の中には私たちと同い年ほどの少女が一人いた。その人も大人に混じってヘイトスピーチをしていたのを見て、そのような教育をしてきたその人の親に強い憤りを覚えた。日本はヘイトスピーチを制限する法律を全国的に作るべきだ。

「文公輝さんの講義を聴いて」

１年　今田莉彩

はじめに

今回の巡検では、在日コリアンの文公輝さんのお話を伺った。彼の講義を通して、日本に住む外国人や在日コリアンについて、また差別の現状と解決策について、学んだこと、考えたことを示していこうと思う。

１　日本に住む外国人

現在、日本の人口の1.7%を外国籍の人が占めている。最も多いのが中国籍の人々で、韓国籍、フィリピン籍と続く。彼らの在留資格は様々で、永住者をはじめ、特別永住者、定住者、日本人・永住者の配偶者、などが主なものだ。

日本に在住する韓国・朝鮮籍の人は、ほとんどが通名（日本名）を名乗っている。通名は、植民地時代から続いており、民族名の漢字の一部を用いている。これによって日本人と区別がつきにくくなるのだ。韓国・朝鮮出身であることは、日本ではハンデになり、誰にも打ち明けることができないと考える人も多いため、彼らは通名を使って自分が韓国・朝鮮人であることを隠そうとするのだそうだ。

２　外国人の比率に関するデータ：全国と大阪府の比較

日本にいる外国人の中で、何らかの在留資格を持つ人は、全体の

60%弱であり、大阪府では80%弱である。また、大阪府で暮らす外国籍の人は43人に１人で、そのほとんどが韓国・朝鮮人だ。彼らのうち特別永住者は50%だそうだ。特別永住者とは、朝鮮・台湾出身者、またはその子孫で、1945年９月３日までに日本に住んでいた人のことである。

さらに、現在のグローバル社会では、国際結婚をする人が増加してきている。全国では30組に１組が国際結婚の夫婦である。配偶者はやはり中国、韓国、フィリピン人が多い。一方、大阪府は、26組に１組の割合だそうだ。また、全国でおよそ50人に1人、大阪府では36～７人に１人が、日本人と外国人との間の子供（ミックスルーツ）である。ちなみに今回訪れた生野区では、５人に１人は韓国・朝鮮籍を持ち、地元の小学校に通っている韓国・朝鮮人は、ミックスルーツを含めて全校生徒の８割にのぼるという。

では、なぜ大阪にはこんなにも韓国・朝鮮人が多いのだろうか。戦前、大阪は東京以上に人口が多く、工業も発展していた。さらに、交通の便もよかったため、彼らにとっては、東京よりも大阪の方が朝鮮半島から来やすい場所であった。これらの理由で、大阪にたくさんの韓国・朝鮮人が移り住んだ。

３　外国人に対する差別の現状

現在日本では、外国人に対しての差別的言動が後を絶たない。ヘイトスピーチや国籍条項、アパートの入居制限など、多くの差別が彼らを苦しめている。

今回の講義の中ではヘイトスピーチが話題にのぼった。主に在日コリアンに対する名誉毀損、脅迫などを目的として、週末に関東、近畿、中部地方などで同時多発しているらしい。名古屋市でも、栄などで行われているという。

このようなスピーチを行う人の多くは地元に住んでおらず、歴史問題などを発端に嫌韓心を抱き、それを日本に住む在日コリアンにぶつけている。実際に行われたヘイトスピーチの動画を見せて頂いたが、中学生でさえも、同じ人間に向かっての発言とは思えない言葉を吐いていた。中にはこれを「表現の自由」という人もいるが、このスピーチはあからさまな差別であり、在日コリアンの人間としての尊厳を否定するものである。

他にも、外国人への差別の例として、国籍条項が挙げられる。県庁や市役所、町村役場に就職する際の条件の中によく見られる、「日本国籍を有するもの」という文言がそれだ。国籍で人を区別するという、日本人の根底にある精神が垣間見える。まだ国籍条項を撤廃していない都道府県は38にものぼる。また、1481の市区町村でも未だ撤廃されていない。ちなみに大阪府、神奈川県、愛知県は100%撤廃済みである。

また、アパート等に入居するにも差別がつきまとう。もっとも、生野区のアパートは立地条件が悪いため、差別はないという。

さらに、在日コリアンは、「差別がいやなら、帰化すればいいではないか」という言葉にも苦しめられている。実際のところは、日本国籍を取るには多大な費用がかかるため、取得しない外国人も多い。そのうえ、在日コリアンは「国籍」をとても繊細で大切なものと考えており、それによって祖先や家族、故郷とつながっているという安心感を得ているそうだ。このことを認識しない人々の軽率な発言に、多くの在日コリアンが心を痛めているのだ。

４　差別の原因と克服策

このような状況を引き起こした原因として考えられることは、日本人は思想の根底に、あるいは社会の風潮として、「日本人と外国人は異なる」という概念を持っていることだ。また歴史問題などに対する認識の違いから、異なる考えの外国人を嫌うという傾向も存在している。そしてこのような考え方が誰にも訂正されないまま、次の世代へと受け継がれていってしまっている。ヘイトスピーチの中学生にしても、小さいころから親に過激な思想を教え込まれていたために、それに疑問を抱くことなく信じ続けているに違いない。

では、現在の社会から差別をなくしていくためには、何が必要なのだろうか。

私は、互いの文化を理解し合い、「一人の人間」として外国人と接していくことが最も重要だと考える。また、そのために、多文化理解のための教育や、差別撤廃のための活動を増やしていくべきだと思う。

実際、生野区の商店街の人はこう言っていたそうだ。

「生野区では、日本人と韓国・朝鮮人はずっと共生してきた。もし彼らがいなかったら、この商店街は成り立っていない。」

この発言には、外国人を同じ立場で見ており、共に生きていこうとする姿勢がよく表れていると思う。これこそが現在の社会に必要な姿勢なのではないだろうか。

また、教育に関しては、異なる文化を持つ人と交流する機会を増やし、「外国人」という概念を取り除き、一人の人間として接することができるようにすると良いと思う。私も先日外国の方と話す機会があったが、「彼は外国人だ」ということよりも、「一人の人間だ」という意識の方が勝っていたように感じる。こうした個人レベルの交流を積み重ねていくことで、社会全体の風潮を変えていくことができるかもしれない。

条例については、大阪市で７月１日に「大阪市ヘイトスピーチへの対処に関する条例」が全面施行された。これは、憎悪からくる差別的表現であるヘイトスピーチを取り締まるための条例であり、「ヘイトスピーチ」の定義に抵触する行為があった場合、スピーチを行った個人や団体の名前を市が公表するという内容のものである。この条例ができたことで、変化した点があるという。それは、警察の警備が強化されたことだ。従来は、スピーチをする者を守るようにして、彼らに背を向けて警察が歩いていたのが、現在ではスピーチをする者のほうを向いて警備するようになった。また、スピーチに対する市民抗議を制止することもなくなった。このような取り組みを続けていくことで、差別は減少していくだろうと考えられる。

５　まとめ

今回の講義を通して、私は真の多文化理解・共生について今まで以上に考えさせられた。その実現のためには、まずは一個人として相手を見ること、正しい知識を身につけること、そして社会全体で、差別を抑制する活動を増やしていくことが重要だと感じた。

近年多くの外国人観光客が日本を訪れている。その数は2020年の東京五輪開催に向けてさらに増えるだろう。私たちはそのような一時的な訪問者だけに目を向けがちだが、すでに日本には「外国人」が多く暮らしており、彼らは様々な場面で差別に苦しんでいる。私たちが今優先すべきことは、彼らが直面している問題を解決するために努力することではないだろうか。

「在日韓国人との共生」

１年　豊田優里

大阪市生野区には、在日コリアンが多く住んでいる。そのうちの一人である、文公輝さんのお話を伺った。その中で印象に残ったことが３つある。

一つ目が「帰化すればいいんじゃない？」と言うことについてだ。そう言われるととても不快に感じるということであった。帰化することは、書類を書くために専門の人を雇ったり、平日に何度も面談を受けたりしなければならなくとても大変なことで、それが面倒で帰化するのをあきらめる人もいるという。しかしそれ以前に、国籍を通じて日本の祖先とつながっているため、そのつながりを断ちたくない人が多いそうだ。私たちがよく考えずに何げなく言った一言が相手のことを傷つけてしまうことに改めて気付かされた。

二つ目は、名前についてだ。在日コリアンの方々が、日本で暮らしやすいように日本名を付けるということに驚いた。通称としてではなく、契約書などでも正式に使えるということを初めて知り、とてもいい制度だと思った。そして、「朴」を「木下」などと変えることが面白いと感じた。

三つ目は、ヘイトスピーチについてだ。あの映像にはショックを受けた。ただ、その後読んだある本にも全く同じ映像の説明があったため、あの映像のものが一番ひどい方ではあるらしい。同じ人間として、あのように大声で堂々と、悪くない人の悪口を言っていることをとても恥ずかしいと感じた。けれども、もっと怖いことがある。それは、あの映像が韓国のメディアで大きく報道され、韓国で「日本全てがそうである」と勘違いされることだ。そのように勘違いされたら、反日の感情が燃え上がっても無理はない。ヘイトスピーチのようなものを阻止していきたいと思う。

相手に対して興味を持ち、気持ちを考えることが共生のためには必

須であると思う。

「在日外国人との共生ー文公輝さんの講義をきいてー」

１年　廣澤玲萌

今日、日本では、“グローバル化”という言葉が広く浸透し、街中で働く外国人を見かけることも珍しくなくなった。しかし、異文化共生の実現という点では、日本は海外諸国に比べてまだまだ遅れている。法務省によると、日本在留外国人は約210万人（2014年６月末時点）。日本の総人口に占める在留外国人の割合は約1.7％であり、これは世界195ヶ国中151位と低い水準にある。（ちなみに愛知県は2.162％、東京に次いで全国２位）豊かで治安がいい国であるはずの日本になかなか外国人が増えないということは、ここは彼らにとって住みにくさを抱えているのではないだろうか。私たちが在日外国人の人々と共生するためにはどうすればいいのか。在日コリアン3世である、文公輝さんの講義で学んだこととともに考えてみる。

文さんは日本生まれ日本育ちであるが、韓国籍であり、“特別永住者”という区分で日本での永住権を持つ。特別永住者というのは、朝鮮半島や台湾の出身で、終戦によって日本の植民地支配から解放され、日本籍でなくなった人とその子孫である。流暢な日本語を話し、ほとんどが日本名を使っているので、その人が在日コリアンであるということは言われないとわからない。そんなふうに日本社会に完全に溶け込んでいても、在日コリアンの人々は就職、結婚などで未だ日本人とは違う扱いを受ける。朝鮮人学校への脅迫の電話や生徒への暴言なども絶えない。在日コリアンの人々は、日本で暮らして久しくなるにもかかわらず、差別と偏見に悩まされ続けているというのだ。

一つの国が外国人移民を受け入れていくためには、二つの改革が必要だ。一つ目は、人の意識の改革である。移民と共生するには、直接触れ合う人々が、それぞれの多様性を広く受け入れていくことが最重要である。だが日本では、多文化理解についての学校教育が十分ではなく、外国人に実際に会う機会も少ない。そのため、ひとびとをイメージで染められた民族ごとのフィルターを通して見てしまうのだ。

人の意識が受け入れの障壁となっている例が、いま、もっともHOTな話題にある。ここ最近、アメリカ大統領選挙や、イギリスのEU離脱に関する国民投票など、世界を動かす選挙がたくさん報道されている。そこで、どの国でも大きな争点になるようになった話題、それがまさに、外国人移民の問題である。移民を多く受け入れている欧米諸国では、勃発するテロへの恐怖や経済面などから、移民受け入れに反対する政治勢力が多くの支持を集めている。現在のアメリカ大統領候補・トランプ氏は、テロ犯にイスラム教徒が多いのを理由にイスラム教徒の入国禁止を掲げた。これは全てのイスラム教徒は犯罪者だと言っているようなものである。これも前述した日本での在日コリアン差別と同じように、目の前の外国人を自分の中のその民族に対する固定概念でみてしまっている結果である。そういった意識の改革には、異文化の情報源となるメディアが、より公正でそのままの情報を伝えていくことがまず大事である。そして異文化と触れ合う機会を増やしていくことによって、頭で知って、体で感じる、間接的にも、直接的にも異文化に触れることが必要であると私は思っている。

二つ目が、国や地方自治体単位での、制度の改革である。日本でもついこの間、ヘイトスピーチ対策法が成立し、在日コリアンのひとびとをはじめとする外国人差別をなくすために動き始めた。が、外国人移民が日本に来てぶち当たる壁は人々の理解の壁だけではない。言語、宗教、お金、住まい…移民が自分で解決するのは難しいたくさんの課題を、より良い方向に持っていけるよう国が制度で支援することが必要なのである。

例えば、一部の公務員職に適用される国籍条項。外国籍の人は、たとえ日本で生まれ育っていても地方公務員になることができなかったが、これを撤廃する自治体が増えてきている。外国人の小学校の先生が、子どもたちに自分の国や文化について話しているところもある。

日本は「外国人研修・技能実習生」という名前で外国人労働者を受け入れているが、実態は国際協力の目的から外れ、最低賃金にほど遠い低賃金や劣悪な労働条件の下で働かせるなど、国際的にも人権侵害の深刻なケースとして認識されている。

研修生の待遇を定めた法律はあるにはあるのだが、ほとんど守られていない。その理由は、研修生の多くが、日本語が不自由でないことにある。違法な労働に従事させられていても、研修生が違法であることに気付かなかったり、どうしたらよいかわからず、声をあげられないままいることも多い。雇う側への監視や、規則に従わなかった場合の罰則の強化などをしていくことが急務であると思われる。外国人移民が暮らしやすくなるための制度をもっと整備していくべきである。

在日外国人の人々と共生していくために私たちができることはなんだろうか。自分の住む街にも、外国人がきっといるであろう。そのひとがたとえ自分とは違う文化を持っていても、相手の事を理解しようとしてみることが大切だと私は思う。一度、民族という概念を捨てて、一人の人間として、接してみてはどうだろうか。

＜D　生野コリアタウン＞

「在日コリアンの生活」

２年　橋詰貴行

生野コリアンタウンを見て、在日コリアンの方々の生活は、至って普通であり、日本人と変わらないと思う。生野コリアンタウンでは、主に商店を経営している方がほとんどであり、チマチョゴリ、キムチ、トッポギ等の本場韓国の文化や味を忠実に再現している。それを求めるために日本のあらゆる所に住んでいた在日コリアンの方々が移り住みさらに巨大な在日コリアンコミュニティを作るという事実もある。また、それにより協調性が必然的に作り上げられコミュニティ内での仲がよくなる。私が目にしたのは、向かいの店同士、隣の店同士の従業員がとても仲良く喋っていたことである。さらに、地元の日本人とも仲良く喋っていた。今日は天気がいいねといったごく普通な日常会話である。そうなることで、コリアンタウンは、ただ単に物を買いにくる場としてではなく、地域の憩いの場としても利用され、より活性化する。そして、二次的に在日コリアンの収入や生活、精神が安定する。ふと顧みると、サラリーマン姿の在日コリアンを見かけることはなかった。場所が場所だからということもあるかもしれないが、もしまだ社会的差別などが存在するせいで一般企業に就職できないなどがあれば許されない。現代日本は、あまりにも急激な社会の変化により日本古来から存在していたいい文化などを忘れ去っているのかもしれない。そんなことも気づかせてくれるのが生野コリアンタウンであった。我々も在日コリアンの方々から学ぶべきものがあるのではないか。

「在日コリアンの生活」

１年　工藤文那

その街の商店街は、韓国の「におい」で溢れていた。キムチやトッポッキに使われる香辛料のにおいが、私の鼻を刺激した。

ここは生野コリアタウン。在日コリアンの人々が多数居住している地区である。今回の見学で、今まで自分が知らなかった「コリアタウン」の実態を目にすることができた。また、実際に韓国へ訪れることに比べるとほんの少しではあるけれど、韓国の文化に触れることができたと感じる。

マチを観察して、気づいた点が３つある。

１つ目は、店の外装が日本と異なる点だ。日本の商店街と比較すると、生野コリアタウンに並ぶ店はビビット系の色を使い、それぞれの店がマチに活気をもたらしていた。中でも気になったのは、軒や屋根に使われるビニールを青くしている店が多く見られたことだ。青は元来食欲減退色とされ、日本の食料品店や屋台では、まず見られない色である。なぜ日本と韓国の間でそのような違いが見られるのか、疑問に思った。そこで、ある店の従業員の方にお話を伺った。「なぜ軒に青を用いるのか」という質問に対して、返ってきた理由は、「店を出たときに美味しそうに見えるから」というものだった。食べ歩きが主流の生野コリアタウンでは、商品を買って店を出てから、歩きながら

食べるということが多い。それ故、店を出てから美味しそうに見えることを求めて、店の軒では青を使い、通りに出たときに相対的に美味しそうに見えるように演出しているのだそうだ。実際、韓国現地の屋台でもこの演出を施している店は多くみられるようだ。韓国巡検の際には、ぜひ観察してみてほしい。

２つ目は、値札の表記が日本と異なる点だ。一般的に日本では、「100円」というように表記された値札を商品に貼ることが多いのだが、コリアタウンでは、「100ウォン」というように表記されている商品も少なからず見られた。ここで、上記のように表記された値札がついている商品に共通点を見出すことができた。それは、「購入者」である。日本人、観光客向けの商品には「円」を、韓国人向けの商品には「ウォン」を用いているのである。例としては、キムチを作る際に使用する大量の香辛料やトッポッキの素となる韓国の餅「トック」などが挙げられる。

３つ目は、店同士で商品を売買している点だ。「ある店から調達したトックを調理して、二軒隣の自分の店でトッポッキとして店頭に並べる」というように、店同士の買い物が大変盛んであった。観察していて、さらに気づいたのは、その中に日本人も混じっているということだ。多くは韓国人の店主、従業員同士が買い物をしているのだが、中には、近くの別の商店街からわざわざコリアタウンに、材料を調達しに来る日本人の姿もあり、主に輸入物の食品を購入する姿が多く見られた。このような場は、コミュニケーションを図ることができる重要な場であると私は思う。韓国人も日本人も、地域内で支え合い、協力している。やはり最初は、お互いのビジネスのためだけにコミュニケーションをとっていたのかもしれないが、今となっては、まるで家族のようにつながっている。

今回の見学を通して、生野コリアタウンの生活文化に触れることができた。日本と異なる点や同じ点、普段、私たちが目にすることのない様子を観察して、学ぶことが多かったように思う。中でも、前述した3つ目の気づいた点は、「多文化社会」の形成において、かなり重要なウェイトを占めるのではないだろうか。ある地域に住む外国人が独自のコミュニティを形成し、そこに現地の人間が加わることで、そこでの生活文化は混ざり合い、より良いものが形成される。そのような流れを作ることで、日本に住む外国人の人々の生活も、そして私たち日本人の生活も、さらに豊かになるのではないだろうか。もちろん、そのためにはまだまだ乗り越えなければならない壁が多い。しかし、一人一人の心構えで、そのような流れを作ることは可能である。今後、グローバル社会の拡大に向けて、日本が安定した地位につくためにも、私たち自身が積極的に考えなければならない課題が、今回の見学を通してまた新たにひとつ見つかった。

「在日コリアンの生活ーコリアンタウンを見学してー」

１年　佐々木もなみ

１　ワークシートより

・店員の方のちょっとした会話が韓国語で行われている事があり、韓国語が多く聞こえてきた。
・韓国人の集まり、コミュニティなどができていた。
・コリアンタウンで働く人たちの憩いの場みたいなところが所々にあった。
・日本語を理解できる人と、あまり出来ない人とがいた。
・肉屋やなどでは普通のスーパーマーケットでは手に入らないようなもの（豚の足や鳥1匹など）が売っていた。
・観光客に向けてというよりは、在日コリアン向けの雰囲気があった。
・ほとんどのお店で、キムチまたはキンパが売っていた。
・アジア系の外国人が多く、よりどころになっているように感じた。
・コリアンタウン全体が個々に分かれていず、まとまって一体感があるように思った。

２　感想

今回、初めてコリアンタウンに行って、本当に韓国の地元の市場に行ったように感じました。韓国の伝統的な衣装である、チョゴリ、色鮮やかな布、キムチ、キンパ、トッポギなど韓国のものばかり（当たり前かもしれませんが）だったからです。

私は、中学の修学旅行で横浜中華街へ行きました。なので、その韓国バージョンかな?と想像していました。中華街にはコンビニエンスストアが、お店とお店の間にあったり、お土産専用のお店があったり、日本の食べ物なども多く売っていました。しかし、コリアタウンには日本ののものが売っている専用のお店はなく、私たち、観光客向け（専用）のお店というのもなかったように思いました。

初日の夕方、コリアンタウンを通った時、お店の隣同士の方々の仲がとてもいいなあと思っていました。また、在日コリアンの方は日本人に対して物申したい事がたくさんあると思います。しかし、とても親切で、生野での異文化共生を実感しました。ただ、日本人による在日コリアンの方への差別が未だに残っていると知って、知らなかった頃とは違う視点からもコリアンタウンを見学する事が出来たと思います。

「在日コリアンの生活」

１年　小澤響子

私達が生野コリアンタウンを訪れたのは日曜日の昼前。だんだんと買い物客が集まってきていたが、日本人はあまり多くいなかった。

１　街の様子

立ち並ぶ店を見てみると、キムチの店と韓流アイドルのグッズ専門店が多いことに気がついた。

キムチの店が多いのは、それだけ需要が多いからだろう。 韓国では自分の家でキムチを作ることが多いそうだが、日本に住むとキムチの材料を揃えるのが簡単でないため、専門店で日常的に購入しているのだと思う。

韓流アイドルのグッズ専門店が多いのは、それが日本で広く受け入れられているためだと思う。中に入ると、客のほとんどが日本人である。韓流アイドル、韓流ドラマが日韓の文化交流の面で大きな役割を果たしているのは間違いない。

２　コリアンタウンの人々

コリアンタウンでは、近くの店の人同士で何かを相談しているなど、在日コリアン同士の仲が良いと感じた。そういった信頼関係の上でコリアンタウンが成り立っているのだと思う。在日コリアンのコミュニティーは彼らの大きな心の支えになっているのだ。在日コリアンの少ない場所でも、こうしたコミュニティーを作る手伝いを、日本人ができれば良いと思った。

タウンの中で、「日本人ですか」「どこから来たの」と聞かれることが多く、コリアンタウンを訪れる日本人の少なさがうかがえた。また、同じ学校に韓国人がいるか、彼らをどう思っているかを聞くなど、彼らは自分と同じ立場の人のことを心配していた。自身が差別された被害体験から、私達にも偏った先入観だけで行動してほしくないのだと思う。彼らの心のデリケートな部分に触れた気がした。

幾つかのお店の人と話したが、皆日本語が流暢で驚いた。それに、とても気さくである。彼らは日本で生きていくために、初対面でも壁を作らないというスキルを身につけたのだろう。私も彼らと話していて、だんだん”外国人”に対する警戒心がほぐれていった。そして、彼らとなら上手くやっていけると思った。

中華街というと横浜、神戸の中華街の様子などをパッと思いつく人が多いと思うが、コリアンタウンと聞いて場所、様子をすぐに思いつく人はあまりいないのではないだろうか。私自身、コリアンタウンという言葉を聞いたこともなかった。中国人と韓国人ではまだまだ日本人との関わりの深さに差があるのだ。日本人向けにコリアンタウンをリニューアルするなど、日韓の交流に意欲的な在日コリアンの姿を見て、日本人の側でも彼らに歩み寄って行くべきだと感じた。

「コリアンタウンを訪れて」

１年　青木優花

私がコリアンタウンを訪れたことによって考えた在日韓国人の暮らしは主に３つあります。

１つ目は、コリアンタウンは日本の商店街と比べると、商店街としての繋がりが強いということです。私は、コリアンタウンを歩いている時に、店番をしながら隣の店の人と仲良く話す姿を多く見ました。これは、在日韓国人というコミュニティとしての繋がりの強さを表していると思いました。また、お互いがコミュニケーションを取ることで、日本で生活する上で必要な情報を交換することができるからだと思いました。

２つ目は、商店街で売られている商品の品揃えです。例えば、肉屋の品揃えを考えてみると、日本のスーパーでは売られていないような豚足やその他の部位などがどの肉屋でも揃えられていました。その他にも、色んな野菜の種類のキムチや、韓国製の美容用品など、日本ではなかなか手に入らない商品がたくさん売られていました。私が特に驚いたのは、チマ・チョゴリなどの民族衣装が売られていたことです。日本の商店街や中華街は主に食品を売る店や飲食店で形成されていて、民族衣装などを売る店はあまりありません。売られているということは需要があるということであり、日本に住んでいながらも韓国の文化を大切にしているということが感じられました。また、自国の文化を在日韓国人全体で守り続けていこうとしているところに、彼らの自国への誇りを感じました。

３つ目は、客層の違いです。日本の商店街や中華街の客層は観光客がメインですが、コリアンタウンでは在日韓国人の人々が買い物をしている様子をたくさん見ることができました。また、自転車でコリアンタウン内を通っていく人のほとんどは在日韓国人の人々であり、コリアンタウンは観光名所としてだけではなく、在日韓国人の人々が生活していく上でなくてはならない場所なのだと思いました。

私は、コリアンタウンを訪れてみて、ムンさんもおっしゃっていたように、日本で暮らしていくには在日韓国人としての繋がりがいかに重要かということを感じることができました。彼らは自分たちで自分たちがより住みやすいようにと、今まで協力してきたのだと思います。そのようにして出来上がったのが、私が訪れたコリアンタウンであったり、コリアンタウンに住む人々の強い繋がりなのだと思います。また、私はコリアンタウンを訪れた後、私なら他国で住みやすいようにするにはどうすればいいかと考えてみました。私が真っ先に思い浮かんだのは、その国の文化に合わせることやその国の食事に慣れることでした。しかし、彼らは自国の食品や民族衣装を自分たちの手で日本にいながら手に入れ、自国の文化を大切にしながら生活しています。そしてもちろん、日本の文化も理解して順応しながら生活しています。これは簡単なことではありません。そんな中で日本で長く暮らしている彼らに対して、ヘイトスピーチなどの行為をしている私たちの仲間にどのように働きかけていくかを考えていく必要があると思います。

「在日コリアンの生活」

２年　渡邉美月

生野コリアタウンを散策して思ったことは、「人があたたかい」ということだ。

見学中に、１人のお婆さんを見かけた。杖をつきながら、おぼつかない足取りで歩くお婆さん。普通に街中でもそのような老人はよく見かけるので、私は気にもとめなかった。しかし、お店の人は違った。「おばあちゃん、大丈夫？？」と声をかけ、「足元気をつけてね。」と自分の店の前をお婆さんの身体を支えながらゆっくりゆっくり歩いていた。それだけでも驚いたが、さらに、隣のお店の人が「おばあちゃん、こんにちは」と引き続きお婆さんを支えながら歩き始めたのだ。私はこの光景をみて感動した。なんて素敵な人達なんだ。なんて素敵な街なんだと思った。

お店の人達は、私達に対しても親切だった。おまけもたくさんしてくれたし、何よりニコニコしながらお話してくれた。「日本人だから」と差別されることは全くなく、分け隔てなく接してくれた。狭く雑然として、お世話にも綺麗とは言い難い街だが、そこで暮らしている人たちは、お互い支えあいながらいきいきと暮らしている。人と人とのつながりを大切にする。私には、日本人よりあたたかい人達だと感じられた。

しかし、日本では「嫌韓」という言葉があるように、彼らを忌み嫌う人達がいる。在日コリアンに対する差別がまだ存在する。どれだけ頑張って勉強しても、就職先がなかったり、お金に困っていても「どうせ朝鮮に帰るんでしょ」とお金を借りることができなかったり。文さんのお話でたくさんの差別の例をきいた。　ひどいな、まだそんなことがあるんだ、と思っていたが、在日の人達に対する差別は私の身近な所でも存在していた。

私の家の近くに朝鮮人学校がある。今はブレザーのだが、昔はチマチョゴリの制服で、よく街でチマチョゴリをきた在日の子達を見かけた。　小学生の時、母と車に乗っていると、チマチョゴリを着た彼女たちが歩いていた。私はそのチマチョゴリがうらやましくて、母に「あの学校に行きたいな」と彼女らを見ながら気持ちで言ってみた。すると母は「あれはチョン人しか入れないよ。あんま見るもんじゃありません。」と言われた。小学校でも、朝鮮人学校に近寄らないように注意された記憶がある。確かに私の周りでも差別があったのだ。今まで差別はどこか他人事だと思ってしまっていたが、そんなことは決してなかった。この問題はまさに私達が当事者なのだ。

SGHに参加させていただくようになってから、家族と韓国について話す機会が増えた。幼い時からの教育は、子供に絶大な影響を与える。今でこそ差別はいけないというが、母が子供の時代は、大人達の差別は顕著であったという。「チョン人とは目をあわせちゃいけない。」と散々言われてて育った私の祖父母や母も、在日コリアンの人達に対して良い印象を持っていない。

旭丘にも在日の子はいる。実際、私の友達にも何人かいる。母たちの話を聞くと、私は友達が否定され、けなされているようで悲しくて、悔しくて、毎回意見が衝突する。母たちにも在日の友達や知り合いがいたら、きっと私のような感情を抱くだろう。だが、「在日だから」と自分たちと線引きをして生きてきた母たちには、そんな友達はいない。

「在日だから」とひとくくりにして、「在日だから」と嫌悪する。そんな日本人たちより、生野コリアタウンに暮らす在日の人達の方が、人情に溢れていて、よっぽど人間らしい。嫌韓派の者は一度、生野に行って欲しい。きっとお店の人達は自分たちのように国籍で差別はしない。分け隔てなく親切に接してくれるであろう。そして、思い知って欲しい。自分たちの考えがいかに幼稚で低俗であることを。

近年、少しずつではあるが、在日コリアンに対する差別は減少してきている。しかし、まだまだ差別は存在する。差別をなくすために、手っ取り早い手段は「在日の人とかかわる」ことだ。いつまでも線引きをして「日本国籍」の枠に囚われているようでは何も進まない。国籍の枠に囚われず、その人個人と付き合っていけば、きっと「在日」差別が悲しいことだと感じられるようになるであろう。

「在日コリアンの生活」

１年　藤原巧斗

生野コリアンタウンを訪れ、在日コリアンの生活を間近に見学した。

まず気づいたことは、在日コリアンの人数の多さである。巡っていてたくさんの店が並んでいたが営業していた人のほとんどが在日コリアン人のように思えた。また、数少ない日本人だと思った人ももしかしたら、在日コリアンだったのかもしれない。なぜこの場所にコリアンの人が増えていったのだろうか。

それはそもそも大阪に住んでいる外国籍住民のおよそ６割もの人が在日コリアンであり47都道府県で一番多いのが影響しているのだろう。また、かつての大阪は東京よりも発展していて人が集まりやすかったのと、朝鮮半島との交通の便が良かったこともあるのだろう（参考：文公輝さんの講義）。さらに調べたところ65歳以上の在日コリアンは人口１万にあたり129.27人もおり周りと比べ圧倒的に多いことが分かった（参考：都道府県別統計とランキングでみる県民性）。これは、植民地時代日本に連れてこられた人が帰ることが難し

くなり日本に残った人が多かったためだと考える。また、川の氾濫が多かったことで現コリアンタウンのアパート等の値段が安かったために当時差別されていたコリアン人が集まりやすかったというのも理由の一つであろう。このように在日コリアンの多いこの街だがそのためだろうか。コミュニティが形成されておりそれはとても強固なものだと感じた。差別に屈さず、日々を楽しんでいる姿は大変素晴らしく思いヘイトスピーチ等の差別行為を行っている人はこのことをきちんと考えてほしいものである。

もう一つ気づいたことがある。それは日本とコリアンとの食文化の違いだ。味が濃かったり辛かったりするものがとても目立っていた。朝鮮半島と日本列島の距離は近いのにもかかわらず、これほどまでに違うのは大変驚いた。

コリアンタウンの見学を通して今回分かったことそれはたくさんあったが、僕は文化の違いがとても興味を持った。日本と朝鮮とでは民族が違うので文化が違うのは当たり前だろう。しかし同じ日本に住んでいる同士もっと彼らのことを理解して、彼らのコミュニティももっと受け入れられるようになればと思う。

＜E　ピースおおさか＞

「ピースおおさかを見学して」

1年　玉田洋一朗

大阪平和学習センター・ピースおおさかは2015年４月30日にリニューアルオープンし、展示の内容ががらりと変わった。以前の展示では“加害者としての日本”を展示して、いわゆる『南京大虐殺』についても大きくスペースをとっていた。また、『従軍慰安婦』についての展示もあった。しかし、リニューアル後は『南京大虐殺』についての展示は『南京事件』という言葉だけになり、『従軍慰安婦』の展示も一切なくなり、さらには『侵略』という言葉が展示から消えた。展示の方向性も“加害者としての日本”から“大阪空襲のむごさ”というような“被害者としての日本“についてのものに変わった。

このリニューアルについて当時の松井大阪府知事は、「アメリカがやりすぎだよねということを言いたい。日本の敗戦がほぼ見えているなかで無差別に焼夷弾を落とす必要はなかったのではないか。南京大虐殺や従軍慰安婦については様々な見解があるので、それを片方によらせる（展示内容を左翼側に寄せていたという意味だと思われる）というのは良くないと思う。」などと述べ、記者からの「アジアへの侵略やアジアでの戦争の部分の説明が縮小しているのではないか」という質問に対して、「縮小はしていない。事実に基づいたものを展示している。感情をあおるのが目的ではなく、事実に基づいた史料などを客観的に、冷静にみれるように展示している。」と述べた。

果たして、実際にあったことをから目をそらすような展示は事実に基づいた展示と言えるのだろうか。第二次世界大戦における日本軍の行為（『南京大虐殺・南京事件』や『従軍慰安婦』など）の規模に対する見解は様々だが、その行為が実際にあったということは事実としてあるわけであるから、それを認め、和解やその一歩先へ向けて進んでいく必要があるはずだ。なのに、事実としての存在から否定してしまっては、何も始まらない。と言っても、「第二次世界大戦ですべて悪かったのは日本だった。」などと自虐的な教育をするのもこれからの日本を担っていく子どもたちのためによくない。日本は戦争の末期に度々ひどい目にあっている（全国各地への無差別的な空襲や広島・長崎への原爆投下、ソ連軍によるシベリア抑留、沖縄戦など）ことも決して忘れてはならない。

二度と起こしてはならない先の戦争は、右にも左にも偏ることのない普遍的事実を、事実に基づいた史料を使いながら加害者としての面と、被害者としての面の比重が等しくなるようにして後世に伝えていくべきではないだろうか。

「ピースおおさかを訪れて　～リニューアルの意味～」

２年　金澤元泰

１　過去に訪れた戦争資料館について

今回の巡検では、戦争の資料館であるピースおおさかを訪れた。そこで、その特徴と存在意義について考えたい。その前にまず、比較・検討の資料とするべく、僕が以前訪れたことある資料館について述べたいと思う。

（1）ピースあいち

ピースあいちは、僕の家から歩いて行けるところにある戦争資料館である。コンビニとスーパーに挟まれた場所に位置し、真っ白できれいな佇まいはまるで民家か事務所のようである。地域の住民に向けたコンサートなどの催しも数多く開催される。僕が小学生のころ初めてピースあいちに入館したのも、その駐車場で行われていた子供向けの祭りに参加したのがきっかけであった。

そこで最も印象に残っているのが、戦中・戦後の象の話である。戦時中全国の動物園において、空襲で逃げ出さないように象を含む多くの猛獣が殺された。しかし、ほかの動物園の象がすべて殺されても、東山動物園では職員たちの懸命な努力で２頭の象が生き延びたのである。戦後、子ども達の象を見たいという請願に応え、「象列車」と呼ばれる列車で全国の子ども達を名古屋に集めたのであった。この話が何冊かの絵本を用いて紹介されていた。絵本ということで子どもも興味を持て、理解しやすい内容・展示である上に、大人が見ても戦争について深く考えさせられる内容であったと思う。常設展も同様であった。物品の資料や写真によってあまり歴史を知らない子どもが戦争について知ることもできれば、詳しいパネル展示で大人も新たな観点から戦争を見つめることもできる。

地域に密着していて、かつ門戸が老若男女に開かれている。このピースあいちによって、多くの人々が戦争について知り、考えることができるようになっている。

（2）大刀洗平和記念館・知覧特攻平和会館

これらは特攻の資料館である。まず目を引くのは、特攻に使われた兵器、特にゼロ戦などの航空機である。しかし順路を進んでいくと、特攻隊員の遺書が多く展示されるようになる。決して「行きたくない」や「帰りたい」といった言葉は書かれていない。ただこれらの遺書を書くとき、青年たちはどのような心情であったのか。それらを見て涙する人も少なくない。「語り部」の存在も重要で、どんな映像資料も彼らには敵わないように感じた。何人かの特攻隊員の飛び立つ前の姿を語ったり、彼らの遺書を読み上げたりする語り部たちの話は、まるで自分のことのように深く心に響いたからである。また屋外の、特攻に出る前に隊員が寝泊まりしていた宿舎は、飛び立つ前日に何を思ったかを、自分に置き換えて考えさせられる空間であった。

本人の心に思いを巡らせることでしか感じえない心情、現地でなければ体感できない臨場感が、これらの資料館の特色であった。

（3）遊就館（靖国神社付随の資料館）

靖国神社は「国家のために尊い命を捧げられた人々の御霊を慰め、その事績を永く後世に伝えることを目的に創建された神社」である（靖国神社ＨＰより）。遊就館のスタンスは靖国神社のそれを踏襲している。遊就館では、明治初期からの日本の戦争の歴史を淡々と振り返りつつ、遺品を多く展示している。それは軍国主義の名残や戦争美化ではなく、ただ純粋に国に命を捧げた英霊について紹介し、祀るという立場を貫いていた。その中で僕が感じたのは、亡くなった人々の熱い思いであった。国を、そして国の人々を守るため散った戦士たちを思うと自然と頭が下がる思いがした。そのように感じさせる展示も、それは戦争の美化ではなく一つの切り口であると思う。

（4）長崎原爆資料館

被曝地として異彩を放つこの資料館で僕の当時小学６年生の弟は動けなくなってしまった。こんなことがあったのか、という衝撃が彼を打ち抜いたのだ。彼はすでに学校で歴史を教わっていたのだが、教科書から学ぶものとは全く違うものだったという。資料館の前半で紹介される原爆による長崎の状況は彼にとって残酷なものであったのだろう。全体に薄暗く、悲惨な絵や写真、遺品が並んでいた。この資料館

は修学旅行で訪れられることが多いが、きっと時間は足りないだろう。時間を区切られずに、その悲劇を受け入れるまでじっくりと見て回り、噛みしめたいような深さを持つ展示であった。打って変わって後半は、核兵器のない平和な世界を希求するブースであった。部屋は明るく開放感がある。この資料館は、当時の日本軍やアメリカ軍をはじめ誰かを非難することなく、核兵器の廃絶と平和それのみを強く訴えているところに特色がある。そしてただの資料館にとどまらずに、平和な世界を求める一大拠点としての役割を果たしているように感じた。僕はこの資料館を出たとき、核兵器の恐ろしさを実感し、悲惨な過去を確かに受けとめながら、平和な未来を実現したいという意志をもった。

（5）ニューヨーク　9/11 Tribute Center

戦争の資料館ではないが、参考として9.11テロの資料館を取り上げたい。世界貿易センタービルの跡地にあり、いまだに残っている建物の基礎の中に作られた資料館である。コンクリートでできた、恐ろしくなるほど広く大きく薄暗い空間の中に、遺構・がれきが残っている。当時の状況を振り返るブースにも焼けた鉄骨や遺品が無造作に並び、その障壁には年表のように時系列に当日の状況が記載されている。がれきが映し出す当時の状況や恐怖と記述が語る詳細な情報が、多くのことを訴えかけてくる。中央部には犠牲になった人々の顔写真が並べられている。ほとんどがとてもいい笑顔の写真だった。そこにあった「生」を、「命」を思うと、胸が締め付けられた。

2　ピースおおさかについて

ではピースおおさかはどうか。近年リニューアルしたのでその前後両方について述べたい。

（1）リニューアル前について

リニューアル前は「加害の展示」で有名であったピースおおさか。日本が十五年戦争において朝鮮・中国・東南アジアでどのようなことをしてしまったのかを示す資料館だった。自国が過去に起こした罪を振り返ることは同じ過ちを繰り返さないために重要である。そのような資料館はほかにあまり存在せず重要な存在であった。

しかし市民団体による抗議などにより全面リニューアルを果たし、全く新しい資料館に生まれ変わった。

（2）リニューアル後について

【概説】

最初は明治以降の日本の戦争の歴史を大まかに映像と年表によって振り返るブースである。加害の展示は取り除かれ、ブース名も「世界中が戦争をしていた時代」となっている。

続いて、戦時下の暮らしについての展示である。当時の小学校の教室や住宅を模した展示や、赤紙をはじめとした当時の人々の様子を表す物品が並ぶ。

そして次のブースが目玉の大阪空襲である。爆弾の模型や焼けた鉄骨が展示場のいたるところに配置され、当時の様子をありありと伝える。プロジェクションマッピングや防空壕体験は当時の恐怖を再現していた。

最後のブースでは戦後を扱っていて、いかに大阪が復興したかを描き、最後に世界平和を希求している。

【比較】

最初の映像と年表のブースはほかの資料館に比べかなり簡素である。出来事の背景や具体的な数字などはすべて排され、教科書・資料集を基にしたような簡略な紹介になっている。

戦時下の暮らしのブースに関しては、非常に大阪を意識した作りになっている。先ほどと変わって、具体的な数字もあり、手も込んでいる。同じように地域を意識した資料館にピースあいちがあるが、ピースあいちは全体の戦争史が大きく扱われているため、ピースおおさかとは逆の構成であり、ピースおおさかの方がより地域を意識しているといえる。

空襲のブースは、9.11の資料館を彷彿とさせるような展示方法であった。ただそれらよりコンパクトであるがゆえに、ひとブースで出来事、背景、爆弾について、被害、証言等のすべてを見て回れるところが他と比べた長所であるといえる。しかし情報量は他より少ないのは否めない。

戦後のブースは、戦後の生活・戦後の大阪という面においては、まちも経済も人々の心も徐々に回復していった様子が細かく描かれていた。戦争の資料館においてここまでこの分野が充実していたところは他になかったと思う。

空襲のブースから戦後の平和のブースへもっていく方法は長崎と共通しているといえる。悲惨な過去を見せてから明るい未来を描くやり方は人々の心の反動を活用しており非常に効果的であると思う。

【良かったところ】

・コンパクトかつ簡素であるゆえに誰でも理解しやすい。

・地域に密着しており、郷土資料館的役割も一部担っている。身近であるため、どちらかというと誰にでも親しみのある内容であると思う。

・照明や陳列方法によりブースごとの雰囲気を変えていて、当時にのめりこむことができる。特に当時の生活や空襲の展示は訪れた人を当時に引きずり込む力があり、当時の状況を理解し考察する手助けになる。

・内容・深度が教科書・資料集に近いため、学生の学習にちょうど良い。上の長所と相まって、小学生・中学生に特に有効であると考える。

【物足りなかったところ】

・高校生の僕には情報量が少し物足りない。学術目的に利用するには範囲が狭い。

・大阪を重く扱う構成により、日本や旧日本軍の動きがほとんど見てとれない。「『世界中が』戦争をしていた時代」という記述も責任をはぐらかしているように取れなくもない。

・加害の展示の廃止は残念である。特異な存在としての価値が薄れたようにも感じた。

・オブジェなどは平和を強く訴えていた。しかし、「ピース」おおさかということで平和を希求する展示に期待していたが、少し物足りなさを感じた。

（3）考察

ピースおおさかのリニューアルを悪く言う人は多い。確かに物足りないところもあった。ではどうしてこのようなリニューアルをしたのだろうか。

戦争から70年以上が経ち、「日本が悪かった」という考え方やそれに関する事実は、近年の情報開示や中韓の動きも加担して、日本国内で理解が進んできているように感じる。このような現代において、もはや加害の歴史は周知の事実であり、近年の国際情勢を勘案しても敢えて資料館で取り上げる必要はないという判断をしたのではないだろうか。これからの時代は誰が責任を負うのかを追及するのではなく、人類共通の悲しい過去として戦争をとらえていくことになるだろう。オバマ大統領が広島で行ったスピーチがそのよい例である。軍や国といった視点で正当性や謝罪を述べるのではなく、人類という視点で過去の過ちと現状、そして未来への夢を語った。

戦争観はいまや客観的に、広い視野で見つめることで得られるものに変わろうとしているのかもしれない。国際的な犯人探しから、国際的なわだかまりの解消に向けて世界は動き始めている。そのための共通認識として、戦争観は国際的に統一されつつあるのではないか。そして現代を生きる僕たちには、そのために過去の事実を後世に残すことが求められている。

しかし、同時に現代は情報化社会であり、詳細な歴史の事実も、その時代を生きた人々の声すらもメディアやインターネットを通じて知ることができる時代になったのである。もはや資料館というアナログな方法では、それらに太刀打ちできなくなっている。とすると、資料館はただ詳細な情報を提供するだけでは優位性を発揮できない。

では新しいピースおおさかは何のために存在することになったのか。その対象は前にも少し述べたように、戦争に関して無垢な子どもに向けられているのではないのだろうか。どんなに大量で詳細な情報も受け取ろうとしない人の前では無意味である。戦争について知らない、つまり戦争観を持たない子どもが自らの中に戦争観を生み出すこと、そしてそこから彼らが新たに深く戦争について学び、思考すること。これらを助けようとしているのが、ピースおおさかなのだと思う。そのために情報は簡素で、親しみのある自分の地域にスポットライトが当てられているのではないか。

悲惨な歴史を知ることで、反戦・平和への意志を強く抱くことができるようになる。そのきっかけを提供しているのではないか。そし

て、自分の地域の歴史を知り、ベースとなる戦争観を抱くことが、世界的で客観的な視点を持つ前の段階として人生に生きてくる。そのための資料館なのではないか。そう考えるのである。

よって僕は、ピースおおさかは、世界の新しい戦争観のあり方と、そのために資料館がすべきことを的確に表す象徴として生まれ変わったのだと思う。

「ピース大阪を通して考える日本の戦争観」

２年　坂野水咲

ピース大阪は戦争の悲惨さと平和への願いを大阪から発信するために1991年に開館された戦争資料館である。以前は中国への侵略や南京大虐殺について多くの写真や残っている資料を使って加害者としての戦争をテーマとしたフロアもあったが、自虐的であるという指摘を受けて2015年に展示内容を大幅に変更し、リニューアルオープンした。

そして今回、私はピース大阪を訪れて、当時の資料が持つ圧倒的な迫力と、日本の戦争観やその教育のアンバランスさを実感した。

展示はABCD４つのゾーンに分かれておりそれぞれにテーマが設定されている（A：「昭和20年、大阪は焼き尽くされた」、B：「世界中が戦争をしていた時代」、C：「戦時下の大阪の暮らし」、D：「多くの犠牲を出し、焼け野原になった大阪」）。

展示の中心的な内容は、第二次世界大戦で大阪が受けた被害と戦時下の人々について、特に空襲についてのものだった。

A、Bゾーンの映像で観た戦争の経過や被害の全容、兵器という観点から戦争ととらえたりグラフによって死者数の凄まじさを訴える年表は時代の流れを理解しやすく小学生も訪れることを考えると導入としてはちょうどいいように感じた。しかしあくまでも小学校や中学校の教科書のまとめのような映像で、表面をなぞっただけの展示にも思えた部分もある。「世界中が」という言葉で日本の対外的な政策をその中に紛れ込ませ、目立たないようにしているということも否めない。

Cゾーンでは多くの資料が展示されていて戦争を急に身近に感じた。母親に当てた疎開児童の手紙には「早く、早く大きくなってあのにくき米英をたたきつぶしてやります」と書いてあり「大阪にはかへりたくありません」と強がっていた。それに対し母親は息子からの便りを喜びつつも「もったいないから便箋の裏にも書いてお国の紙を大事にしてくださいね（意訳）」「（兄父母の）三人への手紙を同じ封筒に入れて切手を節約してください」などと書かれておりどれだけ市民の生活に戦争が影を落としていたのか垣間見ることが出来た。

また、ある大尉の訃報や到底不可能な貯蓄を呼び掛けるポスターなど、戦時の生活の片鱗を感じられた。

Dゾーンに向かうスロープでは戦争を体験した方々の言葉や、戦後子供がかいた絵を見ることが出来た。特に子供のかいた絵の迫力は凄まじく、爆弾で手足の吹き飛んだ死体や母親の白骨死体、空襲で逃げ惑う人々と赤い空などが子供の拙い絵で表現されることで余計に痛々しさを増している。正直なところ、私は見ていると寒気がしてきて直視することができなかった。

Dゾーンでは空襲の様子をゾーン全体で体感出来るようになっていて、実際に防空壕に入って空襲の様子を体験できたり、落とされた爆弾の復元を展示してあったりした。

防空壕の体験はリニューアルの目玉のひとつでもあったようで、事前に見たニュース映像では大きく取り上げられていた。それまでにさまざまな資料を見てきた分余計に怖く、防空壕へ入るのには少し躊躇い、事実、入ってみると空襲の恐怖を肌で感じた。

CDゾーン、そしてスロープの展示を通して被害者としての第二次世界大戦を急に身近に感じられるようになった。誤解を恐れずにいうと、私はそれまで「戦争」を歴史の一場面として、それを勉強する事は「面白い」と思ってきたがもうそんなふうには思えなくなったのだった。あの時代を生きた一人の人間の視点から第二次世界大戦を考えるきっかけになる展示だったと思う。

そしてその一方、より一層、リニューアル内容に疑問が残る。侵略という言葉が消え、以前展示されていたアジア諸国、特に中国韓国へ行ったことに関しての展示がほとんどなくなっている。フロアを丸々使って紹介していた南京大虐殺や市民への残虐な仕打ちの写真は消え、年表に「韓国併合」「南京事件」という単語が見られたのみで、写真や実際に残っていた物はほとんど処分されてしまったということだった。事前に以前の展示を紹介する映像を視聴したが、非常に多くの教科書には載っていないような写真が展示されており、今回見学できなかったことがとても心残りで、処分されたという事実に「なんてもったいないことを」と残念でたまらなくなった。日本が行った事は紛れもなく侵略であったというのに、そこからは目を背けているのだ。

映像や写真、あるいは当時の人々が残した絵や手紙には出来事をまとめた年表や文章にはない、私たちの想像をかきたてるような力が、想いがこめられている。私はそれを、今回C、Dゾーンを見学して再認識した。

中学生になった時私は初めて「映像の20世紀」を観た。そして小学校では教えてもらえなかった加害者としての日本の姿に衝撃を受けた。戦争になった時、自分も加害者になってしまうという意味で怖くなったのだ。子どもたちの手紙や絵が私たちの心に戦争の不条理さを訴えかけるのと同じように、日本がアジアに行ったことの写真や映像は加害者となることへの危機感も喚起するはずである。二つの視点からの戦争への忌避感がそろって初めて、「戦争は怖い」という言葉を理解し口にできるのだと私は思う。

それなのにせっかく残っていた資料を処分してしまうとはどういうことなのか。確証がないものを事実として展示することはならないという考えも一理あるにはある。しかし、証言もあるのに証拠がないといってなかったことにするのは逃げではないのか。

これは日本全体の歴史観に通ずるものがあると思う。小中学校の歴史の授業を思い出してみてほしい。殆どがヨーロッパと日本における第二次世界大戦の経過と日本の一般市民の生活についてのものだったと思う。資料集には中国や韓国、東南アジアに対し日本が行ったことの記述や写真が多少あるが、教科書にはほとんどないため授業ではあまり取り上げられなかった記憶がある。たしかに、世界全体の動きを把握する事は戦争を理解する上で重要であり、また、一般市民の生活を勉強することで自分の身に重ねて想像できるようになり、戦争がいかに忌避すべきものかを感じることができるようになる。しかしそれは被害者としての戦争観であり、偏ったものであり、日本国家が過去の過ちから目を背けている証拠だ。そんなものは被害を受けたアジア諸国にも、また世界にも通用しない。多少ショッキングであろうとも、義務教育の中で真実を教え、国家としての反省と二度と繰り返さないという意思を表明するべきだ。被害者としての歴史、加害者としての歴史をきちんと伝え、両方の側面から見た公平な戦争観を受け継いでいく。それが今の日本の果たすべき責任である。それを為して初めて、私たちは過去を一度清算し、ようやく平和を目指すスタートラインに立てるのである。

「ピース大阪を見学して」

２年　新海花音

2014年４月、ピース大阪（正式名称：大阪国際平和センター）がリニューアルオープンした。リニューアルのきっかけは,一部の議員による批判であり,前年９月より一時閉館し，改装を行っていた。ただ，新しくなったピース大阪には，賛否両論ある。

１　展示内容の比較

（１）リニューアル前（なくなったもの）

旧日本軍による加害や大陸への侵略，と明確に記された写真や説明。例えば、強制労働　南京大虐殺　従軍慰安婦など。

（２）リニューアル後（新しくできたもの）

「大阪空襲」を中心とする展示。例えば防空壕（再現）、空襲の様子を映すプロジェクションマッピングなど。

＊加害であるとされた展示は原本のみ残し，あとはすべて処分された。

＊以前，大きくスペースを取っていた南京大虐殺は，南京事件へ名称変更され，年表に小さく表記されるだけになった。

＊従軍慰安婦に関しては，一切の展示がなくなった。

＊Ｂゾーンは，15年戦争をテーマとし，「加害者としての日本」をIフロア使って展示していた。そこは，今回のリニューアルで「世界中

が戦争をしていた時代」に置き換えられた。また，侵略という言葉はなくなった。

２　それぞれの主張

＊【主張者】「発言」（疑問点・意見など）

☆賛成(推進)派【一部府議会議員，松井一郎大阪府知事，橋本徹大阪市長　（リニューアル前後の時点の役職）】

「自虐的だ。」

（これは以前の展示について述べられたことだが，この場合，日本から海外へ向けての自虐なのだろう。確かに自虐的でないとはいえない。しかし、そもそも加害の展示はそのためだけのものではない。戦争は被害と加害の両面があることを伝え，二度と繰り返すことがないよう呼びかけるためである。）

「当時の客観的証拠に基づく事実を次の世代に伝えていくべき」

（実際，展示されていた加害の写真の中には説明と一致しないものもいくつかあったそうだ。それらを撤去するのは無論問題ない。しかし，すべての展示をなくし，加害の事実は全くなかったかのように装って，本当に良いのだろうか。 加害の証拠を探したり、調査したりしたのだろうか。証拠がないことを理由に事実から目を背けるのはいかがなものか。）

「一方に偏ることのない正確な知識を。」

（なぜ被害の展示のみにリニューアルして，偏っていないといえるのだろう。しかも，被害の展示だけでは，そこに至った背景などがわからない。それは正確な知識を得られるといえるのだろうか。）

★反対派　【大阪の会など市民団体，市民など】

「元々の設置理念の一つ，〈アジアや植民地の人々に多大な危害を与えたことを忘れない〉に反している。」

（ピース大阪のホームページには開館当初の設置理念ものこっている。もちろん，かつて展示されていたものすべてが正しいとはいえないだろう。しかし，設置理念を曲げてしまった今，ピース大阪はもとのピース大阪ではなくなってしまったと，私は考える。）

「二度と，加害者にも被害者にもなりたくない。」

（ピース大阪など，戦争関連の施設が絶対的に戦争を防ぐとはいえない。けれども，戦争を知らない世代に当時を伝えなければ，その恐ろしさが伝わらない。極端な例ではあるが，被害状況だけを見た人の中には，攻撃されてばかりで，日本は悔しくないのか，報復すべきだ，と思うような人が現れる可能性もなくはない。）

３　感想

リニューアルで新しくできた防空壕に入ってみた。真っ暗になり，逃げる人々の叫び声や足音の音声が流れた。外で何が起きているのか想像することしかできず，心細さや緊張感は感じられた。しかし，ある報道番組で，その再現の防空壕を見て「本物はこんなに（１m50㎝）高くない。こんなに深く掘れるわけがない」と語る，空襲体験者がいた。いまだに忘れられない子どもの頃の記憶なのだろう。ありのままに伝えてほしいというのは当たり前の願いである。しかし，その通りに作れば，よりリアルになるか考えてみると，そうではないと感じた。どれだけ本物に近いものができても、実物には程遠いと思う。それは振動や暑さ，臭いは伝わらないからだ。ましてや，次は自分が被弾するかもしれないという恐怖は想像するしかないが，想像できないからだ。

見学後，「戦争の恐ろしさはよくわかった。」と言った人がいたが，本当にそうなのだろうかと疑問に感じた。どれほど実物に忠実に作ったとしても再現は再現である。後世に平和を引き継ぐためにも，風化させないためにも，そのことを忘れてはいけないと思った。

リニューアルを知り，見学前はどれほど偏った展示なのだろうか，と思っていた。しかし実際に見学してみると，それほど違和感はなく，別の同系統の施設や戦争関連のテレビ番組とも変わらないと思った。現在の展示でも確かに，戦争の悲惨さや恐ろしさは伝えられる。また，多くの人は展示を見て，やはり戦争は間違っている、してはいけないと思うだろう。それは，この施設が虚偽の内容は展示していないからであると思う。しかし，多くの人が避けたいと思う負の事実を展示していたのがピース大阪である。信憑性の低い写真が撤去されたことは間違っていない。だからと言って加害のすべてを失った今，ピース大阪の最大　で、非常に貴重な特長も失われたといえるだろう。私は，これから，旧日本軍による加害の事実関係や日本の支配は侵略であったのかどうかなどが調査・研究されることを望む。そして将来，それらの結論がピース大阪で展示され，再び両面から戦争をとらえ,考えることができるようになればいいと思う。

「戦争観のあるべき姿」

１年　大道夏希

ピースおおさかでは、戦争の悲惨さがとても伝わってきた。空襲のサイレン、防空壕、戦時下における食べ物・服そして、爆弾の模型などが展示してあった。特に、大阪空襲について大きく取り上げられていた。実際に空襲にあった方の声のビデオが流されていた。「あと一歩違ったら死んでいた」という人がとても多く驚いた。彼らの火傷や傷は、完全ではないかもしれないけれどビデオを見る限り治っていた。しかし、心の傷は癒えているようには見えなかった。

私たち日本人が傷つけた人たちはあの展示をみてどう思うだろうか。私たちには戦争＝アメリカなどに傷つけられた、という考えが根付きつつある。しかし、他の国から見れば、日本も加害国である。自分達のやったことを知らなくて良いのだろうか、後世へと伝えなくてよいのだろうか。私は良くないと思う。そのまま、伝えず過ごしていくと、私たちはそのうちしることができなくなってしまう。自虐的だ、と展示できないかもしれない。しかし、資料の公開をしてほしいと感じた。

「ピースおおさかを訪れて」

２年　田中茉凜

「私達にできることは戦争の悲惨さを語り継ぐことである」。このようなことを私は去年訪れた手塚治虫記念館の感想として書いている。しかしその適切な伝え方までは去年の私は考えてはおらず、今年韓国という国を扱ってみてその難しさを痛感している。

去年のＳＧＨゼミの研究対象である台湾は歴史認識問題において酷く日本を責めてきたりはしなかったので、どう伝えるかまではあまり深く考えてこなかったが、日本と長年歴史認識問題で意見が対立している韓国に視点を置いてみて、伝え方一つでまた新たな対立を生んでしまう可能性があることに気づいた。ゼミで慰安婦問題について調べたときも、一部のメディアや学者がもたらした誤解が双方の対立意識に結びついているケースが多くみられた。しかしそうとはいえど現在両国の主張が一致していない上におびただしい数の情報が流れるこの世の中で何が正しいのかを判別することは難しく、偏見や誤解を生まない客観的な伝え方の実現は困難を極める一方である。

そういった中でピースおおさかもまたリニューアル時の展示内容の変更という『伝え方』において多くの議論を呼んだが、私は実際に訪れてみてリニューアル後の展示は感心できる内容だったと思う。確かに日本がアジア諸国に与えた損害を示す展示はあまり見られず日本国民が受けた被害中心のものだったが、そもそもあの資料館はそういった被害者・加害者意識を高めるための施設ではないと思う。それよりも事実を知ることで戦争の悲惨さを知り、二度と繰り返してはならないということを次世代に伝えることが役割であるべきではないか。その面で個々の展示は戦争の残酷さをしっかりと物語っており、かといって被害者意識を高めるでもなくむしろ当時の日本政府に罪を感じた。

展示を見て気づいたのだが、日本政府の罪というのを強調していた気がする。当時の国家総動員のポスターや黒塗りされた教科書、検閲された手紙、軍備品や兵隊をモチーフにしたおもちゃなど、国民に戦争を強要した政策を示すものが強く印象に残った。被害者、加害者とか国籍に関わらず多くの尊い命を奪った戦争を指示したのは当時の日本政府であり我々は絶対にそれを許してはならない。そしてその反省の念を持って平和に積極的に貢献することが日本人の努めである。そんなメッセージを私はピースおおさかで感じた。しかも日本が与えた被害に関する展示もあまり見られなかったといっても、ＶＴＲで日本が太平洋戦争に至った経緯を丁寧に説明しており客観的に事実を伝えていたと思う。南京事件についての展示が無くなったのは資料が信憑

性に欠けているからであり曖昧な資料を公式に展示することは良いとは言えないからであろう。ただ一つ残念だったのが被害者の体験談を紹介する展示で他国の人々の声を一つも取り入れておらず日本人だけに絞ってしまっていたことである。被害者全体を示すなら日本人だけ紹介するのは誤解につながりかねないので好ましくない。どうか訂正されることを願う。

さらに驚いたことに平和実現に向けて私たちに今できることを示すブースがあり、私が思っていた「伝える」という役割以上の仕事を果たしていた。他にも戦後の大阪の復興の様子なども紹介しており、戦争に負けない姿に日本国民としての誇りも持つことができた。ピースおおさかへの訪問はまた一つ自分の考えを深められる良い機会となったと思う。

＜課題：異なる文化を持つ人たちと良好な関係を作ってゆくために＞

「異文化との共生のために―大阪巡検を終えて―」

１年　稲田栞里

世界の移民数は2015年時点で約２億4,400万人、世界人口の約３%にのぼる。2000年からの15年間で1.5倍以上にまで増加した。社会のグローバル化に伴って、移民の数は急激に増えており、今後もますます増えていくことになるだろう。しかし、それと同時に、世界各国で、経済的な格差の広がりや差別といった移民に関する問題が深刻化しつつある。異文化との共生は、世界全体にとって非常に大きな、難しい課題だ。もちろん日本も例外ではない。長い間移民の受け入れに消極的で、現在でも外国人労働者を厳しい条件で制限している日本であるが、国内の外国人の数は増加傾向にある。グローバル化する国際社会の中で、国外からやってくる人々を拒み続けることは不可能であり、移民の受け入れ体制の整備は不可欠だ。私たちの目の前には、日本に暮らす外国人たちと良い関係を築いていくために解決すべき課題が山積している。異文化との共生とそれに伴う問題について、国民一人ひとりが考えていく必要があるだろう。

日本において、外国人と良好な関係を作っていく上で大きな妨げとなっている要因のひとつに、彼らに対する反感とそこから生じる差別意識がある。日本に在留する外国人のうちのかなり大きな比率を占める韓国・朝鮮人に対して特にその傾向は顕著である。その要因としてあげられるのは歴史認識の違いだ。言論NPOとEAIが2013年に行った共同世論調査によると、日韓間で解決すべき歴史問題の課題に関して、韓国では「日本の歴史教科書問題」（72.4%）、「侵略戦争に対する日本の認識」(51.1%)、「日本人の従軍慰安婦に対する認識」(42.0%)、「過去の歴史に対する反省や謝罪の不足」(35.4%)などの植民地支配や太平洋戦争時の日本側の行為に関する日本人の認識を課題とする意見が多かった。それに対して日本では、「日本との歴史問題に対する韓国人の過剰な反日行動」（55.2%）、「韓国の反日教育や教科書の内容」（54.8%）といった意見が多い。このように両国間では歴史認識の面で大きな相違がみられる。日本では加害者としての日本が大きくとりあげられることはあまり多くない。空襲や原爆の投下による被害、祖国を離れて戦った兵士たちや物資の乏しい中での生活を強いられた民衆の苦労はたびたびとりあげられ、子どものころから教えられる。しかし日本が朝鮮をはじめとするアジア諸国に対して行った侵略や虐殺の歴史は小学校ではおろか中学校でも大きく扱われることはない。太平洋戦争における加害者としての日本について学ぶ機会は少ないのである。反対に韓国では日本から受けた被害について幼い頃から教えられるようだ。もちろん、日本と韓国のどちらかが正しくもう一方がまちがっていると言うことはできない。しかし、この教育内容の決定的な差は、歴史認識の大きな相違を生み、双方のすれ違いにつながる。日本から受けた被害についてしっかりとした教育を受けた韓国の人々の、日本の認識の甘さを叫ぶ声は、加害者であるという認識の少ない日本人にとって奇妙に聞こえるだろう。彼らの行動が日本人の目には過剰な反日行動とうつり、日本の人々の、韓国に対する反感につながるのは自然な流れである。この「嫌韓」の世論が、在日コリアンに対する差別を生む下地をつくるのだ。ヘイトスピーチやネット上の書き込みでの在日コリアンを差別するような主張には、歪んだナショナリズムを感じる。一部の差別主義的な人々の問題で自分たちには関係がないと思うかもしれないが、書店から反韓をうたう悪意に満ちた書籍や雑誌がなくならない限り、在日コリアンに対する差別の問題は私たちそれぞれが自分自身の問題として考えていくべきだ。中国人など他の国籍の人々でも同じことである。

加えて、日本人の意識の中での外国人との距離感が、在日外国人との共生を困難にしているように思う。日本の人々は、日本に住む外国人の現状に対してあまりに無知であり、彼らとの間に起きている問題についての正しい知識を持つ人はあまり多くない。多くの日本人にとって、在日外国人は身近な存在とは言えず、普段の生活の中で意識することはほぼ皆無であろう。しかし、約212万人という在日外国人の数は、決して少ない数字ではない。日本人の約60人に１人が外国籍であると聞けば、むしろ多いと感じるのではないか。例えば、在日コリアンの多くは、特別永住者として先祖代々日本で暮らしており、日本名を使って生活している。このような人々を、外国人だと見分けるのは非常に難しい。私たちは特に意識しないまま、彼らと接しているかもしれないのだ。このことからも、在日外国人に関する様々な問題が私たちと関わりのない遠いところの話であるとはとても言えないことが分かるだろう。在日外国人の中には差別や厳しい労働状況、言語や文化の違いなどに苦しめられ、暮らしにくさを感じている人々が少なくない。しかし、日本人側が彼らの直面している困難に対して無関心であることは、問題の解決を遅らせてしまうのではないだろうか。無関心さは日本人と在日外国人の間の溝を広げ、間接的であっても彼らを苦しめているのかもしれない。

外国人の国内への流入を拒むことがもはや不可能であるとするならば、増え続ける在日外国人とどのように良好な関係を作っていくべきなのだろうか。「外国籍であっても日本で一緒に暮らしている仲間なのだから、日本人と区別せず同じように接するようにしよう、同じように扱おう」というような考え方が当然生まれてくる。これが実現すれば、差別は消え去り、かなり理想的だろう。しかし実際にはなかなか難しい。様々な文化的背景を持つ人々と共に生きていくために必要なこと、それはむしろ「違いを認める」ことだ。日本に住む外国人一人ひとりに、当然それぞれの事情があり、個性があり、苦労がある。それを、「在日韓国人」、「在日中国人」、さらには「外国人」としてひとくくりで認識してしまうことは、大きな弊害を生む。具体的にはどんなことが考えられるだろうか。その答えのひとつとして、その集団の悪い情報だけが集積されて、よくないイメージががができあがってしまうということがあげられる。例えば、ある中国人が犯罪を犯したと報道されれば、中国人は危険だという印象を抱いてしまい、その後中国人についての良い報道があったとしても、初めに抱いた悪いイメージはなかなか消えないだろう。また、ゴミ出しのマナーが悪いブラジル人が身の回りにいたとしたら、すべての外国人はマナーが悪いというイメージを持ってしまいがちである。このように、日本に住む外国人たちをひとくくりで見てしまうことで、彼らに対して偏った見方をしてしまうことにつながる。マイノリティーである在日外国人とともに暮らしていくために私たちに求められているのは、彼らを個々人として理解し、尊重することである。日本人のなかでも一人ひとりに個性があるように、彼らにも個性の違い、得意不得意の違いがあり、その延長線上に国籍や民族の違いが存在するのだ。もちろんこれは言うまでもない、当たり前のことである。しかし私たち日本人はこの当たり前のことを忘れていないだろうか。あるいは意図的に目をそらせていないだろうか。在日外国人たちをひとつにまとめて、自分たちとの間に線引きをしてしまう方が楽だからという理由で。

日本に住む私たちは、国籍を気にする前に、まず同じ人間として関わっていくことができるはずだ。それぞれに個性があるから、一人ひとり違うから、おもしろい。そこに、文化や宗教観、言語の違いが加われば、さらに世界が広がるだろう。それが、異なる文化と共生していくということの本質だとわたしは考える。そんな社会の実現のために、私たち一人ひとりが、在日外国人とそれに関わる問題について知ろうとすること、それをもとに自ら考えることが初めの一歩となるのだ。

「大阪巡検を終えて」

２年　伊東里彩

今の時代、日本だけではなく世界全体がグローバル化していき、人々の移動も盛んになり、国境を超えた人と人との交流が増加してきた。この時代を生きる私たちは必ず「異なる文化を持つ人たち」と関わりを持つことがあるだろう。どのようにこのような人たちと良好な関係で付き合っていくことができるのか、この問題の解決のヒントを今回の巡検で少し得ることができた。

私がまずはじめに国立民族学博物館の展示を見て（自分がもとから知っていた知識も多少はあったが）知らなかったようなことがほとんどで、自分のほかの文化の知識の乏しさを痛感させられたような気がした。また、私は相手の文化の中でも特に“宗教”や“思想”をしっかりと理解することが衝突を起こさず交流を深めるための大切なことであると感じた。そうすることで、我々の常識を相手に無意識に押し付けることなく相手に不快な思いをさせることなく良好な関係を保てると思う。

２日目の文さんの講演はとても衝撃的なことばかりであった。最初に驚いたことは外国籍の人々（ここでは特に在日韓国、朝鮮人の人々）に対する知識がとても乏しいということである。例えば、差別の問題をどのように解決すればよいのかというときに、簡単に“日本へ帰化すればよい”と言ってしまう人が多いことだ。確かに帰化をすれば、外国籍ではなくなるので就職などの差別は減少するかもしれない。しかし、日本国籍の取得の難しさや、彼らにとっての国籍は自分の祖先とのつながりやふるさととのつながりを感じるような繊細なものであるということも考えず、表面上の問題だけを見た浅はかな発言だと思った。また、在日韓国、朝鮮人の人々が通称名を使う理由の一つに、就職で不利になってしまうというものがあったことにもショックを受けた。自分の身近な場所にはそのような人々があまりいないので、私は日本ではそのような差別はないと思っていた。グローバル化が進んでいる現代でそのような差別をすることは時代遅れでもあるし、この状態のままであったら、日本は世界に“置いてきぼり”にされてしまうだろう。そして、一番衝撃的であったのはヘイトスピーチである。チョンコ、チョンコと在日韓国、朝鮮人を侮辱するような差別用語を言ったり、殺せ、帰れなどと叫んでいる映像を見て同じ日本人としてこのような発言をする人がいるということを恥ずかしく思った。また、このようなスピーチがほぼ毎日一回のペースで行われているということや、ヘイトスピーチの抑圧に対して“言論の自由を妨害している”といった、実態を全く理解していない人も多いということにも驚いた。確かに、言論の自由は基本的には守られなければならないものであるかもしれないが、侮蔑的に自分たちより弱者だと思う人を卑下し、あからさまに差別をしているような言論はその人たちの人間としての尊厳を傷つけているものであるから、そのような発言は守られるべきではなく、むしろ人権侵害的内容の発言であるから取り締まっていくべきであると思った（法律で韓国、朝鮮人へのヘイトスピーチに対する規制はできたが、もっと範囲を広げていくべき）。

結論として、前述のような発言をする人がなぜ現れてしまうのかというように、“負の経験”を考えるところに多文化共生への第一歩があると私は思う。自分が今回の巡検を通してこの質問に対して考えた結論としては、日本人のほかの国の文化への知識が乏しく、また学ぼうとする意欲が乏しいことにまず問題があると思った。この問題の解決策として、私は小学校や中学校の教育の中にもっと“ほかの国の文化を学ぶ”という要素を取り入れていくべきだと思う。子供のころからこのような教育を受けることで、社会に出た時にも柔軟に対応することができるようになるだろうし、また教える側である大人たちも学ぶ機会が増え、正しい文化理解が得られることで差別問題も減少していくのではないかと思う。しかし、その教育でも相手の文化を正しく理解することは大切だが、“その国”の文化であるとして国同士の文化を個々に学んでいくのではなく、多文化社会で自分の中の一部の文化として自分たちの中にうまく取り入れていくことが大切であると思う。また、今までこのような問題について考える機会がなかったので今回の巡検で考えることができてよかったが、そのような場を設けることも大切だとも思う。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

２年　加藤杏菜

日本では、1858年に日米修好通商条約を締結し、横浜・長崎・神戸などを開港して外国人居留地を設置した。それ以来、国内での外国人との交流の機会が格段に増えた。交流の機会が増えれば、当然ながら差別や文化的衝突などさまざまな問題が生じてくる。そのような問題は今日でも無くなることはなくしばしば起こっており、グローバル化が進む昨今では、それらの問題は無視できない、世界全体の課題となっている。

ここでは、今回の大阪フィールドワークを通してわかったこと・感じたことから「異なる文化をもつ人たち」といかにして良好な関係を作っていくかを考える。また、（アイヌ民族や琉球民族も「異なる文化をもつ人たち」と捉えることもできるが）グローバル化に伴って関わることが多くなった、外国人について「異なる文化をもつ人たち」として考え、外国人とは、在日・在外に関わらず外国籍をもつ者とする。

今回の大阪フィールドワークでは、１日目に国立民族学博物館を訪れた。ここは、文化人類学・民族学の研究所と博物館という２つの顔をあわせもつ施設で、その設備の綺麗さと大きさに驚いた。

国立民族学博物館では、世界に多様な民族が存在する中で、それぞれの民族が異なる文化をもち、それらの民族が互いに関わり合い、さまざまな影響を及ぼしあってきたことを学ぶことができた。

その中で、「朝鮮半島の文化」コーナーのある２つの展示をみて、異文化の取り入れ方に日韓で違いがあることに気がついた。１つ目の展示は韓国の「折衷様式」の結婚式の衣装。一見ウエディングドレスのようであるが、韓国の民族衣装チマチョゴリのようでもあり、とても素敵な衣装だった。このような折衷様式は、日本の結婚式では見られない。たとえばウエディングドレスのようだけど角隠しをかぶり帯を締める、そんな衣装があったとしても誰も着ないだろう。日本にも神前式や仏前式、キリスト教式など和式の結婚式も洋式の結婚式もたしかに存在しているが、それらは折衷されることはなく共存している。

２つ目は、聖母マリアとキリストらしき絵画の描かれた掛け軸。配置・構図こそ西洋のものと同じものの、絵の中の２人は少し韓国風の顔立ちをしており、韓国の民族衣装を着ていた。そのような工夫をすることで、よりキリスト教を身近に感じさせることが狙いだろう。日本では、聖母マリアとキリストが日本人に描きかえられ、和服を着せられることはない。

この２つの展示から分かることは、異文化を取り入れる際、韓国は自国の文化とうまく融合させ定着させようとするのに対し、日本は自国の文化と異文化とは分離し共存させようとする傾向があることだ。この点で見ると、韓国は日本に比べ柔軟性に富んでいる。

本題に戻って、外国人と良好な関係を築くということを考えたときに韓国のこの傾向は、「異文化理解」に一役買うのではないかと考えた。自国の文化と融合させることで、異文化に親しみが生まれ、受け入れやすくなる。

日本のそれは、自国の文化を保護・継承していくという点では優れているが、どうしても異なる文化をもつ人たちとの間に隔たりができてしまう。

自国の文化を守ることも異文化理解も大切なことであるから、どちらが良いのだ、とは言い切れないが、異文化に接する際に折衷・融合させる方法があるということを認識することができた。

２日目は、「ぱだん」を訪れて文公輝さんの講義を受けた。恥ずかしながら、私はヘイトスピーチという言葉こそ知ってはいたが、その実態については全く無知であった。だから、実際に起きた在日コリアンへのヘイトスピーチデモの映像を見たときはそのあまりにひどい現状に愕然とした。これは私の住む日本とは別の国なのではと思ったが、デモ隊はたしかに日本語を使って通行人を脅迫し、在日コリアンを侮蔑する言葉を連呼していた。これを見て、私がいかに平和な暮らしをしていたかを改めて気づかされ、また、同じ日本人として情けなく悲しくなった。

文さんはこのような差別問題の原因のひとつに、社会全体が外国人を隔離したり下に見たりするような形態になっていることが挙げられる、とおっしゃっていた。ここでいう社会全体とは国家のことであり、国家が国籍条項の撤廃、時代から遅れている法制度の改正を行わ

ないことが問題のひとつであるのだそう。
もちろん、社会全体の形態は改善すべき問題であることは分かる。デモの参加者が韓国に何らかの恨みがあり、その矛先を日本に住んでいる韓国人に向けたということも考えられる。ただ私は、さまざまある外国人への差別問題の根底には「なんとなく」というのがあるのではないかと考えた。
私の家の近くには、インド系の外国人が多く住んでいて、その人たちをよく見かける。道ですれ違うとき、理由はないにもかかわらず、ただ「なんとなく」本当になんとなく警戒して少し離れて歩いてしまう。そして通り過ぎたあとで、「これが偏見なのではないか」と気づきはっとする。
このような経験があるのは、私だけではないはずだ。偏見は良くないことと分かっていながら、日本人特有の排他的性格が見え隠れする瞬間がある。多少は仕方ないようにも思われるが、しかし差別は偏見から生まれると言っても過言ではないし、差別問題は外国人と良い関係を築く上で、大きな壁となる。
偏見は、相手をよく知らないことによって生じる。よく知らないからこそ言動・行動などが理解できないのは当たり前で、理解できないからこそ偏見が生まれてしまう。だから、若い頃の異文化交流が大切だとよく言われるのは頷ける話である。
２日間を通して分かったことは、訪れた地域に住む方々は自分のルーツが違うにせよ、文化が違うにせよ、良好な関係を築き共存しているということだ。それは、普段から交流をもつ機会があり互いの文化を理解しているところが大きいのだろう。
このことから、グローバル化する世の中で外国人と関わっていくときに、やはり「異文化理解」が重要な役割を果たすということがいえる。異なる文化を、理解する前から決めつけた偏見の目でみることは差別につながり、異文化を差別するような国はいずれ行き詰まることになるだろう。私たちの住む日本がさらなる成長を遂げるためには、互いに完全に理解することはできないにしても、理解しようとする、知ろうと歩み寄っていく姿勢が、これからの時代には必要不可欠である。

「異なる文化を持つ人たちといかにして良好な関係をつくってゆくか」

１年　花山 愛歩

私は、「異なる文化を持つ人たち」と良好な関係をつくってゆくには、何よりもまず、相手に好意を持つことが大切だと思う。今回の巡検で、私は日本人の、移民や在日コリアンの人に対してのマイナス感情の多さに目がいった。外国人労働者というと、「日本人の仕事を奪う」「マナーが守れない」「治安が悪くなる」などの否定的な意見がたくさん出てくる。これは私たちのゼミの討議の時も同じで、日本人の共通意識のようになっているように感じる。
国立民族博物館の永田先生の講義を受けた時も、主に韓国でのフィリピン移民についてのお話を伺ったが、日本の外国人に対する政策や社会の在り方は完全に韓国に遅れを取っていることを実感した。
例えば、政策の面では、現在の日本の移民に対する政策は、「研修生としてのみ就労を認める」ものだが、韓国は既にこれに1990年代に終止符を打っており、更に外国人の働きやすい政策へと変化を続けている。「これが必ずしも成功しているとは言い切れない」と、永田先生はおっしゃっていたが、それでも私はここに外国人労働者に歩み寄る努力をしている印象を受けた。
社会の在り方でも、韓国には多くのフィリピン人が集まる"ヘファ洞カトリック教会"という、日本最大のフィリピン人ミサの３倍の規模を誇る教会があり、周辺では週末にフィリピン人向けの生活用品や食材を売る露店がかなりの数並ぶという。そして驚いたのは、法律上では撤去も可能なこの露店を政治家も黙認しているということだ。また、露店には韓国人の姿もあるという。
こうして社会全体としてフィリピン人のコミュニティを破壊しないだけでなく、自国のコミュニティと分断しようとせず、まさに「共生」しようとしている韓国の姿を知った。留学生を中心に韓国からフィリピンへの人の動きも盛んであり、人の動きが一方通行ではなく相互的な交流が盛んなことも、ただ弱者として相手を見るだけでなく「共生」していくことにつながっているのではないかと思った。
そうした他国の実情を踏まえて日本の外国人労働者や移民、在日コリアンに対する社会の態度を見てみるとどうだろうか。私はやはり、日本はたくさん課題を抱えていると思う。
まず一つ目は先に述べたように「相手への好意」の不足だと思う。これは、外国人労働者の見方が関わっているのではないかと思う。外国人労働者、特にアジア系の人々はこの日本社会の中で「弱者」の位置にいる人が多数だと思う。だからこそ日本社会として彼らを「下」に見ることが多く「自分たちに迷惑をかけなければ」とか「自分たちの地位を脅かさなければ」という意識を持ちやすく、結果として外国人同士のコミュニティが存在しても自分たちの外で完結させようとしたり、少しでもいたらないことがあればそれが悪意や嫌悪になっていくのではないか。
そして二つ目は、在日コリアンや移民に関する知識・理解の不足を挙げたいと思う。在日コリアンの文公輝さんに伺った話の中でもそれを痛感した。私たちは「移民」というと、いつかそれぞれの国に帰国していくようなイメージを持っているかもしれないが、日本にいる外国籍の人々の52%は安定した定住権を持っている。特に全国の在日コリアンの９割近くは、特別永住権（韓国または台湾国籍で1945年９月３日以前から日本にいるか、その子孫の永住権）を持っている。この中身を見ると、戦後に日本で生まれ、日本で育った人が多数を占めている。つまり、言語の面から見ても、アイデンティティの面から見ても、私たちとほとんど変わりはないのだ。それが、ただ両親や祖父母が韓国人というだけで差別や偏見に苦しめられて生きてきたのだ。だから自分が韓国人であることを隠し、通称名で生活するという人が９割もいる。
このような事実は私も知らないことがあったし、多くの日本人が知らないことだと思う。それなのに、「朝鮮人は特権を持っている」というような、事実無根の情報が広まり、ヘイトスピーチのような非人道的行為が行われているのだ。
私も栄駅周辺などでヘイトスピーチを見たことがある。その人たちは事実やデータに基づく発言であるかのようにアピールしていることが多いが、その情報はとてつもない偏りがあることが多い。事実というのは、使われる情報によってどうにでも作り変えられてしまう。このように偏った知識だけを積み重ねることも知識の不足ではないか。
私は今回の大阪巡検で「異なる文化を持つ人たち」と良好な関係を作っていく上での問題点としてこの二つを大きく意識させられた。今後、ますますグローバル化が加速していくことは確実なのだから、日本も世界の中で今の地位を維持し、発展させていくためには移民や在日の人たちの受け入れは避けられるものではない。それなのにいつまでも私たちの方が苦手意識を持っていては国際社会から取り残されていくのは私たちではないか。そして、私自身もまだまだ知識が足りていないので今後の巡検やゼミを通して、また自分で資料を集めて更に相手を理解するための努力をしていきたいと思う。

「大阪巡検を通してわたしが考えたこと」

１年　久野千優

大阪巡検でわたしが一番衝撃を受けたのは、文さんの講義の中に出てきた、ヘイトスピーチをする13歳の少女である。「彼女も虐待の被害者である」と文さんはおっしゃっていた。同じ国で暮らす外国人に対してあんなに差別的・侮辱的な言葉がなげかけられ、それを表現の自由として保護する先進国は日本ぐらいのものであっただろう。
日本には現在約200万人の中長期在留者、特別永住者がいる。実に59人に１人が外国籍を保有するという計算だ。その中でもとくに韓国人・中国人の割合は高い。
国立民族博物館では、異文化についての展示を見学した。その展示のなかの一つに、移民に関するものがあった。欧州の国々のなかには、移民を多く受け入れ、人口の約30パーセント以上が外国籍という人口構成の国もある。日本も、今後移民政策をとる可能性がある。グローバル化がすすむ現代において、異文化を無視して生きていくことはできない。
移民に関する問題点で、文化に関するものは大きい。例えば、生活のルール、言語の壁、宗教の違い、教育の問題などがある。異なる文

化を持つ人々が同じ社会で良好な関係を保ちつつ暮らすには社会統合が必要であるとわたしは考えている。そして、社会統合の方針として多くの国々が採用しているのが多文化主義である。移民１世の多くは、出身国を自らのアイデンティティととらえ、移民先でも文化を保とうとする。彼らの文化を認め、社会のなかで出来る限り平等に扱うのが、多文化主義の原則である。

しかし、日本に住む外国籍の人々に対しては、未だ根強い国籍差別が残る。文さんのお話のなかで、ヘイトスピーチを規制する条例案を提出するため、商店街に話をしに行ったときのことがあった。

ヘイトスピーチの動画を見た店主はこういった。

「協力します。韓国のひとたちは昔から一緒にくらしてきたから」

この感覚はとても大切なのではないかと私は思う。異なる文化をもっていても、同じ場所に暮らす仲間としてうけいれていくことは、今後非常に重要だと考える。

では具体的に、異なる文化を持つ人々を受け入れるには、私たちはどうしたらいいのか。まず一つに、相手の文化をもっとよく知ることが必要だと思う。移民は受け入れ国の生活のルール・言語・慣習などを学ぶ。社会に適合していくためだ。この支援は重要だ。しかし受け入れ国側の人々は、果たして移民のもとの文化についてどれほど知っているのか。一方方向の理解では、真に互いの文化を受け入れることにはならないと思う。またそういった教育を未来の子どもたちには受けさせられたらいいと思う。教科書でただ多文化共生を習うというだけでは、あまりにもリアリティがない。

また、移民もただ自分たちの文化を主張するだけでなく、受け入れやすくすることが重要だ。生野コリアタウンは、昔はもっと閉鎖的で、日本人が足を踏み入れるのは少し躊躇われたと先生がおっしゃっていた。実際訪れてみて、今は日本人と韓国人がどちらも楽しめる場所になったと感じた。

また多文化主義を考える上で忘れてはならないのは、文さんのような移民の子孫についてである。日本で生まれ育った２世３世は、ちょうど、１世の出身国と日本との間にアイデンティティをもつことになる。となると、彼らを安易に外国人だと認識してしまうのは考えものだ。いくつもの文化を背景にもつ人々のことも、覚えておきたい。

長い歴史の中で人が移動すると同時に食、衣装、慣習などの文化も移動した。もちこまれた文化は年月をへるごとにもとの文化と混じりあい、新たな文化がうまれた。ほかの国・地域の文化は、私たちの文化と似ているところもあるけれど違う。その違いは軋轢を生むこともあるけれど、文化の多様性という面でも大切にしていきたいと思う。

今回の大阪巡検では、知らなかったことをたくさん知れた。今後の生活に活かしていきたいと思う。

「グローバル化において他国と仲良くするためには」

２年　橋詰貴行

今回の巡検を通して、世界中のあらゆる人々と良好な関係を作っていくことは簡単ではないことが改めてわかった。では、どうすればいいのだろうか？　個人的には、とりあえず過去について学ぶのが一番いいと思っている。もちろんそれだけが大切ではないが、過去に起こった出来事から多くのことを学び、相手と一定の共通認識、価値観を持てることは仲良くなるためには不可欠だと思うからだ。

私は、国立民族学博物館に行き、非常に多くの事を知りえた。世界各地には多数の宗教、伝統行事があった。朝鮮では、４～14世紀まで仏教が弾圧されて、儒教を国教にしていた。その後キリスト教が入り今では総人口の20%がプロテスタントを信仰している。また、世界で最も多く伝道師を派遣しているというのには驚いた。また、帝国主義の時代に植民地と化し、伝統文化が失われることになったところもある。しかし、それによりまた新たな文化が生まれたのも学んだ。例えば、ブラジルはポルトガルに統治されていた。そこに、キリスト教が入ってきて世界的に有名なリオのカーニバルがうまれた。また、朝鮮も日本に統治されていた時代にオムライスなど新しい食文化が流入した、など、多くの国々の変遷を学べた。

他にも、移民の人々の現状や問題などを知ることができた。そこで移民してきた人は、コスモポリタンの重要性を唱えていた。

次に、永田貴聖先生の講義を聞いて日本の移民受け入れ態勢の不充実さや韓国やフィリピンの移民政策等を知った。日本は韓国よりも経済状況がいいのにも関わらず、外国人に対する意識の低さがかなり大きい。また、韓国におけるフィリピン人の生活は安定していて、カフェ等ではネイルサービスが行われているなど韓国国内での生活を楽しんでいる。また、フィリピン人同士で集まったり、自助組織などもつくっている。フィリピン人は９割がカトリックなので教会などによく集まるなどして精神の安定も図られている。また、韓国では海外留学や、多国籍企業への就職も活発化している。そして、相互の国々と文化交流も盛んである。

また、文公輝さんの講義を聞いて、なぜ大阪に韓国・朝鮮人が多いのか、どういう不当な差別を受けたのか等多くのことを教えてもらった。大阪は戦前東京よりも工業都市で、さらに地理的に見て朝鮮半島と近かったために、大阪に朝鮮の人々が多く住むことになった。また、生野区の５人に１人が韓国・朝鮮人であり、日本で最も外国人が密集しているエリアである。そして、生野という場所自体が差別に繋がっている場所でもある。なぜなら、よく洪水が起きるからだ。日本人はあまり住みたくないので、住みにくい場所を朝鮮人に住まわせたそうだ。また、ヘイトスピーチを聞かせてもらったが、衝撃を受けた。あれは、表現の自由だから別にしててもいいんだとかいう人がいるが、絶対にやってはいけない。あれは、脅迫であった。例えば、南京大虐殺じゃなくて、鶴橋大虐殺をします。など韓国・朝鮮人に向けて意図のよくわからないこと言っていた。私は同じ日本人として情けないと思った。ヘイトスピーチの参加者は、領土問題や慰安婦の問題等の怒りの矛先を在日韓国・朝鮮人に当てているのだという。それは、筋が通っていない。また、銀行などからお金を借りる時にも偏見にあったという。どうせ自国に帰るんでしょ、などと言われ、お金を借りるときに苦労したそうだ。在留カードや、免許証パスポートなどの提示を求められたらしい。さらに日本の国籍取得はとても難しく、多くの労力とお金が必要となり、日本人よりも日本人らしい順法精神が求められている。

最後に生野コリアンタウンに行き、日本に普通に生活している韓国・朝鮮の方々を目にした。日本のどこにでもある普通の商店街と同じくお客さんと仲良く喋っていた。そして、自国の食文化を全面に出し、韓国・朝鮮人としてのアイデンティティを確立していた。

これら様々な事を学んでも、なお外国の人とすぐに仲良くなれるような方法は確立しない。しかし、何が起こったのか等過去のことをさらに深く学ぶことができたなら、いつか必ずや解決策が出てくると思う。現時点で私が思っている浅はかな考えは、とりあえず相手のことを思いやり利己主義的な考えにはならず謙虚になっていくということだ。また、日本は他国と比べてもとても閉鎖的である。これは国民性も関わってはくるのだが、グローバルな時代においては障害となるから、教育機関がもっと斡旋して自己発言の機会を増やすべきだと思う。まだまだ完成してない意見ではあるが、これから年を取るにつれ様々なことを学ぶであろうから、そこの中で本当にこれならばいいと思えるような考えを作りだせたらいいと思っている。

「今回の大阪巡検を通じて考えたこと」

１年　玉田洋一朗

日本がこれからの国際社会をこれまで通りの世界の一大国家として力強く生き抜いていくためには、韓国や中国などの身近な異国の文化はもちろん、今まで出会ったこともないような文化と友好的な関係を築いていくことが求められる。

私は、異国の文化と友好的な関係を築き、それを維持するには、外国からやってきた人々に対する差別の撤廃が最優先課題だと考える。

しかし、どうして差別は生まれるのだろうか。

「あの人はブラジル人だから」「外人は野蛮だよね」などといった典型的な外国人差別に共通してみられる特徴は、外国からやってきた人々を、同じ人間とみなしていないところにある。「古代から日本は大和民族による単一民族国家だ」と考えているが故にそのようなことを言っている人が少なくないようだが、驚くべきことに『民族』という言葉は1880年代末に、英単語“nation”を訳す際、適語が当時の日本語になかったために創られた単語であり、それ故にそれまでの日

本では『この人は何民族』という概念は存在しなかったのである。つまり、長い歴史の中で19世紀末までに日本に入ってきた外国人も、理論上『大和民族』なのである。平安時代や鎌倉時代に、「あの人の父は渡来人だから」などといった差別が存在しただろうか。異なる文化を持つ人々との共生は決して難しいことではないはずだ。

実際に多文化共生に成功している（ヘイトスピーチをしている一部の人とは友好的に共生できていないことが残念だが）生野コリアタウンに行ってみて感じたのは、同じ日本人しかいない街よりも活気があり、街が明るいということであった。一本路地に入れば大阪らしい一昔前の日本のどこにでもあったような商店街もあったがそちらはコリアタウンよりも人通りが少なく、シャッターが降りている店も目立っていた。コリアタウンでは普段あまり目にしないような食品、食べ物がリーズナブルな価格で手に入り、韓国で今流行の食べ物などを知ることもできて楽しかった。他の商店街よりも人通りが多い理由はその楽しさにあるのだろう。

なぜ生野コリアタウンは活気であふれるまで栄えることができたのか。その要因をたどっていけば、やはり大阪の人との食文化や宗教、ものの考え方など、様々な分野での深い相互理解にたどり着くだろう。韓国は日本から最も近い国だが、日本海によって隔てられているため文化は大きく異なっている。米を食べるときに茶碗を持って箸を使って口まで運ぶのが日本のマナーだが、韓国では茶碗を持つのはみっともない仕草であり、米はスプーンを使って口に運ぶのが一般的である。箸ひとつにしても、日本では木製のものが多いが、韓国では鉄製のものが多い。このような文化的差異は相互理解がなければ時として侮辱や差別の種になってしまう。

と言っても、相互理解だけの多文化社会は危険である。多文化主義は、文化的差異を本質化し、人々を文化的集団に分割する傾向を持っているので、『境界線』ができやすくなる。

韓国から来た人が地域の祭りで出店をやることになったとき、その人がビビンバやカルビなどをやるのを期待してしまうという行為は、その人（『外人』）と自分たち（『自国民』）の間に食文化の境界線を無意識のうちに引いていることになる。このような無意識な線引きは、一人一人の心の中のどこかに『日本のアイデンティティー』や『日本国の文化』という概念ががっちりと根付いてしまっているからであろう。これらの概念は異なる文化を持つ人々がお互いのことを深く理解して友好的な関係を築く妨げになってしまうので、きれいさっぱり捨て去るべきである。これは一見すると難しいことに見えるが、生野コリアタウンや横浜中華街では実際にこれができているから今日まで栄えてきたのである。つまり、日本はこの戦後70年ほどの年月をかけて多文化主義国家へと変貌してきているのである。

これからの日本を生きる上で大切なのは、出会った相手の文化や宗教、ものの考え方をいちいち気にしてどこの国から来た人かを考えることではない。出会った相手がどんな国の人であろうと個人として尊重することである。

（出典）

福岡県立大学人間社会学部紀要2011　Vol.19『日本人内部の民族意識と概念の混乱』
水野俊平　『韓国の若者を知りたい』
ファーラー・グラシア　『「多文化共生」の何が問題なのか？』

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

２年　芹澤優希

私は今回の巡検を通して、異なる文化を持つ人たちと良好な関係を作ってゆくには、異文化を理解し、また個人として尊重することが必要であると感じた。

世界各国には言語から衣食住、人生儀礼、信仰といったものまでの様々な文化があり、国立民族学博物館に行ってそれらの共通点や違いをいろいろと学んだ。1900年代後半から、ヨーロッパでは労働移民や難民を呼び寄せて受け入れている。受け入れ先で移民が社会統合するにあたって彼らは言語を習得し、社会が彼らの文化を受け入れることで多文化共生になっていくことが分かった。しかし多文化社会の創出における多文化主義は、文化的差異を本質化し、ひとびとを文化的集団に分割する傾向をもっていて、ひとびとを文化的カテゴリーに押し込める。国民と外国人との間に境界線を創りだしてしまい、これはどれだけ長い間その社会に馴染み、その土地の言葉を喋れたとしても両親がよそ者というだけで異邦人扱いされ、「わたしたち」以外のひとびとは決して「わたしたち」にはなれない状態を示している。

日本に目を向けてみると、日本に住む外国人と日本人との間には、子供の教育問題や参政権などの政治関連問題、差別偏見問題が存在していることを知った。いま、日本の全人口のうち59人に１人が外国人で、割合の上位を中国人、韓国・朝鮮人が占めている。今回の巡検で訪れた大阪では、府人口の2.3％が外国人で、そのうちの半数は韓国・朝鮮人、特に生野区は13万人中２万人半が韓国・朝鮮人と、日本の中で最も密集している地域だ。そこで活動している在日コリアンの文公輝さんの講義を通じて、在日外国人が差別や偏見に悩まされていることが分かった。例に挙げると、消費者金融といった場所で「どうせ帰るんでしょ？」といった偏見から日本人と外国人との間で目に見える形で扱いに差をつけられるそうで、たとえ永住者、特別永住者といった資格をもっていても信頼度は低いそうだ。他にも近年増加している国際結婚においては、相手方（日本人）の親から在日コリアンであることを理由に反対されるなどの差別があるとのこと。私の中で意外な新発見は、韓国・朝鮮・中国の方の中には通称名を使っている人がいるということだ。通称名は植民地時代の創氏改名の名残もあるそうだが、公共の場で差別を受けないため、在日外国人であることを隠すために使用しているそうだ。私はこれらを聞いて差別偏見問題が意外と身近にあることを感じた。

また文さんの講義の中で最も印象に残っているのはヘイトスピーチの問題だ。近年多発化しているこの問題は、韓国・朝鮮人などへの差別で年平均約327件とほぼ毎日１回のペースで起こっている。私はこの講義を受ける前まで、ヘイトスピーチの実態をあまりよく把握していなかった。実際に起こったもののビデオを見てみると、思わず口から驚きの声が出てしまった。あまりにもいきすぎていて、人間としての尊厳を否定したこの人種差別的行為を社会が許してしまっていることに私は驚きを隠せなかった。最近になって条例や法による対策やヘイトスピーチ自体に対する抗議活動がなされ、少しずつそうした差別が注意される社会に変わってきたと文さんはおっしゃっていた。

異文化をよく理解すること、それが差別や偏見をなくすことの第一歩だと私は思う。互いの存在を認め合い、民族的な立場・文化を認め合っていくことが大切なんであろう。巡検を通して感じたことは、人を国籍で判断することの無意味さだ。君は「韓国人」で、私は「日本人」といった風に垣根を作るのではなくて、ひとりの人間として対等な立場で接していくことが良い関係を築いていくのに必要ではないだろうか。個人としての尊重は多文化共生に限った話ではなくて、普段から他人に対して私たちが心掛けていかなければならないことだろうと思う。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

１年　金高青葉

今回の巡検で、僕はこれまでとはまた違った視点で様々な事を学べました。やはり僕の意見として、「移民或いは外国人労働者は安易に受け入れるべきではない」というのは揺らぎませんでした。しかし、今回の巡検で、僕の考えも多くの影響を受けました。今回の貴重な体験をこれからも忘れずにいたいと思います。

さて、僕の考えの中核には、「移民の方や外国人労働者の方、在日外国人の方だって最終的には祖国の事の方が大事なんだから、日本ではなく祖国で無理なく暮らせるように働きかけた方が双方に良いのでは？」というのがありました。というのも、僕自身幼稚園年長期から小１にかけてフランスで暮らしていましたが、そこから日本に帰ってきた時は幼いながらに言い知れぬ安堵感がありました。今でも良く思い出せます。

それはともかく、そういった経験もあって移民の方などを受け入れるのは要らぬ軋轢を生むだけだと思っていました（そもそもの移民の受け入れの根拠となっている少子高齢化による労働力不足はロボット普及で何とかならないのかと考えています。一説では、今ある労働の49%がロボットの普及によりなくなるとも言われています。産業革

命を始めとして、科学技術というのはしばしば政治や社会のあり方に大きな影響を与えるのに、こういった問題を解決しようとするときに深く議論されないのは些か疑問です）。ですが、こと在日韓国・朝鮮人の方に関しては、こう考えるのは少し問題があるだろうとは思いました。在日韓国・朝鮮人の方の特異性というのは把握してたのですが、やはり実際にコリアンタウンを見て、そして文さんの話を聞いてみると、あの生野という街を紛れもなく自分の故郷だと思っているんだろうということが何となく感じられました。これは今回の巡検でも最大の成果だと思っています。

しかし、それと移民問題は別です。今回の巡検で移民の重要な課題だと特に感じたのは、ヘイトスピーチ問題です。長く日本に住む在日韓国・朝鮮人の方にすらあのレベルなのですから、移民の方に対しては推して知るべしです。

あのような無茶苦茶なデモを野放しにするのには問題があります。韓国のフィリピンコミュニティのようなものがうまく形成され、さらに現地の人との交流も上手くいったとしても、他所からヘイトスピーチ団体に来られたら全て台無しです。

しかし、規制するのもそれはそれで厄介な問題があります。それは「ちゃんと論理立てて考えている反対派もヘイト扱いされかねない」ということです。自分自身反対派ですが、ちゃんと自分なりに考えてますし、ヘイトスピーチは受け入れられないです。にもかかわらず、「反対派=差別=ヘイト」などと思われるのは心外です。反対派として言わせて貰えば、ヘイトをしている人は反対派でも何でもなく、ただ移民問題から逃げているだけの人達です。いずれ移民を受け入れるにせよ受け入れないにせよ、まず法だけでなく人としてヘイトスピーチを認めたくないと思っています。しかし、この規制の仕方では、我々反対派の意見がレッテル貼りされず、ちゃんと聞いて貰えるのか？という不安も残ります。また、ヘイトスピーチは最終的には心の問題で、法による根本的解決は無理だと正直思っています。だからこそ移民受け入れは難しい、ならばわざわざ移民を受け入れ火に油を注ぐのではなく、お互いの国でそれぞれ暮らし、仲良く助け合って行くのではダメなのか、そういった道を模索せず移民を受け入れるのは安易で未来に禍根を残すことではないのかと思うのです。

「多文化共生について」

２年　金澤元泰

多文化共生が世界中で叫ばれ始めて久しいが、日本で浸透するにはまだ時間のかかることであると僕は考えている。地理的視点から見て、日本は古くから、島国であるがゆえに異人種との交流の少ない国であった。人々も必然的に排他的な傾向が強くなり、現代においてもそれら島国の文化を払拭するのはなかなか難しい。よって、今のままでは日本の人々が真に異文化を理解し、受容する時代を迎えるのはまだ先になるであろう。一部の都市において外国人労働者の数が増え、新たな文化を受け入れながら、共生の道を探っている地域もある。しかしこれらはまだ特殊であり、一般化できているとはいえない。現代、また近い将来において、世界的な流れであるグローバル化の影響によって、様々な形態をとりながら日本国内の外国人は増加していくであろう。そこで、どのようにして彼らの受け入れをスムーズに進めていくかを考える。

日本に移民としてやって来たり、出稼ぎに来たりする外国人の居住地はどのようであるのが良いのだろうか。今回の巡検で訪れた国立民族学博物館のビデオ資料（北欧諸国に住む世界各国からの移民が彼らの状況や考えを語るもの）を見たところ、一つの法則のようなものが見えてくる。それは、「その国出身の人が多ければ彼らは集住し、出身国の文化的帰属意識を維持する。集住するほどの人口がいない場合は、彼らはその地域の人々と交流し、移民した先の国のアイデンティティを持つ」というものである。

上の原則から考えると、受け入れる日本人立場からすると、外国人には離散して住んでもらう方がより自然に、より多くの人が、外国人との交流機会に恵まれ、負担なく異文化に触れることができると考える人も多いと思うが、僕はそうは思わない。

なぜなら現在の日本は前述のとおり、異文化を受け入れる基盤が十分には整っていないといえるからだ。また外国人に対する日本語、マナーの習得など、生活をサポートする講座等の教育も全く不十分なのが現状である。そのような状況で外国人が各地域に住もうとしても両者に負担がかかる。存在が苦ならば異文化理解など到底成し遂げられないのではないか。

移民、もしくは居住する外国人にとっては、自ら望む以外は、突然日本人の中に放り込まれるのではなく、ある一定の国、民族、言語、あるいは文化が共通する中での生活を保障される方が、受け入れる側の観点からしても望ましいのではないか。これによって日本で住むことに関する社会的・心理的ハードルが下がる。集団内での互助により生活しやすいだろうし、日本語ができなくても日常生活に困ることは劇的に減少する。また政府・自治体も上記のような講座の開催など外国人に関する制度やサービスも実施しやすくなると考えられる。

またそれらの集団の中で中華街やコリアタウン、韓国のフィリピン市のような経済的な営みが始まれば、そこから日本の人々との交流が始まる。これはいきなり生活を共にするよりもハードルが低いと考える。

ここで注意したいのは、隔離するということではない。より自然に「共生」するための最初の段階として大変有効であると言いたいのである。一方で自ら日本に溶け込みたい、伝統文化を受け継ぎたいなどと、積極的に日本の文化を受け入れたいという外国人の思いは尊重されるべきで、いま述べる問題とは別と考える。

次に、共生の前提に必要な国家間の相互理解について少し述べたい。

近年、歴史的背景だけでなく、変化の激しい国際情勢や隣国であるがための領土問題などが複雑に絡み合って、隣国の中国や韓国という国に対して、悪い印象を持つ日本人が多いのは否定できない。だが、それらの国が嫌いというのと、自分の目の前のその国の人が好きか嫌いかは別問題である。少し考えればわかることである。その国にもいろんな人がいるということが分かればすんなり理解できることであるが、いざ国や国籍のことを語るときには、これを僕たちはしばしば忘れてしまう。

また、中国や韓国に好意的な印象が持てないといえども、僕たちはそれらの国の料理、商品、文化、ポップカルチャーなど、自分の都合のいいことは受け入れ続けているではないか。そして、あたかも自分の文化のように親しんでいるのである。これはむしろとても自然なことであり、もっとしっかり認識すべきことである。いかに日本が隣国に寄り添っているか。それがしっかり認識できれば、おのずとお互いに理解が深まると思うのである。

そこで、国籍について考えると、グローバル化の進行する現代の世界において、国籍は無意味になりつつあると思うのである。そもそも日本にはこの100年間、国籍こそ中国籍、韓国籍であるが、日本人として、もしくは日本人と同じようにして生活してきた人はたくさんいる。現在は国際結婚も増加し、ますます国籍による分類は形骸化しつつある。例えばスポーツ選手を例に挙げると、陸上、ラグビー、バレーボール、サッカーなどで日本代表として出場するハーフの選手を目にすることが最近とても多いと感じるのは僕だけではないはずだ。そしてそれら選手を日本の国民が自然と力強く応援する様子を感じてうれしく思うことがある。国籍によって人を区別・判断するのはナンセンスであると思う。

では何のための国籍なのか。ひとつは法律上必要な区分である。

そしてもうひとつは、多くの人において、その人のオリジナリティであると考える。その人の祖先の住んだ地でありその人の心のふるさとである地として、誇りとなり心を支えるものではないか。それをもとにアイデンティティを保ち文化活動を継続する人も多いはずだ。あくまで一般論であるが、その人の国籍はその人の外面に押し出されるものではなく、内面を支えるものとして大切にされるべきものであることも忘れてはならない。

多文化共生はあくまで「共生」であり「融合」ではない。何かを完全に自分の中に取り入れたり、取り入れさせたりすることとは違う。共通化することではなく、自己を保ちつつ相手を認めることであるのだと思う。

そしてその「文化」は、特定の国民（国籍保有者）が持つものではない。各自が持つものである。アメリカ人は毎日Ｔシャツを着て、イタリア人は毎食パスタを食べると考えるのはあまりにも安直すぎる。その人の本質を見ずに、所属する集団から受ける印象を個人に押し付けることは何も産み出さない。

これを日本の人々がみな会得して初めて、日本は多文化社会になっ

たといえるのだろう。いきなり異文化と濃密に触れあっても互いに困惑するのみである。互いに、少しずつ交流を重ねることができれば、それは多文化共生への大きな一歩となるのではないか。

最後に、イギリスの教育雑誌が行った、アジアの大学の格付けにおいて、３年連続でトップを走り続けてきた東京大学が今年７位に転落したことに触れたい。その大きな要因は「グローバル競争や国際化のための投資」において低評価だったことにある。教育・研究分野においては依然トップであったにも関わらず、このような理由で総合評価において順位が低迷したことに、僕たち自身も危機感を持たなければならないと思う。教育の場でも変革が必要とされている。僕たちの所属するSGHゼミのような取り組みにより多くの学生が、世界に目を向け、積極的に触れられるようにすることが多文化共生への一番の近道であると思う。これだけは自分自身の経験からはっきり断言できる。

そしてこのような取り組みを通じて、自分を知り、相手を知れば、日本のグローバル化に関するたいていの問題は解決に向かうのではないかと強く思うのである。

「多文化共生の実現のために」

１年　元吉千遥

１　はじめに

いま日本では少子高齢化の進展による労働力不足の解消のため移民を必要とする声があがっている。また「クールジャパン」と称し、外国人観光客の誘致にも積極的だ。確かに周りを見ると数年前よりも街を歩く外国人の人が多く見られるようになっている。その人たちと良好な関係を築けられれば良いのだが、マスメディアなどで在日コリアンの方々に対するヘイトスピーチの報道がされたり、近所の外国の方がゴミ出しのルールを知らなくて困るという話を聞いたりすると、まだまだ「多文化共生」とは胸を張って言える状況では無さそうだ。今回の大阪フィールドワークでは、在日コリアンの方が近隣の日本人とどのような関係性を持っているか、またどのような問題点があるのかなどを聞く機会を得ることができ、自分でも考えることができた。これからますます増えていくであろう「異なる文化をもつ人たち」と、いかにして良好な関係を作っていくか、人の意識の面から見た考えを私なりに述べたいと思う。

２　大阪巡検を通じて私が考えたこと

最初に我々日本人は、異なる文化をもつ人たちの中にもいろいろな人がいるということを知るべきだと思う。日本に住む外国人の中にも、この大阪フィールドワークでお話してくださった文さんのように親や祖父母の代から日本に移り住み、日本人と同じように日本語を話し生活する人もいれば、逆に日本に来たばかりで日本語もほとんど話せないという人もいる。たくさんの、しかも異なった生活や文化を持つ人たちを一括りにし、あの人は外国人だから○○、と決めてしまうのはよくない。周囲に外国人がいないという人に多いのかもしれないが、マスメディアなどで流される外国人が起こす事件だけを鵜呑みにし、日本に住む外国人を一つにまとめるのではなく、個人の付き合いを通して、その人の価値観や人柄などの人となりを見るべきではないだろうか。

だがしかし、上に述べたことを実現するのは簡単ではない。むしろ不可能であると私は考える。なぜなら人は自分のルーツを意識するからだ。意識の差はあるにしろ、どんな人も自分の国に誇りをもち、自分の国のアイデンティティを持っていると思う。日本生まれ日本育ちの文さんが韓国人としての誇りをもつように。だから、人は自分と同じアイデンティティを持つ人とそうでない人を区別する。区別することは悪いことではないのだが、早稲田大学国際学術院のファーラー・グラシア教授が述べているように国民と外国人というふうに境界線を引いてしまうことが、文化的差異を本質化・人々を文化的集団に分割し、人々を文化的カテゴリーに押し込めることにつながってしまう。このようにして国民と外国人というように人々を分割し、またカテゴリーに押し込めることによって、上記の個人の付き合いを通して、その人の人となりを見るということができなくなる。

では、自分のアイデンティティを捨てれば良いのだろうか。それも無理な話である。先程も述べたように人は誰もが自分のアイデンティティを意識し、誇りを持っているはずで、簡単には捨てられるものではない。ではどうすればよいのだろうか。まず大切なのはお互いの文化・生活を理解することである。よく耳にする日本人と外国人の習慣の違いとして、イスラム教徒のサラートが挙げられると思う。一日に５回礼拝が行われ、時間に差はあるが、昼の時間にあるときは、会社の勤務中にかぶることもあるだろう。そのような場合は、会社もその文化を理解し、更衣室の一角にそのようなスペースを儲けるなど、対応が出来ると思うし、そのような対応を行っている会社があるということを聞いたこともある。お互いが歩み寄ることで、解決できる問題も増えるのではないか。

３　まとめ

ここで述べたことは、実際綺麗事であって、これが実現されても、その他の問題がすべて解決されるとは思っていない。文さんから聞いたヘイトスピーチなどの類は、文化を理解したところで歴史的な問題や今の生活に不満を持っている人がするものなので、解決できない。また日本国籍を持たない人の職業選択が制限されるなど、人権が侵害されている問題も解決されない。だが、企業の中、学校の中、あるいは地域のコミュニティーの中で、日本に滞在する外国人ひとりひとりと日本人が互いを理解し、尊重するなど、私たちが身近なところから関係を深めることによって、「異なる文化をもつ人たち」と良好な関係を作っていく第一歩につながるのではないだろうか。

「外国人労働者および移民受け入れに関する日本のすべきこと」

１年　工藤文那

今回の大阪巡検で得たもっとも大きな収穫は、日韓関係史に沿った文化・政策の相違を学ぶことができた点にある。中でも、外国人労働者および移民を受け入れる際の政策を施行する速度が二国間で異なるのは、実に興味深かった。また、韓国が行っている、フィリピン人移住労働者のための社会活動には、日本も見習わなければならない点が多いと感じた。日本は外国人労働者に対する認識、取組み、関係の構築が、まだまだ不十分であり、改善する必要があると言えよう。

グローバル化の進んだ国際社会では、ヒト・モノ・カネの移動が活発に行われるようになった。労働力もその例外ではない。

日本に比べて移民を受け入れている割合が高い韓国では、日本より一歩進んだ政策をとり続けている。現在日本がむかえている「研修生時代」を、韓国は1990年代に終えた。その後、「在外同胞法」により、外国籍の家族が韓国国内で暮らせるようになり、「雇用許可制度」で二国間が協定を結んだことにより、合法的な期間移住労働が可能になった。さらに、2007年に「在韓外国人処遇基本法」が定められたのをきっかけに、韓国は「移住労働者受け入れ時代」の幕を開けた。もちろん、これらの法の整備が、外国人労働者にとって一概に良いものだったというわけではない。例えば、2004年に成立した雇用許可制度は、滞在期間や年齢が制限されているだけではなく、雇用主の変更が最大で二回までであり、定住ビザへの変更が難しいことなどが問題視された。今でも外国人労働者の家族は「多文化家族」や「結婚移民」と呼ばれ、差別的な目を向けられることも少なくない。しかし、韓国では、外国人労働者に対する政策や社会環境の整備を、積極的かつスピーディーに行っている。グローバル・センターの開設、国際結婚家族への支援、カトリック教会でフィリピンの主要言語のひとつであるタガログ語ミサを行うことなどは、その代表例である。

外国人の人権を尊重しつつ、社会統合の促進を進め、「より良いものに」と改善策を練り、迅速に実行するという積極的な韓国の姿勢とスピードは、日本が見習うべき大きなポイントではないだろうか。

多くの外国人労働者が暮らす地域では、コミュニティの形成により、社会活動と地域活性の両面からアプローチすることが可能になる。韓国のフィリピン人移住労働者のための社会活動は、国が行っているものだけではなく、フィリピン人自身が行っているものも多い。例えば、韓国人男性の妻として移住したフィリピン人女性のための支援は、彼女たちの積極的な「共生」の意思によって成り立っている。国際結婚夫婦の二世への文化継承プログラムでは、在韓フィリピン人の子供たちがタガログ語や英語を身に付けられるような言語習得教育

を支援し、未来を担う世代が「多文化」の社会で共存することを重要視している。

韓国・ソウル近郊のカトリック教会前では、日曜日になるとフィリピン人の出す露店が立ち並ぶ。そこでは、フィリピンの食材、古着、国際テレホンカードなどが露店で販売されているほか、支援関係団体相談ブース、店舗型食堂、電化製品店などが開店する。その他いくつかのグループが集まり、約2000人のフィリピン人と韓国人の露店主 (フィリピン人の配偶者)や見物客で街はにぎわう。

これらの活動により、フィリピン人には情報交換、小ビジネスを行う場ができ、韓国人には異文化交流を行う場ができる。異国の人間と、その土地の人間が意思の疎通を図り協力して生活することで、人間関係と文化が構築されていくのだ。この点では、フィリピン人の社会空間は韓国人によって形成されていると言っても過言ではないかもしれない。

日本では、前述のようなコミュニティが形成されにくい。韓国に比べて土地の所有に関する規制が厳しく、露店のようなフランクな場が設けにくいというのも大きな原因である。外国人労働者のための支援や社会活動は、世界的な規模で見ても、まして韓国と比較しても、とうてい十分なものとは言えない。

「外から入ってきたモノへの受け入れは積極的だが、外から入ってきたヒトへの受け入れは消極的である。」今回、三日間の巡検を通して私が日本人に対して客観的な視点で抱いた印象だ。国立民族学博物館の展示、永田貴聖先生の講義、文公輝さんのお話、生野コリアタウンでの経験を通して、日本人である私の、日本人に対する考えが、少し変わった。

日本の外国人の受け入れに関する歴史を追うと、朝鮮半島の文化、欧米の思想、機械、技術などは積極的に輸入してきたにも関わらず、「居留地」や「集合住宅地区」に集まって生活していた外国人労働者と日本人の関わりは、なかったとは言わないが、今の韓国のように親密なものがあったというわけでもない。たしかに、外国人労働者は受け入れ先の社会に様々な影響を与える。その影響が自国に不利益をもたらすものになる可能性もある。外国人の思想に日本が支配されるかもしれない。しかし、そのように恐れていては、グローバル時代を迎えた今、周りの国々に取り残されていく危険性があるのではないだろうか。

移民の受け入れは、社会に様々な影響をもたらす。まず、各国から訪れる外国人労働者を中心に、雇用の増加が期待される。これは、今日本で停滞しつつある、第一次産業に有効であると思う。「研修生」として、無理やり第三次産業に従事させるのは、日本の目先の利益しか見ていないようにも思える。主に発展途上国から来日した外国人労働者は、第三次産業よりも第一次産業の方が経験豊富であり、過去に培ったノウハウを存分に発揮できるのではないだろうか。日本の後継者不足も改善されそうだ。

雇用の増加によって、仕事を得ると、住居を得、生活ができるようになる。私は、土地の所有に関する規制が緩和され、外国人どうしのコミュニティが形成されやすい社会環境が整うことを望んでいる。生野コリアタウンのフィールドワークで、店どうしの買い物など、在日韓国人の「つながり」を目撃した。また、コリアタウンの街並みは独特で、建造物と店構えが日本とは異なる楽しさを持っていた。「多文化」に触れる環境が作られることは、各々の言語や生活文化の興味、知識の幅を拡げることにつながる。それはグローバル化に対応するために大事なことを学ぶ機会になり得るだろう。

もちろん、日本が外国人労働者をはじめとする移民を受け入れるには、まだまだ乗り越えなければならない課題がたくさんある。中でも最も大きな課題が「言語」である。言語は、情報の伝達、意思の疎通には必要不可欠だ。日本語は、現在世界に存在する言語の中で、最も難しい言語のひとつであるとされ、英語などに比べて学ぶのが容易ではない。だからと言って、外国人労働者に日本語を覚えてもらわないわけにもいかない。では、どうするか。意識的に教えるほかないのである。私が参考にすべきだと思っているのは、スウェーデンの「社会適応訓練」だ。多くは職業学校で学ぶプログラムで、言語はもちろん、生活文化やマナーなどを学ぶことができる。外国人労働者の家族にもこのプログラムを適用してほしい。

外国人労働者に対する日本人の関心のなさは、やはり重大な問題である。生活文化や言語に対して、「協力しよう」という試みがない。国も外国人労働者をはじめとする移民のための法整備、政策を積極的に進めようとしていないように、私は思う。「良好な関係」を築くためには、国境は関係なく、まずはお互いのことを知ろうという姿勢が大切なのだ。意欲的に取り組むことで、お互いの良いところを見つけ、高め合わなければならない。

「多文化社会」の中での「共生」は、決して容易なことではない。しかし、一人一人の姿勢が、取組みが、社会を変えていくのだ。グローバル時代を生きる私たちは、「異なる文化を持つ人々」と「新しい文化」を築く必要がある。それを見事成しえたとき、私たちが見据えるべき、新たな未来への道が切り拓かれるだろう。

（参考文献）
http://www.ritsumei-arsvi.org/news/read/id/609
http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews/179)

「H28年度 大阪巡検レポート」

1年　今田莉彩

国籍や人種が異なる人たちを見ると、「自分たちとは違う人たち」と認識する人は多い。中には、その人たちは自分よりも優れているのか、劣っているのかという判断を、無意識的に下してしまう人もいる。この潜在的な価値判断が、グローバル化した現代の日本社会における多民族の共生を妨げているのではないか。２日間の大阪巡検で私がこのような考えに至った理由を挙げていく。

最初に訪れた国立民族学博物館に、「多みんぞくニホン」という展示があった。ここでは、日本の歴史と、朝鮮人の渡航・生活状況が年表形式で展示されていた。それによると、1910年の韓国併合による、朝鮮での土地収奪や農村荒廃をきっかけに、多くの朝鮮人が来日した。そしてこれが今日、在日コリアンと呼ばれる人々が多く日本にいることの大きな理由の１つである。その後、満州事変により日本は満州国を設立し、第二次世界大戦中には多くの朝鮮人が強制労働を強いられた。これらはすべて工業力や軍事力で先を行く欧米諸国に追いつきたいという日本の願望の表れである。それだけでなく、この分野で日本よりも発展が遅れていたアジア地域について、その国力だけでなく、文化や歴史、尊厳をも軽視するという姿勢までもが、日本人の思想の根底にあったのではないか、と感じられた。

次に、在日コリアンの文公輝さんからお話を伺った。ここでは、「韓国・朝鮮人であるだけで、様々なハンデや差別が生まれてしまう」ということばが強く印象に残った。例えば、人種・国籍を理由にアパートの入居を拒否されたり、何の落ち度もないのに、ヘイトスピーチの対象となってしまったりする。実際、今回訪れた生野では、多くのヘイトスピーチが行われている。子供でさえも、韓国・朝鮮人に対して侮辱的な発言をしているそうだ。日本の近代化、欧米化の波の中で生まれたアジア軽視の思想が、訂正されないまま親から子へ伝えられ、現在でも根強く居残っている例と言えるだろう。

これらの問題を解決するにはどうすればいいのだろうか。次に訪れた生野コリアタウンは、解決に向けてのヒントを与えてくれる街であると感じた。この街では、韓国・朝鮮の食べ物やいわゆる韓流グッズ、さらに地元向けの物産が売られていた。店の人の多くは韓国・朝鮮人で、また観光目的で日本人やその他の国の人も多く訪れていた。

生野区は、古くは「猪飼野」と呼ばれており、多くの朝鮮人が暮らしてきた。この地名の由来には諸説あるが、古くは百済の時代より朝鮮半島からの渡来人が多く、その人たちがブタ（猪）を飼う技術をもっていたことから「猪飼野（いかいの）」と呼ばれるようになったらしい。このように、この地域は昔から朝鮮とのつながりが強い場所であった。

彼らは自宅の軒先や路上の屋台で、朝鮮半島の食材や衣料品などを売るようになった。また、この地域では近くの川が頻繁に氾濫し、そのたびに家屋に大きな被害が出るなど、居住地としての条件は決して良いものではなかった。そのため、そこにたつアパートなどへの入居希望者は多くなかったため、朝鮮人に対しての入居差別もなかった。さらに、ここには中小の町工場が多く、朝鮮人が働くことのできる場所が多くあった。これらの条件が重なったことで、この地域がコリアタウンになったと考えられる。

そして現在、ここでは日本人と朝鮮人がうまく共生できている。それはなぜだろうか。その答えとして、彼らは地域コミュニティを作り、互いに理解し合いながら生活していることが挙げられる。コリアタウンの近辺に住む人々は、「生野では、朝鮮人と日本人は喧嘩をし

合いながらもずっと共生してきた。時間をかけながらでも共に生きようとすることが大切だ」と言うそうだ。お互いを否定するのではなく、同じ地域に住む者同士、共生していくことに重きを置く姿勢が双方にあったため、違いを受け入れ、相互理解を深めていくことができたのだと考えられる。この視点こそが多文化共生に必要なことなのではないだろうか。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

１年　佐々木もなみ

日本人として知っておかなければならない事、また、伝えていかなければならない事がまだまだたくさんあるという事を文さんの話を聞いて、ピースおおさかを見学して実感させられた。

文さんの話の中で印象に残った言葉がある。「在日朝鮮人、韓国人に対してのヘイトスピーチなどの運動はメインターゲットとしては在日朝鮮人、韓国人だけれど実際は例えば女性など自分より弱い立場の人ならば誰でもいい。ただ自分より弱い立場の人を作りたいだけだ」という言葉だ。それを聞いてたしかにあるかもしれないと思った。

最近コンビニなどの店員で外国人が増えてきた。実際、私の家の近くのコンビニの店員はほとんど外国人だ。私は外国人の店員に対して冷たく接している日本人を見かけた事がある。特にミスをしたわけでもないのにそのような態度を取っているのをみて悲しかった。外国人は私たち日本にいる日本人からしたら、言葉そして生活文化も異なる社会的弱者である。そのような人にこそ親切にするべきだと思う。しかし、なぜ実際にはできない人がいるのだろうか。文さんの話によるとヘイトスピーチなどに参加している人はある程度の収入もあり、生活も安定している人が多いという。なぜ、そのような人が、弱いものいじめのような言動を取ってしまうのか不思議でならない。

ピースおおさかの展示から感じたことは「偏っている」という事だ。事前にyoutubeを見てピースおおさかがリニューアルして展示内容ががらっと変わったということは知っていたものの、実際に見て残念にしか思わなかった。日本が他国へあたえた被害については、教科書に載っている程度しか展示されていなかったからだ。それに比べ、日本が他国から受けた被害については日付や、爆撃の回数まで細かいところまで展示されていた。また、実際に経験した人の話の動画もあった。たしかに、日本が受けた被害も語り継がなければならない部分もあると思う。しかし、加害者側としての日本も後世に語り継がなければならない、と感じさせられた。

私は、永田先生の話をきいて、そして国立民族学博物館を見学して、SNSなどの発達による情報共有の国境がなくなる、且つ、人・ものの移動が活発になり、世界が一つになりつつあるいまの社会では、異文化理解、多文化共生は必要であると改めて感じた。

*資料１*では、ドイツでの多文化主義政策は失敗した、とされている。多文化主義政策によっても文化衝突が根絶できなかったことも挙げられている。私はこれは政策だけが問題なのではないと思う。例えば私たちは「日本人」「アメリカ人」「韓国人」というように人種で”ひと”を区別している。このように、一個人として”ひと”を認識するのではなく民族として”ひと”を認識している。そして自分と「同じ」「違う」というように分けたがる。

身近な例として私が中学生だった頃の話をしようと思う。私の中学校へは主に三つの小学校を卒業した人が通う。中学校のクラスではすぐにグループができる。大抵は「同じ部活」「同じ小学校」というような”同じ”という共通点を持った人で。また、そのグループの中に「違う部活」「違う小学校」などという”違う”が入り込むと無意識のうちに仲間外れ、大袈裟に言うと除外してしまうことがある。もちろん当人達にそのような意図はないだろう。しかし、結果的にそうなってしまっている。

交換留学でアメリカに行っていた人の話を聞く機会があった。その人の話によるとアメリカの学校では表向きでは普通に接してくれたという。しかし、ディスカッションなどをするときは目を一切合わそうとしてくれなかったそうだ。このように欧米の国では今でもこのような、アジア人に対しての人種差別が少なからず残っているらしい。

今、アメリカの事を例に出したが、これは日本にもそして他の国にも言える事ではないだろうか。それが問題なのではないかと私は思う。今の時代たしかに民族意識は持ち続けるべきだと思う。しかし、これは自分自身が持つべきものであり、他者を区別するためには持つべきではないと私は思うからだ。これからグローバル化はますます進み、さらに多くの人々が関わる事になるだろう。そんなとき一度、民族という括りをとって一個人として向き合ってはどうだろうか。それにより見えてくる糸口もあるのではないだろうか。

この時代をこれから背負っていく私たちはこれらの事について考えていかなければならない、と強く感じさせられた大阪巡検だった。

*資料1…多文化主義の何が問題なのか？

「大阪巡検を終えて、考えたこと」

２年　坂野水咲

「異なる文化を持つ人たち」とどうすれば良好な関係を作っていくことができるのか。

私はまず、何よりも私たち日本人が彼らの人権を尊重することが一番大切だと考える。

今の日本はお世辞にも、日本人以外の人々にとって十分に配慮した国であるとは言い難い。外国にルーツを持つ人の採用を避ける企業があったり、日本人との結婚を反対されてしまったりと、理不尽な差別が未だ存在する。また、新しく外国からやってきた人が日本の社会のルールに適応できず近隣住民とトラブルになるケースもある。更に、帰化するための手続きも労働者である彼らにとって非常にやりにくい方法となっている。また、「日本人」の線引きも曖昧で、例えば在日コリアンの２世３世（もしかすると５世まで）が存在する現在、どこまでが日本人なのかという問題に直面する。彼らは日本で生まれ育ち、日本名まで持っていて日本に溶け込んでいるのに、外国籍というだけで同じようには扱われてはいない。そもそも国籍で人を分けること自体がもはや無意味な時代である。それなのにどうしてルーツが違うだけで偏見や差別が生まれてしまうのだろうか。

これは一言、文化への理解不足によるものだと思う。日本で生まれ育ったといえども彼らは自分たちのルーツに誇りを持っていて、受け継がれている文化を大切にしている。国籍を故郷とのつながりを示すアイデンティティとして、日本に帰化しないという選択をする人もいる。そして人は自分とは異なる、そしてよくわからないものを恐れ、集団となって攻撃する傾向がある。マイノリティである在日外国人への差別はこの表れだろう。

だから逆に、他国、特に日本に多く暮らす中国や韓国、フィリピンやブラジルの文化についての相互理解を進めるのが第一歩になるのではないだろうか。例えば学校の授業に多文化紹介を取り入れたり、地域のコミュニティを活用して積極的に彼らとかかわりを持つようにしたりできるだろう。日本の移民受け入れの推移を見ると、外国人の管理を主としていたかつてのシステムから徐々に共生を目指すものへと変わってきており、国の方針としては彼らの人権に配慮する方向に転換していると考えられる。少しでも早くこの「共生」という理念が国民全体に浸透してほしい。しかし未だに技能実習生制度などの問題もあり、今後も移民のことを考えた制度を作っていく必要がある。

国立民族博物館の展示にあった「移民が語るライフストーリー」はとても参考になった。

フィンランドに移住した人の話を中心的に観たのだが、フィンランドでは移民のアイデンティティを守りつつも彼らがフィンランドの社会に溶け込めるような取り組みがなされていた。例えば、あるパレスチナ女性の話では、彼女はイスラム教徒なので家ではお祈りを欠かさないようにしていて、子どもは週に一回アラビア語の勉強をしている。また、フィンランド語を学べる環境も整っている。パレスチナからフィンランドに移住した男性の話では、フィンランドでアジアの食材を売るマーケットを開店したところ、今ではアジアからの移民だけでなくフィンランド人も訪れるようになった。アジアの文化に触れられる場所を作ったら、人々がアジアの食品や行動様式に寛容になったという。また同時にそのマーケットはアジアからの移民たちを支え、出会いを提供する場所としても機能しているようだ。この、新しい文化を生活に取り入れることができるのは、紛れもない移民受け入れのメリットである。メリットを探して、活かそうとする姿勢も移民受け

入れ国には欠かせないだろうと私は思う。
このように移民がフィンランドの暮らしに親しみ、またフィンランド人が移民の暮らしに親しむことのできる社会がフィンランドには形成されていた。
永田先生にお聞きしたことなのだが、移民が受け入れ国の中でその国の人々と共生していく為には移民のコミュニティ、例えばコリアンタウンや中華街、PAG-ASAなどの自助グループ、に受け入れ国の人が関わって支えることが必要だ。例えば日本では、移民だけのグループにいては、どうしても閉鎖的になり日本人との交流が少なくなるだろう。そうするとやはり社会的な弱者という立場が改善されにくい。移民とその国の人々の架け橋になる人がいれば、お互いの文化を発信できて、かつそれが広まりやすい。社会全体での文化理解を促すことにもつながると思う。例えば韓国では、在韓フィリピン人の露店で食べ物を売る韓国人がいる。フィリピン人と家族関係のある人だったからなのだが、それでもフィリピン人からしたら心強いだろうし、逆に韓国人からしたらフィリピン露店に行きやすくなるのではないだろうか。
訪れた生野コリアタウンの商店街には精肉店や地元の人が利用しそうな八百屋さん、キムチ屋さんが多く、逆にお土産屋がほとんどなかった。正直に言うと観光、というよりも在日コリアンの人々の生活にお邪魔しているような気分だった。
日本人にはあまり親しみのない食材を売っていて、また、隣の店同士での会話なども見られたことから生野のコリアンの人々が集まって自分たちのアイデンティティである文化を守り、次世代に受け継いでいく上で大切な役割を持っていると感じられた。
さて、最後に人権侵害の極端な例としてヘイトスピーチについて述べようと思う。
実際のVTRを見て衝撃を受けた。白昼堂々人権侵害を行っていた。私はてっきり差別をするのは中高年が多いだろうと思いこんでいたのだが、人権教育がしっかりなされているはずの若者も、中心になって差別的な言葉を叫んでいた。どうして、同じ人間なのに、祖先の故郷が違うだけなのに尊重できないのだろう、人として見ないなんてことができるのだろう。
本来多文化共生のために尽力していくべきはずの同世代の人々が列に加わっていたのはなかなか受け入れがたく、なかでも驚いたのは中学一年生の女の子が「南京大虐殺じゃなくて鶴橋大虐殺を実行しますよ」と叫んでいたこと。彼女は主催団体の責任者の娘ということで特殊なのだが、他にも居場所を求めてやってくる10代はいるとのことだった。きっと彼女もそうすれば親が認めてくれるから自然と参加しているのだろう。
ところで、余談ではあるが、実は文さんの講義を受けた後、ヘイトスピーチへの抗議をするカウンターの活動に参加したくなり少し調べてみたのだが、じつはカウンター側にも似たような人がいて、ヘイトスピーチ参加者に暴力を振るった例もある。私は怖くなった。もし自分が何も考えることなくただヘイトスピーチへの怒りだけでカウンターに参加したら、知らないうちに彼らの同類になってしまうのではないかと。差別主義者に抗議するのは賛成なのだが、それが暴力につながるのはおかしいと思う。それはきっと、差別されている在日外国人の人々が望むことでもない。カウンター活動に参加したいという気持ちは変わらないが、それがどのような性質のものなのかしっかりと調べた上で判断する必要があると感じた。
まとめると、「異なる文化を持つ人たち」と良好な関係を作っていく為に私が必要だと考えるのは彼らの立場に立って考え、人権を尊重すること。
そのためにはまず移民を受け入れることのデメリットをあげつらうのではなく、メリットを積極的に見つけて活かす方法を考えたり、どうすればデメリットを克服できるのかなどといったことを考えていく姿勢を国全体で持つことが大事だ。
そして一番大切なのは、彼らの文化を学び、理解しようとする取り組みを学校教育や地域の行事で行うことや、逆に彼らが少しでも早く日本の文化に慣れることができるような研修制度や地域のイベントを行ったり、私たちひとりひとりが身近な異文化を持つ人に寛容になること。ちょっと自分たちと違うというだけで遠巻きにしないで、日本という国の中では必然的に強い立場にある私たちから歩み寄る必要があるのだ。

「異文化との共存を目指して」

１年　山田真子

はじめに
異文化理解への道で、大きな障害となっているのは、「どうしても受け入れがたい文化がある」という事実だと考える。世界中の全ての文化が日本人に理解できる範疇にあるわけではない。たとえば、毎日５回、礼拝をするという文化は、その典型例とも言える。しかし、この「どうしても受け入れがたい文化」をどう日本で共存させるかが異文化交流の決め手になる。よってそのための方法を考察していく。

１　文化を生かす
そこで私は「異文化を取り入れるのではなく、生かす」という考えを示したい。つまり、異文化は異文化のままでかまわない。その異文化に魅力をどう生かしていくかを考えるのである。
・移民先での労働
私は国立民族学博物館で、移民が語る、移民先での生活についての動画を視聴した。
一人目の方は、ベトナムから難民としてフィンランドへ渡った方であった。フィンランドではベトナム語教室の講師をしている。二人目の方は、タイからフィンランドへ渡った方であった。13歳から２年間、職業学校へ通い、現在はタイレストランで勤務している。
二人に共通する点は、「出身国の文化を利用し労働している」点である。これは移民受け入れ国が、異文化を的確に理解しているとも読み取れる。彼らは「外国人」としての生活に苦労を重ねながらも、職については満足しているようであった。職において、出身国の文化がよく理解されているからであろう。これらは、移民受け入れ国が、異文化の魅力を生かし、さらには磨いている事例といえる。

２　文化を学ぶ
異文化の魅力を生かすにあたり、その文化の背景についても学ぶ必要性がある。
一例として、韓国の文化、現状から考察する。
・宗教信仰
朝鮮半島で広く信仰されている宗教に、儒教や仏教を思い浮かべる人も多いだろう。しかし、実際、韓国では人口の約30%がキリスト教信者である（プロテスタント：約20%、カトリック：約10%）。キリスト教信者もかなりの割合を占めているのだ。そのため、ソウル市内には多数の教会が建てられている。
・移民増加
現在、韓国から海外への移民が増加している。この背景には韓国特有の「よりよく生きる」という思想が関係していると考えられる。
1980年代まで、韓国から移民する背景に「経済的事情」「よりよい生活環境を求めて」という考えがあった。
それに対し、現代では、「子女の教育」「国際化社会をよりよく生きる」といった理由から移民する人が増加している。私は、この最大の原因は、韓国の根強い「学歴社会」にあると考える。
そこで、就職にあたり、人気の集まっている、国家試験を見てみる。
＊司法試験合格者の受験準備期間の状況＊
２年以下：1,1%
２～３年：12,8%、
３～４年：27,7%
４～５年：30,9%
５年以上：27,7%　　(2004)

＊国家資格取得年齢別内訳＊
20～24歳：14,9%
25～29歳：42,6%
30～34歳：31,9%
35～40歳：8,5%
40～44歳：2,1%　　(2004)

これらの資料から読み取れるように、韓国では国家資格を取得するまでには険しい道のりがある。その上、国家資格を取得してから、就職に臨むと考えると、韓国は日本と比べ、職に就くまでに多くの年月

を要する。学歴が非常に重要視されるために、この苦しみから、若者たちは逃れることはできない。そこで、海外に移民して、就職しようという人が増加しているのである。これが韓国からの移民増加の理由のひとつだ。

多くの日本人にとって、移民という存在は遠いものに感じるだろう。しかし、韓国では、生活からそう離れたものでもなく、書店には多くの移民の指南書が並べられている。

韓国には、隣国としてありながらも、私が気づいていない文化が多く存在した。この事実から、相手の文化を深く考えることもせずに、異文化を語るべきではないと痛切に感じる。文化を学ぶ姿勢は、必要不可欠であるとわかった。

3　文化を「個人レベル」で捉える

最後に私は、異文化を持つ相手を、「個人レベル」で捉えることが重要だと考えた。理由は、ヘイトスピーチに代表される、異文化に対する多くの差別は、日本人が、外国籍をもつ人々を、「その国の者」として、過剰に意識してしまっていることに起因しているためだ。

私は、今回の大阪巡検で講師をしてくださった、在日韓国人の文公輝さんが生活の中で感じる思いや、ヘイトスピーチ活動の現状を聞いている間、差別を行う人々に対して、「本当にあなたの周りの在日韓国・朝鮮人が何か悪いことをしたか」と尋ねたい気持ちに、幾度もなった。この気持ちの発端は、若い世代の声を聞いたことだった。彼らは、戦争の被害を目の当たりにし、戦後の複雑な国際関係の中を生きてきたわけではない。ましてや、その時代を生き抜いた人々にも、何か影響があったのかさえ曖昧である。それなのにどうして差別という判断に到達するのかが、不思議でならなかった。彼らは、一方的に流れている情報で判断を推し進めてはいないだろうか。国と国との問題から国民をも同時に判断してはいないだろうか。疑念を抱いてしまう。

視点を変えれば、差別・偏見は、「個人レベル」の交流によって軽減されると考えられる。各個人と、国籍の垣根を越え、正面から向き合い、対話する。こういった交流が増加すれば、異文化理解への道が、国と国との問題に阻まれることはなくなるはずだ。

また、今回巡検した大阪は人口の約2,3%が外国籍を所有する人々だ。対して、日本全体では人口の1,7%。大阪は比較すると高い数字にある。とすると、「個人レベル」の交流のチャンスが多いマチでもあるということだ。大阪から、異文化とのよい関係を築いていけるとよいと感じた。

まとめ

「異なる文化の魅力を、取り込むのではなく、生かし、磨いていく」

「相手の文化の背景を知るために、その国の理解を深める」

「様々な文化を個人レベルで捉える」

以上の三つの観点を心に留め、「受け入れがたい文化」までも、魅力として磨いていきたい。そして私たちは、異文化を持つ人々に、魅力を感じてもらえるような存在でありたいと強く願う。

（参考文献）

国立民族博物館資料

2004年司法試験合格者の状況

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

1年　小川コナ

自分とは異なる文化を受け入れるということは、同時に“文化の違い”をはっきりと認識することでもあり、それに努める全ての人が、広い心を持って関わっていくことがとても大切で、有意義なことであると感じました。多文化社会という言葉をよく耳にしますが、環境によってさまざまな文化がうまれ、それが長い時間うけ継がれてきたことは、個人的には、大変魅力的なことであると思っています。今日よく云われるグローバル化においても、“文化の違い”の理解を深めていくことは、欠かせないことだと考えます。国立民族学博物館では、アジアという地域の中でも、想像していた以上の多数の文化の存在を知り、これを学ぶ重要性を改めて感じました。

異なる文化を理由に差別をすることは、絶対にあってはいけないことです。日本では、悲しいことに、在日外国人、特に在日韓国朝鮮人に対してヘイトスピーチで差別をあおったり、インターネット上で罵ったりする人がいます。このような行為はあってはならないことです。この件の問題の解決には、教育が大きな役割をはたすのではとかんがえます。

なぜなら、幼いころから多種多様な文化を持った人々と沢山関わりを持ち、学ぶことで、文化の違いがあっても、同じ人間であることが理解できていれば、差別の根源を絶つことが可能だと思ったからです。文さんの講義で、中学一年の女の子が、ヘイトスピーチデモで、残虐な言葉を叫び、周りの大人たちにたたえられている様子を見たときに、環境によって人間はどのようにもなるのだと改めて感じました。これからをより良く生きていくためには、内向的な、自分たちだけが正しい、外国人排除の考え方から抜け出し、クローバル化の進む社会に向き合って広い視野を持ち、自分だけでなく、周囲のことも心に置いて行動することのできる力が必要だと、強くかんじました。これは、簡単に身に付くことではないので、やはり、教育が要になると思います。

差別はあってはならないことですが、まだまだたくさんあるのが現状です。少数派である社会的弱者である在日外国人の為のコミュニティが欠かせない存在だということも、知ることができました。なかなか無くならない差別の中で孤独に生活するのは、とても辛い事とおもいます。韓国では、フィリピン人の露店は、法律上禁止されているにもかかわらず、黙認されているという事例がありました。日本では法律が厳しいためありえないことですが、母国の人々と繋がることのできる唯一の手段であるならば、このことは、日本も受け入れるべきだと考えます。外国人を受け入れると治安が悪くなるという固定観念があるようですが、それは低賃金で働いていることで生活苦になり、どうしたらよいか判らなくなった人が事件をおこしてしまうからではないでしょうか。コミュニティが存在することで正気を失ってしまうような状態になった時でも、相談の場があることでこのケースは減るとおもいます。もし私が異国の地で何も分からず不安を抱えたまま暮らすことになったとしたら、辛い事、悲しいことがあっても、言語などが異なるために気持ちを伝えることが出来ない状況は、想像であっても息苦しくなります。このことから、現在暮らしている多くの在日外国人が極めて厳しい立場であることがわかります。互いの配慮があってこそ、住みやすい社会にを築くことができるとかんがえます。

日本に住む外国人の中でも、高い割合を占めている在日コリアンの一人、文さんからの視点を直接聞けたことで感じたことは、外国籍だけど、生まれも育ちも日本だから、日本語しか話せない、籍のある国のことは殆ど知らない、という在日二世・三世が沢山存在するいま、容姿や籍だけで外国人だという扱いは、あってはいけないということです。自分の本名を隠して、通称を使って暮らしている人も少なくないことから、差別からの回避手段もわざわざ考えなくてはならない暮らしぶりに、心が痛くなりました。

大阪巡検での二日間は、普段の生活では機会のない貴重な体験ができました。韓国との関係を中心に、異なる文化の人々と、共に生きることについて考えを掘り下げることが出来たことで、日本人として、この先も意識して進もうと強く想いました。また、この国が一丸となって生活に近い所でのグローバルな考え方のできる人間を育むことができれば、本当の意味での強さを得ることができるのではとも思いました。

「文公輝さんのお話を聞いて」

1年　小澤響子

1　ヘイトスピーチからわかる日本の現代社会

大阪、特に生野区は５人に１人が外国人と、日本で最も在日外国人が多い地域である。にもかかわらず、その生野区で日本で最大級の在日外国人に対するヘイトスピーチが起こった。ヘイトスピーチの映像には、「日本から出て行け」「殺せ」というプラカードを掲げて、周囲の在日韓国人を威圧しながら行進する日本人の姿が映っていた。なぜ、在日韓国人と最も近くで生活しているはずの彼らがこのようなデモを起こしたのだろう。彼らはそれほどの憎しみを本当に抱いていた

のだろうか。
日本には外国人に対してあまり良くないイメージを持っている人が多い。一般的に言われる理由としては、日本は長い歴史の間、ずっと島国であるため、外国人に対して閉鎖的である、ということが挙げられる。それも一理あると思うが、根本的な理由は別のところにあると私は思う。それは、外国人はマナーが悪い、治安を悪くするといった”なんとなく”のイメージである。このイメージは、多くがマスメディアによって形成されるものである。確かに、観光客がゴミを大量に捨てていったなどのニュースを私も聞くことがある。多くの人にとってそれは実際に見たものではなく、文字情報として他者から与えられただけのものであるため、あまり印象には残らない。しかしそのような報道が積み重なることで徐々に日本人の心の中に”外国人”に対する良くないイメージが構築されていくのである。実際には、問題とされる行動の多くは一部の観光客や日本にきて間もない人たちによるものであるのだが、私達はそれを全ての外国人に共通するものだと思い込む。そして偏見を持って最初から個人を決めつけてしまうのだ。
こうした思い込みだけで行動し、近くにいる外国人を知ろうともしない姿勢が、現在のヘイトスピーチを生んでいるのだと思う。

2　在日韓国人のアイデンティティー

在日韓国人とは何だろう。日本人とはなんだろう。
文さんのお話を聞いて、強く疑問に思った。在日コリアン二世、三世は日本で生まれ、日本で育ち、日本語を話し、日本の姓を持つ。多くは韓国語が話せないという。彼らと私達の間に何か違いはあるのだろうか。
在日韓国人は大きくなると、私達よりも深く自己について考えなくてはならない状況に置かれる。考えた結果、自分は日本人であると、日本国籍に帰化する人もいるし、祖先との繋がりを大切に思って帰化しない人もいる。その判断は当人のみによってなされるべきであり、決して他の介入があってはならない。しかし、今の日本社会を見てみると、少なからず”日本人”の方が”韓国人”よりも優遇されている。例えば、在日韓国人だと、お金を借りる際に日本人よりも厳重な身元保証を求められる。国政参政権が認められていない。外国人という理由でアパート、マンションを入居拒否される。このような不当な扱いのもとで、生きていくために帰化せざるを得なかった人がいるのではないだろうか。文さんはこのことを自分に置き換えて考えてみてほしいと言っていた。たまったものではない。私はれっきとした日本人なのだから。そう思った。自分の意思とは関係ない事情で在日韓国人が自己のアイデンティティーを押し殺さなければならなくなることは、日本の制度が彼らの人権を犯していることと違わないと私は思う。
今日、世界中で日々技術が進歩する中で、人々はインターネット上の密なやりとりを真の友情とはき違え、情報を手に入れたい時にはインターネットに迷わず答えを求めるようになった。
人々は異文化と触れ合い、時に衝突し、自分の考えが大きく改められるのを恐れているのではないだろうか。
また、たいていのことは自分で経験をするのではなくインターネットで検索して済ませてしまう姿勢や、手に入れた情報をよく確かめもせず鵜呑みにする姿勢が、異文化理解というデリケートな問題において大衆の偏った見解を作り出しているのではないだろうか。
現代社会の風潮によって人間の在り様が変化している今、この問題を解決する方法は、外国人と生身で触れ合うこと、これしかないと思う。教科書で相手国の文化を学ぶことも大切だが、実際に私達が共生していく相手は個人なのだ。それをきちんと理解したうえでそれぞれが個人としての外国人に向き合っていく必要がある。
在日韓国人の国籍に関しては、まず日本が国籍による差別的な扱いを止め、彼らが胸を張って自分の国籍をいうことができるような社会を作っていくことが大切だと思う。
外国人と日本人の両方から考えて、私達が今すべきことは互いに歩み寄り、理解し合うことであると感じた。私達がコリアンタウンを訪れた際には、日本人はほとんど見られなかった。なのでまずは日本人が積極的に外国人を受け入れる姿勢を示し、彼らとの触れ合いを通して、互いの文化を尊重して共生していく必要があると思う。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

２年　新海花音

「グローバル化」の定義は、「地球規模で様々な活動が行われ、世界が一体化すること」である。それにより、ルールや基準の統一が行われることは便利なことである。しかしその一方、言語や文化の面では、個性が薄まってしまう迷惑な現象となり得る。つまり、現在のグローバル化は一概に『よい』とは言えないものであると考える。では、「よりよい関係」とはどのような関係なのだろうか。
まずは、日本国内での関係について考えようと思う。
日本人には、知らない・理解できなさそうといった理由で物事を避ける、いわば食わず嫌いな傾向がある。私自身にも、避けるとまではいかないが、そういったところがある。私は在日コリアンについて、彼らは日本語を話すのに苦労している、朝鮮人学校に通っている、というイメージしかなかった。正直、韓国人は韓国人であり、日本人とは違う人たちだと思っていた。
しかし、今回の巡検で私の持つイメージが正しくなかったことが分かった。私たちに講義して下さった文さんは、外見も話し方も言葉も，日本人と何ら変わりがなかった。それに、学校も普通に公立の学校に通っていたそうだ。
この巡検以前にゼミにいらした韓国人留学生と比較してみても、文さんの伝え方や言葉の選び方、感じ方などは日本人と変わらない。留学生の日本語の語彙が少ないことを考慮しても、そう言えるだろう。違うのは、国籍が日本でないということだけだ。
現在、日本の人口のおよそ六十人に一人が外国籍である。他の国に比べれば、これは確かに割合としては少ない。しかし、この数値は今まで私が出会った人の中に外国籍の人が何人かいてもおかしくない数であるし、今私の周りにいる人が外国籍の人である可能性も低くはないということを示す。国籍の問題は思っている以上に身近なものなのである。
自文化に他文化が入ってきた際、どんなことが起こるのか。日本の文明開化の場合、まず、目新しいものに興味を持ち、それを取り入れた。そうして、人も街もあっという間に西洋文化に染まっていった。だが、あまりに自文化が他文化に侵食され始めると、次に自文化を守りたい、大切にしようという動きが現れる。現在のように流入するのが大量の移民や難民であると、なおさら自文化保護の動きが強まる。それはある意味、当然のことかもしれない。日本も例外ではない。それは､日本人の移民に対する感情は以下のように進むと考えるからだ。
１､「ここは日本なのだから、ここで暮らす以上日本の文化や習慣に従うべきだ。」という主張が強まる。
２､数回教えて効果が無いと、「私たちとは違う人たちだから理解できるはずがない、どうしようもない」と諦めるようになる。
３､「迷惑をかけられるから嫌だ」と排除しようとする。
他文化の理解は、移住する側と受け入れる側が相互に行わなければならないが、このような考え方の日本人が増えれば、「とりあえず人の受け入れはするが、異なる文化や宗教は受け入れず、関わろうとしない」という状況に陥るだろう。このままでは、よりよい関係など築くことができるはずがない。では、このような状況にならないためにはどうしたらよいのだろうか。
他文化の受け入れの問題改善のヒントはスウェーデンやフィンランドに見出せると考える。その根拠は、大阪の国立民族博物館で観た、その二国の移民へのインタビューを撮影したビデオ中に二つあった。
一つは何人かが語った､「初めはなかなか受け入れられず、文化や習慣の違いに苦労した。しかし、何年か過ごす内に自分自身がこの国での生活に慣れ、周りの人々も自分たちを受け入れてくれるようになった」という言葉だ。ここでまず注目したいのは、「何年か経た」という部分である。相手を理解するにはそれだけ時間を要するということなのだろう。つまり､辛抱強さと根気よさが必要なのだ。
もう一つはある女性の、「私は家庭では祖国の言葉で会話し、仕事など外ではこの国の言葉を使う」という発言だ。互いの文化を尊重し合わなければならないが、文化同士の完全な融合はほぼ不可能である。必ずどこかで衝突が起きる。彼女は、最低限の「郷に入っては郷に従え」は守り、自文化も大切にしている。これは､立派な文化の共生の一つだ。彼女が移民先の文化に対応できたのは、国が言語や社会適応のための講座に力を入れているからでもある。それに比べて日本

の制度はどうだろう。
ビデオを観て、私は移民の存在が世界のよりよい関係の重要な役割を果たすのではないかと思った。なぜなら、前出の二国では確実に共生が進んでいると感じるからだ。また、なぜ移民なのかというと、観光や留学は一時的な交流であり、ある程度の理解は得られても本当の姿を理解できるとは言いがたいからだ。つまり、文化は日常生活に根ざすものだと考えるからだ。
世界規模のよりよい関係に必要なのは、昨今のグローバル化ではなく、各文化の個性を残したままの新しい別のグローバル化だ。そのための相互理解を時間をかけ、妥協せずに続けることが大事だ。グローバル化を成功させるためには、まず身近な地域から始め、順にその範囲を拡大していくべきだ。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

1年　石塚和香

グローバル化が進む社会のなか、日本全国にいる韓国・朝鮮国籍の人たちとの逼迫した関係が、このままでは立ちいかなくなるというのは明白な事実である。そして、二年後には選挙権をもつことになる私たちの世代が、これからこの問題について考えてゆくことになるのだ。そのとき、私たちは日本人としてではなくて、ひとりの社会人、国際人として広い視野を持たなくてはならない。自分の国の被害ばかりを知り、他国のことを考えないのは、問題解決をただただ遅らせるのみである。そこで私は、今回の大阪巡検では、日本側でも、韓国・朝鮮側でもない、一歩引いた視点から、歴史と今を考察しようと考えた。これから書く諸問題も、そのような視点から読んでいただけると幸いである。

1　アジア人に対する差別意識と私が考える原因
日本は、現在も過去も、ヨーロッパ人に対して劣等感を抱き、アジア人に対して優越感（この場合優越という言葉が適するのかわからないが）をもっているように思われる。しかし、たとえば中国と韓国と日本で、一番先進的な国は日本だと決めつけることはできない。確かにいち早く高度経済成長を終えたのは日本であるが、その後の経済成長で、他の二国は、日本に追いつくどころか追い越す勢いである。実際に、中国のGDP、国内総生産は日本をあっという間に抜き去り、アメリカに次ぐ二位となった。韓国もインドとともに圧倒的なGDP成長率をみせ、近い将来、日本と肩を並べる日が来るかもしれない。そんな国たちに、なぜ絶対的ともいえる優越感が、日本人にはあるのだろうか。答えは、国立民族学博物館で見付けることができた。日本とアジア、特に韓国の文化は酷似している点がたくさんあるのだ。仏教の信仰や、書道などがその例である。進んだ西洋の文化は、日本にとって新鮮で画期的なものだったが、同時に恐怖でもあった。自国と非常に似た韓国の文化から、相違点を見出し、そこをとらえて自国のほうが勝っていると考えるのは容易である。だが、もちろん文化に優劣はない。韓国を遅れた国とみなして、植民地支配の事実を韓国の経済発展に寄与したのでやむを得ないという意見には、私は真っ向から反対する。韓国人の留学生の方が言っていた、「もし、植民地支配をされないが、発展もしないという韓国の歴史を選べるのなら、迷わずそちらを選ぶ」という言葉がよみがえる。その前の討論での高校生の発言、「韓国併合はやむを得なかった」を受けての言葉だった。お互いに、考えを内向きにしてはいけないと感じた。それは、文化が似ている隣国だからこそ、考えなくてはいけないことである。

2　在日韓国・朝鮮人の二、三世は韓国人なのか？
私が誤解していたことで、今回分かったことがある。それは、在日コリアンの人が必ずしも日本国籍を取得したいと思っているわけではないということだ。まず、国籍の取得というのは、費用と時間をかなり要するものらしい。行政書士を雇い、仕事を休んで面談にいき、そうまでしても過去の軽微な犯罪、例えば自動車の速度制限を守らなかったことによる、道路交通法違反などで許可されない場合もあるという。そこまでして日本人になりたいかというと、そういうわけでもないと、在日コリアンの団体の代表者である文さんは語ってくれた。在日コリアンの人は、流暢に日本語を操り、顔も一瞬では区別がつかない。名前も、日本の名前のような通称名と本当の名前を使い分け、差別の目を恐れてはいるが、自らのルーツを大切に思っている。そういう人が多いというのだ。青春時代は、人と違うことを極度に恐れ、隠そうとする気持ちもあったが、大人になってそのような気持ちは薄らいだと聞いて、とても共感した。国籍のことは、個人のとても繊細な問題なのだと知った。その人たちに対して、無責任に、「差別が気になるならば、帰化すればよいのだ」というような軽率な発言は、してはならないのだ。

3　これからの異文化との関係のあり方
愛国心という言葉はときにとても恐ろしい意味をもつ。私個人としては、誤解が生まれるのを防ぐために、この言葉を使用することは極力控えるようにしている。しかし、誰の心にでも、大きい、小さいという違いはあっても、自分が生まれ育った国への愛着は存在するだろう。在日コリアンや、その他の外国籍の人の心の中には、その国が二つあるだけだ。マイノリティーという言葉は、社会的少数派という意味で、社会的弱者という意味にしたくない。私たちは、日本人という狭い考え方の枠から抜け出し、ひとりの人類として差別を蔑視するべきだ。自分の意思で選択して生まれた国ではないといったら、薄情なと思われるかもしれないが、国にとらわれて考えを構成していくことほど無意味なことはない。前述の通り、ひとり一人が広い視野をもつのである。そうしたうえで、自分が日本人であることを再確認する。これからの社会を担うものとして、そういったものの考え方をしていきたい。

「大阪巡検を通じて」

2年　田中茉凜

今回のレポートのテーマは「異文化を持つ人たちと良好な関係を築く方法」ということだが、その妨げとなっているものの一つに「相手に対する理解不足」があると思われる。特に日本人は全体として彼らに対する偏見を持ちやすい傾向が強くみられ、その理由として日本は島国で外国人との関わり合いに慣れていないことが挙げられている。しかし果たして現在の日本人の異文化理解の不足というのは本当にそれだけなのだろうか。現在、歴史認識問題が表面化し韓国や中国との政治的対立による関係悪化が懸念される中、日本では相手国に対しての批判的風潮が広まりつつあり、そうした中で形成されたイメージというのが日本人の異文化理解に対する消極的な姿勢の大きな一因となっていると私は思う。しかし政治上の問題となるとそれが解決しない限り、彼らを批判的に捉えてしまうのはごく自然なことであり、そういった点で異文化の人々と日本人が衝突せず共生していくのは難しいと考えていた。だが今回の巡検を通してその考えは少し変わった気がする。新しい可能性が見えた気がしたのだ。
その最も大きなきっかけとなったのが文公輝さんの講義だ。在日コリアンとして長い間、結婚や名前の差別に苦しんできた彼の話を聞いて、私はどれだけ今までの自分の意見が偏っていたかを知った。中でもそれを教えてくれた彼の言葉の一つで「一人一人に複雑な事情があるのだから無責任な意見はとても傷つく」というのがとても印象に残った。それは先生の「帰化すればいいという意見に対してどう思うか」を問う質問に対する答えの中の一言なのだが、それを聞いたとき私は正直そう思っていた自分をとても恥じた。ごく当たり前のことだが、彼らは人間でありそれぞれが色々な事情を抱えているし、ましてや国籍の問題なんて彼らにとっては最も繊細な問題の一つであることは明らかである。そうとも知らず我々日本人は在日朝鮮人・韓国人を、韓国で暴動的な反日デモを行っている彼らと全く一括りにして、理解の出来ない「モノ」とみなしてしまっているのではないか。だからこのような差別が起こりうるし、ヘイトスピーチなんてまさにそれを表す代表的なものであると思う。ヘイトスピーチの映像を初めて見たとき私はあまりの驚きに開いた口がふさがらなかった。日本でまさかあんな下品なデモ行進が行われていたなんて。私が想像していた韓国の反日デモと全く同じようなことを日本人がしていたという事実に大きなショックを受けた。いくら当事者の彼らに様々な事情があるとは言えども、あんな無神経に人間の尊厳を傷つけるような行為は絶対に許してはならないと思うし、そもそもあれは意見を表明する態度として全くもって望ましくない。政府は早急に対応していくべきであ

る。話は少しそれたが、では何故日本人はそのような偏見を持つようになってしまったのだろうか。その偏見が異文化を持つ人々との衝突を招くわけだが、それにはマスメディアの影響が大きく関わっていると思われる。私は講義の後、個人的に文さんに「逆に韓国で行われている反日デモについてどう思うのか」といった内容の質問をぶつけてみた。あの反日デモも少し感情的な場面がみられるのでヘイトスピーチに似たようなものを感じたのだ。すると文さんはこう答えてくださった。

「あれはほんの一部の人間にすぎないんですよ。皆さんスマホとかでニュース見るでしょ。日本のほとんどのメディアはその過激な様子しか取り上げない。」

なるほど、と思った。つまり我々は韓国に対するイメージを報道メディアによって操られていたのだ。実際に日本のgoogleの画像検索で「韓国」という言葉を打ち込んでみると真っ先に出てくるのは韓国の反日行動を風刺するような内容のものだが、文さん曰く韓国のgoogleで「日本」を検索してもそういったものは見られないという。韓国人は皆が皆日本を訳もなく嫌っているとばかり考えていた私は驚いた。メディアは自己の利益の為に人々が興味を示すような情報だけを流し、その扇動性は年々強くなっている。そして国民はごく限られた情報だけを信じ込み、双方のことをよく知らないまま主観的な意見をぶつけ合うのでますます偏見は強まり、歴史認識問題についてもいつまでも解決策が見つからないのだ。そこで私が打開策として真っ先に思い浮かべたのが教育である。メディアによる偏った観念が固定される前の若いうちから正しい知識を学んでおくのだ。そしてメディアの伝える海外情勢に惑わされないよう自らが直接関わり合い互いの本当の意見を聞いて確かめることも大切だと思う。そういった面では、学生同士の交流はとても意義のあるものだし、そのような機会を設けているSGH事業のような教育プロジェクトを政府は更に促進していくべきだと思う。ではそんな教育を受けられない現在の大人はもう理解し合うのは無理なのかといったらそうではない。もう一つ、偏見を無くしていく手立てとして民間の文化交流が挙げられる。今回の巡検で生野コリアタウンを訪れて韓国の文化を楽しんでいるうちに、私は韓国への悪い印象が薄れていることに気が付いた。コリアタウンの人々は皆明るく親切で、そこでは日本人も韓国人も互いの文化に親しみ共生しており、私は文化の持つ力と相互理解への可能性を十分に感じた。文化を紹介する催し物を地域で開いたり海外の伝統料理を給食に出すなど文化交流は多方面で取り入れることができるので、これの促進にも期待したい。

つまり異文化衝突を引き起こしている要因には様々なものが挙げられるが、全てにおいて言えるのは必ずどこか偏見や差別的感情があることである。その偏見を無くしていくためには皆が「お互いを知る努力」が必須なのだ。確かに一億二千八百万の考えがあるこの国で異文化への理解を持ち共生できる社会を築き上げることは決して容易いことではないだろう。しかし我々が最もしてはならないのは知る努力を怠ったままそれを諦めることであり、グローバルな視野を持って冷静に客観的に皆が幸せになれる最善策を探っていくべきなのだ。それを知ることができたのが今回の巡検の私の一番の成果だと思う。そしてここで知って終わるのではなくこの考えをもっと多くの人々に伝えられるよう私なりに考えていきたい。

「異なる文化を持つ人たちとの共生について」

２年　渡邉美月

私達が「異なる文化を持つ人たち」と良好な関係を作ってゆくには。私はお互いを「外国人」ではなく「個人」としてみて付き合ってゆくこと以外にないと考える。文公輝さんの講義の中でみたヘイトスピーチの映像は衝撃的だった。挑発のように連呼される「チョンコ」という侮辱の言葉、「虫けら」「ゴキブリ」など韓国・朝鮮人を人と見なしていない呼び方、さらには「死ね」「殺す」など脅しと捉えるような過激な言葉まで……。極めつけは当時12歳であったという少女のスピーチでの一言。「南京大虐殺じゃなくて、鶴橋大虐殺を行いますよ!!」軽率で馬鹿馬鹿しい子供の戯言に「そうだそうだ」と歓声を上げる大人達。どう見ても異常だ。同じ日本人として恥づかしいし、彼らに対して怒りを覚えた。

私はヘイトスピーチを実際に見たことはないが、年平均329回、およそ毎回一回のペースで行われているそうだ。しかも、これらは大体土日祝日に行われている。つまり、週末には全国各地でヘイトスピーチが行われているということだ。

何が彼らを駆り立てているのか。私は教養がない者が、日頃の不満、鬱憤を朝鮮人に当てていると思っていた。確かに私が述べたような層も参加している。しかし、彼らの中核は大卒で、年齢・年収が高い層、つまり「教養がある」層だという。彼らは教養があるゆえに、歴史的背景や領土問題を理由にこのような活動をしているそうだ。

この事実は私にとって意外であった。同時に、「タチが悪いな」と感じた。彼らは学歴や地位柄、自分たちの主張は正しいと譲らないであろう。また、無教養な者も、統制者が教養があるゆえ、自分たちが行っていることに自信をもってしまうであろう。これはとても恐ろしいことだ。

国立民族博物館を見学して感じたことがある。それは「日本文化の特異性は突出している」ということだ。博物館は地域ごとで展示されていた。そのブロックの文化は独自性もあるが、大方類似しており、色彩も統一されているように見えた。例えば、アフリカブロックは赤や褐色の地面に馴染むような色調、東南アジアは赤黄色などの鮮やかで派手な色調で統一されていた。日本が所属する東アジアブロックも独特な色調で統一されていたが、その色使いは日本では見慣れないものであると感じた。つまり、日本文化は東アジア内でも孤立しているということだ。

どうしてそのようなことになったのか。その理由はもちろん、長い間の鎖国もあるが、日本が島国であることも関係していると思う。島国であるがゆえに他国との交流が大陸と比べてしにくいため、日本独自の文化が発達したのではないか。そして、「日本文化」や「日本人のアイデンティティ」を確固たるものとし、「日本人」と「外国人」との境界をはっきりと線引きしてしまった。長い間保たれていたその線引きにより、私達日本人は外国人を「わたしたちとは違うもの」と見なしてしまっている。

近年のグローバル化により、多くの外国人が日本にやって来ることで「日本文化」が崩壊するのを恐れ、「日本人のアイデンティティ」を確保するために、彼らを排除しようとする日本人もいるであろう。前述したヘイトスピーチもその「排除」の手段の一つなのでは？　もしそうだとしたら、その行動はとんだ見当違いだ。在日外国人の中には文さんのように日本で生まれ、日本で育ち、日本文化に馴染んでいる人たちも多くいるからだ。彼らは国籍以外は私たち日本人と何ら変わらない。それなのにただ国籍が違うだけで「外国人」とみなされ、ひどい時には人外のように扱われてしまっている。これが痛ましい現実だ。

この現状を打破するためには、一番最初に述べたように、お互いを「外国人」としてではなく「個人」として、○○さんという１人の「人間」として付き合って行くこと以外にないと思う。私達日本人の中にもまったく同じ性格の人はおらず、一人一人「個性」を持っている。それと同様に、国籍が違うことも文化が違うこともその人の「個性」であろう。また、日本人だけが人間なのではない。国籍が違っても、その人が人間であることに変わりはないであろう。

これからの時代、在日外国人はどんどん増加してゆくであろう。夢物語かもしれないが、日本人と外国人が「個人」としてお互いを尊重しあいながら平和に暮らしてゆける。私たちの世代でそんな社会を築いてゆきたいと思う。

「大阪巡検を終えて」

１年　藤原巧斗

僕は、「異なる文化を持つ人たち」のことを知り、グローバル社会の今日，良好な関係を築くためにするべきことを学ぶため大阪を巡検した。

まず初めに国立民族学博物館を訪れた。そこでは様々な民族文化、主に朝鮮半島の文化について学ぶことができた。朝鮮では日本と違い、厳しい冬をしのぐため住居は窓や出入り口が小さくなっていたり、オンドルと呼ばれるかまどの煙を利用した床暖房が設計されているようだ。また，宗教面ではほとんどがキリスト教徒で無宗派は半数ほどだそう。ちなみに、キリスト教徒は全人口の1/4以上で、そのう

ち10%以上がカトッリク派で20%以上がプロテスタント派である。日本では、厳冬対策の家は一部の地域でしか見られないだろうし、宗教はほとんどの人が無宗派であるので、国同士の距離は近いのにもかかわらず、文化の違いが大きくとても驚いた。しかし、婚礼衣装や制服などは、日本との文化との融合が見られた。特に「味の素」が目立っていた。これは，日本の植民地支配の影響だと思われる。日本の漫画の民族語訳や韓流ドラマなど日韓の文化交流も見ることができた。そのためか日本ではコリアン一世の高齢化に伴い、民族語を用いた介護施設も増えているようである。韓国では、子女の教養など国際化社会を「よりよく生きる」ために海外への移民が増えていることも分かった。日本と同じでグローバル化の影響は韓国にも強く表れていようだ。また，企業が高学歴を求める社会になったことと、儒教の「努力する」という考えのため「勉強が大事」という文化がより強く根付いているようだった。

さらに、博物館では日本の外国人に対する受け入れについても学ぶことができた。人種差別や外国人の地方参政権の有無など様々な問題があることが分かった。特にヘイトピーチなどの非人道的差別についての問題には怒りが湧いた。これらにはより真剣に向き合う必要があると思われる。

次に文公輝さんの講義を受けた。そこでは，自分の無知さをとても痛感した。大阪では人口の2.3%が外国籍住民であり、うち約６割が在日コリアンである。これは，当時の大阪は東京よりも発展していて、かつ朝鮮半島からの交通の便が良かったためだと考えられる。ここまで多い外国籍住民だがそれでも「いつか帰る」という思考から銀行からお金を借りることができなかったりと日本人との対応が違うそうだ。そのため、在日コリアンの方々は本名ではなく通称名を名乗らざるを得ない状況にあることが多いことが分かった。外国籍であろうと同じ人間であり同じ地域に住んでいるのであるから、協力し合えばいいものを、彼らを否定する人たちが僕には理解できない。しかし、もちろん事情もあるのだろう。だが、差別を「事情」だけで片付けてしまうのもいささか問題がある。しっかりと向き合っていくべきだと思う。その差別について、ヘイトスピーチと呼ばれるものがある。全国ではほぼ毎日に１回は起きているそうだ。

これを表現の自由だと肯定している人もいるそうだが、本当にそうなのだろうか。ヘイトスピーチは外からやってきた者に対して、その人があたかもその人自身の国の代表者かのように、その国の行為を否定するためにその人を弾圧する、という風潮が高まってきてしまったために起こったものだと考える。（例：朝鮮や韓国→在日コリアン）ヘイトスピーチには中学１年生の子どもが参加することもあるようだ。これには大変驚いた。前述した風潮について親などの伝える世代が「正しい」と教えてしまっている証拠である。もちろん正しいわけない。それは「悪」だ。表現の自由の前に「平等権」や「公共の福祉」があるということの理解をしっかりと教養する必要があるのだ。将来、伝える側になる僕たちはこれからの日本を担っていく後輩たちにしっかりと「正しい」ことを伝え「悪」はしっかりと抗議していかなければいけない。

最後に生野コリアタウンを見学した。そこでは、名古屋の僕でも驚くぐらい味が濃かったり、また辛かったりと日本との食文化の違いを強く実感できた。また、全員コリアンなのではと目を疑うほど日本人が経営する店舗をほとんど見かけなかった。そのためか、違う店同士の交流など結束の強いコミュニティを見ることができた。差別に屈さず楽しく頑張る姿は、本当に素晴らしいものだとかんじた。ヘイトスピーチをやっている人たちにはこのコミュニティを壊そうとしていることを分かっていただきたいものである。

今回の巡検を通して様々なことを学んだが、一番印象に残ったのは差別問題に対してである。このような現状があることを知らないというかつての僕のような人にしっかりと事実を伝え向き合い戦っていくことが大切なのだ。

「大阪巡検感想」

１年　南出理夏子

私は大阪巡検に行くまで、在日コリアンに対してあまりよくない印象を持っていた。なぜなら、韓国は日本のことを嫌っているというニュースをしばしば聞いていたからだ。だから、そんな国出身の人たちはなぜ嫌いな国に住んでいるのだろうと思っていた。

でも、今回の大阪巡検で実際に在日コリアンの方のお話を聞いて、自分の先入観を打ち砕かれた。そして、大切なことを三つ学び、考えが少し変わった。

まず一つ目は、偏見や差別をなくすことだ。私は在日コリアンには偏見があった。でも、文公輝さんのお話を伺い、実際にコリアンタウンを見たりするうちに、一生懸命に地域と馴染もうとし、実際に地域に馴染んでいることが分かり、考え方が変わった。また、彼らは差別とも戦っている。私の持っていた偏見などもその差別の一つだと思った。もしも、私が外国に住んだとき私が日本人だからと言って差別されるのは嫌だ。そのように相手の立場になって考えることも大切だ。それは前々から知っていたし、実感していたことだが、相手が日本人でなくなると途端に忘れてしまった。自分が差別していたことを改めて実感して、恥ずかしくなった。

次に相互理解も必要だ。お互いのことが分かっていないと誤解から差別や偏見が生まれてしまう。在日コリアンは日本の風習を頑張って覚えようとしている。だが、私たちはどうだろうか。相手の文化を理解しようとしているだろうか。少しでも相手の国のことを知るのは、お互いが歩みよる大きな一歩になると信じている。

ぱだんで、ヘイトスピーチの映像を見たとき私は愕然とした。ときどき韓国の反日デモのニュースを見ることがある。私は自分にはあまり関係ないし、なぜそんなに日本を攻撃するのか理解ができなかった。だから、あまり韓国が好きではなかった。しかし、その映像を見て日本で嫌韓デモやヘイトスピーチに参加する人が一部の人のように、韓国の反日デモに参加する人も一部の人かもしれないと思うようになった。彼らは相手を理解しておらず、誤解したまま一方的に相手を攻撃している。だからお互いいがみあうのだ、と感じた。

三つ目は、アイデンティティーの尊重だ。他人だけでなく自分のアイデンティティーも大切にしなければいけない。なぜなら、自分をよく知ってこそ他人を知ることができる、と感じたからだ。また他人に自分を知ってもらうとき自分のことを知らないと他人にも知ってもらうことができない。裏を返せば自分のことを知ってこそ相手のことを知ることができる、ということである。

この三つは私の価値観を変えた。これらの三つは関連して、どれを欠いてもいけないし、韓国と日本にとどまらず他のどんなことにも言えることだと思う。

では、なぜ私の考えが変わったのか考えてみた。すると、『私が無知だったから』という結論に達した。相手のことを知らないと誤った情報に踊らされてしまう。また、一方的な考えでなく多面的な考えを知る必要がある。そうすれば、どれか一つが間違っていても他の情報を頼りにすればいいのだから。

だから、私は相手について知るべきだと思う。そのために授業などで今まで以上に自国と色々な国のことを学ぶべきである。もちろん自国を含めたどの国のいい面も悪い面も教えるべきだ。また、修学旅行で遊興施設に行くのではなく、今回の巡検のように色々な面から見た外国や日本について学べるところに行けばいいと思った。そうすれば私のような無知な人が減るに違いない。そしてお互いによく知らず嫌うこともなくなり、もっと良い関係を築くことができるのではないか。

今回の巡検はとても有意義なものになった。韓国に対して親しみを持てるようになった。在日コリアンや私たちは同じ人間で同じ日本に住んでいるからもっと積極的に交流していくべきだと思った。しかし、私は日本人と同じ権利―例えば、参政権―を認めることには反対だ。それは他の国の人にも言える。彼らは、ずっと日本に住んでいるのだから日本人と同じ権利を与えるべきだ、と主張している。しかし、もしも韓国と日本が対立したとき彼らが参政権を持っていたらどうだろうか？自国に有利な候補者を立て自国に有利なように、ことを運ぼうとする人もいるかもしれない。だから、私は外国人に日本人と同等の権利を与えることに反対だ。

だが、もっとお互いのことを知り、よりよい関係を築いていきたい。

「異なる文化を持つ人たちといかにして良好な関係をつくっていくか」

１年　豊田優里

私は、グローバル社会を迎えてこれからますます増えていくであろう「異なる文化を持つ人たちと」良好な関係をつくるために大切なことが大きく分けて二つあると思う。

一つ目は「国籍」でなく「個人」で相手を見ることだ。「あの人は○○人だから、○○の性格に違いない」という判断をするのは間違っていると思う。例えば、世界での日本人のイメージは「紳士的でまじめな一方、ユーモアのセンスにかけている」というものだと聞いたことがある。私の周りには、確かにその通りの人もいる。けれども、紳士的・まじめでない人も、ユーモアのセンスにあふれている人もたくさんいる。日本人を一様にして考えるのは無理があると分かりきっているのに、外国人のことは○○人と一様に見てしまうのはおかしいのではないだろうか。今回の大阪巡検では、在日コリアンの方のお話を伺った。在日コリアンは国籍で考えればもちろん韓国人だ。けれどもその講師の方は在日三世で、生まれた時から日本に住んでいて、日本の学校にすっとかよっていた。それなのに「韓国人」としてひとくくりに考えることはどう考えても無理がある。

二つ目に大事だと思うこと、それは相手のことを思うことだ。例えば、相手のことを日本人と差別にないために日本人と同化させて接することはいいことだろうか。在日コリアンに「帰化したらいいのではないか」と言われたときに不快に感じるということを伺った。帰化することはとても大変なことだということであった。書類を書くために専門の人を雇ったり、平日に何度も面談を受けたりする必要があるらしい。それが面倒で帰化するのをあきらめる人もいるらしい。しかしそれ以前に、国籍を通じて自分の祖先とつながっているため、そのつながりを断ちたくないという人も多いそうだ。また、新聞で以前読んだ落語が心に残っている。それは、ある、外国人の社員を「一郎、次郎、三郎」と勝手に命名して呼び、外国人の社員も日本人の社員も平等に扱っていると自慢している社長を笑う話だった。相手の心のよりどころである祖先とのつながりを否定するようなことを言うことは失礼で恥ずかしいことだとだと思う。

相手の事情を考えることも大切なことの一つだと思う。現在大阪に住んでいる在日コリアンの方々は、どうして日本に来たのだろう。韓国が日本の植民地になっていた時代は韓国も日本の一部だったわけだから、韓国から大阪に行くことは直行便が出ていたこともあって、愛知から東京に行くような感覚だったという。けれども第二次世界大戦が終わると彼らの国籍は日本ではなくなった。しかし今さら韓国に戻るのも、ということで日本に留まった人が多いそうだ。そのような事情を知ることが、大事だと思う。

そして、親切にすることだ。これは、人間として最低限必要なことでもある。国立民族博物館にあったビデオの中で、フィンランド在住の移民の人々が盛んに「フィンランドの人々は親切だ」と言っていたことが印象に残っている。私は、親切とは「本当のことを教えてあげる」ことがとても重要だと思う。移民の人々が夜遅くに騒いでいたり、ごみの出し方を間違えていたりすることがある。これは、悪気がある訳ではなく、単なる文化の違いだと思う。だから、日本に住むために必要な常識やルールを教えてあげれば自分も不快な思いをせずにすむし、相手が社会になじむ手助けとなるはずだ。外国人が日本になじむためには、周りの人の親切が国の制度などよりもはるかに重要だと思う。私は、相手の気持ちを考えられなくて後悔していることがある。クラスである討論をしたときに、中国人のクラスメイトに対して、中国の悪口を言ってしまったのだ。相手は自分の国の悪口を言われて腹が立ったと思うし、悲しかったと思う。このようなことをこれからは言わないように気を付けたい。

このように、「国籍」でなく「個人」で相手を見て、相手のことを思うことが出来れば、異なる文化を持つ人たちと良好な関係をつくることが出来るはずだ。

「H28大阪巡検を終えて」

１年　廣澤玲萌

今回のSGH大阪巡検では、日本に暮らす韓国籍の人々をはじめ、世界の移民の実態について学びました。巡検を通して私が強く感じたのは、日本の外国人移民に対する受け入れ態勢は世界から見て不十分であるということです。そして、それは改善可能であり、日本人が外国人移民と共生していくことは近い未来、必ず実現できることだとも思いました。

国立民族学博物館では、朝鮮半島の文化、移民の生活についてです。韓国の文化についての展示には、学生服やセーラー服、税制度など、1900年代前半の植民地支配で日本が押し付けたものも多くみられました。しかし現在、制服は韓国独自のものになり、韓国のドラマや音楽などが、日本で広く受け入れられています。韓国で出版された本を見ていると、受験や国家試験のための本がとても充実していることに気づきます。韓国では収入格差が大きく、より高学歴であることが求められているということで、受験を控えた高校生として、ああ、大変そうだなと素直に思い、同時に、著しい経済成長のパワーもそこから感じました。

永田先生の講義では、在韓フィリピン人の説明とともに、韓国の移民政策が日本よりも進んでいることも教えて頂きました。しかし韓国の政策も問題を抱えて行き詰っており、日本がそれをただ追っていけばいいという訳ではなさそうです。

二日目は、多民族共生人権教育センターの文公輝（ムンゴンフィ）さんのお話、生野区のコリアンタウンの散策、そしてピース大阪の見学をしました。

文さんは在日コリアン三世であり、大人になるまで日本名を名乗り、朝鮮民族であることを言わずに過ごしたということ、実際に結婚の際に朝鮮籍であることを理由に猛烈な反対を受けたことを聞いて、日本の朝鮮半島の人々に対する差別意識が無くなっていないこと、在日コリアンの方々が今も暮らしにくさを感じていることを実感して残念に思いました。終戦以前に植民地支配によって日本にいた方々やその子孫の人たち（特別永住者という区分）をはじめ、多くの在日コリアンの方々が日本生まれ日本育ちで日本で生活していく意思を持っており、職業や住居などで制限を受けるのは不本意であるという文さんのお話で、在日コリアンの方が生きていきやすくするための制度改革、意識改革が日本に必要であると強く感じました。終わらない差別が表面化した活動のひとつとして、ヘイトスピーチがあります。今回、2013年にあった駅前でのヘイトスピーチの映像を見せて頂いて、在日コリアンの方々に対するひどい言動、暴行に衝撃と怒りを覚えました。驚いたのは、13歳の女の子がマイクを持って差別的発言を繰り返していたことです。おそらくその子は親によって韓国・朝鮮人への差別意識を刷り込まれてきたのだろう、ということでした。身近な人の影響で、差別に走ってしまう子供たちがたくさんいます。それを防ぐためには、学校での多文化理解のための教育が不可欠だと思いました。

午後からは、生野のコリアンタウンを回りました。キムチ屋、生鮮食品屋、服屋、雑貨屋、土産屋、外食店などがずらっと並んでいます。店員さんの多くが韓国系の方のようでした。特別観光客を意識しているという訳ではなく、地元の人向けのお店が多かったです。とても気さくに話しかけて頂いて、サービスもたくさん受けられたのがうれしかったです。価格が名古屋より安めなので、たくさん買って食べてしまいました。

ピース大阪は、事前にyoutubeの動画で見たとおり、日本の加害に対する展示がほとんどなくなり、“大阪空襲を語り継ぐ”という、戦時中の街の様子が中心となっていました。空襲で亡くなった人の痛々しい遺品を見て戦争のむごさをたくさん感じましたが、私は、戦争の記録を後世に残すということでは、ピース大阪の展示の仕方は不十分ではないかと思いました。日本人と海外の人々の間には歴史認識に大きな違いがあり、日本が過去アジアの人々に与えた被害のことを子供たちに伝えていかないのでは、溝は逆に深まっていってしまうでしょう。もう少し客観的な説明が必要ではないかと私は思います。

グローバル化や多文化共生が叫ばれるようになってから久しいですが、実現には多くの問題があります。ただ、実現に最も有効なのは、個人の意識改革だと思います。まずは、自分が、外国人や自分と違う人たちに対しての固まったイメージを捨てることが大切です。そし

て、自分の中に民族としてのアイデンティティを持ちながら、客観的に世界を見つめられる、グローバルな人になってゆければ、そしてそのための教育が拡充されてゆけばよいのかな、というのが巡検を終えた時点での私の考えです。

「How to create 多民族共生社会」

1年　大道夏希

世界中の文化は本当にそれぞれ異なっている、国立民族学博物館で私はそう感じた。そんな異なる文化が、現代社会において混ざり合おうとしている。そんな異質なものが混ざり合うのに、問題が起きない訳がないと私は思う。ましてや、かつて植民地支配していて、良いイメージを持たれていない韓国とは余計わだかまりも大きいはずだ。

わだかまりが多少大きいとしても、決して排他的になってはいけない。私は、今回の巡検での文公輝さんのお話のときに見せていただいた「ヘイトスピーチ」の様子を見てとても衝撃をうけた。まるで人間でないような風に、平気で暴言を吐いていた。それに、中学生もが暴言をさけんでいた。しかし、私が一番驚いたのは、それではない。私が一番驚いたことは、文さんがおっしゃっていたように、警察がデモ隊を守るように一緒に歩いていたことだ。これでは、社会全体が、このようなヘイトスピーチ、差別行為を“黙認”している。大阪では条例が作られ、デモ隊ではなく抗議するカウンターを守れるようになったが、私たちの住む愛知県ではまだそのような条例はできていない。愛知は、TOYOTAなどの大企業があり、中京工業地帯に所属するため韓国の方も多い。しょっちゅう誹謗中傷のデモが起こっているような街では住みやすい訳がない。だから、国全体で禁止する条例を制定し、外国人と共存する姿勢をみせる必要があると思う。

こういった「受け入れる姿勢」についても、大きな問題が日本にはある。韓国から来た留学生の方が、「韓国人は、フィリピン人をあまり良い目で見ない」といっていた。しかし、韓国の対応は、日本と比べて実に寛容であった。キリスト教のフィリピン人のために、英語のミサを教会では定期的に行っている。また、フィリピンの人たちが毎週出す、フィリピン用品・食べ物の露店も現地の人に受け入れられて、観光名所にまでなっている。さらに、リ・ジャスミンさんというフィリピン系の方が国会議員にもなられた。このように、韓国はいくら冷たいといっても、日本よりもずっと社会が受け入れる姿勢をとっているのだ。一方、日本はとても厳しい。露店は禁止で、外国人のコミュニティーも厳しい目で見られる。

国立民族学博物館で見たように、日本と韓国は文化が似ている。ではなぜ、お互いに関係が悪かったりしているのだろうか。それはもちろん、過去に日本が起こした戦争、植民地化がとても大きく影響している。韓国併合において、被害を被った人は数えきれない。韓国の伝統を壊してしまうような事をし、今も謝罪があやふやなままである。

また、日本は第二次世界大戦で空襲や原子爆弾で大きな被害を受けた。そのショックは国民にとっていまでも心に残っている。しかし、加害については否定的になり、ピース大阪の展示を変えてしまったほどだ。

このように日本は韓国に加害した記憶が薄れ、韓国はもちろん被害を覚えている。日本は被害の面からだけでなく、しっかりと加害の面からも、そして、客観的にも歴史について学び、日本がこれからどうすべきか考えなければ、改善されていかないと思う。

ここまで、韓国とくらべた問題点や、韓国との問題点ばかり書いてきたが、最近では歴史的な認識をそろえる友好関係の築き方のほかに、文化的に友好関係を築く方法もある。韓国人が自発的に日本の文化に興味を持ち、また、日本人も同様に韓国の文化に興味を持っている。例えば、マンガだ。国立民族学博物館には、クレヨンしんちゃんやNARUTOをはじめ、様々なマンガが韓国語に翻訳されていた。日本では、韓国発のアイドルグループや、ファッションが人気である。

このように、慰安婦や、竹島の領土問題など様々な問題が残る韓国と、歴史認識について今すぐ統一するのは難しいかもしれない。しかし、アイドルやマンガなどの軽い文化を共有していくことで、良い関係を築いていくことが大切であると思う。身近でありながら、複雑である韓国との関係を改善していく事で、国内外で外国人と良い社会、グローバル社会を築いていけるようになると思う。なので、これからの講義では物事を多面的に見て、考えるられるようにしたい。

「異文化を持つ人々と良好な関係を築くために」

2年　浜　凪帆

1　導入

私は大阪巡検へ行かせていただき、日本人はまだ異文化を持つ人々と良好な関係を築き切れていないと感じました。文さんから、ヘイトスピーチを行っている人々は所得が低いわけではなく、地元の人でもないと知りました。これは、地元以外の人が外国人に対する偏見を持っているためだと考えました。実際コリアンタウンで売られている大量のキムチや豚足等なじみのないものも多かったのですが、お店を営んでいる在日コリアンの方々はとても親切でした。しかし、これに対してまだ日本は異文化を持つ人々を受け入れる十分な体制がとれていないと感じました。

2　人の受け入れ態勢が必要である。

異文化を持つ人々は外観、考え方、宗教、生活スタイルなど私達との違いが沢山あり、彼らが何するかわからないと不安に思ってしまいがちである。私たちにとって違和感を覚えるような文化であれとも、彼らは彼らの体に染みついた文化をそう簡単には変えられないし、私たちが彼らに合わせることも難しい。それぞれの文化がうまく共生し、互いの文化を尊重し合うには何が必要なのか。

例えば、もともとは差別によりできたものだとしてもコリアンタウンやチャイナタウンのようなコミュニティはうまく地元の人と移民が共生できている一例ではないかと思う。

はじめは、外国人に対する不安、文化の差から起こる迷惑など、異文化を持つ人々と共生することに美点を見出しにくいかもしれない。例えば、ブラジル人が近所の庭でバーベキューをしていてうるさかったり、臭ったり、そのごみの出し方が悪かったりする。日本人から見れば、バーベキューを頻繁にするブラジル文化に詳しいわけでもなくただ訳も分からず迷惑がかかっているのである。この様にして外国人に対してたまったストレスや不満をそのまま外国人の悪いイメージ形成や外国人排斥運動につなげてしまうのではなく、ここで相手を理解しようと自ら一歩踏み出すことが大切なのではないか、と私は考える。ブラジル人にごみの出し方を教えマナーだからと言って守ってもらうようにすることや、バーベキューをする時間帯を迷惑のかかりにくい時間にできないか交渉することなどお互いが快適な生活を過ごせるように話し合うことや、相手に自ら近づいていこうという姿勢を持ち続けることがこのような問題の解決につながると考える。関係が良好になれば、日本人ブラジル人合同のバーベキューを時折開くことで相互理解を深め、楽しく文化交流ができる可能性すらある。しかしながら、相手に日本語があまり通じない、外国の人と関わりたくないなど自ら歩み寄るにはかなりの勇気と言語の壁を打ち破ることが必要になってくる。

3　国の受け入れ態勢が必要である。

では、言語の壁を打ち破るために必要なものを考えてみた。民族学博物館で、移民についての展示を見て元植民地から来ている人が多く、言語の壁はやはり厚いのだと実感するとともに、諸国でその国の言葉を教える学校があった。日本でもこのまま言語を教えていくことは大切だと思う。また、私が巡検へいき、実際に在日コリアンの方の話を聞き、コリアンタウンで生活の様子を見て、偏った知識や無知は誤解や偏見の目を育てやすいと感じた。私が予想していた以上に親切で日本にうまくなじんでいるように感じた。ヘイトスピーチを行っている人は在日コリアンを人としてまともに見ず、『食わず嫌い』の状態にあると知った。日本人は外国人との接触機会が少なかったため、文化的に内と外を分ける。これらのことから、異文化交流に不慣れであり、異文化を持つ人々に対し声をかけられない、良くも悪くも外国人扱いしてしまいがちである。従って、SGHのようなグローバル人材育成のための事業や多文化理解を深めるための教育を増やしていくべきだと考える。

文さんから、ヘイトスピーチを取り締まる法律が成立してから大きく変わったと聞き、たとえどこの国の人だろうと、その人の人としての尊厳や人権が守られるよう国が保証しなければいけないと感じた。人やモノがボーダレスに移動する世界へと大きく変化し、法律整備も追いつかないかもしれない。しかし、日本に外国人が入ってくることは止められないであろう。また、日本の高齢者を支えるのを手伝ってもらうためにもいち早く外国人受け入れに対する制度を整備し、日本人と外国人が良好な関係を作りやすい環境へと変えていくべきである。

4　まとめ

身近な異文化を持つ人々と接し、良好な関係を築いていくには、相手に興味を持ち、「自分とは違う文化の持ち主」で終わらせるのではなく、相手を一人の人として尊重し、見ていかなくてはならないと思う。そのために国は、異文化に対する教育や言語教育をすること、お互いが差別され人権が侵されることがないようにすることが必要だと考えた。また、異文化を持つ人々がその文化で何を大切にしているのか、そしてどの様な事をしないほうが良い等の情報を日本人から日本人へ発信し、未然にトラブルを防いでいきたい。

「大阪巡検レポート」

1年　岩田純怜

今回の巡検のテーマにもある”これからますます増えてゆくであろう「異なる文化を持つ人たち」”は、どんな人たちなのか改めて考えてみた。

それは、外国からの移民、移住労働者や、かつて日本にやって来た外国人の子孫、それも日本の在日外国人の中でも多くの割合を占めている在日韓国・朝鮮人の場合だと、これからの時代は在日４世・５世などの方々が増えていくということではないだろうか。

文さんの講義では、「日本で生まれ育った在日韓国・朝鮮人は多くの人が日本名を使い、日本語も私たちと変わらないくらい当たり前のように話し、外見も私たちとそっくりな顔立ちをしているため、見分けるのは困難だ」ということを伺った。これだけ聞くと、日本人とほとんど変わらない人々のように思えてくる。普通に暮らしていたら在日かどうかわからない人たちを外国人か日本人かに分類することは難しい時代になっていくのだなと感じた。

また、私たち日本人は「日本人は日本人、在日韓国・朝鮮人は外国人」というように、無意識のうちに区別したがっているのだなということに改めて気づかされた。私は、そのようにはっきりと分けてしまうことが、差別や偏見を生み出す原因になるのでは、と今まではそう考えていた。しかし、今回の巡検を通して、在日の方々は、例えば文さんのように、民族名をあえて使う人もいて、ある調査では頻度や使い分けの仕方は様々であっても、民族名を使用している在日韓国・朝鮮人は1325人中649人（約40%）であることがわかった。

私は、日本人と在日の方の同化が進めば、差別や偏見はなくなる、と思い込んでいたが、在日の方の中にはあえて民族名を使い、普通の日本人とは違うということを示している方もいらっしゃることを知り、なぜ自ら自分たちを日本人と分けようとするのだろう、と驚いた。だが、文さんの講義を通し、在日の方々はあえて民族名という日本人と分けられてしまうものを持つことで、日本人に全てが同化してしまうことを防ぎ、自分のルーツや誇りを守っているということを知った。私はそれを知って、在日の方々にとって、日本人と同じだとみなすのも、日本人とは違う、外国人だとみなすのもあまり嬉しくないことであって、日本人と韓国・朝鮮人との狭間にいる存在だということを私たちも意識しなければならないと思った。また、在日の方々が日本人と同化しすぎず離れすぎず暮らすには、”分け方”が大事なのではないかと考えた。

私は、ヘイトスピーチには反対だ。過激な排外主義、差別主義の思想は多くの在日韓国人・朝鮮人の方々を不快にさせ、日常生活を脅かしていて、実際に文さんのお話でも『ヘイトスピーチを聞いた近くの老人ホームの在日韓国・朝鮮人の方々が怯えていた』ということを伺った。ヘイトスピーチをする人の言論の自由が守られることで、在日の方々は、精神的にだけではなく、過ごしづらくなるという点で社会的にも人権が侵害されてしまうのは納得がいかない。また、彼らの主張する”排外主義”は、在日の方々などの外国人を追い出し、日本人だけの閉鎖的な社会で単一民族だけで生活することになる。これからのグローバル化、少子高齢化がさらに進む時代の中で、誰とでも仕事が出来、多様な意見・人種を受け入れることの出来る考え方に日本人もならないと、ビジネスなんて出来ないのではないか。そして結果的に排外主義は日本を衰退させてしまうのではないかと私は思う。

では、私たちはこれから、ほとんど日本人と変わらず、唯一はっきり違うのは名前や国籍だけ、といった在日韓国・朝鮮人の方と良好な関係を築いていくにあたり、どうするのがよいのか。いろんな方法を考えたが、一番は韓国や朝鮮の文化を尊重していくことだと私は思う。国立民族博物館で感じたように、日本と韓国はかつて大陸でつながっており、また、朝鮮通信使の前の時代からずっと交流がある国同士であり、文化は似ているところが多い。

コリアンタウンでは、在日または韓国・朝鮮人の方が、自分たちの文化である韓国料理やチマチョゴリ、K-ポップグッズを売っていて、日本人にも十分受け入れられていた。そんな日本の文化と似ていて親近感の湧きやすい文化、韓国文化として有名で、日本でも受け入れられている文化をはじめとし、民族名や国籍などの、日本ではまだ差別や偏見が残っている部分を尊重していけたらいいなと感じた。

3　東京巡検まとめ
＜A　アジア経済研究所＞

「韓国の少子高齢化について」

2年　渡邉美月

アジア経済研究所地域研究センターで、安倍誠先生の講義を受けた。テーマは「韓国の経済・社会を知る」。講義の大まかな内容はこうだ。韓国は日本をモデルとした圧縮型工業化により経済発展し、2000年代には脱日本や市場重視の開発・販売戦略によりグローバル企業が出現した。1960年代からめまぐるしい発展を遂げてきた韓国だが、近年は中国などの企業の台頭、新興国市場の成長鈍化などにより輸出が低迷、競争力が低下してきている。また、格差の拡大や少子高齢化、若者の失業などといった社会問題にも直面している。

言うまでもないが、現在日本も少子高齢化が進んでいる。いや、日本だけではない。少子化は今や東アジア地域全体で進んでいるのだ。ありきたりかもしれないが、今回はこの「少子高齢化」に論点をおきたいとおもう。

まず、少子化について。なぜ東アジアで少子化が進むのだろうか。安倍先生によると、それは、「若者世代の就職難・低所得」「子育てに対する公的支援の不足」「社会進出志向の強まりと根強く残る性別役割規範により女性が引き裂かれること」の三つが理由として挙げられるという。

韓国における少子化の原因としては、この上にさらに「女性の学歴上昇」とそれによる「晩婚化・未婚化の進行」、そして「教育費負担の増加」が挙げられるだろう。

韓国は極端な学歴社会だ。大学に進学しなければ就職は厳しく、難関大学を卒業した場合には高給が望める財閥への就職の可能性が高まるからである。そのために、保護者たちは幼少期から多大な教育費をかける。この教育への重い経済的負担が少子化への大きな理由となっているのだ。

韓国では、大企業と中小企業の間に、極端な賃金格差が存在している。その大枠をつくっているのが財閥制度である。財閥による特権的な支配が、従業員給与に差別的な格差を生んでいる。中小企業の正社員は、ほとんど派遣社員のような扱いを受けているという。そのため先述のように、子供たちは男女問わず財閥企業への就職を目指し、親はそれに多額のお金を出資するのだ。

次に高齢化。高齢化の原因は、やはり出生率が低下していることに加え、医療の発達により平均寿命が伸びていることであろう。

実は韓国の高齢化問題は、日本より深刻である。まずは、その進行スピード。韓国の2012年の高齢化率は11.8%で、日本の24.1%に比べるとまだ低い。しかし、2025年には20%を、さらに2037年には30%を越え、2050年には37.4%まで上昇することが見通されてい

る。これは、OECD加盟国34カ国中１位のスピードだ。
そして、高齢者の貧困。65歳以上の相対的貧困率は2015年で48.6％と、これもOECD加盟国中１位となっている（日本19.4%）。
何故これほどまでに高齢の貧困率が高いのか。その理由として「早い引退」「十分でない老後の蓄え」「整備されていない年金制度」が挙げられるという。
韓国の定年は2013年に55歳から60歳に法律で引き上げられた。しかし、実際は退職勧告等で定年前に辞めざるを得ないケースが多く、平均退職年齢は53歳ほどであるという。
また、何度も述べたが、親は子供の養育に全力をあげ、そして時に貯蓄を使い果たす。以前は、その見返りに子供は親孝行を尽くすという儒教的家族システムが出来上がっていた。子供は親にとって「年金」であり「健康保険」であり「介護制度」だった。「親が困っていれば子どもが支援をするのは当たり前」という考えを持ち、老後の蓄えがほぼない高齢者が多い。70代の親世代と40代以上の子の世代はこうした儒教の価値観に縛られていた最後の世代だ。
しかし、それ以降の世代はこの儒教的価値観が薄れてきており、親の経済的支援や介護を拒否する場合が増加している。儒教的な家族システムの崩壊も高齢者の貧困の要因の一つなのだ。
国も何も対策していない訳ではない。1988年に公的年金制度が導入された。しかし多くの場合、公的年金で基本的な生活費を賄うことは困難だ。また多くの高齢者は制度発足時に退職していたので年金制度でカバーされない。2011年の政府発表によると、65歳以上の高齢者の４割しか公的年金あるいは私的年金または老後の蓄えを持っていないという。
また、子供に親を支援する経済的余力があると判断される場合、生活保護的支援は行われない。そこで資金のない高齢者は自分の子供か国に頼るかという選択を迫られる。儒教的伝統と面子を重んじる国柄、子供に親をサポートする意思ないし経済力がないことがあきらかになるのは屈辱的なことであり、それよりは自殺を選ぶ。韓国では高齢者の自殺が増えているという。
韓国政府は少子高齢化対策として、何を行ってきたか。政府は2005年に「低出産高齢社会基本法」が制定した。この法律の中で、韓国政府は、子どもを家庭だけでなく社会全体で育てようという「育児の社会化 」を掲げて、低所得層への保育費の支給、保育所の拡充と質の向上、育休制度の活性化、短時間勤務制度の導入といった少子化対策を講じた。当初は、日本の少子化対策を参考にして政策立案を試みていたが、成果がなかなか見込めなかったことから、近年は独自の政策を多く実行するようになった。
そのひとつが無償保育の実施だ。これは、０歳から５歳児を対象にした保育施設を誰もが無料で利用できるようにするもので、2013年から実施されるようになった。最初は所得制限があり、低所得層だけを対象とした政策だったが、子どもの数が最も少ないのは中間所得層であり、所得制限を設けた対応では政策的効果が低いとの批判を受け、すべての所得層の子どもがこの対象となった。
この政策により、子どもを預けて働きに出る母親が増え、女性労働力の拡大に一定の効果があった。その一方で、需要に供給が追いつかず、保育の質の低下が深刻な社会問題となった。そのため、保育施設や保育士の質を向上させ、誰もが安心して子どもを預けられるようにすることが切実な課題となっている。
もう一つ韓国政府が拡充したのは、国際結婚家庭への支援策だ。少子化対策の一環として、韓国人と結婚した中国やベトナム、フィリピンなどから来た外国人配偶者やその間に生まれた子どもたちに対し、手厚い支援策を行っている。　　2008年に「多文化家庭支援法」が制定され、外国人配偶者には韓国語教育や職業訓練、就業支援などが無料で実施されるようになった。国際結婚家庭の子どもに対しては、さまざまな学習サポートや放課後の特別教育プログラム、カウンセラーによる相談事業などを行っている。こうした国際結婚家庭に対する手厚い支援策は、「韓国人増加プロジェクト」と位置付けられ、国際結婚で生まれた「新しい国民」として社会に統合し、人材として活用することに主眼が置かれている。国際結婚家庭をサポートすることで少子化対策と結びつけようとする試みは、日本ではみられない発想の政策だといえる。
こうした韓国の試行錯誤について考えてみることは、日本の政策選択の幅を広げるためにも有効だと思う。少子高齢化という同じ社会問題に直面している韓国が打ち出す対策を検証し、その成功例や失敗例から得られる教訓は、極めて有益な示唆を与えてくれるだろう。
若者が未来に希望を持ち、子どもを産みたい人が産める社会、子どもを育てやすい環境が整った社会を実現させることは、何よりも重要な目標のはずだ。どのような社会の実現を目指して政策を実行していくのか、韓国でも、日本でも、こうした政策の理念が明確になっていないことが共通の課題だといえる。

「アジア経済研究所地域研究センター・安倍誠先生のお話から韓国経済を考える」

１年　山田真子

＜はじめに＞
現在、韓国の経済成長はどのような状況であるのか。一言で示すならば、停滞気味であるといえる。これは韓国のGDP成長率からみても明らかになっている。経済成長の甚だしかった2000年、12%近くだった成長率も、2015年には２%近くに衰退している。韓国が、どのようにして現在のような状態に至ったのかを考察する。

＜韓国経済の成長＞
1960年代半ばから、政府によって積極的に産業振興事業が始められた。つまり、意識的に経済の高度成長を目指したのである。また、ベトナム戦争に伴う特需や、アメリカ、日本、アジアNIES諸国との貿易のトライアングル網が生まれたことにより、韓国の輸出産業は大幅に拡大した。1970年代には、当時の日本でも主要産業とされていた金属、化学、機械、造船、電子等の分野で成長を遂げる。この頃、重化学工業の基礎を確立したのである。その後、韓国企業は、日本企業から技術供与を受けつつ、技術力を着々と高めていく。1972年には「第三次経済開発五ヵ年計画」（1972～76）を、1973年には「重化学工業化開発宣言」、加えて「重化学工業化開発計画」を発表する。政府が工業化を重視し、政策を推し進めていった。
1990年代以降、貿易のトライアングル網は東アジアに移行した。これは日本、韓国・台湾、中国・ASEANにより構成される。以前は労働集約的製品と呼ばれた軽工業製品の輸出の割合が多数を占めていたが、部品や素材（工業化された原料。プラスチックや鉄鋼板等）の輸出が主となる。そして、IMF危機による打撃を乗り越え、2000年代には数多くのグローバル企業が出現し、成長を遂げている。グローバル企業は、その名にある通り、世界市場に向け、製品を開発・販売している。効率重視と大量生産、加えて、市場（主に新興国）重視の製品開発。これにより、市場の掌握を狙った。
このようにして成長を遂げた韓国経済だが、今なぜ停滞状態にあるのか。
原因のひとつは輸出の低迷にある。韓国の主な貿易相手国は中国（25.4%）、アメリカ（12.3%）、EU（9.0%）、日本（5.6%）といった国であり、総額はおよそ5767億ドルに上る（2014年・JATROより）。そして、輸出の前年比伸び率では、対中国がマイナス0.4%、対アメリカが13.3%、対EUが5.7%、対日本がマイナス7.2%となっている。また、アフリカへの輸出は全体の1.7%を占めるが、伸び率はマイナス11.3%と、低下が著しい（2014年・JATROより）。こういった数字からも読み取れる部分があるように、現在、貿易相手である新興国市場の成長鈍化がみられる。理由のひとつは新興国の経済成長が進み、輸入に頼らなくなったことが予想される。中国などの新興国企業が成長を遂げ、台頭しているのだ。韓国の輸出に依存する競争体制は厳しいものとなった。
また、「キャッチアップの天井」と呼ばれる、新たな技術、新たなコンセプトの商品開発の能力不足も、競争力低下の原因だ。
キャッチアップは、特に発展途上国から先進国へと成長することを言うが、キャッチアップが進行するにつれ、求められる技術が高度になるため、新たな技術習得が困難になる。韓国は戦後の経済成長のスタートが遅れたこともあり、一刻も早く先進国に追いつこうと「圧縮成長」を遂げてきた。さらに、韓国の大企業は「スピード経営」を得意としている。これらの理由から、韓国企業は十分に商品開発の経験を積むことができていない。ここで、「キャッチアップの天井」に頭がついてしまうのである。天井に頭がついた企業は、大空に着々と進出している世界の企業に、またもや差をつけられようとしている。

企業の問題には、大企業と中小零細企業との格差もある。輸出大企業の下請け中小零細企業は、これまで大企業から利益を受けていたのだが、現在、大企業が大規模な設備を中心に生産を進めていることにより、下請け企業まで利益が行き渡っていない。

また非正規労働者の増加も経済格差の原因となっている。韓国の就職競争が過激であることは周知の事実だ。その過激さ故か、自営業またはニートなどの人数も増加傾向にある。

このように、大企業に技術や強力な労働力、利益が集中し、他の中小零細企業の衰退が進んでいることも経済停滞を引き起こしている要因のひとつだろう。

＜まとめ＞

韓国経済の特徴は「スピード」だと感じた。高成長のためのモデルをたて、このままの状態では生き残れないと踏んだときには、即座に方針を変更し、実行する。具体的にはIMF危機直後、日本的な終身雇用・年功序列からアメリカ的な成果主義・能力主義にシフトしている。グローバル化の叫ばれる現代では欠かすことのできない、見事な適応能力だ。しかし、この「スピード」によって従業員はよりシビアな状況に置かれており、国内での経済格差も無視できる状況ではない。国民の不安を取り除くことも経済成長のための重要な要素となるだろう。

今後、日韓間のよい関係を保ちつつ、「スピード」を生かした韓国、及び世界全体の経済発展を期待したい。

「東京巡検レポート　ジェトロ・アジア経済研究所」

２年　坂野水咲

ジェトロ・アジア経済研究所では、安倍誠先生の講義を受け、図書館を見学した。まずは図書館について、今年の巡検は去年よりも長く、図書館を見学することができた。

最初に資料の調べ方についてのお話を伺ったが、正しい情報を得ることの難しさを実感した。私たちの課題となっていた５つの情報を探し出すだけでも、何冊もの本を調べ、そのうえ現地の言葉の資料にも当たらないといけない。

その後、図書館を回り、その資料の量と貴重さに改めて感動した。何冊か実際に手に取って読むこともできた。また、新聞の多さにはやはり圧倒された。マイクロフィルム化もしているそうで、電子化はしないのか尋ねてみたところ、時代によって媒体も変化していくことを考えると、半永久的なマイクロフィルムが一番良いそうである。また、研究員の方の個人の意見では、紙という形を保っているほうが扱いやすく、新聞としてふさわしいとのことだった。お話を伺っていると、研究員の方のたちの資料収集・保存に対する強い熱意を感じることができた。

次に安倍先生の講義について述べる。日本との共通点・異なる点に着目した、韓国の経済と社会についてのお話を伺った。

韓国は1960年代半ばから日本やアメリカからの海外直接投資（企業が外国の企業を買収したり、外国に新しい工場を建設したりすること）の流入をきっかけに、安い労働力そのものを武器として、日本から原材料・部品や製造機械を輸入し、組み立て・加工して製品を日本などに輸出するようになった。はじめはベニヤ板やアパレル・かつらなど簡単なもの、70年代からはラジオ・テレビなどの電子製品である。この関係をアジア太平洋貿易トライアングル構造とよび、NIESの他の国々も韓国と同じ位置にいた。

もう一つ、高成長をもたらした要因として、隣国日本の存在があげられる。そもそもアジアの工業化は日本から端を発したものだ。経済成長の軌道に乗った日本では国内の人件費が高騰したため、韓国に進出して産業を持ち込んだ。こうして韓国では、日本を真似し、さらに日本からの技術供与を得ることで工業化が加速したのだ。

さて、1990年代に入り、アジアにおける経済の様相は変化した。一言でいうと東アジアトライアングル構造になったのであり、韓国や台湾は設備や部品・素材を日本から輸入し、それらを加工した部品・素材を日本や中国、ASEAN各国に輸出するようになった。韓国の人件費も高騰してきたために、完成品を作るのは安い労働力を持つ中国・ASEANとなったのだ。

2000年代になるとグローバル企業が出現する。この波にしっかり乗ったのが韓国で、約５年ほどの間にテレビや携帯電話のシェアにおいて、日本は韓国に完全に追い抜かされた。この成功の理由としては、韓国企業の戦略が日本をモデルとしたものから脱却したことがあげられる。

サムスン電子は1997年の通貨危機を受けて雇用体系を日本的なものから徹底したアメリカ的な成果主義に切り替えた。ヒュンダイ自動車はロボットを大量に導入して「人を育てる」ことを放棄し、「熟練節約的」生産へと志向を変え、浮いたお金でヨーロッパのデザイナーをリクルートした。ただし、これは成功したように見えるが、後には自らの首を絞めることになっている。

また、徹底して市場を重視した製品開発を行い、販売戦略を練った。例えば、電圧の安定しないインド向けに、電圧を調整できる冷蔵庫を開発したり、大量のニーズがある中国の自動車市場には韓国の旧モデルを投入したりということだ。特に後者は日本人なら躊躇してしまうようなことを韓国はやってのけたのだ。

日本が対抗できず、韓国に追い抜かされてしまったのはなぜだろうか。それは日本の技術への過信である。日本企業は世界の市場よりも国内市場に固執し、「厳しい日本市場で売れるものは他国でも売れる」という考えのもとで商品開発を行い、失敗した。プライドが高く、固定観念から抜け出せなかった結果、世界の流れにおいていかれてしまったという厳しい見方もできる。

しかし、波に乗った結果、韓国が成長を続けているかというとそんなわけでもない。中国などの新興国市場の成長が鈍化し、その中から企業が台頭していること、そしてあまりにも短期間の成長で経験が少なく、人材育成も切り捨てたために新しいものを生み出すことができないことで、近年の韓国は競争力が低下している。新興国に輸出が偏り、特定の品目に依存していたために、新興国の動向や市況の変動に非常に左右されるのだ。

加えて、深刻な社会問題にも直面している。ごく少数の大企業と多くの零細企業という企業構造や、非正規労働の増加から生まれる格差が深刻化し、国民から財閥が批判されている。この企業構造は、若者の失業問題にもつながっている。外国人労働者を早い段階で受け入れてしまったために、この格差が固定化したことも失敗だったのかもしれない。

また、これは東アジア共通の問題だが、少子高齢化が急激に進行している。その要因はいくつかあげられるが、東アジアの特徴ともいえるのが、女性が性別役割規範と自身の社会進出志向の間に挟まれ、子どもを産み育てる余裕を持てないということだ。これは根強い観念的なもののため、そう簡単になくせるものではない。しかし、国家的な制度によって子育てのしやすい環境を整えることが、長い目で見ればその解消につながると私は思う。

高齢化において韓国は日本よりもさらに深刻な問題を抱えていて、まずスピードが速い。それはやがて生産年齢人口が劇的に減り、若い世代の負担が重くなることを意味している。そしてつらいのは若者だけではない。韓国は「低負担・低福祉」なので、日本と異なり豊かになって間もない上に子が親を養うという観念のもと、十分な貯えのない高齢者は過酷な生活を強いられる。65歳以上の相対的貧困率はOECD加盟国の中で１位である。これら社会問題に関しては、韓国は日本よりもかなり深刻な危機に瀕していると言える。

私は最初、日本・韓国・台湾の経済・産業について、まず日本が戦後急速に成長して、そのあと韓国と台湾が日本の真似をして日本よりももっと急激な発展を遂げた、というような認識しかしていなかった。しかし去年、台湾の経済について学び、台湾は黒子に徹するという独自の路線で発展したということを知った。そして今回の巡検では、韓国は韓国でまた別で、ブランドを持つという意味では台湾とは異なり、市場のニーズにとことん合わせるという意味では日本とも異なる、やはり独自の発展を遂げたのだということを知った。教科書では、戦後のアジアの急激な経済成長というように一括りにされてしまうが、その過程と実態は個性にあふれている。私はそれを、純粋に面白いな、と思った。

日本企業の失敗は、いわばプライドにしがみついて自国に引きこもる産業面での『鎖国』の結果だったのかもしれない。では韓国のように徹底して世界の波に合わせた「スピード・市場優先」にするべきだったのだろうか。きっとそうではない。日本の技術を重んじる姿勢や、ブランドとしての高い競争力にだって、良いところはたくさんある。知識や経験が蓄積されるため引き出しが増えるし、その技術力か

ら生まれるブランドの信頼はそう簡単に手に入るものではない。新しいものをつくる土壌がはぐくまれているというのが日本の強みだ。それは捨てるべきではないと思う。

私は、韓国の市場のニーズに合わせるところを見習うべきだと思う。「え、なんでそんなものを」と思われるような研究をして、結果として面白い発明につながることもあるので、すべて売れるかどうかを基準とした開発にするべきだとは思わない。しかし、売れるものを作りたいのなら、ターゲットを絞ってそこに合わせるという姿勢は必要だ。ただし、「熟練節約」生産を目指すべきだとは思わない。むしろその逆が日本の姿であるべきだ。高い技術力は知識・経験、そしてそれを使いこなす人材がいてこそ維持できるものだからだ。

また、格差や少子高齢化の問題は日本と共通だが、韓国のほうがより深刻である。ある意味で、日本のもう一つの姿でもあるような韓国の姿から、学ぶべきことは多い。

「アジア経済研究所・安倍誠先生の講義から韓国社会の強みと弱みを考える」

１年　廣澤玲萌

先日、アメリカのコンサルティング大手・インターブランドが発表した世界企業のブランド価値評価ランキング「ベスト・グローバル・ブランド2016」で、サムスン電子が７位を記録し、韓国企業のグローバルな力を世界に見せつけた。もはや途上国では全くなくなった韓国の社会・経済政策から日本が学ぶべきことはあるのか、韓国に残された課題とは何か、アジア経済研究所地域研究センターの安倍誠先生のお話をもとに考えてみる。

(1) 韓国の経済発展の背景－日本の背中追いかけ期－

韓国は、朝鮮戦争後の1960年代から経済開発に注力を始めた。そのときにお手本としたのが、原材料を輸入してそれを加工し、また輸出するという日本の発展モデルである。1961年に大統領となった朴正熙（パク・チョンヒ）氏が独裁体制の下で積極的に開発を進め、この間に韓国国内は一気に豊かさを増した。

(2) 韓国の経済発展の背景－脱・日本式－

1990年代以降、日本の後追いだった経済体制が大きく変化する。1997年の通貨危機の際、IMFによって財閥や銀行の解体、整理統合が行われた。そうしていくつかの巨大な力を持った財閥が残り、高い外国資本率のもとで、脱日本、グローバル化への道を歩み始めた。しかし、少数のモンスター財閥が国を動かす経済体制の下で、いくつかの問題が起こってきた。まず、格差の拡大である。輸出を中心にどんどん大きくなる財閥大企業と、その他の中小企業との間には大きな差ができ、若者は皆大企業に入ろうと熾烈な受験戦争に挑むこととなる。競争に敗れた若者は貧困に苦しむこととなり、絶望して命を絶ってしまうことも多い。韓国の10万人当たりの自殺率は1983年の8.7人から2015年は28.9人となり、世界で２位である。収入格差は子供の教育格差につながり、世代を数えるごとに格差は拡大していく。また、世襲したトップでは、これ以上の発展は無理だという意見もある。韓国のグローバル化の象徴である財閥だが、その体制には国民からも厳しい目が向けられている。

(3) グローバル化への取り組みにおいて日本が見習うべき点

日本企業の一部は技術力を過信して世界の需要を考えずにいたことでシェアを失い、現在窮地に立たされている。そんな中、韓国製品が世界で売れる理由は、市場重視の開発・販売戦略にある。韓国は成長市場として先進国市場に目を付け、多様なニーズに対応した製品を投入してきた。そうして獲得したシェアを、現在の製品売上まで繋げてきている。自身ではあまり技術開発に力は注がず、外国企業のノウハウを使って効率の良い生産・開発活動を行ったことも要因の一つである。

そして、英語教育を重視する国の政策もグローバル化を後押しした。韓国では1997年から初等学校３年生で英語を必修としている。その成果として、韓国の大学生のTOEIC平均点は、日本の1.17倍(2005年)となっている。日本ももっとハイスピードで、英語教育の拡充を行ったらどうだろうか。

韓国は日本の発展の再現から成長を始め、現在では全く違う経済モデルで成長を続けている。しかし、急速に進む経済成長の裏でいろんな社会のひずみも発生し、国民の幸福度という点では日本に全く追いついていない。韓国社会が今後どのような方向へ向かうのか想像もつかないが、注視するべきだろう。

「アジア経済研究所を訪問して」

２年　加藤杏菜

今回の東京巡検では、１日目にアジア経済研究所を訪れた。ここに併設された図書館には、開発途上地域の経済や政治、社会などの諸分野の学術的文献、資料、新聞や雑誌が所蔵されていた。そこに並んでいる本は他言語で著されているものが多く、いくつか手に取って見てみたが、どれも難しくて私に読めるものはなかった。職員の方によると、それぞれの母国語で記された資料は情報量が多く、研究のための資料に最適なのだそう。

安倍誠先生の講義では、韓国の経済成長の過程や現状、社会問題などについて日本と比較しながら学ぶことができた。なかでも特に興味を持ったのは、「脱日本」だ。安倍先生によると、韓国のグローバル企業出現の要因の一つに脱日本があるという。

講義でもあったように、サムスン電子がアジア通貨危機後、日本的な終身雇用・年功賃金からアメリカ的な成果主義・スピード重視に切り替えた。40代にもなると、２年以内に成果を出さないと肩をたたかれてしまうことがよくあるそうだ。せっかく勉強漬けで苦労して良い大学に入ったとしても、20年も働かないうちに職を失ってしまうおそれが往々にしてある。これはかなりシビアな世界だと感じた。また、再就職も厳しい社会だ。なおさら、皆が結果を残そうと躍起なり、個人主義になって格差が拡大してしまうのではないか。そればかりでなく、長期的な目で見ると、人材育成などが上手くまわらなくなってしまうのではないか、と私は危惧している。

ただ、それによって韓国が発展を遂げたのもまた事実だ。脱日本で韓国が成功した部分というのは、日本の弱点と表裏一体である。例えば、韓国企業は、市場を重視し市場の需要に合わせた製品開発を行なっている。それにより、新興国市場は拡大し、グローバル化は促進され、さらなる経済成長を遂げた。一方日本企業は、高い技術をもってつくられた高品質な日本製品は他の国でも通用すると、とかく思いがちであり、自国のものづくりに固執してしまった。その理由としては、国の外側にあまり目が向けられていないことが挙げられる。このままでは新興国市場をなかなか確保できず、グローバル化にも逆行する結果となる。

私は、韓国の脱日本化には、良くも悪くも韓国の柔軟性・潔さを感じる。例えば講義でもあったが、日本でいきなり終身雇用・年功賃金から成果主義に完全にシフトしようとしたら、本当にできるだろうか。自動車製造ならば、今までの生産方式の製造ラインを放棄して、製造ロボットを導入できるだろうか。一部から反発が起き、なかなかできるものではないと思う。ただ「良くも悪くも」といったのは、韓国の柔軟性には感心させられるが、一方でそれに伴い、少なくない人々が職を失っていることを忘れてはいけないからだ。

今まで日本の後を追って、同じような経済成長の道を辿り、「後れた国」と言われていた韓国だったが、アジア通貨危機を境に日本とは別の道を歩み始めたように思われる。これからのグローバル時代において必要な柔軟な対応という点では、韓国より　むしろ日本のほうが「後れた国」なのかもしれない。

「アジア経済研究所地域研究センターを訪れて」

２年　田中茉凜

今回東京巡検で最初に訪れたのがアジ研だった。鯱光祭を終えたばかりで少し気分が浮かれ気味だったが、去年と全く変わらない外見と、今年もお世話になった旭丘高校ＯＧの研究者、星野さんにお会いして、巡検として学習しに来たという実感が湧いた。さてこの訪問の

メインイベント、安倍先生の講演は、思いがけず地震の話から始まった。先日韓国で発生したおよそ震度４の地震のことだ。私はちょうど発生時にテレビを見ていたので画面の上のテロップでそれを知ったのだが、「ああ何だ、震度４か」と気にも留めなかったのを覚えている。しかしその当時韓国では大騒ぎになっていたという事実を安倍先生から聞いて驚いた。グローバル化が進み、これから日本にも様々な目的で沢山の外国人が来ることが予想されるなかで、地震に慣れていない外国人のパニックを防ぐことも真剣に考えていかなければならないとその時初めて思った。そして国外と国内の地域の違いは勿論存在し、それをしっかりと理解しておくことがどんどん大事になっていく時代になったと強く実感させられたエピソードだった。

さてそんな興味深い話から始まった講演だが、次に私が興味を持っていたのが「韓国の経済」だ。かつては発展途上国だと言われ、日本もよもやここまではと思っていた韓国は、いわゆる圧縮型工業化を特徴に急激な経済成長を見せ、今となっては世界に誇れる規模のシェアを持つサムスン電子や現代自動車に代表される先進国に成長した。そのからくりには、日本からの技術の持ち込みや欧米式生産への移行など、少しずる賢いと感じてしまうような工夫があり、その点に関して日本人として、私は少し遺憾に感じていたのだが、安倍先生の話を聞くにつれてむしろ日本の欠点が見えた気がした。韓国は進みゆくグローバル化に向けて早々と志向を切り替えた。一方日本はというと「日本の売りは質だ」といつまでもそのスタイルを変えず、外で進むグローバル化に構わず開発を進めた。確かにそのおかげで良質で世界からも注目される日本ブランドが出来上がっている訳だが、世の中はもはやもうそれだけでは限界があると思う。これは今回の巡検とは関係のないことなのだが、私は今年の夏、一週間フィリピンを訪れた。そこでは驚いたことに、使用されているスマートフォン、エアコン等の家電のほとんどがサムスンのもので、iPhoneもなければ日本の携帯電話などもってのほかであったのだ。話を聞くとiPhoneや日本のスマートフォンは値段が圧倒的に高く、盗難の対象にさえなるらしい。私はその時、国内で日本の電化製品の有能性ばかりを誇張するメディアに惑わされていただけで、世界ではもはや高品質だが高価格な日本の製品はごく一部の富裕層にしか求められていないことを知った。そして今回の講演で安倍先生もまた同じことをおっしゃっていたので、改めて確信したのだった。加えて講演の中にあった「ブーメラン効果」という言葉がとても印象に残っている。初め言葉の説明を受けたときは日本の情けなさに肩を落としていたが、その後の韓国で起こっている社会問題の話を聞いて考えが変わった。その返ってきたブーメランを困難と受け取らず、観察対象として見てみると、日本経済の更なる発展の大きなヒントになるのではないかと。現在韓国では、日本の技術を参考にして成熟過程も似ているからか、少子化や所得格差の拡大など、日本と同じような問題が多く発生している。そして我々は韓国の急成長にただ打撃を受けるのだけではなく、そういった問題の原因や政府の対策をじっくり研究することが十分可能なはずだ。したがって、国内外の境目に大きく情報の壁を作るメディアに騙されず、今の厳しい現状を受け止め、しかしポジティブに日本の発展につなげようとする努力が最も大切だと思う。模倣などでいがみ合うのではなく「切磋琢磨」をモットーに国民と政府が一体となってそれぞれ国を成長させていくことが理想であると今回の講演を通して思った。

「日韓両国の経済」

１年　玉田洋一朗

今日の韓国の経済は、IMF通貨危機後のスピード感あふれる決断によって成立しているといっても過言ではない。もともと、韓国では我が国のような年功序列・終身雇用制が一般的だったが、韓国を代表する大企業、サムスンはIMF危機後、これをアメリカ的な成果主義に切り替えた。また、もう一つの大企業、ヒュンダイの自動車製造方法もトヨタのようなかんばん方式を撤廃し、ロボットによる徹底した効率化と人件費削減志向に変わった。また、ヒュンダイはヨーロッパからデザイナーを招聘することで、デザイン性の向上も図った。さらにこの二社をはじめとする韓国の大企業は、新しいマーケットを開拓しつつ、手を変え品を変えて利益を多方面で伸ばしていた。韓国企業は、品質よりもスピードを重視する流れに乗り、どんどん成長していき、ついに、韓国はアジアを代表する工業国への仲間入りをはたしたのだ。日本にはmade in JAPANに過度のプライドを持っている人、韓国のことを発展途上国とみなしている人が少なからずいる。確かに一昔前までは、テレビや冷蔵庫などの世界シェアの多くを日本企業が占めていたが、サムスンやLG、ヒュンダイに追い越されてしまった今となっては、そんなことは言っていられないと思うのは私だけだろうか。

先ほど述べたように、韓国経済は日本経済よりスピード感にあふれており、グローバル化も進んでいるが、いいことずくめではない。サムソンやヒュンダイ、ロッテなどの大企業が成長していくにつれて格差が拡大しているのだ。以前は、下請け企業もこれらの大企業の恩恵を享受することができたが、前述のように、日本風の方式から機械を用いて予算を徹底して削減する方式に転換したため、下請け企業が成長できず、中堅企業があまり存在しなくなったのである。そして、それ故に、厳しい競争社会が子どもたちの間に生じている。これは日本でもよく報道やワイドショーなどで耳にするが、韓国では、サムソンやヒュンダイなどの大企業に入るため、ゆくゆくは乏しい年金に困る両親を救うために、幼いころから欲望にまみれた英才教育の渦に身を投じ、朝早くから夜遅くまで、寝る間も惜しんで勉強するのである。

また、韓国においても、少子高齢化問題が深刻さを増してきている。アジア諸国の多くは、フランスやスウェーデンのような充実した子育てへの公的支援制度がないため、合計特殊出生率が比較的低いところでところでくすぶっている。韓国における少子高齢化問題は、日本のものより深刻だといえる。日本における定年は満60歳が一般的である。一方の韓国は、定年の年齢こそ同じ60歳だが、実際のところ、退職勧告によって平均退職年齢は53歳くらいになっている。このため、多くの韓国の高齢者は乏しい年金で生活せざるを得ない状況に陥っているのだ。また、その年金制度も整備されたばかりで、年金がもらえるかどうかの先行きも不透明であり、高齢者の不安をあおっている。

年功序列・終身雇用制を保ち、ガラパゴス化から脱することに二の足を踏んでいる日本と、成果・スピード重視で急成長中の韓国両者から、今後も目が離せない。

「アジア経済研究所の講義を聴いて」

１年　花山 愛歩

日本はもはやアジアの唯一のリーダーではない。私がこの講義を通して感じ取ったことだ。私たちは戦後の復興から一躍アジア、ひいては世界のトップへと成長したが、そのことでアジア諸国を自分達と対等には見なくなったこともまた事実だと思う。自分達は目標とされている国であって、自分達を追っている国はあっても自分達がその国々から学ぶものはない。そういう固定概念が未だに日本には根強く存在している気がする。

しかし、事実はどうだろうか。韓国と日本の二国間だけで見ても、経済や教育の面から見て韓国は決して日本に引けをとらないところまで来ている。たとえば、日本と韓国の一人あたりのGDP(ドル)は、日本が32,576$、韓国は27,337$と、すぐそこまで追ってきている。さらに一人あたりの国民総所得（購買力平価）では、日本が38,870$、韓国は34,700$と、ほとんど差のない状況だ。このデータを見れば、「日本とそれを目標とする韓国」というイメージだけではいられないのではないか。

では、なぜ韓国はここまで急速な成長ができたのか。それこそ日本が韓国から学ぶべきものだと私は感じた。まず最初に、柔軟に世界の動きや自国の課題に対応していく体制だ。例えば、世界的にスマートフォンなどで大きなシェアを持つサムスン電子は、1997年のアジア通貨危機までは日本の終身雇用・年功賃金の体制をとっていたが、危機直後にアメリカ的な成果主義に大きく舵を切って今の世界的企業へと成長していった。さらにヒュンダイ自動車も2000年代に入って同様の日本式から、世界の中で通用する体制へと転換している。それはとても厳しい成果主義になるということだが、結果的にそれは企業の大きな発展へと結びついた。

この行動力が日本の企業にはあるだろうか。確かに、会社の基本体

制から変えるのは企業にとってもリスクは大きいだろうが、いち早く時代の流れに乗り、そのなかでシェアを伸ばしていくことがこの２社はできている。それに対して、日本の企業は時代の風潮や変化にスピードを持って対応できているだろうか。この講義でも、安倍さんは日本の企業の失敗についてお話しされていた。日本企業の失敗の原因は日本の強みとする高い技術力からくる、「ものづくりへの過信」だとおっしゃっていて、私もなるほどなぁと思った。例えば、半導体・メモリの分野で日本企業は大型コンピューター向けのものづくりに固執し、パソコン向けの世界の需要に対応できていないそうだ。携帯電話や新興国向けの家電でも同様のことが言えるようで、日本独自のシステムや品質の需要にこだわりすぎて世界の市場の需要には対応しきれていない。日本企業は技術面で世界トップの技術力を誇っていることにこだわり、「製品としての付加価値」を高めることに的を絞りすぎている気がする。

これから世界の中でさらに規模が大きくなる新興国では、そこまで高い技術力を求めている消費者は少ない。むしろ価格や地域の特性に対応したものが求められている。このように日々変化していく世界の市場に柔軟に対応していくことは絶対に必要だと思う。

このような成果主義を取り入れた韓国には、格差の拡大や国内の中小企業の弱体化、教育・進学での激しい競争など課題もたくさん生まれている。だから、韓国のやり方が必ずしも上手とはいえないかもしれない。また日本は日本のストロングポイントも持っている。だから、真似をしていくことが良いのではなく、韓国から何かを「学ぶ」ことが大切だ。私たちに不足している力をしっかりと考え、柔軟にとりこむことに挑戦していくことがグローバル化の中では必要不可欠なことだと思う。

「アジア経済研究所にて　韓国について学ぶ」

２年　伊東里彩

１　導入

今回アジア経済研究所では、韓国についてのより詳しい知見を講義によって深めることができた。今回講義で学んだ内容を、主にまとめていきたい。

２　似ている“日本”と“韓国”

韓国と日本は地理的にも隣接し、同じ東アジアの文化圏であり、同じく人口稠密な無資源国、同様な産業構造と、似ている点が多い。しかし、似ているとはいえ、韓国と日本ではもちろん“違い”もある。そのような違いがなぜ発生するのかということを考えていくことが、今両国間で抱えている大きな問題の解決にもつながるかもしれない。

３　韓国経済の発展

韓国のGDPの成長率と日本のGDPの成長率のグラフを重ねてみてみると、現在の韓国のグラフの形状と、日本の高度経済成長期時代とがほぼ同じような形状であることがわかる。このことから、韓国は短期間に非常に高い経済成長を遂げたということがわかる。このことを“圧縮工業化”ともいう。

韓国が急激に経済発展したのはなぜなのだろうか。理由として挙げられるものは主にである。

一つ目はアジア太平洋貿易トライアングルである。韓国は無資源で人口が多かったため、安い労働力を活用し、日本から原材料・部品や製造機械を輸入し、製品を組み立て・加工をしてアメリカ・日本などに輸出した。これは、1960年代半ばから、ベニヤ板やかつらなどの簡単な加工から始まっていったが、1970年代前半になると電子製品の組み立てなど高度なものに成長していった。

二つ目の理由は、モデルとして日本があったことである。1960年代半ばから政府が積極的に産業振興政策をスタートさせ、当時の日本の主要産業であった鉄鋼、化学、機械などの産業を活発化させていった（日本の真似をすれば経済成長できるのでは、ということ）。また、民間企業も日本企業から技術供与を受けるなど日本企業を成長のモデルとしていった（例：サムスン電子＝三洋電機との合弁でカラーテレビの生産をスタート）。

しかし、1990年代以降、韓国の経済の立ち位置が変化してきた。その構造を東アジアトライアングル構造といい、従来通り日本から部品などの供給を受けることに加え、中国やASEAN諸国に韓国が部品などを供給するという、1970年代の日本と似た立場をとるようになったのである。

４　韓国でのグローバル企業の出現

2000年代に入ると、韓国ではサムスン電子や現代自動車のようなグローバル企業が出現した。その背景には二つの要因があると考えられる。

一つ目は、皮肉にも“脱日本”である。サムスン電子を例として挙げると、1997年の通貨危機を機に経営方針を転換し、日本的な終身雇用・年功賃金からアメリカ的な成果主義にシフトし、スピードを重視するようになった。

そして二つ目の理由として挙げられるのが、市場重視の開発・販売戦略である。1990年代前後に台頭したパソコンに適合する半導体を大量に生産・販売し、携帯電話では海外の基本技術をもとに応用技術を官民共同で開発して世界市場に投入した。現在の主要産業の一つであるIT業界に真っ先に進出したのである。また、先進国とは違う、異質かつ多様な新興国市場に対応していったことも挙げられる。ここでもサムスン電子を例にとると、電圧が一定しないインド市場向けに電圧調整器一体型のコンプレッサやアイスパック棚を搭載した冷蔵庫を開発・販売するなどの対応が見られる。

韓国とは対照的に、日本企業は高い技術とものづくりへの過信により、“品質よりスピード”“技術より市場”の流れにのることができずにグローバル化に出遅れてしまった。

５　近年の韓国の問題

まず一つ目にあげられるのが韓国の競争力の低下である。その背景としては、中国などの新興国市場の成長の鈍化により市場が縮小してしまったこと、中国などの新興国企業の台頭と、キャッチアップの天井である。キャッチアップの天井とは、“圧縮成長”“スピード経営”ゆえに、新たな技術、コンセプトの商品を生み出す能力、経験が不足していることである。先ほど述べたように、韓国と日本のGDPの成長率のグラフは似ているが、今もしくは近い将来、韓国は日本の失われた二十年と同じ状態に陥るかもしれないともいわれている。ほかにあげられる問題としては、格差の拡大や日本と同じような少子高齢化の問題、若者の失業である。格差拡大の要因として、以前は大企業成長の恩恵が中小零細企業等に及んでいたが、現在では大規模装置産業が中心になったことで、恩恵が行き渡らず、輸出大企業と中小零細企業の間に格差が生まれ、非正規労働も増加している。また、少子化の要因としては、若者の就職難・低所得、子育てに対する公的支援の不足、強まる女性の社会進出志向と根強く残る性別役割規範などが挙げられる。これらの原因を踏まえ、これから解決策を導き出していかなければならないだろう。また、韓国では日本と二十年の時差で高齢化が進んでいる。日本とは違い、“低負担・中福祉”ではなく“低負担・低福祉”であることも、韓国の高齢者に貧困問題を巻き起こしている。

６　まとめ

韓国の経済の成長過程や、抱えている問題などを見てきて、私が改めて韓国に関して感じたことは、この国は本当に日本と似ている点が多いということである。今は、従軍慰安婦問題などの戦後補償問題で関係がぎくしゃくとしてしまっているが、お互いの発展のためにも、似ている国同士、協力体制を作っていくことが本当に大切だと思った。

どこかでうまい妥協点を見つけていくことが重要で、その妥協点を見つけるためには、互いをしっかりと理解し、似ている中でも“ちがう”ところを見つけることがカギになるのではないかと思った。

「アジア経済研究所で学んだこと」

２年　橋詰貴行

私たちは安倍誠先生の講義で、現在の韓国の経済の仕組みや国内の問題について詳しく教わった。今日の韓国の経済状況や存在する問題についてのイメージは以下のようではないか。ある人は「すごく経済

が発展している国」「サムスンが有名」「財閥が権力を握っているようだ」。またある人は、「あの国は日本の真似しかしてない」「勉強がとてもたいへんそうだ」と言うだろう。しかし実際はどうなのだろうか。今回その疑問を先生の講演で解決することができた。

＜経済力がとてもある韓国とその理由＞

日本はGDPが世界三位というとても経済力のある国だ。数字に表すと4兆1232億5800万＄。一人当たりに換算すると32,576＄、韓国は11位、全国民総計で1兆3768億6800万＄、一人当たり27,377＄。全国民総計のGDPでは日本と韓国は比べものにならないが、一人当たりではあまり差がない。さらに比較してみる。一人当たりの国民総所得（＄）では、日本38,870＄、韓国34,700＄となり、たいして変わらなくなる。つまり、韓国は経済大国なのである。

では、なぜそこまでの経済力を持ったのかというと、要因は多様であるが、大きく分けて三つある。

一つ目は、輸出主導の加工貿易を目指した圧縮型工業化である。いわゆるアジア太平洋貿易トライアングルとして、日本などから原材料、部品、製造機械などを輸入し、組み立て加工してアメリカ・日本に輸出したのである。1960年代半ばはベニヤ板・かつら・アパレル・繊維・靴、1970年代前半からは電子製品を輸出するようになっていった。

二つ目は、隣国にいいモデルとなる日本が存在していたことだ。韓国政府は、当時積極的に産業振興政策を推し進めていた。それは、日本の主要産業である鉄鋼・非鉄金属・化学・機械・造船・電子などであった。さらにそれを機に日本企業から技術供与を受けるようになった。例えば、サムスン電子は三洋電機と合弁によりカラーテレビの生産を始めた。また、現代自動車は三菱自動車から、エンジン・シャーシ等の主要技術、エンジンを受け入れた。

三つめは、高成長の立役者となった朴正熙の存在が大きい。彼は、軍事クーデターで政権を築き、1972年に「維新体制」と呼ばれる独裁体制をとった。その後、経済開発に熱心に着手した。

さらにその上、成長した企業は、1997年の通貨危機以降、世界進出を見越して日本的な終身雇用・年功賃金から、西欧的な成果主義にシフトした。さらに工場の製造過程においてはロボットを大量に導入してグローバル企業となり、韓国経済の発展に寄与したのである。

＜豊かになっても生じる問題＞

主に韓国経済が持つ問題は三つある。一つ目は格差である。輸出大企業と中小零細企業間での収入の差や非正規労働者の増加が要因としてあげられる。実際に、65歳以上の高齢者の相対的貧困率は、OECD加盟国中一位の48.6%である（日本は19.4%）。

二つ目は少子高齢化である。若者世代の就職難・低所得、子育てに対する国からの支援の不足、女性の社会進出を妨げる現状などが要因だ。少子高齢化により、消費活動の減少、生産活動の停滞、社会福祉予算の増大による財政難が心配されている。

三つめはGDP成長率の減少。これは、中国など新興国企業の台頭や、中国市場の成長鈍化、発想力の乏しさなどが原因だ。

＜最後に＞

私は安倍先生の講義を聞いて、次の巡検地である韓国の現状を理解することができた。またそれをいかして韓国の高校生と議論をしていきたい。また、他国の経済や問題を学ぶと、自国の問題点が明らかになることがわかった。日本がこれから何をすればいいのか、日本だけでなく世界をどうしたら生活がより豊かになるのかなどを考えて多くの人と議論をして問題を解決していきたいと思った。

「アジア経済研究所を訪ねて」

2年　浜　凪帆

アジア経済研究所地域研究センターでは、安倍誠先生の講義を受けた。今までゼミで聞いてきたことに加え、さらに詳しく韓国が今抱えている問題や、今までの韓国経済の経緯について知ることができた。ありがとうございました。

経済面では、韓国は日本の真似をすることで、甚だしいスピードで経済成長を遂げたが、中国企業の台頭により輸出が低迷している。低迷の原因が圧縮成長であり、新たな技術、コンセプトを生み出す経験が不足しているのだと知った。朝鮮戦争終結後、短期間でサムスン電子や現代自動車のようなグローバル企業が出てきており、私は韓国に対して、目覚ましい発展を遂げ、日本を抜いてしまいそうな国というイメージを持っていた。しかし、急成長のぼろが出ていたり、日本と同じような社会問題に直面していたりした。一概に「日本を20年分遅らせたバージョンが韓国だ」というのは韓国に対して失礼だが、日本と韓国は経済成長の経緯、抱える社会問題が似ている。そのため、韓国の外国人移民政策のように、日本より少し先を行った面では、日本がこれからどう動くかを決める際、韓国の様子、結果を参考にするのは良い方法だろう。今まで韓国がまねしてきたことの反対で、場合に応じて日本が韓国を参考にしていくということが日本の成長につながるかもしれない。

韓国の社会問題として、若者の受験戦争や貧困老人、収入の格差などがあげられていた。私は、韓国は年金、福祉が日本よりさらに少なく、高齢者が生活を年金ではなく子供だよりにしていると知った。日本人の感覚としては、親の将来のために勉強に励み、自分の就きたい職に就くのではなく、親を養えるだけの職に就かないといけない、というのは重荷だと感じた。年配の人を敬い、家族を大切にする韓国では、今まで養ってくれた親に将来お金を送ることは当たり前の感覚なのだろうか、と疑問に感じた。非正規雇用者の割合がおよそ40%も占め、それだけの人が、いつ解雇されるかわからない不安な状況で、貧しい中を生きているのだ。学生時代は勉強漬け、大企業に就職できなかった人は貧しい暮らしとなるという話を伺って、韓国はまさに勝ち組と負け組がくっきりと分かれた世界なのだと感じた。韓国の経済成長は素晴らしいと思うが、国として国民の幸せや生活を考え、これからは経済発展のための政策だけではなく、国民が幸せに生活できるような社会づくりをしていくべきではないかと私は考えてしまう。しかしながら、韓国は日本をライバル視しているから、日本を抜くことが福祉政策の充実や激しさを増す受験戦争の緩和、収入の格差是正といった目の前にある問題解決より先なのかもしれない。

今回、韓国の子供の受験戦争や、非正規雇用と正規雇用の収入格差について詳しく知り、もし私が国民なら不満がたまっているだろうと感じた。私が甘い考えを持っているのかもしれないが、12月に韓国へ行き、日本人と韓国人の社会や経済に対する意識の違い、考え方の比較をしたいと思う。

「アジア経済研究所　安倍誠先生の講義を聞いて」

1年　今田莉彩

はじめに

今回の巡検では、アジア経済研究所で韓国企業・産業を研究している安倍誠先生の講義を受けた。安倍先生の話を聞いて、韓国の経済について新たに知ったこと、考えたことをまとめていこうと思う。

1　韓国の現状

韓国は、かつては日本を追いかけてきたが、今は日本とともに先進国として発展している。韓国を日本と比較すると、面積は約３分の１、人口は約５分の２で、人口密度は韓国の方が高くなっている。また、国内総生産や一人当たりのGDPも、少しずつではあるが日本に近づいてきている。

2　韓国の経済発展

このように韓国が日本に追いついてきている理由として、「圧縮型工業化」が挙げられる。欧州の18世紀半ばからの長期間での発展や、日本の戦後の経済成長とは違い、韓国は短期間で高成長を遂げた。この高成長を支えたものとして「アジア太平洋貿易トライアングル」がある。これは、韓国の人々、つまり安い労働力を利用し、日本から原材料や機械を輸入し、加工してアメリカや日本に輸出する、という仕組みの貿易である。1960年代半ばからはベニヤ板やアパレルなどを、1970年代前半からは電子製品などを輸出している。

また、韓国の経済成長の背景には、モデルとしての日本があった。韓国政府は1960年代半ばから積極的に産業振興政策を進め、鉄鋼や

化学、機械、電子など、当時の日本の主要産業と同じ分野の育成を図った。また韓国企業も、日本企業との交流を通じて技術を身に付けるなどして成長した。例えばサムスン電子は、三洋電機と共同でカラーテレビの生産を始め、現代自動車は三菱自動車からエンジン等の主要な技術を導入し、エンジン自体の供給も受けた。

韓国経済が徐々に日本に追いついてきたとき、日本は危機を感じていたのだろうか。

当時日本も欧米諸国をモデルにして経済成長を遂げていたが、やはり韓国に対する危機感は存在し、また韓国に協力すると日本の立場が危険かもしれないというライバル心も抱いていたそうだ。1970年代からは日本に余裕も生まれ、商売・産業面で韓国と協力せざるを得ない時代となり、日本の技術を売って稼ごうという考えが広まった。こうして日本政府が韓国と経済的に協力するようになる。

韓国の成長に大きくかかわった朴正熙は、現在の韓国の大統領である朴槿恵の父親だ。彼は満州国軍中尉の座に就いたこともある軍人で、1961年にクーデターを起こして政権を握ったのち、経済開発に力を注いだ。現在では、彼は豊かさをもたらした偉人と評価されている。しかし一方で、直接選挙を停止して独裁体制を確立するなどしたため、民主主義を弾圧した独裁者という見方もある。

その後韓国は貿易の構造を「東アジアトライアングル構造」へと変化させた。これは、韓国や台湾が、中国やASEAN諸国、日本と部品や素材（ここでは鉄鋼やプラスチックなどの工業化された材料）を取引し、完成品を欧米諸国に輸出するというシステムである。韓国はブランドやネームバリューを求め、日本を意識した企業が多いが、何しろ無資源国であるので、このように東アジア独自の経済圏の中で成長しているのだ。

2000年代になると、サムスン電子、LG電子や現代自動車などがグローバル企業へと成長する。この要因として挙げられるのは、「脱日本」「市場重視の開発・販売戦略」である。

一つ目の「脱日本」は、今まで取り入れていた日本の雇用や賃金の制度などをやめ、欧米の方式を取り入れ始めたことである。例えばサムスン電子は、1997年の通貨危機後に日本的な終身雇用や年功賃金の制度を廃止し、アメリカ的な成果主義に転換してスピードを重視するようになった。また、現代自動車は、2000年代にトヨタ式の生産方式から、「熟練節約的」生産へと移行し、製造ロボットの導入や、ヨーロッパのデザイナーの雇用を推進した。

二つ目の「市場重視の開発・販売戦略」における「市場」とは、ここではIT市場や新興国市場のことを指す。パソコンに適合した半導体を大量に生産・販売し、携帯電話の分野では応用技術を官民共同で開発し、世界市場に投入した。またインドや中国などの新興国に向けては、その国に適した製品を開発・販売した。

韓国企業はこのようにしてグローバル化を遂げてきた。それでは日本企業が韓国のモデルではなくなった、つまり失敗した原因は何なのだろうか。それは高い技術と「ものづくり」への過信である。日本企業は製品の精密さを誇っているが、スピードが伴わず、中程度の技術で日本よりも多く製品を作る他の国に追いつけなかった。また、日本で好評だったものは外国でも通用するという過信を持ってしまい、実際に中国やインドでは日本の製品はあまり通用しなかった。「品質よりスピード」「技術より市場」の世界の流れにうまく乗ることができなかったのだ。

3　韓国の諸問題

しかし近年、韓国の輸出も低迷しており、競争力が低下している。その理由には、新興国市場の成長の鈍化、新興国企業の台頭、新技術を生み出す経験の不足などがある。韓国の主な輸出先は、新興国と呼ばれる中国や香港・ASEAN諸国などに偏っており、最近のこれらの地域の成長鈍化により、韓国経済は伸び悩んでいる。また、輸出品目が特定のものに偏重しているため、市況の変動にうまくついていけていない部分もある。

このような国内の状況の中で、様々な社会問題が発生している。一つは格差の拡大だ。大企業と中小零細企業間の格差、あるいは非正規労働の増加による格差が存在する。昔は大企業が成長するとその恩恵が中小企業にも及んでいたが、最近は大規模な装置産業が中心となり、恩恵は上手く行き渡っていない。また、中小企業に勤めている人のほとんどが非正規雇用であり、彼らには十分な保障がないため、正規の労働者との格差も広がっている。

もう一つは、少子高齢化の進行だ。韓国の合計特殊出生率は、1950年代後半をピークに急激に低下している。東アジアで少子化が進む原因には、若者世代の就職難や低所得、子育てに対する公的支援の不足、女性問題などがある。また、それに伴って高齢化も起こり、生産年齢人口が急速に減少している。彼らは企業から早くに引退し、再就職難に陥っている。その上貯蓄が十分でなく、年金の満足できる支給が保証されていない。自営業を開業する人もいるが、多くは失敗してしまうため、高齢者の自殺率が高くなり、大きな社会問題となっている。また、生産活動の停滞や、社会福祉に充てる金額の増加による財政負担の増大、また低所得高齢者の増加による消費の低迷などの可能性もある。

さらに、若者の失業も大きな問題となっている。大学進学率は極めて高いものの、大学を卒業した若者の高度な知識に見合った給料や仕事を提供する大企業が少ないため、就職が困難になっているというのだ。

4　まとめ

日本の隣国である韓国は、日本よりも20年ほど経済的に遅れていると言われているが、分野によっては日本よりも先を行くものもある。今後さらに発展していく可能性もあるだろう。一方で格差の拡大や少子高齢化など、日本と同じような社会問題も存在している。

これから日本と韓国が共に成長していくためには、両国の現状と問題点について深く知ることがまずは重要である。また、経済は1か国だけでなく周辺の地域とも密接に関係しているため、日韓あるいは東アジア全体で協力する必要がある。そして両国に共通する社会問題は、互いに協力して解決方法を探っていくべきだ。

「韓国の経済についてー安倍誠先生の講義を聴いてー」

2年　新海花音

1　韓国における経済発展

韓国のGDP成長率は高い。1960年頃から高い傾向にあり、その発展はとても急速である。そのため、この成長は「圧縮型工業化」といわれる短期の成長である。日本も欧米諸国と比較すると急速な発展をしてきた。しかし、韓国の経済発展は日本以上に急速である。そんな成長をもたらした要因には、「輸出主導」「日本をモデルとしたこと」「強力なリーダー」などが挙げられる。

＜輸出主導－「アジア太平洋貿易トライアングル」＞

安い労働力を利用し、日本から原材料・部品や製造機械を輸入・組み立て・加工してアメリカ・日本などに労働集約的製品を輸出した。1960年代半ばからはベニヤ板、かつら（人の髪を使用）、アパレル、繊維、靴など。1970年代前半からは電子製品、鉄鋼、非鉄金属、化学、機械、造船など。初期は労働者が多くいたため労働力には困らなかったが、資源が少なかった。1960年代半ばからは政府が積極的に産業振興政策を開始し、それが1970年代に加速したためこのように製品が高度化した。1970年代前半からの製品は、当時の日本の主要産業であった。

企業も日本企業が技術供与するなど成長のモデルとなった。例えばサムスン電子は三洋電機と合弁でカラーテレビ（ブラウン管はNEC）を作り、現代自動車は三菱自動車からエンジン・シャーシ等の主要技術とエンジンの供給を受けた。このように日本や日本企業がモデルとなったことも韓国の高成長に貢献した。

＜1963～1979の大統領・朴正熙＞

彼は軍事クーデターを起こして政権を握り、経済開発に力を注いだ（満州での国軍中尉経験がこの経済開発を生んだという主張もある）。大統領直接選挙を停止し、独裁体制を築いたため、国内での評価は二分している（国民に豊かさをもたらした偉人vs民主主義を弾圧した独裁者）。その結果、彼は暗殺された。

＜1990年代以降＞

アジア太平洋貿易トライアングルが「東アジアトライアングル構造」に変化した。かつての韓国の役割を中国やASEANが果たす。そして、完成品がアメリカやヨーロッパに輸出される。日本・韓国は企業のブランドを中心に輸出を進め、その一方、台湾は国全体で貿易の

裏方を担う（最近は変わりつつある）。それぞれの国が新しい役割を担い始めている。

2　韓国の企業

サムスン電子や現代自動車など大手メーカーが現れた。サムスン電子は2002年～2012年の間に薄型テレビや携帯電話・スマートフォンの部門で日本企業のパナソニックやシャープをはじめとする各国の企業を追い越し、どちらも25%以上のシェアを誇る。現代自動車は2015年，自動車メーカー世界販売台数第５位にランクインした（１位はトヨタ自動車グループ）。

＜グローバル企業の出現要因＞

・脱日本

1997年アジア通貨危機直後，サムスン電子は日本的な終身雇用・年功序列による賃金を止め、アメリカ的な成果主義にシフト。スピードを重視した。現代自動車は，2000年代に入り，トヨタ式生産方式を放棄。大量の生産ロボットを導入した「熟練節約的」生産志向に変化して効率性が上がった。また、ヨーロッパのデザイナーをリクルートしたことにより，格段にデザインがよくなった。

・市場を重視した開発・販売

日本企業が大型コンピューター向けのものづくりに固執していた一方、韓国企業は1990年前後に台頭したパソコンに適合した半導体を大量生産・販売した。また、携帯電話で世界標準の規格向け端末の遅れをとっていた日本に対し、韓国は海外の基本技術をもとに応用技術を官民共同開発し、世界市場に投入した。もう一つの工夫として韓国企業は、先進国とは異質で多様なアジア・インドなど新興国向けの製品を開発。「世界で最も品質にうるさい日本市場で勝ち残った製品は他国でも通用する」という過信から、ガラパゴス化をしていった日本に対し、その地域の生活状況や文化を考慮した製品を開発・販売した。

結局、『品質よりスピード』『技術より市場』の流れに乗った韓国は成功し、乗ることができなかった日本は失敗した。「高い技術＝売れる」時代ではなくなったのである。

＜近年の輸出状況＞

韓国は市場が新興国に偏っていたため、近年は中国などの成長減速を原因に輸出が低迷し、競争力が低下している。中国自体の成長減速がみられる一方で、中国の新興企業が台頭し、ライバルとなりつつある。また，輸出品目の変動が少なく、市況の変化に弱い。これは「圧縮成長」「スピード経営」ゆえに経験が不足していることも原因で、新たな技術・コンセプトの商品を生み出す能力が十分ではない。

3　社会問題

一度大きく広がった格差は縮まらず、むしろ少しずつではあるが拡大している。また、少子高齢化と生産年齢の減少も進む。他方、若者の失業率は増加している。これらの問題は日本と韓国に共通するものである。それらに加えて，韓国の社会は高齢者にとって過酷なものとなっていることも問題となっている。

＜格差拡大・要因＞

・輸出大企業と中小零細企業の間の格差

以前は大企業の下請けである中小零細企業にも恩恵が及んでいたが，大規模装置産業が中心となった現在は恩恵が行き渡っていない。

・非正規労働者の増加

中小企業の労働者は正社員でない人のほうが多く、労働基準法外の人が多い。

世代をまたいだ格差も拡大している。また、韓国経済を担うのはほとんどが財閥であるため、立ち振る舞いの悪さなどをきっかけに普段の不満がぶつけられることがある（例：大韓航空グループ令嬢＝ナッツ姫）。

＜少子高齢化＞

・若者世代の就職難・低所得

不景気のためだが、若年層の高失業率はヨーロッパなどでも見られる。韓国では非常に高い大学進学率（男性67.4%女性74.6%2014年）に見合う仕事の少なさが原因である。少数の大企業と零細企業からなるため、中堅企業が少ない。15～19歳の失業率は9.3%だが、就職準備生が多いため、実際はさらに高いとみられる。

・子育てに対する公的支援の不足

ヨーロッパと比較すると、制度が全くないわけではないが不十分。多くの先進国は合計特殊出生率の低いがその中でも韓国は低い。

その他の要因として、女性の社会進出志向の強まりと根強く残る性別役割規範がある。

＜高齢化と経済＞

・生産年齢人口の減少

生産活動が停滞する。65歳人口が７%で高齢化社会、14%で高齢社会、21%で超高齢社会だが、日本と韓国はどちらも超高齢社会になっている。20年ほどの時差で進行中だが、予想では韓国のほうが比率の増加が急速。

・社会福祉予算の増大

「低負担・低福祉」の韓国の財政赤字は「低負担・中福祉」の日本ほどではないが，「高負担・高福祉」のヨーロッパと比較すると深刻。

・所得の少ない層の増加

高齢者の増加，低所得者層の増加は消費の減少につながる。こちらは日本よりも韓国のほうが深刻だとみられる。

＜高齢者の問題＞

・早い引退

2013年に法律で定年が55歳から60歳に引き上げられた。しかし、実際の平均退職年齢は53歳ほど。その理由は，退職勧告などで定年前に辞職することが多いためである。

・貯蓄が不十分

豊かになって間もないし、親世代と子供世代の扶養観念が根強い。

・高齢者の自殺率が高い

年金制度整備から間もないため，支給が十分ではない。再就職先もなく，自営業開業するも失敗することが多く，貧しくなる人が多い。65歳以上の相対的貧困率はOECD加盟国中１位の48.6%（2014年）。日本は19.4%である。

日本と韓国は高齢化のみならずGDP成長率でも時差20年ほど。このまま進行していくと韓国も日本の「失われた20年」に突入すると考えられている。

4　まとめ

発展への一番の近道は成功例を踏襲することだと思う。教わり、真似をすることは簡単で有効的な方法であると考えるからだ。実際、日本・韓国両国における急速なGDP成長の大きな要因は、先進国を手本にしたことで達成できたものだといえる。しかしその後、日本は高い技術やものづくりへの過信から世界市場のニーズに合った生産から離れたことで失速。世界の流れに乗り，成功した韓国も近年は輸出の低迷が始まっている。日本の失敗からは、世界の状況を客観的に正確にとらえて必要とされる商品を生産することが大切だといえる。韓国の状況からは、真似だけの生産には限界があるということと、新しいものを生み出す技術が必要であることがいえる。つまり、市場に適した生産が重要な一方で、独自の生産も必要であるということだ。だから将来、日本企業が固執した高い技術やものづくりの精神が役に立つ可能性も十分考えられると思う。そのため、ただ単に世界市場に合わせて、それまでの経験を捨ててしまうべきではない。一度失敗した経験を糧に、新たな道を開くべきだと思う。

日本と韓国は文化や地理、人口密度、国民総所得をはじめ、高齢化や格差拡大など社会問題までも似た部分の多い国同士である。相手の成功を見習うことも、失敗を受け回避することも、そして本来は協力することも他国間に比べれば簡単だと思う。今のままでは同じ道を20年の時差でたどっているだけで、いつまでも関係は平行なままである。互いに協力しあい、両国が最善の形で問題解決・さらなる発展をするためにも、まず歴史問題の解決が不可欠であるということは間違いないだろう。

「韓国の経済・社会」

１年　稲田栞里

隣国である韓国を、私たちはどのように捉えるべきなのだろうか。アジア経済研所での安倍誠先生の講義で学んだ韓国の経済や社会について、日本と比較しながらまとめていきたい。

１　産業

韓国は1960年代から、急速に経済を発展させてきた。いわゆる「圧縮型工業化」である。急速な成長を可能にした要因としてまずあげられるのは、安い労働力を利用して輸出を進めたことだ。韓国は日本と同じように資源の乏しい国であるが、日本から原材料や部品、製造機械を輸入し、組み立て・加工して日本やアメリカに輸出するという、アジア太平洋貿易トライアングルを形成した。また、当時アジアで最も経済発展が進んでいた日本をモデルとしたことも大きな要因だ。韓国政府は当時の日本の主要産業であった鉄鋼や非鉄金属といった分野に力を入れ、また企業も日本企業から技術供与を受けるなど日本企業を成長のモデルにした。韓国のこのような経済成長は、明治維新後の19世紀末から、当時進んだ工業国であった欧米諸国にならって工業化を推し進めてきた日本と共通する部分が多いように感じる。

しかし、その後グローバル化を進める上で、両国は対照的な道を歩んだ。韓国企業は通貨危機後、それまでモデルとしてきた日本の雇用形態や生産方式から離れ、スピードを重視するなどの新たなやり方を取り入れることで国際的な競争力を持つ製品を生産することに成功した。また、成長を続ける新興国市場に注目し、各国の多様な需要に対応した製品を開発・販売することで世界的なシェアを確立したのである。それに対して日本企業の場合、日本のものづくりに対するプライドが強すぎたが故に、国際社会のグローバル化の流れに乗りきれなかった。日本の人々の中には、未だに、日本は技術力の高さではどこにも負けないという過度な自信があると思う。実際メディアなどでは日本のものづくりの優秀さが強調される。そのため、韓国や中国、その他新興国の製品の多くが日本製品に見劣りしない品質を備えているという事実に、多くの日本人が馴染めていないように私にはしばしば感じられる。このように、従来のやり方に固執し、品質や技術への過信から抜け出すことができなかった日本と比較すると、スピードや市場の開発を重視する流れに乗ることのできた韓国は、グローバル化という観点ではかなり成功したといえる。

しかしこの韓国のやり方は、良い点ばかりではない。新興国市場を重視してきた韓国企業にとって、中国などの新興国市場の成長鈍化は痛手となる。また、中国など新興国企業が近年伸びてきており、韓国企業の競争力は低下しつつある。加えて、経済発展を急いできたことの負の側面として、既成のものを応用することは得意でも、新しいものを生み出すことができないといった問題も存在する。

このように、地理的・文化的に近く、資源に乏しいなど共通する点の多い韓国と日本は、同じような経過で経済を発展させてきたが、現在両国の抱えている状況は大きく異なっている。

２　社会問題

日韓両国が抱える社会問題は、多くが共通するものであるが、その構造は大きく異なっている。国内での格差の拡大はその一例だ。日本においては、格差拡大の要因として、正規労働者と非正規労働者の所得格差がまずあげられるだろう。一つの企業の中でこのような格差が生まれている場合が多い。それに対して韓国では、サムスン、ヒュンダイといったごく少数の大企業と、その他の中小零細企業間の格差が大きな問題となっている。多くの場合、大企業の社員は正規雇用であるが、中小零細企業の社員は非正規雇用である。加えて、近年輸出の中心となっている半導体や石油製品などは大企業のみで生産するため、中小零細企業にまで恩恵が行き渡っていないのが現状だ。そんな中で財閥が、格差拡大に不満を持つ韓国国民の批判を集めている。大韓航空のナッツ事件は記憶に新しいが、彼女が激しいバッシングを受けていたわけも、このような背景を考慮すると納得がいく。

続いてあげられるのは、少子高齢化の問題だ。日本、韓国を含む東アジアは、近年少子化が進行している。その最大の要因は、女性の子育てと仕事の両立が難しいことだ。キャリア志向の強い韓国では女性の社会進出が進んでいるが、家事や育児との両立を支える社会の仕組みづくりがそれに追いついていないのである。男性も女性も社会の中で対等に活躍する今、家事は女性が行うものだという旧来の考え方をもう一度見直す必要がある。日本の場合も全く同じことが言えるが、少子化を食い止める一つの手段として、これまで女性が担っていた仕事を、社会全体で支えていくという意識を持つべきなのではないだろうか。加えて、韓国では、日本から20年ほど遅れて日本以上のスピードで高齢化が進んでいる。増え続ける韓国の高齢者が置かれている状況は、日本以上に深刻だ。多くの韓国企業は成果主義をとっており、社員は60歳の定年を待たずに辞めざるをえない。彼らの多くは蓄えもなく、年金制度も不十分であるため非常に経済的に厳しい。実際、65歳以上の相対貧困率は日本19.4%に対して韓国は48.6%にのぼる(2015年)。これはOECD加盟国中１位の数字である。高齢者の自殺率も非常に高くなっている。

ここまで日本と比較しながら韓国の経済や社会についてまとめてきたが、多少の違いはあってもやはり共通点が多いという印象を私は受けた。日韓両国がお互いに対する理解を深めるためにも、このようなことを学ぶのは非常に有意義なことであると考える。

「韓国の経済・社会を知る」

１年　元吉千遥

韓国の経済発展の特徴は「圧縮型工業化」である。この「圧縮型工業化」とは短期間で発展することを意味する。本来、ヨーロッパ等の国々では18世紀ごろから産業発展が始まり、比較的ゆっくりと段階を踏んで発展したのに対して、韓国では第２次世界大戦の直後に起きた朝鮮戦争後（特に1960年代から1970年まで）に産業発展が始まり急成長を遂げた。韓国のGDP成長率は1956年から2010年までの間、０％を下回ったのは数回しかない（内閣府、韓国銀行出典）。

この高成長をもたらした要因としては、日本をモデルとした輸出主導型の経済政策が挙げられる。韓国は国内で取れる資源が少ないが、人口は一定規模あるので安い労働力を利用し、日本から原材料・部品や製造機械を輸入し、それを組立・加工をして、アメリカや日本などに輸出する加工貿易を行った。このことは、アメリカ・日本・韓国の３拠点からなるアジア太平洋トライアングル構造と呼ばれている。その輸出品目は1960年代半ばはベニヤ板・かつら、アパレル、繊維、靴などの人手によるものが中心だったが、1970年代からは電子製品などを輸出し始め、今では市場を独占するまでになっている。

圧縮型工業化が実現した要因は、韓国が日本をモデルとした経済成長政策を取り入れたことにある。日本は明治維新後、欧米列強との経済格差を縮めるため、19世紀後半から政府が官営模範工場を建てることなどによって積極的に産業の強化を図った。また第二次世界大戦後も官民を挙げた体制で戦後の復旧を図り、奇跡とも呼ばれる経済成長を遂げた。韓国も1960年代半ばから政府が積極的に産業振興政策を始め、1970年代に本格化した。当時の日本の主要産業であった鉄鋼、非鉄金属、化学、機械、造船、電子などの工業を成長させていった。企業等も日本企業から技術供与を受けるなどして、日本の企業を成長のモデルにし、サムスン電子やヒュンダイ自動車などといった企業が世界的な大企業にまで発展を遂げるまでに至った。

なおこの1960年代から1990年までの高成長の立役者として、朴正熙（大統領在職：1963－1979）が挙げられる。韓国国内では、国民に豊かさをもたらした経済発展の立役者としての顔と民主主義を弾圧した独裁者という顔の両面を持ち、国内での評価は二分されるが、「漢江の奇跡」をもたらした人物として有名である。

また、1990年代はこれまでのアジア太平洋トライアングル構造から一転し、東アジアトライアングル構造と呼ばれるものができた。それは、これまでの日本が部品を韓国に輸出し、韓国が加工するというものとは異なり、日本や韓国などが部品や素材を中国やASEANの国々に輸出し、IT機器などの労働集約的完成品を欧米諸国に輸出するスタイルである。

その後の2000年代からは、脱日本化や市場重視の開発や販売戦略を行うことで、グローバル化した世界に対応できるようになっている。

このように順調に成長しているように見える韓国経済だが、実は新

興国頼みの輸出構造に問題があり、格差の拡大や少子高齢化の進行など、多くの社会問題を抱えている。これからの韓国は、日本のように「失われた20年」へと向かっていく可能性もあると言われている。

「安倍誠先生の講義を受けて」

１年　小澤響子

日本が経験した「失われた20年」に、韓国は直面しつつあるのではないか。安倍先生は講義の中でこう述べられ、私はその所見をとても興味深いと思った。それについて少し考えてみたい。

まずはじめに、安倍先生が所見の根拠とした生産年齢人口の減少に注目したい。確かに日本と韓国は、20年ほどの年月を隔てて同じような高齢化を経験している。しかし、果たしてそれだけで韓国のこれからを判断していいのだろうか。

韓国は近年、目覚ましい経済成長を遂げてきた。それは1970年代半ばごろから日本を上まわり続ける同国のGDP成長率（第二次石油危機、アジア通貨危機の時を除く）に如実に表れている。同国の経済成長に向けての道のりは、とても合理的なものであった。資源も技術も乏しかったため、安い労働力を使った加工貿易、日本の技術協力などを経て国の技術レベルを高めていったのだ。現在では、三星などの大企業が世界のシェアを大きく占めている。また、日本の伝統ある企業が合併されてしまうというニュースも聞く。ではなぜ韓国の経済は停滞しているのだろうか。最も大きな理由は、中国などの新興開発途上国の需要が不振になってきたからだ。韓国内だけでは需要の絶対数が少なく、しかも市場は一部の企業が独占している。ウォン安の影響もあって輸出がGDPの50％以上を占めている同国にとってこれは大きな問題である。また現在では、大企業（財閥）だけが強くて中小企業が圧倒的に弱いという構図になっている。それにより国内で大きな格差が生じており、いい大学に行くための受験戦争も激しくなっている。しかし受験に合格しても大企業に就職できる保証はないため、このような成果主義に耐えきれず自殺を選んでしまう人も少なくない。事実、同国の自殺率は２位（2012年時点）と非常に高い。経済成長期初期に朴正熙政権が民主化運動を厳しく弾圧したように、経済成長のためには国民の生活は省みないというこの韓国の体制こそが一番の問題であると私は考える。さらに、韓国の経済を潤しているのは主にIT産業と自動車工業である。これらは収益性が高い代わりに、常に革新を続ける競争の激しい分野である。しかしこれまで韓国では技術を発展させることが第一とされ、長期的な研究がなされてこなかったため、新たに何かを生み出すための基盤がしっかりしていない。このままではいずれ他国に遅れをとってしまうだろう。

ここで日本の「失われた20年」、1991年以降の20年間について考えたい。総量規制をきっかけに、約４年間続いたバブル景気が崩壊し、デフレーションに陥った。日本の経済は低迷し、銀行の倒産、企業の経営破綻などによるリストラで多くの人が路頭に迷ってしまった。この原因にはバブル崩壊後の政府の対応の遅さが挙げられる。日本のICT投資では汎用性の高いパッケージソフトウェアではなく、自社のみで使用できるカスタムソフトウェアを使うことが多いため、見返りの少ないICT投資はされにくかったのである。早期にすべき景気刺激策が十分でなかったために、結果的に資産デフレなどの影響もあって不景気は長く続いてしまった。その後はゼロ金利政策、量的緩和政策を経て景気が回復していったわけだが、現在でも日本の産業は世界で優位な立場に立てていない。さて、日本では第二次世界大戦後に高度経済成長を経験し、「失われた20年」以前までに経済の基盤はある程度できていたといえる。自国で培った高い技術は世界でも高い評価を受けてきた。また、中小企業はその高い技術レベルの維持において重要な役割を果たしている。

韓国の今の社会全体を考えると、1990年代ごろの日本とは異なる点が多いため、日本の20年間をあまり参考にはできないと思う。私の意見としては、これからの韓国に必要なのは国民の生活を第一に考えて政治を行っていくことである。大学進学率が高いにも関わらず十分な雇用が国内にないために、優秀な人材が外国に流出してしまうというのはとても残念なことだ。かといって産業の機械化が進んでいる現状で、単純作業に新たな雇用を見出すのは難しい。したがって、研究・開発部門を中小企業に多く設置し、それを国を挙げて支援していくことで雇用を創出し、それによる格差の是正、様々な分野での独自性の増強を実現させていくべきだと思う。

「東京巡検～アジア経済研究所を訪問して～」

１年　佐々木もなみ

１　はじめに

私はこの講義を聞くまで、韓国と日本にこんなにも共通点があることを知らなかった。どこもかしこも似ていて本当にびっくりした。韓国は隣の国であることから多少は似ているところもあるとは思っていたけれど、その時その時の状況がとても似ているのだ。

２　安倍先生の講義より

今、韓国は日本と同じくらいのGDPを誇る先進国の一員である。韓国で作られたLINE のシステムは世界中で使われている。元々、韓国は日本企業の技術提供を受け、日本企業を成長のモデルとしてきた。例えばサムスン電子は三洋電機と合弁し、現代自動車は三菱自動車からエンジンなどの技術を導入し、供給も受けていた。それが今や、サムスン電子は世界一の薄型テレビの生産を誇り、現代自動車は三菱自動車をはるかにしのぎ、世界第５位を誇る会社にまで成長している。1970年代の日本は、戦後の韓国に対する義務感もあり、技術指導を積極的におこなった。しかし、1980年代には、ブーメラン効果で韓国が急激に成長し、一気に日本のライバルにまでなり今に至っているようだ。なんてバカなことを日本はしたんだと思う人もいるかも知れない。私は実際思ってしまった。しかし、日本も韓国と同じことをしていたのだ。日本は戦後、アメリカの支援を受け急激に成長した。いわゆる高度経済成長だ。この時、多くの日本企業はアメリカの企業の技術を得て、さらに自分たちの技術をプラスし、アメリカの上に上手くのし上がった。このように韓国は日本より20 年遅れて同じ道を歩んでいると言われている。今、書いた例は、産業面だけだが、実際は少子化、高齢化などの社会面でも、20年遅れて日本と同じ道を辿っている。韓国と日本は今尚問題が山積みで、関係は良好とは言えないけれど、同じ問題を抱えている隣の国同士であるから、協力して問題を解決していくべきではないだろうかと思った。

韓国では格差の拡大が大きな問題になっている。韓国には未だ財閥が存在し経済、社会で大きな力を及ぼしている。そこが日本と韓国の大きく異なることの一つではないかと思う。日本の財閥は戦後アメリカによって解体され、残っていない。しかし、韓国では残っていて、問題が起きているのだ。財閥と言われても、私にははっきりと想像することができないが、韓国が今後どのように変わっていくのかのカギとなっていると思った。

３　まとめ

アジア経済研究所で安倍先生の講義を受けて、自分が韓国のことを全然知らなかったということがはっきりとわかった。それと同時にもっと知りたいと思った。また、今まで疑問に思っていたことがわかり、スッキリした。今の時代、インターネットでもかんたんに調べることができるので、疑問に思ったら、すぐに調べようと思った。だが、その後にアジア経済研究所図書館を見学して、図書館で紙の本を見て自分でデータを取ってみるのも面白そうだと思った。私は小学生の頃、よく親と一緒に図書館で調べ物などをしていた。知りたい情報とさらに豆知識も付いてくるので面白いのだ。また、インターネットだとどれが正確な情報かわからないことがある。だからこそ、その情報の発信源に近いデータの本で調べ物をすることは大切である。わざわざ図書館へ行くことが面倒だとつい思ってしまいがちだが、図書館には図書館ならではの良いところがあるということを再認識でき、良かったと思った。

「2016年東京巡検　アジア経済研究所　レポート」

２年　金澤元泰

「韓国は遅れた国なのか？」。講義の初めに安倍先生はおっしゃっ

た。現在では多くのグローバル企業を抱え、1996年にはOECDにも加盟した韓国。当の本人たちは認めたがらないが、韓国はここ数十年で先進国の仲間入りを果たした。

しかし一人当たりGDPは日本の33000ドルに対し27000ドルと、この点に関して言えば日本と比べて遅れているともいえる。

戦後、韓国経済は「圧縮型工業化」と呼ばれる短期間の発展を遂げた。その際、一番のモデルとなったのは日本である。朴正熙大統領（任期1963～79）は高度成長期の日本を目の当たりにし、日本をモデルとした経済発展を進めた。

初期（1960年代後半）の方針は、安い労働力を利用し、加工の簡単な製品（ベニヤ板や靴など）の原材料を輸入し完成品をアメリカや日本に輸出する、というものである。輸出主導による経済の成長を期待したものである。70年代には、鉄鋼・非鉄金属・化学・機械・造船・電子など、当時の日本の主要産業の育成を開始。大統領自ら財閥のトップを呼び出して要請するほどの大事業であった。日本企業からの技術供与を受けるなど、日本企業をモデルとした成長を遂げた。

転機が訪れるのは2000年前後、グローバル化の波の到来である。サムスン電子は日本的終身雇用／年功賃金からアメリカ的成果主義へ、ヒュンダイ自動車はトヨタ式生産方式からロボットを大量導入した「熟練節約的」生産へと方向を転換した。この時期に韓国の諸企業は「脱日本」を遂げたのである。

またIT市場を見据えたパソコン向け半導体や新興国に適した商品を開発・販売することで新たな市場を獲得した。

現代においては、10年前には日本企業が幅を利かせていた薄型テレビやスマートフォンの世界シェアにおいて日本を上回っている。

造船の分野では、ヒュンダイグループが70年代に事業に進出。日本の景気が悪化し設備を減らしている中、設備投資を続け、急成長した。

韓国の企業は時代の波に乗るのが得意であるといえる。その時に最も求められているものを適切に判断し、すぐに生産・販売を行う。こうしてこの50年の間成長を続けてきた。

一方の日本企業はどうだろう。シャープの台湾企業による買収に代表されるように、日本企業は（特に電子・家電産業において）衰退しているように見える。半導体分野ではパソコンの流れに乗れず、携帯電話分野では世界規格に出遅れ、新興国向け家電では技術への過信があった。近年の流れに乗れなかったといえる。

今、日本の企業が変革のために必要なのは、韓国企業がどのようにして成功を収めてきたかを精査することだと思う。それらの企業の方針のすべてを真似するのが良いとは言えないだろう。しかし近年の成功者として、またおなじ企業のスタイルから派生したモデルとして、学ぶところはあるはずである。

そしてこれは企業に限ったことではない。現代の韓国の社会問題を挙げてみる。非正規労働者の増加は格差を生み出す。若者の就職難・低賃金は少子化を加速させる。日本と同じように、韓国でも女性は仕事と家庭の板挟みになっており、これも少子化の遠因である。急速に高齢化した社会と安定しない年金制度は日本の近未来を表しているかのようである。このように韓国は、日本と同じような問題を抱えている。

韓国は日本に近く、地理的・民族的に似ており、かつ人口・国土・経済規模は日本より小さい。よって日本と同じような事象が短期間により明らかに顕在化する。韓国はこのようにして、日本を（いい面でも悪い面でも）追い越していった。そんな時代の先駆者、あるいは日本の近未来像としての韓国からは学べることは多いはずである。国内のことを学び、未来を想定するのと同時に、現実のモデルに目を向けることで、新たな視野が開けると思う。

ここ数年は韓国の企業も停滞気味である。中国企業の成長や新興国市場の成長の鈍化、韓国企業の創造力の欠如が理由として挙げられる。先行きの読めない現在において、新たな波は乗るものではなく作るものになるかもしれない。

「日韓共通の悩みと対策」

１年　工藤文那

今回の東京巡検では、「韓国の経済・社会を知る」というテーマで、アジア経済研究所地域研究センターの安倍誠先生に講義をしていただいた。その中で、韓国は「後れた国」「似ている国」として紹介された。私は中でも、「似ている国」としての側面にスポットを当てて、今回のまとめとしようと思う。

まず、日韓両国が直面している社会問題の一つに格差の拡大がある。ジニ係数や相対貧困率から、両国の所得格差の拡大は明確である。

日本では、単身世帯の貧困者が増えたことなどを理由に、所得格差の不平等化、つまり所得格差の拡大が進行している。また、ここで言う単身世帯には高齢単身者も多く含まれており、日本では高齢化が進むにつれて所得格差はさらに拡大すると予想される。

一方韓国では、格差の拡大を進行させる二つの要因が存在する。一つ目は、輸出大企業と中小零細企業の間の格差である。2000年代のグローバル企業（サムスン電子、ヒュンダイ自動車など）の出現をきっかけに、大規模装置産業が中心となった現在では、大企業成長の恩恵が下請け中小零細企業に及ばなくなっている。これによって、中小零細企業の利益は減少し、労働者の賃金、所得は低下している。二つ目は、非正規労働者の増加である。輸出するだけの資源が無く、日本に比べて人口密度が高い韓国では、1960～1980年代において、安い労働力を利用することでアジア太平洋貿易トライアングル構造を構成する要素となった。ここに外国人労働者の受け入れを推進したことで、非熟練の人々が増加し、賃金の低い状態が続いている。さらに農業就業者の減少も重なり、韓国での格差も拡大の一途をたどるであろう。

格差そのものは、資本主義経済やグローバル社会において存在し続けるものであり、勤労意欲の保持増進を図るためになくてはならないものであると私は考える。では、どうしたら格差の拡大を抑えることができるのだろうか。そもそも、格差拡大の背景にあるのは、非正規労働者の増加と、富裕層への減税政策である。前者においては、大企業の経営方針が大きく関わっていると考えられる。低賃金で外国人労働者を多く雇うか、多少高い賃金でも自国民労働者を雇うかは、企業の定めるところである。少数の大企業が世界経済の未来を左右すると言っても過言ではない現代で、日韓ともに、労働の在り方については深く考えなければならない問題であろう。また、後者に関しては、所得の海外移転防止と消費拡大が目的だったため、これらを解決することで格差の拡大が防げるのではないだろうか。

格差の拡大の他に、少子高齢化の問題も挙げられる。日本では、未婚化・晩婚化・晩産化やベビーブーム時の人口の高齢化により、少子高齢化が急速に進行している。

韓国では、就職難・失業率の増加による未婚者の増加・晩産化や不十分な社会制度の整備が少子高齢化を進行させている。

東アジアで少子高齢化が進行するのにはいくつか理由がある。中でも私は「子育てに対する公的支援の不足」に注目したい。日本をはじめとした東アジアの国々は欧米諸国に比べて、子育てに対する公的支援が不十分と言える。韓国に関して言えば、格差の拡大に伴う教育の過熱に対し、教育に関する金銭的支援が手薄である。そのため、一世帯の子供の数を減らし、子供一人に質の良い教育を施すよう、社会が変容していったのである。

また、高齢化が経済に与える影響として、社会福祉予算の増大による財政負担がある。生産年齢人口が減少することで、国民一人一人にかかる負担が大きくなってしまう。私たち若い世代の背負う負担が大きくなるということだ。

少子高齢化を抑えるには、やはり国の公的支援の充実がカギとなるのではないだろうか。託児施設の供給はもちろん、育児給付金の充実を図ることで、子育てしやすい環境を整え、出生率を上げる取り組みを進めるべきである。

私たち若い世代は、グローバル化が進む将来、日本国内だけではなく世界各国で活躍することになるだろう。グローバル社会を担う人材として、今社会で起こっている問題と正面から向き合い、解決に向けてお互いの意見をぶつけ合うことが大切なのではないだろうか。日本と韓国の関係のように、「似ている国」としての関わりをもつことは、問題解決に向けて良きパートナーになり得ると私は考える。これからの社会、他国との関わりなしでは、後れをとるようになってしまう。各国間で抱える問題はまだまだたくさんあるかもしれないが、身近な隣国との関わりを大切にすることで、より良いグローバル社会が築かれるのではないだろうか。そのためにも、まずは問題解決に向けて、お互いが歩み寄ることが必要不可欠である。

「アジア経済研究所にて」

２年　芹澤優希

ジェトロ・アジア経済研究所では、安倍誠先生の講義を受けた後、図書館を見学した。

講義の内容は韓国の経済、社会について知るもので、日本と韓国との比較をしながらの説明からは、韓国が経済発展の面で日本より「後れた国」であることや、地理的に見れば日本と「似ている国」であることがわかった。

韓国が経済発展した要因には圧縮型工業化や輸出主導の貿易など様々な事柄が挙げられるが、日本という国の存在もまた韓国の高成長に大きな影響を与えていた。韓国は1960年代半ばから産業を振興していったわけだが、着手した鉄鋼、非鉄金属、化学、機械などの産業はどれも当時の日本の主要産業で、また日本企業から技術供与を受けるなど日本を成長のモデルにしていたことがわかった。2000年代に入ってくると日韓ともにグローバル企業が出現するが、韓国の企業は雇用形態や生産方式において脱日本化を図ったほか、日本企業が乗ることができなかった「品質よりスピード」「技術より市場」の流れに乗り、新興国市場への輸出で成功した。しかしながら近年は、新興国市場の成長鈍化や新興国企業の台頭（特に中国）により韓国の輸出は低迷している。経済発展という面で、日本に追いつき追い越せだったのが、振り返ると中国に追いつかれそうという現在の韓国の状態を知ることができた。また、今の韓国のGDP成長率を見てみると、これから韓国は日本の「失われた20年」と同じような時代に入っていくのかもしれないということを知った。

韓国が直面する社会問題には、日韓が共通して悩んでいるものがある。主に格差の拡大と少子高齢化である。格差の拡大には、輸出大企業と中小零細企業との間の格差があり、中小企業では非正規労働者が増加しているのに加え、正規労働者であっても非正規のような扱いを受ける人が増えてきているとのこと。またグローバル化に伴って外国人労働者を受け入れるようになったことは、非正規労働の増加を促すだけでなく賃金を低いままにしてしまうため、格差拡大の要因になってしまっていることがわかった。韓国では日本以上に少子化が進んでいる。その要因として挙げられるのは、教育熱だ。韓国では儒教の思想の影響もあって教育にかける思いが強い。しかし学習塾に行かせるといったことは当然お金がかかってくるものなので、子どもが多くなればなるほど家庭の負担は大きくなってくる。このことが結果として少子化につながってくるのだと安倍先生はおっしゃっていた。少子化に伴い、韓国では生産年齢人口が減少しており生産活動が停滞している。高齢化も進んでいて、その少子高齢化の推移は日本と20年の時差で進行していることがわかった。韓国は日本の「低負担・中福祉」とは異なり「低負担・低福祉」であるため、財政赤字は日本ほど深刻ではない。しかし韓国の高齢者は早い退職で十分な蓄えもない上に年金の十分な支給が保障されず所得が少ないため、今後消費が減少していく他、65歳以上の相対貧困率が2015年で48.6％であることや、高齢者の高い自殺率など韓国社会に与える問題としてはとても深刻なものであることがわかった。

様々な面で似た面を持つ日本と韓国。特に両国が共通して抱える社会問題は今後より重大なテーマとなってくるであろう。それらの問題が発生してきた共通点や相違点を多面的に考え、解決の糸口を見いだしていくことは必ずや両国の経済と社会をプラスの方向へと持っていくことができると思う。そのためにもまずはそれぞれの社会のシステムについてもっと詳しく調べていく必要があると感じた。

「アジア経済研究所地域研究センターまとめ」

１年　南出理夏子

今回の東京巡見で行ったアジア経済研究所地域研究センター（以下アジア研究所と略す）では、安倍誠先生の講義や図書館実習などを通じ、幅広く学ぶことができた。日本と韓国の比較から日韓共通の問題などを見ていきたい。

日本と韓国は人口密度の高さや一人あたりの国民総所得の数値は似ている。また、一人あたりのGDPは日本は32,576ドル、韓国は27,377ドルだ。25年前までは韓国は日本の四分の一だった。韓国の成長のスピードは早い。イギリスの工業化は18世紀頃からで、日本も短いが19世紀末からだ。それに対して韓国は1960年代初めから成長した。韓国は短期間で非常に成長したため『圧縮型工業化』と呼ばれている。

なぜ韓国はこんなに成長したのだろうか。一つ目は、1960から1980年代にかけて行われた、資源はないが大量にある安い労働力、すなわち、人を利用した『アジア太平洋貿易トライアングル』のおかげだ。具体的には日本から工業用に加工された原材料・部品や製造機械を輸入し、組み立て・加工してアメリカや日本に輸出した。1960年代半ばから、薄い木を貼り付けるだけのベニヤ板、人髪を原料としたかつらを輸出した。1970年代前半からは電子製品を輸出するようになった。

韓国が成長した二つ目の要因は日本をモデルとした産業復興政策である。1960年代半ばから、当時の日本の主要産業である鉄鋼、非鉄金属、化学などに重点を置いた。企業も日本企業から技術供与を受けた。例えば、サムスン電子は三洋電機との合弁によりカラーテレビ生産を開始したり、現代自動車は三菱自動車からエンジン供給をうけ、主要技術を導入し発展を遂げた。

これらの改革の立役者は現大統領朴槿恵の父である朴正熙だ。軍事クーデターで政権を握り、経済開発に力を注いだ。1972年には維新体制という、独裁体制を築いた。民主主義を弾圧した独裁者として非難される一方、国民に豊かさをもらたした偉人とも呼ばれている。

だが、1980年に、それまで０を切ったことのなかったGDP成長率がマイナスに転じた。そこで1990年代以降、技術も進歩した韓国は、安い労働力が豊富にある中国・ASEANに部品や素材を輸出し、日本から設備を入れるという『東アジアトライアングル構造』に変化させる政策をとった。

2000年代には、1997年に起きた通貨危機の影響などで、現代自動車やサムスン電子といった企業がグローバル化に成功した。その要因として、脱日本、市場を重視した開発販売戦略があった。いち早くパソコンに適した半導体を開発し、大量に生産・販売したり、インド市場に目を向け、インドの生活様式にあった製品を販売したりしている。

だが、近年の韓国の輸出は低迷している。原因として中国の成長が鈍化し、その影響を受けていることがあげられる。また、中国などの新興国企業の台頭、グローバル化にシフトしていく中で、新たなものを生み出す経験が不足していることもあげられる。

そうした中、韓国では格差の拡大が社会問題化している。低所得者の増加により少子化も日本以上に進んでいる。高齢化も同時に進んでおり、韓国は日本と同じ問題に直面している。

今回、アジア研究所に行ってとても有意義な時間を過ごすことができた。韓国と日本共通の問題にもっと関心をもち、有効な解決策を見つけていきたい。

「アジア経済研究所を訪れて」

１年　岩田純怜

アジ研では、はじめに安倍誠先生の講義を受けた。韓国の経済・社会の歴史、現状について日本と比較しながら詳しく教えていただいた。また、図書館では膨大な蔵書からデータを検索する方法、昔の新聞や地図などの保管方法などを教えていただいた。

ここでは、安倍先生のお話を深く取り上げたい。まず、安倍さんは「後れた国、韓国」、「似ている国、韓国」という話をされた。どちらも今までのゼミで学んだことから推測しても分かるように、「後れた」というのは、かつて韓国が日本よりも経済発展が遅れていたということ、「似ている」というのは地理的に、文化的に、そして無資源国であり人口が多いことなど日本とよく似ているということだ。

しかし、お話を聞き、現在の韓国と日本を比較してみると必ずしもそうではないことが分かった。講義を通して知ったこと、考えたことを３つに分けて述べていきたい。

１　「後れていた」時代の韓国から工業化の成功まで(1960年代～1990)

戦後、日本が復興を遂げ、経済成長をしていった時、韓国では、朝鮮戦争の勃発や、終戦まで植民地だったことによる遅れなど様々な要因で日本のように工業化が進まないままだった。しかし、1960年代半ば、朴正熙が大統領の時代に産業振興政策が始まり、韓国は日本を追いかけて発展を目指し出した。

韓国は日本と「似ている」ことを利用し、日本をモデルとした意識的な成長戦略を打ち出した。その例として、当時の日本の主要産業である鉄鋼、非鉄金属、化学などの産業を意識的に育成すること、企業も日本企業の技術を導入し、成長のためのモデルにし出したことが挙げられる。

その日本のバックアップを受けた企業には、今では世界的に見ても大企業であるサムスン電子、現代自動車なども含まれていることには驚いた。その当時の日本はそれらが将来それぞれの市場で圧倒的なシェアを誇る強力な企業になるとは思わずに、易々と技術供与をしてしまったわけだが、安倍先生曰く、政府間の経済協力のためだけでなく様々な理由があるらしい。そうであれば、日本にとって韓国が成長することにどんなメリットがあったのか疑問に思った。友好関係を築くため、韓国を取引相手にするため、発展させて北朝鮮との格差を広げて北朝鮮の勢いを弱めるためなど、色々考えられると思う。いずれにせよ経済と政治は大きく結びついていることを再認識させられた。

1970年代からは、GDP成長率を見ても日本よりも高い数値であることなどから、韓国は短期間で特定の産業に集中した圧縮型工業化で非常に高い成長を遂げた。韓国は安い労働力を多く利用し、労働集約的製品を輸出する方法で利益をあげてきた訳だが、それは雇用を生み出し失業率の低下につながったのではないかと思う。また、工業化に成功した日本という前例を見て、その過程を追えば必ず成功するという確信からか、韓国の経済発展は本当にスピードが速く、効率的だと思った。

2　工業化成功後の企業のさらなる成長(1990年代～)

現在、薄型テレビ・スマートフォンなどの電子機器の市場では韓国製品のシェアが圧倒的である。それだけの力を持てたのは、単に日本の後を追うだけでなく、韓国は自分たちに合う方法にシフトしていったからである。

例えば、脱日本の試みである。サムスンでは日本的な終身雇用・年功賃金からアメリカ的な成果主義にシフトした経営方針になった。これによりスピードが速くなり日本企業との差を大きく広げることに成功したのだ。

そして、市場重視の開発・販売戦略もである。ここでもサムスンを例に挙げると、サムスンは電圧の一定しないインド向けに電圧調整器一体型の冷蔵庫を開発・販売した。企業の大きな市場である新興国のニーズに合った製品を作ることが利益を生んだのだ。

このように見ていると、韓国の独自の戦略から日本は学べることがあるのではないかと思った。安倍先生のお話でも、日本企業の失敗として「高い技術、ものづくりへの過信」とあったがまさにその通りで、日本は高い技術こそ持っているが、肝心な商品を売る市場のニーズに応えることが出来ていないと感じた。

しかし、最近の韓国の輸出の低迷の原因の一つは、日本の後を追うばかりだったため、新たなものを生み出すための経験が不足していることだそうだ。これから日本企業は、韓国企業の成長理由、最近の輸出低迷理由を参考にして、新しいものを作り続けることと市場のニーズに応えることのさじ加減を考えることが大切だと思った。

3　直面する社会問題

国が成長するにあたり、社会問題は当然のように発生するものであり、韓国も日本も、格差の拡大、少子高齢化の進行、高齢者の高い自殺率、若者の失業など多くの問題を抱えている。特に韓国は圧縮型工業化で急ピッチで社会が変化してきたため、色々な対応が追いつかない部分も多くあったと思う。

しかし、それでも韓国は外国人労働者問題への対応は日本より先を行っているので、まだ完全ではないとしても高く評価するべきだと思う。一方、少子高齢化による生産年齢人口の減少は労働集約型の経済が不可能となり、韓国にとって致命傷なので早急に改善策を打ち出すべきだと思う。

前述したように日本はこれから韓国を参考にすることが多くなると思うが、経済面だけでなく、社会問題への対応も、似ている国同士お互いに参考にしていくべきだと私は思う。

「アジア経済研究所を訪問して」

1年　大道夏希

「似ている国」である韓国は、私の想像以上に似ていました。先進国である日本を真似して成長してきた韓国は、問題までも似ていました。

似ている点としては、非常に短い期間で経済が発展する「圧縮型工業化」を経験したということです。日本が工業化に成功した20年後に韓国も工業化に成功しています。1960～1990年ごろまでは「アジア太平洋貿易トライアングル」という、安い労働力を利用して日本から原材料や製造機械などを輸入し、組み立ててアメリカやに輸出する輸出主導の構造をつくり高成長しました。

1960年代半ばごろからは、政府が積極的に産業振興政策をスタートさせ、鉄鋼や造船、電子など当時日本の主要産業であったものを日本をモデルとして生産し始めました。またサムスン電子と三洋電機のカラーテレビや、現代自動車と三菱自動車のエンジン・シャーシなど、韓国企業が日本企業から技術供給を受けるなどしてさらに日本企業をモデルにしていきました。この立役者は朴正熙で、朴槿恵の父親であり、民主化運動を弾圧し、暗殺された人です。さらに変化をとげる韓国は1990年年代以降、東アジアトライアングル構造を変化させ、ますます発展し、2000年代にはグローバル企業が出現していきました。1997年通貨危機以降は、日本型の終身雇用・年功賃金から、アメリカ型の成果主義にシフトしていきました。脱日本の流れが始まりました。サムスン電子やヒュンダイ自動車、LG電子などが異質かつ多様な新興国市場を開拓していきました。

一方で、日本は韓国に比べて失敗に追い込まれました。新興国での市場に対応できず、「世界で最も品質にうるさい日本市場で勝ち残った商品は他の国でも通用する」と過信し、『ガラパゴス化』していきました。品質よりスピード、技術より市場、の流れに乗れなかったのでした。

しかし、日本の失敗から何年かたったあと、韓国も輸出が低迷しています。その理由は、中国など新興国市場の成長鈍化や中国の成長です。また、圧縮型成長ゆえに経験不足で新たなものを生み出す力がないことも原因です。このように新興国が成長するに従って、苦しい状況がうまれているのです。

ほかにも韓国は社会問題に直面しています。格差の拡大です。輸出大企業と中小零細企業の間の格差にあります。また、非正規雇用の増加も原因です。人件費を削るために非正規雇用が日本よりも増加しています。格差の増加は世代をまたいで受け継がれてしまっています。少し前にあったナッツ事件もその例です。財閥の一角である大韓航空社長の娘が引き起こした問題です。このようなことから、国民の格差批判が激しくなっているのです。

この問題に追い打ちをかけるように、グローバル化が進み、賃金が安い外国人が入って来ています。その結果、韓国人は就職難になっています。一方で、韓国は日本よりも、外国人労働者の受入れ制度が整っています。これが不運なのか、外国人が入りやすくなり、格差が広がってしまっているのです。

まだまだほかにも問題が山積みです。少子高齢化が日本と同様に深刻化しています。しかし、年金制度が整っておらず、老親は子供に養ってもらわざるをえません。経済低迷の中で子供も稼げているとは限らず、養ってもらえない高齢者も多く、高い自殺率も社会問題化しています。

こうしたことから、高収入を求めて教育熱が激しくなり、大学進学率がとても高くなっています。しかし、それに見合った職がないのが現実です。少数の大企業にほとんどの人が入りたいと望み、一極集中しているのが韓国の今の姿です。

「似ている国」韓国は今、日本とは似ていて違う問題に悩まされているのです。

「アジア経済研究所訪問報告レポート」

１年　久野千優

2016年９月27日、わたしは千葉市にあるアジア研究所を訪問した。ジェトロ・アジア経済研究所は、日本における開発途上国研究の拠点として、世界への知的貢献をなすことを目指している。そのために、それぞれの地域に密着した知識を収集・蓄積し、開発途上国の実態と課題を明らかにし、開発途上国に対する深い理解を広く国内外に提供している。こうした研究所の活動は、日本の国際理解を深め、ひいては日本と国際社会との望ましい連携を促進するための知的基盤となっている（ＨＰより引用）。

まず、１時間半ほど、安倍誠先生からアジア、特に朝鮮半島の経済についての講義をいただいた。講義のテーマは「韓国の経済社会を知る」。日本と比較してみていく中で、共通性や、また「似て非なるもの」をみつけていくのはとても興味深かった。

韓国は日本と地理的に隣接し、同じ文化圏に属し、同じく人口過密な無資源国、同様な産業構造をもっているなど、たくさんの共通点がある。またかつて先進国である日本を追いかけて発展を目指した韓国は、成熟過程も日本と似ている。

まず韓国経済について学んだ。韓国経済の高成長をもたらした背景には、「アジア太平洋貿易トライアングル」、日本からの技術供与、日本企業を成長のモデルにしたことなどが挙げられる。あの有名なサムスンや現代も、日本企業の協力のもとに成長したと知って驚いた。しかもその二社はグローバル化する世界の波に乗り、日本的な制度をアメリカ式に変更したり、生産方式を速さを重視したヨーロッパ式に転換したりしている。非常に正しい判断だったのではないかと思う。

一方、日本企業は高い技術、「ものづくり」への過信から失敗してしまった。「品質よりスピード」「技術より市場」の流れに乗れなかったというのは、日本の国民性を加味して考えてもとても納得がいく。その点では、韓国のように時代に乗ることも必要だったのではないかと思った

しかし、そんな韓国も近年競争力が低下している。原因には中国の成長鈍化や新興国企業の台頭などがあるが、「キャッチアップの天井」、つまり新たな技術や新たなコンセプトの商品をうみだす能力が不足していることも大きい。そういった面では、韓国は今後も日本を見ていく必要があるのだと思う。

急速な経済成長は深刻な社会問題も生んだ。特に高齢化が経済に与える影響はとても大きいと初めて知った。所得が少ない高齢者の層が増えることによる消費の減少においては、韓国は日本よりも深刻かもしれない。また日本も韓国も欧米諸国に比べ、社会福祉が発展しているとは言えない。特に韓国では早い引退や十分なたくわえがないこと、年金制度が不充分なことなどから、高齢者の相対的貧困率はOECD加盟国中一位である。

今、格差社会についていろいろ考えているが、資本主義である以上、生まれてしまう格差は、自殺者がでるようなものではあってはいけないというのが私の考えだ。格差は国としての一体感を損なう。一つになれない国が今後世界を相手にしてくことは難しいと思う。

韓国と日本は経済面で20年の時差があると言われているように、似たところもたくさんある。ということは、日本は韓国から学べること、韓国が日本から学べることというのはとても多いのではないだろうか。

その後、アジア経済研究所にある図書館で実習をした。図書館には、世界中の発展途上国に関する資料、書籍が地域ごとに分類されて、大量に置かれていた。英語の本が一番多く、韓国語や中国語の本が次に多いそうだ。司書の方に、こういった専門的な図書館の使い方、膨大な量の書物から自分が欲しいデータをみつけるやり方を教えていただいた。将来論文を書くときにはこういった図書館でデータを集めると思うと、こうして実習ができたことは非常に今後のためになったと感じた。

図書館実習で面白いなと思ったことは、一部の発展途上国では、データを書籍にせず、インターネット等で公開しているということだ。確かにそちらの方が出版する手間は省けるのでコストを抑えられる。が、正式なデータは本で出すものだと思っていたので、驚いた。時代が変わっているのだなと感じた。

「韓国の経済発展を学んで」

１年　青木優花

１　はじめに

私は、普段から日韓の関係については興味があった。私が小さい頃は、母や祖母がヨン様に夢中であったし、小学生の高学年になった頃にはK-popが国内でブームになっていたこともあり、日韓は友好な関係にあるのだとずっと思っていた。しかし、今までの学校教育やニュース、SGHの取り組み等で、日韓の間には未だに埋まっていない深い溝があることを知り、どうすれば少しでもその溝を埋めることができるのだろうかと考えてきた。今回の講義では、国を支えているといっても良いであろう韓国の経済と社会の仕組みについて詳しく知ることができた。

２　韓国の経済発展

韓国の経済発展や人口密度、無資源であることなど、日本と似ている部分は多くあり、聞いていて受け止めやすかった。しかし、その中でもやはり日本とは異なる部分があり、今回はその違いと日本の経済を比べながら講義を受けた。また、韓国は日本を手本にして経済成長をしてきたということもあり、日本がした失敗から学んで韓国なりの対応をしてきていたので、日本の失敗を韓国がどのようにして回避したのかということにも注目した。

韓国の経済発展で注目しなければならないこと。それはやはり、短期間で高い成長を遂げたということだ。その高成長をもたらしたものは大きく分けて二つある。一つ目は、輸出が主導であったということだ。韓国は、日本から原材料・部品などを輸入して、それを日本やアメリカに輸出することによって経済を成長させていった。これは無資源国ならではの貿易の仕方であり、日本との共通性を感じた。二つ目は、日本をモデルにして経済発展をしてきたということだ。当時の韓国にとって、日本はアジアの中で飛び抜けて成長していた国であり、日本をモデルにすれば自国も成長できると考えたのだ。もちろん全てをモデルとしていたわけではないが、力を入れて取り組んだ産業や企業のあり方も日本と似ているところがある。例えば、韓国には日本の企業のようにブランド企業になることを目標としていたところが少なくない。そのため、実際に日本企業から技術支援を受けるなどの取り組みも行った。そこで、当時の日本は韓国が日本をモデルにすることに危機感はなかったのかという疑問が生まれる。実際に国内でも様々な意見があり、70年代の日本は韓国をまだ甘く見ていて、技術を教えたくらいでは追いつくことはないだろうと思っていた。しかし、80年代になると韓国の著しい成長が目に見えてわかるようになり、将来のライバルとなるから協力しないほうがいいのではないかという意見も出てきて、最近では、商売としてやらざるを得なかった、という意見が多くを占めている。現在では、韓国が発案したサービスであるカカオトークをもとに、日本でもLINEなどのサービスが広く使用されているので、時代に応じて自国の技術を売るということはグローバルな視点から見ても、人類の発展という視点から見ても必要なことだと、私は思う。

３　グローバル企業

韓国の経済成長が進んでいくにつれ、日本をモデルにするだけでなく、次第に世界を重視した考え方をするようになった。世界で活躍しようとするならば、重要なのはスピードと熟練職人に何かあった時にすぐに対応できることであった。そのために韓国は、製造ロボットを大量に導入した。人に技術を身につけさせるよりロボットを使用することで、効率をあげようとしたのである。この方法は、経済の発展を大いに支えたと思う。日本の企業、例えばトヨタ自動車の生産方法は品質においてはとても良いと思うが、かなりのスピードで動くベルトコンベアの上での作業はそれなりの技術が必要であるので、作業員に何かあれば誰もが対応できるものではないし、個数を生産しようと思うと労働の厳しさ等の問題にもつながると、私は思う。しかし気になったことがある。それは、製造ロボットを導入するということは今まで人が担っていた作業を人なしでもできるようになるということであり、そうすると必然的に職はなくなっていく。職がなくなると、失業者も出てくるであろう。韓国は少し前まで労働力があることを強みに経済の発展を遂げてきていたので、失業者が増えなかったのかどうか、また、増えたのだとしたらどれくらいの割合で増えたのかが気に

なった。
近年は、韓国の輸出が低迷していて競争力の低下につながっている。理由としては三つ考えられる。まず一つは、世界的に経済が良くないということである。これは韓国だけでなく、その他の多くの国々に影響を及ぼしていることは明確である。二つ目に、中国の激しい経済成長が挙げられる。これは日本にも当てはまることであると思うが、中国企業が韓国の技術を追いかけて競争力が上がり、韓国からの輸出の低下につながっている。最後に、新たなものを生み出すための経験の不足が考えられる。今まで韓国は日本をモデルとして経済発展をしてきたがゆえに、新たな技術やコンセプトを生み出す力が不十分である。私は、韓国がこれから世界を舞台として経済成長をしていくためには、最後の原因を克服することが必要不可欠であると思う。技術力は、これからあまり大差のない戦いになっていくであろう。そのようになった時に大切なのは、いかに新しいものを作っていくかということだと私は思う。私自身も、細かなオプションの違いより、なにか目新しい物の方に興味がある。これは、私以外の人にも多く当てはまると思っている。なので、韓国は他国をモデルにした密度の薄い経済発展でとどまるのではなく、何か新しいものを生み出す力も兼ね備えた密度の濃い経済発展をしてこそ、真の経済発展と言えるのではないだろうか。

4　最後に
今までは文化面や歴史的背景から日韓の関係を見てきたが、今回の講義を受けてそれに経済面、社会面の知識が加わった。これによりさらにいろいろな視点から物事が見られるようになったと思うので、これからはもっと相手の立場に立って柔軟な考え方をしていこうと思う。

「アジア経済研究所」

1年　石塚和香

日本貿易振興機構、アジア経済研究所とは、開発途上国・地域の経済、政治、社会について、基礎的・総合的研究を行う通商産業省（現経済産業省）所管の特殊法人である。1960（昭和35）年に設立された。圧巻なのは、その保有資料の多種さ、深さ、膨大さである。アジア、中東、アフリカ、ラテンアメリカ、オセアニア、東欧諸国などの資料があるという。私が拝見した資料は、例えば新聞だけでも、同じ日のものが、何種類もの言語で、何年分もあって、ひとつの部屋を占有していたのだから驚きだ。案内をしてくださったアジア経済研究所の職員の方は、「集めて以来、すべて捨てずにとってあります」とおっしゃっていた。そして、ここでは、複数の職員の方が、分担して地域の専門と練っているらしい。今回は、その韓国担当の、安倍誠先生の講義をきかせてもらった。
韓国の経済は、だいたい20年遅れで日本の経済を追っているとよく言われる。1960年代から、「アジア太平洋貿易トライアングル」が、韓国経済の成長を促進する。これは、日本から原材料、部品や製造機械を輸入し、韓国で組み立てや加工をして、アメリカや日本に輸出するという、韓国の安い労働力を利用した、輸出主導のシステムだった。最初はベニヤ板、かつら、アパレル、繊維、靴などを輸出し、1970年代前半からは、電子製品などより高度な技術を要する製品を輸出していく。これにより、韓国内の製品の技術力、生産力は、戦後当初より飛躍的に上がったと思われる。当時の韓国企業（今は大手のサムスン電子、現代自動車など）も、日本の企業から技術供与を受けて、積極的に日本の企業をモデルに成長を図っていた。
しかし、2000年代になると、韓国の経済にもグローバル化の波が到来する。まず初めに起こったのが、「脱日本」である。大手企業は、日本企業の生産方式を破棄したり、日本社会の通例である終身雇用や年功賃金の制度を成果主義に変えたりして、次々にアメリカやヨーロッパ志向にシフトしていった。高い技術を過信し、「ガラパゴス化」した日本の企業を横目に、IT市場では、半導体を世界市場に投入することに成功した。
しかし、そんな急成長をみせた韓国でも、日本と似たような社会問題が存在しているという。そのひとつが、少子高齢化である。これは、日本や韓国、ひいては東アジア全体で問題になっているのだという。その理由として、東アジアでは女性たちの社会進出が広がってきていることに対して、性別で家庭内の役割を決める風潮がまだ根強く残っていること、子育てに対する公的支援が不足していることなどであるという。
韓国はもう先進国かもしれない。隣国として、日本は韓国と共に考えるべき問題をたくさん持っていると気付かされた講義だった。

「アジア経済研究所を訪問して」

1年　小川コナ

韓国と日本についての比較、韓国の経済・社会について新しく知ることができる内容が多数ありました。韓国と日本で共通している点や、異なっている点について大変興味を持ちました。この二国の経済と社会の歴史を見てみると、韓国は日本の20年遅れの歴史をたどっていることが分かりました。国の基本データの比較によると似ている点は多くあります。韓国は戦時中、日本の支配下にあったことによって、戦後はゼロからスタートしていったそうです。そのような状態から、現在のようにどのようにして経済発展をしていったのでしょうか。短期間で経済発展した韓国では、1960年代から圧縮型工業化が始まったと言われています。その中心となったのは輸出主導の「アジア経済トライアングル」だったそうです。このようにできたのは、安い労働力を使っていたことが大きいと思います。また、隣接している高成長のモデルである日本の存在も大きかったでしょう。日本は技術支援という形で戦後協力していきましたが、今では韓国に負けてしまっている分野もあります。当時はそのような危機感がなく、日本もそれまで多くの国の真似をしていたこともあったので、あまり気にしていなかったと考えられています。経済に関わる大きな力を持つ政府の存在もありました。朴正熙大統領は経済開発に力を入れていたそうですが、その一方で、民主化運動の弾圧なども行っていました。民主化運動の弾圧は、あってはならないことであり、いくら経済が発展してもその先がないのではないかと感じました。
現在の経済についてです。世界では経済面でもグローバル化が進んでいます。その中で生き残っていくことができるようなグローバル企業が大切になっていく時代になりつつある今、韓国の企業がうまくその流れに乗っているということは大きいことだと思います。韓国の主なグローバル企業がどのようにして成長しているのかという例を見たとき、先進国で売っているものを売りつける、というスタイルではなく、多様な新興国市場を作り、その場その場にあったものを開発していくというスタイルがあることに感動しました。このスタイルは経済面だけでなく、私たちが生活していく中でも重要視するべきものであると感じました。
資本主義経済にはつきものである格差の問題は、日韓両国に共通しているものになっています。大企業と中小企業の格差が大きく、中小企業で働いている人々は、正社員が受けることのできる保障なども受けられずにいるそうです。先程「安い労働力」という言葉がありましたが、次はその問題についてです。非正規労働者が増加していることで、世代をまたいで進む格差が拡大しているそうです。その大きな要因は、非正規労働者は法律で守られていないことですが、収入が低く、就職が困難になると、少子高齢化という大問題も起こります。出生率については日本よりも低い状況になっています。韓国は子供の教育にたいへん力を入れているため、学費が膨大です。より良い会社に就職させたいという強い思いから高学歴社会になっていると考えられます。あと二つ問題に挙げられるのは、子育てに対する公的支援の不足、女性に対して根強く残る性的役割規範です。これは日本も同じだと思います。日本は少子高齢化だと叫んでいながら、防衛費などだけが膨張していき、公的支援、教育に関するお金を削っているので、無責任な点が多すぎると思います。女性に対する態度も、国が「女性も活躍しましょう」と言っていても、古い考え方が抜けずに残っている状態です。これについても徹底的に改善するような策を作って行うくらいのことをするべきであると考えます。高齢者問題は日本でのそれとは比較でないほど深刻で、高齢者の自殺率は非常に高いそうです。日本のような年金制度はできたものの、まだ充分ではないことも大きな原因です。しかし、財政赤字では日本の方が大きいようです。いずれにせよ格差の解消は簡単には解決できない大問題であるといえます。

このように、韓国について詳しく知る良い機会でした。隣接する国だからこそ、互いの国についての知識を深め理解していくことは大切だと思います。これは両国のこれからの外交をより良くするためにも必要なことだと考えます。この実現には、知識を得て、深め、理解するために必要な場所、図書館のような場所が必要となると思います。今回訪問させていただいたアジア経済研究所図書館はまさに最適な場所と言えると感じました。資料などが沢山あり、しかも現地で出版されたものをできる限り集めているとのことで、日本では簡単に得ることができないものも多く見られました。最終的な論文を作るときは、このような施設で得ることのできる元データの活用が大切となることを知りました。今までに見たことのないくらい大規模な図書館だったこともあり、時間があったらじっくり色々な本を読んでみたいなと思いました。このような貴重な施設があることをより多くの方に知ってもらうことで、学べる機会が増えるので、グローバルな視点で物事を考えることのできる人材も増えていくと感じました。

今回は韓国が研究対象でしたので、調べることが韓国中心になってしまいましたが、アジアという広い範囲について学ぶことができるので、また訪れる機会があれば、他国についても学ぶことができたら嬉しいです。

「アジア経済研究所　～より良い経済の仕組みとは～」

１年　豊田優里

アジア経済研究所で日本と韓国の経済の仕組みの違いについての講義を受けた。そこで思ったことがある。それは、経済の仕組みは様々なパターンがあるが、経済とはその国の興廃がかかっているので、失敗が許されないということだ。確かにすべての人にとって良い仕組みなんてものはないが、失敗したらたくさんの人の生活に大きな影響を与えてしまう。色々な方法を試してみるわけにはいかない。だから、他の国や過去のデータから分析して考えなくてはならないのだ。

日本と韓国の経済の仕組みの違い、それは大きく３つある。どちらの国のものも、その国の人柄が出ていてとても面白い。

１つ目は雇用の体系の違いだ。日本の終身雇用・年功序列制度に対して、韓国は成果主義である。日本は、この制度によって多少能力がない人が昇進してしまうことがあるかもしれないが、皆、会社への深い愛着を持っている。「会社のために」と皆が思うことで大きな利益につながることがあるだろう。また、クビになる心配が少ないことで心に余裕が持て、ストレスも少ない。それに比べて韓国は、成果主義である。日本と相反しているところが多いが、やはり成果主義により実績、やる気がＵＰすることは大きなメリットである。ただし、韓国の高齢者の高い失業率、自殺率はこれに関係しているという見方もある。日本はこれから、成果主義を取り入れる企業も多くなっていくだろう。その時に韓国の例はとても参考になるはずだ。

２つ目は、商品開発において重要視されているものだ。日本では「経験」を、韓国では「スピード」が大事にされている。日本はものを開発するときには基本からスタートする。逆に韓国は、例えば車の新しいデザインを開発するときには、ヨーロッパからデザイナーをリクルートしてくるなど、韓国で車のデザインが出来る人を育成するのではない。このやり方は確かに効率的である。ただし、それによって自分たちの技術が上がるわけではない。さらに、このやり方ではトップに追いつけはするが、追い越せはしない。トップは狙えないのだ。このやり方は日本人の気質には合わないし、自分たちで基本からスタートすることはかっこいいと思う。ただし、「スピード」との兼ね合いを考えたいところである。

３つ目は、日本が重視している「技術」と、韓国の重視している「市場」である。日本は圧倒的な技術を持っている。「素晴らしい技術」は世界のどこに行っても確かに「素晴らしい技術」である。けれどもそれではそれぞれの国の細かいニーズには応えられない。一方、韓国は、貿易においてそれぞれの市場を研究してそれぞれに最適なものを届けている。例えば電圧が一定しないインド市場向けには電圧調整器がついた冷蔵庫を、薬を冷蔵庫にしまう習慣を持ったインドに人々のための薬品・化粧品スペース付き冷蔵庫を、ラインナップ確保のための旧モデルの市場への投入などがあげられる。もし日本がこれらの戦略を取り入れれば、日本は世界のトップに立てるようになるだろう。

このように、隣の国であっても経済の仕組みに違いがあって面白い。これから日本が発展していくために、様々な国の良い部分を取り入れていきたいと思う。

「アジア経済研究所　レポート」

１年　藤原巧斗

アジア経済研究所を訪れ韓国について学んだことをまとめていこうと思う。

今は先進国となった韓国だが、かつては先進国日本を追いかけて発展を目指す「後れた韓国」であった。また、地理的に近い、同じ文化圏に似た言語、人口緻密で資源がないという、日本と似かよった特徴をもつ国でもある。さらに日本と韓国では、一人当たりのGDPがほぼ同じである。以上のように日本との共通点を述べたわけだが、もちろん相違点もある。

ふつう工業化と呼ばれるものは長い期間を経て実現していくものだが、韓国は短期間で発展する「圧縮型工業化」であった。現に1954年代に経済成長し始めた韓国だが、GDP成長率において1959年～1969年の10年間で毎年ほぼ7～10パーセントの成長を遂げている（それ以降の成長率は減少しているが負になることはほとんどなかった）。この高成長をもたらした要因は２つ考えられる。

まず一つは「アジア太平洋貿易トライアングル」（1960s～1990）である。これは韓国を含めたアジアNIESが、日本から機械・原材料を輸入、それを安い労働力を利用し、家電や衣服などの労働集約的製品を組み立て加工して、アメリカや日本に輸出するといった構造のことである。1960年半ばからはベニヤ板・かつらなどを輸出していたが、1970年代前半から電子製品を輸出するようになった。また、1990年代以降は部品・素材が日本・中国・ASEAN・韓国・台湾で取引きされ、労働集約的完成品（IT機器等）が米国・欧州に輸出されるといった形をとった「東アジアトライアングル構造」となっている。

そして２つ目はモデルとしての日本の存在である。1960年代半ばから産業振興政策を政府が積極的にスタートさせ、70年代に加速した。この時、盛んになった産業は鉄鋼、化学、電子など、当時の日本の主要産業であったことから日本を参考にしていたことをうかがえる。また、政府だけでなく企業（サムスン電子、ヒュンダイ自動車など）も日本企業から技術提供を受けるなど、日本企業を成長のモデルにしていた。

これほどまでの高成長の立役者は、現韓国大統領朴槿恵の父に当たる人物である。国内では国民に豊かさをもたらした偉人と呼ばれているが、民主主義を弾圧した独裁者との声もある。

話は変わるが、上記のサムスン電子、ヒュンダイ自動車は、2000年代前後で日本企業の労働慣行を放棄し、欧米企業のやり方にシフトした。この脱日本により、グローバル企業が出現し始めた。グローバル企業出現の要因はこれだけでない。企業が市場重視の開発・販売戦略へとシフトしたのだ。残念なことに技術より市場という流れに乗れなかった日本はガラパゴス化してしまう。これではもう「後れた韓国」とは言えないだろう。

このように成長を遂げてきた韓国だが、問題も発生してくる。格差問題や少子高齢化、就職難などだ。特に少子高齢化では労働力が減っていき、外国人労働者を呼び込むための政策などが必要になってきたり、職や蓄えを失った高齢者の自殺率が増加したりなど、早急に対策の必要な事案が多い。

これまでに述べたように、韓国では日本と同じような経済発展を遂げてきた。同じ経験をしてきた人同士分かり合えると思う。なので今ある問題をどうするかじっくり話し合う必要があると思う。今回学んだことを生かして韓国巡検に臨みたい。

＜B　丸紅＞

「H28 東京巡検　丸紅株式会社を訪問して」

１年　今田莉彩

はじめに

今回の企業訪問で、私たちは世界的に活躍している総合商社、丸紅株式会社を訪問した。話を聞く中で、企業について、またCSRについて分かったことをまとめていく。

１　丸紅とは

丸紅株式会社とは、世界規模でビジネスをしている総合商社であり、主にトレードや事業投資を行っている。また、CSR活動にも重きを置いて活動している。創業は1858年で、「正・新・和」を社是に掲げており、本社には4437人もの社員がいる。また、452のグループ会社を持ち、67か国・地域に拠点を置いて活動している。丸紅グループは主に利益を創出する営業グループと、リスクマネジメントを担当する管理グループの２つに大きく分かれ、営業グループはさらに５つに細分される。

２　丸紅のビジネス

丸紅のビジネスは多岐にわたっている。例えば食品や衣料品、資源、設備などのトレード、またインフラ整備や鉱山開発なども行っている。特に電力事業は好調で、国内にとどまらず、欧州やアフリカなどでも展開している。新興国では再生可能エネルギーよりもインフラ整備が重視されるが、先進国では火力発電だけでなく小水力発電や風力発電など、環境を意識した取り組みもしている。

また、国際的にさらに活躍していくため、グローバル人材の育成にも注力している。例として、TOEICなどを利用して英語教育をしたり、入社後７年以内に海外経験をさせて実践力を磨かせたりしているという。

さらに丸紅では、コンプライアンス統括部を置き、コンプライアンスの最優先を社員全員に意識させて企業活動に取り組んでいる。例えば途上国での贈収賄、あるいは違法なファシリテーションペイメントなど、つまり「正義と利益のどちらかを取らねばならない状況」に遭遇した時は、迷わず正義を貫くこと、という内容が「コンプライアンス・マニュアル」に記載されている。社員はこれを遵守することを宣誓しているという。

３　丸紅のCSRについて

CSRはCorporate Social Responsibilityの略で、一般的に「企業の社会的責任」と訳される。丸紅ではCSRを果たしていくことで、会社の持続的な成長、企業価値の向上を図っている。

商社にとってのCSRとは、経済（収益の向上、日本経済への貢献、株主への還元）、環境、社会（法令の順守、安全高品質な製品・サービスの提供、社会貢献、公正な取引、人権）の３要素を組み込み、バランスよく企業を経営することで、丸紅ではCSR・地球環境室が陣頭指揮に当たっている。例えば投融資・開発プロジェクトの環境評価では、会社が行おうとしているプロジェクトが周辺の環境に与えるリスクを考察し、アドバイスをする。また、サプライチェーンCSR訪問調査では、仕入先（サプライヤー）でも人権や労働環境が守られているかを確認している。サプライヤーのCSRが、自社の評判にも大きくかかわってくるからだ。さらに丸紅グループ会社への訪問調査も行っている。これは環境に与える負の影響が高いと想定される会社の工場やオフィスを訪問し、環境に対するリスク軽減への対応状況などを調べている。

丸紅では、攻めのCSR・戦略的CSRを重視している。これは社会と企業の両方に価値を生み出す取り組み、国際的・社会的な課題の解決のための取り組みである。例えばエネルギー問題なら再生可能エネルギー事業の展開、貧困問題なら雇用創出などである。

このようなさまざまなCSR活動の一環として、丸紅では職業訓練や総合商社講座なども実施・開講している。職業訓練に関しては、丸紅基金を通して小規模の社会福祉団体へ助成している。また、総合商社講座は10年前に開設され、学校などから多くのニーズを受けており、会社や社員にとっても刺激になるそうだ。これからますます企業の評価を高めていくために、アピールしていく必要があるという。

４　アンゴラにおける繊維工場のリハビリ

丸紅が行った大きな事業の一つに、アンゴラの繊維工場の改修・建設プロジェクトがある。

アンゴラは、アフリカ南西部に位置する国家である。人口はおよそ2500万人で、そのうち約600万人が首都・ルアンダに住む。2002年までは内戦が長く続いたが、石油やダイヤモンドなどの資源に富んでいるため、内戦終結後は急速に経済が発展している。しかし、インフラの整備が十分でなくスラムも形成されており、また様々なものを輸入に頼っているために物価がとても高いなど、多くの課題を抱えている。

この事業は、アンゴラ国内の、ルアンダ、ベンゲラ、ドンドの３か所の繊維工場のリハビリである。内戦以前のアンゴラは綿花の産地であり、アフリカ最大の綿花輸出国であったが、内戦により工場は生産機能を失ってしまった。その工場を復活させ、失業率が20%にのぼるアンゴラで「アンゴラ人が働ける場所」を提供しようという丸紅の挑戦だ。内容としては、最新鋭の設備や自家発電・排水処理などのユーティリティー設備を据え付け、さらには食堂・託児所などの福利厚生施設を建設するという大規模なプロジェクトであった。ルアンダ工場では綿花から生地まで、ベンゲラとドンドでは製品までを工場で受け持っている。担当しているのは電力・プラントグループの中のプラント本部－産業プラント部である。彼らは韓国の建設会社、現地での通訳としての日系ブラジル人、中国の企業などによる混成チームを作り、計画を進行していった。

しかし現地では、インフラ整備の遅れや技術者不足だけでなく、マラリアなどの疫病対策など、数多くの問題が彼らを悩ませた。そこでマラリア対策の防虫服やパラメディック（高度な救急救命士）などを準備し、いつでも救急救命できるようにした。また内戦直後の国ということでリスクもあると予想されたが、現地の人々は「もう戦争は嫌だ」という気持ちを持っており、また警察も多く配置されていたため、テロなどはなかったという。それでも万一の事態に備えてすぐにレスキューできる体制を整えていた。このように、丸紅は現地の人々に食糧・仕事・健康を提供しながら、計画を順調に進めていった。

そんな中、中国もアンゴラの資源に目を付けた。中国企業はアンゴラに対して「お金を貸すからビジネスしてください」と言い、金や人などすべてを提供し、中国人は労働ビザを取るなどしてアンゴラの地で働いている。実際アンゴラは中国のおかげで成長できたという部分もあるので、中国人に対しては感謝の気持ちを抱いている人も多いらしい。それに対して日本は、技術や設備は売るが、働くのは現地の人、という姿勢で臨んでいる。

丸紅による現在の雇用人数は、各工場で200～300人程度だが、完工後は、３工場合計で約3500人の雇用創出が可能となる。さらにこれからは、繊維製品の国内の消費にとどまらず、輸出していくことも考えられるという。

５　まとめ

今回の訪問で、まず「総合商社」についての知識を多く得ることができ、さらに丸紅が利益だけを求めるのではなく、環境や社会に対する責任も果たしていることを学んだ。また、丸紅が手掛けている大きなプロジェクト、特にアンゴラの事例について詳しく知り、理解を深められた。アンゴラの経済において影響力の強い中国と日本間には、提供するものや現地での働き手などの面で相違点があることを新たに知った。そして経済的な発展に貢献している中国と、雇用創出など社会問題の解決に向けて貢献している日本、という構図を認識できた。

これから、丸紅のように、利益を追いつつもCSR活動にも力を入れるグローバル企業がさらに増えていくことが期待される。

「丸紅を訪問して」

１年　青木優花

１　はじめに

丸紅のCSRは、内容はもちろん、CSRに対する考え方、働く人々への保証等様々な面でとても魅力的に感じた。また、商社というものがどういった仕事をしているか、詳しくわかりやすく説明していただき、やりがいのある仕事だなと思った。私たちが事前に用意していた

質問にも一つ一つ丁寧にお答えして下さり、より理解を深めることができたと思う。

２　丸紅という会社について

まず、「総合商社」とは何かということについて講座を受けた。商社とは、輸出・輸入、事業投資を主に行っており、特に“人”が重要な役割を果たしているという印象を持った。拠点は67ヵ国、132ヶ所の地域ということで、世界中に幅広くネットワークを持っている。そのため、現在特に話せる人を増やしたいと思っている言語はなく、入社時の英語の能力はあまり問われないそうだ。ただ、入社後にはTOEICで730点以上を取らなければならないらしい。現在は学歴社会だとうたわれているが、入社時に語学力を問うのではなく、入社後に社員が勉強するという姿勢は良いと思った。また、社員が若いうちから挑戦することを大切にしていて、入社後７年以内に海外経験をさせている。このお話を伺う前に、丸紅に入社・出世するにあたって、学歴はどれくらい関係があるのかということと、丸紅の社内においての女性の進出度について事前に調べてみた（参考：marubeni.co.jp）。学歴に関しては、新任代表取締候補９人の内訳が、慶應義塾大学４人、神戸大学１人、東京大学３人、九州大学１人となっており、個人的な感覚としては学歴も関係しているのではないかと思った。また、女性の進出に関しては、2016年６月下旬の取締役候補10人の内訳を調べたところ、９人が男性で１人が女性だった。ここからは、主要なポストには男性がついているという印象を持った。丸紅のようなグローバルな展開を視野に入れ、CSRにも熱心に取り組んでいる会社が、女性の進出についてあまり前向きではないと見られる状況があることについては疑問に思えた。後から反省としても上げるが、私に積極性が足りず、時間の関係もあり、この点については質問することができなかった。私が予想する回答としては、学歴に関しては、会社として目指すものが明確なのでそれに対応することのできる能力を求めようとすると、どうしても学力が関係してくるため、自然と学歴も上がってしまう。女性の進出に関しては、女性だから、男性だからという視点では見ておらず、これもやはり個人の能力を求めた結果であって、その結果、女性が１人になってしまった、という回答が予想できた。だが、実際に聞けなかったということは、非常に残念だった。

３　アンゴラでのビジネスについて

まず、なぜアンゴラでビジネスをしようと思ったかが私にとっては大きな疑問だった。きっかけはアンゴラ政府からのアンゴラ人が働く場所が欲しいという願いだった。その願いを受け、実際に現地へ行って、現地の人と話して、やってみて、「できるじゃん、これ！」となり始めたという。このお話はたくさんの写真を見せていただきながら伺ったが、最初にアンゴラに訪れた時に撮影された工場は建物として機能していなかったり、ゴミ屋敷のようになっていて、この状況から今の状態まで作り上げたことに大きな衝撃を覚えた。また、アンゴラという普段生活しているだけでは名前を聞かないような国からの要請にも親身に耳を傾け、実際に行って、そこに住む人々と話をしてビジネスをするかどうか決めたという、その姿勢に、自分も普段の生活の中であまり前向きに捉えられないようなことにも一度耳を傾け、実際に接してから寄り添うかどうか決めればいいのだということを学ばされた。アンゴラで働く人の年齢層も20～74歳と広く、高齢者の経験・技術にも目をつけて採用しているところからは、定年という型にとらわれず、良いと思うものを取り入れるという考え方が感じられて、現在高齢化が進んでいる日本は見習うべきだと思った。また、日本人を現地へ派遣する際のシステムもちゃんと整備されていた。キャンプを建設して、寝るところ、食べるもの、働く環境、健康、特にマラリアに対する対策等の提供、医者を常に１人派遣しておくなど、ほかにも様々な対応がされており、素晴らしいと思った。

４　最後に

やはり商社ということもあるのか、アンゴラでのビジネスからは社員を大切にしていることがよく伝わってきた。しかし、学歴偏重や女性の社内での進出については疑問に思う部分があった。その疑問に思ったことを実際に聞けなかったことは、今回の企業訪問での大きな反省だった。積極的な姿勢でいることは、結果的に自分にかえってくることだと思うので、今回の反省をバネにして韓国では改善していこうと思う。

「丸紅を訪問して　～国際貢献の方法～」

１年　豊田優里

丸紅を訪問して一番心に残ったこと、それは、「どうしたら国を発展させられるのか」ということだ。

丸紅は、CSR事業（Corporate Social Responsibility）の一環として2009年にアンゴラに繊維工場を設置した。そして、Give and Takeの関係で、その工場を運営している。私は、双方に利益がある発展途上国への支援の仕方がとてもいい方法だと思った。

発展途上国を支援する方法と聞いて、頭に浮かぶのは何だろう。機関を通じての募金、ボランティアとして教育やインフラ整備、エコキャップ運動、使わなくなったランドセルを発展途上国の教育を受ける子供たちに贈る活動、またはユニクロ・ＧＵで実施されているいらなくなった服を発展途上国に贈る活動、そして丸紅が取り組んでいる繊維工場を設置する方法だろうか。

この中の活動は２つに分類することが出来る。１つ目のグループは、募金、ボランティア活動、エコキャップ運動、ランドセルを贈る活動、服を贈る活動だ。２つ目のグループには丸紅のアンゴラに繊維工場を設置して雇用を生み出す活動が分類される。この２つのグループの違い、それは持続可能かそうでないかだ。つまり、グループ１は私たちからの一方的な支援である。もちろんこれらはとても大切だ。しかし、募金を続けることは難しい。そのほかのものも、人々の好意のみの上に成り立っている。もしも関心が薄れてしまえば、いつ途絶えてもおかしくない。途絶えてしまったら、自分たちではどうにもできない。実際、私はランドセルを贈る活動に参加したが、送料6000円は自己負担であったため、妹のランドセルはもう贈らないと思う。それに対して、グループ２はGive and Takeの関係であるものだ。繊維工場を設置することで双方が利益を受け取れる。どちらの負担にもならず、むしろ利益になり、途絶えるどころか発展させていきたいと思えるのだ。そしてもし仮に丸紅が支援を止めたとしても、向こうが自分たちで発展させられる。これは、すばらしい支援の仕方だと思う。

アンゴラは、1960年～1975年にかけてポルトガルからの独立戦争、そしてそれが終わっても2002年まで紛争が続いていた。今のアンゴラの状態は、道路はいつも渋滞、雨が降ったら洪水、ごみ収集がない、道路が穴だらけ、そして物価が世界一高いという状態だそうだ。だが、石油やダイヤモンドなどの資源を背景に、急激な経済成長を続けている。内戦の前、アンゴラは綿花の生産が盛んだったらしい。それに目を付けたのが丸紅である。アンゴラ繊維工場の設備などは、丸紅が中継ぎしてそろえた。今では現地の人たちが運営している。

この繊維工場が出来たことでアンゴラが受ける恩恵、それは主に３つある。１つ目は雇用の確保である。工場では将来3500人ほどの人が雇われる。アンゴラは大家族が多いため、一家族５人だとして17500人もの人がいい暮らしができるようになる。２つ目は物価を下げる効果だ。国内で洋服が生産されることでほとんどを輸入に頼っている今の現状から抜け出せる。３つ目は輸出を増やして国の地位を上げることである。その繊維工場の売り上げがこれからも順調であれば、今は輸出をしていないが、将来的には輸出をして外貨を稼ぐことも考えているそうだ。実際に、スペインのファストファッションの有名なブランドであるZARAからも話が来たそうだ。

もちろん丸紅が受ける恩恵もある。１つ目はもちろん、繊維工場が設備をそろえる中継ぎをしたことによる利益。２つ目は、社会の目のUPだ。CSRを通じて会社の評判がよくなるし、実際に社会貢献をする企業は利益が上がっているというデータもあるらしい。さらに、いま日本では、石油などの資源がないために資源を持っている国と仲良くしようという政策があるらしい。つまり、国からの支援があるのだ。このようにして丸紅にも利益がある。双方に利益があるということは、どちらの負担にもならない。つまり、募金やボランティア活動とは違って持続できるのだ。

ただし、向こうで働くのには危険も伴うのではないか。それについても、100％安全ということは不可能であるが、とてもしっかりした対策がされていた。ただし、アンゴラの治安は私たちの想像よりも良

いらしい。実際に犯罪率は中南米よりも低い。今まで戦争を経験してきたため、これからは平和になろうと努力している。それでも、何かあったときのために連絡網はしっかりしているし、少しでも危ない所には近づかないようにしている。ストレスがたまることも多いだろうが、日本食のシェフを雇ったり、パーテイーや飲み会、レジャーなども企画されたりしているそうだ。それよりも心配されているのがマラリアで、その対策としては従業員たちに虫よけ、マント、靴下などを配っていて、救急救命士もいる。私たちのイメージよりも安全なことに気づかされた。

国際貢献には様々な方法がある。何が向こうの人たちにとって良いことなのか、しっかり考えていきたい。

「企業訪問「丸紅」を訪れて」

２年　田中茉凜

東京巡検で一番楽しみにしていたのがこの企業訪問だった。何故なら、以前参加した全国高校生模擬国連大会で担当した国アンゴラに事業を展開している企業の方に、直接お話を伺えることになったからだ。アンゴラという国は今でこそ資源大国として注目されつつあるが、まだ内戦を終えたばかりの発展途上国で、日本にはあまり知られていない。それゆえ丸紅が繊維工場の建設を手掛けたことを聞いたときは、納得するのと同時に驚いた。模擬国連の準備中でさえ、インターネットや本などの書物（それも不十分）でしか調べようがなく、疑問が多く残っていた国について、実際に現地で働いていた方の話を聞けるとなってとても嬉しかった。

丸紅という企業はこれまで名前は耳にすることがあっても、どんなビジネスを行っているかを知る機会はなかったので興味深かった。そして総合商社と聞き、あまりにも分野が広すぎることを知って、こんなに多種多様なビジネスを展開することが可能なのかと、とても驚き、更に関心が高まった。しかも私達は運がいいことに、移転したばかりの本社ビルに訪問できることになったので一層期待が膨らんだ。実際に訪れてみたそれは、私の予想をはるかに超えた立派なビルだった。来客専用のフロアとエレベーターはきれいに磨かれ、何をするのも電子機器といったような、丸紅という企業の規模の大きさを物語るには十分すぎる近代的な造りになっていた。帰りのエレベーターの中で、おそらく取引に来ていたのであろう外国人二人が、英語でもない外国語で話しているのを聞きながら、丸紅のグローバルな事業展開を実感したりもした。

さて、講座は丸紅という企業の紹介から始まったのだが、これを担当して下さったのが木下さんという、まだ入社して二年目の若い女性社員の方だった。丸紅は入社した当初から、社員にいろいろなことをどんどん実践させるという形をとっているらしく、木下さん自身とても誇らしげにそのことを説明していた。私も木下さん同様、素晴らしいと思った。社会に出たばかりの新入社員の不安を取り除く上でも、企業の将来を考える上でも、社員の経験値を上げるのはとても効果的だ。しかも入社歴なんて関係ないといわんばかりに、木下さんの説明はわかりやすく、むしろ私達と年齢が近いせいか親近感を抱いて話に集中することができた。堂々と話す木下さんを見て、社員の教育の重要性を改めて実感した。

最も注目していたアンゴラについてのお話は、実際に現地に赴いて工場建設の指揮を執った長島さんから伺った。話を聞くにつれて今まで私がアンゴラについて誤って理解していた点が次々と明らかになった。その中で主な二つを取り上げたいと思う。一つ目は、アンゴラに進出するメリットの一つとして、豊かな労働力が含まれていなかったことだ。私は今まで、多国籍企業は現地の人々に安い賃金で単純労働をさせ、利益を絞っていると解釈していたが、アンゴラの場合、建設当初、内戦が終わったばかりで職業訓練などはもってのほか、識字率も低く、建設において彼らが戦力になる状況ではなかったらしい。そこで治安や衛生状態を心配し、出向くのを躊躇う日本、韓国を超えて、中国の会社に頼み、労働力になってもらったという。したがって当時の労働者の国籍は８割が中国人、残り２割がアンゴラ人、そしてごくわずかの先進国から来た高技能技術者だったそうだ。段々と国の教育が進んで、完成時にはアンゴラ人と中国人でおよそ１対１の割合だったらしいが、この話を聞いて、戦争がもたらす国の荒廃や、日本人や韓国人が敬遠した仕事を担う中国人労働者のたくましさと、背景にある貧困、人権に対する考えの差を痛切に実感した。二つ目は中国に対するアンゴラの意識だ。私は去年アンゴラの移民についてインターネットで調べている時に、広大な土地や資源だけを利用し何も国に利益を与えてくれない中国に対してアンゴラ人の反感が高まっているといった内容の記事を沢山目にした。だが、長島さんの話によると、それは一概に真実とはいえないという。何故なら確かに中国は現地の人々に雇用を作らず彼らだけで勝手に事業を展開したが、内戦直後の何もなかったアンゴラにいち早く注目して資源を買い、経済成長のきっかけを作ってくれたのも中国なのである。現に丸紅の工場でも両国の人々が良好な関係で働いているそうで、反中国のメディアが批判目的で過度な表現をしていたことがわかった。私は改めてマスコミの信憑性の欠如に憤りを覚えるのと同時に、こういった誤った認識が世界に広まるのを防ぐため、実際に現状を把握した人が第三者の立場で積極的に発信してほしいと思った。

今回講座を聞くに当たってもう一つ学んだことがある。偶然生徒の一番後ろの席に座ったからこそ気づいたのだが、私の後ろに座っていた案内役の女性が、前でプレゼンテーションをしている社員の人に向かって度々パネルを上げているのだ。よく見るとそれは「あと５分」「10分超過」などプレゼンの時間を示すものであり、これにはとても感心した。社会では時間を守ることは絶対のルールであり、実際にこんな細かい工夫を凝らしているのを目の当たりにして、改めて社会の厳しさを実感した。それと同時に、楽しそう、かっこいい、早く自分も経験を積んで一人前の社会人として企業のため、国のために働きたい、と思った。

最後に、私は今回の訪問を通してまた沢山のことを学び満足することができた。あれから丸紅が手掛けた事業を調べるようになったし（一時、話題になったタイの都市鉄道も手掛けていたことには驚いた）、今度はその事業からあらゆることへ関心が広まるようになった。また、丸紅のような世界を舞台に活躍する企業を持つ日本を誇りに感じた。機会があったらまた色々な企業の話を聞きに行きたいし、企業の側もこうした学生に向けた講座を、企業と国の双方の将来のためにも積極的に開いてほしいと思った。

「企業訪問・丸紅」

２年　伊東里彩

１　丸紅を訪問するにあたって

私が初めて丸紅という会社の名前を耳にして、どんな会社なのかを知ったとき、思ったことが二つある。まず、総合商社とは何なのか、どんな仕事をしているのかということ。そして、もう一つはなぜ、アンゴラという（情けないが私はこの国については名前程度しか知らなかった）国を選び、ここで事業展開をしていったのかという点だ。また、丸紅について調べていくにつれ、より多くの疑問が生まれた。例えば、丸紅ではアンゴラに繊維工場事業を展開させている。アンゴラに事業を展開したことで相手国にどんな影響を与えたのだろうか。たとえて言うなら、雇用をどれだけ生み出したのか。また、先にアンゴラに大きく進出している中国企業にはどのように対抗しているのか。ほかにも様々な疑問をぶつけてみようと思った。

２　商社とは

商社とはどんな仕事をしているのか、簡単に言えば“何でも屋”であるという。その中でも具体的には、二つの事業展開の仕方がある。一つ目はトレード。つまり輸出・輸入の仲介人のようになって、世界の中でモノを売りたい人、モノを買いたい人をつなぎ、その手数料で利益を得るという方法である。二つ目の方法は事業投資である。事業投資とは、簡単に言えばビジネスに入り込むことであり、具体的な例を挙げると、水不足に悩む人々を助けるために水事業に取り組み、水事業に詳しい会社と提携して水を必要とする国や地域に供給して、より多くの人の生活に役立てるというようなものである。この二つの事業展開の仕方を生かし、トレード（トレーディング）を伝統的ビジネス、安定した収入源とする一方、事業投資によって更なる収入を確保するというように、トレードと投資を両軸としてビジネスを展開している。

３　丸紅のCSR

丸紅ではCSR・地球環境室を設置し、CSR活動に積極的に取り組んでいる。商社にとっての“社会的責任”とは、“経済”・“環境”・“社会”の三つの要素に関してバランスよく経営することである（経済とは収益を向上させ、日本の経済に貢献し株主に還元すること、環境とは地球環境の保全に努めること、社会とは法令順守、安全で高品質な製品・サービスの提供、社会貢献、公正な取引、人権などを確保することである）。具体的には、投融資や開発プロジェクトの環境評価を行い、営業グループが事業を行う上で注意することを伝え、環境に悪い影響を与えないように注意したり、サプライチェーンに対してCSR訪問調査をおこない、仕入れ先でも人権や労働環境などが守られているのかを現地に行って確認している。また、丸紅グループの会社のうち、環境に与える影響が高いと想定される事業会社を抽出し、訪問調査を実施している。訪問調査では、第三者機関の調査員とともに工場やオフィスを訪問し、環境法令の順守体制や環境リスクへの対応状況等のチェックを行っている。他にも、事業を通して社会的課題に取り組むことで、“社会的課題の解決”と”企業の利益・競争力向上“を両立させ、社会と企業の両方に価値を生み出すという戦略的CSRというものも展開させている。

4　アンゴラでの繊維工場事業

アンゴラでの繊維工場事業は、先ほど述べた戦略的CSRの中の一つである。アンゴラは人口2500万人、石油生産はナイジェリアに次ぎアフリカ第２位で、GDPは南アフリカに次ぎ２位と、資源もあり経済的にも豊かに見えるが、2002年までの内戦によって国内の産業はボロボロになっていた。そこでもともと盛んであったアンゴラの繊維生産を復興させ、社会復帰をさせようと考えてこの事業に取り組み始めた。アンゴラは内戦直後であり、職業訓練のされていない人が多く、仕事の基本から教えていかなければならなかったり、ほかのアフリカ諸国に比べれば治安はいいが、安全対策を徹底し、住まいや食事、特に安全に法人が活動できるように注意したそうだ。また、アンゴラに丸紅が進出したことで、今はまだ少ないものの、繊維工場での雇用を生み出し、現地の人たちが経済的に安定した生活が送れるように貢献している。また、中国企業は日本のやり方とは違い、お金を貸して事業もすべて中国人で行ってしまい、雇用をなかなか生み出せていない点で不満は持たれているが、アンゴラの内戦後、短期間に復興に貢献したことには感謝されている。日本もアンゴラに仕事を提供したり清潔な生活に貢献するなどしてアンゴラ人から評価されるようになっている。双方がバランスよくアンゴラに受け入れられながら事業を展開していっているのだなと思った。

5　最後に

総合商社というところが、どのような事業を行っているのかを知ることができた。また次世代の優秀な人材の確保のためにも、CSR事業によって社会に大きく貢献し、“今”だけではなく会社の“その先”までもみて日々の仕事が行われているのだなと思った。私は日本中の企業がこのような姿勢でCSR事業を取り組んでいけば、いま日本や世界に横たわっている様々な問題を着実に解決していくことができるようになり、社会全体の生活レベルの向上につながるだろうなと思った。

「丸紅について」

２組　橋詰貴行

●丸紅は総合商社である

商社とは何かと思う方がいるかもしれない。それはトレード（輸出入）をすること。つまり需要と供給の間に生じる壁を商社が手助けをする。さらに言えば、売りたい人と買いたい人との間に入ることだ。また、事業投資をすることでもある。事業投資をして原料や資源を調達し、それをトレーディングし、また、製造・加工分野でも投資をし、トレーディングし、そして最後に卸売・小売に投資をし、トレーディングする。つまり、商品ができるまでの全てを行うのだ。丸紅は総合商社ゆえに生活産業、電力・プラント、素材、輸送機、エネルギー・金属といったほぼ全ての分野で活躍している。では、具体的にどのようなことをしているのか。例えば、生活産業分野において、中国では不動産開発事業を、アメリカではアラスカ鮭鱒事業、タイやカンボジアではタイヤ小売事業などをしている。そのような実践を積み重ねてできたノウハウにより、国内のマンション供給実績は約78000戸、中国では8600戸である。さらに丸紅が行ったインフラ整備により、約900万人が水道サービスを受けている。また、所有発電容量で言えば10743MWで、これは私たち愛知県民が電力供給を受ける中部電力の発電量に相当するものである。そして何よりも驚いたのはコーヒー豆の取扱量である。これは、日本のコーヒー豆の消費量の約30％である。単純計算をすると、三日に一回丸紅のコーヒーを飲んでいることになる。とにかく丸紅はあらゆる事業を展開する何でも屋さんなのだ。

●丸紅のCSR

まずCSRの説明からしていきたい。

Corporate Social Responsibility の頭文字をとったもので、直訳すると「企業の社会的責任」である。では、商社における社会的責任とは何かといえば、「経済」「環境」「社会」の三つの要素に関してバランスよく経営することである。「経済」に関しては日本の経済に貢献し、株主に利益を還元する。「環境」に関しては地球の保全をおこなう。「社会」に関しては法令順守、安全で高品質な製品・サービスの提供、社会貢献、公正な取引、人権の尊重に根ざした経営をすることだ。CSRを営業と共にすることで社会に求められるビジネスを実現し、持続的な成長と企業価値の向上が期待される。

CSR部はどういった仕事内容なのか。それは、大きくわけると三つある。一つは、新しいビジネスが環境に与える影響について調べて評価をすること。例えば、建物の建設中、騒音がるのかないのかなどだ。二つ目は、サプライチェーンCSR調査訪問を行うこと。サプライチェーンとは、製品の原材料が生産されてから消費者に届くまでの一連の過程ことだが、その労働現場で人権や労働環境が守られているかを現地まで赴き確認をする。三つ目は事業会社へ環境調査のために出張を行うことだ。例えば、第三者機関の調査員と工場やオフィスを訪問し、環境法令の順守体制や環境リスクの対応状況等のチェックを行う。実際、平成27年度は国内外20社24拠点を調査したという。

丸紅はこのようなCSRを積極的に行う一方、「社会的課題の解決」と「企業の競争力向上」を両立させ、社会と企業の両方に価値を生み出すための「攻めのCSR」を取り入れている。その中でもアンゴラにおける支援がすごい。内戦により荒れ果てた地となった場所から繊維工場を一から作り上げ、約3500人の雇用を創出。日本とアンゴラの友好の懸け橋の役割も果たした。

●最後に

丸紅の本社はとても立派で綺麗で私にとって憧れの仕事場である。仕事内容も誠実であった。これからの時代に求められるものはそういうものであると再認識することができた。これからは、さらに地球にやさしくしなければならないので、私達の世代にもCSRの思想を引き継いでいかなければならないと思う。

「丸紅を訪問して」

２年　浜　凪帆

私は昨年度の高校模擬国連大会でアンゴラ大使を務めたので、丸紅のアンゴラ繊維工場に関する事業にとても興味を持っていました。アフリカ南部にあるアンゴラは、最近まで内戦状態にあり、危険な場所でした。本来なら日本人が嫌がりそうな地域での仕事を、丸紅が引き受けた経緯が気になっていました。その回答を聞くと、アンゴラの成長率や資源といった将来の有望性だけではなく、日本政府からの援助金やアンゴラ大臣からの依頼の存在がありました。また、アンゴラ人の生活を考え、高賃金で雇い、低価格でモノを売っていたとしたら丸紅は損をしているのではないか、と考えました。しかし、丸紅はあくまで商社なので、CSRといえども工場の経営には手を出さず、アンゴラ人の満足いくようにやらせているということでした。企業として、十分な利益とリスクを天秤にかけ、損になることがないように動いているのだと感じました。日本の多くの企業は、CSRをほとんどボランティア、もしくは赤字で行っていると聞いたことがありましたが、丸

紅の場合は、会社にとっても損はないどころか、むしろ利益があり、それでいて社会の役に立つことをしていました。私は、win-winの関係をうまく作ってCSRを行っているところが理想的だと思いました。また、アンゴラにはまだ石油資源がありますが、内戦後すぐの国が復興するには、経済的にも技術的にもその国だけの力だけではなく、海外からの助けが必要となります。多くのグローバル企業が出てきた今、政府が対応しきれないところを企業がCSRとして補うことで、企業が自分の利益を追求しつつ海外援助を行っていくことが重要となってくるのではないかと思いました。

丸紅に行く前、ホームページを読んで、CSRを含め良いことばかり書いてあるが、これがどこまで本当なのかという疑問を持っていました。そこで特に知りたかったコンプライアンス重視はどこまで浸透しているのかについて聞いてみました。「商社はTraderであり、世界の様々なところに拠点がある。中には賄賂が横行して当たり前になっている地域もあるし、そういう誘惑に打ち勝つためにコンプライアンスを最優先するということは欠かせない」とおっしゃっていました。コンプライアンスは当たり前のことではあっても、日本だけでなく海外でもチェックを定期的に行い、コンプライアンス最優先の精神を用いて不正を減らし、より浸透させていくことで、大きな会社をうまく回しているのだと感じました。また、このことにより企業内の不祥事を減らし、企業の信頼と評価を下げないように努めているのだと感じました。

今回私たちが学ぶことができたのは、丸紅がCSRとして総合商社講座を行っていたからでした。この総合商社講座は、社員が自分の仕事を一度振り返り、やりがいや良さを再実感し、やる気をあげることにつながっているそうです。私はこの事業がアンゴラ繊維工場のように直接利益につながらない分、「企業が積極的に社会貢献活動を行っている」ということで社会的評価を高めているのではないかと考えました。コンプライアンスや総合商社講座を含め、CSRの大きな目的の一つはレピュテーション、信頼性を得ることだと感じています。私たちがモノを買うときに信頼性のある企業の商品が買いたくなるように、レピュテーションと企業の売り上げには相関性があるようです。ここ数年でグローバル企業が一般の人々の生活に与える影響力は大きくなってきており、消費者も企業にCSR活動を求める傾向にあります。これからは、CSRをうまく活用して企業の評価を高めつつ、この活動を持続できるようにwin-winの関係を作っていくことが企業には求められていると学びました。

「企業訪問報告レポート・丸紅」

1年　久野千優

わたしは2016年９月28日に丸紅を訪問した。そこで学んだことは、まず、総合商社とはなにか、丸紅グループとはどういう企業なのかということだ。

商社とは、輸出入貿易ならびに国内における物資の販売を業務の中心にした、商業を営む業態の会社である（ウィキペディアより）。また総合商社は特に幅広い商品・サービスを取り扱うものをさす。商社の行うこととして、事業投資もあげられる。専門的な設備・技術・ノウハウをもった他企業と協力しながら、事業効率アップのための経営システム・ファイナンスとしての機能などを提供する。

丸紅、正式名称丸紅株式会社とは、1858年創業の、世界67か国に拠点を持つ大手総合商社である。世界中に拠点をもつため、グローバル人材の育成は重要だ。丸紅では英語は必須になっており、他にも世界各国の言語を必要とする。人材育成に向け、入社後７年以内に海外経験を積ませるなど、若いうちからの挑戦も大切にしている。

日本の総合商社には、丸紅の他に三菱商事、伊藤忠商事、三井物産、住友商事などがあり、五大商社などと呼ばれる。それぞれに得意分野があり、丸紅は特に電力事業で大きな利益を上げている。現在は火力発電が中心であるが、近年は再生可能エネルギーにも力を入れているそうだ。その背景には、欧米諸国の環境意識の高さがある。異常気象等の増加が示すように、いまが電力事業の転換期なのかもしれない。ただ、やはり火力発電はコスト面・効率面・安定性で群を抜く。上手に二つを並立していくのが現在の最善手なのかもしれない。

丸紅はCSR事業にも熱心にとりくんでいる。丸紅には実際に利益を上げる営業グループと組織を運営する管理グループがあり、CSR事業は管理グループ広報部・地球環境室の担当である。まずCSRとは、Corporate Social Responsibility の略であり、一般に「企業の社会的責任」と訳される。営業部とともに社会的責任を果たし、社会に求められるビジネスを実現し、持続的な成長と企業価値の向上を目指す。

CSRには「守りのCSR」と「攻めのCSR（戦略的CSR）」がある。「守りのCSR」とは、投融資や開発プロジェクトの環境評価、サプライチェーンCSR訪問調査、丸紅グループ会社への訪問調査などのことをさす。丸紅においてその具体例をあげると、福島復興・浮体式洋上ウィンドファームが海を汚さないか調査したり、インスタント・ティーの仕入れ先であるAibheel工場で人権や労働環境が守られているかを確認したりといったことがあげられる。

一方「攻めのCSR（戦略的CSR）」とは、企業に求められている社会的課題への対応を、事業を通じて取り組み（社会的価値の創造）、他社との差別化、自社の競争力強化を図ることができるものをさす（経済的価値の創造）。つまり、「社会的課題の解決」と「企業の利益・競争力向上」を両立させ、社会と企業の両方に価値を生み出すのが「攻めのCSR」なのである。

「攻めのCSR」の実例としてアフリカ・アンゴラ共和国における繊維工場リハビリのついての話を詳しく聞かせていただいた。アンゴラ共和国とは、人口約2500万人の、アフリカに位置する石油資源・水資源の豊富な国である。2002年まで27年間内戦をしていたが、終結後アンゴラ経済は毎年二桁のGDP成長率を記録するなどの驚異的な成長を遂げた。しかし課題の多い国なのは確かだ。奴隷の歴史、格差、脆弱なインフラ、そして物価の高騰、高い失業率などである。内戦以前、アンゴラは綿花、サトウキビ、コーヒーなどの栽培が盛んに行われる農業大国であった。しかし内戦でそれらの農場や加工工場が破壊され、操業停止に追い込まれていた。内戦後アンゴラは石油に依存した経済に陥り、生活に必要なものはほとんど輸入、しかも2009年の世界経済金融危機による石油価格下落のあおりをもろに受けた。アンゴラの経済を多角化し、物価を下げることは急務であった。

ここで立ち上がったのが、丸紅である。アンゴラ政府から依頼を受けた丸紅は、荒れ果てた繊維工場を３つ、復興させた。建設計画と機械輸出がしたことである。プロジェクトの総取りまとめという印象を受けた。この取り組みによって、アンゴラに繊維産業が息を吹き返した。工場が動くことによって雇用が生まれた。３つの工場を合わせて、将来的には約3500人もの人々が、暮らしていくためにじゅうぶんな収入を得ることができるようになる。また、工事は丸紅、韓国の建設会社、労働力となる中国人や現地の人々、通訳としての日系ブラジル人という最強の混成チームで行われた。ここでも雇用がうまれ、また工事に使う電気を発電する設備もできた。発展途上国でのプロジェクト中の、社員への安全対策もとてもしっかりしているようだった。

さらに、私がすごいと思ったのは、丸紅はこのプロジェクトで利益を出しているということだ。CSRはボランティアではないが、発展途上国に絡むとどうしても赤字になってしまいがちだという。だから私は、CSRの企業に対するメリットとは、投資家や国際的な企業への評価をあげることのみにあると思っていた。しかし丸紅は、そのうえ利益まで出していて、ほんとうに社会のためにもなり、企業のためにもなる「攻めのCSR」を実現していると思った。

互いが利益を生むプロジェクトは、企業側にも「してあげている」という意識は生まれにくいと思う。私は、あくまでも意識の上では互いの立場が対等であってほしい。それこそ、中国のように、雇用を生み出さない進出はどうかと思っていた。しかし、実際にお話を伺ってみると、現地では再建に協力してくれた、という見方もあると聞いて、確かにそういう面もあるかもしれないと思った。搾取に見える行為も結果からみれば必要なことだったかもしれない。

今回の企業訪問を通して、現代において、世界との結びつきはとても強くなっているのだということを実感した。世界がよい方向に向かっていくために、私が消費者としてできることは、今後も企業のこういった取り組みに目を向けていくことだと考えている。

「企業訪問:丸紅　レポート」

１年　藤原巧斗

今回、丸紅を訪問し、そこで学んだことをまとめていく。

まず丸紅について。丸紅は1858年、日米修好通商条約が結ばれた年に創業された歴史ある商社である。生活産業や電力、エネルギーなどさまざまな分野を扱っている。再生可能エネルギーについて、ジブリと協力してCMも出したことがあるそうだ。電力分野では所有発電量10,743MWと、中部電力に匹敵する量を発電している。

次に丸紅についての質問で分かったことをまとめる。最初に求められている言語について。フランス語、ロシア語、スペイン語などはとくに求められていないが、TOEICは730点以上と、やはり英語能力は求められている。グローバル社会の今は、英語を話すことが必須条件となっているようだ。また、グローバルに海外で活躍できるグローバル人材の育成については、入社７年以内に海外赴任をさせるなど、新入社員にも様々な経験を与えているそうだ。グローバルな人材は、今の世界には必要なものである。大きな企業というものは、時代の波に乗ってきちんと必要な策をとっているのだと改めて実感した。

さらに丸紅で最も利益を上げている電力事業について。火力発電が今の日本は最も多い発電方法だが、石油価格が高騰した場合などに備え、世界でも脱石油の意識がたかまっているらしく、先細る埋蔵量や二酸化炭素の排出問題など様々な観点から石油発電のデメリットが指摘され、火力発電が拒まれてきているらしい。そのため、丸紅では火力発電事業はもちろん続けていくが、小水力発電など、ほかの資源を利用した発電も行っていくそうだ。これに関しても、その時代の環境に合わせて動いていることはとても大切なことなのだと感じた。

内部留保と投資のバランスについて、これはある程度は資金の準備が必要とのこと。生産すればするほどお金が出ていってしまうような事業もあり、資金力がないことは大変リスクが大きいそうだ。財務体質をしっかりさせること大切だと考えているようだ。

丸紅はCSR事業に早い時期から参加していたが、コンプライアンスを利益の拡大よりも優先しているのかという質問に対し、コンプライアンスには専門の部署を用意し、教育も含めて力を入れていると答えてもらった。利益という誘惑に勝って正義を持つ。「利益＜正義」を考え、子供に胸を張れる仕事をする。とも答えてくれた。自分の仕事に誇りを持つ姿にはとても感動した。

次は丸紅の行っているCSRについて。かつては世間体のための「守りのCSR」であったそうだ。だが今は「攻めのCSR」へと移行したと聞いた。つまり世間体のためではなく、社会貢献や企業の利益のためにCSRを行っていくのだ。中高生向けの講座を開設した理由について尋ねると、もともとは人事部で対応していたそうだが、今は広報部の中にCSR・地球環境室といったCSRそのものを担当する部署が作られている。社員教育の面でも学生相手の講座は成果があったそうだ。我々高校生を社員の教育に利用するとは大変驚いた。CSRの取り組みに関しては、投資家を集めるためではあるが、人材集めも期待しているという。訪問前まではてっきりボランティア精神によるものかと思っていたが、利益を大事にしているところはさすがだと感じた。

最後にアンゴラの繊維工業事業について。アンゴラへは丸紅だけでなく中国企業も進出しているが、現地の人と中国人では衝突があったりするものなのかという質問には、そんなことないと答えられた。丸紅が建てた工場でも半分近くが中国人だが、今後は現地の人の雇用が増えるなど、改善されていくそうだ。アンゴラでの事業は産業プラント部が対応している。アンゴラはGDPが高く、アフリカでは南アフリカに次いで２位と、石油も取れて豊かな国である。丸紅はアンゴラでの事業を展開したが、送る社員の安全面の保証はどうしているのだろうか。これについては、安全対策をきちんととり、食・住・職・衛生・健康すべてに気遣っているそうだ。パラメディックを現地に駐在させるなど、たとえ海外に行ったとしても社員の健康を気遣うところは素晴らしいと思った。

企業に訪問して学んだことはたくさんあったが、何より印象に残ったのは、CSRがビジネスであったことである。社会貢献しつつ自分たちの利益にしていくことはとても難しいことは容易に想像できる。それでもやってのけるこの企業には大変感動した。

＜C　コマツ＞

「コマツのCSR活動について」

１年　稲田栞里

今回の東京巡検で、私たちの班はコマツを訪問し、CSRに関してお話を伺った。企業や社会にとって、CSR活動というものがどのような位置を占めているのか、理解を深めることができた。その中で、特に興味深かったテーマについて述べていきたいと思う。

まずはコマツが取り組んでいるダイバーシティの実現、特に女性の雇用についてだ。調べ始めて私が気になったのは、女性管理職比率引き上げの目標を、５年間で２倍以上とかなり高く設定していることだった。2016年の目標は５％だが、実際は4.6%と達成できていない。全社員中の女性比率が11.5%であることを考慮すると、女性管理職の比率をなるべくそれに近づけていくことは必須であるだろう。しかし、女性管理職の数を無理に増やそうとすることによって何らかの問題は生じないのだろうか。例えば、急いで引き上げようとしたばかりに女性社員の優遇につながってしまうことが考えられる。女性の管理職を増やしていくという取り組みは、つまりは管理職を選ぶ際に女性だからという視点が入り込んでしまうことであり、CSRを考えるうえで大切な要素である社員を公正・平等に評価するという考え方に反する場合があると思う。やはり社員に対して、女性だから、男性だからという性別をはじめとするさまざまな区別をすることは無意味であり、それぞれを個人としてみて評価する姿勢が求められるのではないだろうか。以上のようなことを考えて、私は「女性管理職の比率を引き上げることは、女性社員の優遇につながり、社員を公正・平等に評価するという考え方に反するのではないか。また、そのような声は現場にあるか」という質問を行った。コマツ側からいただいた回答は、「仕事の能力が男性の方が高いということは全くない。従来の考え方や仕組みを見直すことで、女性も個々の能力通りの処遇をする。平均出産年齢と係長クラス昇進年齢がほぼ同じで昇進しづらいことに対しては、入社時点からの計画的な育成でキャリアアップさせるといった対策をとる。また、出産後多くの女性社員が時短勤務となり、評価しづらいため、時間より実績を重視する評価制度へ移行する。このように、女性の優遇ではなく、これまで出来ていなかった能力通りの処遇をするというのが管理職を増やす取り組みの考え方である」というものであった。これは要するに以下のようであると私は考える。現時点で女性管理職の数が少ない要因は、仕事に費やす時間や行う作業量で社員を評価していること、加えて社内でもそれが当然のことと認識されていることである。一方で、多くの女性が出産や育児のために休暇をとったり時短勤務となったりしている。このような評価の仕組みの中では、会社にいる時間の少ない女性の昇進は男性に比べて難しい。しかし、だからといって管理職のうち女性が占める割合が低い状況というのは大きな問題がある（これについては後ほど触れる）ため、女性管理職比率を引き上げる必要がある。家事や育児は女性が行うべきであると一般的に考えられていて、そのために女性は仕事の時間を削らざるを得ないという社会構造自体問題のあるものであるが、それを変えていくことはすぐにできることではない。そこで、評価の仕組みを根本から変えることによって、性別にあまり影響されずに社員の処遇を行うことを目指したのである。その新しい評価の仕組みというのが、時間より実績を重視する、つまり、量より質、同じ時間でどれだけの成果を出したかというものだ。これは女性管理職を増やすために非常に建設的な考え方だと思う。2021年に女性管理職比率を10.0%にするという目標は、10.0%にするために女性管理職の数を増やしていくというよりは、この新しい評価基準を、５年間で女性管理職比率が自然と10.0%に到達するような理想的なものにしていくという理解をすべきだ。問題はこの社員の評価における新しい考え方を社内で徹底させることができるかどうかである。これについては、研修や情報発信サイトなどでの啓発を社内に向けて行っていくようだ。

では、なぜ女性管理職比率を引き上げる必要があるのだろうか。コマツで伺ったお話の中にもあったが、従来はハード中心に高品質の製品を作っていれば問題はなかった。しかし、グローバル化や情報化が進む今、急速に変化し続ける社会の中で企業が生き残り発展していくためには、従来にはなかった新たなアイデアや技術を生み出していく力が必要とされる。新たなものをつくる原動力となるのが、ダイバー

シティ（多様性）だ。様々な立場の人々が集まることで、まるで化学反応のように熱が生まれ、これまでにはなかった斬新なアイデアや革新的な技術が生み出されるだろう。一部の人々だけでは思いもつかないようなことが、新たな視点を取り入れることで見えてくるに違いない。コマツの場合、この新たな視点というのは、機械系以外の専門家や外国人、外部の研究機関、そして女性である。女性管理職を増やすことは、ダイバーシティを実現していくうえで非常に大切なことなのだ。

ダイバーシティを語るうえでもう一つ欠かすことができないのは、グローバル経営についてだ。コマツは海外の現地法人のトップに現地のナショナル社員を置くという、経営の現地化を進めている。その利点についてのお話は非常に興味深かった。現地の社員をトップとすることで、その国や地域独自の状況に適した経営を行うことができる。また、実績を積めば自分も昇進して、ゆくゆくは経営に関わる地位につけるかもしれないというモチベーションを、現地の社員が持てるような環境にすることで、現地の良い人材をつなぎ止めることにもなる。加えて、この経営の現地化は、コマツの中での多様性をより広げていくことにもつながっていくと思う。ここで一つ私が思うのは、ダイバーシティを生み出すためには、ある程度意図的に様々な立場の人々を集めることが必要であるということだ。コマツで実際にお話を伺う前は、立場によって区別または差別することなく、個人として人をみることが最も大切だと考えていた。しかし、女性管理職の比率を引き上げるために評価の仕組みを変えることで、女性と男性の処遇が均等化されたように、様々な立場の人々の意見をくみ取ることのできる体制を意図的につくっていこうとしなければ、ダイバーシティは実現しない。考えてみれば当たり前のことであるが、私にとっては新鮮だった。

二つ目に取り上げたいテーマは社会貢献活動である。今回お話を伺って、社会貢献活動に対する見方が変わった。コマツは様々な社会貢献活動を行っている。各地域での人材育成や植林などの環境保護活動、対人地雷処理などである。もちろんこれらはすべて、利益を得ることを目的としたものではない。CSRについて学び始めて最初に分かったのは、CSR活動は企業のイメージアップを目的とした慈善活動ではないということだ。かつての日本では、CSR活動を、収益を実現した後の追加的なもの、重要ではあるが、本業とは直接的な関係のない活動と捉えていた。しかしそれは間違いであって、本来は本業を通して行うべきである。それではなぜ、CSR活動の一部として社会貢献活動を行う必要があるのだろうか。また、社会貢献活動はCSR活動の中でどのように位置づけられているのだろうか。このことについて、コマツでお話を伺って、理解が深まった。社会貢献活動は、社会的許可（License to operate）を得ることを目的としている。企業の本業、つまり利益を得ることを目的とした活動は、しばしば地域住民の反感をかう。コマツは建設機械や鉱山機械を生産している会社であるが、その鉱山機械を使用した鉱山開発は、環境に悪影響を及ぼす場合が多く、市民によるデモなどの抗議活動も起こりかねない。本業しかしていないと、事業を行う地域から締め出されてしまう。それを防ぐのが社会貢献活動なのだ。そう考えると、社会貢献活動には、少しニュアンスは違うが、やはり企業のイメージアップという側面があってもよいように思う。企業にとって、住民に良い印象を持ってもらうことで社会の中での居場所を得ることが、本業を持続的に進めていくうえで求められるのではないだろうか。社会貢献活動はそのための手段として捉えるべきである。

CSRの理想は、企業、顧客、社会のそれぞれが良い方向に向かっていけることであると思う。コマツが取り組んでいるスマートコンストラクションが良い例だ。顧客にとっては、経験が浅い人でも作業ができる、情報の共有化により素早い意思決定ができるといったメリットがある。また、近年、高齢化や人手不足に悩む土木業界に若い人材が増えるという社会的な利点もある。このように、社会をより良いものにし、顧客にとっても魅力的な製品やシステムをつくることはCSRの大切な要素だ。ダイバーシティの実現も、新たなものを生み出せるという企業にとってのメリットであり、さらに差別をなくし、誰もが活躍できる社会をつくることにもつながる。社会に与える影響を考えず、目の前の利益だけを追うのでは、持続性があるとは言い難い。また、無理に本業とは関係のない社会貢献活動を行うことは、人目を引き宣伝にはなっても、続けていくことはできないだろう。結局のところCSR活動に求められるのは、企業が持続的に発展していける社会をつくることである。そしてその社会は、誰にとっても良い社会であるはずだ。

「2016年東京巡検　コマツ　レポート」

2年　金澤元泰

この夏、CSR活動について、いくつかの企業のHPで調べた。どのサイトもカタカナや抽象語が多くわかりにくかった。非常にぼんやりとした内容で、僕は具体的な活動がイメージできなかったのだ。見た目はかっこいいけれど、実際には企業のイメージアップのためだけにCSRというものを立ち上げているのではないかとも思っていた。

さて、今回訪れたコマツは世界シェア第２位の建設機械、鉱山機械、産業機械のメーカーで、社員の57％は外国人というグローバル企業である。

コマツのCSR活動には２つの柱がある。１つ目が「本業を通じたCSR活動」である。この、本業に関係あるCSR活動において特記したいのは、ダイバーシティ（社員の多様性）についてである。まずは女性の雇用、登用に関して。コマツの女性社員数が全体の11.5％であるのに対して、女性管理職の割合は全管理職の4.6％と低くなっている。この問題を解決するにはどうしたらよいのか。単に女性を登用するだけでは公平・公正に反するという難しい問題に、コマツは評価や昇進の仕組みを変えるという方法をとっている。

女性の昇進の障壁の一つは、平均出産年齢と係長クラス昇進時期の合致である。これにより昇進への足踏みが発生してしまう。入社時点からの、産休・育休も考慮に入れた計画的な社員の育成でこの障壁を解決しようとしている。

出産後の時短勤務は評価しづらく、これも女性の昇進の障壁となっている。そのために、時間より実績を重視する評価制度を導入した。女性の優遇ではなく、（これまでできていなかった）能力通りの処遇を目指し、女性はもちろんのこと、外の社員にも働きやすい環境を創出している。

次に述べたいのはグローバル人事についてである。世界各国に存在する子会社のトップ（社長）に、コマツは現地社員を据えている。これは現地の後継者の育成、そして現地社員の労働意欲の向上（頑張れば昇進できるという期待）に一役買っている。また現地のステークホルダーに信頼され、安定的に経営できるという点でも優れているといえる。

そして２つ目は本業以外のことで社会に寄与する「社会貢献活動」である。コマツでは環境に関する取り組みを行っている。コマツの製品は、行き過ぎた森林伐採・土木工事・鉱山開発など、環境破壊に関与するリスクがある。しかしこれらの問題は、基本的には顧客（コマツの製品を購入し利用する企業等）の対策すべきことである。

そこでコマツはそれらの企業のサポートに尽力している。例えばインドネシアの石炭の露天掘り鉱山では、掘削を行っている会社が廃土を用いて植物を栽培し、その植物を原料にしてバイオ燃料の生産を行っている。コマツのサポートは、燃料の生産だけでなく、燃料の品質管理や鉱山機械の稼働のチェック・保守など多岐に渡っている。

コマツのCSR活動は華々しいものでも企業のイメージアップや利益を求めるものでもなく、むしろ裏方で地道な活動ばかりであった。それは真摯に解決すべき問題に向き合った結果であると思う。派手でも効果の薄い活動ではなく、そこからさらに一歩踏み込んであるべき姿の根本に光を当てている。世界が発展するにつれ、発生する問題も複雑化していくということなのだろう。一刀両断とはいかない難題に、これから僕たちは向かい合っていかなければならない。

今回の訪問で一番印象に残ったのは、「ブリッジ人材」という言葉である。海外の子会社に派遣される日本人の社員を指す言葉で、現地のトップを支え、コマツの技術や価値観を伝える、その名の通り本社と現地の橋渡しをする人、という意味だ。グローバル化の進んだ現在、人々がそれぞれ異なった文化・価値観を持っている中で、集団の上に立ち先導するリーダーになるのは難しくなっている。そんな中で、ブリッジ人材は広い意味でのリーダーの一つの形として活躍するだろう。

ほかにもグローバルリーダーにはいろいろな種類があるはずである。そのうちどの役割がいま自分に期待されているのか、それを判断することが今僕たちに求められることだと思う。上に立つのか、下か

ら支えるのか。複雑に絡み合い、快刀乱麻とはいかない今だからこそ、柔軟に自分のあるべき姿を見定めなければならない。それは人に限らず、企業もそうである。

コマツは下から支える道を選んだ。まるで工事現場の重機のように、ステークホルダーを支えている。そしてその活動が、社会をよい方向へ「導いて」いる。リーダーの在り方について考えさせられる訪問だった。

「コマツを訪問して」

1年　岩田純怜

1　コマツという企業、事業の概要

コマツは2015年度の時点でグループ会社141社（日本：16社、海外：125社）、連結従業員数47017人（そのうち57%は外国人）を有する大企業である。また、今年度に入ってからもアメリカの企業を買収したため、グループ会社数があと20社、従業員数も１万人ほど増えたという、設立から95周年を迎える今日でもさらに拡大を続けている。

コマツの主要商品は大きく分けてブルドーザーやショベルカーなどの建設機械、４mのタイヤを持つ超大型ダンプトラックなどの巨大な鉱山機械、自動車などの部品を作る産業機械の３つで、売上高で見ると、建設機械が88%、その他が12%となっており、その連結売上高は１兆8549億円、総資産は２兆6146億円にもなる。それらの商品を作る工場はアフリカやオーストラリアを除く世界各地に分布している。地域別売上高構成では８割が海外の国々であるので、工場を見ても、売上を見ても、前述の社員の構成を見てもグローバルな企業だということが分かる。

2　コマツのCSR活動について

コマツはCSR活動として何をすべきかということが、他の企業に比べて分かりやすい。コマツの商品は、生活インフラの整備、林業や鉱山で活躍し、それらが直接人々の生活を豊かにすることにつながるからだ。例えば高品質な建設機械を提供することで良質の工事の仕上げを実現させること、環境に優しい機械を開発することでCO2の削減をすることなどである。このように本業を通じて社会問題を解決し、社会の役に立つことがCSRであるとコマツは位置づけている。

しかし、何をすべきか分かりやすいと言っても、社会に溢れる多くの課題の中から取り組むべきものを絞り込むことは必要である。そこでコマツは、米国に本拠地を置くCSRの専門家「BSR社」の助言を得ながら優先課題を策定しているそうだ。決め方は、助言を基に「コマツの事業にとって」と「社会にとって」の二つの観点から見たとき、どちらの重要度も高い課題を選ぶ方法だ。

優先課題の一覧を見せてもらったが、販売活動の面、環境面、倫理面、人権、社員、地域社会など重要な点が網羅されていて、CSRへの意識の高さを感じた。

また、様々な国際基準に取り組みを照らし合わせ、確認することも怠っていなかった。2015年９月に国連で採択されたSDGsに関しては、「コマツだけで網羅しようとしなくてもよい目標であり、社会全体でそれぞれの企業の得意分野に的を絞って達成していきたい」とのことだった。コマツがどんな路線で取り組んでいくかはまだ決めていないそうなので、今後に期待したい。

コマツのCSR活動の中に、コマツらしいものの一つとして「環境への取り組み」がある。アダロ社が所有するインドネシアの石炭鉱山でコマツので製品が使われている。私は、コマツの製品が間接的に環境破壊につながることをしている可能性があるのではと考えていた。しかし、鉱山跡地での再生植林や、バイオ燃料の原料を栽培するなど、環境破壊の修復の分野でコマツは顧客を応援しており、ただ製品を売るだけでなく、現場の状況改善まで介入して顧客をサポートする活動に感心した。

また、「スマートコンストラクション」という図面のデータ化などのシステムを近年導入し、作業が効率的に、そして非熟練作業員でも操作できるようになった。これは、これまでの現場での作業の質を上げると同時に、建設業界の魅力度を増し、建設労働者の減少を食い止めることにつながる。その一石二鳥なシステムがさらに普及すれば業界全体の活性化にもなる。かつては機械製造の技術が重要だったが、これからは高いデータ化を行う技術が重要になっていくだろうということを感じた。

3　社会貢献活動について

コマツは、社会貢献活動を「本業以外のことで社会に貢献する活動」と位置づけている。実際に、コマツの事業とは関係のない、対人地雷処理活動や海外での溶接指導・研修生受入などの人材育成などを行っているそうだ。

本業と関係があるかないかでCSRと社会貢献活動を分けていて、日本では混同されやすいこの二つの認識がさっぱりしていてよいなと思った。本業の活動に繋がらない社会貢献活動のメリットをどう考えているのか伺うと、「メリットというより、本業を続ける上で大事なこと。本業しかせず、社会貢献をしないと事業を行う地域から締め出しをくらう。なのでビジネスに必要不可欠である」と仰っており、結局は社会貢献が本業につながるのだと感じた。

また、主要な活動である対人地雷処理活動は、内容は本業と関係ないのだが、コマツの重機で行われているそうだ。いただいた資料のクラスター弾処理の現地報告には、現地の方と慎重に作業する様子が載っていた。しかし、ここでも除去の際にはどうしても熟練の技術が必要であるそうだ。スマートコンストラクションのように、社会貢献活動の方でも機械操作の簡易化、効率的な運用方法が実現したら、さらに多くの人々の生活を守ることができるだろう。

「女性の活躍推進について」

2年　渡邉美月

コマツのCSR優先課題の一つに「ダイバーシティへの取り組み」という項目がある。

ダイバーシティとは、直訳すると「多様性」であり、「幅広く性質の異なるものが存在すること」「相違点」という意味がある。企業においてのダイバーシティとは、「多様な人材を活かす戦略」である。つまり、さまざまな違いを尊重して受け入れ、「違い」を積極的に活かすことにより、変化しつづけるビジネス環境や多様化する顧客ニーズに最も効果的に対応し、企業の優位性を創り上げることだ。

「違い」とは言うまでもなく、人間は人種や性別、年齢、身体障害の有無などの外見的な違いだけでなく、宗教や価値観、社会的背景、生き方、考え方、性格、態度、嗜好など、内面も皆違っている。それを「かくあるべし」と画一的なものを強要するのではなく、各自の個性を活かした能力を発揮できる風土を醸成していくことが求められている。それは、個人のみならず、企業にとっても多様性の受容は大きなプラスになる、という考え方をベースにしている。

海外企業では、このダイバーシティが重要視されている。それは、先ほど述べたように、雇用面だけでなく、多様化する消費者の嗜好や価値観をビジネスに結びつけ展開したからだ。グローバル化が進む現在にあって、世界中のどこでも女性の登用、外国人の活用など、ダイバーシティの推進に力を入れている現実がある。一方、これまでの日本はというと、経営者に多様性や異質性を活用する価値観が希薄であり、社会に多様性や個別性を前提とした考え方、システムが存在していない。また、何よりも「男は働き、女は家事をする」といった分業を基本とした日本古来の社会風土から、ダイバーシティという概念があまり形成されてこなかったのではないか。いずれにしても、ビジネス社会においては男性正社員を中心としたワークスタイルが一般的であったことは間違いない。その結果、現在の日本では仕事と生活を両立することが難しく、子育て支援も不十分で、ライフスタイル選択の多様性や、若年層の自立可能性も極めて低い状況にある。

しかし、いまや主要企業の利益の源泉は海外に大きく依存しており、グローバルに事業を展開している企業にとって、ダイバーシティの推進は必須の事項となってきている。また、日本国内に目を向けても、少子高齢化の進展が一段と進んでいる。外国人や女性・高齢者の活用など、多様な人材の活用を進めていくことは、企業戦略の重要課題として位置づけられてきているのだ。

さて、前置きが長くなったが、ここでコマツに話を戻そう。コマツはダイバーシティへの取り組みとして、外国人、高齢者、障害者、そして女性の活躍の推進事業を行っている。この中で、私に最も関係あ

るであろう「女性の活躍推進」をテーマに話をすすめていきたい。
先述した通り、日本では「女性は家事をするもの」とされてきた。それにより、男女平等が説かれている現在でも女性が活躍できる場が国外より圧倒的に少ない。管理的職業従事者に占める女性の割合が、アメリカ42.7%、フランス38.5%、ドイツ37.8%であるのに対し、日本は10.6%である。また、コマツの場合は女性の就業者12.0%、管理職2.3%と、さらに突出して少ない。コマツは重機を扱う企業ということもあり、女性社員が少ないというのもあるが、いずれにしてもこれは由々しき事態なのではないだろうか。
日本で女性の管理職が少ないことの理由として、「勤続年数が短く、管理職になるまでに退職する」女性が多いことが挙げられる。職場の慣行や雰囲気により男性は育児休業を取得することがなかなか難しく、男性の育児休業取得率（2012年度）は1.89%で、女性の83.6%には遠く及ばず、先進諸国の中でも際立って低い状況だ。結局、女性の多くは結婚や出産を理由に退職や休職せざるを得ない状況になり、勤続年数等の理由により管理職になるための条件を満たしていない女性が多いのだと言える。コマツのデータによると、平均出産年齢と係長クラス昇進がほぼ同じであり、これも理由の一つに挙げられるだろう。
これをどう解決するべきか。仕事の能力は男性ばかりが上ではない。出産後、多くの女性社員が時短勤務となり、評価されづらい。そこでコマツは、「時間より実績を重視する評価制度」をとることにより、これまでなされていなかった「能力通り」の処遇、評価をする方針を進めている。
国内では、2016年４月から「女性活躍推進法」が施行された。これは、その名の通り、働く女性の活躍を後押しするという法律だ。ここで行動計画に盛り込まれた取り組み内容の例として、「男性の子育て目的の休暇の取得促進」「子どもを育てる労働者が利用できる事業所内保育施設の設置及び運営」「短時間正社員制度の導入・定着」「若手に対する多様なロールモデル、多様なキャリアパス事例の紹介」「非正社員から正社員への転換制度の積極利用」など、さまざまな子育て支援や多様な働き方を実現するための取り組みが多数掲載されている。ただし、この法律は10年の時限立法である。この先10年間で、女性の働き方はどこまで変わるのか。働く女性の意識もまた変えるべき時がきているのかもしれない。

「コマツのCSR活動を聴いて」

２年　新海花音

私は株式会社小松製作所を訪れ，CSR室の宇佐見夏子さんに講義を受けた。

１　小松製作所（呼称:コマツ）の概要
＊事業内容
建設・鉱山機械，ユーティリティー（小型機械）林業機械，産業機械等の製作（製品例：ブルドーザー，油圧ショベル，ダンプトラック，プレス機など）
＊会社の規模（2015年度の実績）
連結子会社141社（日本16社　海外125社）、連結従業員数47017人（約57%は外国人）。
営業利益2085億円（売上高の内88%が建設機械・車両）販売・製造拠点は全世界に及ぶ。
＊最も大切なテーマ　『品質と信頼性』

２　CSRについて
◆CSRとは
Corporate Social Responsibilityの略語で、企業の社会への影響に対する責任のこと。社会や環境，倫理,人権等に配慮し、活動を行う（法令順守や労働協約の尊重は当たり前）。計画的にCSRを進める「過程」が重要。
日本企業においては「企業の持続的発展」が期待される。CSRは企業イメージ向上の慈善活動ではないことに注意。
ヨーロッパでは企業が存続に必要不可欠な社会の持続的発展に必要なコストを払い、未来への投資として活動を行うことがCSRにつながるとされる。アメリカでは企業は株主のものであるという考えが強い。株主への説明責任という観点からCSRは理解されている。このようにCSRのとらえ方は、国や地域によって異なる。
◆コマツにおけるCSRの考え方
基本方針は「本業を通じてCSR活動を行う」こと。それと同時に、コマツの強みを活かした社会貢献活動を行う。活動内容は様々な国際基準をもとに、「コマツの事業にとっての重要度」と「社会にとっての重要度」がどちらも高い課題を優先する。手当たり次第取り組むのではなく、取り組む課題の絞り込みを行っている。本業を通じた活動は、絞り込んだ優先課題をもとに【生活を豊かにする～社会が求める商品を提供する～】【人を育てる】【社会とともに発展する】という３つの重点分野を設定している。それに加えて、事業とは直接関係がなくても、その地域に対する「社会貢献活動」も行うべきである、と考えている。

３　講義について
今回の訪問では事前に質問を送り、それをもとに講義を行っていただいた。
（1）環境について
質問１：「御社の製品が環境破壊に関与する可能性が０ではない。このことに対し，何か対策をとっているか」
質問理由⇒コマツの製品が森林伐採や鉱山開発などを行う際に使用されるのは、性質上当然のことではある。しかし、その上で現在問題となっているそれらに対し、何か工夫していることがあるのか知りたかったため。
回答：そういった環境破壊に関わってくるのは、コマツではなく顧客自身。そのため、基本的には対策はとっていない。ただし、環境問題に対策をとる顧客を「支える」活動はしている。
例→インドネシアでのアダロ社の石炭鉱山でのサポート
インドネシアでは、鉱山事業者に対して鉱山跡地の修復を厳しく求められる。そのためこの会社は、鉱山の埋め戻し・再生植林を行っている。また、法律で機械の燃料のうち15%をバイオ燃料にすることが定められている。コマツは現地の販売代理店と共同で顧客をサポートしている。これらの作業に必要な機械を提供したり、燃料に対応した機械を開発したり、機械稼働のサポートをしたりしている。また、バイオ燃料の生産や品質管理にも関わっている。
質問２：「御社は、輸送・生産過程などでのＣＯ?の削減や、使用燃料の工夫など、環境へのマイナス要因を減らす取り組みを多くされている。その逆である、環境にプラスになるような事業を増やす取り組みは、現在考えているか」
質問理由⇒今以上にCSR活動の幅を広げるには、まだ手を付けていない分野に進むことが最も可能性が高いことなのではないかと考え、現在上記のような計画があるのか気になったため。
回答：コマツのCSR活動の基本は、問題解決とマイナス面を減らすこと。プラスになるような活動は本業の種類上難しい（ジャンルが違う）。全ての観点をふまえる活動を行うことは不可能に近い。
（2）CSRそのものについて
質問１：「CSRの認識は国や地域で異なるが、場所によって発信方法や力を入れる部分など、差をつくっていることはあるか」
質問理由⇒その場所に最適な方法でCSR活動を行うことで、社会への貢献度や活動内容がきちんと理解されやすくなるだろうと思ったから。
回答：本社が社外に情報発信をする際、国や地域によって発信方法を変えるようなことはない。ただし、各国の子会社自身による情報発信は各地に適した形で一任している。
質問３：「本業とはかかわりのない社会貢献活動を行うメリットは何か」
質問理由⇒利益と直接かかわりのない活動をすることにどんな意義を見出しているのか気になったから。
回答：利益になる事業活動と社会貢献活動は必ずしも無関係とは限らない。例えば、事業を行う地域に認めてもらえたり（過去には締め出しを受けた経験がある）、社員自身が社会に貢献したという達成感を得られたり、社員の背信行為抑止になったりする。慈善事業というよりはビジネスを行う上で必要な活動。

４　まとめ
訪問以前はCSRを達成するために、基準となる観点全てにのっとった活動をしなければならないと思っていた。しかし実際はそうではな

く、各企業が各々の強みを活かした活動をし、皆で協力して社会に貢献することが大切であることがよく分かった。逆に、例え熱心に活動を行っていたとしても、それが少数の企業だったら上手く機能しなかったり、効果が偏ってしまったりしてしまう可能性があると思う。つまり、全ての企業が積極的にCSR活動を行う必要があるといえると思う。そのためにまず、日本国内でCSRについての正しい理解を広めるべきだと思う。実際、私の周りにCSRについて詳しく知っている人はほとんどおらず、私自身、今回の訪問がなければ全く知らなかった。企業側はもちろんだが、顧客もCSRをきちんと理解し、重要なものとしてとらえるようになれば、その活動はより活発になると思う。その活動で企業と社会をより良いものにし、共に成長していくことが望ましいと考える。

「コマツを訪れて」

1年　元吉千遥

コマツは主に建設機械や鉱山機械、産業機械などを製造・販売している会社だ。機械の本体を作る工場は海外に34か所、日本に14か所あり、また従業員の約半数以上が外国人の従業員であるなど、日本を代表するグローバル企業の一つだ。

コマツは積極的にCSRに活動している会社である。コマツのCSR活動は本業を通じたもの、つまり土木建設事業を通じて社会の役に立つというものだ。例えば、高品質な建設機械を提供し、環境へ配慮した機械作りなどをしている。またコマツは本業を通じた活動とともに社会貢献活動にも取り組んでおり、全てのCSR活動や社会貢献活動から、社会にとっての重要度、コマツにとっての重要度といった観点から社外専門家の助言を得ながら、絞り込みを行っている。その絞り込まれた「コマツのCSR優先課題」は、コマツが厳しく選別したもので、コマツのCSR活動の目標である「生活を豊かにする」「人を育てる」「社会とともに発展する」という基準をクリアしているそうだ。

先述したように、コマツはグローバルに事業を展開する中、グローバルに活躍できる人材作りにも力を入れている。工場拠点の多くが海外にあるため、現地法人で現地の社員をトップ＝ナショナルトップにして、日本人の駐在員を置いている。日本人の駐在員はコマツ流のものづくりを伝え、ナショナルトップを支えることに徹している。ナショナルトップにはコマツウェイという、国や時代が変わっても変わらない価値観を理解した人が就くそうだ。世界各地で現地人を雇用すると、国の制度や法令等が異なったりするため、労働条件が異なったりし、それが人事上の課題になることもあるようだが、コマツはグローバルな人事方針という、それぞれの地域の歴史、文化を反映したものに基づき、各地域の事情を反映することでその地域にふさわしい人事制度を構築することで問題を解決しているそうだ。

また女性の人事では、全国の就業者に占める女性の比率が42.2％なのに対して、コマツは12.0％と高くはない。これはコマツの業種上やむを得ないところもあるが、コマツはこの問題を解決するため、2018年までに女性社員数を12％、2021年までに12.5％にすることを目標にし、女性が働きやすい職場づくりを進めているそうだ。これは、例えば無人運行システムなど、従来にはない新たな視点が不可欠になるビジネスに取り組む際、女性社員や外国人社員などの新しい視点を取り入れることを視野に入れたものであり、そのためにも女性社員が不可欠になっているのである。女性管理職数の割合は2018年に7.0％、2021年には10.0％まで引き上げることを目標にしているそうだ。これに関しては、女性社員を優遇することにつながるのではないのかという意見もあったが、これは今まで出来ていなかった「能力の評価」をすることであり、優遇ではないとの見解であった。それは長い時間をかけて仕事をすることが大切なのではなく、一定の時間でどれくらい成果を残したかを評価する方法を取り入れることにより、実現を目指すのだという。この実現のためには、本人だけでなく、上司の考えも変える必要があるため、研修なども積極的におこなっていると説明を受けた。

「コマツでの企業訪問を終えて」

1年　小澤響子

コマツは、主に建設や林業などに使う機械を製造するという事業を行っている。その業種を踏まえて、私には気になることが二つあった。企業訪問で懇切丁寧な回答をしていただいたのでそれについて書きたいと思う。

一つ目は女性社員の雇用についてだ。日本で男女平等が叫ばれ始めて久しいが、女性の働くことのできる時間を考えると、仕事の成果は男性よりも劣ると思われ、まだまだ平等な雇用の機会は実現されていないというのが現状である。私も女性としてとても関心のあることだが、コマツは2016年までに女性管理職を５％にする目標に掲げていた。日本全体での女性管理的業務従事者の少なさ、重機を取り扱うという仕事内容が原因で、この目標はまだ達成されていないそうだが、その目標を掲げた理由を教えてもらうことができた。女性に対し、これまでされてこなかった能力通りの処遇をするため、ということのほか、ビジネスに好影響をもたらすため、という理由も挙げられた。好影響とは、女性が働きやすい職場を作ることで、結果的に誰もが働きやすい職場になるということと、ビジネスに多様性を加わえることだという。従来からある優れた商品を作るというビジネスから、人工知能などを活用した新しいビジネスに進むに当たっては、様々な人による新しい視点が必要になってくる。これからは、女性だけでなく、外国人社員や幅広い分野の専門家の意見も聞いていくそうだ。私はこれらを聞いて、素晴らしいと思った。ただ漠然と、女性社員を増やすというのではなく、彼女たちに何を求めているのかをきちんと明らかにしたうえで、そこで求められた仕事ができる環境を整えていくというのは、非常に合理的であると感じた。

もう一つは社会貢献活動についてである。コマツの活動で最も目を引いたのは対人地雷処理活動だ。2003年に対人地雷除去機を開発して以来、アフガニスタン、カンボジア、アンゴラ、ラオスで活動を行ってきたという。地雷は一つを作るのに300円～1000円しかかからないが、一つを除去するには約10万円もかかるという。さらに作業は多くの工程と時間を要する。では、なぜそんな活動をするのか。その理由はCSR活動に対する考え方にあった。コマツでは、ビジネスを通して社会に貢献するCSR活動を「本業」とし、本業以外のことで社会に貢献するCSR活動を「社会貢献活動」として区別している。社会貢献活動は企業の責任であり、本業のみを行って社会貢献をしないと、事業を行う地域からやがて締め出されてしまうという。実際に、コマツの社会貢献活動は世界中で行われている。CSR活動とはこういうものなのだと改めて知ることができた。

企業訪問を通して、女性が仕事に就いて、男性と同じように企業に貢献することは可能であると学んだ。しかしそれには、企業側がまず女性にやってもらいたいことを提示し、そのための労働環境を整備していくことが必要であると思う。また、CSR活動において、最も大切なことは事業に関わる様々な人たちとの結びつきであると知った。ステークホルダーとの対話や協力企業へのCSR支援、工場がある地域への社会貢献活動などに誠実な態度で取り組むことによって得た信頼は、必ず会社の大きな財産となるからだ。

「コマツを訪問して」

1年　南出理夏子

東京巡見の２日目はコマツに伺った。そこでは、コマツの主要商品の紹介やコマツが行っている社会貢献活動の説明をうけた。沢山のコマツの取り組みのなかで私の印象に残ったものを中心にまとめていきたい。

まず始めに、コマツは1921年に設立された会社で、子会社は141社。そのうち、海外の企業は125社。連結従業員47,017人のうち57%は外国人である。また、2018年に海外の企業を買収し、さらに外国人従業員数は増加するとみられている。売り上げも81%が海外とグローバルな会社である。

コマツは主に建設機械、鉱山機械、産業機械を主力商品として扱っている。工場はアジアを中心とした世界各地にある。開発機能も併せ持つ『マザー工場』も海外５カ所に建っている。

コマツはCSR活動を自然に成り立つものだと認識している。コマツの建設・鉱山機械は世界の国の暮らしづくりに役立てている。すなわち、本業を通じて社会の役に立つことがCSRだということだ。

CSR活動を行うときに取り組む課題の絞り込みも行った。そのプロセスとは、社会課題を列挙し、コマツにとっての重要度を評価する。また、社会にとっての重要度も評価し、座標をプロットして優先課題を絞り込んだ。また、国際基準とも照らし合わせたそうだ。そして絞り込まれた課題は『商品・サービス・顧客』『環境』『社員』『人権』『倫理とガバナンス』『地域社会』の６つに分けられた。

日本の企業の女性管理職比率は他国と比べてきわめて少ない。コマツも同様であり、女性社員の割合も他産業と比べても少ない。そのため、女性の活躍を推進し、人工知能の開発など、従来のコマツ集団以外の女性社員や外国人社員の視点が不可欠であるとされる事業に積極的に取り組んでゆくという。また、３Ｋ（きつい・汚い・危険）を撲滅し、育児休業・在宅勤務などの制度を整え、誰でも働きやすい職場にしようとしている。

これまで女性社員を増やすため、出産後も働き続けられる環境づくりをしてきたが、これからは活躍し続けるための環境づくりも必要になってくる。また、女性管理職を増やそうというアプローチは女性の優遇ではなく、これまで出来ていなかった能力通りの処遇をするという視点で捉えている。それは評価の仕組みを時間よりも実績に重点を置く方向に変えることだという。

グローバルな会社に必要なグローバル人事は、外国人が海外ナショナルトップとして現地で経営を担当し、現地から後継者を選出、育成する。それを支えるように日本人駐在員がコマツ流のものづくり（コマツウェイ）を伝えるシステムになっている。

このように、コマツはCSR活動を実践するため、社会課題を自分たちの得意分野で解決しようとしている。また、女性の活躍推進のために、誰もが働きやすい職場づくりに尽力している。今回の企業訪問で学んだことをこれから学校などでも役に立てていきたいと思う。

「コマツを訪問して」

２年　加藤杏菜

今回の東京巡検では、２日目の午前に企業訪問をした。私が訪れたのは株式会社小松製作所、通称コマツ。コマツは、主に建設機械や鉱山機械、産業機械を製作している企業で、連結子会社141社のうち125社が海外の会社というグローバルな企業である。今回は、CSRに力を入れている企業として、コマツが実際に行なっているCSR活動について知ることができた。ここでは、コマツで学んだことから、グローバル時代に求められる企業活動と人材とは何か考える。

まず、グローバル時代に求められる企業活動とは何か。私は、影響を受ける地域社会に配慮して、責任ある事業運営または社会貢献活動を行うことであると考えた。それは、企業の社会的責任を果たすだけでなく、社会的操業許可の取得のためにも不可欠となっていることだ。

コマツでは、本業を通じて豊かな社会づくりに貢献し、会社の利益となる「事業活動」と、直接は利益にならないが本業以外のことで豊かな社会づくりに貢献する「社会貢献活動」を行なっている。

事前にCSRについて調べた際、利益を出した残りで社会貢献活動（寄付）をすることはCSRとして評価されないと知った。そこで、コマツの本業とは直接の繋がりがない社会貢献活動は、CSRとして評価されるのだろうかと疑問に感じた。質問しようとした時、ちょうどそれに対する説明があった。CSR室の宇佐見さんの話によると、本業しかせず、社会貢献をしないと、事業を行う地域から締め出されることもあるという。チリでは、鉱山ビジネスに関わる企業に対する市民デモが起こったそうだ。

確かに、コマツなどの土木・鉱山開発に関わる企業は、現地の環境に少なからず影響を与える。そのため、いかに現地とうまくやっていくか、いかに環境への影響を少なくするか、ということを配慮する必要がある。そしてそれは、はじめに述べた社会的責任を果たすこと、また社会的操業許可の取得にもつながる。事業を行う地域から締め出されてしまっては元も子もないため、社会貢献活動も事業活動に必要なものであり、全く無縁なものではない。

次に、グローバル時代に求められる人材とは何か。それはブリッジ人材だ。ブリッジ人材とは、その名の通り、日本と現地との架け橋となる人材である。日本と現地の間に立って円滑に業務を進められるよう指示をする。それには、現地の文化と日本の文化の両方を熟知し、その翻訳・調整ができる必要がある。グローバル化に伴いブリッジ人材の重要性はますます高まっているが、現在日本ではそのような人材が不足しているという。宇佐美さんのお話をうかがった後、ブリッジ人材の重要性がよくわかった。

SGH事業がめざすグローバル・リーダーとブリッジ人材には通じるものがあると思う。旭丘生が率先して、日本のグローバル化への架け橋となっていけたらよいのではないかと思う。

＜D　資生堂＞

「資生堂企業訪問からCSRを考える」

１年　山田真子

（１）はじめに

資生堂の企業訪問では、サスティナビリティ戦略部の方々、コンプライアンス部の方々からお話を伺った。はじめに企業の方たちから資生堂という会社のイメージを尋ねられた。私は「精神的にも経済的にも余裕のある、大人の女性をターゲットにした商品展開をしているイメージ」を強く抱いていた。そんなイメージの下、資生堂のバングラデシュ女性への支援活動を知り、「BOP層の厚い、バングラデシュという発展途上国を相手にどういった支援を行っているのか」という疑問を持ち、これが資生堂訪問の動機となった。

（２） 資生堂の考えるCSR

資生堂のCSRには二種ある。ベースとなるCSRは「基本的なCSR」と呼ばれ、リスクを最小にし、企業価値を守るためにある。その上に連なるのが「企業ならではのCSR」で、これは企業価値を高める目的だ。詳しく見ていくと、企業活動の目的のベースは企業の存続にあり、法令順守・コンプライアンスという企業の確実に果たすべき責任の上で、社会貢献や新価値、新市場の創造を行うということだ。資生堂のような、いわば大企業には当然のようにハイレベルなCSRが求められている。

（３） 動物実験廃止へ

現在、資生堂では動物実験の完全廃止を目指している。EUが2013年に動物実験を完全廃止したことや、厚生労働省が代替法に対応したことなどにより、世界的に動物実験は減少傾向にある。しかし、その動向に歯止めをかけているとも言えるのが中国だ。中国で販売される化粧品には動物実験が義務付けられている。資生堂の中国市場の売り上げは全体の15%にも上るため、容易に撤退することもできない。そのため、化粧品を世界中の市場に販売するためには二つの商品試験のルートが必要となるのだ。

このように、世界の動物実験に対する見解の違いが存在することが、企業にも多大なる影響を及ぼしている。動物実験廃止をアピールするか、否か、という問題だ。結局、動物実験の有無で、どちらが消費者に利益をもたらすのか定かでない。それゆえ、単純にアピールすることもできないのだ。今回、資生堂を訪問したメンバー内でも意見は割れた。どちらかといえば動物実験賛成派が多かったように思う。私自身も、商品には動物実験の過程を踏んでいてほしいというのが本音だ。動物実験のもたらす安心感は試験管内の実験には代えがたいものがある。小規模なメンバー内でも意見が異なるのであるから、世界で見解に違いが出るのも当然だと身をもって感じた。

（４） バングラデシュ女性の活動支援

2011年度より推進されている資生堂のバングラデシュ女性のエンパワーメント活動は、農村部の女性を対象に社会的地位の向上や活躍を支援する活動だ。「化粧のちから」を活かして、人々の幸せの実現に貢献している。具体的には、ハラル認証スキンケア製品を販売し、また現地の女性が販売員を務める。

・現地女性に与えた影響

もともと、バングラデシュでは洗顔、クリーム保湿、といった簡単なスキンケアが一般的だった。既に、スキンケア用品は存在していたのである。では、なぜわざわざ資生堂の商品を推奨したのか。理由には、現地製品は粗悪品が多いことや価格が不安定であることがあげられる。そこで、資生堂が高品質で安定した価格の商品を販売し、それと同時に洗顔の必要性や効果的な洗顔方法を伝えた。その結果、女性たちは安心して商品を購入、使用することができ、さらに自身に対する自信を高めることにつながった。実際、現地の女性256名を対象にした調査では、「自分は衛生・健康・栄養に関する知識を持っている」と思う人数が活動前は99名だったのに対し、活動後は180名と、大幅に増加している。また「肌・生活面での自信を持つ」という人数も66名から130名に増加している。

また、現地の雇用増加にも一役買っている。現地の女性を採用・トレーニングし、ワークショップを実施する。ワークショップでは主に紙芝居を利用し、商品アピールをする。高品質な化粧品を使用し、その良さを伝えるという勤めを果たすことで女性たちに日々の充実感を与えているようだった。

・商品

バングラデシュで販売している商品はハラル認証を取得している。これはバングラデシュの人口の89.7%がイスラム教徒であるが故だ。商品は日焼け止めを主としたスキンケア製品で、紫外線の強いバングラデシュでは需要は高い。価格の面から見ると、資生堂の商品は現地のBOP女性にとって少々高価であるようだが、それでも良品を使用することが望まれたという。資生堂の商品がいかに現地の女性たちに好評だったのかが伺える。

・企業利益

資生堂にもたらされた最も大きな利益は「化粧のちからの再認識」と「新たな技術アイディアが生み出されたこと」だという。特に後者は、水や汗を感知すると紫外線防御膜が強くなるという革新的独自技術に代表される。これは、私たちの身近な商品にも活用されている技術だ。これまで触れてこなかった価値観に触れたことで、今までにない新たな技術の開発に至ったのである。立派な企業利益といえる。

一方、このビジネス自体は赤字事業というのが現実だ。しかし、力ずくで黒字にもっていくことはせず、他の既存のビジネスとの相乗効果を狙っている。

・支援に至るまでの道

BOP層相手の、利益の見込みの少ない事業に手を出すということから、社内での批判も相次いだ。しかし、粘り強く活動し、ついにはBCtA（ビジネス行動要請）に認証された。国際的に活動が認められたことを機に、社内でもこの事業の意味が認められ始めた。

また、なぜバングラデシュを数ある発展途上国の中から支援相手国に選定したのかだが、その選択の決定には良きパートナーの存在があった。支援活動を展開すべく、各国のNGOをあたり、事業に協力してくれるパートナーを探したところ、バングラデシュは親日国であることも影響してか、良きパートナーと手を組むことができたという。現地との友好な関係も事業展開にあたり重要な点だと感じた。

（5） 企業訪問を通して

CSRという今までに持ち得なかった視点から、企業の社会的責任を考えることができた。企業が自信を持って押し進めている活動でも、単純に消費者へ良いものだと伝えられるわけではないことを思い知り、社会貢献の難しさを考えさせられた。消費者の価値観、また、消費者の住む国の価値観は多種多様であり、どの活動も一概には良いものとは言い難いのである。その様々な価値観を踏まえたうえで、自社の活動に責任、覚悟を持ち、挑戦する資生堂の姿勢に、私は感銘を受けた。

「東京巡検　企業訪問レポート　資生堂」

2年　坂野水咲

私が資生堂の企業訪問を希望したのは、「バングラデシュの女性を化粧品の力で支援する」という、自らの強みを活かしたCSR活動を行っていたことに興味をひかれたからだ。また、訪問することが確定してから知ったのだが、資生堂は業界一早く動物実験を廃止した企業でもある。今回の訪問では大きく分けて、動物実験の廃止とバングラデシュでの活動の二つについて質問し、お話を伺うことができた。

1　動物実験の廃止について

2009年から、NPO法人JAVAは資生堂に対し「化粧品における動物実験の廃止」を求める署名運動を展開した。更に2013年３月には、EUにおいて動物実験を用いて開発された化粧品の販売が全面禁止となった。これは少子高齢化が進行する中、ペットの価値の上昇や倫理観の変化などが進み、動物愛護精神が高まったことで世界（先進国）が廃止の方向をとったことの表れでもある。

まず、製品の安全性確保の制度について見ると、医薬部外品の安全は国が担保しているので動物実験をしなくてはならない。しかし化粧品はメーカーが自社の責任において安全を担保するので、他に安全な方法を確立できたのなら動物実験をやめることは可能だ。資生堂は1980年代初めから代替法の開発に取り組んできた。これはかなり早いスタートだ。そしてJAVAの活動に徐々に耳を傾け始め、代表者をくわえて円卓会議を行うようになり、2013年４月から開発に着手する化粧品・医薬部外品において、動物実験を廃止した。直接の原因となったのはやはりEUの動きだが、2010年から行われていた円卓会議の影響や、化粧品業界でリーダーシップをとることでのイメージ面でのメリットを考えたこともあるだろう。

この問題において一つ疑問に思ったのが、そもそも動物実験を行うことがCSRになるのか、ということだ。動物実験は企業のためというよりもむしろ、私たち消費者の安全をよりしっかり確保するためのものである。資生堂からしてみても「お客様に安全な商品を提供する」という企業理念のために行ってきたことを否定されたようなものだ。これに対してJAVAの主張は、動物実験の廃止は「道徳的、倫理的に考えて、“正しい事”であるから行う」というCSRの原理に基づくものだとなっている。

正直なところ、私は動物実験の廃止が本当に正しいことなのかわからない。確かに残酷なことだが、医薬部外品に義務付けられていることからも分かるように、私たち人間の安全を守るためには非常に役に立つものである。代替法ではまだカバーしきれない部分もあるため、開発の幅が狭くなることを理由に現場からはむしろ嫌がられたそうだ。

今回お話を聞いていて、ふと疑問に思い質問させていただいたことがある。資生堂が動物実験を廃止したことを、私は全く知らなかった。周りにも知っている人はいなかった。これだけの大きな決断をしたのに、なぜそれを前面に押し出してアピールしないのか不思議に思って質問させていただいたところ、まさに前述のような複雑な現実が見えてきた。倫理的には英断だが、「動物実験をしていない」ということを「正しい倫理観を持っている」とプラスに捉える人と、逆に「製品に不安が残る」とマイナスに捉える人がいる。また、資生堂は医薬部外品の割合が多い企業なので、そのイメージが定着してしまうと売り上げが落ちてしまうというのだ。私自身、動物実験をしていない商品ですと言って渡されたら買うかどうかわからない。やはりより安全なものを使いたいのだ。代替法が完全に確立されればいいが、まだその段階に至っていないので開発そのものに制限がかかっていることもあるようで、正直もったいないと思う。研究者だってもどかしいだろうと思う。

さらに、中国では政府の方針に従って動物実験を続けている、という理由もある。このために「完全に廃止した」とは言えないのが現状である。この点に関しては、私は資生堂が誠実な会社だという印象を受けた。

このように様々な問題は依然あるものの、資生堂の決断は勇気ある行動だったと思う。前例がなかったことに加え、必ずしもプラスのほうが大きくなったとは言えないのに、企業理念を貫いて業界に新しい風を吹き込んだからだ。廃止に至るまでのお話を聞いていると、消費者の要望に応えようという真摯な姿勢が伝わってきて、大企業としての務めを意識していると感じた。

2　バングラデシュでの活動について

冒頭に述べたように、私が惹かれたのはこの活動の資生堂らしい着眼点だった。詳しい内容については省略するが、発展が始まりかけているバングラデシュの貧しい女性たちに正しい洗顔方法を教え、更に

彼女たちを販売員として雇用を作る。美の追求と、生活の支援を両方から実践する面白い方法だと思う。

質問させていただいたことで私が一番気になっていたのは、「2015年のバングラデシュでの女性支援についての報告書では、化粧品事業で赤字が大きくなっていますが、今後の見通しはどのようなものですか」というものだ。事前にいただいた回答では、「この活動そのもので長期的に黒字ビジネスにするか、他の既存ビジネスと組み合わせて考えるか検討中です」ということだった。私は、これは洗顔クリームを売るビジネスではなく、広報活動の一環であり、赤字は広告費ととらえているのではないか、と考えていた。当日もう一度このことを詳しく伺ったところ、やはり金銭面での黒字はほとんど不可能と考えているとのことだった。それよりも会社の信頼・社会的価値を上げているという意味でのビジネスととらえているそうで、考え方としては自分の予想はあっていたと思う。

さらにこの活動による資生堂側のメリットとして、研究員が現地に滞在することにより新しい技術の開発が行われたこと（例えばANESSAに応用されている汗を味方にする紫外線防御技術。身近な商品にも応用されていることに少し驚いた）や、現地の知見を得ることが今後のマーケティングにつながること、などが挙げられていて、私はこの考え方を素敵だと思った。お金や評判だけが利益なのではなく、技術や知識を得られることまで利益としてカウントするところに尊敬の念を感じた。

ここでも広報活動についての議論がなされた。資生堂はせっかくこんなに良い活動をしているのに知っている人は少ないし、実際のところあまり目に付くところでアピールしていないと、ほとんどの生徒が感じていた。これに関しては、ではどうすればもっと多くの人に知ってもらえるのかという意見を出し合ったが、やはりSNSの活動やCM、売り場での宣伝などが効果的なのでは、という意見が多かった。中には、人知れず善行を積んでいるというところが良いので、このままでもいいのではないかという生徒もいた。しかし、私はもっと知られるべきだと思う。そしてそれは何も企業側の努力だけにとどまらないのではないかとも思った。知らなかったとはいえ、少しホームページを見るだけできちんとわかるようになっている。せめて今回たくさんお話を伺わせていただいたからには、自分の周りの人だけにでも、この活動のことを広めていこうと思う。

この訪問で資生堂という企業に対する印象が、大きく変わった。今までは少し高級な化粧品の会社としか思っていなかったが、今では社会的な務めも果たしている尊敬すべき企業だと思っている。私が知らないだけで、他にもたくさんの企業がそうなのだということにも気づいた。それだけでも、この訪問は意義のあるものになったと思う。

「企業訪問：資生堂にて」

2年 芹澤 優希

資生堂は企業理念としてOur mission,Our values,Our wayを掲げており、特に美しい生活文化の創造を実現していくことで、持続的な企業価値向上をめざしている。法令を守るといった基本的なCSRは言わずもがな、新価値・新市場の創造やプラスアルファとしてのCSR活動（社会貢献活動）を積極的に行っている。社会貢献活動はサステナブルなものであると同時に、会社それぞれが持つ強みを活かしていかなければいけないことがわかった。

今回企業訪問するにあたって、私は動物実験の廃止を中心に資生堂のCSRを考えた。資生堂をはじめとする化粧品会社が動物実験を行うのは、それが必ずしも、企業の無責任、強欲、無関心などによって意図的に起きている問題ではなく、むしろ、資生堂側は「安全性が第一」という顧客を守る目的で、動物実験を含む高度な製品開発をおこなってきた。しかしそこへ動物愛護団体であるJAVAが2009年に「ウサギを救え！化粧品の動物実験反対キャンペーン」を立ち上げ、当社に対して署名運動を展開するといったことが起きたのだ。CSRに基づいて「お客様のために」と考えて実施してきたことをお客様の方からNOと突きつけられたことに対して、会社内部では当時どのようにこの運動を受け止めたのか私は疑問に感じた。このことについて質問してみると、化粧品業界を代表する企業を動かせば業界全体が動くとの考えのもと、署名運動の意義は理解していたそうだ。評判リスクであると捉える一方、「安全性」と「動物愛護」の両立のため、動物実験代替法開発の加速化が必要になったという。当時はまだすべての試験分野での代替法は確立していなかったため、企業としては世間的に認められていないものを考えていくこと、動物実験廃止により安全性が確保できないものの撤退（製品の幅の縮小）を抑えるために、より代替法を進化していくことが必要になったということがわかった。2010年３月に資生堂が「化粧品における動物実験廃止を目指す」宣言をしたのだが、他の化粧品会社が動物実験廃止には消極的だった中で、当社が先陣を切って廃止に踏み切ることができたのはなぜか質問したところ、EU指令など化粧品における動物実験廃止の世界の趨勢からくるグローバル化の波にのらないと今後やっていけないという危機感や、ペットの家族化やエシカル消費といった社会状況の変化を捉え、動物実験廃止に踏み切ることがトップ企業の使命であり、社会的責任であると考えたからだそうだ。また株主総会での毎回の動物愛護団体の演説も踏み切りの１つの要因であろう。

動物実験を廃止にしたことで生じたメリット、デメリットには何があったのだろうか。メリットとしては、動物実験廃止の世界の趨勢に早く取り組んだことによる先行者利益と、企業としての社会的責任を果たしたという賛同の声があること。デメリットとしては、まず新規成分開発など資生堂が最も得意とする研究開発力に自ら制約をかけたこと。具体的なマイナスの影響としては、新成分では動物実験が必要となる今まで強みにしていた医薬部外品の「薬用」とついた商品が出しにくくなったということだ。そして賛同の声を当社の愛用者につなげる手立てを開発できていないこと。具体的な手立てはしているのかと質問してみたところ、動物実験廃止は好意的に受け止める者が大半である一方で安全性を危惧する者もいるそうで、また中国では実験を続行しているため完全なる廃止とはいえないのが現状だそうだ。さらには「実験をやめました！」に対しては「今までやっていたのか！」と突っ込まれて変な印象がついてしまう恐れもあり、大々的に公言できない、とても敏感な問題であることがわかった。このようなことから動物実験廃止は競争力の飛躍的な向上にはつながっていないことがわかった。

資生堂が成した戦略的CSRである動物実験の廃止は、プラスとマイナスの両面を持ち、とても複雑な問題であることがわかった。長いスパンで取り組まれている動物実験代替法の開発や他の化粧品会社の取り組み、そして世界の趨勢については今後の動向を日々チェックしていきたいと思う。

「資生堂を訪問して」

１年　玉田洋一朗

「営利を目的として、継続的に生産・販売・サービスなどの経済活動を営む組織またはその事業」。これが国語辞典における『企業』の定義だが、グローバル化が進むこの国際社会においては、単に営利を追求するだけでは企業としての社会的責任を負えていないことになるのだということを今回痛感した。

●資生堂のCSR

資生堂のCSR（Corporate Social Responsibility）は、2004年９月、国連グローバルコンパクトへの参加を表明したことから始まった。とりわけBCtAに認証された資生堂のCSRは、バングラデシュでハラル認証を取得した化粧品の販売を展開することで、農村部の女性たちの雇用を生み出し、生活習慣の改善も支援するというものだ。この計画の黎明期には、活動拠点としてインドネシアも候補に挙げられたが、当時、バングラデシュはインドネシアより発展が遅れており、まさにフロンティアだったため、バングラデシュでCSR活動を行うと決定したという。

バングラデシュの農村部には、上下水道や電気、ガスなどが通っていない地域が多く、衛生状態は極めて悪かった。それ故に皆生きることに必死になって、洗顔やクリームの使用などの基本的な美容ケアをおろそかにしている人々が多かった。そのような人々との生活の経験から、洗顔などの啓発運動を始め、男性中心社会のバングラデシュで、女性の活躍を後押しすることになった。また、ハラル認証取得の洗顔セットも展開して、現地の雇用も生んでいる。これらの活動は収

支こそ赤字が続いているが、汗によって落ちてしまうのでなく、よりしっかりと肌に定着する日焼け止め『ANESSA』の開発にもつながったり、将来バングラデシュが豊かな国になったとき、一大マーケットとして収益の柱にできるような土台も構築できているという点で、今の資生堂のイメージを向上させるだけでなく、将来の無限の可能性を広げる活動となっている。

●動物実験の完全撤廃

資生堂は80年代初頭から、将来のニーズや動物実験への規制を想定し、動物実験完全撤廃へむけて動き出していた。特に上からの命令に従ったというわけでもなく、研究者たちから始まり、動物実験完全撤廃への会社全体の機運が高まっていった。しかし、動物実験完全撤廃への道のりは険しかった。今日、EU管内では動物実験を実施した商品の販売は許可されないが、中国では動物実験を実施していない商品は販売できない。これは、動物実験の代替法の信用性が中国に浸透していないことが大きな理由として挙げられる。資生堂では、動物実験の代替法として、細胞シートなど、学会でも認められている臨床技術を使っているため問題はない。しかし、動物実験より信憑性が低いという主張は、中国だけでなく、日本国内をはじめ、一部の国や地域からも聞こえてくる。もっとも、それらは時の流れによって淘汰されるのではないのだろうか。

バングラデシュでの女性支援活動や動物実験の完全撤廃など、会社が一丸となってプロジェクトを進めるという雰囲気は、なにかまだ見ぬ素晴らしい未来を創り出すものではないだろうか。バングラデシュでの活動は、きっと将来のバングラデシュの未来を良いものへと導くだろう。

「資生堂企業訪問レポート」

1年　花山 愛歩

今回の東京巡検で、私は資生堂さんに企業訪問させていただきました。そして、主にサステナビリティ戦略部の方々やCSR活動に携わる方々にお話を伺う中で、利益を追い求めるだけではない、新しい企業の姿勢や体制を学ぶことができました。

私は「企業」というと利益の追求を第一に考えていると思っていて、それは当たり前のことだと捉えていました。しかし、今回資生堂さんでお話を伺う中で、社員の方がおっしゃっていた「CSRのプロジェクトはお金としての利益を追求するのは難しい。それよりもそのプロジェクトを行なっているということで生まれる企業の価値やお客様への信頼が私たちの利益になっている」という考え方を知り、今までの自分の知らなかった、新しい企業の在り方を教えていただいたと感じました。

私は今回、資生堂さんに対する質問をさせていただきましたが、どの回答からも感じたのは、企業として目指す姿がとてもはっきりしているということでした。

「美しさを通じて100年先まで幸せに」という大きな理念のもとに、近い将来の目標が掲げられていて、CSRの活動もその理念を実行するひとつの方法なんだなと感じました。

CSRの活動の中のバングラデシュの女性支援も、単に「化粧品を売る」という商売だけではなく、現地の女性の地位向上や美容の知識を広めるという、いわばビジネスとしてはやらなくても良いプロジェクトもあり、単なる利益だけを考えたら無駄とも思える取り組みなのかもしれません。しかし、資生堂さんのお話を伺うと、トップ企業としての誇りと責任があるからこそ、目先の利益だけにとらわれるのではなく、まさに「10年、100年先の会社への投資」をしているという印象を受けました。今は企業がバングラデシュの女性たちに技術や知識を与えるほうが大きな比重になっているかもしれませんが、バングラデシュはこれから確実に成長していく国だと思います。だからこそ、今蒔いた種が10年後や20年後に、資生堂という企業に利益として返ってくるかもしれない。そういう意味でCSR活動は単なるボランティアでも商売でもない、新しいビジネスの形なんだなと思いました。

近年、消費者がモノを買うとき、選ぶ基準としては安さや安全性だけでなく、手に届くまでの過程や販売している企業の取り組みに納得しているかどうかということが影響しているそうです。そのような消費者の声やグローバル化の波をしっかりと見るのも、今後のグローバル企業にはとても重要なことだと思いました。そういう意味でも資生堂さんのバングラデシュ女性への支援活動は、お金としての利益以上の価値を生み出していて、それはいままでのビジネスのようにすぐに完結するものではなく、これからももっともっと企業や社会に利益を生み出していけると思いました。

まだまだこのCSRという活動は一般には知られていませんが、活動をしている企業はもっとそれをアピールしてもいいのではないかと思います。私も今回こうして企業訪問をさせていただいて資生堂さんのCSR活動について調べて、こんなことをしていたんだと知りました。とても新しくて良いビジネスの形だと思うし、それを行なっている資生堂さんはやはりほかの化粧品企業よりも特別なイメージを持った企業になりました。そういう消費者をもっと増やすこともCSR活動から生み出される利益だと思いました。

「東京巡検～資生堂を訪問して～」

1年　佐々木もなみ

1　はじめに

今回資生堂を訪問するにあたって、私はインターネットで資生堂の活動について調べた。今回のように、企業訪問のための事前課題がなければ知らなかったことがたくさんあるように思った。

2　バングラデシュの女性支援について

バングラデシュという国は知っていたが、資生堂がそこで女性の支援をしていることを知らなかった。企業というのは「利益」を求めて活動する団体であるので、利益どころか赤字である活動をするイメージがなかった。そして、発展途上国でまだまだ貧しい人が多いバングラデシュで、どのような支援をしているのか、ホームページに載っていること以外でももっと知りたいと思いながら今回の企業訪問に臨んだ。

日本では「しっかりとした商品」が売られているのは当たり前である。封が切られていないのは当然だし、成分表示もきちんと行われている。同じ商品なのに値段が3倍も4倍も違うということはまずない。しかし、バングラデシュではそれが当たり前ではなかったらしい。そこで、化粧品の会社である資生堂が「しっかりとした商品」を適切な価格で売り、さらに、現地女性が求めていた「美」のために、洗顔の仕方など、正しいスキンケアの方法を教えるなどをしている。バ
ングラデシュでは未だ男尊女卑の考え方が残っていて、女性が自信を持つことができていなかった。しかし、啓発活動に参加したり、販売員として商品を売り、お金を稼ぐことで自信をつけ、女性だけでなく、家庭や社会的な支援にもつながっていると感じた。

3　動物実験について

化粧品を消費者に信頼して使ってもらうための安全性を確保するには、ヒトに近い動物で、動物実験をしなければならない。これは消費者目線でいえば、「安心して使用できる」ことであり、企業目線でいえば、「信頼してもらうための手っ取り早いやり方」であると思った。しかし、化粧品というのはいわゆる贅沢品で、なくても我慢できるものである。そのようなものを作るために、目が見えなくなったり、皮膚が炎症を起こしたりしている動物がいる。それを踏まえて考えてみると、動物の犠牲の上に作られた化粧品は本当に必要なのか。と考えてしまった。そして、このように考える人が多くいたからこそ、動物実験廃止への動きが強まったということがわかった。しかし、いままでの化粧品は動物実験で安全性が確保されていたわけで、それをやめてしまうと次はどう安全性が証明されるのかという話になり、化粧品会社である資生堂はその板挟みになってしまった。国内トップであるからこその重圧は、とても大きかったように思えた。しかし、率先して動物実験廃止に向けて動いた資生堂だからこそ、今も国内トップ、そして世界にも通用する企業なのだと思った。

4　まとめ

はじめCSRというのは「企業の社会的責任」で、利益を求めてはいけないものだと思っていた。しかし、今回の企業訪問を通じて、CSR

とは何かということを知り、誤っていた認識を改めることができてよかったと思う。企業のやっているCSRは、イオンのようにCM　で「木を植えています」というように宣伝されないと知らないものばかりなので、これからちょっとした時にインターネットなどで調べてみようと思った。

「グローバル企業の成長戦略とCSR」

１年　工藤文那

今回の企業訪問で、「株式会社資生堂」のグローバル企業としての取り組みについて学ぶことができました。私が学んだ企業のCSR活動について、三つの観点から述べさせていただきます。

まず、企業のグローバル展開における苦労や困難を知ることができました。世界各国の国と地域に事業展開をする上で、化粧に対する異なる文化や価値観、ニーズに合わせて商品を開発し、市場に供給するには、多大な時間とコストを要したと考えられます。グローバル展開という新しいチャレンジをするにあたって、その中に存在するリスクを考えつつも恐れない「攻め」の姿勢は、グローバル企業として必要不可欠なものであることが分かりました。また、資生堂は企業使命「美しい生活文化の創造」や企業理念「Our　mission ,Our values ,Our way」を忠実に実行していると感じました。自社の強みを生かし、自社だからこそできることを実現させる姿勢は、日本国内のみならず、世界各国の企業と共有すべきものなのではないでしょうか。資生堂を中心に、まずは日本国内の企業から、いずれは世界各国の企業にこの意識が広がることで、社会課題の解決やエンパワーメント活動が拡大されることを願っています。

私をはじめ、今回資生堂を訪問した高校生の多くは、動物実験の廃止と、それが企業に対して、私たち消費者に対して、どのような影響があるのか知りませんでした。しかし、今回の企業訪問を通して、それらに対する理解を深めることができました。私個人は、動物実験に対する知識・関心があまりなく、それがどのような意味を持つか全く知りませんでした。しかし、今回のお話を伺って、動物実験を廃止することに対する社会の声や、メリット・デメリットを知りました。中でも私が一番気になったのが、代替法の開発です。安全性保証と動物愛護の両立を成し遂げるためには、それぞれの面において様々な課題があったと思います。また、グローバル企業として、世界各国で考え方が異なる中、OECDテストガイドラインを取得した点で相当な時間とコストがかかったはずです。売り上げの減少など、デメリットも多い中、企業としての社会的責任を果たした資生堂は、日本のグローバル企業のパイオニアといっても過言ではないと感じました。

私が今回の企業訪問にあたって一番力を入れて調査したのが、「バングラデシュ女性の活動支援に向けた取り組み」です。動物実験の廃止と同じように、資生堂の取り組みとして、私は知らなかった事項です。この活動に、私は強く賛同の意を唱えます。前述したように、自社の強みを生かしているという点で、この活動は素晴らしいものであると感じます。現地では女性のエンパワーメントに加えて農村社会の生活習慣知識の変容が、企業には紫外線防止効果技術や社会的意義の認知が大きな利益となりました。挑戦には並大抵ではない勇気と覚悟が必要だと思いますが、このような活動が世界中に広がれば、企業も世界もより良くなると私は考えます。

今回の企業訪問で、資生堂のグローバル企業としての役割を知った私は、この役割を、活動を、もっと世界に向けて発信しても良いのではないかと考えました。もちろん、「企業の利益と結び付けようとしない姿勢」を評価する人も多くいます。しかし、私は利益云々よりも、世界がより良くなることの方が大切だと思います。世界に向けて活動内容を発信することで、その活動に賛同する人々が増えて、より良いグローバル社会を築くことができるのではないでしょうか。

企業訪問するにあたり、お世話になった株式会社資生堂の皆様に深く感謝いたします。貴重なお話をしていただき、誠にありがとうございました。企業のグローバル展開による、より良いグローバル社会の発展を心より願っております。

「資生堂のサステナビリティ、動物実験についての取り組みのお話をきいて」

１年　廣澤玲萌

私は、資生堂という会社は、所得中上位層だけをターゲットにした会社だというイメージをこれまで持っていた。しかし、今回実際に会社を訪問させていただき、詳しいお話を伺ったことで、知らなかった日本を代表する化粧品会社の理念や社会貢献活動、企業ブランド向上の努力について知ることができた。

１　サステナビリティ事業―バングラデシュでの女性支援

資生堂のサステナビリティ活動であるバングラデシュ農村部の女性支援では、女性の社会地位向上や活躍の支援が目的となっている。開発にあたっては、現地に社員が住み込みで聞きこみやワークショップなどの活動をし、資生堂初となるハラル認証対応の製品を展開するなど、現地の声を重視した事業展開が特徴である。

バングラデシュでは、担当社員の方が３ヶ月、寝食を共にしながら生活し、悩みに耳を傾けながら開発準備をしたという。実際に行った社員の方も、言葉や生活文化の違いを持つ人とのコミュニケーションに苦労したとおっしゃっていた。

この事業では、バングラデシュの女性たちだけでなく、資生堂にも大きなメリットがあった。まず、バングラデシュの女性たちにとってのメリットは、「肌、生活面での自信を獲得した」「ワークショップ、実演販売などにより、衛生、健康、栄養に関する知識が大きく向上した」など、大きな成果の得られた事業であることがわかる。そして、資生堂のメリットは、「革新的な紫外線防御技術の開発と製品化」「ハラル認証対応や低コスト製品の生産ノウハウが得られたこと」という。日焼け止め「アネッサ」はバングラデシュの気候に勝つために開発された、汗で強くなる日焼け止め技術を製品化したものであり、このリニューアル後の売上は２倍ほどになったそうだ。サステナビリティ活動が会社の利益にこんなにはっきりと結びついていたことにとても驚いた。

２　動物実験廃止への取り組み

資生堂は、日本企業としてはとても早くから動物実験廃止について検討と努力を重ね、2011年３月には自社での新商品の動物実験を廃止した。これは、長きにわたる「安全性保証」と「動物愛護」の両立をめざした研究の成果である。代替法の発案にはとても大きな努力が必要だったはずだ。どうしてそこまで力を注いだのだろう。

ひとつには、EUが動物実験に反対し、動物実験を行っている化粧品を輸入しないと決めたことにより、動物実験をしないことが必要となった。次に、日本のトップメーカーとしての使命感があったという。トップである資生堂が先陣を切れば、他もそれを目指すようになる、というわけである。もちろん動物実験のほうが低コストであり、代替法の開発には大きな労力が必要だが、それを成し遂げてしまうところにトップ企業の強さを感じた。

今回の訪問で、トップに立ち続ける企業というのはやはり、人を大切にできる企業であるということを感じた。こうした取り組みが、どんどん世界へ、広がっていくといいなというのが訪問を終えた私の考えだ。

「資生堂を訪問して」

１年　大道夏希

CSR活動に熱心に取り組んでいる資生堂の理念は　Our Mission→存在意義，Our Values→価値観，Our Way→行動基準 だそうです。そのなかのOur Way の中にCSR活動はあり、基本的なCSR、企業ならではCSRの両面から考えた活動をしています。

2013年に、資生堂が国内では完全廃止とした動物実験ですが、動物愛護団体に抗議される前から社内で廃止に向けた取り組みはあったようです。しかし、刺激や感覚刺激、目への刺激と、安全性が心配されました。そこで人工皮膚などを開発し、安全性をクリアしていったようです。しかし、医薬部外品の開発や中国で販売する化粧品には動物実験は必要だそうで、資生堂さんが完全に動物実験をやっていない

ということではないようです。また、安全性と動物愛護、研究開発と市場の両立が難しく、新たな商品や成分の開発が以前より難しくなっています。

資生堂の大きなCSR活動はバングラデシュの女性への支援で、JICAからの支援も受けてやっています。まず、この活動は候補国を選ぶことから始まりました。インドやフィリピンなども候補にあったそうですが、カーストなどの問題からバングラデシュに決まったそうです。国が決まったら、ホームステイから始まりました。そこで、人や国の特徴をみていき、「Les DIVAS 」というスキンケア商品を販売することに決めました。ここからは、現地の女性を販売員として雇用するために指導し、紙芝居などのワークショップをひらき、衛生・健康・栄養に関する知識を向上させていきました。イスラム圏だからある苦労もあったようです。

今でこそ賞賛されているこのCSR活動ですが、最初は社内の反対の声も多かったそうです。しかし、それでも活動を続け、BCtAに選ばれてからは味方が増えたそうです。

一方で、資生堂の素晴らしいところは、このCSR活動を通して、自分の利益になることを開発しているところです。日本より暑く、汗の多く出るバングラデシュで、どうすれば汗を味方につける化粧品を作るか研究開発したそうです。その甲斐あって、「ANESSA」などの水や汗がつくとより紫外線を防ぐ効果を発揮するという製品を作り上げ、前年より売上数を10倍ほどものばしました。

このように、Our Way を達成すべく、CSR活動でバングラデシュの女性の社会進出を促進させたり、粗悪品から守ったり、それを生かして自社製品を開発したりしているのです。資生堂はこのような活動を通じ、社会に大きく貢献している会社だと改めて感じました。バングラデシュの女性に新たな風を送ったことで、将来的により大きな市場を獲得できるのだと思います。

「資生堂を訪問して」

1年　小川コナ

資生堂という会社には、大企業でかつ華やかなイメージを抱いていました。しかし、それとは別の面で、発展途上国であるバングラデシュで女性の雇用機会の創出と生活改善に向けた啓発活動を行っていることを知って興味を持ち、今回訪問させていただきました。またバングラデシュだけでなく、120の国と地域に事業を展開しているグローバルな企業であるという点と、動物実験を化粧品会社の中でもっとも早くに中止した点もとても魅力的でした。

まずグローバル展開についてですが、先ほども述べたように、120もの国と地域に展開するのはとても大変なことではないかと感じました。質問したところ、各地域における化粧に対する価値観が異なるため、各地域に合わせて事業展開しているとのことでした。グローバル化に適応していくことのできる企業が残っていく中で、動物実験の廃止という動きは大きかったと思います。ウサギがこの実験に使われていたこともあり、JAVAという団体に非難されたことについては、色々な価値観を持った人がいるための評判リスクと捉えていたそうです。私たちが化粧をする前に、その化粧品が安全かどうかを確かめるために動物の命が奪われているという現実があったということには、初めは驚くばかりでした。私の個人的な考えでは、自分も動物を飼っていて家族と同様に生活しているので反対です。一方では、動物で試してもらわないと安心して使うことができないという考え方もあるので、胸が痛む問題だとも思います。動物実験廃止には、代替法によって安全を保証する体系を作り直すことが必要であったそうです。EUが動物実験を行っている化粧品の輸入を禁止するという動きがあったこともあり、廃止に踏み切ったそうですが、中国はその逆で、実験されていないものは輸入禁止ということもあって、完全撤廃とまではいかない状態だそうです。動物を大切にしていることを強調しないのは、そのことでかえって不安になる人がいるためだといいます。今は動物の代わりに細胞を使うという技術もできているとお聞きしたので、そのような方向に発展していくことを願いたいです。

次はバングラデシュ女性の活動支援に向けた取り組みについてです。この活動から得ることができた利益を尋ねてみたところ、現在まで出会ったことのない価値観を持った人達との出会いを通じて、それまで思いつかなかった技術やアイデアが生み出されたこと、化粧品の力を再認識したということでした。具体的な技術やアイデアは、汗をかいても落ちない日焼け止めなどだそうです。このような技術ができることは私たちにとっても使えるものを生み出す力になってくれる良いものだなと感じました。新たな視点で物事を考えることの大切さが伝わってきました。バングラデシュは発展途上国ということもあって、事業を展開してもなかなか大きな利益が出ない、むしろ赤字になるも予想されていることもあって、BOPビジネスに対する反対は多かったと聞きました。リスクを背負って行う活動であったものの、BCtAを受けたことで社内の理解も広まったそうです。わたしは資生堂がこのような事業を行っていることなど全く知らなかったので、初めてわかった時には、こうやって活動できるのは素晴らしいことだと感じました。国という規模だけではなく、企業からもこのようにサポートしていくことができる社会は大切です。グローバル展開の一つであるこの事業は、現地の人々の本当に必要とするものが何かを捉え、情報を提供することが一番難しかったそうです。販売員に現地の女性を雇うというスタイルをとるために、男性に理解を求めたりしなければならないこともあったそうです。何もわからない状態からのスタートでここまで大きな事業作り上げたことは素晴らしいことであり、初めてバングラデシュに立ち入った人の勇気も真似できないものだと感じました。

企業がCSRに取り組むことによって、よりよい社会、世界を作っていくことに大きく貢献していることが実感できたよい経験でした。

「資生堂のCSRについて」

1年　石塚和香

資生堂は、1872年、日本初の洋風調剤薬局として、東京・銀座で創業し、現在では世界の化粧品メーカーのビューティー部門のなかで、年間売り上げ第５位を誇り、約４万6000人の従業員を持つ大企業である。また、資生堂は約120の国と地域に展開しており、グローバルな視点からみても、非常に進んだ企業だといえる。今回の東京巡検では、その資生堂の本社事務所である汐留オフィスを訪問させていただき、サステナビリティ戦略部の方々に、資生堂のCSRの説明と、事前にしてあった質問の回答をいただいた。

資生堂の社員の方に、私が寄せた質問は次のふたつである。

（１）御社は基金を設置し、複数の自然保護団体の支援をされていますが、その背景にはどのようなことがありますか。

（２）御社は120の国と地域に事業展開をしていますが、グローバル展開をしていくうえで、特に苦労したことには何がありますか。また、先進国と発展途上国とで、ターゲットとする客層にはどのような違いがありますか。ここでは、（１）の質問について、書こうと思う。

私が（１）のような質問をしたのには意図がある。資生堂は、化粧品メーカーとして、乾皮症など肌トラブルに関連した病気を持つ方に資生堂の商品を提供するというCSR活動をしている。そのことに関しては、化粧品会社らしい、自社の専門分野をアピールする活動であるので、資生堂がやっているのも理解できる。だが、なぜ自然保護団体への寄付をおこなっているのだろうか。一見しただけでは関連性が見つからず、私には不可解に思えた。企業は基本的に利益を追求するものだと思っているから、化粧品に関係ないことではCM効果が薄いのではないかと考えたのだ。この疑問に対する資生堂の社員の方の答えは、明瞭だった。「支援しているのは、椿の木に関するプロジェクトである」。資生堂といえば、「椿」シリーズのシャンプーやヘアトリートメントが有名だ。会社のロゴも椿である。東日本大震災で被災した椿で有名な東北の地域に対しても、資生堂は支援をおこなっている。

化粧品を通じたバングラデシュの農村女性に対する支援など、資生堂は数々の戦略的なCSRに取組んでいる。しかし、社員の方からは「まだ直接的な利益は出ていないのです。このようなCSR活動は広めていくべきなのでしょうか」と、後から私たちに向けて質問された。CSR活動を積極的にアピールしていくかどうかという点では、私たちの中でも意見が分かれた。あまりしつこく宣伝しすぎると、うっとうしく、恩着せがましく思われてしまうかもしれない。かといって、このまま控えめに活動していても、ほぼ利益の出ない活動なのだから、

広告効果がほとんどないので、いけない。私たちからは、商品のパッケージに、シールなどで、こんな活動をしていると写真入りでつけたらどうか、SNSを使って広告を出したらどうかなどの案が出た。担当の方は真剣に聞いてくださっていた。CSR活動の宣伝についてはもっとやったほうがいいと、私は思っている。

＜E　味の素＞

「味の素　企業訪問レポート」

1年　花山愛歩

今回、私は味の素さんへ企業訪問させていただき、とても積極的に海外に進出しているグローバル企業の持つ、世界に対するものの見方を学ばせていただくことができました。

CSRグループの中尾さんのお話を通して感じたのは、味の素さんはグローバルなプロジェクトやCSR活動において、「人を育てる」ということをとても大切にされているなということです。たとえば味の素さんのCSR活動のひとつにベトナムの学校給食プロジェクトというものがあります。まだ発展途中のベトナムでは、栄養に対しての知識が不足している人が多いので、成長期の児童に栄養バランスのとれた日本の「学校給食」の文化を普及させようとしています。私が驚いたのは、現地の人をその栄養士として育成するということです。また、ガーナでの「KOKO　PLUS」という、離乳食期間の子供の栄養改善サプリメントも、販売を現地の女性に任せ、そのネットワークの中で母親たちに栄養に対する理解を深めてもらうそうです。

どちらのプロジェクトでも、現地の人は初めは経験や知識がゼロからのスタートで、企業にとってもゼロから人材を育成するのは時間もコストもかかることです。しかし、それをしっかりビジネスとして成り立たせることで、単発的なものではなく長期的な支援が可能になっているのです。例えばベトナムの栄養士育成は、学校給食の仕組みを現地に輸出するだけでは味の素には利益が生まれませんが、そこに調味料として「味の素」やマヨネーズ、から揚げ粉などの味の素商品を取り入れることで利益を生み出し、その味に親しんだ子供たちにも日常的に味の素の商品を買ってもらうというシステムでこの事業をビジネスとして動かしており、社会貢献活動としての側面とグローバルビジネスの拡大という２つのことを同時に進めているのです。

ガーナの「KOKO　PLUS」事業の現地女性販売員の場合も同様で、地域に根ざした社会貢献活動にしていくと同時に、女性販売員に栄養の知識を知った上で自ら使ってもらう、また他の母親にも宣伝してもらうという２つを両立させています。このような二面を両立させることで現地の人をしっかり育成し、ノウハウを伝えることができ、それが新興国の問題の本質的な解決に繋げることが可能になっているのだと感じました。

また、この「ひとを大切にする」ということにも関連して、「現地で事業を創り上げる」というのも味の素さんのCSR活動の特徴だと感じました。いくら日本の社員に技術やノウハウがあろうと、現地には現地の人の感覚や嗜好があり、そこをしっかりと理解しないと現地ビジネスを成功させるのは難しいものです。そこで味の素さんは現地の研究機関や大学、またはNGOなどをパートナーとして、たくさんの人と連携して事業を創り上げることをされていました。現地の人を単純な労働力として利用するだけでなく、ノウハウを教え、生産の仕組みを整え、しっかりと現地の事業として長期的なスパンで完成させていくことで、もしも味の素さんが撤退したとしても、現地には技術や労働力が留まり続けられるのです。しかし、そこにいたるまでには、パートナーとの戦略や意見の違いもたくさんあったそうです。しかしそれでも「プロセスが違うだけでゴールは一緒ということをしっかり理解する」という中尾さんの言葉が印象に残りました。そうやって、「自分たちは日本の企業である」ということをいい意味で考えすぎず、現地の人の力が必要な時には借り、自分だけでは創り上げられなかったものを創造するという姿勢がすごく新鮮でした。

「世界は日本から見るだけではなく、グローバルに見てどうなのかを考える」。これは中尾さんがおっしゃられていたことです。グローバルビジネスというのは、決して日本の技術を海外に売りつけることだけではなくて、いろいろなストロングポイントを持った人がひとつのものを創り上げることでもある、ということを、味の素さんの企業訪問で発見できました。

CSRという活動は、従来のように「商品を売り、利益を上げる」というような単純なものではないと思います。なかなか利益が表面化してこず、ボランティアのように思われることもあるかもしれませんが、それが現地でしっかりと育ったとき、いろいろな方向から利益が返ってくるものだと思います。

「味の素でのお話をきいて」

1年　廣澤玲萌

近年、企業には製品やサービスの提供だけでなく、社会的貢献も求められるようになっている。日本には、それぞれの理念や得意分野に沿って社会支援をしている企業が多くある。今回は、その一つである味の素で、グローバルコミュニケーション部PR・CSRグループの中尾さんにお話を伺った。

味の素は27の国、地域に拠点を置き、食品やアミノ酸、医薬品など、様々な事業を展開している。商品を販売している国・地域は130以上にもなり、今後も拡大を計画中だという。実は超グローバルな企業であることを初めて知って驚いた。味の素は途上国における事業活動の考え方として、「global but local」という人材育成に重きを置いた、同一国内での開発・生産・販売とその国の食文化にあった製品作りを掲げている。もともと完成されていた、日本で開発されたものを押し付けるのではなく、現地の人びとに寄り添ったビジネスというわけである。

今回、お話の中心となった事業であるガーナでのサステナビリティ事業展開で販売されたのは、栄養サプリメント「KOKO　Plus」だ。kokoというのはガーナで食べられている発酵コーンベースのお粥で、そのお粥にプラスするだけで必要な栄養素が補える製品だから「KOKO　Plus」なのだそうだ。価格は、ガーナの家庭の所得にあわせ、１袋９円で買えるようになっている。この製品を生後６ヶ月～24ヶ月の離乳期間の子供に与えると、子供のその後の成長に大きな改善が見られるという。

実際の製品の流通試験では、販売開始１年後の貧困地域での製品認知率は99パーセント、使用経験率は84パーセント、継続使用率は62パーセントと、しっかりと現地に根付いた形となった。前述した現地の人々とのコミュニケーションの成果であるが、それだけではない。外国の企業が、いきなり途上国に上陸して知名度を高め、製品を売ることはたやすくはない。そこで、味の素は現地法人などのノウハウを持つパートナーとパートナーシップを築いてサステナビリティ活動をしている。そこに、今回味の素がガーナを選んだ理由もある。国連機関、国際NGOなど様々な社会セクターが拠点を置くガーナは、それらとの連携によるソーシャルビジネスのモデルづくりには最適の場所であるためだ。

栄養不足に苦しむ多くの子どもを救い、現地に雇用も生むなど大きな成果をあげているこの事業だが、現地で活動した中尾さんによると、いろいろな苦労もあったのだという。まず、製品を買ってもらうには消費者に必要だと思ってもらわなければいけない。今回の主な購入者は離乳期の子供を持つ母親である。しかし、ガーナの母親たちは、栄養と健康に関する十分な知識を持っていない。そこで、現地の保健省が体の健康に必要な栄養素についての教育を行い、バランスのよい食事の必要性について理解してもらう。こうした政府や法人との連携も、味の素がつくりあげたものである。そして、生産委託先の支援である。ワーカーへの教育によって、製品への信頼アップが実現した。

今回、この事業は味の素だからできたもの、というお話も聞いた。現地政府や法人とのパートナーシップは味の素がつくりあげた、他では簡単にはできないものであり、利益をぎりぎりのところまで圧縮した低価格設定が、現地に受け入れられたということだ。

サステナビリティ事業というのは、ただの社会支援ではない。企業のブランドイメージや製品開発力にもつながる、一つの貴重なビジネスであるということが、私が今回の味の素の訪問で学んだ一番大きなことである。

「味の素を訪問して」

１年　青木優花

１　はじめに

今回、生の声を聞いて感じたことは、企業は利益だけを求めてCSRのような活動をしているわけではないということだ。なぜ海外、しかも発展途上国で事業を興すという大変な労力をかけてまでCSRにこだわり、力を入れているのか。答えは人々の心の中にあった。実際にその事業に携わった人から話を聞いたからこそ感じることの出来た、CSRの目指す世界像と現状を私なりにまとめていこうと思う。

２　味の素という会社について

まず、味の素がどういう会社なのかについてお話をうかがった。私は、最初の創業者の志についての話から、味の素という会社に釘付けになった。当時の日本の食は貧しく、日本人の体格も身長は低く、華奢であったそうだ。そんな中、池田菊苗博士がドイツへ留学する。そこで彼を驚かせたのが、豪華な食事と体格のいい国民であった。その食事、国民の姿を見た池田博士は、体は食べ物でできていると改めて感じ、日本の食の改善の必要性を感じる。しかし、栄養をとろうにも美味しくなければ食べようとは思えない。彼はうま味成分としてグルタミン酸を発見し、その生産方法を確立した。これを受け、安くて美味しい調味料で栄養摂取を高めることを狙い、鈴木三郎助が販売を手がけたのが「味の素」である。

現在、味の素は経営理念に「いのちのために働き」という文を付け加え、美味しさだけを追求するのではなく、人、動物、そして地球の命も考えて事業を行っている。私はこの話を聞いた時に、味の素の始まりが国民の抱える栄養不足という問題を解決するためだったということを知り、今まで抱いていた企業のイメージを大きく覆された。今までは、企業にとって利益を得ることが何よりも大切なのだと思っていたが、根本にあるのは人類社会の問題の解決ということだったのだ。今の企業の視野の広さからは、私たちも学ぶところが多くあると思った。社会に出てからや、グローバル化の進む世界に向き合うためだけではなくて、この考え方は私たちの普段の生活にも大いに役立つことであろう。

また、BOPビジネスも非常に興味をそそるものであった。味の素は車のような富裕層のみがターゲットの商品ではなく、一般消費者を巻き込んだ事業を行っているからこそ、途上国での事業も行うことができるのだと思う。さらにすごいのが、BOP層を巻き込んだ事業が慈善活動ではなく本業であるということだ。慈善活動だとどうしても長続きしないこともあるが、収益を確保できる事業ならば持続が可能である。これからの社会では、貧困削減と事業としての両立が求められてくるので、このビジネスシステムはとても良いと思った。

３　ガーナ栄養改善プロジェクトについて

ガーナ栄養改善プロジェクトにおいて、味の素の基礎にあるのは人材の育成である。そのために、味の素は途上国に栄養士を育成するための学校なども建築している。一見事業になんの利益もないように思えるが、まずは途上国の人々の意識を変えなければ栄養に関する商品は売れない。例えば、添加物に対する誤った意識があれば味の素にはマイナスになったり、学校給食のメニューの提案をした時に栄養に関する知識が不十分であると、そのメニューに関する商品を買ってもらえなかったりする。そういった点から考えると、途上国の人材を育成することは間接的にビジネスにもつながっているのである。そして、その知識が世代を超えて受け継がれていけば、それはのちの大きな財産になるのである。また、栄養のような見えない商品は、日本の企業からのアピールより、現地の人からアピールしてもらうことで信憑性が増してくるのである。やはりここでも、途上国の支援と事業としての利益がつながっている。

なぜガーナなのか。日本から見たら遠く感じるガーナだが、味の素の生産拠点のあるブラジルから見ると時差は３時間程度であること、政治が安定しており、様々な社会セクターがガーナを西アフリカの拠点としているため、それらとの連携をとったビジネスが可能であること、野口英世の影響で日本への留学生が多いことなど、数々の理由がある。その中の一つに、事業を行う場所を決めるにあたってアフリカを実際に訪れた際の話があった。実際にガーナを訪れた職員が、昨日まで元気に遊んでいた子供が亡くなるという話を聞き、そしてそれがガーナでは当たり前のことであるということを知り、この問題をなんとかしなければならないと考えずにはいられなかったそうだ。ここでも創業当初の理念が受け継がれていることをひしひしと感じることができた。

４　最後に

ガーナ栄養改善プロジェクトでは、特に離乳後２歳までの1000日間の改善を目指している。これは、２歳までに脳の発育の７割程度が終わるからだそうだ。ガーナでも栄養を改善すべく、お湯を加えることでできるお粥は売られているのだが、それはココプラスの７倍の価格であるそうだ。そもそも栄養不足の原因はお金がないことである。そこで、味の素は低価格で販売ができるよう、現地で調達できるものはするなどの努力を重ね、ココプラスを開発した。現在のところは、このプロジェクトはまだまだ利益を出すところまでは到達していない。その点においては課題があるとおっしゃっていたが、私が印象に残っている言葉がある。「見えないものを見えるようにする努力」である。「金額としての利益だけではなく、社会的価値としての利益も考えて事業を行う。そうすると社会貢献をしたいという若者が会社に入ってくる。これからはそういった時代になっていくであろう」。未来のことまで視野に入れ、さらに途上国にも手を差し伸べる現在の企業のあり方から、私たちは大いに学ばなければならない。ちなみにココプラスは、アフリカでの会議で、安倍首相がオープニングスピーチで取り上げたりしているそうだ。

「味の素を訪問して」

１年　玉田洋一朗

「営利を目的として、継続的に生産・販売・サービスなどの経済活動を営む組織またはその事業」。これが国語辞典における『企業』の定義だが、グローバル化が進むこの国際社会においては、単に営利を追求するだけでは企業としての社会的責任を負えていないことになるのだということを今回痛感した。

●ガーナでのCSR

味の素のCSR（Corporate Social Responsibility）は、ガーナの貧しい人々の子どもたちの栄養不足を補うべくして始まった、ガーナ栄養改善プロジェクトである。ガーナにおける一般的な離乳食はココと呼ばれるものだが、必須アミノ酸に欠くため、子どもたちの成長が抑えられてしまっていた。そこで味の素が独自開発した栄養補助パウダー「ココプラス」の出番である。「ココプラス」は、離乳食ココにふりかけることで、栄養不足を補うことができる。妊娠からの最初の1000日が最も大切だという栄養科学の研究に基づくコンセプトのもと、「ココプラス」を提供しているのだ。

ココプラスの価格は一袋10円ほどと、だれもが買えることができる価格設定になっている。味の素の海外向け戦略における価格設定は、戦後の高度経済成長期のフィリピンでの海外市場開拓の経験を生かして、日本や他の先進国では考えられないほど小さい小分け袋に分け、安価に販売するようにしている。たとえば、味の素の看板商品「味の素」は、フィリピンでは一袋９ｇ、インドネシアでは一袋0.9gのものがとても安価で広く一般に販売されている。これは、貧しい国の人々のお金に対する事情を勘案したものだ。彼らは持ち合わせのお金が少ないため、それで買えるものしか買うことができない。当初、日本国内と同じようにびん容器に入れて販売したところ、売り上げはほぼ皆無だったという。そこでどんなに少しのお金しか持ち合わせていなくても買えるよう、小さい袋での販売がはじまったのだ。これこそが、今日のガーナでのビジネスの成功につながるノウハウだった。

また、「ココプラス」は現地生産で、現地に根ざしたビジネスを展開している。現地の政府と連携し、工場を建設し、モノをつくるノウハウを現地の人々に教える。こうすることで、単にビジネスを展開するだけでなく、雇用を創出し、人材を育成するという面でもガーナの発展に貢献しているのだ。

●給食プロジェクト
味の素は、ベトナムでは学校給食プロジェクトに力を注いでいる。ベトナムの国民の多くは栄養についての知識が乏しい。そのため、炭水化物中心の食事が広まっていた。そのため、肥満が社会問題になってしまっていたのだ。そこで味の素は、給食設備や食堂を整備するとともに、栄養士の育成に力を入れている。
このように、味の素では、ノウハウを生かして発展途上国の栄養問題の解決に尽力している。CSR活動は、その企業がそれぞれの得意分野で活躍しており、単に自社の利潤を追求するだけでなく、今日の社会、そして未来の社会の利潤を追求することができる、素晴らしいものではないだろうか。

「企業訪問　　味の素」

２年　伊東里彩

１　味の素とはどのような企業なのか
味の素といえばだれもが知っている、歴史の長い食品会社である（1909年創業）。1908年に池田菊苗博士がドイツに留学した際、ドイツ人の食生活の良さや体格の良さに感動し、日本人も積極的に栄養を摂取していくことが必要であると考え、そのためには食べ物がおいしくなければならないことに注目し、昆布から「うま味」（＝グルタミン酸）を発見した。これが味の素の始まりである。それを原点とし、味の素グループの「私たちは、地球的な視野に立ち、食と健康、そして、いのちのために働き、明日のよりよい生活に貢献します」という経営理念につながっていっている。

２　味の素のビジネス
・環境への配慮
食資源を枯渇させずに商品を消費者に送り届けるために、“発酵法”という方法を使っている（例、味の素50万トンを生産するには昆布から作ると2,500万トン、トマトから作ると２億トン必要となり、食資源を大幅に費やす。発酵法を用いることで食資源に影響が出ないようにしている）。
・環境に配慮した循環型の生産法
地域の農作物を使いながらも、アミノ酸を届けられるようにと工夫された製造法が資源循環型のアミノ酸発酵製造工程“バイオサイクル”である。原料となる農作物から発酵法によりアミノ酸を製造する過程で、発酵液からアミノ酸を取り出した後に栄養豊富な副生物（コプロ）が残る。このコプロを廃棄物として扱わず、有機質肥料として地域の農業に還元することで、持続可能な農業に貢献したり、また化学肥料を使用しないことで安く農産物を生産できるようにしている。また、化学肥料を使った場合は養分が偏り、土壌菌もそれに伴って減少し、肥料生産時には二酸化炭素も発生するが、これらのことを未然に防ぐことができる。
・バイオマスボイラー
味の素が海外と国内で排出する二酸化炭素の総量は年間約230万トンである。この膨大な排出量を少しでも減少させるために導入されたのが、バイオマスボイラーである。これにより、年間約10万トン減少させることに成功した。

３　ガーナ栄養改善プロジェクト
今までの研究で積み重ねてきたアミノ酸に関する知見を、開発途上国の深刻な栄養不足の問題を解決するために生かしていこうという思いからこのプロジェクトが始まった。
人間の最初の1000日の栄養不足によって引き起こされる様々な影響、例えば、知能の発達障害、低身長などの発育不全により、途上国では人的資源の充実が図られず、経済の発展を阻害し、貧困のループから抜け出すことを困難にしている。ガーナの伝統的離乳食は発酵コーンから作られるおかゆの「ココ」で、これだけではたんぱく質と必須栄養素が不足してしまう。そのため、「ココ」を食べる生後６ヶ月以降の子供たちの成長が妨げられ、２歳の時点で約30％の子供たちが低身長となっている。このような低身長児は免疫系や知能の発達が十分でないことが多いといわれている。そこで、「ココ」に加えるだけで不足しているたんぱく質やアミノ酸（リジン）が補われる「ココプラス」を開発し、ガーナで販売することにより、子供の発育の改善、蛋白栄養状態の改善、免疫力を改善することに成功している。

４　味の素でのＱ＆Ａ
(1) 売上高が年々上昇しているが、業績を伸ばしていくために重視していることは？
→労働生産性を上げていくことが大切。成果主義を目指しているが、基準を作りにくいために評価することがむずかしいといのが欠点である。また、海外への展開や、新しい価値を創造していくことも大切だと考えている。
(2)130カ国もの国に事業を展開しているが、グローバル展開をする上で大変だったことは？
→現場主義でまわしていくこと。開発途上国でもそのようにやっているが、宗教の問題や日本とのマーケットの差など現地のことをしっかりと理解し、それにうまく対応していくことが一番大切で、かつ難しい。
(3)味の素はアジアの多くの国に進出しているが近いということのほかにどのような理由があるのか？
→アジアに進出しているほかの理由としては、日本と食文化が似ているということが挙げられる（同じ米文化であることなど）。５つの基本味（甘味・苦味・うま味・酸味・塩味）
の中でも、食文化の似ているアジア諸国ではうま味をおいしいと感じるので味の素のうま味成分が受け入れられやすい。その一方で、スパイス文化では痛みを味として感じるのでうま味を入れるとマイルドになってしまう点でなかなか受け入れられず、苦戦している。
(4)たくさんの国がある中でなぜガーナを選んだのか？
→政治が安定しており、国連機関、国際NGOなど様々な社会セクターが、西アフリカの拠点としてガーナで活動しており、それらとの連携によるソーシャルビジネスのモデルづくりに最適の場所であるため。また、野口英世との関係から、日本との関わりも深く、日本に留学経験のある人が多いということも理由として挙げられる。
(5)発展途上国での活動の安全性の確保はどうしているのか？
→ボディガードをつけたり、銃携帯の警察官を常時配備するなど、安全対策は完璧にとるようにしている。
(6)このガーナでの事業は、ガーナ政府・大学・NPOなどとの連携によって行われいる。連携をとることで生まれる利点は何か。また逆に連携をとることで素早い対応が取れなくなるなどの問題も生じると考えられるが、その点はどのように克服しているのか？
→ノウハウを持つパートナーがいるからこそ、単独では難しいことに挑戦できる。一方で、各パートナーは、栄養改善という大目標には共鳴しても、ゴールの具体的なイメージや戦略はやや異なる場合もある。そのため、合意形成に多くの時間と労力を要する。アプローチの仕方は違っても最終ゴールが一緒ということを意識させるということが重要になる。責任者、担当マネージャー、委託先というように、複数のパートナーが絡んでいる場合は時に感情的な不平不満も出てくる。そのため、みんなを一つの方向にとりまとめ、やる気を維持し、不平不満の芽を早期に摘み取るコーディネーション活動が非常に重要となることを意識していかなければならない。また、これらのことから、パートナーシップの成功ポイントとしては、お互いが実現したいこととギャップを理解し、ギャップの中身を明確にして具体的な活動に落とし込んで解決していくことで、最終的には単独で実施するよりも高い成果を生み出すことができると考えている。
(7)ココプラス以外にもこのような栄養食品を作る計画はあるのか？
→妊娠中の母親のためのものも考案中。妊娠中の母親の栄養状態は胎児の栄養状態にも直結することから、子供の健やかな発育のためにも非常に有用だと考えている。また、このほかにも、マラウィで栄養失調の子供たちに配るための製品を、現地の大豆ベースで開発し、雇用を生むことにも貢献している。
(8)ガーナでの栄養の教育はどのようなものなのか？
→五大栄養素と三大栄養素などを主に、何が自分たちに足りていない栄養で、どうしたら摂取できるのかをしっかりと理解させることを一番の目的として行っている。

５　感想
味の素では、ここで述べたような「ココプラス」によるCSR活動以外にも、栄養士の養成支援などを行っている。栄養士を育成していくことで、添加物に関する正しい知識を身に着けてもらい、将来的に味

の素の商品が進出した時に受け入れやすくしてもらうためでもある。目先のことだけではなく、先のそのまた先まで見据え、社会にとっても自社にとっても双方に利益となる事業をすることは、難しいけれど大切なことだと思った。

「東京巡検～味の素を訪問して～」

1年　佐々木もなみ

1　はじめに

味の素といえば、日本人ならばほとんどの人が商品を見たことがあると思う。企業訪問のための事前課題として味の素という会社を調べたら、世界中に進出していて、海外シェアを拡大し、日本での商品の売り上げより、海外での売り上げの大きいグローバル企業であった。祖母の家で味の素をかけたことがあり、「日本」の昔からの調味料として使われてきたと思っていたので、驚いた。

2　味の素について

味の素はアジアを中心に130以上もの国と地域に進出し、多くの国で家庭の味として親しまれている。その理由は、味の素の、国に合わせた商品の売り方が関係していた。味の素は「誰にでも買える」を実現するために、国ごとで販売の際の容量や価格（1袋、1コイン）を変えていたのだ。同じものだから同じ価格だろうという私の考えと違い、日本目線ではなく、現地の目線で考えているからこそ、世界中で親しまれ、今でも拡大し続けていると思った。

3　ガーナ栄養改善プロジェクトについて

ガーナのプロジェクトで使われている商品である「KOKO Plus」は、現地の人が調達できる最低の価格で売っているそうだ。私は、それならば無料で配ってあげればいいのではないかと思っていた。しかし、中尾さんはそれでは意味がない。ビジネスだからこそよいのだとおっしゃっていた。安いものでも自分で買ってもらうことで自立してもらわなければ、何も変わらないからだそうだ。今の現状だけでなく、ガーナの10年後、20年後といった将来まで考えて自立を促すプロジェクトは、会社自体の利益には全然つながっていないそうだ。しかし、生産は現地の工場で現地の人を雇い、できるだけ現地で取れた原材料を使っており、このような徹底した現地の人のサポート、自立を促す活動を応援したい、もっとみんなに知って欲しいと強く思った。私も今回、このことを調べ、味の素に訪問しなければ知らなかったであろうから、私はまず、身の回りの家族や友達などに知らせたいと思った。

4　まとめ

味の素はガーナ以外でも、ベトナムで栄養士の育成を支援したり、学校給食プロジェクトを展開するなど、発展途上国を支援している。例えば学校給食プロジェクトでは、給食自体を作ってあげるのではなく、給食のメニューを提供するなど、ガーナのプロジェクト同様、自立をさせるための援助をしている。このようなことから、味の素のCSRの取り組みには、芯が通ってぶれない様子がうかがえる。TICAD（アフリカ開発会議）の場では、安倍首相がガーナのプロジェクトの「KOKO Plus」の小袋を持って記念撮影をしてくれたそうだ。こうして順調に進んでいるように見えるこのプロジェクトも、利益にはならず赤字であるといい、このプロジェクトに反対の人も多かったらしい。そのような話は、普通であれば私たちが知ることのできないことだ。普段、私たちは商品を通して、商品に関わりがある部分しか企業のことを知ることができない。しかし消費者として、社会の一員として知るべきことがたくさんある。私たちはインターネットなどに載っている企業の情報は、最低限、知ろうとすべきではないだろうか。

「2016年東京巡検　味の素　レポート」

2年　金澤元泰

途上国の子供の健康を支える粉末と聞いて、説明は難しいカタカナ語ばかりの、何か最新の技術の結晶のようなものをイメージしていた。だが実際は、高校の家庭科の授業で習うようなことを応用したシンプルなもので拍子抜けした。主な効果を発揮するのはたった1種類のアミノ酸。そして1日分たったの9円。そんなに単純で安いのなら売り上げが上がり、利潤も相当になるのではないか。今度は逆にそう考えていた。

今回お話を伺ったココプラスのプロジェクトは、アフリカ西部のガーナ共和国で始まった。ガーナが選ばれた理由には、政治が安定していること、国連機関や国際NGOが拠点としていることなどが挙げられる。そして最大の理由は、ブラジルに近いということであった。味の素が50年にわたり活動しているブラジルには味の素の大きな拠点があり、地理的にも、食文化の上でもブラジルに近いのである。そしてこの活動のきっかけとなったのが、栄養不足を解決しようという世界的な動きである。ミレニアム開発目標・持続可能な開発目標といった国連の指標や、The First 1000 daysという国際的な取り組みの流れに沿ったものである。

ココプラスの対象となるガーナのBOP（貧困層＝Base of the Economic Pyramid）層には、合理的で効率的な流通ルートがなく、製品に余計な価格が上乗せされてしまう。製品の価格が上昇しては貧困層は購入することができない。そこで味の素は外部の政府機関・大学・企業と連携し、製品が社会の隅々までいきわたるように工夫を重ねた。例えば現地で委託生産することで、輸送費等を抑えている。

新しい商品を海外に売る際、各家庭にまで浸透させるにはただ商品を市場に送り込むだけでは足りない。特別の働きかけが必要なのである。特に栄養食品は、ほかの食品（味や便利さによって浸透する）とは違い、人々に浸透するのに手間がかかる。一人一人にその効果を伝えなければならないのだ。これを味の素は、保健機関や女性の自立を支援する国際NGOに委任した。母親一人一人へのFace to Faceでの教育が功を奏し、ガーナの北部地域では販売開始1年後の認知率が99％に上った。

ココプラスの成功は、その開発での苦労以上に、ガーナでの販売に何倍もの手間がかかって成し遂げられた地道なものであった。

さて、Think Globally, Act Locallyという言葉がある。ココプラスの活動はその範疇に収まるものであるのだろうか。

ThinkGloballyについては体現していると思う。しかしActLocallyに関しては、今までのものとは別物なのではないか。自分の生活する地域に働きかけるならまだしも、地球の反対側の国で人々を助けるなど、到底自力で成し遂げられることではない。そしてグローバル企業たる味の素（130以上の国と地域で事業展開）が一国に手間暇をかけ続けるとなれば、支えられる人も限られてしまう。

だからこそ、現地の団体・他の国際団体と手を組むことが重要になってくると思う。この連携は、味の素の業務の効率的な遂行を助けるだけでなく、連携する団体は地域に働きかけるきっかけとなる。味の素に関係した活動だけでなく、これをもとに新たな活動に着手することができるかもしれない。またサポートされるのは母親だけではない。現地への委託生産は雇用を創出し、様々な教育は国民全体に波及していく。

グローバル企業は味の素のように、（地域で「働く＝Act」のではなく）、地域に「働きかける」ことでその地域に貢献できるのではないか。確かに一つ一つの地域に密着することも大切である。だがグローバル企業はグローバル企業としての立場・大きさ・資金力・ノウハウを生かし、もっと広い視野で活動を進めることが大切であると思う。1つの地域に働きかけ、活動を起こし、それを協業のなかで実施し、軌道に乗ったら次の地域へ。

実際に味の素は次の対象としてマラウイを挙げている。いずれこのような活動が世界中に広まることを願ってやまない。

「企業訪問：味の素にて」

2年　芹澤優希

味の素は、現在海外市場をいかに強化していくかが販売戦略の要となっており、売上高構成比も海外食品が日本食品を上回って4割を占め、どんどん大きくなってきている。27の国、地域に拠点をおき、商品を販売している国・地域は130以上にもなり、特に東南アジアではアジノモトと日本人が呼ばれるほど、味の素は親しまれていること

が分かった。

味の素グループは企業理念として、地球的な視野から“食と健康”そして“いのち”のために働き、より良い生活に貢献するとしており、地球環境保全、食資源確保、健康な生活の維持という、人類社会の課題に取り組んでいる。特に資源循環型生産方式（バイオサイクル）の利用や、「バイオマスボイラー」による低炭素社会の実現といった、環境に配慮したビジネスの展開には感心させられた。当社は途上国における事業活動の考え方をGlobal but Localとしていて、同一国内での開発・生産・販売や、その国の食文化にあった製品作りを行い、それらを大事にしている。そのため、味の素グループの海外事業展開においては、食文化に対する深い理解、技術開発力、販売力のほか、現地語、国民性・価値観の理解が大切な柱となっていることがわかった。

味の素が行なっている戦略的CSR活動の内容は、途上国での栄養改善である。ベトナムでは学校給食プロジェクト、栄養士の養成支援が、ガーナではガーナ栄養改善プロジェクトが行われている。私は今回の企業訪問にあたって、そのガーナ栄養改善プロジェクトについて調べた。たくさんの発展途上国がある中で、なぜガーナを選択したのか。その理由はガーナの政治が安定しており、国連機関、国際NGOなど様々な社会セクターがガーナを西アフリカの拠点として活動しているため、それらとの連携によるソーシャルビジネスのモデルづくりには最適の場所であったからだという。初めはナイジェリアでの事業を考えていたそうだが、治安の問題やブラジルとのつながりからガーナに変更になったとという。海外事業をする上では、現地の機関との連携のしやすさが重要になってくることがわかった。途上国における深刻な課題である栄養不足は、特に乳幼児の発育不良と高い死亡率において深刻であり、こうした課題の解決が求められる中で、味の素が開発した「KOKO Plus」は具体的な解決策として期待されている。「KOKO Plus」はガーナの伝統的離乳食の「koko」だけでは不足してしまうタンパク質と微量栄養素を補えるアミノ酸入りサプリメントなわけだが、栄養サプリメントを市場に導入するのは結構難しいそうで、ガーナ国民に「KOKO Plus」が定着したと感じられるには、まだまだこれからであるということだ。またこのプロジェクトはまだまだ利益を出すところまでは到達しておらず、実質的には赤字なのだという。それでも、この活動が味の素が目指す真のグローバル企業の姿を象徴しているため、簡単にこのプロジェクトから撤退するつもりはないそうで、今後当社にとっても現地の家庭にとっても、互いの利益につなげてゆくため、コストや販売の仕方などを見直していく必要があるとのことだ。

我々が生きていく上で欠かせない「食」に関連した事業を、国内ではなく海外で展開するには、まず現地の生活文化について深く理解しなければならないことがよくわかった。今後、より問題となってくるであろう食資源や摂取栄養量に関連した活動に注目していきたいと思う。

「味の素を訪問して」

１年　小川コナ

「味の素」という会社の名前を聞くととても身近に感じられます。「味の素」だからこそできる栄養改善プロジェクトをガーナで行っていることを知り、さらに興味を持ったので、訪問させていただきました。

「味の素」は大企業なので売上高は年々上昇していて、業績を伸ばしています。業績を伸ばしていくためには、何を重要視していくことが大切なのかの問いには、海外展開をしていくことや、新しい価値を見つけていくことだ、という回答でした。海外展開について掘り下げていきます。グローバル展開は130の国と地域で行っているそうです。事業展開をしていくうえで、何らかの壁などが生じていたのではないかと感じ、大変だったことについて伺いました。何も知らない地域に入り込んでいくことが一番大変だったそうです。知識を得るのにも限界があり、現地に実際に行ってみないとわからない状況などもあると思うので、動き出した人々の勇気はすばらしいと感じました。私も大いに見習うべき点です。恐れないでいろんなことに挑戦する姿勢はどんなところでも大切だと思います。事業の展開の中心となる人は、言語などを修得するために現地の大学で三カ月学んでいるそうです。大学で現地の正確な知識を得ることができるので、よい取り組みだと思います。また、役員の現地化を行っているそうで、そのような人は現地の人との関わりに使うことができるので、コミュニケーションの幅をずいぶん広げることができます。

次はガーナでの事業「栄養改善プロジェクト」についてです。発展途上国では現在、テロなどが生じていることもあり、危険であるという点について、社員のためのハイレベルなセキュリティーシステムがしっかり整備されているとのことでした。このような活動は、味の素グループWayに掲げられている「人を大切にする」ということにつながっていると思います。具体的に実現していることとして挙げられたのが、おおむね満足できる給料、福利厚生、やりたいことを認めてくれる、人の成長を大切にしている、等です。また、働き方改革が今行われているそうで、働く時間を７時間にしようという動きがあるようです。日本の働き方は異常であるので、グローバルな基準に近づけることを目的としているそうです。このことも、非常に良い動きであると考えます。日本で大問題となっているのが過労死で、残業時間が長く、労働基準法に違反していることも多くあります。働いている人を大切にするという取り組みが、味の素から他の企業にも派生してほしいと感じました。

ココプラスについてです。これは、ガーナの伝統的な離乳食「ココ」にかけることで、足りない栄養素を補うというものです。ココプラスの原材料は、現地生産となっており、ガーナ国内の雇用の拡大にも繋がっています。販売員も、現地の人を採用しているので、社会に大きく貢献できている活動になっているとおもいます。この商品の一袋の価格は９円と、貧困家庭でも購入できる価格設定です。しかし、毎日購入するのは困難であることもあります。無料配布ではなく販売を続けているのは、無料の配布に頼ると、それに依存してしまい、自立した生活が送れなくなるという強い懸念がありました。「自立」していく為には、自ら働き、稼ぎ、生計を立てていかなければいけないので、この方針は、大変画期的であるとおもいました。また、栄養教育の促進によって、会社としての信頼維持や、商品を使ったメニューなどの理解も進んでいる点も興味深いです。味の素の要である必須アミノ酸の摂取により、栄養の吸収率が高まることも知ることが出来ました。食事の仕方によっては、肥満などの原因になることもあることから、栄養教育は、発展途上国に限った問題ではないとも感じました。

今回の訪問を通じて、ガーナの事業に直接関わっている方から、下調べだけでは解らなかったことについても聞くことができ、充実した時間を過ごすことができました。CSRの取り組みに力を入れている姿勢は素晴らしかったです。今後の学習にも繋げていきたいです。

「味の素のCSR活動について」

１年　石塚和香

味の素は1909年創業、現在約33,000人の従業員を抱える日本有数の大手企業だ。同グループは、アミノ酸をベースに、サイエンスで価値創造をしていく食品会社として、世界規模での成長を目指しているグローバル企業でもある。その証拠に、事業構造改革と成長戦略をベースに、「2020年までにグローバル食品企業のトップ10入りを目標とする」とある。創業から106年、130の国や地域で製品展開を果たしている。

今回は、その味の素株式会社のグローバルコミュニケーション部のPR・CSRグループ、中尾洋三さんに、味の素のCSR活動について説明をしてもらい、私たちの質問にこたえてもらうことができた。

味の素のCSR活動にはふたつの種類があるという。一つ目は基盤的CSRだ。これは、企業ブランド保護（リスク管理）であり、いわばあって当然のものだという。これには、人材育成や、人権への配慮、法令順守や企業倫理の徹底などのコンプライアンス責任、納税や従業員への給与の支給の経済責任が含まれている。ここまでが操業許可ラインであり、これを基盤として、二つ目のCSR活動である価値創造型CSRが出てくる。これは、味の素という企業ブランドの価値を向上させるためのものである。頂点に、味の素グループの理念である「私たちは地球的な視野にたち、食と健康そしていのちのために働き、明日のよりよい生活に貢献します」が存在する。今回質問をした、味の素のCSR活動を代表する「ガーナ栄養改善プロジェクト」も、こちらの

価値創造型CSRに含まれる。

ガーナ栄養改善プロジェクトとは、味の素がガーナの子どもたちの栄養を補うために、アミノ酸入りサプリメントを安価で販売するといった内容のものだ。生まれてから最初の1000日間の栄養不足による成長不良は、その後に取り戻すのは難しいとされている。ガーナでは、その時期の子どもに、伝統的な離乳食である「koko」という発酵コーンから作られるおかゆを食べさせるのだが、この離乳食にはタンパク質と微量栄養素が欠如している。そこで、調理時に「KOKO Plus」という製品を加えることで、それらの栄養を補うことができるのだという。日本でも、この「KOKO Plus」についてのコマーシャルをインターネットで視聴することができるように工夫されている。

中尾さんは、実際に現地へいき、まず言語の習得から始めたという。実際にそれらを購入する人たちの側の視点に立って、製品を考えるためには、とても大変な努力があるのだと思った。また、ガーナの母親たちに栄養指導をするなど、ほかの仕事も増える。そして、味の素グループは、ガーナでつくりあげたこのビジネススタイルを、ほかの発展途上国にも広げていくつもりだという。味の素グループが、さらに世界で活躍する様を目にするときは近い気がした。。

＜F　東京国立博物館＞

「東京国立博物館を訪れて」

２年　田中茉凜

東京巡検の最後の訪問先となる東京国立博物館には初めて訪れた。行き先を選択できると知った時、どこに行くか迷った私は、正直美術に興味がある訳ではなかったが、近くにある世界遺産に登録された国立西洋美術館を見たい気持ちもあり、ここに行くことに決めた。西洋美術館は、実際に行って直接本物を見ると、それはとてもシンプルな外観をしていて本当に世界遺産なのかと疑ってしまうくらい、もの寂しい様子だった。後日、建築士である母親から聞いた話によると、やはり偉大な建築物らしいのだが、素人の私には全くわからず、呆気にとられながらもその前を通過し、本来の目的地の国立博物館に向かった。

そんな心持ちで目的地に辿り着いた私は、正直むしろ軽く捉えていた東京国立博物館のスケールの方に圧倒されてしまった。巨大な建物が三つ、広場を囲むように建っていて、デザインも王宮のように立派で感動した。私はその中の一つの東洋館にしか入らなかったが、内装もとてもきれいで高貴な雰囲気を保っており、落ち着いた静かな空間であった。今回見物した朝鮮文化についての展示ブースには、日本人だけでなく外国人もちらほら見受けられ、興味深そうに陶磁器などを眺めていた。私達はアジアとアジアを比べて勉強しているが、彼らは欧米文化と比較しているのかと思うと、そちらの方にも少し興味が湧いた。

本題の朝鮮文化についてだが、中国のものとはうって変わって、ほとんどの展示品が質素なデザインに見えた気がする。だから反対に日本とよく似た雰囲気で、相違点よりも類似点の方が多いと思った。色を多様に使うことにこだわらず、シンプルに機能性を重視した仕様になっていて、まさに九州などの朝鮮半島に近い地域で有名な有田焼などの焼き物と同一であった。しかし時代が進むにつれて見事な光沢を示す白磁器が誕生すると、それに上品に色付けされた水滴なども見ることができた。絵柄については自然についてのものが多く、特に草花や鳥が多用されていたが、少し時を経た後の新しい陶器には家なども描かれていた。仏像の外観も日本とほとんど変わらず、座ったものもあれば直立しているものもあって、特にこれといった違いは見つけられなかったので、飛鳥時代にシルクロードから伝わってきたペルシア風の菩薩と比較すると、最終的に日本は後者ではなく前者の影響を大きく受けたのではないかと思った。そして面白いと思ったのが、古代の朝鮮半島では季節によって異なる材質の食器を使い分けていたということだ。夏は熱を伝えにくい陶磁器を、冬は熱を伝えやすい真鍮製のお椀を使っていたらしい。そうしてご飯の熱を暑い夏は遮断し、寒い冬は暖をとるのに利用していたのかもしれない。また男女や身分の差で使う食器の種類が異なり、これは日本にも少し共通する朝鮮文化の大きな特徴だと思った。しかし、やはり木を使った展示品は白樺の被り物しか見られず、木の文化は日本独自の文化であることを実感した。

私が展示品を見て気づいた主なこととしては、派手で豪華な仕様を好む中国の近くに位置しながら、実際に使用していた食器などはシンプルでオリジナル性が見られたことだ。そして日本の文化もそちらに近いことから、日本が受容した大陸文化は朝鮮半島で大きな影響を受けながら伝わってきた可能性が高いと思った。はるか大昔の展示品を見ることで、そんな頃から生活の中で様々な工夫をしていた人間のすごさを感じることができたので、この鑑賞は本当に良い経験になったと思う。機会があれば他の展示館も訪れてみたい。

「東京国立博物館を見学して」

２年　渡邉美月

東京国立博物館の朝鮮半島の展示ゾーンを見学して、私が特に気になった点は朝鮮半島の「仏像」と日本との相違点である。今回はこの２点に焦点を当てた考えを述べようと思う。

仏教は４世紀に高句麗と百済、６世紀に新羅に伝わった。新羅が７世紀後半に朝鮮半島を統一すると、仏教を中心とした国づくりをすすめ、８世紀には仏教美術が最盛期を迎えた。日本には、６世紀に百済からの渡来人によって伝えられた。そして日本の風土にあった形式に少しづつ変化していき、今に至る。

東京国立博物館には、如来像と菩薩像がそれぞれ３体ほどずつ展示されていた。それらは手のひらほどの大きさのものであったが、繊細かつ豪華な装飾がされた、美しく見事なものであった。ここで私は何か違和感を感じた。パッと見たところ日本の仏像と変わらないが、よく見るとあまり見慣れないポーズをとっている。私のイメージだと、日本の仏像は両手、あるいは片手を胸の前にまで上げ、もう片方の手は腰辺りに添え、親指と人差し指で輪を作っているようなポーズのイメージだ。しかし、展示されていた仏像は手のひらをこちら側に見せるように前に差し出しているポーズをとっていた。私はこのような仏像は初めて見たので、？？と頭にはてなが浮かんだ。

さらに？？の原因がもう一つ。体型が日本の仏像と違うのだ。穏やかでふっくらとした顔立ちは、日本のものと変わらないが、体型はその顔立ちには不自然なほど、肋骨が確認できたり、カクンとくびれていたりととても痩せていた。この顔立ちと体型のアンバランスさも初めて見るものであった。

ポーズ、体型。この２点が私が感じた違和感の原因であった。まず、ポーズについて。私が今の今までポーズと呼んでいたのは「印相」というものであるという。手の形で仏像はその教えを伝えているらしい。その教えは仏教の世界では共通であるため、朝鮮半島と日本では相違点はないそうだ。私が違和感を覚えたのはただ単に私の勉強不足ということだった。

これを機にこの「印相」について調べてみた。印相には決まったパターンがあり、それぞれの印相には諸仏の悟りの内容、性格、働きなどを表す教義的な意味がある。主な印相に転法輪印、施無畏印、与願印というものがある。

転法輪印は、釈迦如来の印相の１つで、両手を胸の高さまで上げ、親指と他の指の先を合わせて輪を作る。または、両手の指先を上に向け、右手は前に、左手は自分側に向ける。この場合、右手は聴衆への説法を意味し、左手は自分への説法を意味する。転法輪印は、手振りで相手に何かを説明している仕草を模したもので「説法印」とも言う。私が日本の仏像に持っていたイメージの印相がこれだ。

次に施無畏印。これは手を上げて手の平を前に向けた印相で、漢字の示す意味通り「恐れなくてよい」と相手を励ますサインである。

与願印は、手を下げて手の平を前に向けた印相。座像の場合などでは手の平を上に向ける場合もあるが、その場合も指先側を下げるように傾けて相手に手の平が見えるようにする。相手に何かを与える仕草を模したものである。私が東京国立博物館で見た仏像の印相は、おそらくこの施無畏印と与願印を結んでいたのであろう。

他にも、定印、降魔印、智拳印、降三世印などがある。これらすべてに意味があって、仏像がどの印相を結んでいるかによって、その仏像が何であるか、ある程度推測することができる。

さて、体型について。仏像は、その当時その地域の人々の「最上の

理想」が反映されているという。日本の仏像がふくよかでどっしりとした体型をしているのは、飢饉や食糧難で痩せ細っていた人々の、「このような体型になるくらい食べることが出来たら」という願い、理想をあらわしているのではないだろうか。

対して、朝鮮の仏像がスレンダーで、ストイックな体型をしているのは……？　韓国は学歴社会だ。学生達は早朝から深夜までボロボロになるまで、文字通り満身創痍になるまで勉強に励むという。そのストイックな国民性は当時からだったのでは？　私がその仏像から見いだせる彼らの理想は「満身創痍になるまで努力する」ことである。

これまで相違点についてのべたが、双方共に筋骨隆々でない点が共通している。これは、男女という性を超越した神々しいフォルムを求めた結果なのだろうか、と私は思う。

今回の見学で仏像に違和感を感じたことにより、初めて仏像に注目した。それにより初めて仏教美術の奥深さに気づくことができた。12月の韓国巡検でも仏像を見学するそうなので楽しみである。

「東京国立博物館」

2年　浜　凪帆

東京国立博物館の朝鮮コーナーを見て、私が一番印象に残っているのは陶磁器の展示です。展示の多くの割合を陶磁器が占め、高麗青磁、白磁といった種類、そして水滴や文箱といった形、模様が豊富でした。高麗青磁には、赤土白土をうまく使い分け。細かい模様を描く象嵌という技術を用いて模様が細かく描かれていました。このような陶磁器文化が朝鮮時代にどれほど庶民に浸透していたかはわかりませんが、高麗青磁は、比較的派手な色合いであること、文箱、水滴、水注といった文房具や花瓶が多いことから、主に学問をさせてもらえる、貴族、役人身分の人々の間で栄えた文化ではないかと考えました。また、中国から青磁が輸出されていたことを考えると、高麗青磁は中国からの技術をもとに朝鮮で独自の発達を遂げたのだろうと推測しました。

しかし、18、19世紀の陶磁器に移ると、食器は金属製のものが展示されており、陶磁器は主に角瓶、水差しになっていました。私はなぜ今では発達していた韓国の陶磁器食器の文化が薄れ、ステンレス製の食器・箸が使われるようになっているのか、興味を持ち調べてみました。

毒に触れると銀は変色するので、かつて両班という貴族が銀製の食器を用いていました。庶民がそれにあこがれて始めたという説があります。又他にも、金属食器が使われる理由として、今までに朝鮮半島で争いごとが多く起こり、戦争での移動時に壊れにくく持ち運びやすかったことが挙げられます。箸に関しては、キムチのにおいと色が木製だととれにくいこと、衛生面、木材不足が理由としてあります。

日本の有田焼は、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際、捕虜として朝鮮から連れてこられた李参平さんが日本で白磁を作り始め、その技術をもとに日本特有の進化を遂げて今に至るといいます。朝鮮出兵前の日本の陶磁器は高麗青磁、象嵌の技術などとは比べ物にならないほど朝鮮に後れを取っていたそうです。陶磁器もまた、中国から朝鮮へ、朝鮮から日本へ渡ってきた文化なのだと知りました。

韓国の陶器、容器は、中国ほど派手な赤基調の色付けが少なく、全体的に日本に近いデザインでした。特に仏像、瓦、18、19世紀ごろの陶磁器が日本と似ていると感じました。18、19世紀以前は、青磁のような鮮やかな色合いの陶磁器が多く、18、19世紀になると藍色のデザインが、日本と似てはいても作られるものが食器と花瓶、文具で違いました。韓国巡検の際に、実際に韓国の日常生活にどれほどの陶磁器が現在どのような目的で使われているのか見てきたいです。

「日本と朝鮮の文化の比較」

2年　新海花音

東京国立博物館の東洋館（アジアギャラリー）の内の朝鮮半島に関する展示を見学した。そこから，文化の共通点・相違点について考察する。

●朝鮮のものの特徴

〈陶磁・金属器〉陶磁には、青磁・白磁・粉青沙器など（出現順）がある。また、絵付けで使用される顔料は初めはコバルト顔料だったが、それが不足し始めると鉄砂に移った。コバルト顔料は青色、鉄砂は黒褐色。色合いは渋く、単色による表現の作品が多い。そのため、地味な印象を受ける。色自体が落ち着いた色であるため、そのような印象を受けるのかもしれない。「横向きの顔に目が二つ描かれる」や「魚と鳥が同じ空間に存在し、共にとんでいる」といった、その制作時期における独特な特徴をもつ絵がいくつか存在する。金属器に絵はない。陶磁は平たいものより、壺や箱型のものなど立体的なものが多い。丸みを帯びた形が多い。しかし、下が大きく上に小さいものが乗っているような形で、大きい部分の上面の縁（二つの境の部分）が滑らかでなく角がはっきりしているものも少なくなかった。この形はお茶や水を注ぐ道具などに見られた。金属器は主に食器。シンプルなものが多く、小皿が多い。

〈仏像〉顔のパーツが細くて長い（目が切れ長のもの、耳が長いものが多い）。顔やパーツの形は大体同じだが、微妙な違いがある。鬼神はシーサーのような見た目。

〈その他〉土偶は牛や馬が多い。

●比較（朝鮮と日本のものの共通点・相違点）

動物や植物など自然が描かれている点では共通しているのだが、日本の陶磁器に描かれているもののほうが、本物に忠実に描かれているように感じる。特に朝鮮のものの鳥や魚は「絵」という感じがした。体のパーツなど大まかな部分は特徴をとらえて描かれているのだが、細かい部分（顔）が違った。特に目は大きかったり、形が不自然だったりした。これと「横向きの顔に目が二つ描かれる」「魚と鳥が同じ空間に存在し，共にとんでいる」という特徴から、朝鮮の陶磁の絵は、対象の姿を正確にとらえて再現しているわけではないといえると思う。日本のものだと、実在するものはそのままに描き、そのままでないものは架空の、伝説上のものが多いと思う。また、草や木、花など植物は同じ陶磁の中のものでも本物と同じように描かれているものが多かった。違う特徴をもった絵を同じ作品上で融合させて表すところが日本のものにはあまり見られないと思う。

日本では陶磁が皿として使われているため、平たいものが多いと思われる。平たいもののほうが立体的なものよりも絵をつけやすいため細かい絵が描けたのかもしれない。日本のものは角が滑らかに加工されているものがほとんど。

☆食器についての考察

朝鮮の料理は大皿でなく小皿料理であるため、薄いほうがしまいやすく並べやすい。そのため、金属器は扱いやすかったのだろうと思う。一方で同じく小皿料理の日本で金属器が使用されていないのは材料がなかったからという理由が大きいと思う。また、日本では茶碗を手で持つことがマナーであるが、朝鮮ではそれがマナー違反であることも理由であると思う。なぜなら、金属器の食器はシンプルで底が平たい形が多かったが、日本のご飯茶碗などは半球に近く、下に台があり、持ちやすく、置くときに安定しやすい。この加工は金属器でないほうがやりやすかったのではないかと思う。

顔や格好に大きな違いは見られない。ただ、日本のもののほうが少し丸みのある形で、朝鮮のものは細身のものが多い。

日本の土偶は人型のものが印象的だが、朝鮮のものにそれはなかった。どちらかというと、朝鮮の土偶は日本の埴輪に似ている。

まとめ

朝鮮の文化が流入してきているため、日本の文化との間に大きな差はない。しかし、細かい部分や流入してきたものの変遷などは異なっている。似ているが、なんとなく違いが分かり、区別できると思った。

「東京国立博物館　見学報告レポート」

１年　久野千優

東京巡検二日目。2016年９月28日の午後に、わたしは東京国立博物館を訪れた。東京国立博物館は1872年、東京湯島の博覧会に始まり、1882年、上野に上野博物館ができ、翌年帝室博物館と改称、1947年に宮内省から文部省へ移管され国立博物館となり、1952年に現名称となった。時代とともに名前こそ変わったが、約130年もの歴史をほこる博物館である。わたしはこの度はじめて訪れたが、その壮大な雰囲気に少しどきどきした。

東洋館はフロアに分かれており、５階の朝鮮半島に関する展示を中心に見学した。

朝鮮の磨製石器と金属器のコーナーでは、原始・古代朝鮮の石器や金属器が展示されていた。日本に関する展示はあまりなかったので単純な比較はしづらいが、少なくとも原始・古代の日本にこれだけ精密な細工をする技術力はなかったと思う。日本が朝鮮半島をリードしたのは人類の長い歴史から見ればほんとうに最近のことで、ずっと日本は朝鮮半島からさまざまな技術を輸入していたと思うと、不思議な感じがした。

朝鮮の陶磁のコーナーでは、古代から中世にかけての美しい陶磁器を見学することができた。陶磁においても、朝鮮は日本に大きな影響を与えていたとわかった。例えば安土桃山時代の代表的な文化「茶の湯」に使われたのは、朝鮮半島で焼かれた日常雑器だった。高麗茶碗である。東京国立博物館で展示されていた高麗茶碗を実際にみて、中世朝鮮で人々の暮らしになじみつかわれていた茶碗が日本のすぐれた茶人の目にとまったのは、中世朝鮮と中世日本には少なからず共通した美の意識があったからではないかと思った。また今でも多くの日本人に愛されている九州肥前有田焼も、江戸時代初期に朝鮮より持ちこまれたものだと知って驚いた。やはり地理的に隣接していることは、交通の便が未発達な古代から、文化交流の面で非常に大きな影響を与えるのだと思った。

朝鮮の仏像というコーナーもあった。日本も朝鮮も仏教の国であるから、古代より多くの仏像がつくられてきた。展示されていたものは比較的小さい仏像が多く、金や青銅製のものがほとんどだった。

日本の文化と朝鮮の文化の共通点・相違点を考察するということだったが、十分にできなかった。なぜならわたしは日本の文化を社会の授業レベルでしか知らなかったからだ。今後は十分な下調べをしてから行きたいと思った。また、日本人なのに、日本の文化についてあまり知らないのは、多文化共生、多文化主義が叫ばれる現代においてあまりにも無責任だ。過去を知ることで今をより深くみられる、今をみることで未来が作り出せるのだとわたしは思う。

「東京国立博物館　見学レポート」

１年　藤原巧斗

今回東京国立博物館を見学した。日本文化と朝鮮文化の共通点・相違点についてまとめる。

まず、目についたのは金銅龍文透彫帯金具。何とも厳つい名前だが、模様はとても細かくて繊細なものだった。名前には龍とは言っているが、この金具だけに限らずほとんどのものに龍という名前が記されていた。日本では金属器ではなく土器だが、縄目の文様や弥生の文様などには生き物はそう見られなかった。龍と朝鮮の文化はとても密接したものだということが分かった。朝鮮では中国の影響から独自に発展した文化が多い。

また、一番印象に残ったのが朝鮮の「葬」である。墓場には権力の象徴でたくさんの金属器を入れたそうだが、これは、古墳に埴輪などをたくさん並べる日本の文化と大変似ていると感じた。やはり近接した国であるからだろう。今も昔も違うところはあれど、似ているところは大変似ていることが分かった。

また、石包丁というものが朝鮮にも存在していた。これを見たときはまた共通点があったと思ったが、日本と朝鮮の気候の違いからかその使い方が違った。日本では降水量が多いため稲作が盛んとなり石包丁は穂首刈りに使われたが、朝鮮では降水量は少ないため畑作が盛んであり、それは雑穀類の収穫に使われていた。

水差しでは「三島」と呼ばれる装飾技法が日本と朝鮮で共通していた。17世紀の瓶では動植物の文様が描かれ、鉄が使用された。食器の大きさで身分の違いを示す「パンサンギ」という文化が存在した。

朝鮮の屏風は鶴が文官、虎・豹が武官を示していた。部屋の模様として男性は書斎を社会の場として整然に、女性は華やかで機能性と簡素な美が求められていたそうだ。調和と均衡が求められ、儒教の教えに沿った生活が見られた。

今の朝鮮ではキリスト教が主流となってきているが、それでも日本と違うところは多々見られるであろう。しかし、似たところが見られることも事実だ。互いの悪いところ良いところを認め合い今の問題を解決できることを望みたい。

＜G　靖国神社遊就館・しょうけい館＞

「靖国神社・遊就館・しょうけい館に訪問し戦争を考える」

１年　山田真子

＜靖国神社・遊就館＞

堂々とそびえる鳥居をくぐりぬけ、大村益次郎像を越え、右折したその先に遊就館はあった。行き届いた整備からは、いかにこの場所が大切に思われているのかを伺うことができる。

歴史は安政の大獄までさかのぼり、命を尽くしてきた英霊の「みこころ」にふれることのできる遊就館。展示中でも印象深かったのは、数々の遺書である。戦地へ向かう多くの兵の声が聞こえてきた。

遺書を展示することで、伝えたいことは一体何なのだろうか。力強く、覇気溢れる文字。恐怖を連想させる、力ない文字。遺書によって様々である。遺書の筆跡から、出征への思いが伝わってくる。また、出征の、臨場感溢れる思いに触れて、戦争の怖さを思い知る。人々は戦乱の世の中で、必死に生きてきたのだと胸を打つ。遺書の持つ、何物にも例えがたい強い力を感じることができた。

中でも、展示の中心となっていた人々。それは特攻隊員である。第二次世界大戦末期、多くの兵が神風特別攻撃部隊として動員された。一言でいうなれば、爆弾とともに自らの命をも投げつける戦法、といったところであろうか。勿論、積んである燃料は片道分である。そんな彼らの遺書には特別な重みがあった。彼らは確かに生きていた、そう伝える証書のように思えるのである。

お国のため、命を尽くすことができたのだから、彼らの命は無駄ではない、といった意見もある。しかし私は決してそうは思わない。凄烈な戦況下で命の重みを忘却してしまっているとしか思えない。帰ってくることのできない道へと送り出す家族の身にもなってほしい。彼らの攻撃を、無駄だったと言い表したくはないが、本当に行うべきだったのかという疑問はいつまでも隠せない。以前より、私は、戦争学習にあたって数々の特攻隊員の遺書を目にしてきた。が、ここまで多くの数を同時に見たのは初めての経験だ。遺書の数は、家族の元を離れて戦地へ向かった兵の数をもあらわしていると思うと、背筋が凍るようである。

「手紙」という今も昔も変わらない共通ツールを通じ、今を生きる私たちに戦争の時代を生きた人々の思いを伝承していくことこそが遺書の役割だと感じた。

＜しょうけい館＞

しょうけい館は「戦傷病者史料館」と名義されている。後世代の人々に、戦傷病者とそのご家族の労苦を知る機会を与えるという目的をもっている。

館の象徴的な展示のひとつは、義肢であろう。義手、義足、衝撃的にも義眼まで存在した。一口に義肢といっても形状は様々だ。見た目に特化した義手、ものをつかむことに特化した義手、種類を見ていけば止めどがない。当時それだけ需要があり、生産されていたのだろう。

義肢を装着した彼らは、一体どのような気持ちだったのだろうか。いくつかそんな彼らの写真を見学した。戦況下、義足を装着し、トレーニングをする様子。彼の目に映っていたのは、希望か、絶望か。少なくとも、希望に目を輝かせているものはいなかったと思う。

＜二つの資料館を通して＞
　共通して感じたものは「多大なる戦争被害の実態から、戦争の恐ろしさを学ぶことが大切である」というメッセージであった。被害、といっても日本が受けた被害のみならず、日本、あるいは世界中の戦争が各国に与えた被害も同様だ。私は、遊就館、しょうけい館の展示から、人々の戦争被害を痛いほどに学習した。戦争の与えた被害の規模は計り知れないが、少しずつでも理解を深めていくことの必要性を感じる。
　こういった戦争の歴史を展示する施設は度々批判を受けているイメージがある。やはりそれだけ複雑な問題なのである。しかしながら、一概に言えることは、現代に生きる私たちは、二度と戦争の恐怖を繰り返してはならないということである。人それぞれ、戦争に対する解釈が異なったとしても、もう一度その道に踏み込まないための共通意識が必要である。資料館へ訪れるという経験は、歴史から離れつつある私たちにその意識へ強い確信を与えてくれる。

「靖国神社を訪れて」

２年　橋詰貴行

＜遊就館＞
　私は靖国神社の境内にある遊就館を最初に訪れた。そこでは先の大戦で亡くなられた方のご遺品や遺書を展示。さらに、絵画、美術品、武具甲冑、武器類等も展示。そしてそれを後世に伝えるといった目的を持つ。実際にとても多くの展示品があり、細かく学習することは不可能だったが、概ね学ぶことができたと思う。その中で初めて知り、聞いたことはあるが詳しく知らなかった、印象に残ったものがいくつかあるので紹介したい。
　一つは占守島の戦いである。終戦から３日経った８月18日にソ連軍が千島列島の最北端にある占守島に攻撃を仕掛けてきた。武装解除を進めていた日本軍は再び武装しなければならなかった。そしてソ連軍を水際まで追い詰めたが殲滅しようとした時、戦闘を停止し自衛戦闘に移行しろとの命令が下された。そして、交渉の末、戦いは21日に終結した。しかしソ連軍は24日に再び南下し、今に繋がる北方領土問題を生み出すことになった。恐ろしいことにスターリンは、当初北海道の半分まで占領しようとした。それを日本軍がソ連軍を一週間程、占守島で引き留めたことにより阻止できた。犠牲となった日本軍は千名弱。その間国民の食糧確保のため缶詰工場で働いていた女子工員400名ほどが無事に逃げ出すこともできた。
　二つ目はインパール作戦である。日本はミッドウェー海戦で大敗を喫していた時に、インドのチャンドラボースがイギリスからの独立を求め支援を要請した。そこから形勢逆転を図ろうとした日本はインパールの奪取をインド国民軍と目指した。そしてインパール周辺にインドの国旗を打ち立てることができた。だが、イギリス軍の激しい抵抗や食糧不足により撤退を余儀なくされた。
　そして戦後に入り、イギリスはインパール作戦に参加した将校を殺そうとしたためインド国内で大反乱がおき、遂に統治権を譲渡。そしてインドは独立を果たした。だから、インドは親日の人が多い。実際にインドの退役軍人の方から日本を褒め称え、インドの独立のために手を差し伸べた日本に感謝の気持ちを表している記述がある便りが届いている。
　この様に悲惨な現実と日本が他国に対して感謝される様な事実が多く展示されていた。

＜しょうけいかん＞
　ここは、戦争で傷つき病に倒れた戦傷病者とその家族の苦しみを伝えるために作られた。徴兵されるときにおいての条件、戦争に出征する時にどういったことがなされるか、受傷した時になされる応急処置、その後の処置などを詳しく学ぶことができた。
　私が驚いたのは麻酔なしで腕が切断されることだった。いくら肉体の腐蝕が激しくとも麻酔なしで体の一部が切り落とされるなど私は耐えられない。実際に当時戦地でそのような手術が行われていた。さらに戦後になっても負傷兵は、仕事を探すのに苦労をしたなどの非常に厳しい現実があった。
　私は戦争を経験したことはないがそのような実体験を見たり聞いたりして切なくなった。

＜最後に＞
　遊就館としょうけいかんを比べてみて、伝えたいことに微妙な差があると思う。
　遊就館は日本の行ったことに対して少しでも美化したそうだった。しょうけいかんは、辛い現実を刻々と映していた。戦争の無意味さをどちらも教えてくれた。これからも世界が平和でいられるよう不断の努力をしなければならないと切に感じた。

「H28　東京巡検　靖国神社」

１年　今田莉彩

はじめに
　靖国神社は、1869年に戊辰戦争で戦死した「官軍」兵士の慰霊のための「東京招魂社」を前身に持つ神社である。ここには対外事変や戦争に際して「祖国を守るという公務に起因して亡くなられた方々の神霊」が祀られており、その数は約246万６千余柱に及んでいる。
　遊就館は靖国神社の境内にあり、戦没者たちの遺品などを収蔵、展示する施設である。
　また、しょうけい館は、戦傷病者とその家族が体験した戦中・戦後の労苦を後世に語り継ぐための施設である。

１　遊就館の見学
　遊就館は明治15年に開館し、関東大震災や戦争の影響でたびたび閉館したが、昭和61年に再開された。日本の「武」の歴史や明治維新からの数々の戦争の歴史が記されており、戦没者の遺品などの史資料が多く展示されている。艦上爆撃機「彗星」や人間魚雷「回天」などの大型の兵器から、日章旗や電文、遺書などまで、その種類は様々であった。また、米国との戦争を避けるために行われたとされる、日米交渉にまつわる貴重な映像も上映されていた。

２　しょうけい館の見学
　次に見学したしょうけい館（戦傷病者史料館）は、厚生労働省が平成18年３月に開館した施設である。戦傷病者の証言をもとに、ある兵士の入営から戦後の労苦までを、映像や模型、ジオラマなどを用いて展示している。
　戦傷病者は、受傷や救護、搬送、治療と療養生活だけでなく、その後の社会復帰の際にも大きな労苦を経験したそうだ。また、彼らの家族も大変な思いで戦後を生活したという。展示の中には、受傷した人々や元軍医、衛生兵などの体験や証言に基づく野戦病院のジオラマ、義肢や義眼、実際の摘出弾などもあり、戦時中の過酷な状況に驚くとともに、当時の人々の計り知れない労苦に胸が痛くなった。

３　両館の共通点と相違点
　遊就館としょうけい館の展示を比較したときの共通点として、両館とも戦中戦後に使われたものや当時の資料が多く展示されていたことがあげられる。
　しかし、その展示方法には大きな相違がみられた。遊就館には主に日本の歴史の流れの展示や、「英霊」と呼ばれている戦死者の顕彰などがあったが、どれも生身の人間から一歩引いた視点で展示されている印象で、私には、当時の人々の生きざまや感情があまり感じられない、無機質なものに思えた。また、アメリカとの戦争を回避しようとしたが、やむなく突入した、というような記述もあり、日本の戦争責任のあいまいさを感じた。
　それに対してしょうけい館では、戦地の人々が負った傷の深さと家族の労苦が展示されており、戦争のむごさを目の当たりにした。また彼らから、戦争は悪であり二度と繰り返してはならないという強いメッセージを受け取った気がした。戦争体験者は、このような施設を通して、日本が歩んできた悲惨な歴史を伝え、これからどのような道を選んでいけばよいかを私に考えさせた。

４　靖国問題
　首相による靖国神社の参拝は、毎年終戦記念日近くになると話題にのぼる。多くは首相に向けた批判だが、問題視されているのは、靖国神社には戦争犯罪者と呼ばれる人々も合祀されていることである。戦犯が合祀されている神社に首相が参拝するという行為を通じて、日本

には先の戦争を反省する心がなく、再び日本が戦争の道に進むのではないかという危機感を覚える人もいる。一方で、戦死した家族が靖国に祀られることに誇りを持っている人もいる。このような価値観の違いが、問題の解決を困難にしている。

靖国問題の解決には長い年月がかかることだろう。しかし、一人一人が異なる考えにも耳を傾け、互いに歩み寄ろうとすることが何より重要だと考える。

5　まとめ

今回の靖国神社の見学を通して、戦争に対する考えの違いを学び、それに伴う問題についても深く知ることができた。今後も価値観の異なる人との衝突の可能性はあるが、互いの意見を尊重しながら歴史問題について考えていく必要がある。

「東京巡検レポート　靖国神社・遊就館・しょうけい館」

2年　坂野水咲

巡検二日目の午後、私は靖国神社と遊就館、しょうけい館を訪問した。

遊就館の展示は第二次世界大戦のことだけではなく、幕末から戦後に至るまでの時代が事細かく説明されていて、非常に面白かった。鳥羽・伏見の戦いの際の錦の御旗や、「新高山ノボレ一二〇八」の電文の展示など、一日かけてもすべて見ることはできないくらいに詰め込まれていて、２時間しかいられなかったのが残念だった。

展示の内容自体は、当然ではあるが学校の教科書や資料集を、より詳しく、より鮮明に説明するもので、偏った思想などは感じられず、亡くなった方々への敬意と歴史の事実のみが述べられていたように感じた。韓国や中国、東南アジアに行ったことの展示に注意して見学していたのだが、韓国については「韓国併合」というパネルがあって条約の調印の流れのみが説明してあった。また中国については、満州についての大きなパネルがあり、日中戦争についてかなり詳しく知ることができた。しかし、盧溝橋事件については中国側が先に射撃したように書かれており、南京については「南京事件」と記載されているのみで虐殺については何も触れられていなかった。勿論、場所が場所なので虐殺があったと書くわけにはいかないのは理解できる。しかし、アジアの人々に苦痛を与えてしまったことは事実なのだから、それについてのパネルがあってもいいのではないかと思った。

戦争関連の博物館として特徴的なのは、スポットライトが軍人に絞られているということだろう。大阪巡検で訪れたピースおおさかでは逆に、犠牲となった民間人が大きく取り上げられていたのを覚えている。

しかし遊就館では、靖国神社に合祀された戦死者の顕彰を目的としているので、幕末の志士や日清・日露戦争、そして第二次世界大戦で亡くなった英霊の方々について、遺品や兵器の展示と共に紹介している。遺品の中には、アルミ貨や万年筆など、沖縄の女学生（ひめゆり部隊）のものも含まれていて、自分と変わらない年の女の子が国を守るために戦って命を落としたのだということを目の当たりにした。

日露戦争でなくなった軍人の、遺族への手紙や血染めのYシャツ、千人針などの展示もあった。更に、神風特攻隊の像や、編成を指揮して終戦決定後に割腹した中将の遺品、他にもたくさんの、戦った人々の残したものを見た。

私の心に一番残っている展示は、音だ。人間魚雷回天に乗った、海軍大尉の塚本太郎さんの遺書が、肉声でレコーディングされたものが残っていて、ヘッドフォンで聞くことができた。両親への感謝と自分は今から日本のために行くのだという明るい言葉や最後の「元気で征きます」と結ぶ声は辛かったが、最後まで聞ききった。

その隣の部屋にはたくさんの戦没者の方々の遺影が壁に掛けられていた。そのとき見学していた人の中には涙ぐんでいる人もいて、その視線の先を見ると、残された妹が終戦70年に際して兄に「夢でもいいから会いたいよ」と綴った手紙があった。軍人も、家族や友達、大切な人がいる、一人の人間だと、改めて思ったのだった。

特別展では軍属の人々に関する展示を行っていた。実は私の曽祖父も亡くなった軍属の一人だ。軍医として戦地に同行し病気になって、帰国して亡くなった。彼もまた、靖国神社に祀られている。それもあって、この特別展は身近に感じた。医者のほかにも整備士や漫才師、沖縄で散ったひめゆり部隊、看護婦や学徒動員で駆り出された学生たち。非常に多くの人が、日本を守るために様々な場所で命をかけて戦っていた。

靖国神社は戊辰戦争の政府軍死者慰霊の招魂祭を行った地に創建され、京都招魂社の祭神を合祀し、以来戦死者を祀る社となった。いわゆるA級戦犯が合祀されており、かねてから首相の公式参拝が問題となっている。私は首相の公式参拝は控えるべきだと思っていた。国際問題になりかねないことをわざわざする必要なんてない。批判するアジア諸国に苦痛を与えた人が祀られているのに、一国のトップが参拝するのは失礼なのではないかとも思っていた。しかし、今回靖国神社に参拝し、遊就館を見学してみて、少し考えが変わった。ここに祀られているのは英霊の方々である。先の戦争を肯定するつもりはない。日本は残酷なことをした、過ちだったと思っている。でも、戦った人々を否定したくない。たとえA級戦犯であっても、国のために自分を犠牲にした人であることに変わりはないと思うのだ。その行動が他国に対して非道であったこともわかった上で、彼らのおかげで今私たちは平和な環境に生きているということに素直に感謝したいし、後世に伝えていかなくてはならないと思う。

問題は首相が公式参拝するかどうかということだが、私はこれについてはよくわからなくなってしまった。国際関係を重要視するなら、やめるべきだろう。しかし同時に、それでも堂々と、英霊の方々に感謝したい、そしてその姿勢を日本中に発信してほしいという気持ちもあるのだ。

戦争で日本がしたこと、日本のために戦った人のこと、日本のせいで苦しんだ人のこと、すべてをできるだけ正確に伝えていくことが重要だ。

しょうけい館は、戦傷病者とそのご家族が戦中・戦後に体験した様々な苦労についての証言や資料を収集・保存・展示し、私たち後世の人間にその苦労を伝えている施設だ。一番印象が強かったのは怪我をして看病を待っているのに放置されている野戦病院の兵士のジオラマだった。うめき声がリアルで、少し怖くもあった。

しょうけい館で気づかされたのは、戦争の犠牲者は亡くなった人だけではないということ。原爆の被爆者の苦労はいろいろなところで読んだり聞いたりしてある程度知っていたが、その他にも手足を失ったり、ガラスが体の深くにまで入ってしまったり、たくさんの人々が戦争によって苦しんだことを知った。考えてみれば当然のことなのだが、実はあまりそこまで考えたことがなかった。自分の想像力不足を感じた。

今回の訪問と、前回のピースおおさかの訪問で、戦争について改めて学んだ。民間人も軍人も、非常に多くの人が犠牲になっていて、その一人一人が精一杯生きていたことを強く感じた。二度と繰り返してはいけない、なんて簡単に言うけれど、もし国全体が戦争に動き始めたら私は何ができるのだろう。そんなことも考えた。きっと何もできないと思う。だからまず、そんな空気を作らないためにも、このような施設を多くの人が訪れて、戦争についてしっかり知るようにしなければならないと、伝えていくことの重要性を再確認した巡検だった。

「遊就館、しょうけい館を見学して」

1年　稲田栞里

＜遊就館＞

遊就館を見学して私が感じたのは、戦争で亡くなった軍人、英霊の顕彰という目的が一貫しているということだった。展示は主に、明治維新の頃から太平洋戦争までの流れを解説した史料と、戦死した軍人の遺品や兵器などの資料から成っている。近代の歴史の描き方はかなり淡々としているように感じた。戦争を中心に、日本の歩みを追った解説は非常に理解しやすいもので、特に太平洋戦争の頃に関して、国際情勢や日本の動きが分かりやすくまとめられていた。

一方で戦争の負の側面があまり描かれていないという印象を受けた。戦争により大きな負担を強いられた国民の苦労や、日本に植民地として支配された韓国をはじめとするアジア諸国の人々の生活に関する記述は全くと言ってよいほどなく、終戦間近の日本の状況はかなり

苦しいものだったはずだが、それもあまり感じさせない。広島、長崎に落とされた原爆に関する記述がたった４行であったことが印象的だった。空襲などの日本の人々の生活を大きく取り上げたピースおおさかの展示と比較すると、その点では物足りなさが否めない。

それに対して軍人の遺品などの資料は大変充実していて、戦争をリアルに感じることができるものだった。戦死した軍人一人ひとりの戦争における功績と、衣服や手紙といった遺品が並べられており、彼らに対して自然と敬意を持つことができた。ただ、展示されている手紙などの文章にも、戦争をネガティブに捉えたものはあまり見受けられなかった点が少し気になった。この遊就館の展示内容は、戦争の正当化でも軍国主義的なものでもなく、英霊の顕彰を大きな目的としたもので、戦争を考えるうえでこのような視点を知ることも非常に大切であると思う。

＜しょうけい館＞

しょうけい館の展示は、遊就館とは対照的だった。戦争は恐ろしいもの、二度と繰り返してはならないという強い主張が展示全体を通して感じられた。軍人一人ひとりに焦点を当てて遺品とともに紹介されている点は遊就館と共通していたが、戦地での兵士の状況が非常に厳しいものであったことや、野戦病院における治療の様子、戦争で怪我を負った兵士とその家族の苦しみなどを中心として、銃弾を受けた際に身につけていたものや、手紙や日記などの文章、映像資料や模型などを用いて非常に生々しく描いていた点が印象的だった。英霊の功績を称えることを目的とした遊就館と、戦争の恐ろしさを伝えることが目的のしょうけい館では、展示の仕方が異なり、訪れた人が受ける印象も全く違う。しょうけい館は、より戦争体験者の語りたいことが伝わる展示だったと言える。

太平洋戦争に関しては様々な捉え方があり、一概にどれが正しいと言えるものではない。戦争を考えるうえで大切なのは、様々な視点を知ったうえで多角的に捉えることであり、この遊就館としょうけい館の展示の仕方の違いによってそのことを改めて認識することができた。

「靖国神社を訪れて」

１年　元吉千遥

九段下駅を出て、すぐにその大きな鳥居は都心の真ん中の深い森の中に静かにそびえ立っていた。広い閑散とした境内を歩き、本殿で参拝する。私の思っていた「靖国神社」とは違った。私の思っていた靖国神社は、もう少し張り詰めた緊張感をもち、日韓間の対立を象徴するものだったのだが、意外にも靖国神社は静寂で落ち着いた雰囲気だった。平日だったからかもしれないが、敷地内は人影が少なく、訪れていた人は戦争の時代を知る年配の人だけでなく、意外にも大学生と思われる若者や、外国人の人もちらほら見かけた。そういう意味ではいろんな年齢層や国籍の人々が靖国神社に関心を持っており、これは日本だけの問題でもないということがわかった。

本殿のそばに建っていたのは、本殿とは似つかわしくないモダンなコンクリート造りの遊就館だった。遊就館の入口と入ってすぐのホールには実物大のゼロ戦の模型が、また受付を通ってエレベーターで二階に上がった先にも戦中や戦後に作られた戦争の軍人の像が展示され、様々な遺品や当時のことを知ることが出来る展示物が陳列されていた。先程までの静寂な靖国神社の雰囲気とはうって変わり、この戦争の悲惨な様子を感じさせる雰囲気は、やはり靖国神社は日本を守護するために亡くなった戦没者を追悼・顕彰するシンボルであり、ほかの神社とは異なることを思い出せた。

そもそも靖国神社の起源は明治２年６月29日に建てられた東京招魂社に遡る。当時大政奉還直後の体制移行期にあった日本は、江戸時代終盤から天皇を支持する集団と徳川政権の対立が高まり、戊辰戦争が勃発した。その戊辰戦争で近代国家建設のために尽力した多くの人々の尊い命が失われたので、明治天皇は国家のために一名を捧げたこれらの人々の名を後世に伝え、その御霊を慰めるために東京招魂社を創設した。この招魂社が靖国神社の前身で、明治12年６月４日に靖国神社と名前が改められた。また、その後、明治10年に山県有朋を中心に「御祭神の遺徳を尊び、また古来の武具などを展示する施設」として構想され、明治15年に開館されたのが遊就館である。

遊就館の館内をざっと一巡してみると、日本の戦争の歴史（特に明治維新後）が展示されていた。展示の中には血で汚れた軍服や、髪の毛で作られたカーペット、砲弾などがあり実に生々しく戦争を物語るものがあった。また説明文には図や絵などが載せてあり、とてもわかりやすくなっていた。だがその一方で、説明文はほとんど日本語で書かれており、英語の説明はそれほど書かれていなかった。ましてや中国語や韓国語の説明は見られなく、遊就館にもたくさんの外国人の訪問があったのにも関わらず、自分の国の言葉で理解することが難しくなっているのは、非常に残念だと感じた。

靖国神社や遊就館は、戦没者を祀り、御祭神の遺徳を尊ぶためにあるとともに、日本の戦争の歴史を語り、展示するものでもあるので、世界へ戦争に対しての日本の見解を示すためにも、もう少し海外からの訪問者にも理解してもらう工夫をするべきではないのかと思った。４年後の2020年の東京オリンピックで今後多くの外国人観光客が訪問されることが予想される中、対応が急がれる。また、いろんな視野で第二次世界大戦を見るためにも、もう少し日本が大東亜戦争によって周辺国に及ぼした影響というものも展示するべきだと思う。

「靖國神社・遊就館・しょうけい館を見学して」

１年　小澤響子

この度、私は初めて靖国神社と遊就館、しょうけい館を訪れた。東京に旅行に来ても、家族で行こうとはなかなかなりにくいし、かといって自分一人でも目的地に設定することがなかった。しかし今までSGHのゼミで、戦争責任や戦後補償について講義を受けるうちに、戦争当時を教科書やメディアなどから教わるだけでなく、その雰囲気を実際に肌で感じることも必要だと思ったので、これらの施設を見学することに決めた。

＜靖國神社について＞

大きな鳥居を抜けて中に入ると、奥に本殿が見える。まっすぐの道を歩いている間、私の頭には荘厳という言葉しか浮かばなかった。そこには重々しく、思わず黙り込んでしまうような雰囲気があった。参拝を終えた後にふと、ここへ参拝しに来る人は何を目的とするのだろうかと思った。肉親の成仏や世界平和への祈念、あるいは同じ過ちを起こさぬための自分への戒め…靖國神社参拝というのは人によって様々な意味を持つ。それはすなわち他人によって異なる意味を持たされてしまうこともあるということだ。しかし、戦争という形で命を落とした先人を悼む心は全ての参拝者に共通していると私は思う。

＜遊就館について＞

遊就館は靖國神社の敷地内にあり、本殿の横に位置するため、参拝を終えた人はたいてい遊就館に立ち寄るだろう。そのような大事な施設では、どのような展示がされているのか大変気になった。中に入ると、まず外国の方の多さに驚いた。彼らには、遊就館の展示が日本の大多数の意識として捉えられているのだろう。さて、展示の仕方についてだが、私が驚いたのは展示されているものの多さである。ここからも遊就館が日本を代表する戦争史料館であることをうかがい知ることができる。しかし歴史描写について言えばやや日本側の視点に偏ってしまっていたと思う。例えば、日清戦争についての年表は壁の面積を広く使って書かれ、日本が勝利した出来事は赤く斜めの字で目立つようにされていた。それに対し、戦争当時の他国の状況は、部屋を入ってすぐの、私たちが通り過ぎてしまうような所に少しだけ書かれていた。また、殉職した日本兵は写真とともに日記や手紙、遺品なども多く置かれていたが、日本兵が傷つけた戦争相手国の兵や、慰安婦などについての展示はなかった。日本最大級の戦争史料館に、日本が他国に与えた危害の詳細が記されていないのはどう考えてもおかしい。慰安婦問題については今だに認識に大きな差異があり、根本的な解決に至っていないが、まずは自分達がしたことをきちんと、正式に認めることが必要だと私は強く思う。

＜しょうけい館について＞

しょうけい館は、靖国神社・遊就館と同じ敷地内ではなく、少し歩

いて路地に入ったところにあるため、たまたま通りかかるというのは少なそうだ。しょうけい館は戦傷病者史料館とされ、その名の通り、戦傷病者とその家族の暮らしに焦点を当てている。よって細かい戦況の変化についての表記はない。しかし、人形による手術現場の再現や当時の義手などを見ると、彼らの苦しみがストレートに伝わってきた。戦争の恐ろしさだけが心に強く迫ってくる展示であった。

＜私が考えたこと＞

改めて、外国の方と話をするのに、これらは日本人として一度行っておくべき場所だと感じた。なぜなら前述したように、歴史認識において重要な役割を果たす施設を実際に訪れること、日本の国の姿勢を示す展示に触れること、戦争の恐ろしさを本当の意味で知ることは、自国を理解し、戦争を未然に防いでいくために不可欠だからだ。もちろんこれらの施設だけではまだ不十分なので、これからもその日本人としての最低限の見識を身につけるために努力していこうと思う。

「近代日本の社会と戦争―遊就館としょうけい館の比較―」

１年　工藤文那

今回の東京巡検の締めくくりとして、私は靖国神社内に設けられた「遊就館」と、その近くに創設された「しょうけい館」を訪れた。これらの場所で私が感じ取った近代日本の社会と戦争について以下に述べる。

遊就館は、1887年靖国神社に合祀された戦死者の顕彰を目的に開館した博物館である。今回私が注目した展示は、近代日本の戦争に関する展示である。「日本」という国がどのように戦争を進めたか、どのような兵器を用いたか、どのような風潮が社会に広まったか、使用された実物とその解説が中心に展示されている。私がここで感じたのは、「戦時中の日本人に対する評価」である。戦争で亡くなった人々を「果敢に挑んだ」などと賞賛するような解説が多かったように思う。また、描かれているのは日本人の視点のみで、当時日本に在住していた朝鮮の人々や移民の人々の視点は描かれていなかった。さらに、戦死者に関する資料は多くあったものの、戦争被害者・戦争傷病者の戦後社会の様子に関する資料は皆無といっても過言ではなかった。

しょうけい館は、2006年に傷痍軍人に関する研究・展示機関として創設された。ここでは、軍人が戦争で身体の自由を失った経緯、戦時中の医療、戦後の社会復帰に対する困難などを経験者の声に基づいて解説・展示している。私はここで、「戦争が個人個人に与える負の影響」を感じ取った。戦争で失った手や足や目は、決して彼らのもとに戻ることはなかった。その代わりに、日本国内では、ドイツなどの医療が進んだ国で生産された義手や義足や義眼の消費が盛んになった。実際に使用されたそれらの道具も展示されている。戦後の社会で生きる元軍人の様子から、戦争のむごたらしさがひしひしと伝わってきた。

遊就館としょうけい館の展示を比較しようと思う。まず、二つの共通点としては、「展示品・展示内容」「日本人の視点で描かれている」という点が挙げられる。どちらも、当時実際に使用されていた道具を多く展示し、日本人の視点で解説をしている。

次に、二つの相違点については、四つの観点から考える。一つ目は「展示が捉える内容」である。遊就館が日本という「国」のとった大まかな行動を捉えるのに対し、しょうけい館は日本兵という「個人」の受けた被害にスポットをあてて、細かく捉えている。二つ目は「社会に関する展示」である。遊就館は「軍人の生活」つまり国の方針を展示し、しょうけい館は「戦地での実際の生活」や「一般人の生活」を展示している。三つ目は「対象となる地域」である。遊就館では、日本国内の様子を、淡々と歴史を追う形で展示している。しょうけい館では、兵士が派遣された現地の様子をリアルに展示している。四つ目は「人々の戦争から受けた影響」である。遊就館は戦中の貧困や戦死した軍人の遺族に関する展示が多く、しょうけい館は傷病者の戦後社会復帰に関する展示が多い。

今回の見学を通して、人々の戦争観の違いを感じた。遊就館では、戦争に対して客観的に評価する姿勢を見受けられたのに対し、しょうけい館では、戦争に対して主観的な「経験者の生の声」を用いて抗議する姿勢を見受けられた。様々な展示を通して、戦争に対する知識を深めるとともに、戦争観の違いを理解することができた。今、世界各地で起こっている紛争に関与する人々にも、それぞれの価値観や感性がある。それらを尊重し、それぞれの観点で戦争を「伝える」ことがこれからの社会に必要とされるのではないだろうか。

「東京巡検　靖国神社・遊就館・しょうけい館　まとめ」

１年　南出理夏子

東京巡検２日目は靖国神社と遊就館、しょうけい館に行った。

靖国神社とは1869年、東京九段に安政の大獄以来の国事殉難者を祭るため、京都招魂社の祭神を合祀して東京招魂社として創建。以来戦死者を合祀する社として1879年に靖国神社と改称。天皇が親拝する特別な社になった。1978年、A級戦犯を密かに合祀したり、1985年、時の首相中曽根康弘が公式参拝し国内外からも批判されるなど物議をかもしてもいる。

遊就館とは、1887年に靖国神社に隣接して建てられた、戦死者の顕彰を目的とした遺品などを展示した博物館である。

しょうけい館は2006年、厚生労働省と日本傷痍軍人会により傷痍軍人に関する研究・展示機関として創設された。

主に遊就館としょうけい館の展示の特色や両者の違いに重点をおいて見ていきたい。

遊就館では近代の日本が使っていた兵器や軍備の様子などが展示されていた。全体的に日本の資料ばかりで海外の反応などの展示はなかった。また、軍人の当時は美談と呼ばれていたであろうエピソードも沢山紹介されていた。「電光石火」「壮絶」などといった言葉が多用され、自国軍の勇ましさをアピールするような節が多い点が印象に残った。どちらかというと先の大戦は正しい戦争であるという昔の資料や遺族の方の手紙もあり、間違っていたという声はあまりないように思われた。また、戦争は間違っている、してはいけないことだと教えられている我々にとり、戦争をたたえるように記してある資料を見ると、70年前くらいまではこのような意見が主流だったのかととても驚いた。

しょうけい館は遊就館のあとに行ったせいもあるのだろうが、今の世論、風潮が色濃く出ているような展示であったような気がする。蝋人形などで再現された戦時中の病院の展示はとても恐ろしく、本物はもっと恐ろしかったのだろうと思われた。戦争体験者の作文は傷痍軍人だからか、戦争で負った障害で苦しんだエピソードが沢山あった。そして、企画展「夫とともに歩んだ道－戦傷病者の妻として生きて－」は、もう二度と戦争は起こしてはいけないという強い気持ちが感じられる展示だった。また、義手や義眼、義足もあり、まざまざと戦争の悲惨さを感じることができた。

今回、初めて靖国神社・遊就館・しょうけい館に行った。遊就館では今の世代で教えられたことと真逆の展示が沢山あり、これを素直に受け取れる日が来なければいいと思った。しょうけい館では、改めて戦争はおこしてはならないものだと認識した。展示されていた義足や義手の必要がなくなる世の中に早くなるようにこれからも戦争について考えていきたい。

「靖国神社、遊就館、しょうけい館を訪れて」

１年　岩田純怜

遊就館の、あるコーナーで、日本は戊辰戦争の時、戦死者は地域の守護神として尊崇されたとあり、日本人は古くから戦死者に対して特別な感情を抱きやすいことを知った。また、戦死者の霊を、国家の守護神、英霊として神社に祀るのは、日本人の古今を貫く信仰だとの記載もあった。靖国神社では、戦没者を英霊として祀っている。しかし現代では、「英霊」と聞くと戦争を美化しているのか、と過敏に反応し、政府関係者の靖国神社参拝もニュースなどでは大きく取り上げられ、批判されることも多い。

今回訪れて、靖国神社は少なくとも、決して戦争や軍国主義を美化することを目的にしているわけではないと感じた。ただ、何か少し時

代錯誤のようなものも感じた。それはきっと戦時までの日本人の考え方を体現した結果だと思う。

しかし、美化をしていないと言っても、戦死者たちの遺品や遺書を読んだり、当時の過酷な状況を知ると、彼らが命をかけて戦ったおかげで現在平和な時代の中でこうして生活できることへのありがたさを感じ、自然と頭が下がる思いであった。そして、近代の描かれ方についてだが、今まで訪れたどの資料館より、加害の立場からの視点が薄かった気がする。その代わりに日本軍の兵士の武勇伝や遺書の展示が多く、日本兵一人一人の人生の儚さや男らしさを強調する記述が多かった。

しょうけい館は、怪我をした兵士を対象とした資料館であり、戦死した兵士の展示ではないので、戦争中の状況だけでなく、戦後彼らはどう生きたのかも知ることができた。劣悪な環境に必死で耐えた兵士たちの証言、過酷な野戦病院での治療など、当時の状況はこれほどまでにひどいものだったのかと思った。また、非軍事化政策により軍人恩給が廃止され、彼らは戦後も一般の人に比べ、就職難、食糧難と言った当時の社会状況の影響をより一層大きく受けた。それに、戦争中は国のために必死で戦ったのにも関わらず戦後は一転して、腕や足を失ったことに対して冷たい視線を送られることも多くなったという。

私は、平和な時代が訪れたはずの戦後に、こんなにも苦しんでいた人がいたことを知らなかったし、彼らがどれだけ大変な思いをして戦後生き抜いてきたか、どれだけ理不尽な言い分で社会から拒絶されてきたかを展示するこの施設は、終戦しても決して全てが元通りになる訳ではない戦争の本当の恐ろしさを私たちに伝えてくれる貴重な場所だと思った。

「靖国神社を訪れて」

１年　大道夏希

靖国神社はとても広い敷地のところでした。さすが世界的にニュースになるだけあって、日本人よりも外国人が多かったです。いくつもの記念博物館のようなものがありました。

私たちが見学した遊就館はいかに兵士たちが頑張ったか、当時のその人達はどのような気持ちであったか、が手紙などを通じて展示してありました。武器がたくさんあり、とくに印象に残ったものは、かみのけで作られたロープです。全て人が、戦のためにあった現実を目の当たりにしました。

しょうけい館は、戦傷者についての展示でした。戦傷者の故郷を思う気持ちや、生への貪欲さ、その後の苦労について、戦争へ派遣されたころとの気持ちが対比されて展示されていました。

戦死者の後悔を感じ、戦争の愚かさを改めて重く認識しました。

「靖国神社に参拝して～私たちが出来ること～」

１年　豊田優里

靖国神社とは、明治維新およびそれ以後の日本のために戦って殉死した246万余の霊を合祀しているところである。

参拝を通じて、明治維新、日清戦争、日露戦争、太平洋戦争などで日本のために命を捨てて下さった方々がいたから、私たちは今の日本を生きているということに気づかされた。そして、国に殉じた方々への尊敬と感謝の念がわいてきた。

英霊の魂を癒すにはどうしたらいいだろうか。「かわいそうだった」と言うだけでは報われないのではないか。それには、私たちができることが２つあると思う。靖国神社に参拝するにあたって祖父から勧められた本「特攻へのレクリエム」（工藤雪枝　中央公論新社）という、神風特別攻撃隊について当時の資料、遺書をもとに書かれた本を読んで考えたことも踏まえて考えていきたいと思う。

私たちに出来ることの１つ目は、英霊に心から感謝することだ。政府関係者が靖国神社に参拝するとたくさんの批判が集まる。私は、政府関係者が参拝することに賛成である。終戦後のアメリカの占領政策の中に日本軍将兵の激しい敢闘精神の支柱を打ち砕く計画が入っていた。その中には、「靖国神社を焼処分する」という計画もあったという。しかしそれに対してローマ教皇庁代表は『自然の方に基づいて考えると、いかなる国家も、その国家のために死んだ人々に対して権威を払う権利と義務があるといえる。それは、戦勝国か敗戦国かを問わず平等の審理でなければならない』と言っている。英霊は日本国民が平和で幸せに暮らせる時代のために命を懸けて下さった。私たちは、英霊がいなければ、平和な日常を送ることはできないだろう。国のために命を捨てた方々に感謝することは必須のことであるはずだ。

２つ目は、素晴らしい祖国を将来にわたって築いてほしいという英霊の意思に応えること、つまりより良い日本をつくることである。これは私たち高校生の得意分野であるはずだ。英霊の想いは「後を頼む」という彼らの言葉によく表されている。私たちが彼らの遺志を受け継ぎ、平和で、世界に誇りうる国、日本をつくることで、初めて英霊の魂は癒されるのである。

「靖国神社・遊就館・しょうけい館を見学して」

２年　加藤杏菜

東京巡検２日目の午後は、靖国神社と遊就館、しょうけい館に訪れた。靖国神社では、境内に入るとその鳥居や灯籠など全てのスケールの大きさに、ただただ圧倒された。私は靖国神社を参拝したあと、まず遊就館を訪れた。

遊就館でしばらく展示品を見ていくうちに、私はあることに気がついた。それは、視点が当時の政府側に傾いているということだ。なかでも特に気になったのが、ある文章の「自存自衛のため、対米（英蘭）戦争を辞せざる決意…」という部分だ。これは、遊就館の大東亜戦争コーナーにあったものだ。この、「自存自衛のため」が意図するところは、つまり、日本が各国に重要物資を依存していたなかで、欧米の理不尽な経済制裁がなされ、日本は自国を守るために「やむをえず」大東亜戦争を開戦したのだ、ということだろう。これには、少なからず戦争を正当化する意図が感じられる。また、日本側の被害者としての視点ばかりがかかれており、加害者としての視点が欠落しているとも感じた。

この日、外国人が何人か訪れているのを見かけたが、私たちとは違う歴史を学んできたこの外国人たちは、これらの展示を見たときにどう思うのだろうか、私は少し気になった。私たちは、戦争を実際に体験したわけではない。だから、学ぶことでしか戦争を知ることができない。歴史に、多少自国の主観が入ってしまうのは仕方がないとは思う。しかし、私たちが見て学ぶものに　あまり歴史の偏りがあると、よく日韓の間で言われるような歴史認識問題に繋がるのではないかなと感じた。

遊就館の次には、しょうけい館を訪れた。ここは、戦傷病者に焦点を当てた史料館である。一見普通のビルだが、その中には様々な工夫が凝らされた展示品の数々があった。こちらは遊就館とは違い、戦争のむごさや恐ろしさが非常に伝わってきた。特に、野戦病院の手術の様子を再現したジオラマは、本当に恐くて直視できなかった。そのような事が当時は現実に行われていたのだ、もしくはもっとむごいことが行われていたのだ。そう思うと、今の時代に生きる自分がいかに幸せかを痛感させられる。

しょうけい館には、心に訴えかけるような、資料や遺品、体験記などが数多あった。それらを提供された戦争体験者の方々は、きっと戦争はいっときの出来事では済まされず、終戦後も苦労を抱えた人々がたくさんいたということを、後世に伝えたかったのではないかと思った。そして、それによって、決して二度と戦争を起こしてはいけないということも、伝えたかったのだろうと感じた。

遊就館・しょうけい館と、二つの施設を見学したが、これら二つから受けた印象はかなり違った。遊就館では、戦時中の軍事作戦や軍事史年表、兵士の遺書・遺品などの展示が多く、当時の兵力または国力としての、ひとくくりの日本を描いているという印象を受けた。また、少々政府寄りの視点であると感じた。一方で、しょうけい館では、戦中・戦後の戦傷病者の苦悩を伝えるジオラマや遺品などの展示が多く、戦争によって狂わされてしまった一人ひとりの人間の人生がえがかれているという印象を受けた。

なぜこのような印象の違いが生まれたのだろうか。一つの理由として、遊就館が靖国神社に併設されていることが挙げられる。靖国神社

では、戦死者を神霊として祀っている。そのような場所であるので、戦争を全否定してしまうと「靖国で会おう」といって散っていった戦死者たちが報われないから少々美化された展示になってしまうのではないかと考えた。

「靖国」という社号は明治天皇が、「祖国を平安にする」「平和な国家を建設する」という願いを込めて命名したものだ。だから、戦死者の祀られた場所ではあるが、むしろそのような場所であるからこそ、二度と同じ過ちを繰り返すことのないように、日本が戦争で経験した苦い記憶を、戦争の恐ろしさ、むごさをもっと語り継いでいくべきだと思う。

4　韓国巡検まとめ

【A班】

1年　廣澤　玲萌

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

まず、私が思った高陽の子たちの第一印象は、「聡明で積極的」でした。言語文化の違う人間とのコミュニケーションに慣れている雰囲気で、数え年だからでしょうか？　私たちよりも少し大人っぽいなと感じました。私は特に最初緊張して硬直ぎみでしたが、話しかけてもらって緊張がほどけました。

高陽国際高校は自分の考えを伝える授業が多いとききましたが、その後、パワーポイントをすらすら使いこなして文化紹介をしてくれて驚きました。私はパソコンを使ってプレゼンをした経験は片手で数えるほどしかありません…

そして、他の班の雰囲気をみても感じたのは、高陽の生徒はとっても明るい子が多いです！　学校紹介で高陽はみんなリアクションが大きく、感情表現が豊かだと紹介を受けましたが、そのとおりで、日本側の話をとても興味深そうに聞き、たくさんの反応をくれました。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークでは、まず、日用品のたくさん並んだショッピングセンターに連れて行ってもらいました。物価は日本と同じくらいでしたが、キムチやスナック菓子などの辛い商品が充実していたところが韓国らしいなと感じました。

それから、弘大（ホンデ）の学生街にも行きました。そこには服や雑貨、化粧品など、流行のものが安く売っている店がたくさんありました。建物もコンセプトの強い、かわいいものがみられ、とてもおしゃれだなあと思いました。商店街でショッピングをした後、韓国料理店でサムギョプサルをいただきました。鶏をまるごと使った大胆な料理や、とってもフレンドリーなお店のおばちゃんに驚きながらも、高陽の子たちと、身近なところでの韓国と日本の文化の違いについての話で盛り上がりました。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

高陽の生徒の意見をきいていると、日本人の考え方とのギャップがあるところがいくつか見つかりました。まず、弱者についての考え方です。日本人のなかには、多数のためなら少しの犠牲は仕方がないとか、貧しい人を自業自得だと思う考え方が多少あります。しかし、韓国の子たちは外国人労働者は受け入れ、貧しい高齢者はみんなで支えていく義務がある、と言い切っていました。ここに儒教の考え方が見えます。そして、戦後補償についてです。あちらの子は皆、戦争について話すときに、日本人よりもっとずっと深刻な表情をして話します。過去に日本政府が行った謝罪の言葉は謝罪と思っておらず、“誠意ある謝罪”を求めています。最後に日韓共同で発表した「日韓関係のために若い世代に何が出来るか」に関する意見でも、最初から最後まで歴史認識を正し、歴史問題を解決するということが中心でした（日本人よりも、「解決」を重要視している気がします）。

そして、やはりグローバルエリート養成校、英語のコミュニケーション能力が桁違いです…高陽の生徒たちは、日本側の意見を耳で聞いて理解し、すぐに英語で整理された反論を返してくれます。私が痛感したのは、自分の聞く力の欠如です。なんとか意見を伝えることが出来ても、政治・経済関連の単語がほとんど分からないので、相手の意見が理解できません。もちろん日本側にも対等に意見交換ができる人もいましたが、やはり大きな差を感じました。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

巡検先で最も印象に残ったのはソウルの戦争記念館です。なぜかというと、日本のそれとは大きく違う展示の方向性に驚いたからです。６月の巡検でピースおおさかを見学しましたが、中心となるテーマが全く違うと思いました。

まず、日本の戦争で一番中心に語られることは戦時中の庶民の生活です。ピースおおさかでも、家屋や防空壕の再現や、空襲の記録などが展示の中心でした。しかし、ソウル戦争記念館では、戦争がどのように起こり、停戦に至ったかが時系列で詳しく説明され、展示された模型は戦闘中のものがほとんどです。庶民がどのように過ごしたかについては、あまり知ることができませんでした。展示の雰囲気や演出、内容も韓国の方が手がかかっていてヘビーでした…。そして、西大門（ソデムン）刑務所でも感じましたが、若い人がたくさん訪れていた気がします。若者の戦争への関心の高さの表れでしょうか。

私は、ソウル戦争記念館で感じた違和感のもとは、日韓両国の戦争の収束の仕方にあると思いました。現代の日本人にとって、戦争とは過去のものです。しかし韓国は未だ北朝鮮と停戦中。停戦中とは、また戦争が始まる可能性がある、ということです。そんな状況で、戦争の悲惨さを強調したり、戦争を繰り返さないようにと言うことはできないでしょう…が、戦争は二度としてはいけないと教えられてきた日本人にとっては、ナショナリズムを煽動しているともとれる展示に不安をおぼえました。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

・韓国の子たちは日本にすごく好意的

タイミングがタイミングなので、嫌われていたらどうしよう…という心配も少しありましたが、日本が好きな子がほとんどで、歓迎してもらえてとても嬉しかったです。お店の店員さんも日本語で優しく対応してくれました。

・ソウルの地下鉄はとても充実している

街のそこらじゅうに地下鉄の駅の入口があり、ホーム転落防止のガラス戸や自動ゲートもばっちりでした。

・韓国には、いくつもの日本によって破壊された歴史的建造物がある

王族が殺された話などは初めてききました…。やはり認識の差はあるなと感じました。

・朝鮮戦争では半島全体で400万人近くの死者が出た

そんなに凄惨な戦争だったとは知りませんでした。太平洋戦争での日本の死者より多いというのが衝撃でした。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Hello! How is everyone doing? When we visited, thank you for many support.I was the first time to visit Korea, I thought Korea was a very wonderful place. Various things were new, I felt energy from the whole city. People are also very kind, I envy you was born in such a country.

Now, Japan and Korea are politically conflicting, but it was a wonderful experience for me to directly express your opinion in such situation. I began thinking more seriously about history of between Korea and Japan than before. I was very happy to know that you have a favor with Japan. I would like to share it with people in Japan. I am sorry that I could not communicate deeply with you because I can not speak English. I'm sorry. The students at Goyang global High School were doing their best in many different ways, and I learned a lot from you. And, talking with you, I make sure that Korea and Japan could build good relationships in the future! I will not forget the solution that we made together.

Thank you very much! I look forward to seeing you again.

1年　山田　真子

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

韓国の学生のプレゼン力には目をみはった。彼女らは授業の一環としてパワーポイントを用いてプレゼンをすることが多いそうだ。その積み重ねか、非常に理解しやすく、興味深いものだった。韓国の学生の一人が韓国の文化の一つとして紹介してくれたテーマは、「韓国のチキンの文化」であった。韓国には600ものチキンのブランドがあり、チキン競争は熾烈であるという。韓国のリアリティ溢れる文化

だ。日本にいてもなかなか知ることのできない、現地の人ならではの視点を共有できたことは私たちにとって貴重な経験である。

では、日々のプレゼンの積み重ねによって得られることとは何だろうか。考えられるのは、「パソコンの扱い」「テーマの選択」「話し方」等の能力の向上だ。

チキンの文化を紹介した彼女は、かばんから私物のノートパソコンを取り出していた。後に調べてみると、韓国は携帯電話・スマートフォン、タブレット端末、デスクトップパソコン、といったデジタル端末においては、日本に比べて所有率が圧倒的に高い。デスクトップパソコンの所有率に限っては、日本は24.4%、韓国は69.9%と、かなり差が出ている。一方、ノートパソコン、携帯ゲーム機器、据え置き型ゲーム機器の所有率は、韓国に比べ日本の方が高い。しかしノートパソコンについては、その割合は僅差であった（以上、「内閣府：平成25年度　我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」を参考）。韓国の若者は日本の若者に比べ、パソコンを所有する割合が高いと読み取ることができる。おそらく韓国の学生は、プレゼンテーションを支える、パソコン操作が得意な人も多いのだろう。

また、韓国の学生の、プレゼンの視点は非常に面白く、そしてその内容を伝える言葉の選択にもセンスを感じた。

プレゼンには様々な要素が詰まっており、プレゼン力を授業で強化していくことは、良い試みだと思う。社会に進出して以降も必要とされる能力が早いうちから育成されている。日本の学生にも通ずることであるから、同様にプレゼン力の向上のために努力するべきだろう。

さらに、聞き手側の観点でみた発見もあった。プレゼンを聞いているときに発見できたのは、みなが同じときにうなずき、同じときに笑っていたことだ。無論、言葉の壁によって遮られた表現も少なくはないだろうが、その相槌や笑顔はお互いが通じ合っているという安心感をもたらす。相槌や笑顔の効果は交流に欠かせないものだと身にしみて感じられた。

交流会を通し、普段見る資料からでは伝わらないことを多く学んだ。そして、プレゼンの内容から得ることに加え、表情であったり、交流の姿勢であったり、実際に現地の学生を観察することで発見できたことも数多く、充実した時間が共有できた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

韓国の学生に案内をお願いしたフィールドワークで、まず向かったのはスーパーマーケットである。ところが開店前であったため、開店するまでの間、店の隣の公園で過ごした。公園の様子はほとんど日本と変わらない。公園に設置されている遊具は、シーソーやジャングルジムなど、遊び方は私たちにも一目瞭然で、子供に向けたやさしいものである。私が韓国で確認できた公園はここだけだった。日本にある公園も減少傾向にあるように、韓国の都市部にある公園も、少ないようだ。また、ショッピングモールに隣接して公園があるというのも日本にとっては、珍しい。

公園では、遊具のほかに、ひとつの韓国の遊びを教わった。皆で円になり、ひとりが「パン」という掛け声にあわせ撃つ動作をし、撃たれた両隣の人が手を「わっ」と挙げるというゲーム。ルールは簡単でも、外国語で説明するとなると難しい。韓国の学生は懸命に日本語で説明をしてくれた。こういったゲームは外国人との交流によいツールだと実感した。

スーパーマーケットは日本にもよくみられる、庶民派のスーパーマーケットで、親しみ深い印象であった。もちろん、韓国産の商品はたくさん置かれている。しかし、外国産の商品も数多く並んでおり、韓国産よりも安価なものも多かった。非常に日本と似ている状況だった。また、日本産、または日本のブランドの商品も多く、日韓の密な貿易関係をうかがうことができる。実際、韓国の学生に尋ねてみたところ、生活に密着している日本の食品も多いと教えてくれた。

スーパーマーケットを出て、私たちは弘大（ホンデ）という街に向かった。その日は日曜日で、現地の人で混雑していた。洋服店、コスメショップ、雑貨屋等が立ち並んでいる。日本で、若者が訪れるような街並みと相違ない。数多いショップのある中、おすすめのショップをいくつか紹介してくれた。彼女たちは日夜、学校や寮で学習に励んでいると聞いていたが、こういったことにも興味を持っている、いやむしろ私たちより詳しいかもわからない、ということがわかり、今まで以上に親近感を感じた。

昼食には韓国料理のサムゲタンを、そしてデザートにはソルビンを紹介してくれた。私たちはひとつのお皿をシェアして食べるというスタイルをとった。シェアするスタイルは一般的にとられているものだとわかる。

フィールドワークを通じ、彼女らと交流をして、ただ街をみているだけ、店の中をみているだけでは分からないところまで私たちは知ることができた。商品の説明や、お勧めのお店、流行のお菓子や言葉など、同世代の学生との話は興味深く、話が弾んだ。ここで言葉の障害はたいした問題ではなかった。直に相手とコミュニケーションをとることは最も意味のあることで、何より楽しいことだ。外国人に日本の案内を任されたとき、私は彼女らのように、様々なことを紹介できるかを考えると、正直不安が残る。外国の方と交流を深めるために、日頃から、海外の文化に興味を持ちつつ、自分の国のことも見つめていくことが交流の基盤になってくると実感した。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会のテーマは「植民地支配はやむを得なかったか」「植民地支配に対する謝罪と和解は十分か」など、「歴史問題」から始まった。事前の準備の時点から、これらは韓国の学生とうまく話し合えるか非常に不安であった。

韓国の学生らは、植民地支配に対して真っ向から反対の意見であった。帝国主義の時代の風潮を根拠にするのは植民地支配の無理な正当化でしかないという。支配をした国の目線にたてば、時代の流れというのはなかなかに大きな影響があり、植民地支配の動きの主となる原動力であろう。それを否定されることは痛く思った。支配側、被支配側では同じ内容も、まったく異なる認識になるという、もどかしさを痛感した。

彼女らに対し、私は「植民地支配はどちらかといえばやむを得なかった」といった曖昧な表現での意見であった。韓国の学生の意見との勢いの差は歴然である。私は、こうした意見への、彼女たちの「自信」とでもいえる、強さに圧倒された。彼女たちの意見の強さの背景にあるのは日々の興味・関心だ。韓国の学生、また学生に限らず国民の多くは靖国神社の参拝や日韓共同声明等のニュースへの関心が非常に高い（メディアの正確性という新たな問題が浮かび上がってしまうが）。そういった情報の裏づけが彼女らの意見の強さを生み出していた。だが考えてみれば、意見の勢いに差のある中で話し合いをすることは難しいに違いない。お互いを理解しようとする勢いある姿勢は、話し合いの土台である。実際に韓国の学生と意見を交換して、この土台の重要性を思い知った。現時点での日本の学生のもつ土台の安定感は、韓国側にはるかに劣っている。今回、実際にその勢いを直に感じられたことは非常に大きな意味を感じられた。

以上のテーマを話し合った後、意見交換の補助として通訳にあたっていた先生が、私たちに気を遣って、「このような難しいテーマはおしまいにして次のテーマにしましょう」と声をかけてくださった。これらの問題は日韓関係の発展にとって大きな障壁となっているという認識は、お互い変わらないのだと改めて気づかされた。

「非婚化、少子化の進行」に対する問題では、まず男性の家庭的役割について話し合った。男性の家庭での役割が増加傾向にある日本の状況に、韓国の学生らは驚愕であった。韓国では男性が家事をするまたは手伝うことは、めったにないという。そのため結婚をすると、仕事をする女性には家庭での役割が重い負担となる。そして韓国には今、「よりよく生きる」といった上昇志向の風潮がある。キャリアを失うことに抵抗も大きい。退職することは日本以上に重い決断になるようだ。女性の家事負担が重く、共働きの風潮も広がる中、現状のままで結婚・出産の環境が整っているとはいえまい。

「FTAやTPPなどの貿易の自由化」に対する意見では、国産志向について話があがった。日本には「国産ブランド」を強みとし、外国産の商品との差別化を図ることで、国内産業を守ろうという動きがあり、また実際のところ国産志向は強い。一方で、韓国には国産志向があまりないという。韓国の学生によれば、韓国産の商品と外国産のより安価な商品とがあれば、多くの人が後者を手に取るようだ。それには韓国産・韓国製の商品の信頼性が薄いことが背景にある。韓国でつくられた商品には粗悪なものも多いといい、日本ほどには、「国産だから良い」とは言い切れないそうだ。また、国産で価格が高いものでも低品質である商品も少なくないといい、ならばと、安価な外国産の製品に走る傾向があるという。実際に私が韓国でコスメを購入しよう

というときに、韓国の学生の子に、「ここはいいお店だけれど、粗悪なものも置いているから気をつけて」と教えを受けた。普段から日本人以上に国産製品にも気を遣って選択しているとわかる。

意見交換をすることで、お互いの主張を再確認できた。国が変われば目線も変わるため、日本にいては気づくことのできない貴重な発見も多い。そして、私が意見交換会の中で、特に感心したことは、相手の主張を褒めるという韓国の学生の姿勢だ。「この考え方はなかった。だから、感心した。素晴らしいと思った」。そう言って、韓国の学生は日本側の意見を賞賛することもあった。主張する側としては大変気持ちの良いことである。この姿勢を私たちはさらに取り入れていくべきだろう。こうした意見交換を活発にしていくための要素も学び、取り入れていきたい。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

朝鮮半島の中で、最も緊張の走っているところ。おそらくはそうであろう、民間人統制線、通称「民統線」に接近した。場所は坡州(パジュ)の最北に位置する、約36,000坪の広さをもつ平和公園「臨津閣(イムジンガッ)国民観光地」。その地に足を踏み入れる前に、韓国で戦争記念館を訪れていたこともあり、知らず知らずのうちに、身体が引き締まっていた。

北朝鮮と韓国は長期にわたって戦い、その間、二国間の境目は幾度も変更されてきた。現在の国境は1953年に朝鮮戦争が停戦されたとき国際連合が定めた北緯38度付近に走る軍事境界線である。停戦ラインともいわれる境界の南北には２kmの非武装中立地帯が存在している。もちろん、その地帯に民間人は立ち入ることはできない。非武装中立地帯のさらに外側に民統線は存在する。この場所は軍事境界線から南に約７kmの地点で民統線は目前である。実際に付近には兵士が設置されており、物々しさを目の当たりにした。また、停戦前、物資の運搬に使用されていた列車の展示からは、争いの勃発していた当時の情勢がよくわかった。車体には数々の銃弾の跡。当時の運転手も命懸けである。

日本が島国だということもあり、正直なところ、国境線の先をみるという経験は身近でない。しかしここには明らかに、日本のような物理的な何かとは違う、大きな溝が、私の目に映った。双眼鏡で北朝鮮の風景を望むことはできても、溝が埋まるようには感じることはできなかった。

私たちのほかにも、観光客がみられた。現地の韓国の方の割合は非常に高い。老若男女が訪れていたが、中でもやはり年配の方が多かった。彼女たちには何か、北朝鮮にルーツがあるのだろうか。無論、一目見ただけではまったくわからない。唯一、民統線付近に貼られていた短冊はハングル文字で書かれたものが多かったことだけは見て取れた。一方で、欧米出身と思われる旅行客も確認できた。最も背景が気になったのは彼らである。欧米からはるばる足を運ぶのには大きな理由があるように思える。朝鮮の北側にはソ連、南側にはアメリカがついていたという歴史が世界に与えた影響は確かにあり、その歴史が外国からの旅行客を呼び寄せていることは予想できる。

ここへ訪れる背景は、私たちのように学習に励むため、自身のルーツに思いを馳せるため、国境の先の国への興味から、といったように様々だろう。どのような背景であるにしろ、まずは訪れることに意味合いを感じる。私は、この地を訪れるまで、朝鮮半島の国境については、教科書で両国の兵士がただお互いにらみ合っているイメージほどしか知りえなかった。日本には、こういった浅い理解の人も多いのではないだろうか。このままでいいはずはない。理解を深めるきっかけにも実際に現地に足を踏み入れることはよい刺激となると身をもって感じた。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国の街を歩いて、数々の新発見があった。

まず、道端に散らばるごみが多いことだ。車道、歩道、店の前、様々なところに散らばるごみ。そのほとんどが、お菓子の袋、おかずの入っていた皿、飲料の入っていたコップ等、食料品関係のごみであった。日本ではあまり目にしない光景で、私は衝撃を受けた。この状態の理由として予想できるのは、道の上に出店する、露店だろう。明洞や弘大など、少なくとも私が巡検で足を運んだ場所には、必ず露店が出店されていた。そのほとんどは食べ歩きの可能な食料品である。そういった露店で購入した食料品のごみが、そのまま捨てられていることも多いに違いない。日本でも祭りの後、露店の設置していた路上には大量のごみが放置されていることは多い話である。

そして、現在の韓国を最も映し出していたのは、各地でおこなわれているデモだった。巡検時、大統領の支持率は下降を続け、国民の不満は増加傾向にあった。その不満を訴えるデモがちょうど韓国で活発化していた時期である。若者からお年寄りまで大勢が街中でプラカードを持ち、声を張り上げて、練り歩いていた。日本の都市でよくおこなわれているデモと相違ない様子であった。都市部で目の当たりにしたのは、警察官が防弾チョッキを着用し、盾を用意し、道の両端を埋め尽くすほどに立ち並んでいる様子である。車の通るその道もデモ隊が通るのだろう。デモの規模の大きさが目に見えて分かる。けれど、実際は、非常に穏やかなデモであるように思えた。物を破壊したり、暴動を起こしたりすることは少ない。イメージとは反対に、デモ隊の人々がスープを振舞う、といった従来のイメージが覆ってゆくデモの現実が、そこには見られた。韓国人ははっきりしている、といった印象が周知しているがために意外性があった。けれど、街中には大統領を揶揄する内容の書かれたポスターが各所に掲示されており、国民の強い意思が伝わる。

そうしてデモ隊の間をすり抜け歩いて行き、日本大使館の前に到着するや否や目に飛び込んだのは「慰安婦像」だった。慰安婦像の撤去や移動といったニュースは日本でも有名である。しかし、韓国人の方はそのニュースをより重く受け止め、そしてそれについて反対している。そのため、慰安婦像の撤去・移動がないようにと、像の隣にテントを張り、寝泊りしながら像を見張っている女性にも出会った。慰安婦については、一昔前の問題であるにもかかわらず、現在にまで彼女たちの思いが国民に温度の下がることなく伝承されていることが問題の重大さを物語っている。

街歩きによって、現代の韓国の最もリアルな状況を、私は目にした。国民のつくる街の中に、新発見は溢れている。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

私は時々、韓国人の皆さんが日本のことをあまり良く思っていないという話を耳にする。それゆえ、皆さんと会う前は少し不安を募らせていた。しかし、高陽国際高校の皆さんは、私たちをあたたかく歓迎してくださり、私を、一人の日本人として、親切にしてくださった。これ以上うれしいことはない。さらにこのことは、私自身のみならず、日本にとっても、大変喜ばしい話である。

高陽の皆さんと比べ、私の英語力はかなり劣っていた。にもかかわらず、ハイレベルな言語教育を受けている皆さんが、私の能力を思いやりの心によってカバーしてくださったことで、コミュニケーションを深めることができた。皆さんには心から感謝しなければならない。

意見交換会で話し合うテーマが大量にあったように、日韓の間には様々な問題が横たわっている。今の私たち若者に、これらの問題を解決することは不可能かもしれない。しかし、問題について意見を述べること、また同世代の人と意見を交換することは、決して無意味ではなく、将来の問題解決に大きく貢献するだろうと私は考える。高陽国際高校の皆さんと、このような意見交換の場を設けられたことは本当にありがたいことだ。

私は、日韓関係のさらなる発展を願っている。私は実際に高陽国際高校の生徒の皆さんと交流して、友好関係は前進させることができると確信した。日韓関係の発展のためには、様々な方法があるだろう。その中で、両国の利益を考え、最も的確な方法を選択できたらよいと思う。共に、希望の達成のチャンスを掴んでいきたい。

皆さんとまたあえる日を楽しみにしている。

Sometimes, I hear that Korean hate Japan. So, I had a little fear before I met you. But all the students of Goyang Global High School welcomed us warmly and you were kind to me as Japanese. Nothing gives me greater pleasure than this. And I think it is good thing for not only me but also Japan.

My ability of speaking English was much worse than yours. Nevertheless, you who get great language education made up for my low ability by consideration. And we can increase communication. I can’t thank you enough for your kindness.

Japan and Korea have a lot of problems now, just like we had many topics to discuss at our view exchanging. Now we may not

be able to solve these problems. But I don’t think that it’s meaningless for young people to express my opinion on the problem and exchange the view on it with people of the same generation. They must play a part in the solution to the problems. I was grateful for this opportunity that I can discuss with you.

I wish that a relationship between Japan and Korea is developed more. And, by encountering you, I’m sure that we are able to promote the friendship. There are many ways to do that. So we have to choose the best one for the two countries. I want to seize chance to realize my wish together.

Until next time, hope we meet again!

１年　玉田洋一朗

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

今回、韓国の高陽国際高校の生徒と過ごすという千載一遇の機会で、特に２つのことを感じた。

一つ目は、常日頃からPowerPointを使いこなしているということだ。高陽国際高校はたくさんのニックネームを持っているが、そのうちの一つに、高陽PowerPoint高校というものがある。これは、韓国の高陽の生徒でない学生がつけたもので、その名のとおり、課題のほとんどがPowerPointを用いたプレゼンであることに由来している。日本の授業でも、もっとPowerPointを用いたプレゼンを取り入れてくべきであろう。

二つ目は、日本への関心の高さである。彼らは日本語を第二言語に選択しており、日本語をかなり流暢に話し、日本を愛している。彼らは、そこまで歴史問題のことは意識していない。日本の人々は韓国人の日本に対する印象について少し自意識過剰なのではないかと思った。しかし、彼らは日本政界の重鎮が韓国に来て、謝罪を含めた演説をすることを待ち望んでいる。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークでは、Hongikの繁華街と郊外のモールに行った。フィールドワークで、Hongikを散策した際、韓国が朝も夜も遅い国だということが分かった。ほとんどの店は早くても開店が10時以降で、閉店は日付をまたいだ２時ごろであった。高陽の生徒に、夜こんな繁華街に来ても安全なのかと尋ねたところ、昼より夜の方が混んでいて、スリなんて聞いたこともないし、週末には恋人や友人と夜遅くまで遊ぶのが普通で、法律違反でもないという衝撃的な答えが返ってきた。日本や他の多くの国では、未成年者が大人の付き添いなしに夜遅くまで繁華街を散策するのは危険だし、場合によっては補導の対象になる。そう考えると韓国は世界有数の安全な国なのかもしれない。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

一つ目は、韓国人の、主張が好きな性格である。多くの日本人は、自分と真逆の意見とぶつかった時、急に大人しくなって主張をするどころか沈黙を守ってしまう。しかし、韓国人の場合、自分と真逆の意見とぶつかったときはさらに強く自分の主張が正しく、相手が間違っているということを認めさせる傾向にある。交流会で、外国人労働者の受け入れについての話題について話し合ったとき、日本側の主張は、自国の雇用などを考えると、あまり受け入れない方がいいというものであったが、韓国側の主張は外国人労働者を助けるために、受け入れるべきだというものであった。日本側の代表生徒が意見を発表したところ、韓国の生徒は次から次へと質問を投げかけ、どうしてそう考えるのかを細かく説明させていた。

これに対して日本側は、自分が考えていることと真逆の意見を聞いても、特に質問をしたりすることはなく、ただ自分の意見を述べていた。相手の意見を受け入れようとしつつも、自分の意見を第一に置くというのは、交渉する際には武器になるだろう。韓国企業が成功している理由の一つはこの交渉向きの性格かもしれない。

二つ目は発展途上国への関心の高さである。彼らは、自国の利益よりも発展途上国の発展を意識していた。FTAについての話題が出たとき、彼らはFTAは先進国にしか利益が生じないと主張していたのだ。彼らががどのような社会科の教育を受けているのか気になった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

今回の巡検で最も印象に残ったことは二つある。一つは、仁寺洞や光化門広場で展開されていた反パククネデモだ。日本で開催されるデモは、車道を警察の監視のもと練り歩きながら拡声機を使って何かしらの主張をするものや、ステージの上で演説を展開するものが多いが、韓国のデモはそれらとはかけ離れていた。韓国のパククネデモは、パククネの退陣を求める人々が広場に集まり、有名歌手の歌の間奏の際に自らの主張を叫ぶのだ。音楽を使うことで言語の壁を越えているのだ。また、何千人もの警官が見張っており、物々しい雰囲気に包まれているが、暖かいスープなどを同志だけでなく警官にも振る舞うことで和やかな雰囲気をかもしだしていた。今でもその様子は脳裏に絵本のように蘇る。

もう一つは、高陽国際高校の生徒たちとお互いの日常や文化について話したことである。その中で印象に残ったものは、２つある。

まず一つ目は、高陽の生徒たちが午前１時まで勉強し、毎日ほぼ勉強しかしていないという話を日本で耳にしたが、実際、彼らは22時ごろまで教師のもとで自習をした後は、寮で楽しく遊んで過ごしているということだ。屋内ジムは22時30分から利用でき、卓球やホッケーができる上に、マッサージ機やランニングマシンも完備されていて勉強の疲れやストレスを毎晩、時間の許す限り、好きなだけ発散できるのだ。日本の高校生が部活動を夜遅くまでやった場合、自宅について夕食と入浴を済ました後に自習をすれば、大抵、23時をまわるだろう。しかし、高陽は寮制なので通学という時間の大きなロスを省くことができる。つまり、高陽は勉強にも運動にも最適な空間なのだ。

二つ目は、韓国のチキン文化だ。多くの家庭では、週末、夜食に何かしらのチキンを食べる。また、韓国にあるチキン専門店の数は、全世界にあるマクドナルドの数よりも多い。これは初耳だった。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

巡検で新たに分かったことはあまりにも多すぎてとてもここには書き切ることができない。最も印象に残っているものを３つほどあげる。

一つ目は、ソウルは風水の教えに基づいて作られた都であるということだ。キョンボックンから360°景色を見渡すと、かなり近い所に山が見える。この山が風水においては重要な役割を果たすのだ。

二つ目は、韓国には今でも儒教が根付いていることだ。儒教の教えの元では、土葬が一般的であるが、最近の韓国では火葬が一般的である。このことをもって儒教の教えは日本で仏教がそこまで重視されていないのと同様に今日の韓国においてはそこまで重視されていないと思っている人が少なからずいる。しかし、韓国の人々は本当は土葬をしたいものの、十分な土地が足りないが故に泣く泣く火葬をしているのだ。

三つ目は、高陽国際高校の生徒は旭丘の生徒と同様に、勉強はもちろんのこと、運動や各々の趣味にそれぞれが一生懸命取り組んでいるということだ。高陽国際高校の生徒たちと会う前は、私は彼らが勉強しかしていないという凝り固まった偏見を持っていた。実際はそうでないということがわかって、本当にスッキリした。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Dear my best friends in GGHS, Goyang Global High School.

Thank you so much for taking us best tour and guide us your school. We will never forget you guys, our first foreign friends , and the time we spent together!

I'd like you students of GGHS to know these things below.

Firstly, our president ABE REALLY WANTS TO IMPROVE the relationship between Korea and Japan. You may think our government doesn't apologise sincerely because many ministers visit Yasukuni shrine. But , in the Yasukuni, there are many spirits of great ancient people who devoted their lives to make a new country, JAPAN. As you know, there are spirits of people of army which attacked and damaged your country. So, you Korean probably think that Japanese ministers visit Yasukuni to console and thank the spirits of army people who attacked and damaged you Korean, but they visit there to thank ancient or old people who died because they tried to make Japan. And also there are sprits of people killed by Russia, betrayed us in 1945

and made many people live in and work at the coldest area in Russia,. They visit there also to console those spirits. So they really think apology for Korea about colonial role.

Secondly, you Korean and we Japanese can be good partner and friend!

There is common saying, Japan is near geographically but not psychologically , in both country.

But through the time I spent at Korea, I came to think it's not true. There are many people in Japan who are interested in and love Korea and also there are also many people who loves Japan and have an interest in Japan in Korea. And the Korean culture are similar to Japanese culture. So, I mean, Japan and Korea is near not only geographically but also psychologically.

Let me know when you visit Japan!

See you soon.

２年　橋詰　貴行

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私は、韓国人は皆同じように反日で、謙虚でなく冷静に話し合うことができないと悪いイメージを持っていたが、高陽の生徒は優しく気配りも出来て日本のことを好きな人が多かった。さらに私達のために大切な時間を割いて素晴らしいパフォーマンスをしていただいた。その時感じたのは、観客として見ていた高陽の生徒は日本人よりも元気で感情あらわにすること。またテコンドーや制服などをみて日本のそれといったものとあまり差がないと思い親近感を抱いた。日韓の思想の近似性を確かめられた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

彼らは私達の好みやしたいことを細かく聞いてフィールドワークの場所を選んでくれた。まさにおもてなしであった。また、突然のリクエストにも柔軟に対応して私達を喜ばせてくれた。ご飯は参鶏湯をみんなで一緒に食べた。その時、辛いキムチがついてきてそれを食べたのだが、後輩がイッツホットと言った時、高陽の生徒はすっと水を差し出し注いだ。韓国人の心優しい一面を見ることができた。また、皆でかき氷を食べたのだが、日本の女子高校生と同様分け合って食べていた。日本と韓国はかなり文化的に近い国だと感じられた。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

日韓間の問題を解決するためには、日本側はさらに憂慮して腰を折って妥協しないといけないと感じた。日本側の元慰安婦に対して、首相は形式的な謝罪ではなく、直接会って誠意ある謝罪をしなければならないという。だが、基本、終始仲睦まじくディベートした。ただ、唯一気になった出来事があった。それはディベート中、意見が平行線になった時だ。柔軟に相手の立場に立って考えることができていなかった。私は少し不快な気分になった。ただ、それは日本人にも共通して言えることだ。悪いことだとは一概にいえない。総合的に私は、高陽の生徒にいい印象を持っている。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

国立中央博物館に展示されていた資料から、日中韓の間に古くからの親交があった事実を確認できたところ。青磁や白磁など日本の文化に深くかかわってきたものは、韓国で発展し、日本に流れ込んだ。日本にある仏像も韓国の仏像を模倣したものが多かった。また宗教においても同様で、儒教思想は日本にも伝わっている。古くからの親交の事実をみて、現在の国家同士の歪みあいの儚さを感じた。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

西大門刑務所で、当時の朝鮮が日本の植民地支配をうけていた当時、独立運動をしていた人に対してひどい拷問があったことに驚いた。また、朝鮮戦争で、国連軍が戦っていたということもわかった。というのも、カンボジアなど世界のあらゆる国々の兵士が参戦していたことが追悼碑などから見てわかったからだ。二度と思想弾圧をしてはならないし、実際にされている国は世界中の人々の働きかけにより、なくさなくてはならないと思った。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

I am so happy to be able to have experienced special invitation. That occasion became special to me. I want to meet you again in the future. By the way, I realize there still exists many problem between Japan and Korea. It will become “MOTTAINAI” situation. If we couldn’t erase those, our descendants would not talk with each other without discrimination or prejudice. So, we have to erase these problem. Also, I knew almost all Korean people are friendly and kind. I hope both of two countries can become close friends.

２年　浜　　凪帆

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会では、私が以前抱いていたテストのために勉強しかしない、頭がやや硬そうという韓国人のイメージが大きく変わった。沢山勉強した後は、解放されて楽しく遊ぶアクティブな話や趣味など生き生きと話していた。そして、だれもが日本に興味を持っている、好きと言ってくれて嬉しかった。これは台湾に行ったときにも感じたが、日本は他の国々に対して関心や好意が少ないのではないか、相手国のことを知らなさすぎるのではないか、と思った。彼らは、私たちが申し訳なくなるまでに日本のことを知っていて、日本語も上手だった。私は交流を通して予想以上の韓国人の日本に対する好意に触れられたから、韓国が好きになったように感じる。相手と仲良くするには相手に興味を持ち、知ることが大切なのだと感じた。今年は台湾よりもニュースでもよく聞く国で、韓国について様々調べてから行ったので、相手についてしっかり知れただろうと勝手に満足していた。しかし、韓国人は普段から日本が本当に好きでアニメやキャラクター、マンガなど日本の文化に沢山触れていたところが違ったと思う。日本にもK-pop好きは少なからずいるが、私の班では、私たちが韓国について知らなさすぎるから韓国の話題より日本の話題で盛り上がった。つい、メデイアで取り上げられるイメージばかり（デモや受験加熱など）持ってしまって、実際とのギャップに驚く私と日本の文化を沢山知りさらに詳しく知ろうとする韓国人。この機会を経て一層韓国への関心が高まり、日本以外の国の文化にもっと触れていきたいと思った。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちの班は、ホンデイックとインサドンを訪れた。ホンデイックでは、たくさんのお店がストリートに沿って並んでいて商店街のようだった。ポケモンやぐでたまのような日本のキャラクターがたくさん見つかった。また、外国にはタコ嫌いが多いと聞くが、タコの切り身の串刺しをたこ焼きソースと鰹節で食べたときは、日本と似ていると思った。日本では、大須のように成功しているところもあるが、多くの商店街はどちらかというと廃れ気味でイオンのような大型モールが若者の溜まり場になっているように思う。その反面、韓国では、ショッピングモールよりこのような商店街に来ることが多いそうだ。テスト明けのリフレッシュに毎回来るという人もいた。昼には参鶏湯とパッピンス食べた。参鶏湯はお粥で病気になったときとかによく食べるらしいが、ニンニクと高麗人参が入っているところが日本のお粥やおじやとは違うと思った。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

歴史問題に関して韓国側からは、政治のトップの行動にはがっかりし、誠意が感じられないと思ってしまうという意見が多かった。また、先の安倍総理大臣と朴槿恵大統領による日韓合意も、政府が勝手にやったものであるとの意見が強かった。朴槿恵反対の運動が強まる中、それに伴って日韓合意の意義が損なわれてしまわなければといいと思った。また、日本に来たことがある人ばかりだったので、政治家に対しては残念に思うことがあれど、一般市民全員がそうではなく、むしろ理解のある人もいるのだとわかっていてくれたことが嬉しかった。そして、過去のことは変えられないから、日本は歴史に対して責任を持ち、歴史認識の日韓の差を少しずつ埋めつつ、これから仲をよくしていこうという意見にまとまった。

少女像について、私は訪れるまで、日本も韓国もそこまでこだわらなくてもいいのではないかと思っていたが、訪れてみて、そして韓国人の意見を聞いて、二度と酷い歴史を繰り返さず、忘れないため、平和の象徴として必要なのだと感じた。まさに日本にとっての原爆ド一

ムのような存在だと思う。

少子高齢化問題や格差拡大問題に関して、韓国の経済は財閥が牛耳っているのだということを何度も感じた。政府は財閥を優遇する政策ばかりするのではなく、所得の再分配で低所得者を助けるべきだと言っていた。また、外国人労働者問題に関しても、自分の本国では低所得であるのだから、彼らの受け入れを妨げることで、私達が低所得の彼らを助けないのはおかしいと言っていた。財閥により、格差の激しい韓国だから、この２つの例だけでなく低所得者の目線から考えた意見が多く出た。私達の方が、日本の政府なのだからまず日本人の雇用を考えるべきだ、高所得層からの取りすぎは労働意欲を下げることになる、など、自分たちのことを優先した意見が多く、恥ずかしく思った。

韓国人は財閥に対する問題意識が強く、格差問題に関して盛んに意見を述べていた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私は、慰安婦の少女像に大きな印象を受けた。少女像に関して日本でニュースで聞くことや先生から話を聴くことはあった。しかし、韓国に来るまでは、少女像の重要性や韓国人の考えなど何も分かっていなかったのだと思う。でも、靴下を履いてマフラーを着て、帽子をかぶって、枯れかけたものからまだ新しいものまで沢山の花が添えられていた。また、黄色の蝶の形をしたメッセージカードが沢山ぶら下がっていた。ここまで、沢山の人がこの像を大切に思い、撤去されないため24時間テントを張って見張っていることを見て、絶対に守るという意志の強さに驚いた。韓国がここまで大切にしていて、戦争の悲惨さを後世に伝える象徴として、これからも欠かせないものだと知った。私は、日本は自分のしたことに目を背けるかのように撤去要求するのではなく、韓国と一緒になって少女像を後世に残すため動いていくべきだと思う。先生が韓国に行く前におっしゃっていたことは本当で、行く前から少女像を大切にしているらしいと話は聞いていたが、韓国の学生の意見や実際に行ってみると本当に印象深かった。実際に行ってみないとわからないことを学び感じ取れたと思う。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

デモの文化が盛んであることは知っていたが、もっと暴力的なもの、治安の悪いものをイメージしていた。しかし、そのようなことはなかった。韓国の学生は勉強で忙しいはずなのに、できるだけデモに参加し、自分の意見を、より政治に反映させようとしていた。そして、自分に余裕がなくて行けない人は、デモに参加している人のことを半分尊敬したような言い方をしていた。

私はK-popや韓流ドラマが特別好きなわけではなかったので、韓国に行き、韓国人の日本への関心の高さや優しさには本当に驚いた。今まで、ニュースやネットで悪いニュースばかり見てきたので、正直なところ良いイメージは少なかった。メディアや国と国の関係ばかり見るのではなく、民間レベルの交流が大切なのだと思った。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for your kindness. I was happy to talk a lot with you. Thanks to you, we could have a good time in Korea. Before visiting Korea, I did not think that Korean like Japan that much because I heard bad news about Korea from Medias. It was good opportunity to know about Korean high school students. I think that visiting each country is important to improve understanding each other. Now I like Korea better than I used to and I would like to visit Korea again.

【B班】

１年　藤原　巧斗

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

高陽国際高校の人たちと交流していて真っ先に感じたことは「普通に」話せるということだ。この「普通に」というのはもちろん言語の問題のことを指しているのではない。僕はてっきり反日感情が交流の妨げになるのではと思っていた。テレビ電話で明るく話しているのを見てそんなことはないとは思っていたが、それでもニュースなどのメディアで韓国人が反日感情をあらわにしているのを見ると多少なりとも不安があった。しかし、それは杞憂に過ぎなかったのだと交流会を終えて強く感じた。彼らはとても日本語が上手で、明るく楽しそうに自国の文化などを紹介していた。もし彼らが反日感情を持っていたとしても、それは日本政府に対してのものであって日本人に対したものではないのだろう。だからこそあのように楽しい時間を過ごすことができたのだと思う。僕たちも仮に反韓感情を持っていたとしても、相手のことを理解しようとする姿勢を大切にしなければ。

まぁ、僕は韓国大好きなんですけどね。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

僕たちの班は大きなデパートでお土産にする食べ物を見たあと（到着したときは開店前だったので近くの公園で暇をつぶした。そのとき韓国の若者の間で流行っている？遊びを教えてもらった。それは日本にも似たようなものがある遊びだった。やはり近隣国だからだろうか、小さくても似ている文化もあるのだろう）、少し街を散歩した。

このフィールドワークで最も印象に残ったのはデパートでの買い物である。見ていてまず感じたのが日本に比べて物価が少し安いことだ。韓国のりが20パック5,000ウォンで売っているのを見たときは驚愕した（もちろんお土産に買いました）。

あともう一つ、お土産を探しているときに感じたことがある。僕は友達にカップラーメンのお土産を頼まれていたのでそれを探そうと韓国の子に尋ねた。そしたらなかなか熱くカップラーメンについて語ってくれた。やはりどこの国の人もラーメンは好きなんだなぁと思い、またとても親近感が沸いた。今回のフィールドワークでは韓国の庶民の料理やおやつなどを知ることができ、とても充実したものだったと思う。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

話していて少し感じたのが、特に歴史問題についてあまり衝突がなかったことである。あくまであまりだが。白熱した論争のようなものを想像していた僕にとって少々拍子抜けしてしまった。なぜなのだろうか。それに関してこの交流会の中でとても驚いた出来事があった。両国の歴史の認識の違いについて話を進めていたとき、互いの学校での歴史の教育はいったいどのようなものなのかという話になった。このとき当然、歴史の教科書の記述について話が行われるわけだが、この後の韓国の子の発言を聞いて僕は耳を疑った。彼は日本の教科書は真実が描かれているからすごい。韓国ではそうではないのに、というのである。正直聞き間違えたのかと思った。そのぐらい驚いた。そして、相手を一度正しいと認めたうえで自分の理論を展開していく様に、僕はひどく感動した。これは本当に今の政治家に見てもらいたかったものである。また、これからを担う僕たちも見習うべきなのだろう。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

僕は巡検した中で特に印象に残ったのは二点ある。

まず一つ目は二日目の巡検での景福宮～仁寺洞～タプコル公園周辺での朴槿恵氏退陣をうたうデモだ。まず景福宮を出た後に大きな道路にいた警察車両が目立った。それもたくさん。バスが一列10台以上に何列も並んでおり、それにはほぼすべてに「POLICE」と書いてあった。見たときはとても驚いた。それだけデモは大規模なものなのだろう。また、巡検中、警察が隊列を組んだ姿などたびたび見られた。仁寺洞に向かう途中ではデモの参加者に無償で食料を配っていた。タプコル公園周辺まで行くと軽快な音楽が聞こえてきた。音源に近づくとかなりの大人数が集まっている。すると、間奏の合間に一人がマイクを持って何かを訴えかけるように叫んでいた。次の間奏でまた一人、その次でまた一人・・・。そこで僕はこの人だかりがデモであることに気づいた。そのデモは従来のものとは異なりパフォーマンスのようで、誰でも入り込めるような雰囲気が漂っていた。実際外国人である僕もその軽快なリズムが頭に残ってしまっていた。これを見て、僕は去年日本で話題になった「SHIELDS」を思い出した。今思うと、韓国の朴槿恵氏に対するデモと日本の戦争法案反対デモは何となく似た雰囲気であった。どちらもどの年齢層にも興味をもってもらえるよう工夫されていたように感じる。選挙権を持っていなくても政治に参加しようとする姿勢はとても大切だと思った。

二つ目は西大門刑務所歴史館の見学である。この刑務所は韓国の植民地時代では独立運動家、解放後の独裁政権期では民主化運動家などが収容されていた場所である。中には牢屋に座り込んでいる人や尋問

を受けている様子がとてもリアルなマネキンで表現されていて、その表情はとても怖くかなり心に刺さるものがあった。また、拷問器具などの展示もあった。使用方法などの説明を受け、実際にそれをされていたのかと思うだけでゾッとした。しかし、独立、民主化を成し遂げた事実からも、韓国人のその精神には大変驚かされる。また、日本の負の部分というものは許しがたいもので、決して目を背けてはいけないものなのだと思う。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

新たに分かったことは日本の負と韓国の屈服しない精神である。

テレビなどのメディアに浸かっていると最近はその気がなくても反韓の情報が耳に入る。あまり韓国を擁護しているものは見聞きしたことがない。そのような状態で生活していると、いやがおうにも日本＞韓国のような図式が、意識しているつもりはなくても頭の隅では出来上がっている人が多くなってしまう。事実、僕も親韓のつもりであったが、今回の巡検の途中途中で日本の負の部分を知ると本当かと疑ってしまっている自分がいた。それに気づいたときは、自分は口先だけだったのかと、とても落胆した。日本の負の部分を知るのと同時に韓国の独立の歴史も知ることができた。やはり教科書などでみるのとは違い、現地の博物館などで間近に感じると、その強い精神力に感服した。それを知るとやはり日本の悪いところに目を背けているようではダメだと強く感じた。負の部分であるからこそそれを二度と行わないように後世に伝えていかなくてはならないのだ。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for your welcome ceremony, exchange meetings, field working, and so on we could have a very good time. Because we could communication with you (, but I depended on your very good Japanese a little), I was so glad.

In public meeting, though exchanged various opinions, I found it by far the most important to admit each other. If in Japan I have a chance, I want to learn Korean culture and history.

Next, this is the very personal story, but I like Korean Budo, Tekondo. It is so cool!!! The dance and the traditional music was also cool! I want to see them again. I hope to see you again!　Thank you!!

１年　工藤　文那

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

韓国巡検２日目、高陽国際高校の生徒と初めて顔を合わせた交流会。そこで感じたことの中で、特に印象に残ったことは５つある。

まず一つ目は彼らの学習レベルの高さだ。私は当初、彼らの英語の能力に圧倒されることを懸念していたが、実際には、英語は言うまでもなく、彼らの日本語の能力にも圧倒された。また、出会ってすぐに「英語よりも日本語でお話ししましょう」と日本語で言われ、彼らの学習意欲の高さに驚いた。ここで私が感じたのは、彼らの言語能力の高さと、自分の言語能力の低さであった。もちろん、韓国の学生は日本の学生よりも高いレベルの語学教育を受けているし、学び始めた時期も日本の学生よりは圧倒的に早い。それは韓国という国で起こる独自の現象なのかもしれない。現に交流した生徒の話では「韓国ではいい大学に入って就職するためには、英語はできて当たり前。だから、小学校あるいはそれより前の段階で、親が子供に英語教育を受けさせることは珍しいことではない」という。日本でも子供を英会話教室に通わせる親は多いが、韓国ほどの競争はそこにはないように思われる。親が子供に高いレベルの教育を受けさせようとする傾向は、日本よりも韓国の方が高く、そんな環境で生まれ育った彼らは、私たちより語学において優秀なのは言うまでもない。しかし、それにしても私自身はまだまだ頑張りが足りないのではないかと思った。

私たちは、彼らよりもいわゆる「自由」を与えられている。学習面において「強制」されることは、彼らに比べて極めて少ないと言える。強制されることが少ない分、私たちは私たち自身で学習に取り組まなければならない。韓国の学生のレベルに追いつくには、私たちは日頃の努力を怠ってはならない。追い越すには、自ら高いレベルの学習を追い求めなければならない。このような当たり前のことに気づかされたのであった。

二つ目は、彼らの学習に対する意欲とそれを取り巻く環境である。前述のことにもつながるが、韓国の学生は高い学習意欲をもって、各々の学習を進めている。そこには、彼らの周りを取り巻く環境が大きく影響している。学習をより良いものに、安心して学習に取り組めるようにと、周囲の大人が彼らに対して行っていることは、日本ではなじみのないものが数多くあった。

まず、韓国には「罰点」というものが存在する。これは生徒が犯した規則違反に対するペナルティのようなもので、一回の違反につき１点の罰点が科せられる。高陽国際高校では４点が溜まった時点で自宅の保護者に連絡が入り、最大５点が溜まると三者面談を行うことになっている。では、具体的にどのようなことをすると罰点が科せられるのか。例を挙げると、「部屋でカップラーメンを食べる」というものがある。他の菓子類や食事は制限されないのだが、カップラーメンは「お湯を使うことで火傷する恐れがあり、学習に支障をきたすことが考えられる」という理由で禁止されているのだ。この罰点があるおかげで、韓国の学生は規律正しい生活を送ることができているのだそうだ。そして、韓国の学校には立ったまま授業を受けられるように、教室の後ろに高い机がいくつか用意されている。これは、「授業中に眠くなっても、眠気を覚まして授業を受け続けられるように」という理由で設置されている。また、学校の玄関には、大学入試（修学能力試験）までの残り日数がカウントされる電光掲示板が設置されている。

これらのシステムや設備は、学校が生徒に対してより良い学習環境を提供するために考案されたものだが、当の生徒たちはというと、「自分たちのためにしてくれているとはわかっていても、あんまり良いイメージはない。罰点がつくと分かっていながら違反してしまうこともあるし、後ろの机を使っていても友達と喋ってしまうこともある」という。周囲の大人がどれだけ規則を作って期待しても、子供はそれを完璧に守り抜くことはできない。一貫して規則を守ろうと、周囲の期待に応えようとしているうちにがんじがらめになって、自爆してしまう子供が韓国には多くいるのも事実だ。競争社会にいる彼らにとって、大人が用意する設備はどれだけ彼ら自身の役に立っているのだろうか。彼らを成長させるのではなく、押しつぶしてしまうのではないだろうか。激化した競争社会に生きる若者への教育について考えさせられた。

三つ目は、彼らの人柄だ。韓国に赴く前、「韓国人は日本人に対して攻撃的な人が多くて付き合いにくい」と、周りの人はよく口にした。それは、韓国人が過去の歴史問題に対するデモを行う様子などから、日本人が持っている認識なのかもしれない。私も現地で交流する前は、そんな考えを持っていた。そして、韓国人と会って話をするのが少し怖いとさえ感じていた。

しかし、実際に会って話をした韓国の学生は、日本に対して関心があり、日本人に対して非常に友好的であった。彼らのためにも、日本人の中にある「韓国人は皆、日本に対して悪いイメージを持っている」という考えは捨てるべきである。もちろん、今回交流したのが、学校の言語選択で日本語を選択している生徒だったこともあるが、彼らは日本のことを頭ごなしに否定することはしなかったし、「反日」の意をあらわにすることもなかった。

私は、彼らとの交流会で、お互いの民族に対する先入観を払拭して、正面から向き合って接することが大切なのだと、実感として学んだ。今まで頭では理解していても、なかなか実感としてとらえることができなかったことを学ぶことができたのが、今回の交流会での最も大きな収穫だったと感じる。

ここで私が考えたのは、将来の日本の外交である。日韓にかかわらず、他国との外交でも、個人の先入観や偏見を払拭し、対等な立場で接することが必要不可欠なのではないだろうか。また、ある一つの問題に対して、それぞれが客観的な視点を持ち、お互いの国の意見や抱えている問題を理解して、初めて問題解決に向けた話し合いができるのだ。また、その基盤となるのは、相手国に対して興味・関心を抱くことなのかもしれない。

今回交流した中にも、将来は外交官になりたいと言っている生徒がいた。彼のように日本に関心を持つ若者が、将来外交官なって日本と外交を行うようになったら、日韓の関係はより良いものになるだろう。そして、彼らが将来に向けて安心して学習できるよう、私たちは現在の日韓関係を、さらに改善しなければならない。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

今回のフィールドワークでは、私たちと高陽国際高校の生徒とのふれあいを目的とした、とても有意義で楽しい５時間を過ごすことができた。彼らは私たちに貴重な体験をさせてくれた。

まず、私たちは合井(ハプジョン)にあるスーパーマーケットに足を運んだ。店の開店を待つ間に、隣接する公園とコンビニエンスストアに訪れた。

最初に驚いたのは、公園の地面に弾力があったことだ。韓国にあるいくつかの公園では、地面に廃タイヤを粉砕したものを用いている。日本の公園の砂地のように子供が転んで擦り剥いたり、砂だらけになったりすることはない。リサイクルという面で環境に優しく、安全面で利用者に優しい公園の地面に感動した。

次に訪れたコンビニエンスストアでは、多くの日本製の商品を目にした。日本の企業が韓国向けに販売している、私たちの知らない商品もいくつか見られた。韓国のコンビニエンスストアで驚いたことは三つある。一つ目は、日本製品の価格がとても高いことだ。これは関税によるものらしいが、韓国では、日本製品が日本の２～３倍の価格で売られている。交流した生徒は「文房具などの日本製品は高いけど品質が良いから、韓国の学生は皆あこがれている」と語った。二つ目は、大きな液晶テレビが設置されていることだ。これは商品のコマーシャルを流すためのもので、韓国のコンビニエンスストアには必ずと言っていいほど設置されている。ここで、日本にそれが無いのはなぜなのかと疑問に思った。考えてみると、日本ではラジオなどの店内放送がかかっているが、韓国ではかかっていない。宣伝に使う媒体にも違いがあるのだと感じた。三つ目は、雑誌が売られていないことだ。日本のほとんどのコンビニエンスストアは新聞や雑誌を、広いスペースを使って陳列している。一方韓国では、約70×90㎝のスペースに主要な新聞が８誌ほど並べられているだけである。雑誌は基本的に書店で購入するものという認識らしく、一誌も陳列されていなかった。

訪れたスーパーマーケットでは日本と韓国の違いを、たくさん見出すことができた。中でも三つ印象に残ったことがある。一つ目は、買い物カートを使う際には使用料がかかることだ。店舗によって価格は異なるものの、韓国ではカートを使う際には一定の料金を払わなければならない。理由は定かではないが、おそらくレンタル料のようなものなのだと思われる。国民性の違いなのだろうか、お金をかける場がこのようなところでも異なるのかと、新鮮に感じた。二つ目は、日本のキャラクター商品が安価であることだ。前述したように、日本製品は高価であることが多い。しかし、一部のキャラクター製品は日本で売られている価格よりもずっと安価であった。そのような商品には「MADE IN KOREA」の文字が印刷されている。日本のキャラクターをモチーフとしていても韓国で製造される製品は、これからも増えていくだろう。その時、私たちは自国の文化（キャラクターなど）を製造国よりも高い値段で買わなければならなくなり、その連鎖が起こることが予想される。三つ目は、とにかく量が多くて安価であることだ。例を挙げると、プラスチックの箱に入った２㎏のキムチが15000ウォン(日本円にして約1500円　2016年12月29日現在)で売られている。日本より物価が安い韓国では、一度に大量の食品類を買うことが多く、そのため買い物カートも日本より一回り大きい。「一度に大量の買い物をするため、カートが大きい」という点だけについて見れば、韓国の方が日本よりも欧米らしいのではないかと感じた。

日本にも数多く存在する公園、コンビニエンスストア、スーパーマーケットを比較して、新たな違いと見習わなければならない点を見出すことができた。すべて国民の生活に根差した場所であり、それぞれの国のリアルタイムな文化を知ることができる場所といえよう。一方で、初めて訪れたときにカルチャーショックを受けやすい場所ともいえるかもしれない。

次に、私たちは弘大（ホンデ）エリアの駅前通りを訪れた。弘大エリアは韓国を代表する美術大学である弘益（ホンイッ）大学の周辺に位置する、サブカルチャーの発信地である。

昼食をとるために、様々な韓国料理の店を訪れ、韓国の食文化に触れた。トッポッキ、ホットク、チヂミ（現地の言葉では「プッチンゲ」）、韓国ラーメンなど、現地の雰囲気も相まって、どれも日本では味わえない美味しさだった。

最後に、お土産を購入するために、私たちはいくつかの化粧品店を転々とした。ここでもやはり韓国の物価の安さを痛感するわけだが、それとは別に、また新たな発見があった。訪れた店の店員の多くが外国語に対応していることだ。英語はもちろんのこと、中国語やフランス語、イタリア語、ロシア語対応の店員が常駐する店が多く見られた。ここで疑問に思ったのは、日本語に対応できる店員が少なく、明洞に比べて日本語の看板が少ないことだ。明洞のような場所では、現地の店員は日本人に向かって日本語で話しかけ、看板も日本語で書かれているものが多い。その代り、前述したようなヨーロッパ系言語に対応する店員は少なく、アルファベットはあまり目にしない。交流した生徒によると、「明洞は外国人の観光客のなかでも日本人が多く訪れる場所で、弘大はもともと日本人観光客が少なくて、化粧品の専門店が多いから欧米の化粧品会社から研究に来るお客さんが多い」ということだ。客層によって街全体を飛び交う言語が異なるというのは、なかなか面白い現象だと感じた。

日本だと観光客向けの言語が、ここまで地域によって異なることはないだろう。朝鮮半島は古くから物々交換や商売を盛んに行っていた地であり、客とのコミュニケーションが盛んであった。それが現代の外国人観光客への言語対応という形で、地域ごとに現れているのかもしれない。

今回のフィールドワークを通して、韓国の「現在の文化」を実感することができた。国立中央博物館にて、韓国（朝鮮半島）の歴史と共に伝統的な文化に触れた翌日のことだったため、韓国の「文化の今昔」を感じた。今と昔で異なる点や変化した点は多いが、今の文化の根底には、昔の文化の名残が感じられる箇所も多々あった。また、インターネットを見ただけでは分からないような、現地の空気感や人々の活気が、自分にとってとても新鮮で貴重だった。これらから、「似て非なる国」「近くて遠い国」を実感として得られた。

今回、貴重な体験をさせてくれた高陽国際高校の生徒に心から感謝する。私たちと彼らは、日本と韓国の文化交流がさらに盛んになり、お互いに良い刺激となることを願っている。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会にて、日韓両国の立場から様々な問題について考えることができた。今まで知らなかったお互いの認識や考え方などを知ることで、新たな発見も数多くあった。今回はその中でも、特に印象に残った二つの項目について記す。

まずは「互いの国のもので惹かれるものは何か」というテーマでの話し合いだ。ここでは、韓国の生徒から、「日本の労働システムが羨ましい」という意見が出た。パートタイムやアルバイトなど、自分の都合のいい時間に仕事をすることができる点や、韓国と違って時間外労働に制限が無く、自分の仕事を好きなだけ時間を使ってこなす「残業」に興味があるという。韓国では深刻な就職難が問題になっており、仕事に就きたくても就けない若者が年々増加している。就職に手いっぱいな韓国の若者にとって労働に関する選択権はほとんど無く、「自由がある労働」に惹かれるのだという。ここで、日本が抱える労働に関する問題について質問してみた。「日本ではブラック企業と呼ばれる企業の存在が問題になっている。それは労働基準法に逆らった労働形態を労働者に強いるものだ。韓国にはそれが存在するか、また、そのような企業でも働きたいと思うか」。返ってきた答えは、「韓国の企業のほとんどがそうだと思うし、自分はそれでも働きたいと思う。今の韓国の若者にはそこに就職する選択肢しか残されていない」というものだった。さらに、私たちは彼らに日本で急増している若年離職者の問題について話した。彼らが離職する理由は「自分のやりたい仕事ではないから」「上司が気に入らないから」といった身勝手なものであることが多いことを説明すると、「とても羨ましい。韓国の若者には自分で会社を辞められる権利さえ与えられない。日本の若者はとても贅沢だ」と言われた。

若者は自分で生活を営むために、家族を養うために働かなければならず、心から働きたいと思う人も多い。彼らは日本の若者よりも高い割合で存在するはずだ。しかしながら、前述したように、韓国では深刻な就職難が問題になっている。この就職に関する「需要と供給」のギャップが、熾烈な教育競争の過熱を生んでいるに違いない。また、韓国では企業形態が、大企業と零細企業に分かれる二極化が拡大している。家族を支えるためには大企業に就職する必要があることから、さらに競争が過熱してしまう。

今回、このテーマについて話し合ったことで、韓国の就職難の深刻さと、日本の若者が恵まれていることを学んだ。韓国で就職難が問題となっていることは、現地に行く前からゼミや国内巡検で学んできた

ことではあったが、いざその問題に正面から立ち向かわなければならない人々と会話すると、その問題がいかに彼らの将来に影響しているかが、ひしひしと伝わってきた。一方で、日本の若者には自分の労働できる環境に対する感謝が足りないと感じた。身勝手な理由で労働を放棄することは、とてももったいない。しかし、不当な労働条件のもとに働かされている場合は、自己の判断で労働を放棄することも必要だ。

日本と韓国は異なる種類の労働問題を抱えているが、それを理解したうえで、様々な企業などの経済協力ができるようになると、両国の関係はさらに良くなるだろう。

意見交換会も終盤に差し掛かり、いよいよ歴史認識問題について話し合うことになった。「日韓の間で植民地支配に対する謝罪と和解は十分に行われていると思うか。それはなぜか」という問いに対して、韓国側からの意見は、「お金も受け取ったし、協定や書面のうえでは和解が成立したと言える。しかし、日本の一部の政治家による不適切な言動がある中では、謝罪が十分に行われているとは到底言えない。謝罪が無ければ和解など成立するはずがない」というものだった。

では、「謝罪」とは、具体的にどのようなことをすればよいのだろうか。交流した学生は「韓国に日本の首相が直接来て謝罪すること」と語った。日韓合意において、日本の公式な発表として、安倍晋三首相は「謝罪と反省の意を表す」としたが、直接謝罪することは未だない。加えて、韓国国内における、「安倍晋三首相が謝罪と反省の意を表すとした事実」の認知度は、日本人が思っているより低いものである。ソウル市内の中学洞（チュンハクドン）では、「水曜集会」と呼ばれるデモが行われている。この集会は1992年、当時の日本首相である宮澤喜一氏の訪韓を機に25年間続く、慰安婦問題解決のための集会である。交流した学生の中でも、参加経験がある人は多く、彼らはデモの参加者についてこう語った。「デモに参加している人の中には、反日を謳いたいだけの人もいる。慰安婦の問題について真剣に抗議している人は、実は私たちが思っているよりも少ない」。彼らの中には、家庭や学校で小さいころから反日感情を植え付けられ、何が良くて何が悪いのかを考えずに、日本を批判する人もいるという。このような人々にとって、「安倍晋三首相が謝罪と反省の意を表すとした事実」つまり「日本の公な事実」は、耳に入りにくいものなのだろう。もちろん、韓国国内の報道にも責任はあると思われるが、自分から正しい情報を求めようとする風潮は、がむしゃらな反日の風潮よりも圧倒的に少ない気がする。こんな中、韓国では「直接の謝罪がない」という事実が、反日の風潮をさらに仰ぐ要素となり得るのではないだろうか。

さらに、韓国の人々が日本に対して抱く不満として、日本政府が公式の発言として「（植民地支配は）強制的ではない」という文言を使ったことがある。日韓合意直後に首相の妻が靖国神社を参拝したこともある。日本の一部の政治家による不適切な言動は「妄言」と呼ばれ、韓国国内のみならず、日本国内をもざわつかせた。国内の意見にまとまりがなく、「本当に謝罪の意を持っているのか」と疑われるのは仕方のないことだと私は思う。しかし、意見や考え方は人それぞれであり、日本国憲法でも個人の思想の自由は保障されている。個人に「謝罪の意」を押し付けることはあってはならない。それは日本が朝鮮の人々にしたような思想の強制ともいえるからである。私が言いたいのは、公の場面での発言に関することだ。私たちの言動は、マスメディアを通じて他国で報道される。マスメディアの前では、あくまで日本の代表として自分が責任を取れる範囲で発言しなければならない。いくら個人の意見を主張したくても、その言動に責任が取れず相手国から叩かれて「軽率でした」と謝罪するのでは、日本に不満を持たれても仕方ないと私は思う。だからといって、個人の意見を主張し、全面的に争えというわけでもない。現在の国会の様子を見る限りでは、「大規模な口論」としか思えない時がある。マスメディアの前では、日本政府の公式な「意見」がある場合はそれを発表したうえで議論することが正当だろう。私たちは言論の自由を持っている。しかし、それと同時に国民として果たさなければならない義務も併せ持っている。今、自分はこの場で何を語るべきか、何をすべきか、感情的にならず冷静に考えて議論することが必要不可欠なのである。

今回の意見交換会で、学んだことは私の大事な経験や知識となり、そこで得た彼らの言葉は私の貴重な資料となる。日韓両国の立場から、たくさんの意見が飛び交ったあの場にいることができて光栄だった。今回のように、日本と韓国の両方の考え方をちゃんと理解する人が少しでも増えたら、日韓の関係はより良くなるだろう。私たちの世代はそれに努められるよう、柔軟な考え方と寛大な心と冷静な頭を持たなければならないと学んだ。

最後に、このような貴重な会を設けていただいた両高校の先生方と、会に出席してくれた高陽国際高校の生徒の皆さんに、心より感謝申し上げる。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

今回の韓国巡検では、国立中央博物館、戦争記念館、宗廟（チョンミョ）、景福宮（キョンボックン）、タプコル公園、西大門刑務所、さらには韓国と北朝鮮との軍事境界線付近の臨津閣（イムジンカク）を訪れることができた。すべて、韓国の文化や日本との関係、歴史を知るうえで、とても印象に残り、学んだことも多かった。しかし、それとは別に、私にはさらに印象に残った場所がある。

それは、韓国ソウル市の日本大使館を見上げて座る少女像である。韓国の気温１度の寒空の中に独り座る彼女には、マフラーや帽子、ガウン、靴下、カイロなどたくさんの防寒具が着せられていた。地元の人々が「寒くないように」と着せたものだ。また、周りには花束や鉢植えが添えられていた。少女像は、私が日本のニュース番組などで見る姿よりも、華やかだった。そして、日本のニュースなどでは分かりにくいことだが、少女が座っている台座に小さなタイルの集まりで施されている。影の心臓に当たる部分には、青い蝶のタイルがはめ込まれている。

また、さらに驚いたのは、少女像の隣に小さな小屋があったことだ。これはパラソルに透明なビニールシートを被せたもので、中から外の様子が見える造りになっている。中に座っていた女性に「なぜここにいるのか」と問うと、「自分たちが少女像を見張っているのだ。人目に触れない夜に政府が撤去してしまうのを防ぐため、私たち市民団体が分担して夜も寝ずに見張っている」と答えた。これらの点から、少女像に対する韓国の人々の思いの強さがうかがえた。それは私たちが日本で見聞きする情報よりもはるかに強い衝撃を与えた。

2016年12月31日に釜山（プサン）の日本総領事館前に、新たな少女像が設置された。地元の大学生によって構成された市民団体によるものであるため、政府の方針ではないが、国内における賛同の声は少なからず上がっている。しかし、2015年の日韓合意の際に韓国政府は少女像を撤去する方針を示した。それに相反して新たな少女像が設置されたことは、日本政府だけではなく韓国政府にとっても遺憾であると言えよう。韓国政府は現在に至るまで、釜山の少女像について明確な撤去方針は発表していない（2017年１月４日現在）。しかし、韓国国内でも「国家間の約束は果たすべき」などの声も上がっている。

不安定な韓国の情勢の中、日本と韓国の関係を築くうえでは、これからも韓国国内の動向から目を離すことはできないだろう。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

巡検を行ったことで新たに分かったことは、数えきれないほどある。今回は、その中で最も印象に残った二つのことについて取り上げる。

まず、「日本と朝鮮半島における陶磁器の歴史」について、新たに分かったことがあった。国立中央博物館にて陶磁器の展示を見学し、朝鮮半島から日本へ如何にして陶磁器が伝わったのかを学んだ。朝鮮侵略で、豊臣秀吉が朝鮮の技術者を拉致し、日本に連れて帰ったことで日本に陶磁器がもたらされたことは、韓国を訪れる前から知っていたが、今回新たに分かったのは、韓国では朝鮮侵略が「陶磁器の戦争」と呼ばれているということだ。今回、博物館内の案内をしてくださったユさんは朝鮮侵略についてこう語った。「朝鮮侵略は、韓国の人にとってはかなり大きな事件でした。教科書でもたくさんのページを使って取り上げられる史実です。朝鮮侵略で、秀吉は朝鮮から二つのものを奪ったとされています。一つは、多くの朝鮮人の命。もう一つは、朝鮮人の陶磁器の文化です」。国の文化は、その国の人々にとって誇らしいものであり、それは人々の精神の中で生きるものである。文化の継承者を拉致することが、当時の朝鮮の人々にとって、どれほどの怒りを生んだのか計り知れない。日本人はもたらされた文化を良しとし、粉青沙器（陶器の素地に白化粧を施したもの）をはじめとした器、茶碗の生産が活発になったことで、日本に「茶の湯文化」が生まれた。今でこそ茶の湯文化は日本の誇る文化であるが、その文

化の発達の裏には、無理矢理故郷から連れてこられて、複雑な思いを抱えながら生活していた朝鮮の人々の存在があることを忘れてはならない。

次に、「三・一独立運動の際の日本軍の暴挙」について分かったことがあった。タプコル公園には、1919年３月１日に独立運動が始まってから、朝鮮半島全国各地に「万歳運動」が広がる様子を描いたレリーフが10枚設置されている。その中でも、６枚目と７枚目に描かれた内容を見て、新たに分かったことがある。６枚目には、日本軍が堤岩里（チェアムリ）教会事件の際に犯した暴挙の様子が描かれていた。キリスト教徒と天道教徒を教会に閉じ込め、銃を乱射し火をつけて惨殺したという事件である。日本軍は火から逃れた女性も子供も構わず銃剣で殺した。このレリーフには、当時日本軍が朝鮮の人々に対して行った理不尽な暴挙が描かれている。「独立万歳」を叫んだ人々が日本軍に殺されるのには、理不尽であるにしてもまだ理由がある。しかし、女性、まして子供には殺される理由など一切ないと私は思うのだ。当時の日本軍は、独立を叫ばれたことで軍全体に頭に血が上った状態だったのだと感じた。７枚目には、天安（チョナン）軍が平昌（ピョンチャン）市場に集まり、数千人の群衆が独立宣言式で「独立万歳」を叫ぶ様子が描かれている。この独立宣言式を首謀した20名余りの人々はその場で惨殺され、柳寛順（ユ　ガンスン）は日本警察に逮捕され、酷い拷問に耐えながらも、遂に獄死したという。このレリーフには、日本軍が朝鮮の人々に行った見せしめが描かれている。首謀者の20名を惨殺することで、他の人々に対して恐怖を与え、独立運動を抑えようとした日本軍の卑劣な行為が見て取れる。ここで問題となっているのが、日本軍の犯した罪に関して、日本ではそれほど知られていないものの、韓国では歴史教育の要素に組み込まれていることだ。現に私もSGHゼミに参加して韓国のことを学ぶまでは、この事件のことは全く知らなかった。歴史教育の深度の差は以前から声高に叫ばれていることだが、現地へ足を運んで、ようやくことの重大さを認識することができた。

今回韓国巡検に行ったことで、自分が本当に知らなかった韓国の歴史文化や韓国国内の実態を知ることができた。新たな発見の連続だった三泊四日で、自分の知識の幅を拡げ、経験を積むことができた。この知識と経験を活かして、これからのグローバル社会について、日韓関係について、積極的に考えていきたいと思う。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

This time, I was very happy to be able to see you.

You gave me various knowledges, information, experiences and amusements. Especially, there are the three things that remain in my impression.

First, you told us “kongi-nori”. It was very excited! I played it at the night with my roommate, she also said it was very excited. I play it in my classroom now. When I see you again, let’s play together!

Second, you took us Korean town like Hapjone and Honde. We had not been to Korea so the experience became our first wonderful Korean experience. Thank you for go shopping together. I gave my teachers, seniors, friends and family souvenirs which I bought. They were pleased very much. Thank you so much!

Third, you discussed hard and seriously with us. We were afraid of the discussion before start. However, you talk with us kindly. We felt relieved. We couldn’t discuss all the topics but the time was meaningful.

In addition, I made a speech when we met first time and I went to your school. I was anxiety but you welcomed me and praised my speech. Thank you for your listen my clumsy speech.

Japan and Korea has various problem but we surely can solve them. From now on, we must cooperate to solve them, grow each country. For that reason, the young people like us should interact and talk together more. It is the thing which I learned this time. I hope to make good relationship together so let’s talk together more in LINE!

Thank you for have a wonderful time in the three days.

I hope to see you again. Thank you very much.

１年　小川　コナ

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

高陽国際高校の生徒との交流会では、ビデオ通話で話したことのある人もいる中、ほとんどの人が初対面だったので仲良くなれるかが心配でしたが、その時間が必要なかったほどすぐに打ち解けあうことができました。自己紹介の時間から、お互いに打ち解けることができて、とても素晴らしい雰囲気だったので、楽しみながら時間があっという間に過ぎていくように感じました。最も印象的だったのは、高陽国際高校の生徒たちの日本語の上手さです。私たちは自己紹介以外はすべて英語で学校紹介などを行いました。一方で、彼らはすべて日本語で説明してくれて、その日本語力の高さには圧倒されました。私たちのグループの中には七か国語も会話できる生徒がいたのは本当に驚きです。学校紹介で異なる点は多くありましたが、高校生活紹介の中では、お互い住む国は違っても、生活に共通する部分が多くあり、より親しみを感じることができました。また彼らの大変フレンドリーな性格と、お客としてもてなしてくれる姿には、一期一会の精神を感じ、本当に心を打たれました。リーダーシップも兼ね備えており、国際人とは、こうでなければと学ぶべき術も分かる有意義な時間であったと思います。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

最初に地下鉄を利用してハプジョンという駅まで行き、スーパーマーケットで買い物をすることになっていました。ところがついた時間があまりにも早かったので、近くにある公園のような場所で待っていました。その待ち時間で、韓国の学生がよくする遊びを教えてもらい実践しました。とても面白い遊びで、日本にも同じようなものがあったような気がしました。それから、韓国のセブンイレブンに入って中を見ました。日本製の文具は二倍の値段で売られていて驚きました。

その後、スーパーマーケットが開店したので買い物を始めました。店内はとても広く、ショッピングカートが大きくて、お店の中を回っていると、日本のキャラクターグッズ、例えばリラックマ、ハローキティ、マイメロディなど沢山売られていて、日本よりもグッズが安いものもありました。事前にいろいろ調べていましたが、日本のもので韓国でも人気なものが多いのは本当だと感じ、友好的なイメージが強くなりました。食品売り場では、高陽国際高校の生徒たちのおすすめの食べ物を紹介してくれました。キムチや韓国のりなど、韓国ならではの食品はそれほどでもなく、輸入品が多いなとも感じました。FTAを多国と結んでいることの賜物と思いました。日本製お菓子も売られていて、三倍以上の値段のものもあり驚きました。

地下鉄でホンデに行きました。大学に入ることはできませんでしたが、周りの商店街のコスメショップを案内してもらいました。店内では、豊富な品揃えに、日本語表記での説明があり、店員さんは日本語や英語での会話が流暢でした。いろいろ教えてもらい、興味がわき、自分用のケア用品も購入してしまいました。昼食はおすすめのラーメン店で一番辛くないラーメンを注文していただき、楽しく美味しいひとときでした。普通の旅行ではできないような現地での体験をさせてもらい、貴重な時間を過ごすことができました。このフィールドワークでも、高陽国際高校の彼らの人柄に感動させられることが何度もありました。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

巡検の中で最も大切なイベントの意見交換会では学ぶことが沢山ありました。15個のテーマすべてについてじっくり話し合う時間が十分なかったことが残念でしたが、大きな成果は得られました。歴史が絡んでくる問題について論争になることが予想されていましたが、お互いの考え方で異なったのは竹島に対する意識でした。SGHゼミで事前に取っていたアンケート結果のように、日本人と韓国人がこれからの日韓関係を考えていく上で重要だと考えるものが、日本人は歴史認識、韓国人は竹島問題と分かれてしまっているのがよくわかりました。私の個人的な意見としては、竹島についてはあまり考える必要はないと思っていたので、こうして直接意見を聞くと、そこが大切だと考えているのは本当なのだと実感しました。深くそのことを考えているかどうか聞いてみると、竹島は日韓両国の関係を考えていく上では外すことができないから述べているだけと言っていました。韓国との

関係改善に最も必要なことは歴史認識だと思っていましたが、竹島の問題を高校生も大切なことだと認識しているからには、前途は多難であっても話し合いは少しずつしていくことが大切だと思いました。

その他の意見は双方似たものが多かったです。日韓の将来についてお互いの意見を述べ合うときにうなずきながら聞く人が多かったです。韓国側の意見で興味を持ったものに、日本の職業制度、細かくはアルバイト保証で交通費が支給されることに驚いていたことがあります。職に就けない人が多い韓国の職業制度との認識の違いが分かりました。

互いの意見、考えをぶつけ合って理解を深めることの大切さを改めて実感しました。このような取り組みを若い世代で進めていけば、将来の日韓の外交は明るいということを学ぶ良い機会でした。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

西大門刑務所歴史館が最も印象に残っています。日本が韓国を併合していた時に、独立運動家たちを収監し、多くの人々が犠牲になった現場は生々しかったです。一つ一つの施設を見て回るたびに、植民地支配時にどれだけ日本が韓国に酷いことをしてきたのかがひしひしと伝わってきて、この機会がなければ、その恐ろしさを知ることができなかったと思いました。このことから、百聞は一見にしかずという言葉はまさにその通りだと感じ、授業という枠内は情報があまりにも乏しすぎると確信しました。

拷問の様子を再現している模型はひどく恐ろしかったです。獄舎での環境も観て、中での生活環境が最悪であったと感じました。女性の独立運動家専用の獄舎もあり、中を見ることはできませんでしたが、その存在があること自体が恐怖です。悪意で満ちていると感じたものに屍躯門という日本が独立運動家を死刑にした後、その事実を隠蔽しようと死体を密かに搬出するための通路があります。このため、戦後も子孫たちは先祖様の遺骨を受け取ることが困難になってしまい、韓国で根強く残る儒教の思想に反する火葬など、すべてが彼らのプライドを傷つけてばかりであり、隠蔽工作をしていたことが非常に印象に残りました。隔壁場という施設は収監者が運動するための施設だそうですが、彼らが衰弱しないように運動させることを目的としていたことが、家畜のようなひどい扱いだと思いました。都合よく運動させ働かせ、あまりにもひどい行為ばかりされていたことがよくわかります。

日本人のこのような蛮行を現在まで詳しく知らなかった自分が恥ずかしくも感じました。私は、若い世代に責任がないという意見に賛成ではありません。自分たちの先祖の過ちを認め、そのことを深く学び、次の世代に伝えていかなければならないと思います。ドイツのような姿勢を持つべきだと考えています。日本政府の閣僚たちはそのような犯罪者をまつる靖国神社を参拝しています。韓国だけではなく他国から非難されることは目に見えているのに、どうしてそのようなことを平気でできるのか私には理解できません。日本という国がこれから韓国と外交をしていくことを困難にするばかりなので、止めるべきだと考えます。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

日本という小さな枠組みではなく、直接、歴史的建造物を見たり、高校生と意見交換をしたりしたことで、広い視野で考えることの大切さが改めてよくわかりました。また、交流会や意見交換会で、日本に対して好意を抱いてくれていることがよく分かる発言が多かったことから、お互いの理解が進んでいけば、隣国同士で友好的な関係を維持することにつながることが実感できました。日本にいるだけでは、何の解決策も生まれないと思います。今回の巡検まで、政治、経済、歴史などを通して日本と韓国について学んできましたが、現地で見て、話して、聞く、ということは、理解するために絶対必要なものだと感じました。韓国のイメージとして、激しい人々ということがわずかに頭の片隅にあったのですが、明洞や仁寺洞での食事や買い物のときも店員さんはとても丁寧で優しかったです。また、ほとんどのお店が日本語でも接客しているので、日本に比べて英語の対応もできていて、グローバル社会が進んでいることも判りました。日本が韓国に植民地支配で残した大きな傷跡も、今まで知っていたものと規模が異なることを理解する機会にもなりました。日本の歴史教育が不十分だと言う韓国側の考えも解りました。戦争や対立は良くない、それがない社会に向けて動いていかなければならない、今まであったこと、犯した罪はすべて認め、常に前向きな世界を作っていかなければ、未来は何も変わらないと大変強く感じました。外交がすべてではなく、お互いの国々を往き来して、批判することを考えるのではなく、認め合う、理解しあうことを重視することの大切さが分かったことは、私にとって大きな成長に繋がると確信しています。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you very much for entertaining us the other day. I really enjoyed talking with you. Thanks to you I was possible to spend meaningful time. Time I spend with you is the treasure for me.

I found out that there are many things which should be learned from Korea. It was possible to learn variously by skull session. I’d like to utilize this experience by various situations. I hoop I could see you again. Good luck.

２年　芹澤　優希

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私がなによりも印象に残っているのは、語学力の差だ。最初に高陽の生徒が日本語で学校紹介をしてくれたのだが、まるで日本に何年か住んでいたかのごとくとても流暢であった。彼らは日本語を勉強し始めてまだ一年ちょっとだよと言っていたのだけれど、全くそうは思えないほど日本語を自分のものにしていた。どのようにして日本語を勉強しているのかと尋ねてみたところ、みんな日本のアニメを通して学んでいるとのことで、またそれが興味を持たせてくれているそう。振り返ってみれば、アニメに関する話をしているときが一番盛り上がっていた気がする。ここで改めて日本のアニメ文化の影響力を身に染みて実感することができた。

自己紹介をする場面で、Kim Kang Hyonくんの自己紹介が強く印象に残っている。彼は英語、日本語の他に中国語、ロシア語、スペイン語、フランス語を話すことができるのだ。私はそれを聞いて驚きを隠せなかった。高陽側の他の生徒が、彼は特別だよ、なんていうふうに言っていたけれど、そもそも彼らの英語力は我々とは比にならないくらい高かった。発音、アクセントは言わずもがな一度に話すことのできる英語の量が全然違って、同じ高校生であるにもかかわらず扱える英語力に差がありすぎることをひしひしと感じた。何がその差を生み出しているのかを考えたときに、もちろん教育指導の仕方や環境はあると思うのだが、それ以上に「外国語を学ぶのが好き」という姿勢ではないかと思った。高陽側の生徒は口をそろえて外国語を学ぶのが好きと言っていた。やはり好きこそものの上手なれというのは本当で、日本の高校生が英語力をつけるにあたって単語力であったり、文法力というのは大事なのだけれど、それよりも使ってみたいだとか自分のものにしたいという積極性が必要なのだと思う。交流会を通じて、今の自分の英語力と今後外国語を学ぶ上で重要なことを知ることができた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークでは、まず合井（はぷじょん）駅の近くにあるショッピングモールに向かった。開店前に到着してしまったため、高陽の生徒がゲームをしようと提案してくれた。よく学校でやっているんですと言われながら、ルールや遊び方を説明してもらうと、驚いたことに私たちが小学校のときに友達と遊んでいたものにとてもよく似ていた。似たゲームが日本にもありますよ、と伝えるとそこで大いに盛り上がることができた。日本と韓国の似ている部分をまたひとつ発見することができた。

さて、ショッピングモールに入ってみると、アメリカのウォルマートに似ている印象を受けた。日本のとは比べ物にならないほど広く、品が多かった。思えば、道路で走っている車にフォードやシボレーなどのアメ車が多かった。そういった面ではアメリカに寄せている部分があって、日本との違いを発見することができた。また日本との違いとして地下鉄が印象に残っている。韓国は電車それ自体が大きく、ほかに電子広告や床から天井にまたがるホームドアなどが整備されていて、交通網の発達を感じられた。日本もこういったものは早く導入していくべきではないかと思う。

そしてショッピングモールを後にして弘大（ホンデ）へ向かった。様々なお店が立ち並び、特に衣服店が目立った。近くには芸術大学である弘益大学がある影響もあって、ファッションやグルメなど若者に

人気の今ドキのものを目にすることができた。このフィールドワークを通して、韓国の生活・文化をより一層深く知ることができたと思う。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

＜会の進行＞

私はこの意見交流会で司会を務めたが、時間配分をうまく調節することができず、議論項目によって話の深め具合にばらつきを作ってしまった。そのことに関して申し訳なく思っている。だが、旭丘と高陽の両校の生徒ともに質問や意見を何度も交し合うことができたので、とても有意義な時間を過ごすことができたと思う。

＜話し合い＞

自分が日韓の歴史問題に関する議論項目を担当しただけに、その部分についての話し合いが印象に残っている。植民地支配に関しては立場が違うゆえに、やはり事実に対する捉え方や焦点などに差があった。新たな目の付け所が多々あり、これは大きな収穫だったと言える。また謝罪と和解についての話では、韓国の人々が我々以上に日本の政治家の歴史問題に関する動き（ex.靖国参拝）に注目していることを確認することができた。そこで慰安婦の話になったときに、高陽側が「韓国側は誠意ある謝罪を求めている」と主張されたので思い切って「では日本は具体的にどのようなことをすればよいのか」と質問してみると、「あまり意識したことがなかった」と返された。かなり意外な返答だったのでとても印象に残っている。高陽側に「大切なところを気づかせてくれてありがとう」と言われたときは、そこはかとなく嬉しかった。いろいろな立場に立って多面的に考えることの重要性を意見交流会を通じて学ぶことができた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

今回の巡検で最も印象に残っているのは、一日目に訪れた戦争記念館だ。日本の戦争記念館は戦争の被害を強調して展示がされているが（ex.遺品の展示）、韓国の戦争記念館は空間を最大限に利用し、プロジェクションマッピングなどを駆使しながら当時の戦場を再現していた。戦争の悲惨さや過酷さなどがより直接的に描かれていたことに驚きを感じた。日本も韓国を見習うべきではないかと思った。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国を訪れて思ったことは、韓国が世界を視野に社会づくりをなしているということ。公共交通機関ではハングルの他に英語、中国語、日本語が整備されていて、明洞といった繁華街などの人が多く集まる場所では英語や日本語を話すことのできる人が多い印象を受けた。その点では韓国は日本よりも何ステップかグローバル化が進んでいるように感じた。日本が今後のグローバル社会で活躍していくために、もっと言語教育に力をいれていくべきだと強く感じている。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

あなたがたが親切に接してくれたおかげで、韓国ではとても有意義な時間を過ごすことができました。本当にありがとう。外国の人と英語で活発な意見交流をしたのはこれが初めてで、貴重な経験をすることができました。また私たちを楽しませるのにプレゼントを中心に様々なおもてなしを施してくれたことが嬉しかったです。短い間だったけれど、この思い出が消えることはありません。またいつか一緒にショッピングやディスカッションをしたいですね。

Thanks to your kindness, I was able to spend a very meaningful time in Korea. Thank you very much. This was the first time that I got active exchange of opinions in English with foreign people and I was able to have a valuable experience. I was glad to have been given various hospitality mainly gifts to entertain us. It was a while, but this memory never fade. I want to go shopping and do discussions with you someday.

２年　新海　花音

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私は韓国を訪問する前から、メディアにおける韓国での反日報道は過剰であることを把握していた。しかし、それでもなお、あまり良い印象をもっていなかったことは確かである。その点でいうと私は、韓国での現状を単に把握しているつもりだったのだと思う。なぜなら、高陽国際高校の生徒たちと接し、随分異なる印象を受けたからだ。高陽高校の生徒は友好的で思いやりのある、良い人ばかりだった。日本語を学ぶ彼らは、私たちに日本語と英語を交ぜて話してくれた。「アンニョンハセヨ」「カムサハムニダ」くらいしか韓国語をろくに使えない私は、とても情けないと思った。

また、韓国の生徒たちはとても盛り上げ上手だと感じた。例えば、交流会の開会・閉会の言葉を互いに相手国の言葉で行った時だ。韓国の生徒は代表者が話すと、歓声をあげたり、手をたたいたりした。私たち日本の生徒はというと、そんな彼らにつられるように声を出し、拍手しただけだった（少なくとも私はそうだった）。日本人よりもノリがいいと感じた。

それから、交流会では互いに決まった額でお土産を用意していた。金額通りに準備した私たちとは対照的に、高陽生はこちらが恐縮するくらいのものを準備してくれていた。私を含め皆、交換するのが恥ずかしく、もっと良いものを選べばよかったと後悔した。おもてなしの精神は韓国にもある、と感じた。

繰り返したいのは、韓国の人々は日本人が思っているより遥かに良い人ばかりであるということだ。私は実際に接することがいかに大切か痛感した。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちの班は、まずスーパーマーケットへ行き、その後ホンデへ行った。移動手段は地下鉄と徒歩だった（日本の地下鉄と比較すると、ホームも車内も広く、車両間のドアは自動であるなど、利点が多かった。しかし、乗降車中でも扉が急に閉まるため、少し怖いと感じた。実際、降車側を待ってから乗車したら挟まれた）。スーパーマーケットでは韓国の子が実際に食べているお菓子やオススメの食品などを教えてもらった。お店自体は日本よりも棚が高く広々としていて、どちらかというと欧米のスーパーマーケットの縮小版のように感じた。だいたいは日本のお店と変わらないが、いくつか特徴的なものがあった。まず、海苔のコーナーに一棚以上使っていた。とても種類が豊富でお土産用のスナック海苔まで販売していた。それから、カップラーメンやインスタントラーメン、スナック類に辛いものが多くあった。当たり前だが醤油はなく、特にラーメンの種類は少なく感じた。

スーパーマーケットでかなり時間を使ったため、ホンデでは昼食をとり、少し買い物をしただけだ。ホンデは大学生くらいの若者が買い物をする街だそうだ。観光地であるミョンドンは飲食店や雑貨店、コスメ店のなど様々で、お店の方に日本語を話せる方が多くいたが、ホンデはコスメ店や衣料店中心で、日本語を話せる方には出会わなかった。昼食にはラーメンを食べた。韓国の飲食店ではどこへ行ってもキムチやナムルなど小料理が付いてくるのだが、このラーメン店も例外でなく卓上キムチと漬け物が置かれていた。こういった小料理は５品以上用意されていることもあり、食べきれるのかな、と思っていた。しかし、韓国の子と食事をしてわかったのだが、彼らは食べ物を残すことにあまり抵抗がないようだった。逆に私たちはなぜ残さないか聞かれたのだが、「もったいない」という言葉をどう説明すればよいのかとても困った。食糧廃棄の多い日本だが、個人個人では「食べ物を粗末にしてはいけない」という意識が高いと感じた。席から調理の様子が見えたのだが、麺はインスタントだった。日本であったら、ラーメン店であれば生麺を使っている店がほとんどなので、正直とても驚いた。

地下鉄の乗り換えやお店選びなどは全て韓国の子がしてくれた。移動中や待ち時間などは英語に日本語を交えて話しかけてくれたり、質問してくれたりした。日本語を選択している子たちだからかもしれないが、韓国の子は日本にとても興味をもってくれていると感じた。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私たちは事前に用意された15の多様なテーマ（日本の植民地支配に関するセンシティブな問題から両国で共通な課題、相手国に対するイメージまで）について話し合った。私の班はまず比較的話しやすいテーマから始め、最後に意見しにくいテーマを取り上げることにした。

○共通課題〈少子高齢化、格差、教育の過熱と就職難、外国人労働者など〉

進行に差はあるが、日韓には共通課題が多い。解決策を探ったが、似た意見のものばかりで、あまり進展はなかった。それは私たちの班

が弱者に優しい意見中心だったからかもしれない。時間があれば、反対意見の人をどう説得できるか考えたかった。ただ、国が違っても同じような考えをもつ人がいることはわかった。これといった方法がなかなか思い浮かばないがゆえ、深刻な課題になっている、と思った。

○両国の協力

協力にはいくつか種類がある。例を挙げると、災害などにおける援助がひとつ、開発や産業などにおける共同事業がひとつだ。日本にとって韓国は距離的に最も近い国であるため、互いに援助をしやすい。ただ今回の会では後者の共同事業、その中でも特に技術協力を中心に話した。日本側の意見は、日韓で力を合わせれば新しい発想が生まれるだろうという非常に抽象的なものだった。しかし韓国側は、日本の一般科学の研究と韓国の実用的な技術産業を合わせれば、両国の特性を活かせるという具体的な意見を持っていた。この意見なら説得力も増す。意見はきちんとした根拠があって成り立つことを、改めて学んだ。

○印象など

私たちは、そもそも韓国の印象がぼんやりとしていて、長所も短所も見つけるのに苦労した。その一方で韓国の子たちは日本語を選択しているだけあって、日本のことで知っていることが多かった。そのため、良い印象をもってくれていた。

やはり、相手を知ることは仲良くなるために非常に重要であると学んだ。

○植民地支配関連

戦争を知らない世代にとってこういったテーマは扱いが非常に難しい。それは加害側である日本にとっても被害側である韓国にとってもいえることだ（このテーマに取りかかる際、韓国の生徒も私たち日本と似たような反応を示したことに少なからず驚いた）。

韓国側は誠意ある謝罪を求めている。私たちの班は謝罪は十分ではないという意見であったのだが、どうすれば十分といえるのか考えつかなかった。特に何をもって誠意があるのかが難しかった。そこで、具体的にどうすればいいと思っているのか質問した。するとそれは、韓国側にとっても難しいことのようで、明確な答えは出なかった。逆に、韓国もベトナムに対してどうしたらいいのかよくわからないと言っていた。

唯一はっきりしたことは、お金で解決すべきでないということだけだった。形のないもの、良い例がないことの扱いは誰にとっても難しいと思った。

想定していたよりもずっと穏やかな意見交換だった。どちらかというと日本側が積極的に質問をしていたことが、意外だった。日本で知られる一般的な韓国人像とかけ離れていたので、やはり、実際に接してみる必要があると思った。また、報道だけではわからない韓国の様子や、教育なども知ることができ、とても有意義な時間を過ごせた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

最も印象に残った巡検先は景福宮だ。ここは朝鮮時代の王宮が復元された場所である（全てが再現し終わっているのではなく、現在も進行中である）。その理由は、再現されていたものが日本史の授業で学んだ人物に関するものや、出来事が発生した場所の頃のものだったからだ。やはり見知ったものだと、興味を持てた。特に印象的だったのは、高宗と閔妃がそれぞれ生活していた所だ。２人は朝鮮最後の王と王妃である。高宗の寝起きしていた建物では、睡眠中に暗殺されにくいようにする工夫を知れた。閔妃の住まいはただ暮らしていた建物というだけではない。閔妃殺害事件があった所でもある。ガイドさんの説明もあり、出来事についてより詳しく知り、覚え直すことができた。

景福宮という場所自体はそれほど広くないので、簡単に回れるようなところだ。しかし、建物ごとに門があり、壁があり、とても入り組んでいて、自分のいる位置を把握することが難しかった。また、中心となる建物以外は大きさに違いはあるが、外見はどれも同じように見えた。その中でも、屋根の裏のデザインは鮮やかな緑色で細かい彫刻をされたものばかりだったので印象的だった。

当時の状況を知った上で実際にあったものを見ることができたため、景福宮は非常に印象的だった。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

戦争の伝え方の違いを新しく学んだ。今回訪れた戦争記念館では朝鮮戦争に関する展示を見学した。この施設の外にはたくさんの戦車や戦闘機が並べられている。そこから入り口までの通路には壁一面戦死者の名前が刻まれている。朝鮮戦争に関する展示を見て私は、ここの展示は、韓国が北朝鮮に攻められてから、いかに反撃し現在の「停戦」に至ったかの勇姿を見せているように感じた。戦争での被害の展示もあるにはあったが、とても少なかった。どことなく違和感を感じた。それは今まで見てきた日本の展示が戦争の悲惨さに焦点を当てたものばかりだったため、そう感じたのだと思う。このような展示はこの朝鮮戦争が未だ「停戦」状態であることに深く関係していることを新しく学んだ。現在も徴兵制のある韓国において、戦争のデメリットを伝えるのは得策とは言い難い。必要なのは兵隊として貢献するという気持ちを高揚させることだ。だから日本とは違った展示になることを学んだ。

その一方で、タプコル公園のレリーフや西大門刑務所歴史館では弾圧や拷問など、独立に即した被害をはっきりと展示していた。現在の韓国の独立に関することなので強調するのだろうと思った。そのスタンスとしては、以後二度とこのようなことが起こらないように、というものらしいので、そういう意味では日本と同じであることを新しく学んだ。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

I'm so shyness. So, before I met you, I was very tense. Also I cannot show my feeling well even in Japanese. So I didn't think I could enjoy spending time with you. However,you were very kind and friendly. So I could enjoy talking with you.

I couldn't speak anything well,but you spoke to me many times. And you asked me about Japanese culture, Japanese lifestyle, Korean food in Japan,and so on. I felt happy that you were so interested in Japan!!

Now, thanks to you, I am very interested in your country,so I would like to learn about Korea. Then, I would like to talk with you easily by using Korean.

I never forget you. I hope to keep in touch with you.

【C班】

１年　青木　優花

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私は高陽国際高校の生徒と交流することで、日本の高校生と韓国の高校生の共有点と相違点を身を持って実感することができました。まず、高陽国際高校の生徒を見て思ったことはみんな大人っぽいなあということでした。女子生徒のほとんどはメイクをしていたし、男子生徒も同い年だとしてもどこか年上のように感じました。学習面では、大きな壁を感じました。最初の自己紹介ではほとんどの生徒が流暢に日本語を話していて驚きました。しかし、本人に「日本語上手ですね」と言うと必ずと言っていいほど「まだまだです。私の日本語は下手です」といったような返事が返ってきて、謙遜が含まれていたとしても高いレベルの言語教育がなされているのだろうなと思いました。さらに深く勉強の話をしていると、一日のほとんどといってもいい時間を勉強に費やしていて、そしてそれを当たり前のこととして話す姿に、日本と韓国の教育の差を感じました。また、交流会のプレゼンテーションではスライドを用いて説明してくれました。課題をするために必要ということで、一人一台ノートパソコンを持っていることには少し驚きました。日本では、情報の授業を設けても使いこなせない生徒も少なくはない中で、高校生の段階で基本的な動作を習得していることは社会に出たときのことを考えるととても良いことであると思いました。また、日本と似ていると感じることもいくつかありました。夜間学習の時間にはこっそりPCを使って映画などを見ていることや、授業中に寝てしまうことは、日本にもよくある光景だと思って共感できました。

高陽国際高校の生徒の自己紹介を聞いていて感じたことは、日本のアニメや漫画に興味を持っている生徒が多いということでした。アニメや漫画の種類も幅広く、ジブリや少年漫画、少女漫画など、私も幅広く漫画を読むのですが、私も知らないような漫画も読んでいて驚きました。休日などに漫画喫茶を利用して読んでいることを聞いて親近感が湧きました。

交流会で女子生徒が自己紹介で言った、「勉強はとても辛いです

が、みんな大人になるための通過点だと思って頑張っています」という言葉がとても印象に残っています。私は今まで韓国の教育の厳しさに対し少し引いていましたが、その言葉に頷く高陽国際高校の生徒を見て、まず自分の意識から韓国の高校生との大きな壁を感じ、今までの自分の甘さを痛感しました。日本という狭い枠組みにとらわれず、私も自分の将来のためにさらなる高みに向かって努力していこうと思います。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私は高陽国際高校の生徒の案内でホンデという街に行きました。ホンデとは、周辺に大学が集まっていることもあり、学生に人気の街だそうです。名古屋でいうと栄や大須のような印象を受けました。まずは、カラオケに行きました。カラオケでは、日本の生徒も韓国の生徒も主に日本の曲を歌いました。Greenのキセキやセカイノオワリ、AKB48、アニソンなど幅広いジャンルの曲を発音の違和感を全く感じさせないほど流暢に歌っていて驚きました。タンバリンやマラカスも使ったりして日本でカラオケに来た時と同じように楽しむことができました。

そのあとはゲームセンターに行き、UFOキャッチャーなどを楽しんだり、街を歩きながら買い物を楽しんだりしました。買い物をしていて思ったことは、スマホケースや日本のキャラクターのぬいぐるみストラップを取り扱っている店が多いということです。高陽国際高校の生徒いわく、ポケモンのストラップは一人一つは持っているほど人気だそうです。また、物価の違いには本当に驚かされました。10000ウォン統一のカバン店では、日本では5000円以上するような素敵なカバンばかりで、見ているだけでも楽しかったです。

昼食はからあげを食べました。三種類注文したのですが、味付けがされているものはなかなかに辛かったですが、どれも美味しかったです。けれど、高陽国際高校の生徒はこれくらいは全然辛くないと言っていて、味覚の違いを感じました。また、日本では大皿料理を箸でつついて食べることを嫌がる傾向にあるということを知っていて心配してくれました。韓国人の気遣いの優しさを感じました。

高陽国際高校の生徒とプリクラも撮りました。プリクラの専門店があり、日本では着ぐるみなどのコスプレは有料ですが、韓国ではチマ・チョゴリを簡易的にしたものなどを無料で楽しむことができました。プリクラ専門店の壁一面にプリクラシールが貼ってあることに、日本との違いを感じました。

最後に、韓国かき氷のお店に行きました。日本とは違い、牛乳の氷を使用しているらしく、とてもまろやかで美味しかったです。あと、食べていても頭が痛くなりませんでした。

フィールドワークをしてみて、日本の高校生と韓国の高校生は同じような過ごし方で休日を楽しんでいるのだなと実感することができました。高陽国際高校の生徒との距離もぐっと縮まり、とても楽しい時間を過ごすことができました。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私が高陽国際高校の生徒との意見交流会で最も問題だと思ったことは、日韓での歴史教育の差です。日本の教科書では韓国併合や従軍慰安婦問題、731部隊などについて、語句と少しの補足くらいしか記されていません。しかし、韓国では韓国併合や従軍慰安婦問題、731部隊について多くのページや授業数がさかれており、学生の日韓の歴史についての問題意識がとても高いです。また、日本の歴史についても学んでいて、豊臣秀吉やペリーについての知識も豊富で、歴史に対する関心の度合いからして差があると思いました。日本では過去のもの、終わったこととして学んでいることを、韓国ではこれからも忘れてはならない、繰り返してはならないものという強い気持ちと共に学ばれているものなのだと思いました。従軍慰安婦の話をしている時に、日本人側から、「日本では慰安婦像を撤去しろという意見があるのですが、そのことについてどう思いますか？」という質問がありました。その問いに対して一人の女子生徒が答えてくれましたが、彼女が意見を述べながら涙を流し、声を詰まらせる場面がありました。その姿を見て、私は今まで、「韓国側は一体何をして欲しいのだろう。何をしても無駄ではないのか。お金を払っても、謝罪の文書を出しても終わりが見えないじゃないか」と、歴史問題に関しては韓国側にマイナスのイメージを持っていましたが、その自分の考えがとても恥ずかしく感じ、そもそも私は歴史問題について韓国人と意見を交わすレベルに達してすらいないのだということをひしひしと感じました。日韓の歴史問題はお金だけで、条約だけで解決できるものではない。教育などを用いて日本の子供の認識を少しでも韓国に寄り添うものになるようにしていくなどして、長年に渡って償い続けるべきだと、私は思いました。それに加えて、今の私たちはメディアや教育の影響で日韓の歴史問題がここまで深刻であるということを知ることすらできない環境にあると言っても過言ではありません。問題視するというより、メディアの影響によって初めて知る韓国の知識がマイナスのものであるということもあります。そんな、正しく大切な情報に触れる機会すら与えられない環境で学ぶ日本の教育に対して、もどかしい気持ちを感じ、とても胸が痛かったです。

また、韓国の財閥についても話しました。そこで私が驚いたのは、韓国の生徒が、「サムスンは好きではない。財閥は嫌いだ。ただ、財閥に就職すると給料がいいからそこを目指すだけだ」と話したことです。私は、韓国ではサムスンなどの大企業はみんなの憧れの的で、みんな好き好んで就職すると思っていたのですが、そうではなく、金銭的な部分でのみ魅力を感じていて、実態は好きではないという意見はとても新鮮でした。

意見交換会では、私の思考の外側からの意見がたくさんあり、とてもいい刺激になったと同時に、自分の視野の狭さ、知識の偏りや歴史問題に対する認識の甘さなど、未熟な部分がたくさん見つかりました。共通の問題について話し合うには、同等レベルの認識、熱、知識が必要であると私は思います。日韓の歴史問題についてはまだまだ学ぶべきことがたくさんあるので、この経験を活かしてさらに認識を深めていきたいです。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私が巡検先で最も印象に残ったところは、戦争記念館です。まず、戦争記念館の前に展示されている大量の兵器や旗などを見て衝撃を受けました。日本にも戦争記念館はありますが、ここまで大量の兵器を展示してはいないし、そして何より、外側から見てすぐに戦争記念館とわかるような作りをしていて日本との違いに驚きました。また、戦争で亡くなった人をたたえる石碑がたてられており、靖国神社のような印象を受けました。館内の展示では、武器の展示や人形を使って当時の様子を表したものが多く、視覚や聴覚にうったえてくるように感じました。また、直接的な展示も多く、所々に怖いと思わせる雰囲気も感じられました。

館内の展示を見て感じたことは、どちらかというと戦争の悲惨さよりも戦争に対する若者のやる気を引き立てるようなものや雰囲気が多いと感じました。ピースおおさかでは、日本を被害者という立場から見て戦争で日本が受けた影響や戦争の悲惨さを伝える展示が多く感じましたが、韓国を被害者という立場から見た展示はもちろんあるのですが、それでもやはり日本の戦争記念館とは何か違う雰囲気を感じました。戦争に対するやる気を引き立てるような雰囲気は徴兵制に関係があるのかもしれないと思いました。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

巡検ではいろいろな施設を見学することができました。全体を通して私が新しく分かったことは、国によって展示の仕方や来館する人々に伝えようとすることが変わってくるということです。私の浅はかな知識ですが、日本には一国に対してその国との歴史問題などに関係する施設はそう多くないように思えます。しかし、韓国では日本の植民地化時代のことを伝えようとする、または背景に日本の植民地化時代のことが含まれている建物が多いような印象を受けました。それほどまでに日本が韓国にしたことが韓国に深い爪痕を残したということ、そして、それを韓国の人々が後世にしっかりと伝えようとしていることがわかりました。どの施設を訪れても、若い人から年配の方、デートだと思われるカップル、幼稚園または小学校低学年くらいの子連れの家族など幅広い層の人がいて新鮮でした。私なら恋人とデートで博物館に行こうという発想は出ないし、私が小さい頃には刑務所博物館や戦争記念館のような場所に連れて行ってもらったことはありません。しかし、施設を訪れる幅広い年齢層の人々を見て、韓国では学校だけでなく、社会全体として歴史問題、教育に対する意識が高いのかなと思いました。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for spending 3 days during my trip with us. Thanks

to you, I had very good time! I have a lot of things to tell you, but I can not send you long messages because my English in not good. So I would like to write the message that is the most important. I could learn a lot from you. I could notice that I was immature. I think I should study harder for discussing about our past and furture. I should feel more thinking of others.

I want to make good relationship with your country because I like Korea so much and Korean people are very wonderful!! You teached me these things. Karaoke, Karaage, Shopping, Purikura, and Shaved ice. I was very fun! I am happy because of meeting you. I can never thank you enough.

I will study Korean in college. Next time, I want to talk with you in Korean. Let's get together again sometime! Thank you so much!!

１年　今田　莉彩

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

この交流会では、自己紹介、日韓の学校紹介、高校生活紹介、文化紹介が行われた。

初めには韓国の学生が温かく歓迎してくれ、雰囲気の良さを感じた。

韓国の学生は、交流会中、日本語を使って多く話しかけてくれた。会話はすべて英語で行われるものだと思っていたため驚いたが、嬉しかった。私は韓国語で自己紹介をすることしかできなかったので、もっと韓国語を勉強していれば、より会話が盛り上がったかもしれないと思った。

韓国側の紹介を聴いて、彼らの勉強時間は、やはり私たちよりもはるかに長くて驚いた。しかし、日本人と同じようにマンガなどを楽しんでいることも分かった。また、日本の文化紹介の際には、ジブリの映画や、スマホのゲームの話題などで盛り上がった。

交流会では、「日本人」「韓国人」ではなく「一人の人」として互いに話すことができた。このような交流がもっと広まれば、日韓の関係がさらに良くなるだろうと感じた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちの班は、芸術の街といわれる弘大を散策した。弘大とは、芸術系大学の最高峰である弘益大学を中心とする地域のことである。クラブやライブハウスも多く、深夜までにぎわっているそうだ。通りには露店が並び、売っているものはどれもとても安くて驚いた。また路上ライブも多く開かれていた。例えるならば、日本の原宿のようであった。

初めに私たちはカラオケに行った。日本の歌を多く知っていてくれたので、全員で盛り上がった。そのあとはゲームセンターに行ったり、ショッピングをしたりして、交流を深めることができた。また、チマチョゴリ風の衣装を着て、プリクラをとった。少し動きにくかったが、伝統衣装の雰囲気を味わうことができてよかった。

昼食は、韓国で人気だというチキンを食べた。韓国人にはおいしい味付けだったそうだが、私には少し辛かった。その後、きな粉がかかったピンス（かき氷）を食べた。日本のかき氷よりもふわふわしていておいしかった。

韓国の学生の生活は勉強ばかりだと思っていたが、フィールドワークを行ったことで、彼らも日本の学生と同じように娯楽を楽しんでいることが分かった。また、韓国の生徒たちが街の情報をたくさん教えたり、日本語で話しかけたりしてくれたおかげで、より仲を深めることができた。このような交流を、これからも続けていけたら嬉しい。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

＜はじめに＞

３日目の意見交換会では、日韓の学生の意見の共通点や相違点を見出すことができた。話し合った内容と成果についてまとめる。

＜A．日韓が共通で抱える課題の解決について＞

1．歴史問題

歴史問題に関してはやはり日本人より韓国人の方が強い感情を持っており、日本がこれまでとってきた行動にいい印象を抱いていなかった。特に慰安婦像の話が出たときには涙を流す韓国の学生もいた。

この問題を扱う際に、韓国側は、日本は何でもお金で解決したがっていると思っており、権利はお金で買うことができないから不公平だと感じていることを新たに知った。また、彼らは日本の大部分の人が植民地支配などを正当化していると思っていたそうだが、実際は違うということを伝えられた。

また、日本側の意見としてあげられた、「今までも謝罪・補償を行ってきたが、一部の政治家の不適切な発言により、これまでの謝罪が無駄になってしまう。このような状況では何をしても無駄だと思えてしまう」という発言に対し、日本が補償金として支払ったお金が、実際は国の発展のために使われていたと韓国の学生は教えてくれた。さらに、ペリーと日韓併合の関係性や、文禄・慶長の役についての話題も出た。明治維新でペリーが日本を開国させ、日本を欧米化したように、日本も韓国を占領したのではないかという意見があげられた。

この話し合いから得たものとしては、日本人全体が植民地化に対して誠意ある謝罪の気持ちを持っていない、という韓国側の誤解を解けたこと、そして和解のためには、双方が正しい教育に基づいた知識を得て認識のずれをなくしていくことが重要だ、という点で一致できたことである。

歴史問題のまとめとして、これらの問題で日韓が歩み寄るためにどうすればよいかを話し合い、共通の認識を生み出すことができた。たとえば、互いの文化や歴史について深く理解すること、個人レベルでの交流を進めること、互いに正直になること、歴史を深く正確に知っている人が両国ともに少ないため、教育の内容・方法を改善し、正しい歴史を教えられるようにすること、未来志向で進んでいくこと、などである。

ここで、歴史問題を扱う際により重視すべきなのは、過去と未来のどちらだと思うか、班内で意見を聞いた。結果は、過去重視は０人、未来重視は６人（日４、韓２）、どちらも重視が２人（韓２）であった。どちらも重視する理由としては、過去と未来は切り離すことができないということがあった。私の班の人は、未来志向的な考えを持つ人が多かったが、この結果からも、日韓間での歴史問題に対する認識の差がよくわかった。

２、その他の課題

所得格差や競争の過熱、非婚化・少子化などの問題は、日本よりも韓国で、より深刻化していることがわかった。解決策としては、税率の改革・年金制度の見直しなど、やはり政策的なことが多くあげられた。

日韓が抱える課題の解決についてのまとめとして、グローバル化する社会の中で国民生活を豊かにするために何ができるかを話し合った。その中でサムソンなどの大企業に関する話が出た。私は、韓国の学生がそれらにあこがれを抱き、就職したいと思っているために、勉強に熱心に取り組んでいるのだと思っていたが、実際はそうでもないということを初めて知った。彼らは大企業にいい印象を持っておらず、むしろ嫌っているのだそうだ。しかしそれでも、給料の額などから、それらの大企業への就職を多くの学生が希望するため、競争は激しくなる。そしてその競争を勝ち抜くためには一生懸命勉強しなければならない、ということだそうだ。

＜B．グローバルパートナーとしての望ましい日韓関係のあり方について＞

文化面での交流は、前日の交流会ですでに話したので割愛した。

日韓関係の充実のために、若い世代に何ができるかという話し合いで出た意見は、まずは自国を知ること、そして互いに理解し合うこと、両国間に生まれている誤解を解くこと、交流を促進することなどがあげられた。

＜まとめ＞

どの話題においても、予想していたよりも日韓間で共通する認識が多いことがわかった。しかし歴史問題などでは未だに強い感情を持っている人もいるということも同時に知った。その感情の中には、日韓間での認識のずれから生まれたものもあった。これからさらに日韓関係を充実させるためには、今回のような交流の場を増やすことで、双方の誤解を解いていくことが重要だと感じた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

はじめに

４日間の巡検で最も印象に残ったのは、戦争記念館と臨津閣である。戦争記念館では、古代からの韓国の戦争について展示されているが、今回は主に朝鮮戦争（記念館では「韓国戦争」と表現されていた）の展示を見学した。また、臨津閣とは、民間人統制線（民統線）の南に位置し、「自力で行くことのできる、北朝鮮に最も近い場所」である。

1．戦争記念館

まず、施設に入る前に、屋外展示場を見学した。そこには160点あまりもの兵器や装備が展示されていた。日本ではこのように多くの兵器を一度に見たことがなかったので、衝撃を受けた。館に入ってからも、戦争に関する模型が多くあった。映像やジオラマは、激しく生々しかった。また、戦争で亡くなった人は「祖国のために命を捧げた烈士」「英霊」と表されており、「国を守るための戦争は仕方がない」という考えがあるように思われた。「独島」に関するコーナーもあり、韓国の愛国心の強さを感じた。さらに、「こども博物館」も併設されており、幼い子供がこのような施設で「戦争」を学ぶのだと思うと、少し恐ろしい気がした。

朝鮮戦争では、北朝鮮と韓国の勢力が次々と変わり、決着がつかないまま現在の停戦状態に至っている。つまりまだ戦争が「終わった」わけではなく、そのため展示を見ていても独特の緊張感があった。

全体的に展示を見て、停戦中のために譲歩できない部分もあるとは思うが、やはり日本の戦争に関する資料館と比べると、戦争を正当化しているような印象を受けた。それとともに、民族の統一を最大の目標にし、そのためにどうするべきかを両国が考えることで、終戦への道も見えてくるのではないかと思った。

2．臨津閣

韓国と北朝鮮は、分断国家であり、互いに自由に行き来することができないということを、今までは知識として知っていた。しかし臨津閣に行ったことで、その現実を、改めて突きつけられた気がした。

韓国と北朝鮮は、実質の国境線である軍事境界線を挟み、南北の外側２kmずつに非武装地帯（DMZ）、そしてそのさらに２kmずつ外側に民間人統制区域を設けている。つまり、両国の間には計８kmも隔たりがあるのだ。また、捕虜送還の象徴である「自由の橋」「帰らざる橋」の説明も受けた。「自由の橋」は、朝鮮戦争の休戦協定が結ばれた後、１万3000人余りの捕虜が橋を渡って南に帰還する際、「自由万歳」と叫んだことが、この名の由来である。また、「帰らざる橋」の上では、朝鮮戦争停戦後の捕虜交換が行われ、彼らは南北いずれかを選択すると、二度と後戻りできなかったことから、この名で呼ばれている。

私はこの「二度と」という言葉に、とても重い響きを感じた。彼らはこの条件の下で自ら選択をしたのだと思うと、胸が痛んだ。同時に、陸続きであるにもかかわらず、自由な行き来すら許されていないという現状に、理不尽さを覚えた。

まとめ

戦争記念館と臨津閣を訪れたことで、韓国の悲しい歴史を改めて学び、肌で感じることができた。

これからの朝鮮半島の情勢がどう進展するかは分からないが、両国が妥協点を見つけることで、朝鮮戦争が平和的に解決するといいと思う。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

実際に韓国に行ったことで、日本で学んだ「知識」だけではわからないことに多く触れることができた。

まずは、高校生でも日本語を話せる人がとても多いことに驚いた。また、韓国の学生は、やはり勉強熱心だが、それだけではなくアニメやマンガ、ファッションなど、自分の好きなこともうまく両立させていることが分かった。

意見交換会の際にも多くの発見があった。たとえば、日韓の歴史問題を考えるときに涙を流す生徒がいたり、未来を考えるのと同じくらい過去にも重きを置くべきだという意見が出たりした。私は今まで、過去を重視するのは高齢の方ばかりかと思っていたので、新たな気づきだった。

また、韓国人の人柄については、思ったことをはっきり言い、主張を押し通す人が多いのだと思っていたが、高陽国際高校の生徒は、気さくで話しやすかった。同じタイミングで発言しようとしてしまった時には、譲り合いの精神がみられた。

４日間韓国で過ごしたことで、様々な面で自分の中にあった誤解を解くことができた。国や人の真の部分を理解するためには、やはり直接その国を訪れ、その国の人々と交流することが最も重要だと感じた。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for the three days we spent with you.

I really had a great time at your school.

I learned a lot about the Korean culture that I didn’t know so much about.

While exchanging opinions, I came across many different ideas, which deepened my understanding of the problems that Japan and Korea have.

I was glad because you talked to us in Japanese, and I enjoyed walking around the town with you.

I will tell what I learned in Korea to my friends and classmates.

I hope that we, the younger generation, can help build a good relationship between Japan and Korea.

I’m looking forward to seeing you someday.

２年　金澤　元泰

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

初めて彼らを見たとき、大人びているという印象を受けた。化粧をしているせいもあるが、とても落ち着いているように見えた。だがいざ話してみると、とても純粋な目で僕たちの話を聞き、反応してくれた。「かわいい」という言葉が何度も飛び交った。簡単な言葉は使いやすいしわかりやすいので、こういった軽いコミュニケーションに役に立つと思った。

とにかく彼らのこういったコミュニケーション能力に驚かされた。日本語がとても流暢で、日本語で話せば日本語で返してくれるし、英語で話しても日本語で返してくれることすらあった。また、席に着くやいなや名前で話しかけられた。彼らは僕たちの名前の予習をしてきてくれていたようだ。さらに、僕たちがまだ緊張していてなかなか話しかけられないところを、彼らはどんどん、しかし強引さは感じさせずに話しかけてくれた。彼らのおかげで、一日目からよい関係を築くことができたのだと思う。

僕は彼らに日本の文化紹介の発表をすることになっていた。彼らは日本語専攻なので日本のことはいくらか知っているはずで、SushiやTempuraなど有名なものを紹介しても退屈だろうと考えた。そこで、祭り、それも各地の代表的なものを紹介することで、日本文化の多様性、地域性を知ってもらおうと思った。反応は非常によく、特に御柱祭に強い関心を持ってもらえた。ただ花火（隅田川のもの）への興味も強く、有名なものも押さえる大切さを感じた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

僕たちの班は「ホンデ（弘大）」というところに行った。弘益大学の学生街で、おしゃれな店や食事店などが並ぶ街だ。

最初に訪れたのはカラオケ店だ。平日朝ということで、一人2000ウォン（200円）と激安料金でVIPルームに通してもらえた。日本語の歌も多く、新曲もあったので、日本のアニメ（ハイキュー！！など）の主題歌やその他日本の有名な歌、日本語のK-POP、韓国語のK-POPなど、様々なジャンルの歌を日韓で交ざって歌った。印象的だったのは、高陽の生徒たちの大胆な歌い方だ。日本人からすれば恥ずかしいくらいの大声でなりふり構わず歌っていた。国民性を初めて感じた瞬間だった。

次に行ったゲームセンターは日本のものと似ていた。なにせ日本のゲームマシンがそのまま置いてあるくらいである。一番面積をとっていたのは射的マシンだった。徴兵の国だからだろうかと思った。

町並みはきれいだが、前日の夜に学生たちが遊び散らかしていてゴミが散乱していた。雑貨屋には日本のキャラクターの商品（正式な商品化どうかはわからなかったが・・・）が数多かった。特にポケモン

（その中でもあるキャラクターがほかのキャラクターに擬態しているもの）やジブリのキャラクター（その中でも、意外にも「千と千尋の神隠し」のカオナシ）が人気だった。

食事は唐揚げ屋でとった。いくつもの大皿で何種類もの唐揚げが出てきた。店員さんが辛くないというから頼んで、高陽の生徒たちが食べて辛くないと言うので食べたら案の定辛かった。韓国の人の言う「辛くない」は信用してはならないことを悟った。やはり辛い物を食べなれている人たちは違った。辛かったが、おいしかった。

ハンボク（韓服、韓国の伝統衣装）を着てプリクラも撮った。プリクラ機は目は大きくならない、出てきたシールは自分で切るタイプの、日本でいえば10年位前のものであった。ハンボクは、見た目こそ違えど構造は日本の和服に似ていた。最後にかき氷を食べた。きな粉の乗っている大きなピンス（水ではなく牛乳の氷で作ったかき氷）だった。甘さ控えめで上品だった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会で初めて知って驚いたことは大きく分けて三つある。

一つ目は、日本のマジョリティに関する韓国の人たちの誤認識である。慰安婦問題に関して、僕たちが「慰安婦問題はなかった」「賠償などもってのほか」といった意見は少数派であることを伝えると、非常に驚いていた。両国マスコミによる過激な報道が及ぼした影響だろう。利益を追い求めるマスコミからの情報だけでは正しい知識は得られないことがわかった。

二つ目は、歴史認識の違いである。日本で、日韓の歴史問題というと、慰安婦や賠償など戦中・戦後の問題を中心に考えることが多い。しかし韓国の学生は、こういった問題もさることながら、日本の明治期における韓半島への侵略に強い関係を示していた。例えば、「僕たちは、日本はペリーにされたことと同じことを李氏朝鮮にしたと学んだが、日本の人たちはペリーの来襲に関してどう思っているか？」ということを聞かれた。日本の人は、植民地政策など、占領後に日本政府や軍が行ったこと（皇民化政策、従軍慰安婦など）が問題だったと捉えているが、韓国の人からすると、侵略の時点でそれは大問題であり、許されざることだという考え方なのだろう。

三つめは、戦後の関係回復の問題である。新たに分かったのは、日本は賠償金・補償金を払おうとするが、韓国の人が求めているのは心からの謝罪であるということだ。日本で「賠償問題」と呼ばれているこの問題は、そもそもネーミングからして間違っているのかもしれない。金を払おうとするのは、むしろ軽く済ませようとしているように見られ悪影響でしかないように思われた。しかし謝罪をしようにも、今や首相も戦後生まれ。+戦争責任もあいまいな中で、だれがどのように謝ればよいのかなど解決しなければいけない問題も多い。

机で勉強しているだけでは、テレビの前に座っているだけでは、関係のない日本の人の話を聞いているだけでは間違った方向に進んでいってしまう可能性が大きい。情報収集と理解のための一番の方法は、実際に現地に行って、人と会うことだとわかった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

僕にとって一番印象的だったのは、自由の橋だ。

この場所を訪れる前に、戦争記念館を見学した。北朝鮮側に捕らえられていたおよそ13000人の捕虜たちが、この仮設の橋を渡って南側に帰ってきたことを学んだ。そのとき、彼らは何を思ったのだろうか。「自由」というくらいだから、喜びが一番だろう。ただ同じだけ、徒労感もあったのではないか。３年にも及ぶ同一民族の間での戦争で、故郷は焼け果て、大切な人を亡くしたにも関わらず、新しくできた軍事境界線は38度線とほぼ同じものであった。何のための戦争だったのか、その虚しさは計り知れない。

橋の手前の望拝壇に立つ。今も北側の故郷に帰れない人々、家族と離散してしまった人々がここで北の空を仰ぐのだ。彼らはどう感じているのか。向こう側の民統線までたった８km。この８kmがいかに遠いか。

こう考えると自由の橋は、今世紀最大の「不自由」の象徴なのかもしれない。

今世紀に入って、韓国と北朝鮮が和解に向けて動き出した。臨津江に新しい橋がかけられ、平和公園ができた。平和公園には遊園地エリアも設置され、日本でいえば温泉街のそばのテーマパークに近い。北朝鮮側を望む展望台の下にはきれいなコンビニやカフェが並び、ソウル市内のおしゃれなショッピングモールのようだ。楽し気な空間がそこには広がっていた。

自由の橋を渡りながら臨津江の向こうを望めば、冷たい色をした丘が並び、人を拒むような白い橋が架かっている。何十万人もの悲しみが８kmの大地を覆っているのに、振り返ればそんなことはお構いなしのような華やかさが広がっている。韓国の人たちの中で、北朝鮮はそれほど重要なことではないのだろうかと思うほどだった。

この矛盾するような光景に囲まれ、僕はどんな感情を抱けばよいかわからなかった。

橋を渡り切ることはできない。途中で柵と有刺鉄線に行く手を阻まれてしまうのだ。その柵には、太極旗と色とりどりのリボンがかけられている。南北統一を願う人達が毎年かけていくのだとガイドさんが教えてくださった。

今この自由の橋にあるのは、自由でも喜びでもなく、悲しさと虚しさの中の一縷の希望なのだと思った。誰もが統一への望みを胸に秘めているからこそ、空を仰ぐ。その希望が現実になった時を夢見て、娯楽の地をつくり、訪れる。本当の意味での「自由」の到来を、韓半島が心待ちにしている。目に見える形は違っても、矛盾でも無関心でもないのだとわかった。

日本からすると北朝鮮は敵のような存在だから、韓国もそのように感じているはずだと思い込んでいた。しかしそれは違った。何十年たとうと、韓半島は一つの民族なのだということに初めて気が付いた。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

僕はこの巡検で初めて韓国に行ったのだが、行く前のイメージと現実はだいぶ違った。

まずは町並みについて。韓国は日本より20年遅れているということを耳にしていたが、今の日本とほとんど差はなかった。むしろ地下鉄などは日本より進んでいた。ただ、化粧や髪型、服装など人々の見た目は、まさに20～30年前の日本に似ていた。

財閥の力が強いのは想像通りだったが、意外なところにも有名財閥のグループが進出していて驚いた。例えば、エスカレーターは自動車会社だと思っていたヒュンダイ、デパート業はお菓子会社だと思っていたロッテが大きなシェアを占めていた。

そして反日について。「ここ数年の韓国の世論は反日に傾いている」というイメージを持っていたので、僕は韓国に行くまで少しびくびくしていた。しかし４日間で反日の雰囲気を感じたのは、中央博物館（ミュージアムショップに安重根のハンドバッグが一種類だけおかれていた）、戦争記念館（軍の資料館で、竹島を模した写真撮影スポットがあった）とタプコル公園（三一独立運動の拠点で、反日の看板を持った人が一人いた）の三か所しかなかった。慰安婦像を訪れた時も、威圧的な雰囲気も宣伝も何もなかった。街中には日本語があふれ、客引きは日本語が上手だった（それがゆえに振り切るのに苦戦した）。今回の巡検がちょうど大統領弾劾のタイミングと重なったことを考慮に入れても、反日だと決めつけるにはあまりにその証拠が足りないように思えた。

僕は、あやふやな情報で自ら敵を作ってしまっていたのかもしれない。これほどもったいないことはない。伝聞で勝手にイメージを作り上げること、国民性を一人ひとりの性格だと決めつけること、だれか一人の発言をその集団全体の意見だととらえること。これらはすべて自分の中に虚像を生み出す行為に他ならない。虚像だから、いくらでも自分の好きなだけ憎めるし、バッシングできる。しかしそれは全く無意味だ。僕はこれから自分の中の虚像と戦える人になりたいと思った。今は気づいていないけれど、まだ他にも僕の中には国に対するイメージだけでなくいろんな思い込みがあると思う。それを、自分の実体験を通じて、ひとつずつなくせるように努力していきたい。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

First of all, thank you for your reception. I really enjoyed Korea thanks to you.

My biggest memory was visiting Hongdae with you. I had never been to such a nice town. I enjoyed Karaoke, window-shopping, fried chicken, shaved ice and Purikura. They are similar to Japanese ones but it was a big fun to find the differences. And fried chicken and shaved ice were very good. I want to eat again.

It was also interesting to discuss with you. You broke my bad

beliefs. I think I couldn’t change my opinion without meeting you. Your real voice helped me think deeper about Korea.

You talked to me a lot. I was really happy because I was little nervous to talk with you. Thanks to you, I could enjoy talking with you. I was surprised at your Japanese skill. If I could speak Korean fluently like you speak Japanese! I made a decision to study other languages harder than ever.

Moreover, I’m really grateful for the exchanging party in your school. I felt your energy and kindness. And the lunch was very nice. I envied your school!

When you come to Japan, please visit us. We’ll welcome you!

２年　伊東　里彩

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私の中の韓国人のイメージは、日本人に対して歴史上の問題から激しい嫌悪感を抱いている人が多いだろうと思っていたので、正直今回の交流会がうまくいくのか、とても不安でならなかった。でも、初めて高陽の生徒と会った時に、一生懸命日本語を使って、私たちに気さくに話しかけてくれ、日本文化の話や日本の歴史の話にも興味を持ち、真剣に聞いてくれた。私はいままで、マスメディアなどの偏った情報により、韓国の人々に対して誤解をしていたのだなと思った。また、彼らは日本人以上に努力家だなという印象も受けた。韓国は日本よりも過酷な学力競争社会である上に、就職しても日本人よりも退職が早く、終身雇用でないために成果を出していかなければならないという大変な状況に置かれている。私たちが交流した高陽の生徒達は、学校のある日は５時まで授業があり、その後は自習をしたり、レポートを書いたりと部活動をする時間もないという。また、私たちの入試では推薦入試以外では高校の内申点は入試に直接的な影響を及ぼさないが、彼らの入試では内申点がなければSKYのような進学校を受ける資格も得ることができない。日々キャリアを積んでいかねばならず、本当に大変で早く高校を卒業したいと言っていたが、それぞれ目指したいものがあり、その目標を達成するために死に物狂いで勉強しているのだと言っていた。私も彼らの話を聞いて、自分は目指したいものがあるのに、それを達成するための努力を怠り過ぎていたのではないかと、とても反省した。私はこれを機会に自分の目標に向けた努力を今まで以上にし、挫折しそうな時があっても自分を信じて一生懸命やっていきたいと思った。

また、彼らと出会って、私にはもう１つやりたいことが増えた。それは、韓国語を話せるようになることだ。高陽の学生達は日本語選択ということもあっただろうが、日本語を上手に使い、私達と日本語で会話をするようなこともあった。それに対して私はというと…、残念ながら韓国語は全く分からなかったので、彼らが韓国語で会話している時には何を言っているのかさっぱり分からなかったし、韓国語を使っての自己紹介の時も、うまく発音できなかった上に、自分でも何を言っているのか分からないという事態に陥った…。私は韓国の子達が日本語を一生懸命話してくれて嬉しかった。韓国の子達も、私たちが一生懸命韓国語を話せば、より私たちに好感を持ち、英語でしかコミュニケーションを取れなかった時よりももより多くのことを彼らから得ることができるだろう。もっともっと韓国のことを理解したい。私は次に彼らに会う時までには韓国語でコミュニケーションが取れるようになりたいと思っている。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

韓国の子達とのフィールドワークでは、私たちはホンデという渋谷のような街に行った。ホンデでは、まずカラオケに行った。初めは日本のカラオケと韓国のカラオケとでは違いなんてあるのだろうか、と思っていたが、まず初めに驚いたことは、日本のカラオケの椅子の配置の仕方とは違い、前を向いていて、まるで小さな映画館のようになっていた。また、日本語の歌もたくさんあり、韓国の学生の子達も私たち日本人が知らないようなマニアックな歌も歌っていてとても驚いた。また、お昼頃になると、路上にたくさんの屋台が出てきて、街も若い人からお年寄りまで様々な人がいてとても賑わっていた。私は最初とても驚き、戸惑ってしまったのだが、屋台の人は日本とは違い、積極的に歩いている人に声をかけて勧誘をしていることが多かった。ホンデは日本でいう渋谷のような若者が集まる街なんだなという印象を強く受けた。また、私が他に思ったのは、お店などに入った時に、店員の人ととても気さくに話し合っていて、日本にはない光景だなと思った。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私はこの意見交換会がとても不安だった。なぜなら、外務省の方が以前学校にいらっしゃった時に、「韓国に行った時に、絶対、歴史問題、領土問題の話はしないこと」とおっしゃっていたということや、今の大統領、朴槿恵大統領の反日感情の高さ、ニュースでもよく耳にする従軍慰安婦問題や慰安婦の像の問題、植民地時代の賠償の問題、もちろん竹島の領土問題など、不安だった要素をあげればきりがないほどである。しかし、実際に韓国の子達と話してみると、お互い偏った見方の教育を受け、現在あるような両国の反日、反韓感情が生まれることにつながり、問題解決から遠のいているのだなと強く感じた。今回の意見交換会で、じっくりと議論し合い、テレビだけではわからない真意や、また、テレビの情報がどれほど偏ったものであったのかを初めて知ることができた。私は、実際に日本人と韓国人が首脳レベルだけではなく、私達のような学生や若者など様々な人が直接話し合い、お互いを正しく理解する必要があると強く感じた。私も今回話し合ってみて、韓国を正しく理解することで今までの反韓感情を取り除くことができた者の１人である。

また、冷静に考えて欲しいと私は思う。今回、主に歴史問題について重点的に話し合っていった、また、その過程で「歴史問題の解決」に対して重点を置くか、「日本と韓国の未来の関係」に重点を置くかという質問が出た。その際私達のグループでは韓国人５人、日本人４人の全員が後者を選んだ。確かに、歴史問題を解決することも必要不可欠なことではあると思う。しかし、足元ばかり見ていては、共に協力することで得ることができたかもしれないものを見失うだろう。お互いに協力し合うべき隣国同士、未来の関係に目を向けて前向きに話し合うことがとても大切だと思った。

また、歴史問題以外の面、例えば少子高齢化問題では、韓国も日本と同じように深刻な問題となっており、日本よりも社会福祉制度が整っていないために高齢者達は不安定な状況にあるという。しかし、日本と韓国はここにも見られるように、多少は違うかもしれないが両国がそれぞれ抱えている社会問題という点でも類似している部分が見受けられる。このような点を見ても、日本と韓国はもっと協力関係を築いていくべきなのではなかろうか。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

一番印象に残った場所は西大門刑務所である。駅から降りて、刑務所の建物を見た時、煉瓦造りのような建物で外側から見たイメージは可愛らしい建物という印象で、刑務所という物々しい雰囲気は建物からはあまり感じられないなと感じた。しかし、中に入ってみると印象は全く異なるものとなった。まず１番最初に強く印象に残ったのは、蝋人形を使って、また音声も使用してリアルに表現された拷問の様子である。西大門刑務所には、韓国のジャンヌダルク、柳寛順なども収容されていた。そこでの拷問では指の爪の間に鋭い針を刺したり、棺桶の中に入れて立たせたり、内側に針がたくさんある箱の中に押し込んだりと、人間が人間に対してやっているとは到底思えない残酷なものばかりであった。私は実際に棺桶の中に入る体験をした。私は一瞬しか入っていないので棺桶の狭さや、何一つ身動きが取れないということしかわからなかったが、あの棺桶の中に一日中立っていると血流が全て下に行ってしまい、やがて意識を失って死亡するにまで至るらしい。それを聞いてより恐ろしく思った。次に印象に残った場所は死刑場である。その死刑場の建物は、客が座る席もあり、一見すると小さな舞台のように見えた。しかし、よく見てみると死刑場だということも生々しく感じた。例えば舞台の真ん中には四角い切れ込みがあり、底が抜けるようになっていた。実際にはその部分に椅子を置き、死刑囚を座らせて床下で紐を引いて床の底を抜き、絞首刑にしていたそうだ。私はその死刑の執行の仕方にも身震いをし、また観客席のようなものがあるということにも悲惨さを感じた。小泉首相が韓国訪問した際に西大門刑務所で献花をしたという。私はそのことを全く知らなかった。しかし、ドイツ人に迫害されたユダヤ人への哀悼を跪座のポーズで、献花をしたブラント大統領のことはよく知られている。何故なのだろうか。私は彼には自らナチスに追われた経験があるということが特別な重みを持っていたように思われる。国際的にはナチスの犯罪をドイツ国民が認めた証として注目され、日本ではドイツ人の良

心とする解釈が先行した。 一方で小泉首相は何故知られていないのだろうか。私は日本の首相の主張に一貫性がないからではないかと思う。ドイツは一貫してナチスで行なった行為は悪いと認めていることに対し、日本の首相は「反省している」と言う時もあれば、時には「何故謝罪する必要があるのだ」と言っている時もあり、謝罪をしても、形だけだとみなされ、知られずに終わってしまうのではないかと思う。ドイツのように政治責任が明白でない分、難しいことなのかもしれないが、一貫性のある主張をし、首相一人の意見ではなく、世論一般の意見を謝罪に反映させてほしいと思う。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

私は今までは学校で習った、少ない、そして偏った知識やマスメディアの知識しか持っていなかったので、韓国にはあまりいいイメージを抱いていなかった。しかし、課題研究で韓国のことを学んで行き、また、実際に韓国に行ってみて、自分が今まで持っていたイメージが偏ったものであったということに初めて気づいた。また、韓国の学生と接してみて思ったことがいくつかある。まずは、日韓の歴史の知識量の差である。例えば、韓国植民地時代に日本が行なった好ましくない行為については、従軍慰安婦問題などニュースで取り上げられたり、新聞で取り上げられたりしたものしか知らず、また、ただ語句を知っているというだけであって、その内容についてもあまり詳しくは知らないことが多いと思う。しかし、韓国の学生たちは、植民地支配をされた側ということもあるかもしれないが、学校の授業でもたくさん取り上げられ、私たちが知らなかったUNIT731などの歴史について深く学んでいるなと感じた。

UNIT731について少し触れておきたいと思う。UNIT731とは関東軍防疫給水部本部のことであり、ここでは主に衛生的な給水体制の研究を主任務とすると同時に、細菌戦に使用する生物兵器の研究・開発機関でもあった。そのために人体実験や、生物兵器の実戦的使用行っていたとされている。人体実験では被験者を隠語でマルタと呼び、捕虜や女性子供までも被験者として使われていたという。人体実験の内容はあまりにも酷く、自分も言葉に表すことが嫌になるくらいのものであった。内容については詳しくは書きたくない。私も初めて知って、これは同じ人間が行なっていることなのだろうかと身震いがした。知らない人には是非知ってほしい負の歴史である。

また、高陽高校の学生や明洞などのお店の人など、様々な韓国人と触れ合ってみて感じたことは、韓国の人々は（セールスは日本よりもだいぶ過激で戸惑ったが）とても親切で、またとても紳士的だということだ。今まで私が韓国人たちに持っていた印象は、過激で怖いというものであったが、それは一部の人だけであり、殆どの人々は私たち日本人に対してもとても快く接してくれるのだなと思った。ただ、国際的にも親切とされている日本人と決定的に違うなと思ったところは、自分の思ったこと、意見は我々のように躊躇せず、述べるところである。これは、現代のグローバル社会においてとても重要な技能だと思う。

私は今回巡検に行って、韓国と日本の教科書やテレビ、新聞だけでは知ることができない細かい歴史や、韓国人の素顔に触れることができたと思う。私のように韓国についてあまりよくわかっていないのに、勝手に韓国に対して悪い印象を抱いている人が沢山いると思う。私は日本人と韓国人が触れ合うことができる場をたくさん設け、このような誤解を解く努力をすれば、今までは中々解決することができなかった問題も解決に導くことができるかもしれないと強く思った。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

First of all, I want to say thank you for your great hospitality. I could spend a wonderful time with you.

In field work, I went to various places and I found a lot of difference between Japan and Korea. For example "Prikra ".

Also, at the Opinion Exchange Conference, we discussed a lot about the recognition of history problems.(We spent much time in this topic.)In particular, I was able to learn that both sides were receiving biased education about history issues.

This is my opinion ,but I think both Korean and Japanese not only politicians but also young people like us discuss each other to create great relationships for our future. I am sure if we continue this activity in more large scale, we can solve the difficult problems which we can't solve for a long time.

In the last school tour it was only surprising that there were many different points from Asahi. First of all, it is a boarding system, that the self-study space was substantial, that the use of the mobile phone is prohibited at school, that there are only twenty students in the class , the number of classes in your school compared to ours It is far more abundant to mention that there were much more, that the gym and karaoke were in school, and that the school building was beautiful like a private high school in Japan. I only had half a day but I really enjoyed it. Also, Taekwondo 's announcement and announcement of dance etc. are all cool, they remain very impressive.

This time is my treasure in my life. I hope you will come to Japan someday. And I want to guide you!
p.s.

I want to study Korean harder by the time we will meet!

【D班】

1年　元吉　千遥

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会では、互いの自己紹介や、学校・学校生活・文化についての紹介があったため、個人としての話ではなく、全体としての話が多く、グループの人と積極的に関われたのではないかと思う。互いの自己紹介では、韓国人の生徒たちがとても流暢な日本語で自己紹介をしてくれて、韓国人の生徒たちが日本に興味を持ってくれているということが嬉しかった。また、学校・学校生活・文化についての紹介では、お互いに似ている点や異なっている点がたくさんあり、興味深いと思った。

韓国人の生徒たちは日本語だけでなく、英語も堪能だったので、私的にはコミュニケーションには問題なかった。韓国の生徒たちは日本語の勉強について貪欲で、日本語での会話中に少しわからない単語がでくると、すぐに聞いてきて、その次にはそのわからなかった単語も普通に使っていて、素晴らしいと思った。

また日本の文化にとても興味があるらしく、邦楽や邦画、日本のアニメについては私よりもたくさん知っていて、逆に私が色々と教えてもらった。

韓国の生徒がこれだけ日本や日本の文化に興味を持ってくれてるのなら、文化を通じて、双方が歩み寄ることもできるのではないかと感じた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークではまず韓国一大きい本屋さんへ行き、次にチマチョゴリを着て北村韓屋村の町並みを見学した後、ご飯を食べて終わった。

韓国一大きな本屋さんには、本だけでなく漫画や雑貨もたくさん置いてあり、少しの時間では回りきれなかった。たくさんある本の中には、韓国語訳された日本の著者の本が、本屋さんで人気な本の置いてある棚に置いてあったり、日本で人気の漫画が韓国語に訳されたものが棚いっぱいに置いてあったり、また雑貨も日本のキャラクターのものが置いてあったりなど、すっかり日本の文化が浸透しているようだった。韓国巡検全体を通して思ったことだが、韓国は日本人がたくさん来るからか、店員も日本語をしゃべれる人が多く、日本にいるのとほとんど変わらない気がした。コンビニに売っているお菓子なども日本と似ているものが多いし、物価も日本とほぼ同じなので、買い物もしやすかった。

また、その後に行った北村韓屋村には韓国の伝統的な家屋が建ち並んでいて、日本の京都のような場所かなと思った。韓国の色々なところに行くと思うのだが、伝統的な家屋が建ち並んでいる中にも、その背景には高層ビルが建ち並んでいて、そこが少し日本とは異なっていて、とても面白かった。

明洞で韓国の新しい部分も見れたし、このフィールドワークでたくさんの伝統文化を見たり体験できたのでとても充実したものになったと思う。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

韓国の生徒との意見交換会は、最初にお互いの意見の書いてある資

料を交換していたため、比較的スムーズに進んだが、特に歴史問題を取り上げた意見交換は、韓国語・日本語・英語が激しく飛び交い、とても難しいものとなった。

韓国に行く前にゼミで受け取った韓国の生徒が書いた資料は、とても厳しい表現が多く、韓国で話し合っても日本側が言い負かされてしまうのではないかと心配していた。だが、驚いたのは、厳しい表現を使っていた生徒が先に、「厳しい言い方で書いてしまってごめんなさい」と謝ってきたことだ。このことで、韓国の生徒がこの問題について真剣に考えていることがわかるとともに、私が思っていたより感情的ではなかったので安心した。

意見交換会が始まる前に、日本側の先生から、日本人は遠慮してしまい言いたいことが伝えられない、ということがないようにとの言葉があったのだが、それが本当に実現できたのか、というと少し不安である。意見交換会の後に、韓国側の生徒に、彼らが私たちの意見についての資料を受け取った時、内容についてとても憤ったが、私たちの本当の考えをきちんと聴けて良かったと言われたのだが、私はその意見の資料に書いてある通りの考え方だったので、意見交換会の途中ではっきりと言うことができず、そのままの自分の考えを伝えられなくてこのように言われたのなら、残念である。遠慮はするなと言っても、日本は加害者で韓国は被害者という意識が自分にあるのであまり強いことは言えないし、また自分一人の意見だけで、日本全体がそう考えてると思われるのも怖かった。だが伝え方を気をつければ、相手を傷つけず、そして不快に思わない方法で伝えられることもできたのかなとも思う。

また、ショックだったのは、韓国側の生徒に、日本側がもう少し歴史的知識を持っていると思っていたと言われたことである。韓国側としては、このような韓国との意見交換会に参加する生徒なら、もっと歴史問題についての知識があると思っていたらしいが、思っていたほど私たちにそれについての知識がなかったらしい。もちろん自分がそれほど知っていたとは思っていないが、韓国側の生徒に残念がられてしまったのはショックだった。確かに、韓国の人と深くまで話せるほどの歴史的知識があったわけではないので、勉強不足だなと思った。また韓国の生徒にも言われたことなのだが、お互いにもう少し歴史問題についての関心を持たないと、この問題の解決が進まないし、せっかく韓国と日本が意見を交換できるなら、知識をしっかりと身につけてからの方が良いと思った。だが、どのようにしたら韓国と日本の生徒たちが、日韓の歴史問題について関心を持ち、また学ぶ機会が増えるのか、というのは難しい。

この意見交換会では、多くの視点や考えに触れる機会を得ることができ、また自分なりにも問題について考えることができ、またとない経験となった。だが、問題点について話し合うことはできたのだが、解決策はそれほど出なかった。できれば、韓国の生徒たちが、どのような解決策を持っているかを知りたかったが、韓国側の意見を知ることができる機会もないので、それが知れただけでも大きな収穫かなと思う。このような貴重な機会を与えてくださってありがとうございました。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

韓国巡検で最も印象に残ったのは、戦争記念館や西大門刑務所歴史館などである。

戦争記念館では、朝鮮戦争の詳しいことがわかった。日本で韓国の戦争史についての勉強をしても、教科書や資料などで戦争時の残留品の写真しか見れないことが多いので、韓国で実際に残留品を見ることができたのは良い経験となった。また、実際に韓国で戦争の記述を見ることで、日本の戦争記念館との違いを感じることができた。韓国の戦争記念館は日本と比べて、戦争に関する武器が多かった。また、日本は被害の様子についての展示が多かったが、韓国は韓国軍がいかに勇敢に戦ったかということについての展示が日本と比べて多かったように感じた。

西大門刑務所歴史館では、地下拷問室や死刑場、屍躯門などを訪れた。地下拷問室では、人形が置いてあり、当時の拷問の様子が生々しく描かれていて、印象的だった。また、日本の小泉元首相が西大門刑務所歴史館を訪れ、膝を折って追悼碑に献花をし、謝罪をしたという話を聞き、日本と韓国の歴史問題について考える機会も得た。

もし韓国に観光で来たとしても、自ら戦争記念館や西大門刑務所歴史館を訪れることはなかったと思うので、このような機会に行けてよかったと思った。今回全ての展示を見られたわけではないので、今度韓国を訪れる時は積極的にこのような場所を回ってみたい。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

この韓国巡検に行くにあたって、私は韓国の生徒に絶対に聞こうと思っていたことがある。それは、歴史問題を解決するために、韓国の国民が日本に何をして欲しいのかだ。巡検前に送られてきた意見文には、日本はこの問題を経済的に解決しようとしていて、日本の政治家の発言を聞いていると、心から反省しているとは思えず、悪いことをした時に、ただ「あ、ごめんなさい」というだけでは足りない、と書いてあった。しかし、国同士の解決では経済的解決の他の解決方法はないと思っていたので、聞いてみたくなったのである。

実際に韓国の生徒に聞いてみると、彼らは、日本の総理大臣が謝る、国民が署名を集めることで政府に圧力をかける、また日本の教科書に韓国併合時代の記述を増やすなどの案を出してきた。私にはなかった発想だったのでとても興味深かった。他にも韓国と日本の教科書の内容をできるだけ揃えるなどの意見も出てきて、韓国の生徒の考えがわかった。

今回の巡検を行ったことによって、自分と同い年の韓国の生徒たちの意見を聞くことができ、いつものゼミでの意見だけでない発想も得れたことが大きな収穫だったと思う。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

I really appreciate that I could have an opportunity to talk with you about the historical issues and also the social problems which Korea and Japan have in common. It was a precious experience for me to know how Koreans think about those problems, and discuss the way to solve them.

When I first got your opinions, since strong words were used, I was afraid to talk with you. However, your attitudes were nice from begging to end, and it was great time talking. As the conversation goes on, I realized the deference and similarity between the opinion of Korea and Japan, and it gave me chances to think about how to solve those problems, thanks to you.

Also, I was glad to know that you are interested in Japan, especially Japanse culture. I have already got some Korean friend before meeting you, so I knew a little bit about Korean people, but I didn't really know about the country itself and its culture. After seeing you, I realized again that the personality of Koreans are friendly and sincere, and I found out that Korea is a excellent country. After the visit to Korea, I realized that the Korean culture is very interesting, and now I want to talk about it with you! Knowing about each other's culture and itself may lead the improvement of the relationship between the two countries, too.

Since you have many different kinds of opinion, and are knowledgeable, I noticed different point of views while talking. This was a great opportunity for me. I hope to have another exchange of views soon, and gain more knowledge about the problems themselves and also the views of Korean people.

１年　久野　千優

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

最初の夕食の席で、それぞれの自己紹介や文化紹介、学校紹介をしました。何人かの子が、自己紹介で日本の文化で好きなものの具体例をあげて話してくれて、とても嬉しく思いました。日本文化を好きだと言われると、肯定されていると感じました。お互いの文化の好きなところを率直に伝えあうことが異文化交流の第一歩になるのではないかと思いました。

学校紹介では、韓国の方がより「学校は勉強をする場所である」という意識が強いのではないかと思いました。韓国の学校では、部活動は週に一度。夜遅くまで授業が行われ、完全に学業が学校生活の中心となる学校が（特に進学校の場合）ほとんどだそうです。

日本では就職においても学生時代に部活動に力を入れていたことが評価されることが多いですが、韓国はそうではありません。旭丘高校は日本の学校の中でも特に、生徒主体の学校祭に力を入れているな

ど、「学校とは（勉強以外のことも）学ぶ場所である」という考え方です。そうした違いが、子どもの発育にどのような影響を及ぼすのかが、今後の社会のあり方に現れてくるのだと思います。よい企業に就職できるよい大学に入るためだけの高校生活、それって少しいびつじゃないか、とわたしは思います。学問は知的好奇心を満たすためのものという本質をとらえた教育政策が、日本にも韓国にも必要だと感じました。

最終日の、高陽国際高校での交流会では、校内を案内してくれた後、韓国の伝統的な遊び「コンギ」や「アルカギ」を一緒に楽しみました。「アルカギ」は盤上で碁石をぶつけて外にはじく遊びで、わたしも小学生の頃、文房具と机で似た遊びをしたことがあります。「コンギ」はけん玉のように一人でもくもくと練習するタイプのもので、日本と韓国は伝統的な遊びにも多くの共通点が見られるとわかりました。全校の前で私たちも日本の伝統的な遊び「だるまさんが転んだ」「はないちもんめ」「かごめかごめ」を披露しました。後で聞いてみると、小さな違いはあれども同じような遊びが韓国にもあるとのことでした。古来より続く民族のつながりを感じました。

高陽国際高校の生徒たちは、韓国の伝統的な太鼓「サムルノリ」、K-POP、テコンドーを披露してくれました。特にK-POPは、日本でもとても人気のある韓国文化で、高陽の生徒の発表を見たことでもっと関心が高まりました。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

三日目のフィールドワーク、わたしたちＤ４班は、北村「プッチョン」という場所へ行きました。北村は朝鮮時代、朝廷で地位の官吏や王族が居住する高級住宅地として、当時政治・文化の中心地だった場所です。現在は900棟あまりの、韓国の伝統家屋「韓屋」と狭い路地が残っています。

私たちは韓服「ハンボク」を試着して、その街を訪れました。前日の韓国文化紹介で、韓国の子が「韓服は多くのコンプレックスを隠してくれる」というようなことを言っていました。実際に着てみると、ゆったりしていて動きやすく、またカラーバリエーションにも富んでおり、ファッション性も十分だと感じました。最近は若者を中心に、七分丈などにした韓服を日常生活に取り入れようとする動きもあるそうです。

日本の伝統的な服装といえば着物ですが、それらを日常でも着る人は主に年配者でごく少数です。日本でももしそういった流行が生まれれば、日本人は日本文化をより身近に感じられるでしょう。また、日本といえばアニメ、という外国人への日本文化のアピールになるのではないかと思いました。

北村を訪れて感じたのは、とても静かな街だということです。「静かにしましょう」というポスターも見かけました。驚いたことに、この韓屋には今も一般人が居住しています。1984年、ソウル市が北村を「韓屋保存地区」に制定し、2001年からは住民と政府による「北村づくり事業」がはじまりました。

家に帰ってから調べたところ、北村が観光地になるまで、いくつもの試練・対立を乗り越えてきたと分かりました。居住と観光、二つの機能を兼ね備えようとした結果、景観を保護したい市とビルなどの一般物を建てたい住民、静かに暮らしたい住民と観光客を呼びこみたい市の対立が起こったそうです。

韓屋と日本の伝統的な家屋とを比べてみて、屋根に瓦を使うことや、建物の高さが同じぐらいで、路地をパッと見た感じが似ていると感じました。

逆にちがうなと思ったところは、韓屋にしかないオンドルという暖房設備。素材が韓屋では石やコンクリート、日本では木造が主だということです。これらの違いは韓国と日本の気候の違いに密接な関係があるのだと思います。韓国のほうがより冬の寒さが厳しく、日本のほうがより夏はジメジメします。それぞれの風土にあわせて古来より受け継がれてきた、人々の営みのかたちを見ることができました。

その後、細い路地を入ったところにある韓国料理屋で昼食をとりました。偶然同じテーブルについたのが英語を話せる人ばかりで、話題についていけなかったわたしは三言ぐらいしか発言していなかったと記憶しています。言語だけがコミュニケーションでないことは、今回の巡検で英語がほぼ話せないわたしに韓国の友達ができたことからわかります。先日の交流会では同じくらいの英語のレベルの子と、つたない英語ながらもお互いどんな話なら通じるかな、と会話しました。とても楽しかったです。でも、この日の昼食で全く話せなかったことは、とても惨めで悔しかったです。よく異文化交流はハートだ、と言います。それはまぎれもない真実ですが、先に進むには言葉は有効な手段だということを実感しました。だから私はこれからより一層英語の習得にむけて勉強します。それから、日本の文化について聞かれたときに上手く説明できなかったこともありました。まず自分の身近なところから、日本文化を見つめなおしていくことも、異文化交流に必要なのだと感じました。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会では、事前に15のテーマに関するそれぞれの意見をまとめて、交換した状態からスタートしました。15のテーマは大きく分けて、歴史問題、韓国と日本に共通した社会の問題、韓国と日本の文化的なこと、これからに何が必要かの４つに分類されるものでした。

まず歴史問題では、日本で日本人だけで話し合ったときには想像がつかなかったような率直な韓国側の想いを聞くことができました。

ロシア南下に対する防衛として、朝鮮半島を植民地化したことは当時としては妥当だったという意見に、「（日本の）パートナーとして、ロシアの侵略を防ぎたかった」という意見を聞いて、もっともだと思いました。それと同時に、韓国の人の心の中にある、当時日本の下だったという劣等感が、今日の問題をより根深いものにしているのではないかと思いました。

慰安婦問題に関して「韓国の国民はなにを望んでいるのか」と尋ねたところ、「市民の多くは、お金の賠償よりも誠実な対応を求めている」とのことでした。日本の歴代首相の中には、小泉首相のように過去の罪を重く受け止め、韓国を訪問し謝罪や追悼した人もいることは知っている。ただそれが全員でないというのが、日本を未だ許せない理由の一つになっていると教えてくれました。私たち一般市民に求めることは、誠実な政治家を選ぶこと、署名運動などで政府の対応を促すこと、だと言っていました。それを聞いて、日本での謝罪は終了しているとする人々との温度差を強く感じました。問題は双方が納得するまで未解決であることを忘れずにいたいと思います。

「政治家の行動は、必ずしもすべての市民がのぞむものではない」ということも、日本側と韓国側で意見が一致しました。それでもどうしてもその国を見る上で政治家の発言は大きな影響力をもってしまいます。それをわかった上で問題解決に意識をむけることが大切です。

また、日本はもっと歴史教育を充実させるべきだと思いました。加害した歴史を隠さず、義務教育のうちから子どもたちに学校で教えることで、もう二度と繰り返さないという意思を示すことができるのではと考えます。また、韓国に興味をもってさまざまな問題について調べてきて、普通の高校生より詳しいはずの私たちでさえ、まだまだ知識が足りていないことを実感することもありました。韓国の高校生に「日本人は過去に悪いことをしたから、歴史を学びたくないのかと思っていた」といわれ、ドキリとしました。過去に大きな被害を与えてしまった国が今の日本に望むのは、若い世代にきちんと語り継ぎ、二度と繰り返さないことなのだと思いました。

次に韓国と日本は多くの同じような社会問題を抱えていることもわかりました。所得格差、教育熱、非婚・少子化、高齢者福祉、外国人労働者の問題などについて話し合いました。

フリーターという言葉に驚いた、と韓国の生徒が言いました。韓国では、アルバイトの賃金が非常に安く、それだけで生活していくことはほとんど不可能なのだそうです。外国人労働者の労働条件はさらに厳しいそうです。そのことが、余計に大企業志向、教育熱を加速させると言っていました。

韓国では７Ｋといって、「諦める」７つのことがあるそうです。恋愛・結婚・出産・家をもつこと・交友関係・希望・将来の夢です。多くの大企業は子育て支援に無関心で、産後復帰ができるのは公務員ぐらい、また子どもを保育園に預けることへの偏見は今なおあるそうです。韓国社会は女性に厳しく、生きづらそうだと思いました。一昔前の日本もそうだったそうです。

日本と韓国はたくさんの共通点とかかわりをもつ国です。互いのことを見て学ぶことや、意識して問題に向かう姿勢が重要だと思います。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

わたしが巡検先で最も印象に残ったところは、戦争記念館と西大門刑務所歴史館です。

今回の巡検では、普通の観光旅行ではあまりいかない場所も予定に組み込まれていました。その代表的な二つが、ソウル市内にある戦争記念館と西大門刑務所歴史館です。

戦争記念館は、朝鮮戦争に関する資料や遺物の展示を主としている施設です。屋外には現在までの戦闘機や戦車の展示がしてあり、戦死者の名前が刻まれた石碑も置いてありました。室内展示では、朝鮮戦争の経緯や当時の状況などを、たくさんの資料や展示から学ぶことができました。

西大門刑務所は、韓国が日本の植民地だった時代に政治犯を収容するために日本が作らせたものです。当時の建物が復元してあり、その中に当時の様子や囚人の記録が展示されています。

どちらも日本の戦争記念館と比べて、展示の内容がより鮮明で、ショッキングでした。たとえば戦争歴史館では怖い音楽や照明で銃撃シーンを再現していたり、西大門刑務所歴史館では拷問のようすがマネキンで再現されていたりしました。特に西大門刑務所歴史館のほうは、日本の加害の歴史がはっきりと展示されているので、日本人として、少しつらいものもありました。韓国人のバスガイドさんは「これは日本を責めるために作られたのではない、二度と同じ過ちを繰り返さないため、忘れないための施設なのだ」とおっしゃっていました。私も、日本が昔、朝鮮半島の人々に加害したという事実は、日本人としてもっと知っておくべきだったと思いました。

しかし、わたしたちが６月の大阪巡検で訪れたピース大阪では、「自虐的」であるという議員の指摘を受け、2014年度に展示内容のリニューアルが行われました。朝鮮侵略など「加害の歴史」をなくし、「戦争の悲惨さ、慰霊」を考慮したものへ変わったそうです。

韓国へきて、この違和感の正体が少しわかりました。日本には多くの戦争の悲惨さを学ぶ施設と機会があります。しかし、日本からみてキツイ歴史をそのまま生傷として残してある場所は少なく、学ぶ機会は自分で作らなくてはなりません。「悲惨さ」を伝えることは、ときに日本をまるきり被害者のように見せてしまうことがあります。それではほかの国の人は納得できないだろうし、悲しいと思います。

大切なのは、二度と同じ過ちを繰り返さないため、先人たちが犯した罪を決して忘れないことなのだと思いました。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国に行く前、わたしはこの交流にとても不安に感じていました。韓国という国について４月から学習してきましたが、韓国と日本の間には数多くの歴史的な問題があり、それらは現在も未解決のままです。そういった問題にたいして韓国の関心が高いことも知っていました。だから、もしかしたら日本人にたいしてあまりよい感情を持っていないのではないか、日本と韓国は根っからわかりあえないのではないかと思いました。

しかしわたしの抱いていた感情は、韓国で大きく変化しました。彼らはとても親切で積極的で、一人も日本のことを逆恨みしたりしていませんでした。そのことに安堵すると同時に、韓国や韓国人という、大きなくくりでとらえてしまうことの怖さを改めて感じました。私が韓国へ学校の選択授業で行ってくると話した時に、「韓国は（特に）危ないから気をつけてね」と祖母に心配されました。ソウルの治安は東京と同じくらいで、世界基準でみても安全なのに、です。朴槿恵大統領への抗議も、暴力的なものではありませんでした。また、巡検から帰ってきたあとに、学校の先生や友達から「日本人だからってひどい目に合わなかった？」と言われたり、「韓国人はやっぱり反日だから」と言われたりもしました。

私は何とか自分が韓国の人にどれだけ優しくしてもらったか、彼らも私たちと同じように歴史問題の解決や日本との関係改善を望んでいることを伝えようとしました。しかし、彼らが本当に韓国人のよさをわかってくれたのかは自信がありません。彼らは、根拠もなく不安と不信感を抱いていた韓国巡検前の私のようだ、と思いました。「その国で優しくしてもらった経験」「その国のともだちがひとりいること」が、どれだけその国への、歴史への見方を変えるのでしょう。これから私たちがしていくべきなのはそういうことなのではないでしょうか。

しがらみのない若い世代から順に、その輪を広げていけたら、いつの日かきっとわかりあえる日がくると私は思います。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you to 3 days. It was really fruitful days. I enjoyed to talk with you. This trip is first time to Korea for me. So, I had some anxiety about communication before this trip. But you were very kind for me. I was very glad you smile to me.

I could learn important things for international exchange.

First, to make foreign friend. Actually I have different images before I visit Korea now and now. Making foreign friends leads to understand the country and history easier. We can have another eyes.

Second, to talk about some problems with them. We need opportunities. Skull session made me novelty.

I hope Japan will become good friend of South Korea someday.

１年　花山　愛歩

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

それまで紙のデータでもらっていたものや、他人が言う、韓国人は自分勝手だとか押しが強いとか、そんなことはまったくなかった。現地の子たちは私たちと何も変わらない、明るくて楽しい子ばかりだった。私たちと仲良くなろう、コミュニケーションをとろうとしてくれるのがとても伝わってきて嬉しかった。

また、日本のアニメやマンガ、ドラマは予想以上にポピュラーで、私の方が会話についていけないくらいだった。そして、高陽高校の子の英語力、日本語力に本当に驚いた。英語でもボキャブラリーがすごく多くて、スラスラと話しているのですごいなぁと感心した。逆に私は言いたいことがあってもなかなか単語が出でこなかったり、どういう言い回しをすればいいのか迷って、詰まってしまうことが何度かあったけれど、その度に一生懸命に聞き取ろうとしてくれたり、私が言い出せるまで待っていてくれたりと本当に優しい子ばかりだった。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちの班のフィールドワークは、伝統的な韓国の良さがたくさん体験できた。最初は、地下鉄からそのまま繋がっている地下の本屋さんに連れていってもらった。そこで驚いたのは、日本のマンガの多さだった。日本でもポピュラーな「NARUTO」や「ワンピース」はもちろん、私も知らないようなシリーズも本当にたくさん揃えてあり、日本とほとんど変わらないんじゃないかと思うくらいだった。他にも文房具店や雑貨屋、化粧品店などさまざまなお店が並んでいたが、かわいいものがたくさんあって見ているだけでもとても楽しかった。また、私たちがかわいいと思うものや気になったものは韓国の子も同じように反応していて、似ているなと思った。

次にチマ・チョゴリを着て街を歩くというとても貴重な体験ができた。日本の着物は着付けが割と大変で、なかなか気軽に着ることはできないけど、チマ・チョゴリは思ったより着るのも簡単だった。チマ・チョゴリを着たまま街を歩き、「北村」という韓国古来の家が立ち並ぶところで写真を撮ったりした。高陽高校の子たちは私たちにフィールドワークを楽しんでもらおうとしてくれているのが伝わってきてすごく嬉しかった。よく、ネガティブな意味で韓国人は愛国心が強いと言われがちだけれど、単純に自分の国が好きで、その伝統に誇りをもっているんだと感じたし、とても良いことだと思う。また途中の道でも韓国のお菓子の「ホットック」や飴も食べた。日本人の私たちだけでは来れなかった場所や体験ができて本当に楽しかった。

また、たくさん高陽高校の子と喋ることもできた。お互いに英語は母国語ではないので言いたいことをスラスラとは喋れなかったけれど、それでもなんとか会話できた。高陽高校の子は英語が得意な子が多くて、私の方がとても苦労して喋っていたけれど、それでも相手の子が一生懸命に私の言葉を理解しようとしてくれ、とても優しい子ばかりだった。最初は言葉が不自由なことにとても不安があったけれど、途中からはそれすらも楽しむことができた。確かに、自分の言いたいことを伝えたり相手の言い分を理解するのに時間はかかるけど、そのぶん相手をわかろうとする姿勢がとても大切で、逆に相手とコミュニケーションを取りたいという気持ちがあれば、多少言葉に苦労してもコミュニケーションはとれるんだという新しい発見ができた。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私たちは本当に政府の方針に左右された教育を受けているというのを痛感した。私は戦争に対する考え方や外交問題、歴史問題には、ある程度自分自身の考えを持っているつもりでいたけれど、韓国の生徒と討論して気づいたのは、そういう私の意見も土台の部分は日本の意見を踏まえてたということだった。

まず、お互いに自国の政府の対応に満足していない人がほとんどだった。韓国では、慰安婦問題をお金で決着をつけようとしている政府に不満を持っているという意見があったし、日本としても首相の靖国参拝や度重なる政治家の韓国を侮辱するような発言は、やはり引っかかるものが多いという意見がたくさん出た。

そして、韓国の子は日本の若者が韓国がどんな被害を受けたのか、どれくらい知っているのか、興味はあるのか、どう思っているのかということにとても関心を寄せていた。特に靖国神社の参拝と慰安婦問題をたくさん討論した。靖国問題では、靖国参詣も、そこには日本でただ亡くなった人もたくさん祀っているんだと伝えると、それでも戦犯が祀ってあるのも事実だから、韓国からしたらいい気持ちはしないと話していた。確かに、靖国には一般の戦死者も祀られているから参拝するのは仕方がないというのはただの言い訳だと捉えられてもしょうがないとも思った。しかし、日本でも参詣については毎回反発が起きるし、とても大きなニュースになると話すと、「ならばそれを辞めさせるような嘆願書や署名活動はしないのか」と言われて、私の中にそういう発想がなかったので、とても新鮮だったし、なるほどなと思った。

このように、韓国人のガイドさんの話や高陽高校の生徒たちの話を聞いていると、韓国の人たちは平和や民主主義に対してとても積極的だと思う。それは今までの植民地支配や朝鮮戦争の歴史を通して、自分達で民主主義と平和を獲得してきたという意識が強いからだと思った。

また、私が靖国問題などだけではなく、小泉首相が西大門刑務所で謝罪したことを知っているのかと聞くと、「どの総理が謝ったのかちゃんと知っている。逆にどの首相が謝っていないのかもわかっている」と言っていた。

日本も、アメリカから受けた被害とか国民の戦争時の大変さとかはたくさん教科書に記述があるけれど、韓国や植民地に対してやった酷いこと（慰安婦や大虐殺など）の記述は少ない。だから、そういう教科書で育った若者は、悪気がなくても第二次世界大戦を被害者としての戦争として認識している人も多いと思う。また、慰安婦は韓国だけでなく、東南アジアやロシアにも居たんだときいて、私はロシアのことは知らなかったので驚いた。これだけ積極的に学んでいてもまだ足りないのかと思った。

最後は、メディアや教科書が偏っていたり、伝えていない事実があったりすることで、両国民の間でそういう差が生まれてしまうことに大きな原因があるのではないかという意見でまとまった。

政策面では、お互いに持っている意見はほとんど同じで、やはり世界で見ても日本と韓国は置かれている状況がとても似ているので、これからはもっとお互いのストロングポイントを生かしていけるような協力の仕方をしていこうと話すことができた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

１日目に訪れた戦争歴史館に私は衝撃を受けた。日本の戦争記念館などとは、そもそもの展示のスタンスが違うなと思った。日本は、戦争は絶対悪という土台の上に様々な展示がなされているが、韓国では戦争を肯定しているわけではないにしても、日本にはない展示の仕方も多々見つけた。例えば、日本では主に当時の写真や資料、現存する道具などの展示が多いが、韓国戦争記念館では実物大の模型や兵士たちのレプリカ、CGを使ってその場にいるかのような臨場感のある展示の方法がとても印象的だった。そして、私が「戦争」と聞いてすぐに思い浮かべる、当時の国民の苦しい生活や恐怖の様子の展示は驚くほど少なかった。その代わりに当時の国家としての状況や進捗、データなどが客観的に展示されているものが多いのかなと感じた。

また、私が一番びっくりしたのは、「英雄」という文字があったことだ。古代の朝鮮から現代に至るまでの数々の戦いや戦争の中で活躍してきた人物たちをそう呼んで展示していたのだ。これは絶対に日本の戦争記念館では見られない言葉だと思う。

私は、日本以外の国の戦争館を訪れたのは初めてだったので、国によってここまで違いが出ることにとても驚いた。そして、なぜこのような違いが生まれるのか考えてみると、「戦争」や「平和」のとらえかたが根本から違っているのかなと思った。

日本では「戦争」とは自分達から時間的にも（直接日本が戦争と関わっていたのは70年前まで）地理的にも（紛争や内戦が起こっている中東など）遠いものであり、またそもそも憲法としても「戦争」の存在自体を否定しているようなもので、現代の戦争を体験していない人からすれば戦争というのは「過去の過ち」であり、「遠い国で起こっている怖いこと」でしかないのかなと思ってしまった。

それに対して韓国の「戦争」「平和」とは、常に自分達の近くにあるものなのかもしれない。私たちのガイドさんが戦争記念館をガイドしてくださった中で強く言っていたのは、「韓国は明日、明後日、戦争が再開されてもおかしくない状況なんだ」ということ。韓国は現在、北朝鮮と「終戦」したのではなくあくまで「休戦」しているだけなのだ。もちろん軍隊も持っているし、徴兵制もある。

すぐ隣の国なのに、日本とは「戦争」との距離が全く違っていた。韓国の人にとって戦争とは自分達の隣にあるもので現在進行形だ。そう考えると、戦争記念館の展示も、徴兵制があり、軍隊を持つ韓国では「戦う」ことすべてを否定することは出来ないのかなと思った。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

私が触れてきた意見や考え方は、すごく小さな輪の中のものだったとわかった。そして、「自分で体験する」ということが何よりも大切なんだと実感した。まさに「百聞は一見に如かず」だなと思った。巡検前の資料の韓国人の印象などを読んで、私の中で勝手に韓国人はこんな感じなんだろうという先入観ができあがっていたけれど、実際に会ってコミュニケーションをとったら、私たちとなんら変わらない魅力的な子しかいなかった。また、日韓でもめている問題も、巡検まではなぜこんな考え方をするんだろうとか、どうしてこんなことするんだろうとか理解できないことも多かったが、韓国の国の中で韓国の人たちが学んできた歴史を知って、生の韓国の人の声を聞くと、はっきりではなくても理解できる部分が格段に増えた。日韓関係を良くするために必要である、歩み寄りというのは、いままでは漠然としていてよくわからなかったけれど、まさにこういうことなんだと肌で感じた。

紙や映像では伝わりきらないことを人と人とが触れ合って伝え合い、意見の一方通行ではなくてキャッチボールにすること、そして思い切って相手の場所に飛び込んでみることが、どれだけ自分にとっていい経験になるかは、実際にやってみないときっとわからないと思う。

私はいままでのSGHの活動で、よく「相手を理解しようとする努力」が大切なんだと言ってきたし、考えていたけれど、自分がそれを十分にできていたかというとそうは思えない。本を読んでも、流れてくるニュースを見ていても、それはまだまだ積極的に相手を知ることにはなっていなかったんだと思った。育った環境も国の歴史も文化も違う人を、資料を読んだだけで理解することなんてできないんだと思う。それを理解したつもりになって批判する人たちは絶対に「生の体験」をすべきだ。

距離も文化も近いのに、良い関係を保つことになぜこんなに苦労するのか、何が足りていないのかという、この一年私が考えていた答えは、きっとこれだと気づくことができた。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thanks for the three days that we spent together!

I really enjoyed the time and I love Korea more and more than before because of the experience you gave me.

You gave me new and good thinkings so much and it will be my treasure.

In our talking time about many difficult topics, I found we have the same idea, like "we want to be a good partners." In other hand, I also found differences, it’s a new view for me. And through all of them, I got one important confidence which “we Japan and Korea can be more better partners”.

Lastly,I was so glad to be able to get along with you! I never forget you guide me Korea and we talked with about many things. Relation between Korean government and Japanese government maybe becomes worse, but our friendship will be

never so.

I hope that someday you come to Japan and I guide you Japan! See you till the time!!

１年　大道　夏希

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私たちは、はじめに各学校の紹介や、各国の紹介をしました。GGHSの生徒は、日本語選択だったこともあり、とてもよく日本のことを知っていました。私たちは、紹介する形だったのですが、GGHSの生徒は、日本のことも多少知っており、比較する形で教えてくれて、とてもわかりやすかったです。また、私たちは全て英語で発表したのに対し、GGHSの生徒は、全て日本語で教えてくれて、本当に頭が下がる思いでした。

その後のあまった時間でのフリートークでは、だいたい２人１組で話していたのですが、積極的に日本のことについて聞いてくれて、話がとても弾みました。また、その後、喋っていた子とプレゼントを交換したのですが、本当に500円以内なのかわからないくらいたくさんのプレゼントをくれました。もう少し自分も考えればよかったのかと、後悔しましたが、私があげたプレゼントも気に入ってもらうことができて、よかったです。

しかし、この交流会では自分に足りたい点がたくさん見つかりました。１つ目は、コミュニュケーションを取ろうとする積極性の少なさです。もちろん、私はコミュニュケーションを取ろうと努力しました。そして、いくつかの質問をGGHSの生徒にしました。しかし、それだけでは少なすぎました。GGHSの生徒は、積極性に溢れ、また話を展開してくれました。私は、初対面の人と話すことに慣れていなさすぎるせいで、自発はできても、それを受け止めて、返すことがあまりできませんでした。

２つ目は、圧倒的な英語力のなさです。学校のことを聞かれても、言いたいことがあるのに、単語が分からず、なかなかスムーズにいきませんでした。言い回しを変えてみても、それには限界があり、なんども翻訳機を使い、相手を待たせてしまいました。

これら２つのことに対する対策は簡単にできます。１つ目は多くの人と話し、コミュニュケーションをとることで、２つ目は英語を勉強することです。GGHSの生徒に負けないように、努力します。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

GGHSの生徒は前日の交流会の時から、どこへ行くのか、何をするのか、とても真剣に考えてくれました。

内容は、まず、チマチョゴリを着て、韓国の伝統的な建物がある、北村韓屋村へ行き、建物を見たり、おいしいホットックを食べたり、お店に入ったり、写真を撮ったりしました。その後、チマチョゴリを返し、前日にも行った仁寺洞の観光料理屋で、昼ごはんを食べました。私は恐ろしく辛くて熱い、ユッケジャンという鍋の料理を頼み、半分も食べれずに残してしまいました。

フィールドワーク中、GGHSの生徒は常にとても優しかったです。チマチョゴリを着ていた時、階段を登ることがあったのですが、私はしょっちゅう前を踏んでつまずいてしまい、転びそうになっていたのですが、いつも手を貸してくれました。写真を撮るときも、私のカバンをずっと持ってくれました。また、チマチョゴリは下に一枚しか着ていなかったので、とても寒かったのですが、自分が着ていた上着を脱いで、私に貸してくれました。私たちがマスメディアの影響を受けて報道されたニュースから得られる韓国人のイメージとはとてもかけ離れていて、本当にGGHSの生徒は優しかったです。本当に、大阪巡検で学んだ、ヘイトスピーチとかをしている人たちは、韓国人の人と触れ合うべきだ、そうすれば、ヘイトスピーチなんか必要ないと感じるに違いないと思いました。

最後に、私たち旭生とGGHS生には共通して直さなければならない点があります。時間に対するルーズさです。私たちも寝坊したり、集合時間に遅れたり酷かったのですが、GGHS生も、集合時間にご飯を食べてても平気でした。国民性？もあると思いますが、時間に遅れるのは最低なことだと痛感しているので、時間には細心の注意を払って生活して行きたいです。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

GGHSの生徒は、本当に日本との歴史についてよく知っていました。知った上で、最も嫌だ、と言ったのが、政治家による靖国神社への参拝でした。私は韓国でどう靖国神社が知られているのか分かりませんが、東京巡検で行っていたので、普通に戦没者とかの写真があったり、博物館があったりすると言ってみました。しかし、凶悪犯も祀られている、ということが、どうしても嫌なようで、政治家が行くだなんて、信じられない、と言っていました。きっと、彼らは日本のことをよく知っている方だと思うので、他の韓国人の人が、猛烈に反発するのが納得できました。

また、今話題の慰安婦問題についてですが、金ではなく、誠意ある謝罪を望んでいる、ということでした。ここでは朴槿恵大統領の対応も批判していました。よく、日本はどれだけ韓国に金を払えばいいんだ！と怒る人もいますが、韓国人は金は望んでいません。謝罪を求めているので、謝罪した後に、別の政治家が違うことを言ったり、メディアで批判したりせず、きちんとした謝罪を行うべきだと思いました。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私が１番印象に残った場所は、タプコル公園です。タプコル公園には、韓国の国宝二号である、円覚寺跡十層石塔や、三一独立運動のレリーフ、朝鮮独立に携わった政治家などの銅像がありました。

特に私の印象に残ったものは、レリーフです。10枚のレリーフが生々しく三一独立運動の様子を物語っていました。その中でも、最も残酷であったものは、６枚目の”1919年４月15日午後、日本軍が水原堤岩里に来てキリスト教徒と天道教徒を教会に追い込み、銃を乱射し、火をつけた。火を避けて出て来た女性を銃剣で殺した。窓から差し出された赤ん坊も殺した”というものです。レリーフには、女性を殺す日本軍が描かれており、いかに残酷な現場だったかを、物語っていました。その他９枚も悲惨な状況を訴えており、当時の悲惨さ、そしていかに三一独立運動を韓国人が大切に思っているのかを思い知らされました。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

巡検に行ったことで、韓国にはたくさんの植民地時代のものが残っている、ということが初めて分かりました。西大門刑務所歴史館も初めて知ったし、景福宮が日本によって壊されていたことも初めて知りました。自国の被害を受けた、原爆ドームなどは有名なのに、被害を与えた方には目を向けないのは、本当に良くないと思います。私たちはもっと学ぶべきだと感じました。

また、これは行く前からテレビ電話を通じて少し気づいていだのですが、いかに韓国人が竹島のことを思っているかについて、痛感しました。博物館では竹島に関する記述もあり、なんと戦争記念博物館には、入口のところに竹島の全体像の置物が飾ってあり、その隣にはとても大きな竹島の写真が貼ってあり、その前に韓国国旗が立っていて、記念撮影ブースがありました。せっかくなので、記念写真を撮りました。しかも、丁寧に、竹島の歴史について日本語訳も書いてあって、本当に驚きました。今回、竹島について、GGHSの生徒と意見交換をする、また竹島の話題に触れることができなかったので、いつか韓国人に竹島について意見を聞きたいです。

最後に、韓国に行ってみて本当によく分かったのは、韓国人はとても優しく、いい人たちであるということです。買い物をしていても、本当に日本語を喋れる人も多いし、道に迷ったときは、こちらから話しかけなくても助けてくれました。本当に、韓国人についてどうこう言う前に、とても近い隣国である韓国へ行って、確かめるべきであると感じました。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Hi! How are you doing? I hope you are doing great! Thank you for that awesome days.

Through this program, I could think about problems of between Korea and Japan well. And I noticed what is important for us. We need to hear each opinions. I'm Japanese and you're Korean, but we're the same high school students. I think we need discussion as a high school student , not as Korean or Japanese . Maybe we could do it. I hope we will have discussion again someday. Thank you very much.

Miss you so much.

２年　坂野　水咲

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

まず一番びっくりしたのは、韓国側の生徒の日本語がものすごく上手だったことだ。日本語を専攻していることもあるのだろうが、正直、５年間勉強している私の英語よりもはるかに流暢に使いこなしていたと思う。純粋にすごいなと思い、自分ももっと勉強しなくては、と焦りも感じた。そして、韓国語をもっと勉強していけばよかったと思った。音は読めるようになっていたが、意味までは分からなかったし聞き取ることもできなかったので、歯がゆい思いをした。何よりも、韓国側の子はこんなにも日本語を勉強しているのに…という申し訳なさというか悔しさというか、向こうは日本語専攻だからということがわかっていても、やはり複雑な心境だった。

また、日本の文化についても勉強しているそうで、学校紹介の時に日本と韓国の学校の違いについて発表してくれた。

自己紹介の時に、皆日本に来たことがある、と話していた。その時に日本の文化が好きになって日本語を選んだという子が多かった。特にアニメを通じて日本語を学んだという子は、本当に日本語が上手で、読み書きはそこまでだけど話すことと聞くことならかなりできる、と言っていた。具体的な名前を挙げると、「坂本ですが？」や「ユーリ！on　ICE」など最近のアニメの話ができて（動画サイトで見られるそうだ）、とても楽しかった。このように身近なところで文化を共有できるのはとても素敵だ。交流がほとんどリアルタイムなのもグローバル化のよいところだと思う。逆のパターンもある。私か何年か前にヒットした韓国の大河ドラマ「善徳女王」が好きだったので、その話ができてうれしかった。他にも、EXOなど韓国の音楽グループを好きな日本側の生徒もいて、高陽国際高校が開いてくれた歓迎セレモニーのダンス部のパフォーマンスではものすごく盛り上がった。明洞の街を歩いていて聞こえてくる音楽には何となく聞き覚えがあったりもした。ミクロな視点では、私たちは想像以上に近いところにいるのかもしれないと思う。

余談だが、台湾と比較すると、韓国はより密接な交流が行われているように感じた。日本から台湾に入っていっているアニメや食べ物などはそこまで差はないと思ったのだが、台湾から日本に入ってきているものよりも韓国からのもののほうが、身近なところに多いと思うのだ。国交正常化のために国が交流に力を入れたことや、韓流ブームの影響だろう。もちろん国際関係上での日本との関係の違いもあるのだろう。グローバル化のミクロな影響を実感した交流だった。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

最初に、大きな本屋さんに連れて行ってもらった。私は海外に行くと必ず雑誌や本を買うことにしているので実はものすごくわくわくしていて、到着すると頬が緩むのを止められなかった。

まず興味深かったのは日本の本が日本語のまま、たくさん売られていたことだ。日本における洋書と同じ扱いなのだろうか。日本人が多いのか、日本語習得者が多いのか、少し驚いた光景だった。また、日本の雑誌を日本語のまま売っていた。台湾ではジャンプなどの漫画雑誌が中国語に訳して売られていたのだが、韓国ではファッション誌や料理雑誌、アニメ雑誌がそのままで売られていた。りぼんなどの漫画雑誌も訳されることなくそのままだった。ライトノベルや漫画の単行本は韓国語に訳して売られていて、知っているものがあると感動してしまった。変かもしれないが、国を越えて同じ作品を好きな人がいるのだと思うと嬉しいのだ。思わず一冊買ってしまった。また、韓国側の生徒にお勧めの本はないかと聞いてみるとある詩集を教えてくれた。尹東柱(ユンドンジュ)という植民地時代の独立志士が書いたもので、国語の教科書に載っているらしく、韓国の中高生なら必ず知っているそうだ。そちらも購入した。今はまだ読めないが、読めるようになることを目標に勉強しようと決めた。文学は歴史や人々の感情を色濃く反映しているものだから、相互理解というものをするためには、このような挑戦も必要だと思う。そして言語を勉強するというのは相手に対する最大の敬意の表し方じゃないかと私は思う(だから余計に今回肩身の狭い思いをしたのだが…)。

また、たくさんの文具雑貨もあった。その中で特に目に留まったのはStudy　planerだ。一日ごとに細かく学習計画を立てられる手帳のようなものがいくつも売られていて、私がなんだろうとみているとグループの子が自分のものを見せてくれた。そこにはびっしりと一週間の計画が書き込まれていて、過ぎた日には反省まで書かれていた。他の子にも聞いてみたところ、彼女は特に真面目なタイプらしいが、多くの学生がStudy planerを使っているそうだ。日本でも使っている学生はいるだろうが、韓国ほどメジャーではないと思う。勉強に対する勤勉さを、持ち帰って見習わないといけないと思った。

本屋を出た後は、北村(プッチョン)という町に連れて行ってもらった。まず韓服を着せてもらい、そのまま町を散策した。北村は日本の京都のような町で、古い町並みが残っていて今もそこに人が住んでいる。うるさくならない様に気を付けながら皆で写真を撮った。もう一度服を着替えた後は、韓国料理を食べられるお店に連れて行ってもらい、私はスンドゥブを食べた。運ばれてきた料理は真っ赤で、とても辛かったが、おいしくてペロッと完食してしまった。その間、同じテーブルに座った韓国側の子が「辛すぎない？大丈夫？残してもいいんだよ」と心配してくれて、優しいなと思ったのをよく覚えている。

五時間ほどというとても短い時間だったのは心残りだが、とても楽しいフィールドワークだった。韓国の高校生に案内してもらえて本当に良かった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

実を言うと私は、二年前のゼミに参加した先輩に、戦争関係の討論は怖いよ、といわれたこともあり、意見交換会が巡検の中で一番不安だった。しかし蓋を開けてみるとそんなことはなく、穏やかな雰囲気で有意義な話し合いができた。

まず気がかりだった(1)(2)(3)の戦争関連のテーマについて。ここに関して私は一つ、前から気になっていたことを質問してみた。「ドイツと日本の謝罪の違いは何なのか？どうして日本の謝罪は納得してもらえないのか」。これまでにも日本はたびたび謝罪しているし、小泉元首相が西大門刑務所記念館の慰霊碑に献花をするなど、反省の姿勢を示しているのに、どうしてドイツと比較され、批判されるのだろうか。答えは「日本の謝罪には一貫性がなくて誠意が感じられない」ということだった。ドイツは首相が代わっても謝罪の姿勢は変わらないのに、日本は首相が変わるたびに謝罪の姿勢・方針が変わるのが問題なのだそうだ。それを聞いて私は確かにそうかもと納得した。誠意ある謝罪というものについて改めて考える必要があると感じた。また、靖国神社への首相の参拝への抵抗が予想以上に強かったことには驚いた。正直なところ、私は９月に靖国神社と遊就館を訪れて、A級戦犯とされている人でも国のために自分を犠牲にした人であることに変わりはないし、その人たちのおかげで今の日本があることには素直に感謝したいと感じ、首相参拝についてはしてほしいという思いと、他国に配慮してやめるべきだという思いのジレンマで悩むようになっていた。今回の意見交換会で、前者の感謝については変わらないが、首相参拝についてはやはり控えるべきなのでは、という思いのほうが強くなった。靖国神社の存在ではなく、首相参拝だけが韓国の学生にまで抵抗感を生んでいるのだし、それが最大の障壁になってしまっている以上、無理にすることはない。国としての誠意を見せるためには、そこがカギになっていると思う。

私が担当した(1)のテーマでは、当時の日本人になりきって考えると、植民地化を選んだのも仕方がないという意味でやむを得ないと考えた生徒が私たちの側で３人いて、そう説明すると、日韓中の三国で協力してロシアに対抗する手もあったのでは？と言われ、事前の班での話し合いでそのような意見は出なかったので、新鮮でなるほどと思った。

また、学校での教育の話では、やはり戦争観のバランスが大切だという話になった。今の日本には加害者としての戦争観が欠落しているように思う。私は、今回の巡検で見学した景福宮での日本による破壊活動や、西大門刑務所について何も知らなかった。私の勉強不足もあるだろうが、小中学校の社会科で、日本が何をしたのかもっと教えなくてはならないと強く感じた。被害者としての戦争観を伝えていくことも、戦争の恐怖を伝えるために大切だ。しかし同時に加害者となる恐怖を伝えるためにも、戦争におけるすべてを等しく伝えなくてはならない。

一つ意外だったのは、「私たちのいた時代ではないし」という言葉が出てきたことだ。解決しなくてはいけないという問題意識はあるが、妙に過熱している現状に戸惑っている部分は私たちと同じなのかもしれない。

社会問題の話で印象的だったのは、韓国ではフリーターという生き方ができないということだった。バイト代が日本よりもかなり安く、

アルバイトだけではそもそも生活できないそうなのだ。また、女性が働き続けることが非常に厳しい環境であることにも少し驚いた。育児休暇（というよりも出産休暇）はあるが、とると嫌がられ、特に男性はとりにくいらしい。３か月も経つと代わりの人が入っていて辞めざるを得ないようになり、今の韓国では共働きが30％程度だそうだ。ただ、最初は驚いたが、これは日本も同じかもしれないと考えなおした。確かに日本のほうが、企業がイメージアップのために女性が働きやすい環境を率先して作っているが、これはここ数年のことで、まだまだ課題は残っている。ここに関しては同じ問題を抱える者同士、協力できるといいなと思った。

子どもの幸福度に関するテーマのところでは、前日の交流会で部活動が盛んな私たちの学校が少し羨ましいと言っていたこともあって、「もし勉強しなくてもいいなら何がしたい？」と聞いてみた。すると私の隣に座っていた子は、意外にも「理系の数学を勉強したい」言った。高陽国際高校は国に文系と決められていて、彼女は数学が好きなのに理系数学の授業を受けられないから、とのことだった。将来への投資と、今を生きることの両立が、韓国では少し難しいように感じた。

歴史問題に関しては、現地の同年代の生の声を聞けて、自分の考え方も少し変わった。社会問題に関しても、同じような問題を抱えているため、お互いの現状を再認識し、アイデアを交換することができた。このような場に参加できて本当に良かったと思う。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

１つだけ選ぶなら、景福宮だ。とても大きく迫力があって心に残っているというのもあるが、同時に日本が行った破壊の片鱗を感じることができた場所でもあるからだ。

最初は秀吉の時代の朝鮮出兵で焼かれた。これは昔すぎて特に何か強く感じたことはなかったのだが、そのあとの植民地時代に、せっかく復元していた建物をたくさん破壊し、更には総督府を建てたという話を聞いて何とも言えない気分になった。私たちが反省や謝罪をすべきことではないが（したところで表面上のものになってしまうと思う）、もっと周知させなくてはならない。このゼミに参加するまで、私はこの景福宮のことや西大門刑務所について全く知らなかった。教科書には載っていないし、資料集にも載っていなかったと思う。私たちのように、興味を持った人だけが知っているというのはおかしい。景福宮は1395年から正宮として使われた歴史ある建物だ。一度焼かれても、もう一度再建までしたのだから、その破壊がどれだけ屈辱的なものだったか想像に難くない。そのような事実をきちんと伝えることが今の日本にできる一番の償いであり、それこそが誠意ある謝罪にもつながるのではないだろうか。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国の人たちの温かさ、優しさに触れた四日間だった。料理が辛すぎないか心配してくれ、お別れの時には泣いてしまった子もいて、今回交流した子たちとはとてもいい友達になれたと思う。勉強で忙しいだろうに私たちとの交流プログラムに時間を割いてくれて、本当に感謝しかない。

また、韓国の素敵なところにたくさん触れることができた。ビビンバやチヂミ、参鶏湯、スンドゥブ、プルコギ、キムチ、ホットック、パッピンス…食べたいと思っていたものをすべて食べることができて幸せだった。また、学校での交流で教えてもらったコンギというゲームがものすごく面白くて、帰ってきてから早速部内に広めた。

また、事前に勉強していった印象では朝から晩までひたすら勉強していて部活はできないのかと思っていたが、ダンス部やサムルノリのように、勉強と高いパフォーマンスのための練習を両立させているのを目の当たりにして、こちらの身が引き締まるような気がした。ただ、運動部は月に３回程度しか活動がないと聞いて、それはストレスがたまりそうだなぁと思った。

そして、植民地時代に日本が行った破壊を詳しく知った。西大門刑務所での残酷なやり方や歴史的な物品の持ち出しや建物の破壊。西大門刑務所は韓国自身がイスラエルを意識し、展示を少し前向きなものにしていると聞き、韓国が被害者ぶっているという一部の認識は間違っていると改めて思った。本物を見るとやはりショックではあったが、もっと見なくてはいけないという強い思いも生まれた。たくさんのことを知ることができた巡検だった。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thanks to you, my first trip to Korea was wonderful.

I can't express my deep appreciation to you.

Talking with you, I learned many things, for example, school life in Korea and Korean culture. I'm sure we can find the clue to solve problems between Japan and Korea.

That was meaningful time.

During the fieldwork, I enjoyed myself very much, so I'll cherish my visit there, and I hope you feel the same way.

I'm glad to become friends you. I want to go back Korea and see you again.

Of course, if you come to Japan, you are welcome in my house.

【E班】

１年　小澤　響子

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会では、それぞれの自己紹介と、互いの国の生活や文化について発表した。私たちは原稿と写真を用意していたが、向こうの高校生はそれぞれのパソコンでスライドを作っていた。

彼らに対する印象は、予想通りみんな積極的だということだった。こちらの話した内容にすぐ反応して質問を投げかけてくれたおかげで、楽しく会話ができたと思う。私は、全ての韓国人が私達日本人のことを嫌っているのではないかと考えていたため、実際にはとても優しいいい人たちでほっとした。

驚いたのは、彼らの英語、日本語の堪能さである。聞くと、彼らは一年に一言語のペースで学習しているらしい。彼らがあんなに言語能力が高いのは、「国際高校」に通っているからかもしれないが、それにしても、母国語以外で何不自由なく話ができるというのはすごいと思った。もう一つ、彼らの生活にも驚かされた。勉強の時間がとても多いのに、部活動も盛んなのである。私は日本で彼らの生活について聞かされたとき、これでは全く部活などできないだろうと思っていた。しかし、部活動にも本当に熱心に取り組んでおり、パワフルな人たちなのだとわかった。

交流会を通して、韓国人は、積極性と勤勉さを兼ね備えていると知ることができ、そんな彼らに好感を持った。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちE班・5班は、まず「南山韓屋村」という所に行った。ここでは韓国の伝統的な家屋を見て回った。韓国の高校生のうちほとんどは、学校の行事などで訪れたことがあるようだった。その後に「美美韓服」というお店で、チマチョゴリを借りた。韓服には、多くの種類があって、伝統的なものから現代風な模様があしらわれたものまで様々であった。また、服につける飾りや髪飾りも豊富で驚いた。韓国の正装を知ることができてよかったと思う。街ではチマチョゴリを着ている人が全く見られず、私たちだけが目立っていた。韓国の高校生に聞くと、チマチョゴリを普段外で着て歩いている人はほとんどいないそうだ。これは日本の着物と似ていると思った。それから光化門広場に向かったのだが、興味深い場所だった。まず手前には李舜臣の大きな銅像が建っていた。立ち上がって剣を床に突き刺し、厳しい様子である。そしてその像の足元を見ると、朴槿恵氏の張り子の像があった。彼女の上半身が再現され、胴体は紐でぐるぐる巻きにされていた。像の前には警官がおり、近くには多くのテントがあった。さらにまっすぐ進むと、一番奥にどーんと世宗の銅像が構えていた。ハングルを創製した朝鮮王朝第四代王は、国民にとってとても偉大な存在なのだと伺える。あとで調べて見ると、そこはデモの中心地だっだ。李舜臣や世宗の像があり、韓国の象徴的な場所だからこそ、彼らもこの場所を選んだのだろう。世宗像の前で記念撮影を終え、私たちは新村に向かった。そこではまず、トッポギの食べ放題のお店に入った。トッポギは出汁・辛い調味料の入った鍋に他の具とともに入れて食べ、最後には残ったスープとご飯を混ぜて、火を入れて食べた。昼食を終えた後は、近くの商店街で買い物をした。また最後に少しロッテマートにも寄った。

時間にあまり余裕はなかったが、彼らのオススメする場所を全て回れたので良かったと思う。移動には電車とバスを使ったが、全ての運賃の合計が2500ウォンほどだったことに驚いた。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

事前に送られてきた意見文を見て、日本と韓国では社会の状況が違って、同じテーマで考えても違う答えに行き着くことがとても面白いと思った。そして当日、彼らとの意見交換ではまた新たに学ぶことがたくさんあった。ここで代表的な二つを挙げたい。

一つめは、植民地支配に対する謝罪と和解についてである。「植民地支配はやむを得なかったわけではない、すべきでなかった」という認識は私たちと韓国の高校生とで一致した。

しかし、その後の対応については、多くの日本人が、日本は十分に謝罪も賠償もなされたと考えているのに対し、韓国人はそれが不十分であると主張している。これについて、私たちのグループは、謝罪といわれても、どのような形でそれを示せばいいのかわからないという意見だった。これはきっと、多くの日本人にも共通であると思う。しかし、今回それについて質問すると、!首相の靖国神社への参拝の取りやめ ”韓国の元慰安婦の女性を直接訪問して謝罪 という具体的な提案がされた。そこで私たちも、靖国神社は戦争犯罪人のみを祀っているわけではないことなどを説明することができた。

両国が歴史問題で歩み寄るためには、日韓の対話が必要であるということで意見が揃った。相手国の首相の発言などを刺激的に報道しすぎていることが一番大きな原因と思われるため、まずはメディアの自由化が大きな課題であるとした。これに代わり、首相は国民の代表ではあるが、その考えが必ずしも国民全員に共通するものではないと再認識していくことが重要である。また、私たちは、両国の学校を結びつけ、歴史問題などについて学ぶ際に意見交換をするのも有効な手立てであると提言し、それについては韓国の高校生も大いに賛同の意を示してくれた。

二つめは、外国人労働者についてである。韓国には、外国人労働者として朝鮮族が流入し、彼らによる犯罪が多く報道されているそうだ。また、北朝鮮からの脱北者については、その数は多く、彼らのための大学や生活支援の制度があるという。しかし、独特な言葉や生活スタイル（社会主義に根付いたものであるらしい）によって若干の差別を受けているようである。日本でも外国人の犯罪は大きく取り上げられる傾向にあると感じられるが、それは韓国も同じのようだ。しかし、韓国の高校生は、韓国人と北朝鮮の人々は同じ民族なのだから、彼らを積極的に保護すべきだと話していた。確かに彼らは互いに複雑な関係だが、民族的には近い。日本ではこういった状況はないが、彼らの言葉を聞いてなるほど、と思った。 この問題に関しては、近い国同士、お互いに協力をしていけるのではないかと思った。

私は、韓国の高校生たちと直接話し合いをすることで、日本で得た情報と現地の感覚を照らし合わせ、自分の知識を修正・更新することができたと感じている。また、全体的に、自分で考えるだけでは視野が偏ってしまうことに改めて気付かされた。そういった意味でこの意見交換会は私にとって非常に有意義なものであった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

韓国での巡検で印象に残った場所は二つある。

一つ目は、慰安婦像である。ゼミの授業でも、慰安婦問題についてはかなり重点をおいて話し合いをしたが、いざ自分の目の前で像を見るとなんともいえない気持ちにさせられた。像には帽子、靴下、マフラー、がつけられ、周りには花束など供物がたくさんあった。そばに簡易なテントが建てられており、1人の女性が中でくつろいでいた。彼女は像が撤去されないようにずっと見張っているそうだ。私はこの光景を前にして、真っ先に、日本人がこの場所にいていいんだろうかと不安になった。韓国の人が慰安婦の存在について、強い憤りを感じているということはこれまでの留学生の方との話し合いで重々承知していたからだ。しかし幸い、罵声を浴びせられるなどはなかった。

先述したように、像が撤去されないように見張っていたのは女性であった。しかも若年の女性である。さらに、その近くでデモのためとみられるチラシを持っていたのも若者達であった。韓国では、こうした若い人たちが歴史問題や政治にとても関心を持っているのだと伺えた。日本もこうした意識を若者の間で広めていくべきである。そうした上で、互いの国の将来を背負っていく世代同士で話し合いを行なっていくべきだと思った。

二つ目は、臨江閣を訪れたことである。私は展望台にいる間中ずっと、どこか緊張を感じていた。なぜなら、国境というものに実感がなかったからだ。これは日本が島国であり、ここから先は外国、という状況を身近に体験してこなかったからだと思う。

望拝壇の前でガイドさんは、北朝鮮から韓国にやってきて未だに帰ることができない人たちのことを説明してくださった。それを聞いて、どんなに辛いだろうととても心が痛くなったのと同時に、自分が知らない、あるいは目を向けようとしていないだけで、自分とは全く異なる境遇で苦しんで生きている人もいるのだと実感させられた。ガイドさんが「そのような人のためにも早く南北統一をしなくてはならないと思う」と話され、韓国の人は比較的、南北問題の解決に積極的なのかなと思った。

望拝壇の近くで流れていた、昔韓国で放送されていたという生き別れた家族を探す番組のテーマソングを聞いたり、北朝鮮人捕虜が渡って行った「自由の橋」に掛けられた、大韓民国の旗たちを見ることによって、また南北問題の深刻さを実感させられた。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国での巡検で新たにわかったことは大きく三つある。

一つ目は、韓国人についてである。私はこの巡検の前までは、韓国人は皆、日本人のことを例外なく嫌っているのだと思っていた。歴史問題についてかなり意識が高く、メディアでも過激なデモの様子が報道されていたからだ。しかし現地に来てみて、道で睨まれたり指をさしてコソコソ言われるといったことはなかったし、なにより韓国人のフレンドリーさに触れたことでその先入観はなくなった。確かに歴史問題で日本人は誰でも嫌だ、という人はいるかもしれない。しかしそうでない人もたくさんいるのだと実感できた。

二つ目は、私たちの知らなかった日本人の姿だ。西大門刑務所歴史館では、私たちが日本ではあまり大きく触れてこなかった、外国での日本人の行いが細かく紹介されていた。ひどい行いは、やった側はその歴史を後世に残そうとはしないが、やられた側は子孫の代までも、いつまでもそのことを覚えている。この違いが国同士の認識のずれを生んでしまうのだと思う。そしてこれは日本に限ったことではない。私はこの体験から、それぞれの国の一国民という立場で私たちがすべきことは、自国の歴史を正確に理解して良くない過去を戒めとすること、また、戦争等により自国が受けた被害の大きさを、それが繰り返されることのように、世界に発信していくことであると結論づける。

三つ目は、韓国の雰囲気である。韓国では歴史認識や領土、国境の問題が多くあり、その緊張感を国民全体が共有して生活していると感じた。特に注目すべきは若年層である。デモの参加者も多くが若者なのだ。日本もそういった問題を多く抱えているが、それに対する国民の意識は韓国より圧倒的に低い。この点は韓国を見習うべきである。もちろん、メディアによって反外国感情を煽り立てたり、偏った考えを植え付けたりするのではない。人々が正しい知識を得ることができる環境を整え、それぞれが自分の意見を持てるまでに政治について考える機会を与えるのだ。

この巡検で何より良かったのは、様々なことを自分の肌で知ることができたことだ。誰もがこうして自分で経験することで、両国に対する理解が少しずつ深まっていくと思う。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

How have you been doing?

Thank you for welcoming us in our excursion! I had a very good time with you.

To tell the truth, I was seriously nervous whether I can express my opinion at first. But you talked to me assertive. I was glad to talk a lot of things about Korea with you.

In discussion, everyone’s eyes were sparkling. I felt a sense of fulfillment because I could check what I had learned in seminar against the field. I found there were some different points, so I want to make full use of this experience in Japan.

I also thank you for making a plan of the second day.I really enjoyed it! It was my first time to put on Chima jeogori.

As for the activity at your school,I was surprised at the performances of some clubs.You work hard not only to study but also to do club activities! I was so impressed with it.

Now I have much more hope that Japan and Korea can have a good relations with each other as neighbors.Because you all

treated me rather as an individual than as a citizen of Japan.

I want to keep friendly relationships with you.

Please tell me when you come to Japan. I’m willing to conduct your tours.

１年　稲田　栞里

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会の中で私が最も強く感じたのは、韓国の高校生のスペックの高さだ。学校紹介・文化紹介・高校生活紹介については、私自身しっかりと準備して臨んだつもりだったが、日本側は自分も含めてなんとなくだらっとしたしまりのないものだった。それに対して韓国の生徒たちのプレゼンテーションは、パワーポイントを使用した簡潔で要を得たものであり、非常にわかりやすかった。このようなプレゼンテーションに慣れているようだった。実際、後日高陽国際高校を訪問したとき、生物の授業内でプレゼンテーションを行なっているところを目にした。また、学校の課題としてレポートを書く機会も多いそうだ。高陽国際高校では、このように自分の考えを表現し他人に伝える、つまりアウトプットの力を伸ばす教育が行われている。一般の高校については詳しくはわからないが、こうした面では韓国の教育は日本と比べて非常に進んでいると思う。もしくは世界的に日本が大きく遅れをとっているのかもしれない。韓国がグローバル化に対応して成長を遂げているのもうなずける。アウトプットの能力はグローバル化に伴ってますます必要とされるものになっている。ただ座って先生の講義を聞くばかりの日本の高校教育は、やはり見直されるべきなのではないかと思う。プレゼンテーションやレポートの技術と、表現すべき自分自身の考えを持つこと、この両者を身につけさせる教育が日本にも必要だし、これらは私自身が高校で身につけたいものでもある。

また今回もう一つわかったことがある。これまで私は韓国の高校生に対し、勉強漬けの毎日で辛そうという印象を持っていた。しかし、いろいろ話を聞く中で、長時間の学習をこなしながらもクラブ活動などに参加し、非常に楽しく高校生活を送っていることがわかった。

この交流会を通して、私は高陽国際高校の生徒たちに対していっそう強く尊敬の念を持つようになったと同時に、彼らの存在をより自分たちに近いものとして感じることができた。反省点は、最後の方でだいぶ時間がおしてしまったことで、司会者としてうまく会の進行ができなかったという不甲斐なさを感じた。しかし全体的には非常に有意義な会であったように思う。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークで私たちの班は、南山韓屋村と光化門広場、新村を訪れた。南山韓屋村では韓国の伝統的な家屋の造りを学んだ。その後、韓服のレンタルショップで韓服を着た。韓服は非常に色鮮やかで美しく、隣国である日本の着物とはまた違った魅力があった。しかし、チョゴリの身体の前で合わせる形など、似ているところも多い。また、日本における着物と比較して、韓国で韓服はより身近な存在であるように感じた。韓服は近年韓国の若者の間でも人気があるようで、ソウル市内でも多くの韓服を着た若者たちを見かけた。私たちが夏祭りなどのイベントで浴衣を着たがるのと同じ感覚なのだろうか。その後、バスで光化門広場へ移動し、写真を撮った。光化門広場には韓国の英雄である李舜臣と世宗大王の銅像がある。特に世宗大王について私はあまり知識がなかったが、ハングルをつくるなど大きな功績を残した王として韓国では非常に崇拝されているそうだ。また、日本との関わりの強い人物である李舜臣に関して、高陽高校の生徒と話したのは興味深かった。

新村に移動してから昼食としてトッポッキを食べた。大阪のコリアタウンで食べたものとは異なり、トックとその他の具材や麺、好みのソースをセルフでとり、テーブルの上の鍋で調理して食べるというスタイルだった。このトッポッキの食べ方は韓国では一般的なものだそうだ。私にとってはとても新鮮な感じがして、おいしかったし自分で調理するというのがおもしろかった。高陽高校の生徒たちの中でもトッポッキの人気は高く、中には学校のそばのトッポッキの店に毎日通うという人もいた。昼食の後は新村でコスメなどのショッピングを楽しんだ。

今回のフィールドワークでは、韓国の歴史と伝統を学ぶことができたと同時に、高陽国際高校の生徒とのアイドルや俳優、ファッションの流行などに関するたわいもない会話を通して、韓国をこれまでとは異なる側面から知るよい機会となった。何よりも、高陽国際高校の生徒たちと仲良くなることができて、韓国をより身近に感じるようになったことが一番の収穫なのではないかと考える。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会で学んだことは非常に多い。まず歴史問題については、現在の状況を打破するための道がほんのすこしだけ見えたような気がした。これまでは、日本の植民地支配にせよ従軍慰安婦問題にせよ、過去に日本が韓国に対して非人道的なことをおこなったというのは変えられない事実であり、韓国の人たちがそのことに対して怒りを持っているのならば解決しようもないのではないかと半ば諦めの気持ちを持っていたところもあった。しかし今回の議論において、日韓の間に歴史問題に関するわだかまりが存在する原因を、高陽国際高校の生徒たちは、両国がお互いの歴史についてよく知らないからだと捉えていたことが印象的だった。そうであるならば、私たち若い世代が今回のような話し合いの場を設けることは非常に有効な試みであるだろう。私はゼミで学ぶまで、主に戦中から現在に渡る韓国の歴史についての十分な知識を持ち合わせていなかった。また知識を得た上で日韓の歴史問題について考えたときにも、加害者である日本の立場からの自分の考えが、日本がやったことを正当化してしまっているのではないか、逆に自虐的にすぎるのではないかと思い悩み、客観的に捉えられない。韓国の人々の中にも同じような感覚を持つ人がいるのではないだろうか。こう考えても、実際に日本人と韓国人が直接意見をぶつからせることで得られるものは多い。具体的には、今回の意見交換会の中で、韓国人の求める謝罪の形を以前より明確に知ることができた。政府に加害の歴史をきちんと認めて謝罪してほしいというのが韓国側の主張だ。河野談話や村山談話により日韓関係が前進すると思われたが、安倍首相が河野談話を否定するかのような発言をしたことにより振り出しに戻ってしまったと韓国では認識されているらしい。また、政治家が靖国神社を公式に訪問しているという事実も、日本が戦争を反省していないと判断される一つの要因となっているそうだ。政治家の思慮に欠けた言動や、思うように進まない政府間の協議など、歴史問題の解決を目指す上での障壁は多い。ただ、必ずしも政治家が国民の意見を代表しているとは限らないということは日韓の両国民が痛感している事実だ。私たちの世代がお互いの歴史を知り、お互いの考えを理解し、話し合いによって歩み寄る道を模索することこそが、やはり将来的な日韓間の歴史問題解決につながると考える。

その他社会問題については、全体的にこれまで考えていたよりも日本と韓国の状況は似ていると感じた。私が担当したACテーマに関して、最初に韓国の競争・就職の状況について知ったときは、高校生の勉強漬けの生活や財閥に就職するための競争の加熱は日本の状況とは大きく違うように思われ、人生の選択肢が日本と比べて少ないという印象を持った。しかし今回の意見交換会やその他の交流を通して感じたのは、日本もそれほど変わらないのではないかということだった。日本でも結局は良い大学に入学しないと就職は難しく、非正規という安定しない働き方はなるべくなら避けたい。入学試験の仕組みの違いによる多少の差こそあれ、学歴や就職で競争が激化しているという状況は日本も韓国も同じである。ただ格差拡大の問題は韓国の方がより深刻で、そこから私たち日本人と韓国人の間で考え方が異なっていたのが興味深かった。ゼミで格差について話し合った時は、経済の成長のためにもある程度の格差は必要という意見が多数を占めていたが、高陽国際高校の生徒は、経済的格差は個人能力によるものではなく親から伝わるものであり、豊かな人から税を多く取ることで解消していくべきだという考えを持っていた。また、韓国では早くに退職を余儀なくされ貧困に苦しむお年寄りが多いが、定年を引き上げるべきという韓国側の考えに対して、私たちの班の中では無理やり働かせるのは人権侵害ではないかという意見が出た。これも、格差の深刻さに違いがあることによるものだと思う。

もう一つ私が新鮮に感じたのは外国語の習得の捉え方だ。私は、とりあえず英会話を習うという日本の風潮に違和感を感じていて、英語が話せるよりも前に話す中身が大事だと常日頃感じていた。しかし、巡検で高陽国際高校の生徒たちと交流する中で英語力の圧倒的な不足を痛感し、また意見交換会で高陽国際高校の生徒の、言語があってこそ、それを土台としてコミュニケーションが成立する、また、言語を知ることで同時にその国の文化や生活が理解できるという意見を聞いて、考えを改めた。コミュニケーションの上では、言語がまず前提に

あり、言語が使えてはじめて考える力が生きてくるし、自分の考えが伝えられるということを、当たり前のことであるが理解することができた。

今回の意見交換会は、韓国と日本の社会の状況や考え方を交換することによって双方得るものは大きかったのではないかと思う。日韓関係を考える上で、このように日韓を取り巻く問題について直接議論する場を設けることは、お互いの国をより深く理解することや、問題を異なる視点から捉えることにつながる非常に良い機会であり、将来的な日韓関係改善のためにこのような機会がもっと増えていくことが望まれる。自分自身にとっても、全く異なる立場の人たちの考えていることを知り、様々な問題を新たな見方で考える密度の濃い話し合いができたことは、非常に良い経験となった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私にとって巡検先で最も印象深かったのは、戦争記念館だ。戦争記念館で展示の中心となっている朝鮮戦争は、韓国と北朝鮮との関係を語る上で大きな意味を持つ戦争であった。印象に残った理由としては、まずこれまでよく知らなかった朝鮮戦争の流れが理解できたというのが大きい。朝鮮戦争は朝鮮半島全土を戦場とした戦争で、一般市民を含め多くの人々が命を落とした。その悲惨さが、展示からよく伝わってきた。また、戦争記念館の展示は比較的客観的な立場でまとめられているように感じた。これは、韓国人にとって北朝鮮は朝鮮戦争の敵方というよりも仲間であるからなのだろうと思った。実際その後同じ班の高陽国際高校の生徒に北朝鮮について尋ねてみたところ、北朝鮮の人々は同じ民族であり、国のトップには反感を覚えるが国民は仲間だと思っていると言っていた。

日本の太平洋戦争に関する展示施設は、程度の差はあれ日本の立場からの展示を行っている。だから、良くも悪くも日本がやったこと、日本が受けた被害といった、日本を主語とした展示が多く、それを中心に理解を深めることができる。それに対し戦争記念館の展示は、俯瞰した立場から戦争を理解でき、両方の視点を知ることができる点が、新鮮で興味深かった。自由の橋で伺ったお話も含め、今回の巡検で韓国の人々の朝鮮半島統一への強い願いを感じた。韓国と北朝鮮は同じ民族であるにも関わらず、自由に行き来することもできないし交流も全くない。故郷である北朝鮮に帰りたくても帰れない人々が韓国にはたくさんいると聞いた。これは本当に不自然だし良くないことだと思う。一日でも早く朝鮮半島の統一が実現することを、私自身切に願っている。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

今回の巡検では高陽国際高校の生徒との交流など、とても貴重な経験を得ることができた。また、その中で非常に多くのことを学んだ。私が巡検を終えて強く感じたのは、別の視点に立って考えることの難しさだ。ゼミで学んできた中で、一つの見方にとらわれるのではなく、様々な視点から物事を捉えるということが、日韓の歴史問題なり格差拡大などの社会問題なりどのような問題を考える上でも大切なことであった。正直なところ、レポートを書く時にも、この様々な視点からというセンテンスを、安易に多用してしまっていたところもあったように思う。しかし実際には、自分と異なる立場から考えるということは非常に難しいことだ。意見交換会の準備に当たって、戦争や社会問題について韓国の人たちはどう感じているのかを考えるように努めた。別の視点に立つことは、ただ知識があれば可能であるわけではない。意見交換会で高陽国際高校の生徒の話を聞いて、自分の考えていたことの安直さを感じた場面が多くあった。別の視点に立って考えるといっても、所詮自分の立場から違う立場の人がどう考えているのか想像するしかなく、結局は自分の知識や体験、価値観をもとにした独りよがりに過ぎない部分もあるのかもしれないと感じた。やはり本当に自分とは異なる立場の人の考えを知るためには、表面的な知識だけでなく、今回のような直接の対話が必要だろう。このような機会はなかなか持てるものではない。ただ、それまで考えたことのなかったような他の視点からの意見を知ることで、自分の見方が広がる感覚を経験すること、その積み重ねによってのみ、問題を様々な視点から捉えることが可能となると思う。

また、私は巡検において高陽国際高校の生徒と仲良くなったことで、韓国という国と個人を分けて考えることができるようになった。これまで日韓の問題について学んできたが、その中で中心となっていたのはやはり日本と韓国という国と国の関係だった。国は個人の集まりでしかないというのは当然のことであるが、つい忘れがちである。そうなれば、私たちの中で韓国のイメージと韓国人のイメージは一つに重なってしまうだろう。しかし、日本の中にも様々な人がいるのと同じで韓国にも様々な人がいて、立場や考え方もそれぞれであることを認識しなければならないし、国と個人を別の次元のものとして捉えなければいけないと思う。日本と韓国という二つの国家の間には、植民地支配に対する謝罪の問題や領土問題など課題が山積している。地理的・歴史的・経済的に近く関係が深いからこそ生じる問題も多い。しかし、日本人と韓国人の個人どうしの関係は、もちろん完全にというわけではないが国家間の関係と別物として捉える必要があるのではないか。日本という国と韓国という国の間には様々な問題があるから、日本人と韓国人はうまくやっていけないと思い込んでしまっているのならば、それは安易な一般化であるし、何よりもったいないことだ。住んでいる国による違いも幾分かはあるが、日本人と韓国人といっても結局は人と人の関係であり、国の違いを必要以上に意識することはないのではないだろうか。冷静に考えれば、歴史や領土といった国家間の問題が、日本人と韓国人の関係に持ち込まれているのは奇妙だ。皆がこの国と個人は別物であるという当たり前のことを認識することが日韓関係改善の第一歩となると私は考える。

今回の巡検で私が素直に感じたのは以上のようなことだ。様々な施設を見学して多くの新しい知識を得ることができたし、外国としての日本という視点の展示は興味深かった。また、高陽国際高校の生徒との交流は新たな発見や新鮮な驚きがあり、世界が広がったような感じがする。非常に有意義な経験となった。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you so much for everything you did for us during our stay in Seoul. Thanks to you guys we had a great time and learned many things about Korea. It was really interesting to discuss the problems that exist between our nations. I felt relieved that the discussion was held in a friendly atmosphere although it was about very sensitive issues. Through the discussion I deeply learned what Korean people think about the problems both Japan and Korea have that otherwise we could not have known. We can find no solutions for those problems without understanding what is the fact and what the other thinks about them. The discussion we had was a good opportunity to do that. Moreover it is good that Japanese and Korean become friends. I'm sure that the relationship between our nations will be improved by having these kinds of interactions. Fieldwork was also a lot of fun. Each of us could experience Korean culture thanks to your good guidance. Also thank you for accepting us to your school GGHS. I was amazed because it was modern and seemed so comfortable. I really wanted to join the carol contest. The performance you guys gave at the gym pleased us so much. The traditional Korean instruments had a powerful sound and I enjoyed listening to it. Kpop dance was really cute and cool. Tecondo was also very cool. We had a good time at your school. Before visiting Korea I worried that high school students in Korea might study so hard that they cannot enjoy their school life. After seeing you guys I found that you guys enjoyed your school life and are not only serious and clever but also friendly, kind and sociable. It was lots of fun to talk to you. Now I strongly miss you guys. I hope I will see you someday again.

Lastly I was really happy to see you guys. Thank you so much.

１年　南出理夏子

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

今回の交流会、席に着く前は英語が通じるか、コミュニケーションをうまくとれるかなどと心配していた。だが、いざ席についてみると、韓国の高校生達は私達よりもずっと積極的にコミュニケーションをとろうとし、楽しく過ごし、心配は杞憂に終わった。

交流会が始まってからの自己紹介では、原稿を見ながらでも堂々としていた。それに比べ、日本側は韓国の生徒ほど積極的でないように

思えた。みんな友好的に接してくれて、日本で報じられている反日のイメージが崩れた。自分は特に自己紹介のとき、原稿は棒読みで、聞いている人を見ようともしなかった。だが、そんな韓国の生徒を見て、何のために自己紹介をしているのかを再認識できた。

続く学校紹介、高校生活紹介や韓国の文化紹介ではパソコンなどのハイテク機器を使いこなしてプレゼンしていた。パワーポイントを効果的に使ってよりわかりやすい紹介だった。

その後のフリートークも和気あいあいと進んだ。プレゼント交換では、どちらも趣向を凝らしたプレゼントを贈りあった。

交流会は掴みから最後までつつがなく進み、三日目のフィールドワークへの土壌固めもできた。交流会では非常に有意義な時間を過ごすことができた。

互いに何かをやるときは、まず互いのことを知ってから行うことが大切だと認識できた。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

高陽国際高校の生徒とのフィールドワークでは、韓国の文化を学べた。

最初に近くの南山韓屋村に行った。前日の交流会のおかげか日韓ともに馴染んだ様子で、見学できた。建築などは木でできているなど雰囲気は日本のものと似ていた。しかし、色使いが景福宮のようなど差異が見られた。また、韓国の生徒でも自国の伝統的な建築でわからないことがあると言っていた。日本人でも伝統的な建築のことを深くは理解していないことがある。若い世代は住居の変化で伝統的な住まいをよく知らないというのは日韓共通の問題なのかもしれない。

その後、韓服のお店に行き、韓服のレンタルをした。韓服は、上着のチョゴリと、スカートのチマでできていて、チマの下にはパニエのようなものをはいて膨らませて着た。韓服は伝統的なものから現代的なデザインまである。中にはドレスとの折衷韓服まであり、結婚式で着られるそうだ。着物も最近は浴衣ドレスやデザインの変化は見られるが、折衷のものは見られない。折衷のものがいいとか悪いとかではないが、時代に合わせて臨機応変に変化していくのもまた文化の魅力の一つだろう。

韓服を着たまま、バスでトッポギのお店へ向かった。道中、韓国の街並みを見ていると至る所に教会があった。韓国人の30%はクリスチャンというのが色濃くでていた。トッポギは日本で食べたものよりも辛く、その他の料理全体が辛い味付けだった。韓国人にとって辛いものは日本人にとって醤油や味噌のような位置付けのものかもしれない。

今回のフィールドワークでは地元の高校生の案内ということもあり、全体での巡検とは違った視点から韓国という国を見ることができた。日本と韓国の文化の差異を考え、それぞれの文化を見つめ直すいい機会だった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会をする前は韓国の高校生とは歴史認識問題で対立するかと思われた。だが、意に反して歴史についての議論で意見は対立しなかった。お互いに首相は必ずしも民意に即しているとは限らないということを再認識できた。また、首相の靖国神社参拝についても、政教分離には反しているということ、靖国神社はＡ級戦犯以外も祀られているとの意見も出た。

日韓の歴史問題はそこまで議論は発展しなかった代わりに、子どもの幸福などの経済問題では議論が発展した。その中で韓国の生徒の一人が、『日本側が韓国の高校生はいい大学、企業に入るくらいしか将来の選択肢がない、と言っていたがその通りだった』と言っていたのが印象的だった。韓国では日本以上にドロップアウトすると社会復帰が難しい。だから、ドロップアウトしないために必死に勉強して、いい大学に入ろうとする。だが、最近ではSKY に入ってもサムスンやヒュンダイといった大企業に入れなくなっている。韓国の生徒は、『勉強に時間を取られて読書などの趣味や、スキルアップなどの時間がない』とも言っていた。日本の生徒は韓国の生徒ほど勉強しない代わりに読書や部活動に集中できる。私は常々韓国の高校生が朝から晩まで勉強していることに対して関心を抱いていたが、そういう生の声が聞けて興味深かった。

全体的に対立するような意見はなく、自然に話題は自国の状況についてに移った。日韓共通の問題として少子高齢化があがった。どうすれば、出生率が上がるかということが議論の中心になった。その中の結論として、政府だけでなく、企業も協力して女性が働きやすい社会をつくることが最適だという話になった。これらの問題解決の鍵を握るのは女性だと思う。

今回の意見交換会では、多少意見が食い違うこともあったが、上手く意見のすり合わせができ、そしていい議論ができたと思う。国が違う人との意見交換は非常に有意義だった。こういう機会は相互理解を進めるのにとても大切だ。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

今回の巡検で最も印象に残ったところは高陽国際高校だ。私にとって、初めて見た海外の学校ということもあり、非常に新鮮に感じられた。

特に学校の施設が公立高校とは思えないほど充実していた。校舎は綺麗で、至る所にホワイトボードがあった。生徒はそこで自主的に「論語」などの勉強会をしているそうだ。各教室には一つずつプロジェクターも完備され、そこで生徒はスクリーンに投影して授業を行っていた。寮にも、自習用の机と椅子が完備されていた。学校全体でいつでもどこでも勉強できる環境が整っていた。韓国の高校生は朝から晩まで勉強しているそうだが、このような環境なら集中して勉強ができそうだった。学校の図書館も国際高校ということもあり、外国の本が充実していた。日本語の教材から漫画、例えば「のだめカンタービレ」まで幅広い本がそろっていた。

日本の学校は韓国の学校制度や施設に学ぶことが沢山あると感じられた。お互いの学校の良いところや改善すべき点を見つけてより良い学校制度の充実を図っていきたい。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

今回新たにわかったことはたくさんある。その中でも特に印象残っているのが交流した韓国の人達についてだ。

まずは、高陽国際高校の生徒があげられる。最初に日本にいるときに韓国の高校生について、毎日毎日朝早くから夜遅くまで勉強づけと聞いていた。だから、どんなに人間離れした人たちか、日本の高校生とかけ離れた人達だと思っていた。しかし、いざ話してみるととても頭はいいが年相応の普通の高校生たちだった。このことから、『百聞は一見にしかず』ということを実感した。

また、出国前に反日といった言葉をよく聞いたが、町で会う人は日本人である自分たちにとても親切だった。

これについて、意見交換会でメディアが盛んに煽り立てているからだという話になった。日本人でも嫌韓と言っている人はあまりおらず、逆にそういう風潮に疑問を持っている人が多いように、韓国の高校生も同じように考えていることが分かってよかった。

今回の韓国巡検では人との素晴らしい出会いがあった。そこから学ぶべきことは沢山ある。その学んだことをこれからの日韓の発展や、相互理解に活かしていきたい。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for the good time! I had many good experiences. I learned a lot from you.I respect you, because your Japanese was very fluently. I wanted to have more time to talk with you. Please come to Nagoya and our school, Asahigaoka, when you guys come to Japan! We will welcome! Then let's talk more about the economy, history, ours, and so on. I want to see you again, and I will study hard Korean and English to to talk with you.

１年　石塚　和香

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

韓国巡検二日目の夜、植民地時代に日本に標準時を合わせたためにまだ明るい夜に、私は高陽国際高校の生徒に初めて会った。話しかけるのをためらいそうだったが、挨拶をしないのは失礼だと思い、下手な韓国語で挨拶をした。挨拶は私が唯一知っている韓国語だった。相手は流暢な日本語で挨拶を返し、笑顔を見せるのも忘れなかったので、私は圧倒されるとともに、相手の温かい人柄を感じて安堵した。私が一番初めに韓国の生徒に出会って感じたのは、こういうことだった。

高陽国際高校の生徒たちは、コンピュータを扱うのにも慣れてい

て、多くの画像を交えながら学校紹介をしてくれた。そのときも日本語を使っていたので、本当に勉強熱心なのだなと思った。あとから聞いたことだが、日本語を第二、第三言語として履修する、あるいは自分で図書館に行き日本語のテキストを探し、自主学習を進めて語学力をつけたのだということだ。また、国際高校だからだろうか、英語も私たちより格段に上手に使いこなしていた。発音、イントネーション、ボキャブラリー、そして作文力の全てにおいて、私たちの上をいっていた。なぜかと問うてみたら、英語の授業でも、スピーキングやライティング、リーディング、ディスカッションなどに分かれて授業を行うのだということだった。私が英語で質問をすると、日本語で応答されるので、少し恥ずかしかった。

また、両国の学生生活の違いがはっきりとわかった。まず部活動だが、日本が授業後に毎日活動があるのに対し、韓国では隔週の金曜日にしかないという。立派なサッカーコートを持っているのに、サッカー部は部員が２人になってとうとう廃部になったらしい。毎日部活動をやっていたら、勉強ができないというのが理由らしい。スポーツ選手にならない人がスポーツに興じるのは、小学生のときまでということだった。日本では、部活動で教員の負担が大きくなり、部活動を休む日を定期的に設けようとする府があるくらいなのに。なぜ韓国の学生がそこまで勉強することに重きを置いているのかというと、それは韓国の受験制度と根本にある学歴社会のせいらしい。韓国の受験制度では、高校一年で入学してから最初の試験から、三年生になり卒業する最後の試験の成績まで、合格の是非に関わる。大きい試験は年に四回、小さい試験は月に１回あるという。その試験勉強のために、彼らは部活動の時間を自習に充てる。土日は家が近いものはそれぞれの家に帰るが、平日は四人一部屋の寮生活をしている。親たち、兄弟に会えなくて寂しくないかと聞いたら、小さい子どもではないのだから大丈夫だと笑われた。学生生活の多くを勉強に捧げて、高校生としての生活の楽しさを味わっていないように思える彼らだが、実際はとても楽しそうだった。勉強ができる快適な環境が整い、友人たちとの寮生活で、彼ら同士の仲はとても良いようだった。私の学校では、部活や行事に熱中しすぎて勉強に失敗する、あるいは勉強に没頭しすぎて、授業をないがしろに受けたりクラスでの行事に参加しなかったりする人がいるが、高陽国際高校にはそのどちらもないようだった。男女の仲がとても良くてうらやましいくらいだった。ただ、やはりずっと試験に追われているのは正直にいうと辛いときもあるというので、日本の入試制度のように、当日の試験の出来がウェイトを占める方式のほうが良いかと聞いたら、それはたった一日のコンディションによって左右されてしまうので、それも良くないといっていた。

彼らがそこまで大学受験に執心するのは、韓国に強く根付く学歴社会だ。まとめてSKYと呼ばれる韓国のスリートップの大学である、ソウル大学、高麗大学、延世大学に入学することが最大の目標であり、受からなければ良い生活は望めないという。それゆえ韓国では、若者の自殺者も多い。韓国には中堅企業が少なく、大手に入れなければ零細企業がほとんどである。また、日本のように職人文化がないため、技を身につけ身を立てるということも難しい。実際に国家公務員採用者の約70パーセント、司法試験合格者の約60パーセントがSKY出身者である。なので、韓国の学生たちは、浪人してでもSKYへの入学を目指す。そのために夜十時まで自習した後、さらに塾に行って夜中の二時まで勉強するということもあるという。そんなに勉強が好きなのかと聞くと、大学入試が終わったあとは、皆、夜の自習から逃げ出すのだと笑っていたので、少しほっとした。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

出発した時刻が予定していたよりも早いということで、貴族の古い屋敷がある公園へつれていってもらった。入園料が無料であり、ミョンドンの繁華街の一角にぽつんとあったので日本にはあまり見られない施設だと思った。屋敷は広大であるのに、きれいに整備されていたので、誰が管理しているのか不思議だった。

そのあと韓服（韓国の伝統的な民族衣装。女性の場合はチマチョゴリ、男性はパジチョゴリ）のレンタルをしている店につれていってもらった。ここにいくのはこちら側の強い要望だった。このように韓服をレンタルして韓国を見てまわるというのは、韓国の若い人たちの間でとても流行しているらしい。さまざまな色の上着とスカートがあったので、迷っていると、店の人が一着を選んで手早く着せてくれた。たっぷりと膨らんだ巻きスカートに、装飾がいろいろとついていて、とてもきれいだった。何よりも嬉しかったのは、韓国の学生たちも韓服を着てくれたことだ。同じ服を着ているだけで何か一体感が生まれた感じがした。また、撮影用にと渡された韓国の伝統的な帽子は、琉球王国のそれと赤い色や独特な形が酷似していて驚いた。日本にも似たような笠をかぶって踊りを披露する祭りがあることを思い出した。

韓服を着たまま、バスに乗り、大きな銅像がある広場まで移動した。その銅像は、朝鮮時代の王で、ハングル文字を考案するなど、現世にも伝わる偉大な功績を残した人物だという。その銅像の前で記念撮影をしていると、周辺にいた観光客の人たちに写真を一緒にとってほしいといわれた。私の隣に来た男性は、なれていない感じの韓国語で私に話しかけてきて、私が困った様子でいたので、高陽国際高校の生徒が彼女は日本人ですと伝えてくれた。すると男性は”I’m from Thailand.”と言った。そのとき写真を撮っている女性は、自分は中国から来たと、英語で言っていた。中国人、韓国人、タイ人、そして日本人がひとつの広場に集まっている瞬間で、身近なグローバル化を感じた。

その広場から移動しているときに、たくさんのポスターを見た。どれも2016年12月現在のパク・クネ政権を批判するものだった。大統領パク・クネの写真いりポスターがストリートに貼られていて、通っていく人たちが気にせずそれを踏んでいたので驚いた。そのことを高陽国際高校の生徒に聞くと、パク・クネ大統領の支持率は若年層の間では０パーセントに近いので、このようなポスターはいたるところにあるという。それでも踏むことを気にせずにはいられず、何とか避けようと気をとられていたので、何度もチマチョゴリの長いスカートにつまずいてしまった。

昼食は、トッポギを入れて作る鍋のレストランに連れて行ってもらった。高陽国際高校のメンバーは、鍋の味が私たちにとって辛すぎないか、しきりに心配していたが、連日、辛いものを食べていたので、大分慣れていて、大丈夫だった。それにしても韓国にいる間中、毎日キムチや唐辛子の漬物やコチュジャンという韓国の味噌などの辛いものが、毎食において出てきた。なぜだと思うかと聞いたら、寒いからではないかと言っていた。それでも、わさびの辛さは苦手だといっていた。確かに、唐辛子の辛さは身体が熱くなる感じがするが、わさびは鼻がつんとするだけで温まらない気がする。だから韓国の人々にはなじみが薄いのだろうか。

昼食をとっている際は気にしていなかったのだが、実は昼食後にはホテルに着くため指定された時間がせまっていた。けれども韓国の生徒たちはあせる様子をみせずお土産を買おうと言ったので、よくわからなかったが、日本側の生徒もその提案に賛同した。そしてお土産を買って韓服を返しに行ったら当然指定の時間に遅刻したので、双方叱られないか心配していた。

移動中、バスに乗っているときはずっと、「わかなさん、私の席に座って」と韓国の生徒たちがしきりに席に座るのをすすめてくれた。韓国のバスはなかなか運転が荒く、車内はとても揺れたので助かった。「わかなさん、チマチョゴリで、スカートだから」と言われて、あなたも同じ服を着ているのだから、それは譲ってもらう理由にはならないよと言いたかったが、うまく英語に訳せなかったので、ただありがとうといって黙っていた。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私が意見を考えたのは、朝鮮を植民地化したことがやむを得なかったとするかどうかだが、私はこのゼミに参加した当初の私が今では信じられない。私は初めてこのテーマを扱ったときの討論で、植民地化はやむをえなかったという意見を持っていた。しかしそれは全て、私の知識不足から来る考えなしの意見だった。日本の一部の若年層は、私のような単なる知識不足、それから日本がアメリカ軍から受けた占領時代は、日本が韓国に行ったそれとは違ってひどいものではなかったので、占領自体にあまり悪い印象を持っていないことなどが原因で、韓国への植民地化はやむを得ないと思っている。しかし私はこのSGHゼミに参加できたので、自分の考えを改めることが出来た。私は当時の日本が絶対悪、韓国は完全な被害者であると言いたいわけではないし、そう思っていない。日本が占領下においていたことで、韓国の社会はより近代的に変容したし、従軍慰安婦問題についても日本は莫大な慰留金を韓国に支払ってきた。日本国民としては、借金を抱える日本が、そんなに多額のお金を払ったのだから、もう反日を掲げ

るのをやめてほしいのだろう。

私もお金以外の面でなにが必要なのかわからなかった。以前SGHゼミに来られた韓国人留学生の方は、「国民全員が植民地化を悪かったと認め、申し訳ないという気持ちを見せることが必要」とおっしゃったが、それは現実的ではないと思った。そういう気持ちになることが不可能なのでは無く、それを表明する手段がわからなかった。だから意見交換会で、具体的にどのようなことを求めているのか質問してみた。相手側の生徒の答えは明瞭だった。日本の総理大臣が実際に慰安婦だった方々のもとに訪れて、直接謝罪をすることというのが、彼女の提案だった。しかしそれは、言うのは簡単だが、実現するのはかなり難しい。外国相手に日本の非を認めるような弱腰な態度を見せてはいけないという意見の人もきっといるだろう。私はまだ高校生なので、その人たちに立ち向かって意見を通すのは難しいが、自分の意見を持っていたいと思う。私には、国と国との関係で考えるのが、非常に筋違いなことに思える。日本国民を代表する人が、被害者個人に向かって謝るのだ。そこにナショナリズムは存在しない。韓国より日本が上だとか下だとかいう考えもない。

それから私たちは、これからの日本と韓国のことについても話し合った。議題は「グローバルパートナーとしての望ましい日韓関係のあり方について」だった。ここでの私の担当は、「日本のもの、韓国のもので惹かれるものはなにか？」というテーマだった。やはり両国ともに、食べ物の魅力が語られていたのは、さすがに高校生らしいなと思った。でも、そのあとは意外だった。韓国側から見ると、日本の道路は自転車にとってとても快適で、きれいに見えるらしい。確かに、日本の道路には総理大臣の顔写真いりポスターが貼られていてそれが自転車のタイヤに引っかかるなんていうことは無いので、快適なのかもしれない。韓国の車は運転が荒いというのは聞いていたとおりで、私たちが横断歩道を渡る際には、いつも男子学生が自動車をけん制してくれなければとても危険だった。歩行者でもこのようなのだから、スピードが出る自転車はもっと危ないだろう。韓国では交通事故が多くて問題になっているらしい。また、日本の地下鉄の駅には、たくさんの種類のものが売られていて良いと言っていた。これは、私が見た限りでは韓国も日本と同じ程度の品揃えがあると思ったので、共感はできなかった。

それから、韓国にはカンナムスタイルがあるとすごく誇らしげにいっていたが、日本ではあまりはやらなかったことを伝えると、少し元気を無くしていた。実はミョンドンの街にも、カンナムスタイル関連の製品が多数売っていた。だが、どれも売れ残っているように見えた。

また、整形についてどう思うかと聞いてみた。日本では親からもらった身体に傷をつけるなといわれるがどうかと言うと、女子はみな個人の自由だと口を揃えていっていた。まぶたを二重にする整形は、整形のうちに入らないらしい。あなたはやりましたかと聞くと、母にこの高校に合格したら二重にすると約束してもらっていたと言った。終始男子学生が無言だったのが印象的だった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

今回の巡検のスケジュールはとてもタイトで、多くの貴重な体験をさせていただいたので、ひとつにしぼるのは難しいのだが、やはり視覚に直接訴える展示がされていた、西大門刑務所歴史館は強く印象に残っている。

西大門刑務所歴史館では、主に日本の占領下のときに、朝鮮の思想犯とされた人々が投獄されたという。一度に約3000人も収監されていたころもあったそうだ。韓国では日本帝国主義時代と言われる植民地支配の中で、韓国の独立をめざしていた独立運動家や、植民地支配からの解放後に独裁政権に立ち向かった民主化を目指す運動家などが、ここで犠牲になって亡くなっていった。西大門刑務所歴史館は、展示館と、ハンセン病の患者を隔離するための舎を含む複数の獄舎、炊事場、死刑場などの施設から構成されている。

死刑場は当時の姿を今なおとどめている。壁の窓から中をのぞくと、そこには死刑執行者のためのベンチと、数々の運動家の首がかけられたロープがあり、そこだけ床が抜けるしくみで、首を吊られる人の様子を見たという。そのさらに奥には丸い門があり、中は暗くなっていた。ここは死刑が行われた事実を日本軍が隠蔽しようとして、亡くなった運動家たちの遺体を秘密裏に搬入するための秘密通路だという。この死刑場を見学する際に、ガイドの方が安重根の話をしてくださっていた。安重根は日本では伊藤博文を殺した暗殺者となっているが、韓国では英雄だという。中学のころ、夏休みの自由課題で、安重根について調べた生徒が、韓国人かとからかわれていたのを思い出した。

地下には拷問のための部屋がある。ここで日本の保安課庁は、韓国の独立運動家の取調べを行った。ここにはそのとき拷問で使用された用具がおいてあったり、拷問被害者の写真、それから実物大の人形を用いたり、拷問を受けていた人の様子が非常にわかりやすく展示されている。ずっと説明をしてくれていたガイドの方も、ここでは口数が少なくなっていた。小さな部屋の奥で血だらけで縮こまっている女性や、逆さに吊るされて拷問を受けている人形の鬼気迫った表情を見て、私は本当に目を覆いたかった。しかし、同時に、ここで目をそらしてはいけないと強く思った。出口のところには、拷問の道具のひとつがあって、体験できるようになっていた。掃除ロッカーを薄く、狭くしたようなつくりで、ここに閉じ込められるとずっとたっていなければならず、そのうち下半身に血が巡らなくなって、出されるころには立つこともままならないという。驚いたのはそこにいたのが小学生の子どもたちで、その拷問用具のなかに入って体験していたということだ。私は、日本でひめゆり平和記念資料館や対馬丸記念館などの歴史記念館を見学したことがあるが、どちらも訪問者たちは大人であり、観光客が多くいた。でも、この刑務所歴史館には、学校で連れて行かれるのではなく、親たちが地元の子どもたちを連れてくるようだ。地下から出るときに、ああ、地下で亡くなった人たちはどんなにかこの地上の光を浴びたかっただろうなと思った。歴史館を去るときに後ろを振り向くと、長く続くレンガ塀の前で、幼い子どもがあいかわらず楽しそうに記念撮影していた。

私はここで悲惨な歴史を学んだ。恐ろしいと思い、過去を変えることは出来ないが、過去から学ぶことはできるというガイドの方の言葉も、胸に刺さった。しかし、やはりナショナリズムを高揚させる施設に思えてしまう気持ちが、心の片隅にある。これは日本人だからなのだろうか。母国の絶対的な非を認めたくない気持ちが、そんな意識を生むのだろうか。私にはわからない。第三の目で見ることを心がけようと、日本にいるときは思ったが、実践するのは実は難しい。西大門刑務所歴史館の中にいるとき、私は悲惨な歴史だ、繰り返してはいけないために学ぶのだと思っている気持ちが大きかった。しかしほんの少しの劣等感というか、日本人である自分がこの歴史館にいる引け目を感じ、周囲の人の目を少なからず気にした。同時に、それに反発して、自分がやったことではないのだから、責められることはないと思いたい気持ちもあった。

それからまだ幼い子どもたちがわいわいとはしゃぎながら歴史館内で遊んでいる状況が、展示されているものとのギャップを浮き彫りにして、なんとも不気味な感じになっていた。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

今度韓国へ行くと伝えたとき、おおかたの大人にはまず開口一番に、気をつけなさいと言われた。何に気をつければいいのか、聞いても明瞭な答えは持っていない様子なのに、気をつけなさいと言われた。デモが怖いからというのは、韓国で行っているデモは多くが韓国政府に対する抗議のデモであり、武力を伴わないデモであるから、理由にはならないし、日本でも規模は違えどデモは行われる。大阪で見たヘイトスピーチの方がよほど過激で排除されるべきものだ。私に気をつけろといった人たちは、韓国人が少しでも歴史に関わることを話す際は、必ず歴史に関係することを言ってもいいですかと前置きするのをきっと知らない。靖国神社を参拝したときなどにニュースに出てきて、日本を批判する役人を見て、韓国は日本に対して嫌なイメージをもっていて、攻撃的だと思い込んでいるのだろう。

なぜ日本人と韓国人は、日本と韓国というくくりでものを考えるのだろうか。日本人でも百人いれば百様の生活を生きてきて、百様の考え方をするのに、韓国人を、韓国という国に住んでいるさまざまな人を、偏っているメディアの情報で決めてしまっていいのか。これは私が普段から疑問に思っていることであるが、人々をひとまとめにしてものを言うのは、本当に意味が無いと思う。先生は旭丘の生徒は自分で考える力があるとか、将来大成するとかというが、それがどうにも信じられない。なぜなら私が高校に入ってできた友達に、同じ能力をもち同じ考え方をする人はいないからだ。だから旭丘にいるからこうだ、１年７組の生徒だからこうだということは、本来誰にも言えないことのはずである。これは日本と韓国などという大きなくくりのとき

はなおさらのことである。
韓国で出来た友人に聞いたところによると、年配の人に、反日の空気は少なからず見られるらしい。しかしそれも一部の人のことであって、私が出会った韓国の高校生たちは、優しくて、団結力があって、好奇心旺盛で、勉強熱心な人が多かった。実際に韓国の学生とコミュニケーションをとるのとそうする前とでは、考え方がかなり変わった。今回の経験を通して、私は対話をすることの大切さを知った。現在の日本では、親世代の嫌韓が、子世代の思想にも影響を及ぼしてしまい、韓国への悪い印象が連鎖してしまっている。これを改善するために、具体的な案として、小中学校で外国語の授業で韓国の人とビデオ通話をすることが効果的ではないかと考えた。小学生なら、英語教育がまだ会話を行うのが可能ではないくらい不十分な段階であるから、日本に留学している方を招いて交流するのも良い。現状では、愛知からなら沖縄に行くよりも短時間でいけてしまうような隣国である韓国なのに、そこで生まれた人々との交流が、観光地で見かけるぐらいなのはあまりにも少ない。このSGHのような事業が、全ての学校に広まってほしい。私は受験生だった中学三年のときに旭丘がSGHに指定されていることを知り、五年という限られたSGH指定期間にこの学校に入学できたことを無駄にしたくなくて、春に審査を経て合格し、このゼミに参加することとなった。せっかく貴重な体験をさせてもらえたのだから、ここで学んだことを日本の友人にも広めていきたい。それが私たちに課せられた使命であると思う。
グローバル化が進む現代の社会で、隣国である韓国との関係を発展させていくことは、重要な課題である。今後、国際化が進んだら、韓国はますます日本にとって重要な存在になるだろう。そのような時代に、過去の歴史で現在の人々の関係が悪くならないようにするために、もっと相手のことを知りたい。パク・クネ政権に賛同するデモで叫んでいた人も、日本軍から暴行を受け亡くなった女性や子どものレリーフの前でハンカチを目元にやっていた高齢の女性も、日本の学生が好きだと言ってくれた高陽国際高校の学生も、みな隣国に住んでいる人だ。このように思い返すと本当にさまざまな人に会えたことがわかる。そして、大阪へ行ったときに話を聞かせてくださった、在日朝鮮人の方のように、日本と韓国の二カ国間で揺れる人もいる。だから決めつけてはいけないのだ。韓国人だから、日本人だからこうだと、束ねてはいけない。心の中にあるそういった偏見を取り払えたときこそ、日韓関係が進歩するときだ。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Dear my Korean friends
How are you doing, my Korean friends?
Hello from Japan I'm Ishizuka Wakana.
The time I spent with you in Korea seemed to be really short and be a dream.
That was the first time to visit Korea for me, but I want to go to Korea again hard.
You were kind and guided us gently.
You often spoke to me in fluent English.
Everyone tried to catch my unskillful English aggressively.
And I was surprised at the person who can speak Japanese.

Dear the members of group 5
On the way to go to the fieldwork, you often offered the seat to me though you are wearing　hanbok too.
I really appreciate it.
I have studied about Korea so far from April of this year and gotten a lot of knowledge. I think I'll also study in the future.
I'm looking forward to being able to meet you in the future.

Your friend,
2017/1　　Ishizuka Wakana

２年　加藤　杏菜

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会では、文化・学校・高校生について互いに紹介し知識を深めたほか、韓国の教育についても少し話を聞くことができました。
韓国の語学力が高いということは、日本でも知られたことと思いますが、実際に話してみて私は驚きました。英語をまるで自国の言葉であるかのように流暢に使いこなし、自分の意見を展開していました。また、日本でよく聞かれるカタカナ英語のようなものも一切なくとても綺麗な発音で、ネイティブのようだなと思いました。一方で私は、この交流会を含め今回の交流研修で幾度となく、伝えたいことが英語で出てこないというもどかしさに苛まれました。おそらく多くの日本人が、（街中で外国の方に話しかけられるといった場面で）このようなもどかしさを経験したことがあるのではないでしょうか。このもどかしさの一番不思議なところは、相手が話した英語は理解できるのに、いざ自分が話そうとするとうまく伝えられないところです。私は、これは個人の能力よりも教育が関係しているのではないかと考えました。そこで、韓国の高校生たちに韓国の語学教育について聞いてみました。
その中でも、日本とは違うなと感じたのは、学校の授業です。日本の授業では文法を学ぶのに対し、韓国の授業では、英語を書いたり読んだりといった授業のほかに、ディスカッションなど英語を用いて話すという授業があるそうです。これによって、言語と話すことが常にセットになっているといいます。高校生になると、第二外国語を学び始める人も多く、高陽国際高校ではスペイン語・中国語・日本語の中から１つ選択するそうです。
日本の学校教育では、言語を学ぶというインプットにかなり重点が置かれており、それを実用に移すというアウトプットが少し軽んじられていると、韓国の高校生の話を聞いて感じました。それが、韓国と日本の高校生の、英語が話せるか話せないかの違いを生んでいる１つの原因と考えられます。
また韓国では言語を学ぶ際に、その国の文化も同時に学ぶそうです。これは、グローバル化が進むにつれて求められるようになってきたブリッジ人材の育成に繋がることだと思います。ブリッジ人材になるには、国と国の文化的差異を把握している必要があるため、文化も同時に学ぶことはとても重要なことと言えます。
交流会を通して、グローバル化への適応においては、韓国は日本のかなり先を行っており、日本が見習うべきところがたくさんあると感じました。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークでは、南山韓屋村、世宗像、シンチョンを訪れました。
南山韓屋村では、韓国の伝統的な家屋「韓屋」を見学することができました。そこには前日にガイドさんに教えてもらった伝統的な暖房設備「オンドル」がやはりあって、雰囲気も日本家屋とは違うものがありました。
その後、みんなで韓国の伝統衣装である「韓服」、いわゆるチマチョゴリを着て出かけることになり、レンタル店で服を選んでいましたが、そこには色鮮やかで綺麗な韓服がずらりと並んでおり、とても迷ってしまいました。選ぶのに結構時間は掛かってしまったもののようやく韓服に着替え、世宗像の前で記念写真を撮りました。
世宗像は、大きな広場の中央で高くそびえ立ち、黄金色に輝いていました。そこからは、彼が行なった王道政治やハングルの創製が、いかに偉大なものとして国民に受け止められているかが感じられました。
シンチョンでは、昼食と買い物を楽しみました。昼食に食べたラーメンは日本のラーメンとは印象がかなり違いました。１つのお鍋にトッポギや野菜、麺など好きな具材を入れ、それをみんなで囲むというのが新鮮でした。味は辛かったですがとても美味しくて、ぜひまた食べたいと思いました。
このフィールドワークの中で最も印象に残ったのは、韓国人の世話好きで温かい一面です。韓国の高校生たちは、移動中、常にチマチョゴリに慣れていない私たちに気を配ってくれて、バスでは、日本語で「スカートだから座って」と言って席を譲ってくれました。またエスカレーターでも「スカートだから気をつけて」と言いながら、裾を持ち上げる仕草をして見せて、裾がはさまることがないように注意してくれました。さらに、私が必要なものがなくてとても困っていた時には、「買ってくるよ」と言って買ってきてくれるなど、親身になって助けてくれました。また交流した高校生だけじゃなく、街中の人達からも、日本ではあまり見られなくなった温かさが感じられました。チマチョゴリを着た日本人の私たちに気がついて「かわいいね」とにこやかに声を掛けてくださったり、帰りの地下鉄では、私が両手いっぱいに荷物を抱えているのを見て、荷物をまとめられるようにと女性が

紙袋をくださったりしました。韓国では、日本よりも人と人との距離感が近いと感じました。

元々あまり良いイメージを持てずにいた韓国ですが、フィールドワークを行う中で、韓国人の知らなかった素敵な一面を知ることができ、とても好感を持つことができました。また、少しでも相手のことを理解することで、その人の見え方が異なってくるということも肌で感じました。どんな場面においても、関係を築く上で、相互理解がいかに大切かを考えさせられたフィールドワークでした。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

私は意見交換会で自由貿易について話していく中で、コミュニケーションがいかに重要かを考えさせられました。というのも、自由貿易の交渉を含め、外交はコミュニケーションと切っても切れない関係にあるからです。

グローバル化が進められる中で、日本では自由貿易の動きが出てきました。韓国においても、2012年にアメリカとのFTA協定を発効するなど貿易の自由化の傾向があります。

私はこの米韓のFTA協定に関して、日本がTPPに参加した場合の参考になるかもしれないと思い、「韓国はアメリカとFTA協定を締結したが、それは果たしてすべきだったと思うか」と質問しました。すると「結果的には、するべきだった、しなきゃいけなかった」という答えが返ってきました。その理由としては、当時の大統領の関心、そして全世界的な風潮がグローバル化に向いていたこと、それゆえ、自国の扉を閉めていたら何も貿易ができないという状況に置かれていたことが挙げられるといいます。

しかしながら、「FTA協定を締結したことで、韓国側が損をする部分はもちろんあった」ということも言っていました。そういう部分で、例えば輸入する品目に対して少しでも損害が少なくなるように、韓国国内でも支援などの対策を考えるべきでしたが、政府からは特に支援もなく、またアメリカに押されたこともあり、「やってみよう」という形で協定は締結されました。ただ、その後の嵐というのが大変であり、様々なところで影響を及ぼしたそうです。だからもし、日本がTPPなどの協定を締結することになれば、韓国の例から得た教訓を生かして、もっと賢く自国の利益になるような部分で、協定を締結することができるはずです。

ところが、日本は昔から外交が得意ではなく、幾度となく失敗を繰り返してきました。外交では、自国の利益を最大化し、同様に相手国の利益も最大化するように努める必要があります。この時、相手のことも理解しつつ、自分の伝えたいことも伝えなければならないので、外交の根底にはいつもコミュニケーションが横たわっていると言っても過言ではないと思います。

日本では、人と人とのコミュニケーションについてきちんと学ぶことはしません。しかし、他の国々ではコミュニケーションについての授業があることが多いようです。韓国でも、そのような授業があるそうです。日本人が、意見を主張することにおいて外国人よりも消極的なのは、国民性によるものだと考えられがちですが、一概にそうとは言えないと私は考えます。ここで例を挙げるのは、小さい頃に海外で教育を受けた帰国子女の人たちは、日本で育った人たちよりも、比較的快活で自分の意見をはっきりと言う人が多いということです。これは、コミュニケーション能力においても、教育の力が大きく関わっている証拠だと考えられます。

日本には「言わずもがな」の、いわゆる空気を読むという独特のコミュニケーションスタイルが存在します。これは、日本人同士でコミュニケーションをとる場合には何ら問題はありませんが、外国人とのコミュニケーションではそうはいきません。日本で暮らしている限り、日本独特のコミュニケーションしか身につきません。私は韓国の高校生と話をして、日本でもコミュニケーション能力の育成にもっと力を入れるべきであると感じました。そうすることで将来、世界の様々な国と日本とが、対等に渡り合っていけるのではないかと思います。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

４日間の韓国巡検の中で最も楽しかったのは何かと聞かれれば、韓国の高校生との交流研修と答えるのですが、最も印象に残ったのは何かと聞かれれば、答えるのは１日目に訪れた戦争記念館と２日目に訪れた西大門刑務所歴史館です。

戦争記念館では建物の外に、テレビや本でしか見たことがないような戦車、飛行機、ミサイルなどがずらりと並べられており、とてつもない威圧感を放っていました。戦争ではそれらが実際に動いて、人々の暮らしを破壊していったのだと想像すると、ぞっとしました。また館内でも、ジオラマの展示や戦死者の遺骨発掘現場など、戦争の凄惨さを再現する展示が怖ろしかったです。このような直接的な展示は、日本ではなかなか見られないと思いました。後で先生に話を聞いたところ、このような展示があるのは、韓国が徴兵制をとっているが故にあまり戦争を否定することができないという背景があるからではないかとのことでした。

西大門刑務所歴史館の地下拷問室では、目を瞑りたくなるような酷い拷問の様子が、叫び声の音声とともに等身大の人形によって再現されていました。人を宙吊りにしたり、頭を唐辛子入りの水の中に沈めたりとどれもおぞましいものばかりでした。

このようなことが過去に現実にあったということを知り、とても胸が痛くなりましたし、また少なからぬ日本人が、日本が犯してしまったこのような過ちを知らないであろうことが、恥ずかしくも感じられました。

私がこの歴史館を訪れて最も衝撃を受けたことは、小学生にならないような子どもたちが、親に連れられてここを訪れていたことです。それだけ小さな頃からこのような怖ろしい展示のある施設を訪れていたら、反日感情が生まれるのも頷ける話だと思いました。もし私がそれくらいの年齢でこの歴史館を訪れていたとしたら、日本は敵であり悪者なんだ、ときっと潜在意識の中に刷り込まれてしまいそうです。私は、このような施設で幼い頃から刷り込まれた潜在意識は、今後日韓関係を向上させていく上での、思わぬ枷になってしまうのではないかと少し心配になりました。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

今回４日間の韓国巡検を通して、日本国内のテレビ・新聞・インターネットなどで目にする韓国と、実際にこの目でみる韓国とでは、受ける印象や雰囲気がかなり異なって感じられることが分かりました。

韓国へ訪れる前は、韓国人は気が強く性格がきつめであるという印象を持っていました。そのため、あまり意見を言うのが得意でない私は、韓国の高校生との交流研修に不安を感じていました。しかし、いざ関わってみると、優しくて気遣いがあり、とても世話好きだということが分かって、イメージとのギャップに少し驚きました。さらに、困った時にはすごく親身になってくれて、その優しさに私自身とても助けられました。一方で、はじめからこのような韓国人の温かさを知っていれば、韓国に対する印象はもっと違っていただろうにとも思いました。

それでは、なぜそのようなイメージのギャップが生まれてしまったのでしょうか。我々は海外のことを知ろうした時、その地に連絡のできる知人がいる場合以外は、情報の全てをメディアを介して仕入れることになります。それはつまり、我々が日本にいる限り、メディアというフィルターを通した情報からしか世界をみることができないということです。

また、韓国人が日本に対して抱くといわれる反日感情も、メディアの影響によるところが大きいはずです。韓国メディアが反日感情を煽るような報道をしているということも考えられますし、日本メディアに問題があるということも考えられます。例えば、日本の記者クラブ制度は閉鎖的な性格を持ち、それがあることによって、海外メディアの日本支局は少ないと言われています。これでは、日本から海外への情報発信の量も必然的に少なくなり、少ない情報からは日本のことを正しく理解してもらえず、現実からかけ離れたイメージを持たれてしまう恐れがあります。このことから、私はメディアに関する諸制度に見直しの余地があると考えます。また、制度だけでなく我々の意識の見直しの必要性も感じます。以前から言われていることではありますが、インターネットなどで提供される情報を鵜呑みにしない、そのような情報に左右されないという意識を持つことが重要だと感じました。私はこの４日間で、反日感情やその裏返しとしての嫌韓感情に捕らわれることの愚かさについて考えさせられました。凝り固まった思想から現実を見るのではなく、現実の人間一人ひとりを見てから物事を判断することの大切さを学ぶことができました。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for the interaction with us. I was able to have a

great time in Korea.

At present,relations between Korea and Japan are not very good, but I believe that it is improved if they promote interacting and understanding each other. I think improving the relations has been begun by young people like us.Both Korea and Japan have wonderful cultures, for example, music, foods, cosmetics, anime and so on. I hope, through those cultures, Korean and Japanese have a good impression of each other and establish a great relations.

Actually,I hadn't had a good impression of Korea, though I didn't know about Korea very well. However,when I met you and was touched by your kindness, I came to like Korean.The interaction was become a precious experience in my life. Thank you so much.

I'm looking forward to seeing you again.

【F班】

1年　豊田　優里

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流をした高揚国際高校の高校生は、みんな優しくて、明るかった。私たちが楽しめるように、色々考えて気を使ってくれた。私たちが楽しんでいるのを見て喜んでくれ、私たちが帰る時には悲しんでくれた。「日本人と韓国人」ではなく、同じ「高校生」であった。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

フィールドワークでは、チマチョゴリを着て写真を撮れるスタジオ、トッポギ専門店、カフェ、カカオフレンズという韓国版LINEのようなものの店に連れて行ってもらった。

チマチョゴリを着て写真が撮れるスタジオには色とりどりのチマチョゴリがずらっと並んでいて、その中から自分が好きなものを着せてもらう。私は緑のチョゴリとピンクのチマを着せてもらった。ちなみに、向こうの人たちはあまり「チマチョゴリ」とは呼ばずに「韓服（ハンプク）」と呼ぶそうだ。チマチョゴリは着物と比べるとはるかに着付けが楽で、動きにくいこともない。そして、着物が大人っぽく見えるのに対しチマチョゴリはかわいらしく見える気がする。中にパニエのようなものが入っていてふわっとなっているのがかわいかった。

トッポギ専門店では、様々な種類のトッポギとソースを好きにとって煮て食べる。トッポギは、中にチーズが入っているもの、丸が組み合わさった形のもの、ちくわのような形のものなど十種類ほどあった。ソースも、いくつもの辛さがあり、一番辛いものは唐辛子がごろごろ浮いていた。とてもおいしかった。日本ではそこまではやっていないため、あまり食べられないのが残念だ。また、おでんも置いてあり、おでんが有名だと聞いた時には驚いた。でも日本のおでんとはかなり違い、油揚げをじゃばらにして串に刺したものだけだった。最後にトッポギがなくなると、白いご飯を入れてソースと混ぜて食べた。どの国でも白いご飯を入れたり、パンにつけて食べたりと同じことが面白かった。

その後、カフェでソルビンという韓国では誰もが知っている、かき氷をもっと細かく滑らかにして、チョコレートやイチゴやきな粉をのせた食べ物をごちそうしてもらった。体を温めるために唐辛子の入った辛い物は食べるが、体を冷やしてしまうソルビンなようなものも食べるのだった。

最後はカカオフレンズショップという、日本でいうLINEのキャラクターグッズを売っているお店に連れて行ってもらった。日本ではあまり有名ではないが、韓国の人にとったら「まさに韓国」というものなのだろう。ちなみにそこが、私が訪れた韓国のところの中で一番混んでいた気がする。

韓国の高校生たちは、私たちが楽しめるようにルートを色々考えてくれ、私たちが楽しんでいるかずっと気にかけてくれていた。そして、韓国の高校生たちが私たちを心から歓迎してくれていると感じた。そのことがとても嬉しかった。そして、私たちは、同じ人間なのだと強く感じた。私たちはみんな同じなのだということに気づけた韓国巡検だった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

高陽国際高校の生徒たちとの意見交換会では、ただただ自分の知識不足と英語力のなさを感じた。どの事柄についても表面しか知らないため質問されたら答えられない。もっともっとたくさんの本を読んで知識を深めればよかったと後悔した。そして英語力。特に自分の語彙が少なすぎることを痛感させられた。いくら相手の言うことを聞き取れても、聞き返しても、分からない言葉があるから何を言っているのかわからない。多少知らない単語があっても聞き返せばよいと思っていたが、単語の意味を説明するのは案外難しいことだった。そして自分から伝えるにも、いくら丁寧に発音したところで語彙がなければ全く伝えられない。自分の英語力のなさのせいで伝えたいことが伝えられなかったことがとても悔しかった。英語は基本さえできていれば、あとはジェスチャーや片言英語で意思疎通はできるから大丈夫という話を聞く。しかし、それでは簡単なコミュニケーションはできたとしても少し内容のあることを話そうとすると全く役に立たなくなるということを思い知った。英語はただの道具であるが、その道具がなければ何もできなかった。

私が話し合いを通して一番思ったことは、私たちはメディアに踊らされているということだ。私たちの反韓、反日を一番煽っているのはメディアではないかと強く感じた。メディアだって企業だから利益を求め、視聴率を上げようとする。もちろん、反韓、反日の報道をすることで視聴率が高くなることは根本的な大事な問題だ。しかしその前に、その報道を真に受けないことが私たちには求められている。私たちは、メディアの視聴率を上げるための報道にまんまとひっかかり、互いに現実とは違うところで、お互いを嫌いになっている。自分の頭でよく考えもせず鵜呑みにしていて、とても馬鹿らしいことだ。メディアを信用せずにまず自分の頭で考えなければいけない。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

一番興味深かったことは、日本と韓国の街並みが似ているようで違ったということだ。日本も韓国もヨーロッパのように石灰の白い壁や統一された赤い屋根があるわけではないし、道路も石畳ではないし通行人も日本人とほとんど見分けがつかない。けれどもなんとなく違った。

まず、韓国の方が日本よりも黒っぽい。車道のコンクリートの色は日本よりも黒く、建物も黒系のものがほとんどだ。日本に帰ってきてから気が付いたが、日本では白っぽい建物の方が多い。

二つ目としては、人通りがとても少なく静かで落ち着いている。混雑していて身動きが取れないような場所は一か所もなかった。朝八時ごろホテルの周りを散歩したが、数えるほどしか人はいない。駅の改札も、日本のように切符を通すと一瞬でバーが開く式ではなく、遊園地に入る時の門のように一方向にしか回らない棒を自分で押して回して入る式であった。またマナカのような電子マネーも感度が悪い。日本の駅がそうだったら時間がかかり混雑して大変なことになっているだろう。ソウルは首都だから日本でいえば東京のはずだが、東京とは全く違った。首都と言えば東京のようにごみごみしているのが普通だと思っていたが、以前フィンランドに旅行した時も静かでのんびりしていたから、もしかしたら東京が特殊なのかもしれない。

三つ目としては、日本よりもごみが多い。煙草の吸殻はいたるところに落ちていた。またチラシやシールがこびりついているところがたくさんある。これには、チラシを配っている人が多いことも関係しているかもしれない。

四つ目として、建物一つ一つが何となく小さい。ペンシル型住宅とまではいかないが、それに近いイメージだ。そして建物と建物の間の距離が狭い。建物がごちゃごちゃしているが、人通りも少なく静かで色も落ち着いている町並みはとても楽しかったし好きになった。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

韓国巡検で一番感じたこと、それは、みんな同じだということ。どこの国の人も、住んでいる所と、言葉と、文化が違うだけで同じ人間だということだ。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Thank you for everything about past three days. It will become one of my best experiences in my life! I really appreciate for making such a nice plan. The chima-chogori was so colorful and dressy!

The Toppogi was really delicious. I think I could guess way do

many Korean love spicy food! I wanna have Toppogi again, but I can’t find it in Japan…

The performance of traditional instrument and K-pop dancing and Tekondo were impressive! I love your school tradition of high tension, too!! My Japanese friends were surprised to hair your scream!!

I miss you guys. Let’s keep in touch with each other!

１年　佐々木もなみ

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会は、私たちが泊まったTマークホテルの地下の宴会場で行われた。交流会の日は、1日ソウル市内研修で朝鮮の文化や歴史を学んだ。そのため少し疲れていたが、交流会の会場へ着いたらすぐに疲れが吹き飛んだ。私が会場へ着いた時にはすでに、ほとんどの高陽国際高校の高校生が着席して、それぞれ韓国語で会話をしていたからだ。そして、疲れの代わりに緊張が襲ってきた。そして、私には一つ心配していたことがある。それはしっかりと会話をすることができるかということである。私は、英語が得意な方ではない。韓国の子達はみんな英語がとてもできると事前に聞いていたため、私ができない事で会話ができないかもしれないと思ったのである。しかしそんな心配は、自己紹介や、学校紹介、文化紹介そしてその間の時間に必要ないことが分かった。韓国の子達はみんな、日本語がペラペラだったのだ。私は安心した反面、自分の言語力の低さが恥ずかしいと感じた。食事をしながら楽しく会話ができ、次の日からの交流研修が楽しみになった交流会であった。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私のグループのフィールドワークの流れは、韓服（チマチョゴリ）を着に行き、その後昼ごはんを食べ、弘大を散策だった。

1.韓服(チマチョゴリ)

明洞にある写真館で韓服を着た。私は、韓国へ来たからにはぜひ、韓服を着たいと思っていたのでとても楽しかった。はじめに、それぞれ自分の好みの韓服を選び着せてもらった。わたしは韓国ドラマなどで韓服を着ているのを見たことがあり、日本でいう着物みたいなものと感じていた。そのため、「着るのに時間がかかるのかな」とか「着方が複雑そうだな」と思っていた。しかし、韓服はとても簡単な作りでとても早く着ることができた。みんなが着た後は写真を撮った。はじめ、写真館と言われていたため、みんなで写真を数枚撮ってもらい終了かなと思っていた。しかし、そうではなく自分たちで自分たちの好きなように写真が撮れる場所だった。写真館の中は、朝鮮時代風のセットになっていた。例えば、韓国ドラマでよく見る貴族の女の人が座っているソファーと座布団の中間のようなものなどです。時代にタイムスリップしたような空間で私たちはたくさん写真を撮った。剣豪になりきってみたり、お金持ちの女の人になりきってみたり、勉強をしている感じを出してみたり…といろいろなシチュエーションで撮った。グループのいろいろな人と写真を撮り、大切な思い出兼、宝物がたくさんできた。

2.昼ごはん

昼ごはんは弘大にあるトッポギのお店に行った。なんとバイキング形式のトッポギのお店だった。自分の食べたい具材を持ってきて、食べたい辛さのスープにして食べた。日本では聞いたことがなかったので新鮮だった。3〜4人で１つのテーブルを囲んで食べ、一気に心が近づいたように感じた。ごはんを食べながら、これから行く場所や韓国で流行っている日本のもの、逆に日本で流行っている韓国のものなどを話し合った。

3.弘大

昼ごはんを食べた後韓国のかき氷で、今の日本でも話題の「パッピンス」をなんと、韓国の子達に奢ってもらった。みんなできな粉、いちご、チョコレートの３つを分け合って食べた。山盛りだったかき氷が一気に減っていき、みんなで笑いあって楽しく食べることができた。

その後、カカオショップへ行った。日本ではLINEはほとんどの子が利用しており、LINEのキャラクターは一気である。LINEは元々韓国からきたものだから韓国でもLINEが流行っていると思っていたが、韓国ではKakaoTalkが日本でいうLINEのようなもので、KakaoTalkのキャラクターは韓国の学生にとても人気があるらしい。実際、カカオショップの中はたくさんの人で溢れており、レジに列ができるほどであった。またよく見ると、一緒に交流していた韓国の子達はみんなKakaoTalk のキャラクターのキーホルダーをもっていた。韓国のものはよく日本でも流行ったりするが、日本に伝わってきているものはほんの一部なんだなと思った。韓国でどのようなものが流行っているかは、ファッション系統はよく伝わってくるがそれ以外はあまり伝わってこないので新鮮でよかった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会ではお互いしっかり意見が言え、話し合うことができたと思う。正直、Aの特に歴史問題については韓国サイドと日本サイドで意見が全然違っていたりして感情的になりかけた時もあった。しかし、お互いに少しずつ相手に伝えようとし、完全に納得まではいかないかもしれないが、ある程度理解するところまでいくことができたと思う。共通の問題については意見が一致したりしてさらに良くするにはどのようにすれば良いかまで、細かいところまで話すことができたものもあった。

私がこの意見交換会で感じたことは２つある。１つ目は、知識、言語力など自分の能力のなさである。特に歴史問題では韓国、日本、お互いにとって譲れない部分があり、また認識が真逆と言って良いほどくい違っていた部分が多々あった。そんな時、なんとなくは分かっているのだけれど、曖昧で上手く伝えられなかったり、韓国側の日本と違う認識を上手く韓国の子達に伝えられなかったりした場面があった。また、意見交換会は英語で言ったため日本語以上に苦戦した。発音が違っていたり、言いたいことを表現できなかったりした。そういう時、韓国の子が聞き返してくれたり、教えてくれたりと、とても助けられた。

２つ目は、時間が足りないということだ。はじめ、２時間半は長すぎると思っていた。しかし実際は全く違い、倍の時間があっても話し尽くせない程だった。このような両国の高校生が話す機会は滅多にないのであるだけ良いと思ったが、それにしても足りないと思った。もっと時間があれば、より話をより深くできたと思わされざるを得なかった。

今回、意見交換会をしてもっと自国の歴史に興味を持とう、そして正確に知ろうとしよう、他国と自国の両方に関わりがある歴史ならば、自国だけでなく相手国の歴史も知ろうとしようと思った。自分が知らないことが多い、知識不足ゆえに相手に正確にはっきりと伝えることができないもどかしさを持った。そしてこの意見交換会で学んだ「知識はどれだけあっても足りない」ということを忘れずこれからに生かしたいと思った。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私が巡検先で最も印象に残ったのは、西大門刑務所歴史館である。日本が韓国含め朝鮮に対し酷いことをした、ということは知っていたし、具体的なこともある程度は知っていたつもりでいた。しかし、実際に歴史館では模型でリアルに表現されていた。拷問の様子の模型を見て衝撃を受けた。人を人として扱っていない、そう感じた。意見交換会で「日本が朝鮮を植民地にしたのはやむを得なかったと思うか」という題目があった。この題目をグループで話し合った時、１人以外の全員がやむを得なかったと考えていた。ここから、日本の大部分の人もそう考えていると考えられる。しかし、日本が韓国にしたことはあまりに酷く、考えを改めるのに十分な程だった。時代の風潮というものがあるからとだけでは言い切ることができない程だった。これは本当に「人」がしたことだろうかと思わざるを得ないものだった。私は日本人の多くの人に西大門刑務所歴史館へ行ってもらいたい。西大門刑務所歴史館でなくても良い、日本人がしたことをしっかりと知ってもらいたいと思った。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

今回の巡検を終えて新たに分かったことはたくさんある。その中でも自分の能力のなさをものすごく思い知らされた。その中でも特に、（１）知識、（２）言語力、（３）コミュニケーション能力が私には全然足りていないと思わされた。これらを思い知らされたのは、はじめの交流会、そして意見交換会である。（３）は私が元々苦手としていて、初対面の相手とすぐに話すことができない。どんな話題で話せば良いか、どのような口調で話せば良いかなどと考えてしまい、全然話せないのだ。また、せっかく話せたとしても上手く続けさせることができないということがよくある。今回は韓国の子達にものすごく助

けられた。私が話せなくてもいろいろな話題を振って、とても話しやすくしてくれた。住んでいる国も言語も違うのに相手（私）に合わせて日本語で話してくれた。このようなことができるのは本当にすごいことだと思う。そして、そんな人になりたい、と切に思った。（1）（2）についてはすごい自分が知識を持っているなどとは思っていなかった。けれど、それ以上の自分の出来なささを思い知らされてもっと努力しよう、もっと知識を得ることに貪欲になりたいと思った。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

I had a great time in Korea from December 17th to 19th.

In first day,I was really surprised that you are very good at speaking Japanese. You ware very friendly and spoke to me a lot, which made me happy.

In second day, I was satisfied with the plan which you made. I had wanted to put on Chinachogori before I visited Korea. So, I that was wonderful experience for me. I was very happy when you bought me Patbingsu and ate together.

In final day, your high school is very big and fashionable and your school uniform is very very cute ,so I envy you. All your performances were very cool.

It was my precious experience to discuss the problems which both Japan and Korea have in common. I hope that I will meet you again. Thank you very much.

1年　岩田　純怜

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

交流会では日本人生徒と韓国人生徒が交互に座り、一緒に夕食を食べながら自己紹介や、事前に準備してきた学校紹介、文化紹介などを行った。発表を行う順番を日本語で提案してくれたり、こちらのたどたどしい英語での問いかけに対して日本語で答えてくれたりなど、高陽生の日本語を使いこなす様子に驚いた。それは彼らの圧倒的な努力の賜物だと思うし、交流するまでは彼らの長すぎる勉強時間に対して疑問しかなかったが、多言語を操り、知識も深く、人柄も素敵な彼らとの交流を通して考えを改めさせられた。日本の多くの高校生が英語など母国語以外の言語を高陽生のように使いこなすことができないのに対し、彼らは英語、日本語、そしてもう一つスペイン語などを選択して、どれもものにしているというから驚きだった。もちろん中学時代から独学で日本語を学んでいる子もいたが、高校の授業だけで勉強した子もいるので、授業の質と勉強量、意識の高さが日本と大きく違うことを感じた。

彼らが日本語を話せるため本当に助かったと思ったのは、意思の疎通に困らず話したいことを話せたという点だ。言語の壁を乗り越え、同じ土俵に立ってしまえば高校生同士話が弾んだ。英語を使って会話をした時にはとても戸惑い、母国語の異なる人とのコミュニケーションツールとしての言語の大切さを痛感した。また、安倍政権の支持率や、彼らが好きな日本のアニメやアイドルの日本での評価など、正確に答えたいが知識不足な話題が出た時、自国の政治事情、文化についても知識があると会話に役立ったと思う。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私たちは、前日の交流会で高陽生が提案してくれた韓服の試着体験をするために、ホテルの最寄り、忠武路駅から明洞駅まで一駅移動した。明洞には至る所に韓服を試着できる店があり、毎日多くの外国人観光客が訪れる。それもあって日本語を話せる店員や日本語表示が多かった。自分が着る服を選ぶ際、伝統では身分の違いで服装が少し異なること、男性用の韓服の仕様の違いなどを店員さんに教えていただいた。みんなで写真を撮って楽しみ、韓国の伝統文化に触れる事が出来たとても充実した時間だった。

その後、弘大入口駅から徒歩５分の場所にある、韓国の高校生にも人気だというトッポギ食べ放題のお店で昼食をとった。バイキング形式で具材をお皿に取り、自分の机で一つの鍋に入れてみんなで食べるという形式は、日本の鍋文化と一見違っているが良く似ているところもあり興味深かった。

その後、高陽生がSULBINGという日本でも有名な人気かき氷店に連れて行ってくれた。大阪巡検の時、コリアンタウンで食べたパッピンスより、こちらの方が味付けが日本のかき氷に近かった気がする。その日の店内は空いていたが、普段は行列ができるほどの人気だと聞き、韓国でも日本と同様、かき氷は多くの人に愛されており、食文化はやっぱり似ているなあと思った。その後は大通りの、韓国でユーザーの多いカカオトークのキャラクターグッズを売っているお店に行ったのだが、高陽生から聞いていた通り、とても混雑していて店の前には列ができていた。外国人観光客だけでなく、見ていると韓国人の若い女性も客の半分以上はいた気がする。日本ではキャラ物のグッズを街で腕や頭に身につけることはあまりないが、高陽生も周りの韓国人も多くの人がそうしていたので、日本人との感覚の違いがあった。というより、キャラクターが韓国の若い世代の間で絶大な人気があるのだと思う。キャラクターの一つに”MUJI”というものがあるのだが、日本語では”無地”は何もない柄のことだと高陽生に教えてあげると、韓国語でもそうだと言われ驚いた。思いがけない共通点に親近感が湧いた。

街を歩いていると、中年の男性が物乞いをしているのを何度か見かけた。その中でも明洞では両足のない男性もいらっしゃった。日本の繁華街ではこのような光景はなかなか見かけないので少し驚いてしまったが、高陽生によると韓国ではよく目にする光景だそうだ。

そして、駅の日本との違いに最も驚いた。構内にはガスマスクが設置されており、普段の平和な様子に忘れかけていたが、未だ戦争中であることを思い出した。他にもベルを鳴らしながら行う募金活動や昼でも活発な飲食店の客引き、店の定休日に旧正月が含まれていることなど、街は私たちの目に新鮮に映るもので溢れていた。また、日本のコリアンタウンに比べて出店の食べ物の値段が低かったり、私たちがイメージする韓国文化だけでなく、例えば私たちが訪れた弘大だと美術学部が有名な弘益大学の近くの街なだけあり、アートでおしゃれなお店を見かけられて、その街特有の魅力も感じることができたのが良かった。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

事前に相手の意見文を送っていただいて準備もしていたため、相手に聞きたいことや、自分や班としての意見は確立できていた。しかし、英語での意見交換に戸惑い、なかなか全部を話すことは出来なかったのが個人としての反省点だ。だが、班の先輩や高陽生の日本語に助けられ、全体としては深い話し合いができ、テーマ以外の話題にも積極的に意見交換をできたと思う。

特に旭丘側が知りたかった「謝罪と賠償を済ませた今、韓国人は何について納得していないのか」を全てではないが知れたことは良かったと思う。例えば日本政府が謝罪をするときにしばしば用いられる「遺憾」という言葉。「思い通りでなく残念なこと」という第三者目線でのニュアンスから、当事者としての自覚の無さが伝わり、良くないのだそうだ。また、賠償についても国民によく知られていないものもあり、原因はメディアなのかと考えるとともに、日本でも注意が必要だと感じた。歴史問題についてはネガティブな話になるかと思いきや、植民地支配という観点だけではなく、友好条約を結んでどのように関係が改善していったかというポジティブな視点での意見も聞けた。

高陽生から聞いた話は、自分が初めて知ったことも多かった。韓国ではかつて高句麗の地域だった白頭山が中国との間で領土問題になっているそうだ。竹島問題の話題の時には私たちに遠慮してか自国の領土だと言い切らなかった高陽生も、白頭山の話題の時は「中国が高句麗の歴史を自分のものにしようとしている」と、どの生徒もその領土問題に対して怒りを見せていたように見えた。また、韓国人は定年よりも早く退職させられると聞いていたので、本当にそうなのかを聞いてみると、「そんなこともない」と言われ驚いた。はたしてそれは教育水準の高い（＝所得の高い）高陽生の親だけなのか、それとも本当に定年まで働ける人が増えたのか、実際のところはわからないが、直接話を聞いて、自分が知っていると思い込んでいたことが必ずしも現実と一致する訳ではないということも学べた。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私の中で最も印象に残った場所は西大門刑務所歴史館だ。私たちは日本にいると、戦争の話といえばメディアでも専ら被害を受けたことばかりが注目されがちであり、日本が朝鮮半島を植民地支配したこと、朝鮮の方々が経験した苦痛はなかなか身をもって知る機会がない。しかし私はこの歴史館を訪れて、まずその敷地の想像以上の広さに驚き、同時にかつて朝鮮を力で支配し、生活を破壊して絶対的に日

本へ服従させようとしていた日本の暴圧ぶりを目に見えるように感じた。

私たちは展示館、慟哭のポプラ、死刑場、屍躯門を見学したのだが、中でも展示館地下の拷問室が特に強く印象に残っていて、地下に降りた途端薄暗くて狭くゾッとしてしまったのをよく覚えている。リアルな蝋人形から拷問の残虐さが伝わり、恐ろしさとともに当時の日本人が行なった行為は決して許されないことだと再認識し、そして韓国人が見たら確実に一度は日本に対し悪印象を持ってしまうであろう人形によって、残虐な行為をしたということを伝え続けられていることから、日本が当時のことを謝罪をしてもなかなか受け入れられない理由が少し理解できた気がした。周りを見ると、韓国人の小学生くらいの子供たちも見学に来ていたので驚いた。教育に悪いとか、反日感情を煽るとかを言いたい訳ではないが、あの残虐な拷問の様子の展示は、まだ幼い彼らの目にはどう映るのかとても気になってしまった。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

私の中で、巡検に行く前後で韓国に対する印象と理解度が大きく変化したことが、今回の収穫だと思っている。日本も韓国も同じくらい発展していて教育水準も高く、治安が良い。そんなイメージで臨んだ韓国巡検だったが、明洞などの外国人観光客に焦点を当てた商業地への力の入れ方や外国語表示や他言語を操る店員の多さ、そして高陽生と交流して肌で感じた語学やコミュニケーション能力の高さと教育への意識の高さから、少なくとも日本よりはグローバル化への対応が進んでいて、世界に目を向けようとしていることがよく分かった。

また、この時期に巡検に行けたおかげで、街ではデモや朴政権への批判が書かれた張り紙など、珍しいものを見ることができた。高陽生も班員全員が朴政権を支持していないと言っていたことでも、今の朴政権の支持率の低さを実感した。

４日間、韓国という外国にいても不便を感じず生活できたのは、日本語がよく通じ、交通機関や食文化など日本と似ている点が多かったことのおかげもあると思うが、気候はやはり日本とは違うことを感じずにはいられなかった。池一面が凍るほどの寒さで、とても乾燥していた。ちょうど風邪気味だった私には酷な気候だったのだが、咳をしている私を見て、高陽生が背中をさすってくれたのが印象に残っている。国は違えど咳をしている人にする行為は日本と同じで、言葉はなくても気持ちを感じることができたのが嬉しかった。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

実は、私はあなたたちに会うまでは韓国人のことを少し怖いと思っていた。なぜなら日本でしょっちゅうテレビで韓国での過激な反日デモや韓国人の反日のコメントなどを見ていたからだ。しかしそんな不安をあなたたちが払拭してくれた。

日本人の取り柄は自分で言うのもなんだが、親切なところだと思っていた。しかしあなたたちの方が優しく明るく親切で、おまけに優秀で、見習いたいなと思った。それにあなたたちは私たちに韓国の魅力をたくさん教えてくれた。おかげで韓国のことが大好きになった。

そして、私たちは意見交換会という機会があれば、私たちは一度国籍を忘れてともに考えて問題解決に向けて協力できることも証明された。

今回の巡検はあなたたちなしでは何もやり遂げることはできなかったと思う。本当にありがとう。またどこかで会いましょう。

英文

To tell you the truth,I had been afraid of Korean people a little before I met you. Because I had seen the anti-Japan movement and Korean opinion about anti-Japan on TV several times. But, you swept away my anxiety.

I'm embarrassed to say by myself,but I think the merit of Japanese people is kindness. But,you are more kindly, brightly and wiser than us. I thought I'd like to follow that. You as well as that told us much Korean charm. Thanks to you,I become fond of a Korea.

And if there even was a chance of discussion, we forgot the nationality once, and we also proved to be able to think and cooperate for problem solving together.

I think I could not accomplish this rounds of inspection without you. Thank you very much. See you again!

２年　田中　茉凜

（１）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

去年に引き続き二度目ということもあり、私は外国の生徒と話すことに関してはそんなに緊張していなかったが、相手方の流暢な日本語には少し気後れしてしまった。いくら日本語を専攻しているとはいえ、日本のアニメやアイドルを挙げながらあれほどの親日感情を示されると、こちらもせめてメモ無しで韓国語の自己紹介が出来るくらいの準備をしておくべきだったと少し反省している。しかも彼らは英語も勿論堪能で三つの言語が話せるのに、こちらは英語ですら片言なので去年同様、恥ずかしくなった。実は私の中でこの言語についての思いが一番大きかったのだが、勿論他にも感じたことは沢山あったので述べたいと思う。

一つはやはり当たり前のことだが、彼らもそれぞれ個性を持っているということだ。韓国人はよく感情的になりやすいと言われるが、それはあくまで一部の人であるということを再確認した。私の左隣に座っていた子はとても無邪気で明るくて声の大きい子だったので（勿論とても親切だった）、日本人に比べてやはり主張のはっきりとした子が多いのかと思いきや、右隣の子は反対にとても静かでシャイな子だった。かと思えば正面で韓国人の先生と生徒が大声で話しているし、やっぱり人は一括りに捉えてはいけないと思った。班の皆は全員がとても親切で、日本語で丁寧に学校や文化を紹介してくれた。私はデモの報道などを受けて少し韓国人に対して悪感情を抱いていたが、それはもう交流会で一部の親日生徒と話しただけだったが、ほとんどなくなっていた。

もう一つ感じたことといえば、本当に韓国の生徒は勤勉だということだ。夜の11時から自習を始めるというのには驚いた。寝ない日も頻繁にあるらしい。そんな生活をよく送れるなあと驚きながらも、心底彼らを尊敬した。実際親によると、親が学生だった頃は韓国の英語水準は日本より全然低かったという。しかし今となっては日本はとっくに抜かれてしまった。それが彼らの努力を物語っている気がする。けれども、そんな生活リズムを若いころから繰り返していたら、心身に悪影響を及ぼすのではないかと思ったが、意外と彼らは背が高く元気がいい。もう少し彼らの食生活とか健康管理について深く質問出来たらよかったと思う。

（２）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と、感じたこと

彼らは事前に二つのプランを用意してくれていた。一つは韓国の名所の雰囲気を味わえるトリックアート展プランで、もう一つが韓国の伝統衣装を試着できるプランだ。勿論双方とも魅力的だったのだが、日本でチマチョゴリを着ることはそうないだろうと、後者を選んだ。そのプランは試着ができるお店に行った後仁寺洞にあるトッポギ食べ放題の店で昼食をとり、最後に今若者に大人気のお勧めのショップに案内してもらうという内容だった。韓国人側の生徒さんの一人が寝坊で遅刻するといったトラブルから始まった私たちの旅だったが、彼らの丁寧な解説や案内のおかげでとても韓国文化を満喫することができた。

初めに体験したチマチョゴリの試着だが、そのお店はというとホテルのすぐそばの明洞にあった。他のグループも明洞で同じような体験をしたと言っていたので、おそらく観光客向けにそういった店が明洞には沢山あるのだろう。料金は二万ウォンと、日本に比べてコストパフォーマンスが高かった。日本語の達者なスタッフが手早く着せてくれた人生初のチマチョゴリはスカートの裾が気を付けていないと躓いてしまうくらい長かったが、それくらいサイズにゆとりがあって意外に動きやすかった。そして服は自ら好みのものを選べるのだが、平民（値段によって華やかさが選べる。ちなみに平民は一番安い）のものでさえどれもこれも真っ赤や黄色などとても派手だった。スカートの中が膨らむようになっていたり、一般人でも派手な色を着たりするのは、日本人の和装との異なる点だと思った。

次に案内してくれたのは弘大にあるトッポギのレストランだ。当初私たちは昼食にトッポギを食べに行くとしか聞いていなかったので、食べ放題と知った時は、トッポギに食べ放題があるのかと驚いた。各

テーブルに用意された鍋にお好みのスープを自分で注ぎ、生のトッポギやその他名の知れぬ麺や餅を各自で煮る形式をとっていて、更に〆に最後に残ったスープにご飯を入れるらしい。聞くとそれは韓国の鍋料理のようなもので、トッポギも簡単に手作りできるらしく、家でも普通に作るという。ただ胃にずっしりとくるのでそんなに沢山は食べられなかった…。その後スイーツは別腹ということで何と韓国人生徒さんがパッピンスというかき氷を奢ってくれた。ふわふわで、いつか私が日本にもお店を展開すると約束してしまうくらい、絶品だった。

最後に連れて行ってくれたのは、韓国でよく使われているチャットアプリ「カカオトーク」のグッズショップであるカカオフレンズだ。日本で多く使われているＬＩＮＥは韓国に親会社（ＮＡＶＥＲ）を持つので、てっきり韓国でもそうかと思っていたが、実際はカカオトークの方がはるかにメジャーで、チャットアプリ業界の競争の激しさを実感した。そしてカカオフレンズはとても混雑しており、こんなに混んでいるグッズショップは日本でも見たことがないと同じグループの子と話していた。結局お土産は買えなかったが（正確に言えば、行列を見て買うのを諦めた）、韓国で人気のキャラクターを知れてうれしかった。

最後に韓国を探検してみてもう一つ思ったことがある。近代的な地下鉄だ。去年訪れた台湾と同じ形式でホームには絶対に人が落ちないようになっていた。あれは日本でも一刻も早く実現してほしい。その一方で改札は古いタイプのものだったので、疑問が幾分か残ったが、韓国人の友達とはFacebookを通していつでも連絡できるので、また尋ねてみたいと思う。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会の前のフィールドワークで、どちらの学校の生徒も頻りに「意見交換会が憂鬱だ」といった内容の言葉を漏らしていた。その理由のほとんどが、せっかく一緒に韓国の街を散策して打ち解けたこの雰囲気を、歴史認識問題のようなシリアスな議論で壊したくないということだった。これは、若者の中でも歴史認識問題は日韓関係を悪化させる一つの大きな要因として捉えられていることを証明していた。しかし私は反対に、半日にも満たない短い交流で仲良くなれたことが、我々がこの問題を解決するに当たって十分に協力できるという確信を持たせてくれた。

さぁいよいよ本番だが、自分に、これはディベートじゃない、冷静に、客観的になれとずっと言い聞かせていた。感情的になった途端、ミーティング自体がお互いの偏見を無くすという目的を果たせなくなってしまう。司会ならなおさらだ。これはミーティングを終えた今でも自分なりに達成できたと思っているので、非常にいい経験だった。ただ反省すべき点としては、事前に進行の方法を相手方の司会ともっと相談しておくべきだったということだ。自由に意見を交わし合うのにも、多少の決め事がないと混乱が起こってしまうと改めて学んだ。そして今後のこのような機会に活かしていきたいと思う。

本題の意見交換の中で最も私の印象に残った話題はやはり、きっと我々にとって用意されたテーマの中で最も重い内容であろう歴史認識問題についてだ。我々側から、先日安倍総理と朴大統領の間で行われた日韓合意についてどう思うのかという質問が出たので、韓国側の生徒は、今までの補償金や謝罪の意を示す行為や、先日成立した日韓合意も全て政治家だけによって行われたものであり、国民が本当に同じことを思っているのかわからないと答えた。そこで私は彼らに、国民の誠意を示そうとしたアジア女性基金の存在を知っているか尋ねたところ２、３人の生徒が知っていた。しかし彼らは、政府が受け取らなかったことを支持していたのでその理由も聞くと、無条件に謝罪としてお金を渡すことで日本が今まで韓国にしてきた残酷な仕打ちの事実をなかったことにしようとしたのではないかと警戒したからだという。また、日韓合意の際に日本政府が韓国政府に慰安婦像の撤去やUNESCOにこの事実を登録しないように要求したことにも疑問を抱いており、日本はやはりまだ反省していないと感じたらしい。これまでの両国間のやりとりに色々とすれ違いがあったことがわかった私達は、その後も会話を続け、今我々若い世代だからこそできることは何なのか、相手の立場も踏まえながら協力して考えていくことができた。そして最終的に全てのグループの意見をまとめ、高陽国際高校の多くの生徒の前でその内容を発表し、共有することもできた。その達成感は本当に大きく、とても感動した。これは意見交換会の前に交流で育んだ相手への信頼が無ければ絶対成し遂げられなかったと思う。絶対負けないという警戒態勢は逆に口論を招き、いつまでも解決しない大きな要因となりうる。まずは何も考えずに直接的な交流で仲良くなることが、相手の思いを聴こうという寛容な姿勢を作り、深刻な問題の解決への新たな一歩を踏み出すきっかけとなることがわかった。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私が最も印象に残ったのは、二日目に訪れた西大門刑務所歴史館だ。戦時中に韓国の人々が日本人にされた残虐行為を示す展示が沢山あると聞いていたので、日本人がそこに出向いたら現地の人達は一体どんな反応をするのだろうかと少し緊張気味だった。しかし実際に行ってみると心配していたようなことは何もなく、何と刑務所を背景に和気あいあいとピースポーズで記念撮影をしていた家族もいたので、私が思っていたほど一般市民の方たちはシリアスに考えていないのかもしれないと、少し混乱してしまった。けれども展示は生々しく、私たちに、当時刑務所に勾留されていた人たちの苦しみを訴えてきた。展示の補足説明がほとんど韓国語であったので、韓国でこの残酷な事実がどのように説明されているのか知ることができなかったのは非常に残念だった（ガイドさんももしかしたらオブラートに説明していたかもしれないので…）。しかしこれらの展示は、小泉元首相も言ったように、二度とこんな残虐な行為が、日本や韓国だけでなく世界各地で許されてはいけないと思わせるには、補足の文章が無くても十分だった。そして少し原爆ドームと似たような印象を覚えた。原爆ドームは一目見ただけで核の恐ろしさを人々に知らしめる存在ではあるが、かといって多くの人がきっと今のアメリカに恨みは感じないだろう。昔日本が韓国に為した残虐な行為を決して忘れさせてはいけないが、反対に今の日本を毛嫌いするきっかけとなってしまったら、いつまでもこの緊張した日韓関係は解決しない。この西大門刑務所歴史館も平和の実現を目的とする存在であってほしいと思った。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

この巡検を通して得た新たな発見は沢山あるが、その中でも強く思ったのが、本当に辛い食べ物を好んで頻りに食べているということだ。巡検に行く前から、スカイプ通話でキムチをよく食べるとは聞いていたが、まさかどんな料理を頼んでも付いてくるものとまでは思っていなかった。だから頼んでもないのにいきなりキムチとその他名前の分からない辛い漬物がずらっと並べられたときは、思わず店員さんに「注文間違っていますよ」と声をかけそうになってしまった。街を歩いていても、イタリアンや中華に比べ韓国料理店が特別多く見られ、そこにも日本との違いを感じた。日本にも和食店は沢山あるが、割合的に見ると恐らく自国の文化食の店は韓国の方が多いだろう。しかもその料理も、見た目は変わらないとはいえ、日本のものより遥かに辛い（ビビンバに乗っているコチュジャンの量は明らかに度を越していた…）。なぜこんなに辛い料理が多いのか気になったので調べてみたのだが、諸説がありすぎていまいちよくわからなかった。しかし唐辛子の一人当たりの摂取量は韓国が一番多いらしい。そしてもう一つ韓国料理の特徴として気になったのが、炭水化物が多いということだ。例を挙げると、ビビンバ、トッポギ、チヂミ、ホットック、クッパ、粥などだ。そうでない食べ物にも必ず無料でご飯が付いてくる。フィールドワークのとき、昼食にトッポギを食べ放題を食べたときも、最初は食べ放題という言葉に興奮したのだが、実際食べ始めると思ったほど入らなかった。ここにも質素な和食との違いを感じたのが、よく見ると韓国人（特に男性）の肩幅は日本人に比べると広く身長も平均的に高かった。食文化が体型に明らかに関係している、興味深い発見だった。

そして新たに分かったこと、というよりは改めて分かったことというべきなんだろう。（1）でも述べたが、言語についてだ。私は海外に行くたびに、何故日本人はこんなに英語ができないのだろうと不思議に思う。母国で、学校の授業であんなに勉強しているのに、愛知県のトップレベルの立場を誇る旭丘の生徒でさえろくに話せない。交流会のときは、幸い相手が日本語が達者だったので皆安心した様子だったが、意見交換会で使える言語を英語に限られた瞬間、何も言えなくなってしまう子が何人かいた。私は模擬国連のときにも、英語を使わなければならない場所では流暢に英語を話せる人が目立って有利な立場になるという、ごく当たり前だがシビアなことを痛感した。その際英語を自由自在に操る彼らにくまなく尋ねてみたのだが、やはりその

ほとんどが帰国子女だった。私自身も帰国子女ではないが、親に相当なお金を出してもらって英会話教室に通い何とか自分の意思を拙いながら伝えるレベルまでになった程度だ。私はその日本人の英語力の低さを今まで国のやり方のせいにばかりしてきたのだが、彼らの言語を学ぶ姿勢を見て変わった。韓国人の生徒は、私たちに会って日本語を話したくて話したくてうずうずしていたのだ。間違えることを恐れず、拙いなんて気にせず、とにかくトライするその精神に私はとても感銘を受け、一瞬でも彼らの言語力に怖気づいてしまった自分を恥じた。いくら話せないからといって、沈黙は皆の意見を聞こうとする姿勢が乱し、せっかくの機会を逃してしまう原因となる。まずは積極的にとにかく何でもいいから話そうという心持ちが大事であり、目の前にその言語のプロがいるのであればそれは絶対的なチャンスであることを彼らから教わった気がする。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

Hi! How are you doing? Thanks to you, I could learn about Korea very well! Your great kindness and smile relieved me in communication between us. I was really impressed with your good language skill. You spoke fluently not only English, but also Japanese. I was very happy to find you liked Japan, but on the other hand, I regret I had not study Korean language… If in the next time to meet you, I’ll be good at speaking Korean because I want to tell you how great my gratitude is. Please look forward to it.

In the second day of my trip, you took us on your original tour of Korea and made me so excited. As wearing Hanbok had been my dream, so I really thank you for making my dream come true! Also, I was surprised at and impressed with a buffet restaurant of topokki. It was my valuable experience. Through these experiences, I came to like Korea more, and came to want to show you Japanese sightseeing spots. I hope you’ll come my country someday!

The last day, you and many your school students welcomed us to your school. I was so surprised at how big your school was and how great their kindness. I was very happy that many students who don’t major Japanese spoke to me by good Japanese. Please tell them my gratitude. Also I really thank you for showing us a lot kinds of great performances. I was moved on all of them. I wonder the way to improve such the nice skills in your hard schedule due to study.

Finally, I was really glad to meet you. Thanks to meeting you, now I’m sure that we can solve many serious problems between Japan and Korea. Also, you made me like Korea more. The next is my turn. When you will come to Japan, please tell me, and I’ll be your guide in Japan. I want to make you more interested in Japan. I’m looking forward it. See you again!

２年　渡邉　美月

（1）高陽国際高校の生徒との交流会で感じたこと

私が高陽国際高校の生徒との交流会で感じたことは、「日韓の画一化が確実に進んでいる」という事だ。いや、むしろ「世界の画一化」と言ってもいいかもしれない。

私は、「韓国人は辛い食べ物が好き」だという勝手なイメージを持っていた。しかし、彼らは辛い食べ物が苦手で、キムチすら食べず、日本の高校生と同じように(？)スナック菓子やスイーツ、ハンバーガーなどのジャンクフードが好きだという。それを聞いた時、私はとても驚いた。しかし、よくよく考えれば、私達も、少なくとも私は彼らと同じであった。質素な和食よりもピザや甘い物が好きだ。ほとんどの高校生がそうではないだろうか。彼らも言っていたが、韓国の高校生と私達は驚くほど似ていた。同じような食べ物を好み、同じような話題で盛り上がり一緒に過ごしていても違和感を感じることがほとんど無かった。

近年、グローバル化による文化の画一化が進んでいる。各地域特有の文化が薄れつつある。それを今回の交流会でひしひしと感じることができた。しかし、それは決して負の意味ではなくて、そのおかげで親しい仲になれたと思った。

これからもどんどん画一化は進んでいくだろう。それにより、世界中の人達との相互理解はしやすくなる。その反面で進む各地域独自の文化の薄れを食い止め、保存していくことが私たちの課題であると思った。

（2）高陽国際高校の生徒とのフィールドワークの内容と感じたこと

私達Ｆ班は高陽国際高校の生徒とのフィールドワークで、最初に明洞で韓服を着て記念撮影をし、弘大で昼食を取りその後韓国で大人気のキャラクターショップへ行った。

韓国の民族服の「韓服(ハンボク)」には、女性用の「チマチョゴリ」、男性用の「パジチョゴリ」の２つがある。「チマ」とはスカートのようなもの、「パジ」はズボンのようなものである。「チョゴリ」は上着のことだ。それらは色鮮やかな光沢のある生地で仕立ててあり、とても美しい刺繍などの装飾が施されていた。ゆったりした構造になっており、動きやすいのが特徴だそうだ。私達が行った店は、橋や座敷など様々なセットが用意されており、自分たちで自由に回って撮影をするシステムだった。そこで高陽の生徒達とスマホで撮影をして楽しんだ。

その時気づいたのは、「韓国の子達は、自撮りが好き」だということだ。最近の日本の女子高生達も自撮りを頻繁にするようになってきているが、韓国の子は頻度が全然ちがう。移動中や地下鉄の中、駅の階段なんかでも自撮りをしたのは驚いたが、とても楽しかった。

弘大では、トッポギ店にはいった。トッポギは、歯切れの良い餅「トック」を甘辛いタレで絡めた韓国の伝統料理だ。しかし、その店のトッポギはタダのトッポギではなかった。何種類ものトックや野菜、スンデ（豚の腸詰め）を自由にとり、鍋でセルフでトッポギを作るのだが、鍋の周りをぐるっと１周チーズを溶かす溝があり、そこで溶かしたチーズを付けて食べる、という現代風にアレンジされた新しいトッポギであった。韓国では、チーズがポピュラーなのだろう。明洞でも屋台でチーズをたっぷり使った料理をよく見かけた。気のせいかもしれないが、韓国のチーズは日本のチーズよりよく伸びて、とても美味しかった。

食後のデザートに、ピンス（韓国式かき氷）店「雪氷(ソルビン)」にはいった。ソルビンは日本にも、原宿に一店舗だけあり、大行列ができているのをテレビ出みたことがあるが、韓国には何店舗もあり、空いていた。そこで「インジョルミ(きなこもち)ピンス」「タルギ(苺)ピンス」「チョコレートピンス」の三つを10人でシェアして食べた。日本では自分の箸やスプーンを直接使ってシェアして食べるのは敬遠されがちに思うが、韓国では食べ物を複数人でシェアして食べるのが普通らしい。おしゃべりしながら一つのものを分け合いながら食べるのはとても楽しかった。

最後に、韓国で大人気の「カカオフレンズ」ショップへ行った。「カカオフレンズ」とか、LINEと同じような通話アプリ「カカオトーク」のオリジナルキャラクターだ。私はLINEが普及する前にカカオトークを使っていたが、LINEもカカオトークも韓国発であることは知らなかった。韓国は通話アプリ開発が盛んなのだろうか。そこは整備員がいるほど大変混雑しており、その人気ぶりが伺えた。老若男女問わずたくさんの客で店内は溢れかえっており、高陽の生徒達も目をキラキラと輝かせていた。日本にも老若男女が熱狂するようなキャラクターショップがあるのだろうか。どうやら韓国人は可愛いものが好きなようだ。

そういえば、韓国の街はキャラクターが多いように感じた。企業のイメージキャラクターも、日本のキャラクターも多く見かけた。驚いたのが、ジブリ映画「千と千尋の神隠し」の「カオナシ」をかわいくデフォルメしたアイテムがたくさんあったことだ。日本以上に日本のキャラクターが愛されているように思う。

最後に、高陽の生徒達とのフィールドワークで韓国の街を見て感じたことは、1.韓国人は自撮りを頻繁に行う　2.韓国人は食べ物をみんなでシェアする。3.韓国人はかわいいもの、キャラクターものが好きだということだ。改めてまとめてみると、韓国人は可愛らしい性格であると思った。

（3）高陽国際高校の生徒との意見交換会で学んだこと

意見交換会では15のテーマについて話し合ったが、一番時間を割いたのはやはり「日韓の歴史問題」についてだった。

まず、植民地化について。私は当初日本が韓国を植民地化したのはやむを得ないことだと思っていた。当時、帝国主義諸国は植民地を持つことを一つのステータスしていた。日本が帝国主義国の仲間入りす

るには、韓国を植民地にする必要があったのだ。また、当時ロシアが南下政策を行っており、日本が韓国を植民地化していなかったら確実にロシアが韓国を占領していただろう。ロシアのスターリンが行った中東の植民地支配のように、凄惨な結果になっていたと考えられる。

しかし、この考えを持っていた時、私は日本が行った韓国支配についての知識がほとんど無かった。タプコル公園や西大門刑務所などを見学して、日本が行ったことがいかに傲慢で凄惨なことであったかがわかった今では、もっと他の道があったと思う。

その他の道というのが、高陽の生徒の「アジア協力策」だ。これは、日韓を含めたアジア諸国が協力して帝国主義諸国に対抗することが出来たのではないか、という意見だ。当時の韓国は弱小国で、日本も決して強豪国ではなかったが、韓国の短期間での驚異的な経済発展を成し遂げたその行動力を見れば、実現することは可能であったのではないか。今では私もこの意見に賛成である。

そして、「謝罪」について。この話題について話し合って分かったのは、日韓で報道されていることが違うということだ。韓国の生徒達は「日本の謝罪は十分ではない」という。お金を支払うだけではなく、心からの謝罪が済んでいないと言った。

日本は「アジア女性基金」という、慰安婦問題の被害者のための民間の基金を韓国に支払おうとした。これは彼らの言う「心からの謝罪」を、「お金」という目に見える形であらわしたものだと思う。しかし、韓国はこの受け取りを拒否した。また、韓国の人たちはこの事実をほとんど知らなかった。

しかし、日本で報道されているほど韓国は反日国ではなく、むしろ親日的であると言う。日韓問題を解決するには、お互いの国で報道されている情報を共有し、相手国の考えを理解することが必要だと身にしみてわかった。

これからの時代、世界はどんどんグローバル化していく。隣国である韓国との確執解消は必要不可欠である。日韓問題を解決し、協力していくことが出来る世にするために、今回のような意見交換会はとても有意義であると思う。

（4）巡検先で最も印象に残ったところ

私が巡検先で最も印象に残った所は、西大門刑務所だ。西大門刑務所は、大韓帝国の末期である1908年に「京城監獄」として開所した。日本統治時代の1923年に「西大門刑務所」に名前が変わり、独立を求めて闘った多くの独立運動家が投獄、弾圧された。独立を回復した1945年８月15日まで、当時の韓国で最も大きな監獄であった。また、独立後も朴正熙大統領の独裁政権時代、民主化を求めて闘った民主化運動家が投獄、弾圧された現場になった。1987年、刑務所がソウル郊外の京畿道義王（ウィワン）市に移転するまで実際に刑務所として使われ、1992年の８月15日、祖国独立のために戦った独立運動家の歴史を後世に知らせるため、刑務所の跡地を含む周辺一帯が西大門独立公園となり、1998年刑務所跡に西大門刑務所歴史館が開館した。

館内には、様々な日本の官憲によって厳しい拷問を受け、亡くなった人たちの写真や記録が復元され、収録されている。実際に使っていた拷問器具や、拷問の様子など、目を背けたくなるほど凄惨な記録を見学した。

私が１番印象に残ったのは、メモリアルホールと名付けられたコーナーだ。そこには、壁いっぱいに約5000人分の受刑記録票の複製がぎっしり並べられていた。こんなにもたくさんの人が、と思ったが、これは通算収容者のおよそ８分の１にすぎないそうだ。

１枚１枚に注目すると、青年からお年寄りまで、男性だけではなく女性まで、まさに老若男女問わずたくさんの人が独立運動に努め、収容され、弾圧されていたことが分かった。

私は文面でしか日本の独立運動弾圧を読んだことがなかった。それでも「酷いことをしたな」と感じていたが、現地に行き、その場所に立ち、その光景を見学した事で、さらにその気持ちが強く鮮明なものとなった。

韓国と日本の歴史に、目をそむけずに向き合って行くことは必要不可欠で、この悲劇を忘れないために保存することは、私達の大切な責務だと思う。

（5）巡検をおこなったことで、新たに分かったこと

巡検で韓国へ行って分かったことは「過激な反日国ではない」という事だ。

私が見た日本で報道される韓国は、過激なデモを行う反日国である、というものであったので、内心ビクビクしていたのだが、決してそんなことはなかった。韓国の人達はとてもあたたかく、困っていると向こうから声をかけて助けてくれた。

わたしは元々K-POPやファッションなど、韓国の文化が大好きだが、韓国は反日国だと思い込んでいたので、少し寂しいなと思っていたが、今回の巡検で、韓国が更に大好きになった。

楽しいことだけではない。韓国の経済問題を目の当たりにすることもできた。

韓国経済は財閥が支配している。若者達は皆ら財閥系列の大企業への就職を目指し、勉強に励む。そのため、白熱しすぎた学歴社会となったのだ。高陽の生徒達に話を聞くと、何と夜の11時から自習をするという。韓国の学生の幸福度は極めて低い。彼らも「幸せか？」と聞いたら、ハッキリと「No」と答えた。彼ら自身も近年白熱している受験戦争を由々しきことと思っていた。

また、韓国は老人の幸福度も低い。それは街を歩いていると、ひと目でわかる。ホームレス、特に老人のホームレスを何回も見かけた。子供の教育費に財産を全て投じ、無一文になったお年寄りがたくさんいるのだ。ただでさえ厳しい韓国の寒さの中でボロボロの薄い衣服を着てうずくまっている老人をみて、何とも言えない気持ちになった。

今回の韓国巡検で、得られたものはたくさんある。その全てが有意義であった。実際に行って見なければ分からないことがたくさんある。報道されていることだけが真実だと思っていてはだめだと思った。

（6）高陽国際高校の生徒に伝えたいこと

To everyone in Goyang

Thank you for having me show you around Korea.The time we spent with you was very fun!For me, it became irreplaceable memories.

Please come and visit Japan as well! I'll be waiting forever!

The time we spent together was short, but I will always be friends from now on.Let's make good relations between Japan and Korea by us!We can do it absolutely!

I am looking forward to seeing you again.

5　全日本高校生模擬国連大会報告

１年　南出理夏子

11月12日から13日の二日間、私は同じSGHゼミ生の金高さんと東京の国連大学で開催された全日本高校模擬国連大会にインドネシア大使役として出場しました。本校からは２年生の田中さん、浜さんもエストニア大使として、昨年に引き続き参加しました。この大会は全国の高校生が２人一組で各国の大使役になりきり、議題について話し合い、決議案をまとめてゆくものです。今回は86チームが二つの議場に分かれ、『サイバー空間』を議題に議論しましたが、国際的なルール作成が最大の目標だったため、コンセンサス(全会一致)を目指すことになりました。

初めてのことで、大会前の準備はたいへんでした。特にたいへんだったのは次の二つです。

まず、事前の準備では、調べても日本語で書かれたインドネシアのサイバー事情についてのしっかりした情報があまり見つかりませんでした。そのため、英語の情報に悪戦苦闘しながら準備を進めました。もっと英語の勉強をしておけばよかったと思うのと同時に、思い返せば効率の悪い調べ方をしていたので、もっと効率のいい訳し方を探しつつ行えばよかったと後悔しました。

また、ペアとの連携がうまくいかず（最終的には無事提出できましたが）、課題を予定通り進めることができませんでした。

私たちの担当国のインドネシアは、サイバー空間においては途上国と呼ばれる部類です。そして、今回の大会で割り振られている国の大半は、同じ途上国でした。このままでは、途上国のうちの一国で終わってしまうと思い、他の高校生があまり思いつかないような案を目指しました。そこで着目したのはCSR、『企業の社会的責任』です。他国との差別化を図るため、SGHゼミで習ったものの、一般には知

名度の低いCSRについての知識を活用しました。当日、他校の生徒と政策について話しをしましたが、案の定、CSRを盛り込んだチームはありませんでした。それどころか、CSRのことを知らない人もいたほどでした。

大会一日目、進行や公式討議は英語で行われ、議長や模擬国連関係者の挨拶から始まりました。公式討議のスピーチでは、開会式のときに見たマララさんのスピーチや、他国のスピーチを見て気がついたいい点や悪い点に気を付けながら発表しました。他校の生徒はとても流暢に英語を話していて、ここでも自分の英語力のなさを痛感しました。ただ、どんなに英語がうまくても、言いたいことを詰め込みすぎて早口になっている人や、原稿をずっと見ている人のスピーチは、今一つわかりにくかったです。公式討議以外の非公式討議としてUM(Unmoderated. Caucus)、ＭＣ(Moderated. Caucus)の二つがあります。UM　では各々自由に移動して他国の大使と議論し、ＭＣでは移動せず日本語で議論します。ＭＣでは議論の中身よりも、どう進行するかに議論の時間を持って行かれて、全体の流れを把握し、主張のすりあわせをするということはあまりできませんでした。UMでは、利害の一致する国同士が活発に議論していました。１日目の最後、利害の一致する国同士で作成したWP（working paper）を提出する時、トラブルがありましたが、WPに参加することはできました。

二日目の会議ではUMが主で、MUはあまり行われませんでした。そのため、あまり議論が深まることはなく、決議案が２つ出されました。私たちが参加した方は大きな変更はありませんでしたが、もうひとつの決議案には相反することが書かれていたため、大切な部分が大幅に削除されたものになってしまいました。最終的にはどちらも可決されましたが、棄権も多く、コンセンサスも達成できませんでした。

今回の模擬国連の反省点は３つあります。一つ目は積極的に発言できなかったことです。公式討議は全て英語、UM、MC の提案も英語ということで、発言する以前に萎縮してしまい挙手もできませんでした。

２つ目は自分の語学力のなさです。WP、決議どちらも英語でしたが、再三辞書をひかないとわからない、書けないということがありました。もっともっと英語の勉強をしておけばよかったと思いました。

３つ目は管理をきちんと行うということです。WPの作成をするとき、私たちがまとめたWPを他のチーム名で提出されてしまうことがありました。他のチームにパソコン、USBを渡さない、操作させないということをもっと徹底をしておけばよかったと後悔しています。

この２日間はかなりハードでした。辛いこともありましたが、充実した時間を過ごすことができました。出場者はみんな英語ができ、よく考えて行動していました。同じ高校生として自分の英語力のなさ、考えの浅さに危機感を覚えました。また、話してみると優しくて面白い人が多く、とても良い出会いもありました。

この大会が私たちにとって初めての模擬国連でした。事前に先輩にアドバイスをいただいたりもしましたが、大会に参加しながらやり方を覚えるという、かなり無理のあることをしました。事前に他校と練習をし、やり方を覚えてから挑んだ方がいいと思いました。